



邵 律 論
卷 五 第

BL
1411
T8J3
1929
v.17

Tripitaka. Japanese. 1929
Showa shinshu kokuyaku
Daizokyo

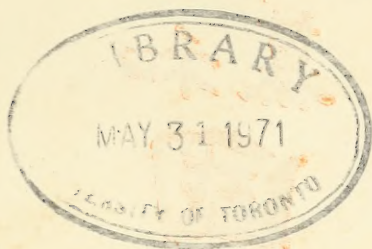
East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和
新纂

國
譯大藏經



BL
1411
T8J3
1929
V. 17

昭和
新纂

國譯大藏經

論律部 第五卷

大智度論第三 目次

卷第三十五

報應品 第二……………一

習相應品第三之一……………三

卷第三十六

習相應品第三之餘……………三

卷第三十七

習相應品第三之餘……………三

卷第三十八

往生品第四之上……………三

卷第三十九

卷第五十

發趣品第二十之餘……………四三

出到品第二十一……………四六

卷第五十一

勝出品第二十二……………四三七

含受品第二十三……………四四六

卷第五十二

會宗品第二十四……………四六七

十無品第二十五……………四六九

卷第五十三

無生品第二十六……………四九二

大智度論 第三

| |
|-----|
| 論律部 |
| 第五卷 |

大智度論釋報應品第一

卷第三十五

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

【經】佛、舍利弗に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じて、能く是功徳を作さば、是時、四天王、皆大いに歡喜し、意に念じて、「我等當に四鉢を以て上の菩薩に奉つること、前の天王の、先佛に鉢を奉つるが如くすべし」と言はん。」

【一】重ねて般若の功徳を讃じて四天王奉鉢等のことあるを明す。

【論】問うて曰はく、「前品に説いて已に具す。今何を以てか重ねて説く。」答へて曰はく、「前に般若波羅蜜を歎すと雖も、事未だ具足せず、聞く菩薩ふこと無し。是故に復説く。復次に、初品には但般若波羅蜜の力を讃じ、今は行者、能く是功徳を作さば、四天王等歡喜して鉢を奉つると讃す。復次に、菩薩は能く諸の難行を具するが故に佛、安慰勸進して言はく、「此果報有りて終に虚しからず」と。復次に、般若波羅蜜に二種の果有り、一には成佛して衆生を度し、二には未だ成佛せずと雖も、世間の果報を受け、轉輪聖王、釋梵天王として、三千世界に主たり。世間の福樂、供養の事を悉く皆備足す。今は世間の果報を以て、以て衆生に示すが故に、是事を説く。復次に、世間の大業を成さんと欲するに、多く壞亂する者有り。菩薩は則ち然らず。內心既に定まり、外事も亦應ず。是の如き等の

【二】菩薩が六波
を增益する時、諸
天人が歡喜する
因縁を明す。

因縁の故に此品を説く。

問うて曰はく、「菩薩の六波羅蜜を増益する時、諸天人は、何の因縁の故に喜ぶや。」答へて曰はく、「諸天は皆十善、四禪、四無量に因つての故に、是詔の功德を生じ、皆諸佛菩薩に由るが故に有り。若し佛出世したまへば、諸天衆を増益し、阿耨羅種を減損したまふ。若し佛世に在さざれば、阿耨羅種は多く、諸天は減少す。羅福を種え、清淨ならざるを以ての故に。若し諸佛出世したまへば、能く諸天の疑網を斷じ、能く大事を成したまふ。釋提桓因の如きは、命終せんと思ふ時、心に怖畏を懐いて、佛に自救を求むるに、遍くして處を知らず。出家の人の山澤閑處に供養せらるる者を見ると、雖も、皆亦其疑網を斷ずる能はず。爾時、毘首羯磨天、釋提桓因に白して言さく、「尸毘王は、苦行奇特にして、世の希有とする所なり。諸の智人、言はく、是人久しからずして、當に作佛するを得べし」と。釋提桓因言はく、「是事辯じ難じ。何を以てか之を知る。魚子と菴羅樹華と發心の菩薩との如し。是三事は因の時は多しと雖も、果と成ること甚た少し。今當に之を試むべし」と。帝釋は自ら化して鷹と爲り、毘首羯磨は化して鵠と作る。鵠、王に投ずるに、王は自ら身肉を割き、乃至身を擧げて橋に上り、以て鵠の命に代れば、地爲に震動す。是時、釋提桓因等は、心大いに歡喜し、衆の天華を散じ、未曾有なりと歎す。是の如く決定して大心なれば、成佛久しからず。復次に、凡夫人の肉眼は智慧有る無く、身を苦め財を求めて、以て自ら生活するすら、菩薩、六波羅蜜を増益すれば、成佛久しからずと聞

【三】 奉鉢の義を説く。

いて、猶尙歡喜す。何に況んや諸天をや。問うて曰はく、「四天王天、三十三天は阿脩羅の難有れども、上の諸天等は此患有無し、何を以てか歡喜する。」答へて曰はく、「上の諸天は、阿脩羅の患無しと雖も、若し佛出世したまはざれば、其天上に生るる者少く、設ひ生ずる者有るも、五欲妙ならず。所以は何ん、但不淨の福を修するが故に。色界の諸天の宮殿、光明、壽命も亦復是の如し。復次に、諸天の中に智慧有る者は、能く禪味を知り、五欲は悉く皆無常なるも、唯佛出世して、能く常樂の涅槃を得しめたまふを知る。世間の樂と涅槃の樂とは、皆佛菩薩に由りて得るを以て、是故に歡喜す。譬へば甘美なる果樹茂盛し成就すれば、人大いに歡喜するが如し。樹に種種の利益有るを以てなり。其蔭を庇ふ者有り。其華を用ひ、其果實を食するもの有り。菩薩も亦是の如し、能く不善法の蔭を離るるを以て、三惡の苦熱を遮して、能く人天に福樂の華を興へ、諸の賢聖に三乘の果を得しむ。是故に歡喜す。」

(三)と問うて曰はく、「諸天は供養の事多し、何を以てか鉢を奉る。」答へて曰はく、「四天王は鉢を奉り、餘天の供養、諸天の供養も各定法有り。佛初めて生れたまふ時の如きは、釋提桓因は天衣を以て佛身に奉承し、梵天王は躬自ら蓋を執り、四天王は四邊を防護し、淨居諸天は、菩薩をして、厭離の心を生せしめんと欲するが故に、化して老病死人及び沙門の身と作る。又出家したまふ時は、四天王は使者に勅して、馬の足を捧舉せしめ、自ら四邊に菩薩を侍護し、天帝釋は髮を取りて、其天上の城の東門の外に於て、髮塔を立て、

又菩薩の寶衣を持して、城の南門の外に於て、衣塔を立て、佛、樹下に坐りたまふ時は、好草を奉す。執金剛菩薩は、常に金剛を執りて菩薩を衛護し、梵天王は佛の轉法輪を請す。是の如く各常法有り。是を以ての故に四天王は鉢を奉つれり。四鉢の義は先に説くが如し。問うて曰はく、「佛は一身なり、何を以てか四鉢を受けたまふ。」答へて曰はく、「四王は力等し、偏じて受くべからず。又佛、神力もて四鉢を合して、一と爲すを見せしめたまふに、心喜び信淨うして、是念を作さく、「我等は菩薩の初め生れてより今成佛に至るまで、修する所の供養功德虚しからず」と。問うて曰はく、「四天王の壽命は五百歳なるに、菩薩は無量阿僧祇劫を過ぎて然る後に成佛す。今の四天王は是れ後の天に非ず、何を以ての故に喜ぶ。」答へて曰はく、「同一姓の故に。譬へば貴姓の胤流は、百世の遠きを以ての故に異と爲さず。或時、行者、菩薩の六波羅蜜を増益するを見て、時に心には願を作さく、「是菩薩の成佛する時、我當に鉢を奉るべし」と。是故に生るを得。復次に、四天王の壽は五百歳なるも、人間の五十歳を四天王處の一日一夜と爲し、亦三十日を一月と爲し、十二月を一歳と爲す。此を以て歳壽五百歳は、人間の九百萬歳と爲る。菩薩の能く是功德を作す者、或は近く成佛せんに、初生の四天王は値ふを得べきに足る。問うて曰はく、「摩訶衍經の中に説くが如くんば、有佛は、喜を以て食と爲し、擲食を食したまはず。天王佛の如きは、衣服儀容、白衣と異ならず、鉢食を須ひたまはず。何を以てか四天王は定んで應に鉢を奉つるべしと言ふ。」答へて曰はく、「定んでとは鉢を用ふる者と爲す、故に用ひすと

【四】次に重ねて三千世界の四天王等の歡喜して並に轉法輪勸請の事を釋す。

は説かず。復次に、鉢を用ふる諸佛は多く、鉢を用ひざる者は少し。是故に多きを以て、定んでと爲す。

【釋】三十三天乃至他化自在天、亦皆歡喜し、意に念じて言はく、「我等は當に菩薩に給侍供養し、阿脩羅種を減損し、諸天衆を増益すべし。三千大千世界の四天王天、乃至阿迦尼吒天、皆大に歡喜し、意に念じて言はく、「我等當に是菩薩の轉法輪を請すべし。」

【釋】釋して曰はく、「是諸天等は、華香、瓔珞、禮拜、恭敬、聽法、讚歎等を以て供養し、亦是念を作さく、「人淨福を修すれば、阿脩羅種を減じ、三十三天を増益す。我諸天も亦増益することを得ん」と。問うて曰はく、「上に六種の天は已に説けり。何を以ての故に、更に三千大千世界の中の、乃至阿迦尼吒天の歡喜供養を説く。」答へて曰はく、「先には一須彌山上の六天を説けり、此には三千大千世界の諸天を説く。先には但欲界を説けり、今此には欲界世界の諸天、佛の轉法輪を請するを説く。上には淨居諸天の、種種に供養勸助するを説くと雖も、今、轉法輪を請する事は大なるが故なり。問うて曰はく、「三藏の中には但梵天、轉法輪を請すと説く、今何を以てか四天王乃至阿迦尼吒天を説く。」答へて曰はく、「欲界の天は近きが故に前に來る、色界は都ての名を梵と爲す。若し梵王、佛を請すと説けば、已に餘天を説くなり。又梵を色界の初門と爲す、初を説くが故に後も亦説けり。復次に、衆生は佛有るも、佛無きも、常に梵天を識り、梵天を以て世間の祖父と爲す。世人の爲の故に梵天を説く。法輪の相を説くこと先に説くが如し。」

【經】舍利弗、是菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行じ、六波羅蜜を増益する時、諸の善男子、善女人は各各歡喜して意に念言すらく、『我等、當に是人の爲に父母、妻子、親族、知識と作るべし。』

【五】下重ねて六度の増益を説くに就いて明す。

論 問うて曰はく、『前に已に能く是を作すの功德を説く、今何を以てか、復六波羅蜜を増益すと説く。』答へて曰はく、『先には總相を説き、今は別相を説く。復次に、前に説く所の功德の中、前品の中の種種無量なれば聞く者厭倦す。今は但略して六波羅蜜を説けば、則ち盡く諸の功德を攝す。復次に、天の爲に説くが故に能く諸の功德を作し、人の爲に説くが故に六波羅蜜を増益す。何を以てか之を知る。後に善男子、善女人を説くが如し。是を以ての故に知る。』

【六】文に善男子善女人といへるを釋す。

(六) 問うて曰はく、『四天王天より乃至阿迦尼吒天に至るまで、何を以てか善人を説かずして、而も但人中の善男子、善女人を説く。』答へて曰はく、『諸天は皆天眼、天耳、他心智有りて、菩薩に供養するを知るが故に、別して其善を説かず。人は肉眼を以て見るに知無し。善なる者は能く知りて供養す。少きを以ての故に別して善者を説く。善者は佛より法を聞き、或は弟子の菩薩より聞き、或は受記せられて當に作佛すべしと聞き、又佛、其名を讚歎したまふ者を聞くが故に、知りて善を修す。問うて曰はく、『何を以てか但男子女子の善を説いて、二根、無根の者の善を説かざる。』答へて曰はく、『無根は謂ゆる、無得道の相なり。是故に説かず。毘尼の中の如くんば、出家するを得ず。其男女相を失するを以ての故に、』

其心不定なり。小因縁を以ての故に、便ち瞋結使多きが故に、世事に著し、多く疑網を懷
 き、道法を樂まず、能く少しく福事を修すと雖も、智慧淺薄にして、深く本性に入りて轉
 易する能はず、是故に説かず。聲聞法には是の如く説けり。摩訶衍の中には、譬へば大海
 の容れざる所無きが如く、は無根の人も或時は善を修す、但少きを以ての故に説かざるの
 み。謂ゆる少しとは男女の中に於て、是人は最も少く、是人の善を修する者も少し、譬へ
 ば白人は復鬚髮鬚子黒しと雖も、黒人と名けざるが如し。二根の人は結使多く、雜して亦
 は男事を行じ、亦是女事を行じ、其心邪曲にして、勉濟すべきこと難し。譬へば稠林に木
 を曳くに、曲れる者は出し難きが如し。又阿脩羅の如きは、其心不端なるが故に、常に佛
 を疑うて謂はく、「佛は天を助く」と。佛、爲に五衆を説きたまふに、謂はく、「六衆有れど
 も、爲に一を説かず」と。若し四諦を説きたまへば、謂はく、「五諦有れども、一事を説か
 ず」と。二根の人も、亦是の如し、心多く邪曲なるが故に道を任へず。是を以ての
 故に、但男子女人の中の善者のみを説く。善相とは、慈悲心有りて、能く悪罵を忍ぶ。法
 句罵品の中に説くが如くんば、能く悪罵を忍ぶ人、是を人中の上と名く。譬へば好良の馬
 の、王乗と爲るに中るべきが如し。復次に、五種の邪語、及び鞭杖、打害、繫縛等を以て
 其心を毀壞する能はざる、是を名けて善相と爲す。復次に、三業に樂を失ふ無く、善人に
 於て他の善を毀らず、己の徳を顯さず、衆人に隨順して他の過を説かず、世樂に著せず、
 名譽を求めず、道德の樂を信樂し、自業清淨にして衆生を惱まさず、心に實法を貴んで

【七】 文に菩薩の父母等とならんと願ずるの因縁を明す。

世事を輕賤し、唯直信を好んで他詭に隨はず、一切衆生に樂を得しむるが爲の故に、自ら己の樂を捨て、一切衆生をして苦を離るるを得しむるが故に、身を以て之に代る。是の如き等の無量を名けて善人の相と爲す。是相は多く男女に在るが故に、善男子善女人を説く。(七)

問うて曰はく、「善男子善女人は、何に因りてか能く是願を作す。」答へて曰はく、「善男子善女人は自ら福薄く、智慧尠少なるを知り、菩薩に習近して過度を求めんと欲す。譬へば沈石は重しと雖も、船に依りて度すを得るが如し。又善男子善女人は、菩薩は一世二世に從つて、而も道を成ずるを得ず、無央數世に生死に往來すと聞き、便ち是念を作さく、「我當に與に因縁を爲すべし」と。復次に、菩薩は徳を集むる厚きが故に、所生の處に在りて、衆生皆來りて菩薩を敬仰す、利益を蒙ること重きを以ての故なり。若し菩薩の壽を捨するを見ては、則ち是願を生ずらく、「我當に菩薩の與に、父母、妻子、眷屬と作るべし」と。所以は何ん、善人に習近すれば、功徳を増益するを知るが故なり。譬へば衆香を積集すれば、香氣轉多きが如し。菩薩の如きは、先世に國王の太子と爲り、閻浮提の人の貧窮なるを見て、如意珠を求めんと欲し、大海に入りて龍王の宮に至る。龍は太子の威徳の殊妙なるを見て、即ち起ちて迎逆し、前に供養を延べて、而も之に問うて言はく、「何ぞ能く遠く來る」と。太子答へて曰はく、「我閻浮提の衆生を憐愍するが故に、如意寶珠を求めて以て之を饒益せんと欲す」と。龍言はく、「能く我宮に住し、供を受くる一月せば、當に以て相與ふべし」と。太子は即ち住すること一月にして、龍王の爲に多聞を讚歎するに、龍即ち

珠を興ふ。是如意珠は能く一由旬に雨らす。龍言はく、「太子に相有り、久しからずして作佛せん、我當に多聞第一の弟子と作るべし」と。時に太子は復一龍宮に至つて珠を得、二由旬に雨らし、二月神通力を讚歎す。龍言はく、「太子の作佛久しからじ、我當に神足第一の弟子と作るべし」と。復一龍宮に至りて珠を得、三由旬に雨らし、三月智慧を讚歎す。龍言はく、「太子の作佛久しからじ、我當に智慧第一の弟子と作るべし」と。諸龍珠を興へ已りて言はく、「汝が壽命盡きなば、珠は當に我に還すべし」と。菩薩を許す。太子珠を得て閻浮提に至るに、一珠は能く飲食を雨らし、一珠は能く衣服を雨らし、一珠は能く七寶を雨らして、衆生を利益す。又須摩提菩薩の如きは、然燈佛を見、須羅婆女に従ひ五莖の花を買ふに、背て之を興へず。即ち五百の金錢を以て五莖の花を得るに女猶興へず、而も之を要して言はく、「願くは我世世に常に君が妻と爲らば、當に以て相興ふべし」と。菩薩は佛に供養するを以ての故に、即便之を許す。又妙光菩薩あり。長者の女有りて、其身を見るに、二十八相有り。愛敬の心を生じて、門下に住在す。菩薩既に到る、女即ち頸の琉璃珠を解きて、菩薩の鉢の中に著け、心に是願を作さく、「我當に世世に此人の婦と爲らん」と。此女は二百五十劫の中に、諸の功德を集め、後に喜見婬女園の蓮花の中に生ず。喜見は養育して女と爲すに、年十四に至りて女は世智に巧にして皆悉く備足す。爾時、閻浮提に王有り、名けて財主と爲す。太子を徳主と名け大悲心有り。時に城を出でて園に入りて遊觀するに、諸の姪女等、導引いて、徳主を歌讚す。太子は諸の寶物衣服飲食を

散ずること、譬へば龍の雨の周遍せざる無きが如し。喜徳女は太子を見、自ら歌偈を造りて太子を讚じ、愛眼もて之を視、目未だ曾て胸かずして、而も自ら發言すらく、「世間の事は我悉く之を知れり、我此身を以て太子に奉給せん」と。太子問うて言はく、「汝誰に屬すと爲すや、若し所屬有らば此我宜しきに非ず」と。爾時、喜見姪女、太子に答へて言はく、「我女なり、生年の日月時節皆太子と同じ、此女は我腹より生じたるに非ず、我、晨朝園に入り、蓮花の中に此女有りて生ずるを見る、我因りて養育し、畜うて以て女と爲す。我を以ての故に、此女を輕んずる無れ。此女は、六十四能く悉く備へざる無し。女工、技術、經書、醫方皆悉く了達し、常に慙愧を懷き、内心忠直にして、嫉妬有る無く、邪嫉の想無し。我女の徳儀は是の如し、太子必ず應に之を納るべし」と。徳主太子、答へて女に語りて言はく、「姉、我は阿耨多羅三藐三菩提心を發し、菩薩道を修し、愛著する所無く、國財、妻子、象馬七珍を求索する所有れば人の意に逆らはず、若し汝が生める男女及び汝が身を、人の求むる者有らば、當に以て之を施すべし。愛悔を生ずる莫れ。或時は汝を捨てて出家し、佛弟子と爲りて淨く山藪に居らんに、汝亦忿ふ勿れ」と。喜徳女答へて言はく、「假令地獄の火來りて我身を燒き滅するも、終に亦悔いじ、我も亦嫉欲戲樂の爲の故に、而も以て相好むにあらず。我は阿耨多羅三藐三菩提を勸助せんが爲の故に、正士に奉事す」と。女、又太子に白して言さく、「我、昨夜夢に妙日身佛、道樹の下に坐したまへるを見たり。往いて之を觀るべし」と。太子、女の端正なるを見、又佛の出でたまふ

を聞いて、此二因縁を以ての故に、共に一車に載り、俱に佛の所に詣る。佛、爲に法を説きたまふに、太子は無量陀羅尼門を得、女は調伏の心志を得たり。太子、爾時五百の寶花を以て、佛に供養し、以て阿耨多羅三藐三菩提を求む。太子、父王に白して言さく、「我妙日身佛を見るを得て、大いに善利を得たり」と。父王聞き已りて愛重する所の物を捨て、以て太子に與へ、其官屬、國內の人民と俱に佛の所に詣る。佛、爲に法を説きたまふに、王は一切法無闍鞞陀羅尼を得たり。時に王、思惟すらく、「白女の法を以て、國土を攝治し五欲を受けて、而も道を得べしとすべからず」と。是思惟を作し已りて、徳主太子を立てて王と爲し、出家して道と求む。是時、太子は月の十五日に於て、六寶來り應じ、喜徳妻は變じて寶女と爲る。「不可思議經」の中に廣く説くが如し。是の如き等の因縁の故に、善男子善女人は、世世に菩薩の父母妻子眷族と爲るを願ふを知る。

爾時、國王王太子より乃ち阿連尼吒天に至るまで皆大いに歡喜し、各自ら心言すらく、「我等當に方便を作して、是菩薩をして姪欲を離れ、初發意より常に眞實を作し、色欲と共に會せしむる莫るべし。若し五欲を愛くれば、梵天に生ずるを離れ、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提をや。」是を以ての故に、舍利弗、菩薩摩訶薩あり、姪欲を離して出家すれば應に阿耨多羅三藐三菩提を得べし、欲を斷ぜざるに非ず。

問うて曰はく、「諸天何を以てか是願を作す。」答へて曰はく、「世間の中には五欲第一にして、愛樂せざる無し。五欲の中に於て爲を第一と爲し、能く人心を繋ぐ。人深泥に墮在

【八】 菩薩をして姪欲を離れ等の文を釋す。

【童眞行】十住の第八住、初めて佛家に生じ童子の位にあるをいふ。

すれば、拯濟すべきこと難きが如し。是を以ての故に諸天は方使もて菩薩をして姪欲を遠離せしむ。復次に、若し餘の欲を受くるも猶智慧を失せず、姪欲會する時は、身心慌迷して省覺する所無く、深く著して自ら没す、是を以ての故に諸天は菩薩をして之を離れしむ。問うて曰はく、「云何が離れしむる。」答へて曰はく、「釋迦文菩薩の如きは、淨飯王の宮に在り、城を出でて遊觀せんと欲するに、淨居の諸天化して老病死人と爲り、其心をして厭はしむ。又夜半に諸の宮人妓直の惡露不淨にして涕唾流漉し、屎尿塗漫するを見せしむ。菩薩見しりて、即便穢厭す。或時、諸天は女人をして、惡心妬忌にして、恩徳を識らず、惡口欺誑して、省察する所無からしむ。菩薩見已りて、即ち念を生じて言はく、「身人に似たりと雖も、其心惡むべし」と、即便之を捨つ。菩薩をして初發心より、常に童眞行を作し、色欲と共に會せざらしめんと欲す。何を以ての故に、姪欲を諸結の本と爲せばなり。佛、言はく、「寧ろ利刀を以て身體を割截すとも、女人と共に會せざれ」と。刀截は苦なりと雖も、惡趣に墮せず。姪欲の因縁は、無量劫數に於て地獄の苦を受く。人の五欲を受くるすら尚梵世に生ぜず、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提をや。或は有人言はく、「菩薩は五欲を受くと雖も、心に著せざるが故に道を妨げず」と。是を以ての故に經に言はく、「五欲を受くるすら尚梵世に生ぜず」と。梵世には無始より、衆生皆中に生ずるを得。五欲を受くる者は、尚應に得べき所すら而も之を得ず、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提をや。本得ざる所を而も之を得んと欲す。是を以ての故に菩薩は、應に童眞を作すべし。梵行を修行せば、

【九】三種の菩薩を説く。

當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。梵行の菩薩は、世間に著せざるが故に、速に菩薩の道を成ず。若し姪欲の著は、譬へば膠漆の離れ得べきこと難きが如し。所以は何ん、身に愛欲を受くればなり。姪欲は根深し。是故に出家法の中には、姪欲は初に在り、又亦重しと爲す。

舍利弗、佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩、其の當に父母妻子親族知識有るべきや。」佛、舍利弗に告げたまはく、「或は有菩薩には、父母妻子親族知識有り、或は父母兄弟、初發意に姪欲を斷じ、童真行を終するより、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで、色欲を犯さず、或は有菩薩は、方便力の故に五欲を受け已りて出家し、阿耨多羅三藐三菩提を得。」

佛して曰はく、「是れ三種の菩薩なり。初は眞正の人の如く、五欲を受けて後に捨離して出家し、菩提道を得。二は大功德牢固にして、初發心の時に、姪欲を斷じてより、乃ち佛道を成ずるに至る。是菩薩は或は法身、或は肉身、或は欲を離れ、或は未だ欲を離れず。三は清淨法身の菩薩にして、無生法忍を得て、六神通に住し、衆生を教化するが爲の故に衆生と事を同じうし、而も之を攝取す。或は轉輪聖王と作り、或は闍浮提王、長者、刹利と作り、其類ふる所に隨つて而も之を利給す。」

譬へば、幻術、若は幻弟子の善く幻法を知りて、五欲を幻作し、中に於て共に相娛樂するが如きは、汝が意に於て云何。是人は此五欲に於て、頗る實に受くるや不や。舍利弗

言さく、「不、世尊、佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の、方便力を以ての故に、五欲を化作し、中に於て樂を受け、衆生を成就するも亦復是の如し。是菩薩摩訶薩は欲に染まず、種種の因縁を以て、五欲を毀著し、欲を熾然と無し、欲を穢惡と爲し、欲を毀壞と爲し、欲を怨の如しと爲す。是故に舍利弗、當に菩薩は、衆生の爲の故に、五欲を受くるを知るべし。」

【二〇】菩薩は方便力もて五欲を受くることを喻もて明す。

問うて曰はく、「三種の菩薩の中に、何を以てか獨り一種の菩薩の爲に譬喩を作す。」答へて曰はく、「一は人法の如く姪欲を斷ぜず、二は常に姪欲を斷じて淨行を修し、三は亦淨行を修するも現に姪欲を受く。人了ぜざるを以ての故に、爲に譬喩を作るなり。問うて曰はく、「何を以てか夢化等を以て喩と爲さざる。」答へて曰はく、「夢は五情の知る所に非ず、但内心憶想の故に生ず。人の五情を以て見る所は、變失無常なり、以て解するを得べし。化は五情の知る所なりと雖も、而も見る者は甚だ少し。佛は度すべき衆生を度すと爲す、幻は是れ衆人の信する所、是故に喩と爲す。幻師の如きは、幻術を以ての故に、衆人の中に於て希有の事を現じ、人をして歡喜せしむ。菩薩の幻師も亦是の如し、五神通の術を以ての故に、衆生の中に於て五欲を化作し、共に相娛樂し、衆生を化度す。衆生に二種あり。在家と出家なり。出家の衆生を度するが爲の故に、聲聞、辟支佛、佛、及び諸の出家の外道師を現作す。在家の衆生は、或は出家の者を見て得度する有り、或は在家の同じく五欲を受くるを見て化度すべき有り。」

【二】菩薩は五欲を呵責し等の文を釋す。

菩薩は常に種種の因縁を以て、五欲を毀謗す。欲を熾然と爲すとは、若し未だ失せざる時は、三毒の火然ゆ。若し其失する時は、常に火然ゆる無し。二火然ゆるが故に名けて熾然と爲す、都て樂時無し。欲を穢惡と爲すとは、諸佛、菩薩、阿羅漢等の、諸の離欲の者に、皆穢惡せらる。譬へば、人、狗の糞を食するを見て、賤んで之を惡むが如し。好食を得ずして、而も不淨を嘔ふ。受欲の人も、亦復是の如し、内心に離欲の樂を得ず、色欲に於て、不淨して樂を求む。欲を毀壞と爲すとは、五欲の因縁に著するが故なり。天王、人王、諸の富貴の者の國を亡ぼし、身を危ふくするは、之に由らざる無し。欲は怨の如しとは、人の善利を失ふなり。亦刺客の、外は親善の如くにして、内、心に害を懷くが如し。五欲も是の如し、善心を喪失し、人の慧命を奪ふ。五欲の生ずるは、正しく衆善を破壞し、德業を毀敗せんが爲の故に出づ。又知る、五欲は鈎の魚を賊ふが如く、擡の鹿を害するが如く、燈の蛾を燒くが如し。是故に欲は怨の如しと説く。怨家の害は一世に過ぎず、五欲に著するの因縁は、三惡道に墮し、無量世に諸の苦毒を受く。

○ 舍利弗、佛に白して言さく、「菩薩摩訶薩、云何が應に般若波羅蜜を行すべき。佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、菩薩を見ず、菩薩の字を見ず、般若波羅蜜を見ず、亦我は般若波羅蜜を行するを見ず、亦我は般若波羅蜜を行せざるを見ず。何を以ての故に。菩薩、菩薩の字は性空なればなり。空の中には色も無く、受想行識も無く、色を離れて亦空無く、受想行識を離れて亦空無く、空は即ち是れ色、色は即

【三】舍利弗が重
ねて般若波羅蜜を
行すべきことを問
へるに就いて明す

ち是れ空、空は即ち是れ受想行識、受想行識は即ち是れ空なり。何を以ての故に、舍利弗但名字有るが故に、謂ひて菩提と爲し、但名字有るが故に、謂ひて菩薩と爲し、但名字有るが故に、謂ひて空と爲せばなり。所以は何ん。諸法の實性は、生無く、滅無く、垢無く、淨無きが故に。菩薩摩訶薩は、是の如く行するも、亦生を見ず、亦滅を見ず、亦垢を見ず、亦淨を見ず。何を以ての故に。名字は、是れ因縁和合の作法にして、但分別憶想の假名を説くを以てなり。是故に菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、一切の名字を見ず、見ざるが故に著せざるなり。

問うて曰はく、『是事は舍利弗上に已に問へり。今何を以て重ねて問ふ。答へて曰はく、『先には佛一切種を以て、一切法を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし』と説きたまひしに因る故に問ふ。自意の問には非ず。復次に、今、舍利弗は、上に種種に、般若の功德を讚するを聞いて、心に歡喜し、般若を尊重するが故に、云何が行すべきと問へり。病人の良藥を數するを聞いて、便ち、云何が服すべきと問ふが如し。問うて曰はく、『先に已に住不住法の行を問へり。檀波羅蜜は施者、受者、財物不可得なるが故に、是の如き等は般若を行すと爲す、今何を以てか復行を問ふ。』答へて曰はく、『上には總じて諸波羅蜜を問ひ、此には但般若を問ふ。上には廣く般若を讚歎するを主と爲し、此には直に般若を行するを問ふ。復次に、上には廣く般若波羅蜜を數する時に會ふと雖も、渴仰して得んと欲す。是故に舍利弗は衆人の爲の故に、般若波羅蜜を行するを問ふ。般若波羅蜜の功

【三】 菩薩は般若
を見ずして行ずと
いふを明す。

徳は、無量無盡なれば、佛の智慧も亦無量無盡なり。若し舍利弗問を發せずんば、則ち佛の讚歎は窮り無くして已まん。若し舍利弗問はざれば、則ち因縁無きが故に則ち止むべからず。問うて曰はく、「般若の功德は尊重なり、若し佛廣く讚したまふとも、何の不可か有らん。」答へて曰はく、「般若を讚歎すれば、聞く者歡喜し、尊重し、則ち其福德を増す。若し般若を説くを聞けば、則ち其智慧を増す。但福德の因縁を以ての故に佛道を成すべきには有らず、要す智慧を須ひて成するを得べし。是故に但讚歎のみを須ひず。人は讚歎を聞いて、心已に清淨にて、渴仰して般若を得んと欲す。渴人の爲に、廣く美飲を讚歎するも、渴を解かざるが如し。卽便應に之を與ふべきなり。是の如き等の因縁の故に、舍利弗、今般若を行ずるを問へり。」

問うて曰はく、「人の眼有りて方を見、所趣の處を知りて、然る後に能く行くが如く、菩薩も亦是の如し。是づ佛道を念じて般若を知り、己が身を見て、然る後に行くべし。今何を以てか菩薩及び般若を見ずと言ふ。若し見ずんば、云何が行ずるを得ん。」答へて曰はく、「此中に、常に見ずとは言はず。但般若に入りて觀する時は、菩薩及び般若波羅蜜を見ざるを明すのみ。般若波羅蜜は、衆生をして實法を知らしめんが爲の故に出づ、此菩薩の名字は、衆縁和合して、假に稱すること、後品の中に廣説するが如し。般若波羅蜜の名字も亦是の如し、衆法和合するが故に、假に般若波羅蜜と爲す。般若波羅蜜は是れ假名なりと雖も、而も能く諸の戲論を破す。自性無なるを以ての故に、説いて見るべからずと言ふ。」

火は衆縁に従うて和合し、假に名けて火と爲す。實事無しと雖も、而も能く物を焼くが如し。問うて曰はく、「若し般若の中に入れて見ず、出づれば則ち見ば、何をか信すべき。」答へて曰はく、「上に般若を實法と爲すが故に出づと言へり、是れ則ち信すべし。般若波羅蜜を出づるは、不實なるが故に信すべからず。問うて曰はく、「若し般若の中に入れて見ず、出づれば則ち見ば、當に知るべし、法は常空に非ず、般若の力を以ての故に空なり。」答へて曰はく、「世俗の法の故に、行は言うて般若波羅蜜に入ると言ふも、諸の戲論を滅するを觀するが故に、出無く入無し。若し諸の賢聖は、名字を以て説かざれば、則ち以て凡夫を教化するを得ざるなり。當に説意を取るべし、語言に著する莫れ。問うて曰はく、「若し般若の中には、一切法空を貴ばば、此中、何を以てか先づ衆生空を説いて我を破する。」答へて曰はく、「初に般若を聞けば、便ち一切法空を説くを得ず。我は五情を以て求むるに得べからず。但憶想分別して我想を生じ、無なるを有と謂ふ。又意情の中に定縁有る無し、但憶想分別の顛倒の因縁の故に、空なる五衆の中に於て而も我想を生ずるのみ。若し無我を聞けば、則ち解すべきこと易し。色等の諸法は現に眼に見る所なれば、若し初に空無と言はば、則ち信すべきこと難し。今先づ我を破し、次に我所の法を破す。我、我所の法を破するが故に、則ち一切の法は盡く空なり。是の如く欲を離るるを名けて得道と爲す。復次に、般若波羅蜜は一定の法無きが故に、我の般若を行するを見ざるなり。行せざるを見ずとは、凡夫の如きは、般若を得ざるが故に、行せずと名く。菩薩は則ち然らず。但空

般若を行ずるが故に、行ぜざるを見ずと説くなり。復次に、佛を法王と爲す。餘の菩薩を觀るに、其智甚だ少く、諸の結使を難ふ、名けて行と爲さず。譬へば國王の、少物を得と雖も、名けて得と爲さざるが如し。佛も亦是の如し、諸の菩薩を教へて、少行有りと雖も、名けて行と爲さず。復次に、般若波羅蜜を行ずる者は、憍慢を生じて、我は般若波羅蜜を行すと云うて、是相を取り、若し行ぜざる者は、心自ら懈弛して憂悻を懷く。是故に我の行ずると、行ぜざるとを見ずと言ふ。復次に我の般若波羅蜜を行ずるを見ずとは、有に著するの見を破し、我の般若波羅蜜を行ぜざるを見ずとは、無に著するの見を破す。復次に、我の般若波羅蜜を行ずるとは、諸法の戲調を止め、私の行ぜざるを見ずとは、懈怠の心を止むるが故なり。譬へば、馬に乗るに、疾ければ則ち之を制し、遅ければ則ち之に鞭つが如し。是の如き等に、行と不行とを分別するなり。復次に、佛は自ら因縁を説きたまへり。謂ゆる菩薩の字は性空なり。是中に但菩薩の字の空を説くと雖も、而も五衆も亦空なり。空の中に色無く、色を離れて亦空無しとは、空は法空に名く。法空の中には、乃ち一毫の法無し、何に況んや麁色をや。空も亦色を離れず、所以は何ん。色を破するが故に空有ればなり、云何が色を離ると言はん。受想行識も亦是の如し。何を以ての故に、佛は自ら更に因縁を説きたまひしが故なり。謂ゆる但名字のみ有るを謂うて菩提と爲し、但名字のみ有るを謂うて菩薩と爲し、但名字のみ有るを謂うて空と爲す。問うて曰はく、「先に已に此事を説けり、今何を以てか重ねて説く。」答へて曰はく、「先には菩薩を見ず、

菩薩の字を説き、併せて一切の名字に著せずといふを闡す。

菩薩の字を見ず、般若波羅蜜を見ざるを説き、今は因縁を見ざるを説く。謂ゆる但名のみに有るを謂うて菩提と爲し、但名のみ有るを謂うて菩薩と爲し、但名のみ有るを謂うて空と爲す。上の菩薩は此菩薩の義に同じ。」

菩薩の字は即ち菩薩の中に説くが如し。般若波羅蜜は分ちて二分と爲す。成就とは名けて菩提と爲し、未だ成就せずとは名けて空と爲し、生相は實に不可得なるが故に名けて無生と爲す。所以は何ん。若は先に生じて後に法あり、若は先に法ありて後に生じ、若は生法一時ならば、皆不可得なればなり。先に説くが如し。生ずる無きが故に、滅する無し。若し法、不生不滅ならば、虚空の如し、云何が垢有り淨有らん。譬へば虚空は萬歳といへども、雨も亦濕さず、大火焼くとも熱せず、煙も亦著かざるが如し。所以は何ん。本自ら無生たるが故に。菩薩は能く是の如く觀じて、是不生不滅の法を離れて、生有り、滅有り垢有り、淨有りと見ず。何を以ての故に。佛自ら因縁を説きたまふに、一切の法は皆憶想分別し、因縁和合するが故に、強ひて名を以て説く。説くべからずとは、是れ實義にして、説くべしとは、皆是れ名字なり。菩薩は般若波羅蜜を行するに、一切の名字を見ずとは、先には略して名字を説く。謂ゆる菩薩、菩薩の字、般若波羅蜜、菩提の字なり。今は廣く一切の名字は、皆見るべからずと説く、見ざるが故に著せざるなり。著せずとは、不可得なるが故なり。諸眼の中には、慧眼第一なるが如し。菩薩は慧眼を以て、遍く求むるに見ず、乃至細微の一沙をも見ず、是故に著せざるなり。問うて曰はく、「若し菩薩は一切

法の中に著せずんば、何んが涅槃に入らざるを得る。答へて曰はく、「此事は處處に已て説けり。今此中には略して説かん。大悲心の故に、十方の佛を念ずるが故に、本願未だ満足ざるが故に、精進波羅蜜の力の故に、般若波羅蜜と方便との二事相合するが故に、謂ゆる不著に著せざるが故に、是の如き等の種種の因縁の故に、菩薩は諸法に著せずと雖も、而も涅槃に入らずと説く。」

大智度論釋習相應三品第二之一

佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、是の如く思惟すべし。菩薩は但字のみ有り、佛も亦但字のみ有り、般若波羅蜜も、亦但字のみ有り、色も但字のみ有り、受想行識も、亦但字のみ有り。舍利弗、私の如きは但字のみ有り、一切の我は常に不可得なり。衆生、壽者、命者、生者、養育、衆數、人、作者、使作者、起者、使起者、受者、使受者、知者、見者、是一切は皆不可得なり。不可得空なるが故に、但名字のみを以て説く。菩薩摩訶薩も亦是の如し。般若波羅蜜を行じて、我を見ず、衆生を見ず、乃至知者、見者を見ず、所説の名字も亦見るべからざるなり。

問うて曰はく、「第二品の末に已に空を説けり、今何を以てか重ねて説く。答へて曰はく、上には多く法空を説き、今は雜へて法空、衆生空を説く。行者は外法を觀するに、盡く、

【五】 下重ねて法空人空を併せ説くを明す。

【二六】我乃至知者
見者を釋す。

く空にして所有無し、而も謂はく、「能く空を知る者は空ならず」と。是故に復説けり。觀者も亦空なる是れ衆生空なり。聲聞法の中には多く、一切の佛弟子は、皆諸法の中の無我を知るを説けり。佛滅後の五百歳を分ちて二分と爲し、有は法空を信じ、有は但衆生空を信ず。言はく、「五衆は是れ定んで有法なり、但五衆を受くる者は空なり」と。是を以ての故に佛は衆生空を説いて、以て法空を況したまふ。復次に、我空は知り易く、法空は見難し。所以は何ん。我は五情を以て、之を求むるに不可得なればなり。但身見の力を以ての故に、憶想分別して我と爲す。法空とは、色は眼に見るべく、聲は耳に聞くべく、是故に其空を知ること難し。是二事は般若波羅蜜の中には皆空なり。十八空義の中に説くが如し。二六と問うて曰はく、「我乃至知者、見者の如きは、是れ一事と爲んや、各各異りと爲んや。」答へて曰はく、「皆是れ一の我なり、但事に隨ふを以て異と爲す。五衆の中に於て、我我所の心起るが故に、名けて我と爲し、五衆和合の中の主なるが故に、名けて衆生と爲し、命根を成就するが故に、名けて壽者、命者と爲し、能く衆事を起すこと、父の子を生ずるが如きを名けて、生者と爲し、乳哺衣食の因縁を以て、長ずるを得る、是を養育と名けて、五衆、十二入、十八界等の諸法の因縁、是衆法には數有るが故に、衆數と名く。入法を行するが故に名けて人と爲し、手足もて、能く所作有るを名けて、作者と爲し、力能く他を役するが故に、使作者と名け、能く後世の罪福の業を造るが故に、能起者と名け、他をして、後世の罪福の業を起さしむるが故に、使起者と名け、後身に、罪福の果報を受くるが故に、受者

と名け、他をして苦樂を受けしむる、是を使受者と名け、目に色を觀るを名けて、見者と爲し、五識を以て知るを名けて、知者と爲す。復次に、眼を用ひて色を見、五邪見を以て五樂を觀じ、世間出世間の正見を用ひて、諸法を觀する、是を見者と名く。謂ゆる眼根、五邪見、世間の正見、無漏見は、是を見者と名け、餘の四根の知る所、及び意識の知る所を通じて、名けて知者と爲す、是の如き諸法は皆是神を説く。此神は、十方三世の諸佛及び諸の賢聖、之を求むるに不可得なり。但憶想分別して、強ひて其名と爲すのみ。諸法も亦是の如し、皆空にして實無く、但假に其名と爲すのみ。問うて曰はく、「是神は但十六の名字有り、更に餘名有りや。」答へて曰はく、「略して説けば則ち十六なり。廣く説けば則ち無量なり。事に隨つて名を起すは、官號の工能、智巧を差別するが如し。出家得道の種種の諸名は、皆是れ因縁和合の生なるが故に無自性なり、無自性なるが故に畢竟空なり、生空なるが故に法空なり、法空なるが故に、生も亦空なり。」

〔釋〕菩薩摩訶薩の作は、是の如く般若波羅蜜を行じ、佛智慧を除けば、一切の聲聞、辟支佛の上に過ぐ。不可得空を用ふるが故なり。所以は何ん。是菩薩摩訶薩は、諸の名字、法の名字、所著の處も又不可得なるが故に。舍利弗、菩薩摩訶薩は能く是の如く行じて、般若波羅蜜を行するを爲す。譬へば闍浮提に竹麻稻茅を滿すが如く、諸の比丘は、其數是の如く、智慧あること、舍利弗、目連等の如きも、菩薩の般若波羅蜜を行するの智慧に比せんと欲するに、百分の一にも及ばず、千分、百千分乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所なり。

【七】菩薩の智慧の二業に勝るを明す。

【般舟三昧】プラトユトバンナサマーテイ(Pratyupanna samadhi)常行道三昧、佛立三昧と譯す。七日乃至九十日の間、身口意の三業に於て正行を保持して閑静なきをいふ。この三昧を修すれば現前諸備を見ることをうるなり。
【方便】眞實の對根機未熟の故に深妙の法を受けえざる者のために、眞道に入る假の法として教ふる法

何を以ての故に。菩薩摩訶薩、智慧を用て一切衆生を度脱するが故に。

釋して曰はく、二の因縁有るが故に、菩薩の智慧は、聲聞、辟支佛に勝れたり。一に空を以て一切法を知り、空も亦見ず、是空を空するに、不空を以てし、等一にして異ならず。二には此智慧を以て、爲に一切衆生を度脱して、涅槃を得しめんと欲す。聲聞、辟支佛の智慧は、但諸法の空を觀するのみにして、世間、涅槃を觀じて、一と爲す能はざるなり。譬へば人の獄を出づるに、但縲を穿つて出でて自ら身を脱する者有ると、獄を破り鎖を壊し、既に自ら身を脱し、兼ねて衆人を濟ふ者と有るが如し。復次に菩薩の智慧は二法に入るが故に勝れたり。一には大悲、二には般若波羅蜜なり。復二法有り、一には般舟三昧、二には方便なり。復二法有り、一には常に禪定に住し、二には能く法性に通達す。復二法有り、一には能く一切衆生に代つて苦を受け、二には自ら一切の樂を捨つ。復二法有り、一には慈心にして、怨無く悲無く、二には乃至諸佛の功德にも、心亦著せざるなり。是の如き等の種種の功德は、智慧を莊嚴するが故に、聲聞、辟支佛に勝れたり。二問うて曰はく、諸の根本なる者は、以て喩と爲すべし。舍利弗は智慧ありて利根なり、何を以てか喩と爲す。答へて曰はく、必すしも鈍根を以て譬喩と爲さず。譬喩は論義を莊嚴し、人をして信著せしめんが爲の故なり。五情の見る所を以て、以て意識に喩へ、其をして情を得しむ。譬へば樓に登るに、梯を得れば、則ち上り易きが如し。復次に、一切衆生は、世間の樂に著し、道得涅槃を聞けば、則ち信せず樂しまざるなり。是を以ての故に

門をいふ。智慧利根の舍利弗を喩となすに就いて明す。

眼に見る事を以て、見ざる所のものに喩ふ。譬へば苦業は之を服する甚だ難く、之に假すに蜜を以てすれば、之を服する則ち易きが如し。復次に、舍利弗は、聲聞の中に於て、智慧第一なれども、諸佛菩薩に比すれば、未だ現する有らず。閻浮提の如しとは、閻浮は樹の名にして、其林茂盛し、此樹は林中に於て最も大なり。捉は名けて洲と爲す。此洲の上に此樹林あり。林中に河底有り、金沙有り、名けて閻浮檀金と爲す。閻浮樹を以ての故に、名けて閻浮洲と爲し、此洲に五百の小洲有りて圍遶す、通じて閻浮提と名く。問うて曰はく、「諸の弟子は甚だ多し、何を以ての故に、舍利弗、目犍連等は、閻浮提の中に満つると、竹麻稻茅の如しと説くや。」答へて曰はく、「一切の佛弟子の中に智慧第一なる者は舍利弗にして、神足第一なるものは目犍連なり。此二人は、佛法の中に於ても大にして、外法の中に於ても亦大なり。富樓那、迦絺那、阿那律等は、佛法の中に於て大なりと雖も、外破せり。富樓那等の比丘は、是功德無し、是故に説かず。復次に、若し舍利弗を説けば、則ち一切の智慧人を攝し、若し目犍連を説けば、則ち一切の禪定人を攝す。譬喩に二種有り。一には假を以て喩と爲し、二には實事を喩と爲す。今此を名けて、假喩と爲す。餘物を以て喩と爲さざる所以の者は、此四物は叢生稠林にして、種類又多きを以ての故に、舍利弗、目連等の比丘は、閻浮提に満つ。是の如き諸の阿羅漢の智慧を和合すとも、菩薩の智慧に及ばず、百分の一乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所なり。問うて曰はく、「何を以て

か、但算數譬喩も及ぶ能はざる所なりとのみ説かずして、而も百分千分の一にも及ばずと説く。答へて曰はく、「算數譬喩も及ぶ能はざる所なりとは、是れ其極語なり。譬へば人の重罪有るに、先づ打縛禁毒を以てし、然る後に乃ち殺すが如く、聲聞法の中の如きは、常に十六の一にも及ばざるを以て喩と爲し、大乘法の中には、則ち乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所を以てす。」

釋 舍利弗、閻浮提の中に滿つる、舍利弗、目連等の如くならんを置け。若は三千大千世界に滿つる、舍利弗、目連等の如くならんも復是事を置け、若は十方の如恆河沙等の世界に滿つる、舍利弗、目連等の智慧の如くならんも、菩薩の般若波羅蜜を行ずるの智慧に比せんと欲せば、百分の一にも及ばず、千分百千分乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所なり。

【二九】更に前の喩を多を以て説く。

釋して曰はく、「此義は上の閻浮提に同じ、但多きを以て異と爲すのみ。」問うて曰はく、「舍利弗、目連等は多しと雖も智慧は異なる無し。何を以ての故に多きを喩と爲す。」答へて曰はく、「有人謂はく、「少ければ力無く、多ければ則ち力有り。譬へば水少ければ、其力も亦少きが如く、又絶健の人は、少衆の力寡なければ、之を制する能はざるも、大軍之を攻むれば、則ち伏するが如し」と。有人謂はく、「一の舍利弗の智慧は少ければ、則ち菩薩の多きに及ばず、或は能く及ぶ」と。佛言はく、「多しと雖も及ばず」と。故に多きを以て喩と爲すなり。一切の草木の力は、火に如かず、一切諸の明勢は、日に及ばざるが如く、亦十方世界の諸山は、一の金剛珠に如かざるが如し。所以は何ん。菩薩の智慧は、是れ一

【二〇】次に別して菩薩の智慧の二乗の智慧に勝ることを明す。

切諸佛の法の本にして、能く一切衆生をして、苦を離れて樂を得しむればなり。迦陵毘伽鳥の子の如きは、未だ鶩を出でずと雖も、其音は衆鳥に勝れたり。何に況んや鶩を出でたるをや。菩薩の智慧も亦是の如し、未だ無明の鶩を出でずと雖も、一切の聲聞、辟支佛に勝れたり、何に況んや成佛せんをや。又轉輪聖王の太子の如きは、未だ福祚威福を成就せずと雖も、一切の諸王に勝れたり。何に況んや轉輪聖王と作れるをや。菩薩も亦是の如し、未だ成佛せずと雖も、無量阿僧祇劫に、無量の智慧福徳を集むるが故に、聲聞辟支佛に勝れたり。何に況んや成佛せんをや。

【一〇】復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、一日智慧を修せんに、一切の聲聞、辟支佛の上に出過す。

【九】問うて曰はく、「先に已に、佛の智慧を除いて、一切の聲聞、辟支佛の上に過ぎたるを説く。今何を以て復重ねて説く。」答へて曰はく、「重ねて説くに非ず。上には總相を説き、今は別相を説くなり。先には一切の聲聞、辟支佛は、菩薩の智慧に及ばずと言ひ、今は但一日の智慧にも及ばざるを明す、何に況んや千萬歳をや。

【八】舍利弗、佛に白して言さく、「世尊、聲聞の有ゆる智慧、若くは須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛の智慧、佛の智慧、是諸の衆智は、差別有る無く、相違背せず、無生にして性空なり。若し法は相違背せず、無生にして性空ならば、是法は別異なる無けん。云何が世尊、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、一日智慧を修せんに、聲聞、辟支佛の上

【三】 諸の衆智は別なし、相違背せず、無性にして性空といふを明す。

【三脱門】 空、無相、無願の三三昧門のこと。

【有爲解脱】 無學果の聖者の、無漏の勝解の心所をいふ。これ煩惱を離れ、對境に對して縁觀自在なれば解脱といひ、その勝解の無漏有爲なるに名く、**【無爲解脱】** 涅槃のこと。

に出過すと言ふ。』

問うて曰はく、『上に佛は已に、菩薩摩訶薩の修する智慧は、聲聞、辟支佛の上に出過すと説きたまふ。今舍利弗は何を以ての故に問ふ。』答へて曰はく、『智慧の勢力の能く衆生を度するを問はず、今は但佛及び六弟子の智慧を問ふ。體性の法中に差別有る無しとは、諸の賢聖の智慧は、皆是れ諸法實相の慧なるを以てなり。皆是四諦及び三十七品の慧は、皆是れ三界を出でて三脱門に入り、三昧の果慧を成ず。是を以ての故に、差別有る無しと説くなり。復次に、須陀洹の、無漏智を以て結を滅し果を得るが如く、乃至佛も亦是の如し。須陀洹の、二種の解脱の果、有爲解脱と無爲解脱とを用ふるが如く、乃至、佛も亦是の如し。佛の入りたまへる涅槃の如きは、須陀洹の極遅なるものも、七世を過ぎず、皆同事、同縁、同行、同果報なり。是を以ての故に相違背すること無しと言ふ。所以は何ん。不生にして、性空なるが故なり。問うて曰はく、『無明を破して、諸の善法を集むるが故に。智慧を生ず、是智慧は心に相應し、心と共に生じ、心に隨つて行ず。是中に云何が、智慧と無生の性空とは、別異なる無しと説く。』答へて曰はく、『智慧は滅諦を縁ず、是れ不生なり。因縁和合の故に、自性有る無き、是を性空と名け、分別する所無し、智慧は縁に隨つて名を得し、眼の如きは、色を縁じて眼識を生じ、或は眼識と名け、或は色識と名く。智慧は因縁和合の作法なりと雖も、無生の性空を縁するを以ての故に、名けて無生の性空と爲す。問うて曰はく、『諸の賢聖の智慧は、皆四諦に縁りて生ず、何を以てか但滅諦を説く。』

答へて曰はく、「四諦の中には、滅諦を上と爲す。所以は以ん。是三諦は皆滅諦に屬するが故に譬へば人の天子を請じ、併せて群臣も食せしむるをも、亦天子を供養すと名くるが如し。復次に、滅諦の故に無生を説き、三諦の故に性空を説く。復次に、有人言はく、「是諸の智慧の性は、自然に不生にして、性、自ら空なり。所以は何ん。一切の法は、皆因縁和合の故に自性無く、自性無きが故に不生なればなり」と。問うて曰はく、「若し爾らば智慧と愚癡と別異有る無けん。」答へて曰はく、「諸法の、法性の中に入るが如きは、別異有る無きこと、火の各各不同にして、而も滅相は異なる無きが如し。譬へば、衆川萬流は、各各色を異にし、味を異にするも、大海に入れば、同じく一味一名と爲るが如し。是の如く愚癡と智慧とは、般若波羅蜜の中に入れば、皆同じく一味にして、差別有ること無し、五色は須彌山に近づけば、自ら其色を失して、皆同じく金色なるが如し。是の如く内外の諸法は、般若波羅蜜の中に入れば、皆一味と爲る。何を以ての故に。般若波羅蜜の相は、畢竟清淨なるが故に。復次に、愚癡の實相は、即ち是れ智慧なり。若し分別して、此智慧に著せば、即ち是れ愚癡なり。是の如く愚癡と智慧と、何の別異か有らん。初めて佛法に入るに、是癡は是慧に轉じ、後深く入れば癡と慧と異なる無し。是を以ての故に。是諸の衆智は別異有る無く、相違背せず、不生にして性空なるが故に皆無きなり。

佛、舍利弗に告げたまはく、「汝が意に於て云何、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、一日に修する智慧もて心に念ずらく、「我、行道の慧を以て一切衆生を益し、當に一切利智を

【三】下四種の論を明す。

【尼捷子】ニルゲラッタ(Nirudda)ニルゲラッタ(離繫と譯す。裸形外道のこと。

以て一切法を知り、一切衆生を度すべし」と。諸の聲聞、辟支佛の智慧は、是事有りとなすや不や。』舍利弗言さく、『不、世尊。』

釋して曰はく、『四種の論有り。一には必定論、二には分別論、三には反問論、四には置論なり。必定論とは、衆生の中には、世尊を第一と爲し、一切法の中には、我無く、世間は樂しむべからず、涅槃は安隱寂滅と爲す、業因縁は失せず」といふが如き、是の如き等を名けて、必定論と爲す。分別論とは、無畏太子、佛に問ひたてまつるに、佛、能く是語を説きたまへるが如し。「他人をして嗔らしむるや不や」と。佛、言はく、『是事當に分別して答ふべし』と。太子言さく、『諸の尼捷子の輩は了ぜり』と。佛、或時、憍惑の心無きが故に、衆生を罪の中より出したまふに、衆生は嗔れり。然も衆生は後に當に利を得べし。爾時、無畏の子、其膝の上に坐す。佛、無畏に問ひたまはく、『汝が子、或時、諸の瓦石草木を呑まんに、汝嗔むを聽すや不や』と。答へて言はく、『聽さず、先づ教へて吐かしむ。若し背て吐かざんば、左手に耳を捉へ、右手に口を擲りて、縦ひ血を出さしむるも、亦之を置かず』と。佛、言はく、『汝は之を慙まざるや』と。答へて言はく、『之を慙む深きが故に、瓦石を出すを爲す。當時は痛むと雖も、後に安隱を得ん』と。佛、言はく、『我も亦是の如し、若し衆生重罪を作さんと欲するに善く教へ、従はずんば苦言を以て之を誦めんに、嗔志を起すと雖も、後には安隱を得ん』と。又五比丘の佛に問ふが如き、樂を受けて道を得るや』と。佛、言はく、『必らずしも定まらず、苦を受けて罪を得、苦を受けて樂を得る

有り、樂を受けて罪を得、樂を受けて福を得る有り」と。是の如き等を名けて分別論と爲す。反問論とは、還つて問ふ所を以て、之に答ふるなり。佛、比丘に告げたまへるが如し、「汝が意に於て云何。是色は常なりや、無常なりや」と。比丘言さく、「無常なり」と。若し無常ならば、是れ苦なりや不や」と。答へて言はく、「苦なり」と。「若し法は是れ無常にして苦ならば、法を聞ける聖弟子は是法に著して、是法は是れ我なり。是れ我所なりと言ふや不や」と。答へて曰はく、「不、世尊」と。佛、比丘に告げたまはく、「今より已後、有ゆる色、若は過去、若は未來、若は現在、若は内、若は外、若は好、若は醜なる、是色は我所に非ず、我は此色所に非ず。是の如く應に正實の智慧を以て知るべし、受想行識も亦是の如し」と。是の如き等を反問論と名く。置論とは、十四種の如し。世間有常、世間無常、世間有邊、世間無邊、是の如き等は、是を名けて置論と爲す。今佛は反問論を以て、舍利弗に答へたまふ。舍利弗の智は、事に於て未だ悟らざるを以て、佛事端を反問して、其をして解を得しめたまへり。

【三三】 道慧もて一切衆生を度するを明す。

菩薩の衆生を度する智慧を名けて、道慧と爲すこと、後品の中に説くが如し。薩婆若慧は是れ聲聞辟支佛の事、一切種智慧は是れ諸佛の事、道種慧は是れ菩薩の事なり。復次に八聖道分を實道と爲す。衆生をして種種の因縁もて道に入らしむる、是を道慧と名け、衆生をして道の中に住せしむる、是を聲聞種、辟支佛種、佛種を利益すと爲す。又復、一切の智慧、得ざる所無き、是を一切種と名く。若は有爲、若は無爲の一切種智を用て、佛道

を得るを知り已りて、應に一切衆生を度し、一切衆生を利益するに、或は大乗、或は聲聞乘、或は辟支佛乘もてす。若し三乘道に入らずんば、福徳を修して、天上人中の富樂を受くるを教へ、若し福を修する能はざれば、今世の利益の事なる、衣服、臥具等を以てし、若し復得ざれば、當に慈悲心を以て利益すべし。是を一切衆生を度すと名く。問うて曰はく、「若し佛、一切の聲聞辟支佛は、衆生の爲にする能はざるを知りたまはば、何を以ての故に問ひたまへる。」答へて曰はく、「佛意是の如し、舍利弗をして、口に自ら説かしめんと欲したまふ。諸の聲聞、辟支佛は菩薩に如かず、是故に佛問ひたまふ。舍利弗言さく、「不世尊」と。所以は何ん。聲聞、辟支佛は、慈心有りと雖も、本發心して一切衆生を度せんと願はず、亦善根を廻して、阿耨多羅三藐三菩提に向はず。是を以ての故に、菩薩の一日修する智慧は、聲聞、辟支佛の上に過ぎたり。

【經】舍利弗、汝が意に於て云何。諸の聲聞、辟支佛は頗る是念有り。我等、當に阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切衆生を度すべしと。今無餘涅槃を得しむるや不や。舍利弗言さく、「不、世尊。」佛、舍利弗に告げたまはく、「是因縁を以ての故に、當に知るべし、諸の聲聞、辟支佛の智慧を、菩薩摩訶薩の智慧に比せんと欲するに、百分の一にも及ばず、乃至算數譬喩も及ぶ能はざる所なり。」

【論】問うて曰はく、「上に已に舍利弗に反問する事は已に定まれり、今何を以てか復問ふ。」答へて曰はく、「舍利弗は、須陀洹の、同じく解脱を得るを以ての故に、諸佛菩薩と等しか

【三〇】二乗が無上正等覺をうるに念ずるの不可を説く

らんと欲するを以て、而も佛は聽したまはず。譬へば人有り、毛孔の空を以て、虚空と等しくせんと欲するが如し。是故に、佛は重ねて其事を質したまふ。復次に、同一事なりと雖も、義門各異り。先に智慧を言ふは、一切衆生の爲にするが故なり。今は頗る是念あり、言はく、「我當に阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切衆生をして無餘涅槃を得しむべし」と。無餘涅槃の義は、先に説くが如し。復次に、一の聲聞、辟支佛すら、尙是念を作さず、何に況んや一切の聲聞、辟支佛をや。

釋 舍利弗、汝が意に於て云何。諸の聲聞、辟支佛は頗る是念あり、「我は六波羅蜜を行じ衆生を成就し、世界を莊嚴し、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法を具へ、無量阿僧祇の衆生を度脱して、涅槃を得しめんや、不や。」舍利弗言さく、「不、世尊。」

釋して曰はく、「先には略して、「我は當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と説き、今は廣く阿耨多羅三藐三菩提を得るの因縁を説く。謂ゆる六波羅蜜、乃至十八不共法なり。六波羅蜜の義は、先に説くが如し、衆生を教化し、佛世界を淨むることは、後に當に説くべし。餘の十力等は先に説くが如し。」

釋 佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は能く是念を作さく、「我當に六波羅蜜、乃至十八不共法を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、無量阿僧祇の衆生を度脱して、涅槃を得しめん」と。譬へば螢火虫は、是念を作さざるが如し。「我力能く一間浮提を照して、普く大明ならしむ」と。謂の阿羅漢、辟支佛も、亦是の如く、是念を作さず。「我等六波羅蜜乃

【三五】 二乗が無上正等覺をうるの因縁を念するの不可を説く。

【二六】二乗の菩薩に如かざる所以を喻もて説く。

【二七】菩薩の六度を行じてより度生するに至る精進力を喻もて明す。

至十八不共法を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得、無量阿僧祇の衆生を度脱して、涅槃を得しめん」と。

釋して曰はく、「十方恆河沙の舍利弗、目連の一菩薩に如かざる所以の者は、譬へば螢火虫は衆多にして、各照らす所ありと雖も、日に及ばざるが如し。螢火虫は亦是念を作さず、我光明は能く一閻浮提を照す」と。諸の聲聞、辟支佛も、是念を作さず、我智慧は、能く無量無邊の衆生を照す」と。螢火虫は夜は能く照す所有るも、日出づれば則ち能はざるが如し、諸の聲聞、辟支佛も亦是の如し、未だ大菩薩有らざる時は、能く師子吼し説法し教化するも、菩薩出づる有れば、所作有る能はざるなり。」

舍利弗、譬へば日出づる時は、光明遍く閻浮提を照して、明を蒙らざる者無きが如し、菩薩摩訶薩も亦是の如し。六波羅蜜乃至十八不共法を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得て、無量阿僧祇の衆生を度脱して、涅槃を得しむ。

釋して曰はく、「日天子は衆生を憐愍するが故に、七寶の宮殿を興へ、俱に四天下を遊り、初より終に至るまで常に懈息せず。衆生の爲に諸の冷乾を照し、諸の闇冥を除き、各所を得しむるが如し、菩薩も亦是の如し。初發心より、常に六波羅蜜乃至十八不共法を行じ、衆生を度せんが爲に、懈息有る無く、不善の冷を除き、五欲の泥を乾竭し、愚癡の無明を破り、教導して善業を修し、各所を得しむ。又日は明にして、普く照し、憎む無く、愛する無く、其高下深淺に隨つて、悉く照す。菩薩も亦是の如し、世間に出で、

大智度論卷第三十五

第二品を釋し詔
り第三品の上

五神通に住し、虚空に處し、智慧の光明を放ち、諸の罪福の業及び諸の果報を照明す。菩薩は智慧の光明を以て、衆生の邪見、戲論を滅すること、譬へば朝露の日を見れば則ち消ゆるが如し。

大智度論釋習相應品第三之餘

卷第三十六

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

經 舍利弗、佛に白して言さく、「云何が菩薩摩訶薩、聲聞、辟支佛地を過ぎて、阿鞞跋致地に住し、佛道を淨むる。」

【一】阿鞞跋致地に住し、佛道を淨むといふに就いて明す。

問うて曰はく、「舍利弗は何に因つてか此問を作す。」答へて曰はく、「舍利弗は上に衆智異なる無きを問ひ、佛、既に種種の譬喩もて、菩薩の智の勝れたるを明したまへる意を既に解せり。今は、云何が能く二乘を過ぎて、阿鞞跋致地に住して、佛道を淨むるやを問ふ。」問うて曰はく、「小乘は成佛に住せず、何を以ての故に、佛道を淨むる事を問ふ。」答へて曰はく、「舍利弗は、是れ佛に隨つて法輪を轉じ、將に自ら益する無しと雖も、佛道を求むる衆生を利益せんが爲の故に問ふ。又菩薩は大悲を以て利益する所多し。是故に菩薩の事を問ひ、以て衆生を益す。復次に、舍利弗は、佛恩を蒙るが故に、諸の邪見を破して、道果を成ずるを得。恩を報ぜんと欲するが故に、菩薩の事を問ふ。又舍利弗、聲聞地の中に於て、邊際を究盡し、未だ了ぜざる所の者は、唯菩薩の事なり、是故に復問ふ。又菩薩の法は、甚深微妙なるを以て、得る能はずと雖も、愛樂するが故に問ふ。譬へば人の妙寶

【二】三脫門に住し乃至佛道を淨むといふを明す。

を見て、已に自ら無しと雖も、愛樂するが故に問ふが如し。

佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は初發意より六波羅蜜を行じ、空、無相、無作の法に住し、能く一切の聲聞、辟支佛地を過ぎ、阿毘跋致地に住し、佛道を淨む。」

問うて曰はく、「是三事は後品の中に各因縁有り、佛は今何んが併せて説きたまへる。」答へて曰はく、「是中には略して説き、後に當に廣く三事の因縁を説くべし。又今は但空、無相、無作の因縁を説き、後には當に種種の功德を説くべきが故に、三事を合説す。」問うて曰はく、「三解脫門に入れば、則ち涅槃に到る。今云何が空、無相、無作を以て、能く聲聞、辟支佛地を過ぐる。」答へて曰はく、「方便力無きが故に、三解脫門に入りて、直に涅槃を取る。若し方便力有れば、三解脫門に住して涅槃を見、慈悲心を以ての故に、能く心を轉じて遷起すること、後品の中に説くが如し。譬へば仰いで虚空を射、箭箭相拄へて地に墜らしめざるが如し。菩薩も是の如し、智慧の箭を以て、仰いで三解脫の虚空を射、方便の後の箭を以て、前の箭を射、涅槃の地に墜らしめざるなり。是菩薩は、涅槃を見ると雖も、直に過ぎて住せず、更に大事を期す。謂ゆる阿耨多羅三藐三菩提なり。今其觀の時、是れ證の時に非ず、是の如き等は應に廣説すべし。若し是二地を過ぐれば、諸法の不生不滅を知る、即ち是れ阿毘跋致地なり。阿毘跋致地の中に住して、衆生を教化し、佛世界を淨むる、是を能く佛道を淨むと爲す。復次に、菩薩は三解脫門に住し、四諦を觀じて、是聲聞辟支佛の法を知り直に四諦を過ぎて一諦に入る。謂ゆる一切法の不生、不滅、不垢、

【三】 漏結未盡の菩薩が何地に住して二乘の爲に福田となるやとの問意なり。

【四】 三の問意に對する佛答を明す

【五】 菩薩は因縁あるが故に世間の善法を生ずることを明す。

不淨、不來、不去等なり。是一諦の中に入る、是を阿毘跋致地と名く。是阿毘跋致地に住して、佛道の地を淨む。身口意の麤惡の業を滅除し、及び諸法の中の初より已來、失ふ所の事を滅する、是を佛道の地を淨むと名く。

舍利弗、佛に白して言さく、「菩薩摩訶薩は、何等の地に住してか、能く諸の聲聞辟支佛の爲に、福田と作る。」

釋して曰はく、「舍利弗は深心に菩薩を恭敬す、故に今菩薩は漏結未だ盡さざるに、何の功徳に任してか、能く諸の聲聞辟支佛の爲に、福田と作るやを問ふなり。」

佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は、初發地に六波羅蜜を行じ、乃至道場に坐するまで、其中間に於て、常に諸の聲聞辟支佛の爲に福田と作る。」

釋して曰はく、「佛は是義を以て舍利弗に示したまふ。三解脱門と、涅槃の事とは、同じと雖も、而も菩薩には大慈悲有り、聲聞、辟支佛には無し。菩薩は初發心に六波羅蜜乃至十八不共法を行じ、一切の衆生を度せんと欲し、一切の佛法を具するが故に勝れたるなり。」

何を以ての故に、菩薩摩訶薩、因縁あるを以ての故に、世間の諸の善法生ず。

釋して曰はく、「佛は先に已に、一の因縁を以て、益衆行を行じたまふが故に、諸の聲聞、辟支佛の爲に、福田と作りたまへり。今菩薩は、外に因縁を益すが故に、世間に一切の諸の善法あるを説く。所以は何ん。菩薩は發心して未だ成佛せずと雖も、度すべき衆

の諸の善法あるを説く。所以は何ん。菩薩は發心して未だ成佛せずと雖も、度すべき衆

生をして、三乘道に住せしめ、三乘を得ざる者には、十善道に住せしむればなり。何に況んや成佛せんをや。問うて曰はく、「聲聞辟支佛も因縁の故に、亦世間をして善法を得しむ。何を以てか但菩薩のみ能く世間に善法有らしむと説く。」答へて曰はく、「聲聞辟支佛に因りて世間の善法有るは、亦皆菩薩に由るが故に有り。若し菩薩發心せざれば、世間にすら尙佛道無し。何に況んや聲聞、辟支佛の佛道をや。是れ聲聞、辟支佛の根本なるが故なり。」復次に、聲聞、辟支佛に因りて善法有りと雖も、少きを以ての故に説かず、尙聲聞、辟支佛すら説かず、何に況んや外道の諸師をや。

○何等か是れ善法なる。謂ゆる、十善道、五戒、八分成就、四禪、四無量心、四無色定、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分にして、盡く世に現じ、菩薩の因縁を以ての故に、六波羅蜜、十八空、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲、一切種智ありて、盡く世に現じ、菩薩の因縁を以ての故に、刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家、四天王天乃至非有想非無想天有りて皆世に現じ、菩薩の因縁を以ての故に、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛有りて皆世に現す。

問うて曰はく、「菩薩の因縁を以ての故に、善法有ることは世に於て爾るべし。刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家は、若し世に菩薩無くとも、亦此貴姓有り、云何が皆菩薩より生ずと言ふ。」答へて曰はく、「菩薩の因縁を以ての故に、世間に五戒、十善、八齋等有り。是法に上中下有り、上なる者は道を得、中なる者は次に生じ、下なる者は人と爲る。

次に菩薩の因縁の故に善法従つてあるを明す。

故に刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家有るなり。問うて曰はく、「若し世に菩薩無くも世間に亦五戒、十善、八齋、刹利等の大姓有りや。」答へて曰はく、「菩薩の身を受くるに種種あり。或時は業因縁の身を受け、或は變化の身を受けて、世間に於て教化し、諸の善法及び世界の法、王法、世俗の法、出家の法、在家の法、種類の法、居家の法を説き、衆生を憐愍し、世界を護持し、菩薩の法無しと雖も常に世法を行す。是因縁を以ての故に皆菩薩に從つて有り。問うて曰はく、「菩薩は清淨にして、大慈悲を行す、云何が世俗の諸の雜法を説く。」答へて曰はく、「二種の菩薩有り。一には慈悲を行じて直に菩薩道に入り、二には敗壞の菩薩にして亦悲心有り。治むるに國法を以てし、利を貪る所無し。憍む所有りと雖も、安んずる所の者多し。一の惡人を治して、以て一家を成す。是の如く法を立つる人は、名けて清淨の菩薩と爲さずと雖も、敗壞の菩薩と名くるを得。是因縁を以ての故に、皆菩薩に由りて有り。世間の諸の富貴は皆二乘道に從うて有り。二乘道は佛に從つて有り、佛は菩薩に因りて有り。若し菩薩の善法を説く無くんば、世間に天道、人道、阿修羅道有る無く、樂受、不苦不樂受有る無く、但苦受のみ有りて、常に地獄の啼哭の聲のみ有らん。菩薩は是の如し、大いに利益するが故に、云何が名けて世間の爲の福田と作さざらん。舍利弗は、是菩薩に大功徳有るを聞いて、應當に供養すべく、心に念ずらく、「煩惱未だ盡きざれば、大福有り」と雖も、其供養を消する能はざらん。人の好食を噉ふと雖も、内に病有るを以ての故に、消化する能はざるが如し」と。是を以ての故に。

【七】菩薩本來淨畢なるを明す。

【八】菩薩の施主たる善法を施すにあるを明す。

【九】菩薩が波若を習行し、それと相應する所以を問ふ。

【釋】舍利弗、佛に白して言さく、「菩薩摩訶薩は、淨畢にして福を施すや不や。」佛、言はく、「不なり、何を以ての故に。本淨畢なればなり。」

【釋】釋して曰はく、「菩薩初發心の時を以て、便ち一切衆生の供養の上首爲り。所以は何ん。決定を以て、無量無邊阿僧祇劫の衆生の爲に代りて勤苦を受け、又無量阿僧祇劫の衆生を利益して、度脱するを得しめ、一切諸佛の法、大智慧力を取らんと欲するが故に、能く世間即ち是れ涅槃ならしむ。是の如き種種の因縁の故に、本より已に淨畢なりと言ふ。復次に、佛、重ねて施を消するの因縁を説きたまひしが故なり。」

【釋】舍利弗、「菩薩摩訶薩、大施主と爲りて何等をか施す。」諸の善法を施す。「何等か善法なる。」十善道、五戒乃至十八不共法、一切種智、是を以て施與す。

【釋】釋して曰はく、「先には菩薩の因縁に由りて世間の善法有るを説き、今は菩薩は善法を施すの主なるを説く、是を差別と爲す。」

【釋】舍利弗、佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩は、云何が般若波羅蜜を習應し、般若波羅蜜と相應せん。」

【釋】釋して曰はく、「上には一日般若波羅蜜を修するも、聲聞、辟支佛に勝るを説く。是因縁より來りて、佛は種種に菩薩を讚歎したまふ。「是の如き大功德は、皆般若波羅蜜より生ず」と。是故に今「云何が菩薩は、是般若波羅蜜を習行し、般若波羅蜜と相應するや」と問ふなり。復次に、舍利弗は、般若波羅蜜の行じ難く、得難く、幻の如く、化の如く、受

持すべきこと難きを知り、行者の違錯を恐るるが故に、習應を問へるなり。」

【經】佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の色空を習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名け、愛想行識空を習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。」復次に、舍利弗、菩

薩摩訶薩の眼空を習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名け、耳鼻舌身心空を習應する、

是を般若波羅蜜と相應すと名け、色空を習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名け、聲香

味觸法空を習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名け、眼界空、色界空、眼識界空を習應

する、是を般若波羅蜜と相應すと名け、耳聲識界、鼻香識界、舌味識界、身觸識界、意法

識界の空を習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名け、苦の空を習應する、是を般若波羅

蜜と相應すと名け、集、滅、道の空を習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名け、無明の

空を習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名け、行、識、名色、六處、觸、受、愛、取、

有、生、老死の空を習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名け、一切諸法の空、若は有爲、

若は無爲を習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。」

【釋】釋して曰はく、「五衆とは色受想行識なり。色衆とは是れ可見の法なり。是色は因縁の

故に、亦不可見有對なる有り。對有れば見るべからずと雖も、亦名けて色と爲す。得道の

者を名けて道人と爲し、餘の出家は未だ道を得ざるも、道を得る者に囚りて、亦名けて道

人と爲すが如し。何等か是れ可見なる。一處は是れ可見有對の色なり。少分は一入に攝す、

餘の九處及び無作業を不可見の色と名く。有對とは十處、無對とは唯無作の色なり。有漏、

【二〇】下五衆を明
す中、初に色衆を
明す。

【一入】青黄赤等
の色塵をいふ。

【九處】五處五根
五境の中、色塵を
除ける餘の九。

【無作業】新譯に無表業といふ。無表業のこと。表業によりて薫發せられ、不日結果を生ずべき原因の故に業といふ。

【無作の色】新譯に無表色といふ。他に表示することなき色法といふ。吾人が身の二業を起すとす、他日その業作の結果を生ずべき原因を同時に自身内に薫發せられたる原因は無形無象の色法にして、他に表示し能はざるが故に無表色といふ。

【色に三種】可見有對色とは色法に五根五境無表の十一种ある中、色境とし、眼等の五根と色境を除ける餘の四境とを不可見有對色とし、無表對色とす、眼に見

無漏等の分別も亦是の如し。經に説くが如し、三色に三種有り。有色は可見有對、有色は不可見有對、有色は不可見無對なり」と。是故に當に知るべし、但眼見のみにあらず、故に是色は内外の十處の能く五識を起す者を皆色と名け、是色分に因るが故に無作の色を生ず。是色に四種色有り。内有の受、不受、外有の受、不受なり。復五種の色有り、謂ゆる五塵なり。復一種の色有り。經に説くが如く、憍壞の相なり。衆生の身色を名けて憍壞の相と爲す。非衆生の色をも亦憍壞の相と名け、憍壞の四縁の故に亦憍と名く。譬へば身行れば、則ち飢渴寒熱老病刀杖等の苦有るが如し。復二種の色有り。謂ゆる四大と四大造色と、内色と外色と、受色と不受色と、繫色と不繫色と、有色の能く罪を生ずると、有色の能く福を生ずると、業色と非業色と、業色と果色と、業色と報色と、果色と報色と、隱沒無記色と不隱沒無記色と、可見色と不可見色と、有對色と無對色と、有漏色と無漏色と、是の如き等の二種に分別する色有り。復三種の色有り。上の可見有對の中に説くが如し。復三種の色有り。善色と不善色と無記色と、學色と無學色と非學非無學色と、見諦所斷より生ずる色と思惟所斷より生ずる色と無斷より生ずる色となり。復三種の色有り、欲界繫色と色界繫色と不繫色と、有色の能く貪欲を生ずると、有色の能く瞋恚を生ずると、有色の能く愚癡を生ずるとなり。三結、三漏等も亦是の如し。有色は能く不貪善根、不瞋善根、不愚癡善根を生ず。是の如き等の諸の三善根は應に廣く説くべし。有色は能く隱沒無記法を生じ、能く不隱沒無記法を生ず。不隱沒無記に二種有り、有は報生、有は非報生なり。是

るべきを可見、極微より成り障礙あるものを有對といふ。

【影色】新に顯色といひ、青黄赤白等をいひ、像色とは形色のことにして長短方圓等といふ。【大秦】波斯のこと。

の如き等の二種の無記有り。復四種の色有り。上の受、不受の中に説くが如き四大、及び造色の三種なる善、不善、無記と、身業の作、無作色と、口業の作、無作色、受色時に得る律儀の止色、惡不善の用色、業僧の受用する檀不用色、餘の無用の是の如き等の四種の色有り。復五種の色有り、身の作、無作の色と、口の作、無作の色と、及び非業色と、五情、五塵、蠶色、動色、影色、像色、誑色となり。蠶色は、見るべく聞くべく嗅ぐべく味ふべく觸るべきこと、土石等の如し。動色に二種有り。一には衆生の動作、二には非衆生の動作にして、水火風の動作の如し。動色は他に依るが故に動き、下に大風有りて水を動かさず、水は地を動かさず。風の樹を動じ、酒の自ら沸動し、磁石の鐵を吸ふが如く、眞珠、玉、車薬、馬齒の夜能く自ら行くが如きは、皆是れ衆生の先世の福德業の因縁にして不可思議なり。問うて曰はく、「影色、像色は別に説くべからず、何を以ての故に。眼の光明は、清淨の鏡に對するが故に、反つて自ら照し見ればなり。影も亦是の如し、光を遮するが故に影現じ、更に法有る無ければなり。答へて曰はく、「是事然らず、油の中に像を見るに、黒ければ則ち木色に非ざるが如く、五尺の刀の中を、横に觀れば則ち面像廣く、縦に觀れば則ち面像長きは、則ち本面に非ざるが如し。大秦の水精の中の玷の如し。玷の中に皆面像有れば則ち一面の像に非ず。是因縁を以ての故に、還本像を見るにあらず。復次に鏡有り、人有り、持つ者有り、光明有り、衆縁和合するが故に、像有りて生ず。若し衆縁具せざれば、則ち像は生ぜず。是像は亦因縁無きに非ず、亦因縁の中に在らず。是の如く別に自ら

【受衆とは等】
に受衆を明す。 二

法有るは是れ面に非ざるなり。此は微色の生ぜる法にして、是の如きは麤色に同じからず。火に因りて烟有り、火滅するも烟在るが如し。問うて曰はく、「若し爾らば別に影を説くべからず、同じく是れ細色なるが故に。」答へて曰はく、「鏡中の像は種種の色有るも、影は則ち一なり。是故に同じからず。是二は形を待つと雖も、俱に形質を動かし、各影を異にし、明を遮するに従つて像を現す。則ち種種の因縁に従うて生じ、同じく細色なりと雖も各各差別す。誑色とは、炎の如く、幻の如く、化の如く、乾闥婆城等の如く、遠ければ人の眼を誑かし、近ければ所有無し。是の如き等の種種無量の色を總じて色衆と名く。

受衆とは、經に説くが如し。眼に因りて色を縁じて、眼色を生じ、三事六合するが故に觸を生ず。是觸は、即時に三衆共に生ず。謂ゆる受と想と行となり。問うて曰はく、「眼識も亦三衆の與に因と作らば、何を以てか但觸を説くや。」答へて曰はく、「眼識は少時住するも、色を見れば便ち滅す。次に意識を生じて、能く好醜等を分別す。是故に眼識を説かず。眼と色と識との三事六合するが故に、觸を生じ、觸は心數法を生ず。眼識は因縁遠きが故に説かざるなり。問うて曰はく、「一切の識には皆觸有り、何を以てか但觸法の因縁は心數法を生ずる。」答へて曰はく、「心に二種有り。一には念念に生滅するの心、二には次第相續の心なり。觸も亦是の如し、次第相續の觸は、麤なるが故に、觸に因りて心數法を生ずと説き、念念の觸は微細にして、亦共に心數法を生ずれども、了らざるが故に説かず。若し情塵識の三事六合すれば、能く苦樂を受く。爾時、觸法は了了なり。是を以ての故に觸に

因りて心數法を生ずと説くなり。色法の因縁和合より生ずるが如く、心數法も亦是の如く觸法の和合より生ず。色法は和合より生じ、和合無ければ則ち生ぜざるが如く、心數法も亦是の如し。觸有れば則ち生じ、觸無ければ則ち生ぜず。此受衆に一種あり、謂ゆる受相なり。復二種の受有り。身受と心受、内受と外受、麤と細、遠と近、淨と不淨等なり。復三種の受有り。苦と樂と不苦不樂と、善と不善と無記と、學と無學と非學非無學と、見諦所斷と思惟所斷と不斷と、見諦所斷に因りて生ずる受と、思惟所斷に因つて生ずる受と、不斷に因りて生ずる受と、或は身見に因りて生じて還身見の與に因と作らず、或は身見に因りて生じて還身見の與に因と作り、或は身見に因りて生ぜず還身見の與に因と作らず。復三種の受有り。欲界繫と色界繫と無色界繫となり。是の如き等の三種の受あり。復四種の受有り。内身受と外身受と内心受と外心受と、四正勤、四如意足等に相應する受、及び四流、四縛等に相應する受、是を四種の受と名く。復五種の受有り、樂根と憂根と捨根と、見苦所斷相應の受と乃至思惟所斷相應の受となり。五蓋、五結の諸の煩惱に相應する受も亦是の如し。復六の受衆有り。六識相應の受なり。復意識の分別する十八の受あり。謂ゆる眼に色を見、思惟し分別して心に喜を生じ、眼に色を見、思惟し分別して、心に憂を生じ、眼に色を見、思惟し分別して心に捨を生ず、乃至意識も、亦是の如し。是十八受の中に淨有り垢有りて、三十六と爲る。三世に各三十六有りて、百八と爲る。是の如き等の種種の因縁により分別するに、受の善無量なるを、名けて受衆と爲す。

【想衆等】次に想衆を明す。

想衆、相應行衆、識衆も、亦是の如く、分別す。何を以ての故に。受衆と相應するが故に。

復次に、佛、説きたまはく、「四種の想有り。小想、大想、無量想、無所有想なり。小想とは小法を覺知するなり。説くが如くんば小法とは、小欲と、小信と、小色と、小縁の相を名けて小想と爲す。復次に、欲界繫の想を名けて、小と爲し、色界繫の想を名けて大と爲し、三無色天繫の想を名けて無量と爲し、無所有處繫の想、是を無所有想と名く。復次に、煩惱相應の想を名けて小想と爲す。煩惱覆ふが故なり。有漏の無垢想を名けて大想と爲し、諸法實相の想を名けて無所有想と爲し、無漏想を名けて無量想と爲す。涅槃を無量法と爲すが故なり。復次に、佛、説きたまはく、「六想有り。一 眼觸相應生の想、乃至意觸相應生の想なり。是の如き等を名けて想衆と爲す。

【行衆とは等】次に行衆を明す。

行衆とは、佛、或時説きたまはく、「一切の有爲法を名けて行と爲す。或は説きたまはく、「三行あり。身行、口行、意行なり。身行とは、出入の息なり、所以は何ん。息は身に屬するが故なり。口行とは、覺觀なり。所以は何ん、先づ覺觀有りて、然る後に語言すればなり。意行とは、受想なり、所以は何ん、苦樂を受けて相を取り、心を發する、是を意行と名くればなり。心數法に二種有り、一は見に屬し、二は愛に屬す。愛に屬する主を名けて受と爲し、見に屬する主を名けて想と爲す。是を以ての故に是一法を説いて意行と爲す。佛、或は説きたまはく、「十二因縁の中に三行有り。福行、罪行、無動行なり。福行とは欲

【講衆とは等】次に講衆を明す。

界繫の善業なり、罪行とは不善業なり、無動行とは色無色界の繫業なり。阿毘曇には、受と想とを除き、餘の心數法及び無想定、滅盡定等の心不相應の法、是を名けて行業と爲す。講衆とは、内外六入の和合の故に、六覺を生ずるを名けて識と爲す。内緣力大なるを以ての故に名けて眼識と爲し、乃至名けて意識と爲すなり。問うて曰はく、「意は即ち是れ識なり、云何が意緣力の故に意識を生ずる。」答へて曰はく、「意は生滅の相なるが故に、多く前の意を因とするが故に、法を緣じて意識を生ずる。」問うて曰はく、「前の意は已に滅せり、云何が能く後の識を生ずる。」答へて曰はく、「意に二種有り。一は念念に滅し、二は心の次第相續するを名けて一と爲し、是相續心の爲の故に諸心を名けて一意と爲す。是故に意に依りて識を生ずるも咎無し。意識は解し難きが故に、九十六種の外道は、意に依るが故に識を生ずると説かず、但神に依るを以て本と爲す。此五衆は四念處の中に廣く説けり。所以は何ん、身念處は色衆を説き、受念處は受衆を説き、心念處は識衆を説き、法念處は想衆、行業を説けばなり。

【二】下五衆に就いての問答、即ち有爲法を五衆と立ちの義に就いて明す。

問うて曰はく、「應に五衆有るべからず、但應に色衆と識衆とのみ有るべし。識衆は時に隨つて分別するが故に異名有り、名けて、受想行と爲す。不淨識を名けて煩惱と爲し、淨識を名けて善法と爲すが如し。」答へて曰はく、「然らず。所以は何ん。若し名異なるが故に實も亦異なるればなり。若し異法無くんば、名は異なるべからず。若し唯心のみに有りて、心法無くんば、心に垢有り、淨有るべからず。譬へば清淨の池水に、狂象中に入れば、其

をして混濁せしめ、若し清水珠を入れるれば、水即ち清淨にして、水の外に象無く、珠無しと言ふを得ざるが如し。心も亦是の如し。煩惱入るが故に、能く心をして濁らしめ、諸の慈悲等の善法、心に入れば、心をして清淨ならしむ。是を以ての故に煩惱慈悲等の法は、即ち是れ心なりと言ふを得ず。問うて曰はく、「汝は我先に、垢心は即ち是れ煩惱、淨心は即ち是れ善法なりと説きしを聞かず。」答へて曰はく、「若し垢心ならば、次第に云何が能く淨心を生じ、淨心ならば、次第に云何が當に垢心を生ずべけん。是を以ての故に是事は然らず。汝は但衆現の事を知りて心數法を知らず。知らざるを以ての故に、便ち謂つて無しと爲すべからず。當に必ず五衆有るを知るべし。」問うて曰はく、「若し有らば何を以てか多からず少からず、但五と説くや。」答へて曰はく、「諸法は各定限有り。手法の五指は、其多少を求むるを得ざるが如し。復次に、有爲法は復無量なりと雖も、佛は分判して五分と爲して、則ち盡したまふ。問うて曰はく、「若し爾らば、何を以ての故に復十二入、十八界を説く。」答へて曰はく、「衆の義は應に爾るべし、入と界の義は、異なり。佛を法王と爲す。衆生の爲の故に、或時は略説し、或時は廣説したまふ。衆生有り、色と識の中に於ては大いに邪惑せず、心數法の中に於て多く錯謬有るが故に、五衆を説く。衆生有り、心數法の中に邪惑を生ぜず、但色に惑ふ。是衆生の爲の故に、色を説いて十處と爲し、心數法を總じて二處と説く。或は衆生有り、心數法の中に於て少しく邪惑を生じ、而も多色と心とを了ぜず。是衆生の爲の故に、心數法を説いて一界と爲し、色と心とを十七界

と爲す。或は衆生有り、世間の苦法生滅を知らず、苦道を離るるを知らず、是衆生の爲の
 故に、四諦を説く、世間及び身は皆是を苦と爲し、愛等の煩惱は是れ苦の因なり、煩惱滅
 すれば是苦滅す。煩惱を滅する方便の法は是を道と名く。或は衆生有り、吾我に著するが
 故に、諸法の中に於て、邪見して、一異の相を生じ、或は世間には因無く縁無しと言ひ、
 或は邪因縁に墮す。是衆生の爲の故に、十二因縁を説く。有人は常法と説き、或は神は常
 なりと説き、或は一切法は常なり、但滅する時は隱藏して微細なるも、是れ無には非ざ
 るなり。若し因縁會するを得れば、還出づ、更に異法無し」と説く、是人の爲の故に、一
 切の有爲法は、皆是れ作法にして常定有る無しと説く。譬へば木人の種種の機關木楔和
 合するが故に、能く動作するも實事有る無きが如し。是を有爲法と名く。問うて曰はく、
 『是中に五衆を説くは何の次第か有る。』答へて曰はく、『行者は、初に觀法を習ひ、先づ蠱法
 を觀じて身の不淨、無常、苦、空、無我等の身患を知る。是の如く衆生の此身に著する所
 以は、能く樂を生ずるを以ての故なり、此樂を諦觀するに、無量の苦有りて、常に之を隨
 逐す。此樂も亦無常、空、無我等なり。六塵の中に無量の苦有り、衆生は、何の因縁もて
 か著を生ずる。衆生は相を取るを以ての故に著す。人身の如し。一種は偏に著する所有り、
 能く命を洩し、死に隨つて相を取り、苦樂を受けて發動し、思等の諸行を生じ、心行發動
 するとき、苦を離れて樂を得るの方便を識知す、是を識と爲す。復次に、衆生は五欲の因
 縁の故に苦樂を受け、相を取る因縁の故に、是樂に深著し、樂に深著するを以ての故に、

【三】下五衆を立つるも諸法畢竟空なることを明す。

或は三毒、若くは三善根を起す。是を名けて行と爲す。識は其主たり、上の事を受用す。五欲は即ち是れ色にして、色は是れ根本なるが故に、初に色衆を説き、餘は次第に名有り。餘の入界の諸法等も皆五衆の次第に由る。唯法入法界中に有りては、無爲法を増し、四諦の中には、智縁滅を増し、入界乃至有爲無爲の法は上説の如し。

今五衆等の諸法は皆是れ空なり。何を以ての故に。聖主の説なるが故に。聖に三種有り。下と中と上となり。佛を其主と爲す、星宿月の中にては、日を其最と爲すが如し。光明大なるが故に。佛は一切智慧を得たまふが故に名けて聖主と爲す。聖主の説きたまふ所なるが故に、應當に是れ實なるべし。復次に、十八空有るを以ての故に、一切法は空なり。若し但性空を以ての故に能く一切法を空す、何に況んや十八をや。若し内空、外空を以て、能く一切法を空す、何に況んや十八をや。

復次に、若し法有り、不空ならば應當に二種有るべし。色法と非色法となり。是色法は分別破裂して、乃ち微塵に至る。微塵を分別することも、亦得べからず。終卒に皆空にして、色法無し。乃至念念生滅するが故に皆空なること、四念處の中に説くが如し。復次に、諸法は性空にして、但名字のみあり、因縁和合するが故に有り。山河草木、土地人民州郡城邑は之を名けて國と爲し、巷里市陌、廬館宮殿は之を名けて都と爲し、梁柱椽棟、瓦竹壁石は之を名けて殿と爲すが如し。上中下分の和合する之を名けて柱と爲し、片片和合するが故に分の名有り、衆札和合するが故に片の名有り、衆微和合するが故に札の名有り。

是衆の微塵に、大有り、申有り、小有り、大は遊塵にして見るべく、中は諸天の見る所、
 小は土聖人、天眼の見る所にして、慧眼之を觀れば、則ち見る所無し。所以は何ん。性は
 實に無なるが故なり。若し微塵は實に有ならば、即ち是れ常に分裂すべからず、毀壞
 すべからず、火も燒く能はず、水も没する能はざらん。復次に、若し微塵は有形なるも、
 無形なるも、二俱に過有り。若し無形ならば、云何が是れ色ならん。若し微塵にして有形
 ならば、則ち虚空と分を作し、亦十方の分有り。若し十方の分有らば、則ち名けて微と爲
 さず。佛法の中には、色に遠近、麤細、是常なる者有る無し。復次に、是因縁名字を離る
 れば、則ち法有るなし。今山河土地の因縁名字を除けば、更に國名無く、廬里道陌の因縁
 名字を除けば、則ち都の名無く、梁椽竹瓦の因縁名字を除けば、更に殿の名無く、三分の
 因縁名字を除けば、更に柱の名無く、片の因縁名字を除けば、則ち分の名無く、札の因縁
 名字を除けば、則ち片の名無く、衆微の因縁名字を除けば、則ち札の名無く、中微塵の名
 字を除けば、則ち大微塵の名無く、小微塵の名字を除けば、則ち中微塵の名無く、天眼、
 妄見を除けば、則ち小微塵の名無し。是の如き等の種種の因縁の義あるが故に、諸法は必
 ず空なるを知るなり。問うて曰はく、『若し法は畢竟空ならば、何を以てか名字有る。』答へ
 て曰はく、『名字、若し是れ有ならば、法と俱に破せん。若し無ならば、則ち難すべからず。
 名字と法とは、俱に異り有るなし。是を以ての故に一切法は、空なるを知る。』復次に、一
 切法は實に空なり、所以は何ん。一法の定んで有る無ければなり。皆多法の和合より生ず、

若し一有ること無ければ、亦多有る無し。譬へば樹の根莖枝葉和合するが故に、假名の樹有るが如し。若し樹法の根莖枝葉無くんば、誰か和合を爲さん。若し和合する無くんば、則ち一法無し。若し一法無くんば、則ち亦多も無し。初の一は後の多なるが故なり。復次に、一切の諸観、語言、戲論は皆實無き者なり。若し世間の常なるも亦然らず、世間の無常なるも亦然らず。無業生、有業生、有邊無邊、有我無我、諸法の實なる、諸法の空なる、皆然らず、先に種種の論議門の中に説くが如し、若し是諸観、戲論皆無ならば、云何が空ならざらん。問うて曰はく、「汝は、諸法の實、諸法の空は、皆然らずと言へり。今云何が復諸法は空なりと言ふ。」答へて曰はく、「二種の空有り。一には名字の空なるを説いて、但有に著するを破し、而も空を破せず。二には空を以て有を破し、亦空有る無し。小劫の盡くる時、刀兵、疾疫、飢饉すれども、猶人物、鳥獸、山河有り、大劫の燒くる時、山河、樹木乃至金剛地の下の大水も亦盡き、劫火既に滅し、持水の風も亦滅し、一切廓然として遺餘有る無きが如し。空も亦是の如し、諸法を破するに、皆空にして唯空のみ在る有り。而も相を取りて之に著す。大空とは一切法を破し、空も亦復空なり。是故に汝は是難を作すべからず。若し諸の戲論を滅せば、云何が空ならざらん。是の如き等の種種の因縁もて處處に空を説けり、當に一切法は空なることを知るべし。

【二三】般若と相應すといふを明す。

習とは、般若波羅蜜に隨つて修習し、行觀し、息まらず、休まざる、是を名けて習と爲す。弟子の師の教に隨順し、師の意に違はざる、是を相應と名くるが如し。般若波羅蜜の

相の如く、菩薩も亦是相に隨ひ、智慧を以て觀じ、能く得、能く成就し、増さず減らざる是を相應と名く。譬へば函蓋の大小相稱ふが如し。般若波羅蜜は、諸の觀法を滅すと雖も、而も智慧力の故に、名けて、能はざる所無く、觀せざる所無しと爲す。能く是の如く、二邊に墮せざるを知る、是を般若と相應すと爲す。

復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩の性空を習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行じ、七空、謂ゆる性空、自相空、諸法空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空を習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

問うて曰はく、「何を以てか十八空に住すと説かず、但七空に住すと説いて、般若波羅蜜と相應すと名くる。」答へて曰はく、「佛法の中に廣く説けば、則ち十八空、略して説けば、則ち七空なり、廣く助道法を説けば、則ち三十七品有るも、略して説けば、則ち七覺分なるが如し。復次に、是七空は、多く用ひて衆生を利益するが故に、大空、無始空の如き、或時は、衆生有りて是邪見を起す。是が爲の故に説く。

性空とは、一切諸法の性は、本末尙自ら空なり、何に況んや現在因縁の尙空なるをや。何に況んや果報をや。自相空とは、諸法の總相別相、盡く其空を觀すれば、心、則ち遠離す。是二空を用ふるに、諸法は皆空なり。是を諸法の空と名く。性空に従ふが故に相有り、相は空なるが故に諸法は皆空なり。諸法は空なるが故に更に更に所得無し、是を不可得空と名く。是四種の空を用ひて、一切の有法を破せんに、若し有法有相を以て、過と爲す者は、

【一】下七空に住するこれ波若と相應すと云ふを明し並に七空を義解す

【二五】 諸法空と觀ずるを智度と相應すとならば、此觀云何が滅といふけんやと問ふ。答は下文に擧ぐ。

【二六】 色の生相滅相、若くは垢淨を見ずといふを釋す

無法を取る。是故に無法空を説く。若し無法を以て非と爲さば、還有法を取らんと欲す。是故に有法空を説く。先に四空を説いて、有法を破すと雖も、行者の心は、則ち有を離れて、無に存す。是に則ち無法空を説く、若し無法を非と爲すと説かんに、心に寄る所無く、還つて有を存せんと欲す。是故に略して有法空を説く。有を存するの心薄きを以ての故なり。無法有法空とは、行者は無法空を以て非と爲し、心に還つて有を疑ひ、若し心に有を觀じては、還りて無法を疑ふ。是故に有無俱に其空を觀ずること、内外の空觀の如し、是を以ての故に、但七空を説く。

問うて曰はく、「汝は一切法の空なるを知つて、諸觀を滅する、是を般若波羅蜜と相應すと名くと言へり。是の如く觀ずる、是を相應と名け、是の如く觀ぜざれば、則ち相應せず。是非を分別するが故に、即ち亦是觀あり。云何が滅と言ふ。答へて曰はく、「是を以ての故に。」

佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は七空を習應する時、色の、若し相應し、若し相應せざるを見ず。受想行識の若し相應し、若し相應せざるを見ず。色の、若し生ずる相、若し滅する相を見ず。受想行識の、若し生ずる相、若し滅する相を見ず。色の、若し垢なる相、若し淨なる相を見ず。受想行識の若し垢なる相、若し淨なる相を見ず。

釋して曰はく、「色の、若し生ずる相、若し滅する相を見ずとは、五衆に生有り滅有るを見ざるなり。若し五衆に生滅の相有れば、即ち斷滅の中に墮す。斷滅に墮するが故に、

則ち罪無く福無し、罪無く福無きが故に、禽獸と異なる無し。色の、若は垢、若は淨を見ずとは、五衆に縛有り、解有るを見ず。若し五衆は、是れ縛性ならば、解脫を得る者有る無けん。若し五衆は是れ淨性ならば、則ち學道の法有る無けん。

色と受と合するを見ず、受と想と合するを見ず、想と行と合するを見ず、行と識と合するを見ず。何を以ての故に。法と法と合する者有る無く、其性は空なるが故なり。

【二七】五衆は共に合せずといふを釋す。

釋して曰はく、「心心數法は無形なり。無形なるが故に、則ち住處無し。是を以ての故に色と受と合せず。四大及び四大所造の色の如きは、二觸和合す、心心數法の中には、觸法無きが故に、和合するを得ず。問うて曰はく、「若し爾らば何を以てか、受想行識は共に和合せず」と識く。答へて曰はく、「佛は此中に自ら説きたまはく、「法と法と合する者有る無し。何を以ての故に。一切法の性は常に空なるが故に。若し法と法と合する無くんば、亦離ること有る無し」と。復次に、佛は自ら因縁を説きたまへり。

舍利弗、色空の中に色有る無く、受想行識空の中に識有る無し。

【二八】色空の中に色あることなしといふを釋す。

釋して曰はく、「何を以ての故に。色と空と相違すればなり。若し空來れば、則ち色を滅す。云何が色空の中に色有らん。譬へば水中に火無く、火中に水無きが如し。性相違するが故なり。復次に、有人言はく、「色は實に空にあらず、行者は空三昧の中に入りて、色を見て空と爲す。是を以ての故に色空の中には、都て色有る無しと言ふ」と。受想行識も亦是の如し。」

【一九】五衆空の中に五衆なき因縁を明す。

【二〇】五衆空の中に五衆なき因縁を重ねて明す。

舍利弗、色空なるが故に憍壞の相無く、受空なるが故に受相無く、想空なるが故に知相無く、行空なるが故に作相無く、識空なるが故に覺相無し。

問うて曰はく、「此義に何の次第か有る。」答へて曰はく、「先に五衆の空の中には、五衆無きを説けり。今是中には、其因縁を説く。五衆の各々の自相は、不可得なるが故なり。故に五衆の空の中には、五衆無しと言ふ。」

何を以ての故に、舍利弗、色は空に異なるに非ず、空は色に異なるに非ず。色は即ち是れ空、空は即ち是れ色、受想行識も亦是の如くなればなり。

釋して曰はく、「佛重ねて因縁を説きたまふ。若し五衆と空と異ならば、空の中に應に五衆有るべし。今五衆は空に異ならず、空は五衆に異ならず、五衆は即ち是れ空、空は即ち是れ五衆なり。是を以ての故に空は五衆を破せず、所以は何ん。是中に佛は自ら因縁を説きたまへばなり。」

舍利弗、是諸法は、空相にして、不生、不滅、不垢、不淨、不増、不減なり。是空法は、過去に非ず、未來に非ず、現在に非ず、是故に、空の中には色も無く、受想行識も無く、眼耳鼻舌身意も無く、色聲香味觸法も無く、眼界も無く、乃至意識界も無く、無明も無く、亦無明の盡くることも無く、乃至老死も無く、亦老死の盡くることも無く、苦集滅道も無く、亦智も無く、亦得も無く、須陀洹も無く、須陀洹果も無く、斯陀含も無く、斯陀含果も無く、阿那含も無く、阿那含果も無く、阿羅漢も無く、阿羅漢果も無く、辟支佛

【二】佛が更に五衆等の空なるを説きし所以を明す。

も無く、辟支佛道も無く、佛も無く、亦佛道も無し。舍利弗、菩薩摩訶薩の是の如く相應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

論 問うて曰はく、「人皆空の中には、所有無く、不生、不滅、不垢、不淨、不増、不減にして、一切の法無きを知る。佛何を以てか分別して、五衆等の諸法、各各空なりと説きたまへる。」答へて曰はく、「有人復空を習ふと雖も、而も想空の中には、麁諸法有り。慈を行

ずる人は、衆生無しと雖も、而も衆生の樂を得んと想ふが如し。自ら無量の福を得るが故なり。是を以ての故に佛説きたまはく、「諸法の性は常に自ら空なり。空三昧の故に、法をして空ならしむること、水は冷相、火は其をして熱からしむるが如くに非ず。若し空三昧

を以ての故に、法をして空ならしむと言はば、是事は然らず」と。智とは、是れ無漏の八智、得とは初めて聖道須陀洹果を得るより乃ち佛道に至るなり。是義は先に已に廣く説けり。」

【經】舍利弗、是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、般若波羅蜜と、若し相應し、若し相應せざるを見ず。檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜と、若し相應し、若し相應せざるを見ず。亦色と、若し相應し、若し相應せざるを見ず。受想行識と、若し相應し、若し相應せざるを見ず。眼乃至意、色乃至法、眼色識界乃至意法色界を、若

は相應し、若し相應せざるを見ず。四念處乃至八聖道分、佛の十力乃至一切種智と、若し相應し、若し相應せざるを見ず。是の如く、舍利弗、當に菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と相應

【無漏の八智】 欲界及び上二界の四諦を觀する眞智なり。欲界の四諦を觀するを四法智と觀するを四類智といふ。即ち八諦を觀じて正しく煩惱を斷ずる無間道の位を忍といひ、既に煩惱を斷じて了りし解脱道の位を智といふ。總じて八忍八智あり、これ無漏智の初なり。

相應し、若し相應せざるを見ず。是の如く、舍利弗、當に菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と相應

相應し、若し相應せざるを見ず。是の如く、舍利弗、當に菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と相應

【三】 智度の相は畢竟淨なるが故に般若を行じて般若と相應し、不相應を見ざるを明す。

するを知るべし。

釋して曰はく、『菩薩は諸法實相を得、般若波羅蜜に入り、即ち般若波羅蜜に於て、定相と、若し相應し、若し相應せざるを見ず。何に況んや餘法有るを見んや。云何が般若と相應すると、相應せざるを見ざる。是の如く行じて、般若波羅蜜に應ぜんと爲すを見ず。是の如く行ぜずして、般若波羅蜜に應ぜざるを爲すを見ず。常、樂、我が行の如きは、般若波羅蜜に應ぜず、無常、苦、無我の行は、般若波羅蜜に應ずと爲す。若し實を行すれば、般若波羅蜜に應ぜず、若し空を行すれば、般若波羅蜜に應ずと爲す。有無行の如きは、般若波羅蜜に應ぜずと爲し、非有非無行の如きは、般若波羅蜜に應ずと爲さば、般若波羅蜜の中には、皆是事無し。般若波羅蜜の相は、畢竟清淨なるが故に。五波羅蜜、五衆乃至一切種智も亦是の如し。問うて曰はく、『般若波羅蜜の畢竟清淨なるは應に爾るべし、五波羅蜜及び餘法は云何が清淨なる。』答へて曰はく、『先に五事を説けり。般若波羅蜜を離るるを、波羅蜜と名けず、般若波羅蜜と和合するが故に、波羅蜜と名く。般若波羅蜜は初品の中に説くが如し。云何が檀波羅蜜は、施者を見ず、受者を見ず、財物無きが故にと名くるや。五衆の法は是れ菩薩の觀處なり。般若波羅蜜と和合するが故に、畢竟清淨なるが故に、相應と不相應とを見ず。十二入、十八界、十二因縁も亦是の如し。是諸法は定性有る無く、定法有る無し。是を以ての故に若し相應し、若し相應せざるを見ず。十八空、四念處乃至大慈大悲、一切種智の、若し相應し、若し相應せざるを見ず。』

【三】此菩薩に三十七品乃至四無畏等あるに就いて明す。

問うて曰はく、「是菩薩は聲聞、辟支佛に非ず、云何が三十七品有る。未だ佛道を得ず、云何が十力、四無所畏有る。」答へて曰はく、「是菩薩は聲聞、辟支佛に非ずと雖も、亦聲聞辟支佛の法を觀じ、聲聞辟支佛の道を以て、衆生を度せんと欲するが故なり。復、有人言はく、「聲聞辟支佛の道を行じて、但證を取らず」と。後品の中に説くが如し。空、無相、無作三昧に入れる菩薩は、是三解脱門に住して、是念を作して言はく、「今は是れ觀の時にして、是れ證の時に非ず」と。或は新發意の菩薩有り、聲聞辟支佛に三十七品の法有るを聞き、讀誦し正憶念し分別す。是を以ての故に菩薩に三十七品有りと説く。佛の十力等も亦是の如し。菩薩は自ら菩薩の十力、四無所畏、十八不共法の中に於て住す。是法の中に住して、若は聞き、若は憶想して分別すらく、「佛の十力、四無所畏、十八不共法等は、甚深微妙なるも、亦是れ我分なり」と。復次に、是菩薩は、無量阿僧祇劫より來、佛の十力、四無所畏等を修習し、佛樹下に坐する時、無礙解脫を得るが故に、増益して清淨なり。譬へば勳勞既に立ちて、然る後に其功賞を受くるが如し。菩薩も亦是の如し、是功德有りて、乃ち其名を受く。是功德は、皆是れ般若波羅蜜の勢力の合なるが故に、若は相應し、若は相應せざるを見ず。此諸法の義は、六波羅蜜より乃ち一切智に至るまで、先に已に説けり。

【四】復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、空と空と合せず、無相と無相と合せず。無作と無作と合せず。何を以ての故に。空、無相、無作には、合と不合と有

【三四】三脫門共に合せずと習應するこれ智度と相應すといふを明す。

【三五】下智應と相應不相應を重説する所以を明す。

【見諦の結使】眞諦を證悟する上の煩惱の義。

る無ければなり。舍利弗、菩薩摩訶薩の是の如く習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

問うて曰はく、「一心の中に二空有る無し、云何が空と空と合せずと説く。」答へて曰はく、「空に二種有り、一には空三昧、二には法空なり。空三昧と法空とは合せず。何を以ての故に。若し空三昧力を以て法空と合せば、是法は自性空に非ざればなり。又空とは、性自ら空にして、因縁より生ぜず。若し因縁より生ぜば、則ち性空と名けず。行者にして、若し入る時空を見て、出づる時に空を見ざれば、當に知るべし、是れ虚妄なることを。復次に、佛自ら因縁を説きたまはく、「空の中には、合も無く、不合も無し。無相、無作も亦是の如し。舍利弗、是の如く習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く」と。」

問うて曰はく、「但一處に、般若波羅蜜と相應すると、相應せざるとを見ずと説かば便ち足る。何を以ての故に、復更に種種に、相應と不相應の因縁を説く。若し一處に應せば、餘は則ち皆應ぜん。若し一處に應せずんば、餘も亦應せざらん。譬へば一盲の見る無ければ、千百も俱に爾るが如し。」答へて曰はく、「然らず、若し戲論を以て、勝つを求めんと欲せば、應に是の如く難すべし。諸法の相は、説くべからずと雖も、佛は大慈大悲を以ての故に、種種に方便して説きたまへり。又佛の説法は、一種の衆生、度を得とするも、未だ悟らざる者の爲に、重ねて説きたまふ。又復一たび説きては、見諦の結使を斷するを爲し、二たび説きては、思惟の結使を斷するを爲し、復更に説きては、諸餘の結使を分分に皆斷

【思惟の結使】見論の上更に斷すべき煩惱。

【初住地】十住の中第一、發心住をいふ。

【十住地】一發心住、二治地位、三修行住、四生貴住、五方便具足住、六正心住、七不退住、八童真住、九法王子住、十灌頂住これなり。

【二六】智度を行ずるに於て五樂等の合不合の因縁を明す。

するを爲す。又一たび説けば、人行り、聲聞の道を得、一たび説けば、辟支佛道の因縁を種ふ、更に一たび説けば、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、更に一たび説けば、六波羅蜜を行じ、更に一たび説けば、方便を行じて無生忍を得、更に一たび説けば、初住地を得、更に一たび説けば、乃ち十住地に至る。更に一たび説くは人の爲の故にして、更に一たび説くは天の爲の故なり。復次に、是般若波羅蜜の相は、甚深にして、解し難く、知り難し。佛は、衆生の心根に、利鈍有るを知りたまひ、鈍根の者は少智なれば、其爲に重ねて説き若し利根の者には、一説二説したまふに便ち悟り、種種重ねて説くを用ひず。譬へば駛馬は一鞭を下せば便ち走り、驚馬は多鞭して、乃ち去るが如し。是の如き等の種種の因縁の故に、經の中に重説することは皆無し。

【二七】復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずるとき、諸法の自相空に入り、入り已りて色と合するを作さず、合せざるを作さず、受想行識と合するを作さず、合せざるを作さず、色と前際と合せず、何を以ての故に、前際を見ざるが故なり。色と後際と合せず。何を以ての故に、後際を見ざるが故なり。色と現在と合せず。何を以ての故に、現在を見ざるが故なり。受想行識も亦是の如し。

【二八】釋して曰はく、「先には空、無相、無作、無合、無不合を説き、今は更に因縁を説く。自相空に入るが故に、五樂は合と作さず、不合と作さず。若し一切法は自相空ならば、是の中に合と不合と有る無し。合とは、諸法は其相の如く、地の堅相、識の相知の如し。是の

如き等の自相は異法に在らず。是を名けて合と爲す。不合とは、自相は自法の中に在らず略して諸法の相を説けば、増さず、減らず、色と前際と合せず。何を以ての故に。前際は空にして所有無く、但名字のみ有ればなり。若し色、過去に入れば、則ち滅して所有無し、云何が前際と合せん。後際は未だ有らず、未だ生ぜず、色は後際と合すべからず。現在の色は、生滅して住せざるが故に、相を取るべからず、色は現在と合すべからず。復次に、佛、自ら因縁を説きたまはく、「色は前際と合せず、合せざるに非ず。何を以ての故に、前際は見るべからざるが故なり。色は後際と合せず、合せざるに非ず。何を以ての故に、後際は見るべからざるが故なり。色は現在と合せず、合せざるに非ず。何を以ての故に、現在を見るべからざるが故なり。受想行識も亦是の如し。」

【經】復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じて、前際と後際と合せず、後際と前際と合せず、現在と前際、後際と合せず、前際、後際も亦現在と合せず、三世の名は空なるが故なり。舍利弗、菩薩摩訶薩是の如く相應する者、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

【釋】問うて曰はく、「云何が前際と後際と合する。答へて曰はく、「有人説く、「三世の諸法は皆是れ有なり。未來の法は轉じて現在と爲り、現在は轉じて過去と爲る。泥揣は現在にして、瓶を未來と爲し、土を過去と爲すが如し。若し瓶を成する時は、瓶を現在と爲し、泥揣を過去と爲し、瓶の破るるを未來と爲す。是の如きは是を合と爲す。若し三世の相有り」とせば是事は然らず、過多きを以ての故なり、是を不合と爲す。復次に、三世合すとは、

【釋】三世の不合を釋す。

過去の法は、過去、未來、現在世の與に因と作り、現在の法は、現在、未來世の與に因と作り、未來世の法は、未來世の與に因と作るが如し。又過去の心心數法は、三世の法を緣す、未來、現在の心心數法も亦是の如し。心心數法を斷ずれば、能く不斷の法を緣す。心心數法を斷せざれば、能く可斷の法を緣す。是の如き等、三世の諸法の因縁、果報の共に相和合する、是を名けて合と爲す。菩薩は是合を爲さず。何を以ての故に、先に説くが如く、過去は已に滅せり、云何が能く因と爲り、能く縁と爲らん。未來は未だ有らず、云何が因縁と爲らん。現在は乃ち一念の中に至るまで住せず、云何が因縁と爲らん。是を不合と名く、復次に、佛、自ら因縁を説きたまはく、「三世及び名字は、空なるが故に云何が合と言はん。」

大智度論釋習相應品第三之餘

卷第三十七

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

【一】三世薩婆若と合せずといふを釋す。

復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずるに、薩婆若は過去世と合せず、何を以ての故に、過去世は見るべからざればなり。何に況んや薩婆若、過去世と合せんをや。

薩婆若は未來世と合せず、何を以ての故に、未來世は見るべからざればなり。何に況んや薩婆若、未來世と合せんをや。

薩婆若と、未來世と合せんや。薩婆若は現在世と合せず、何を以ての故に、現在世は見るべからざればなり。何に況んや薩婆若と、現在世と合せんをや。

舍利弗、菩薩摩訶薩の、是の如く習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

釋して曰はく、「菩薩は、般若波羅蜜を行ずるに、薩婆若と過去世と同じと觀せず、何を以ての故に、過去世は是れ虛妄、薩婆若は是れ實法、過去世は是れ生滅の相、薩婆若は生滅の相に非ざればなり。過去世及び法は、求覓するに不可得なり。何に況んや薩婆若と過去世と合せんをや。復次に、佛、自ら因縁を説きたまはく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずるに、過去世を見ず、何に況んや薩婆若と過去世と合せんをや。未來、現在世も亦是の如し」と。未來世は生滅の相を除きて、其餘の義は同じ。復次に、時を以ての故に

亦是の如し」と。未來世は生滅の相を除きて、其餘の義は同じ。復次に、時を以ての故に

三世有りと言く。過去、未來、現在なり。時の義は一時の中に説くが如し。復次に、薩婆若は、是れ十方三世諸佛の眞實の智慧なり。三世は凡夫の虛妄より生ず、云何が薩婆若と合せん。譬へば眞金と弊銅と同相ならざるが如し。問うて曰はく、「隨喜品の中に説くが如くんば、菩薩摩訶薩は、過去現在の諸佛の、薩婆若の智慧等の、諸の功德を念じて、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す」と。云何が過去現在は、薩婆若と合せずと言ふ。答へて曰はく、「若し著心を以て、相を取り、薩婆若を念せば、阿耨多羅三藐三菩提に廻向すと名けず。譬へば雜毒を食するに、初は香美なりと雖も、後には身に便ならざるが如し。若し菩薩、過去現在諸佛の薩婆若を分別せば、應に三世と合すべし。今は相を取らざるが故に、則ち合する有る無し。問うて曰はく、「菩薩は亦念ずらく、「未來世に當に成佛すべし」と。薩婆若も亦自ら念ずらく、「我當に薩婆若を得べし」と。是を未來世と薩婆若と合すと名く。云何が合せずと言ふ。答へて曰はく、「薩婆若は三界を過ぎ、三世を出て、畢竟清淨の相なり。行者は但憶想分別を以て、「我當に是薩婆若を得べし」と。世間の法の如きは、憶想するに當に所得有るべし。而も此事は未だ生ぜず、未だ有ならず、時節未だ至らず、因縁未だ會せざれば、都て處所無し、云何が當に合すべき。明けて當に蘇を服すべきに、今已に鼻を憶するが如し。又、迦梅延の弟子の輩、未來世の中の菩提を言ふが如し。菩薩に語りて、「若し能く相好の身を修せば、我當に來りて之に處すべし」と言ふは、貴家の女の自恣無難にして、使を遣して貧家の子に語らしめて、「汝、好き莊嚴、房舍、幃帳、種種を備具

【二】五衆、十二入と薩婆若と合せずといふを明す。

せよ、我當に來りて汝が家中に處るべし」と言はんが如し。「是の如きの説は是れ不如法なり。是を以ての故に、薩婆若と三世と合するを得ず。問うて曰はく、「餘法は甚だ多し、何を以てか但薩婆若のみを説く。」答へて曰はく、「是薩婆若は、菩薩の歸趣する所、深心に得んと欲して、三世の中に於て求索するが故なり。」問うて曰はく、「何を以てか有爲、無爲法の中に於て求めざる。」答へて曰はく、「後に當に一切法の中に求むるを説くべし。」

【釋】復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、色と薩婆若と合せず、色は見るべからざるが故に。受想行識も亦是の如し。眼と薩婆若と合せず、眼は見るべからざるが故に。耳鼻舌身意も亦是の如し。色と薩婆若と合せず、色は見るべからざるが故に。香味觸法も亦是の如し。舍利弗、菩薩摩訶薩の是の如く習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

【釋】問うて曰はく、「何を以てか但五衆、十二入を説きて、十八界、十二因縁を説かざる。」答へて曰はく、「應當に説くべし、或時は讀者忘失す。何を以てか之を知る。佛の所説の五衆、十二入、十八界、十二因縁は、事なり、垢なり、淨なり。五衆、十八界、十二入、十二因縁を名けて事と爲す。定んで是れ垢ならず、定んで是れ淨ならず。是中に或は結使有りて生じ、或は善法有りて生じ、田の定んで能く物を生じ、種に隨うて皆生するが如し。衆、界、入、十二因縁、是を事と爲し、六波羅蜜乃至一切種智、是を淨種と爲す。垢を説かざる所以は、是菩薩、結使已に薄く自ら憍まざるを以て、是故に説かざるなり。又菩薩

は智慧深く入りて、諸法の空を解し、諸の煩惱無く、但諸の功德を集む、是を以ての故に應に十八界、十二因縁を説くべし。色等の事の中の如きは、薩婆若と合する有るべからず、所以は何ん。是薩婆若は、三世の中に得べからざるが故なり。色等の事の中にも亦不可得なり。是れ皆世間の因縁和合にして定性有る無し。』

復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行するに、檀波羅蜜と薩婆若と合せず、檀波羅蜜は見るべからざるが故なり。乃至般若波羅蜜も亦是の如し。四念處は薩婆若と合せず、四念處は見るべからざるが故なり。乃至八聖道分も亦是の如し。

【三】六度三十七品と薩婆若と合せずといふに就いて問す。

問うて曰はく、『五業等は是れ世間の法にして薩婆若と合せざるべし、六波羅蜜は云何が合せざる。』答へて曰はく、『六波羅蜜に二種有り、一には世間、二には出世間なり。世間の檀波羅蜜の爲の故に、合せずと説く。出世間の檀波羅蜜は應に合すべし。復次に、菩薩は六波羅蜜を行じ、漏結未だ盡さず、佛の薩婆若と合するを得ず。復次に、佛説きたまはく、『六波羅蜜の空すら尙見るべからず、何に況んや薩婆若と合せんや。三十七品も亦是の如し』と。』問うて曰はく、『摩訶衍品の中に、三十七品あり、亦是れ菩薩道なり、云何が薩婆若と合せざる。』答へて曰はく、『菩薩有り、心に著するを以ての故に、三十七品を行じて多く涅槃に廻向す、是を以ての故に佛は合せずと説きたまふ。』

佛の十力、乃至十八不共法は、薩婆若と合せず。佛の十力、乃至十八不共法は、見るべからざるが故なり。舍利弗、菩薩摩訶薩の是の如く習應する、是を般若波羅蜜と相應す

【四】佛の十力乃至十八不共法と陸婆若と合せずといふを明す。

と名く。

釋して曰はく、「是十力乃至十八不共法は是れ妙法なりと雖も、薩婆若の爲の故に行す。菩薩は漏結未だ盡さざるを以ての故に、應に薩婆若と合すべからず。復次に、佛の十力等の法に三種有り、一には菩薩の所行は、未だ佛道を得ずと雖も、漸漸に修習す。二には佛の得たまふ所を、而も菩薩は憶想分別して之を求む。三には佛心の得る所の、上の二種は合すべからず、下の一種は合すべしと雖も、而も菩薩は未だ得ず、是故に合せず。復次に空なるが故に、見るべからず、見るべからざるが故に合せず。是を以て皆言はく、「見るべからざるが故に」と。」

復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行するに、佛と薩婆若と合せず、薩婆若と佛と合せず、菩提と薩婆若と合せず、薩婆若と菩提と合せず。

復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行するに、色の有を習はず、色の無を習はず、受想行識も亦是の如し。色の有情を習はず、色の無常を習はず、受想行識も亦是の如し。色の苦を習はず、色の樂を習はず、受想行識も亦是の如し。色の我を習はず、色の非我を習はず、受想行識も亦是の如し。色の寂滅を習はず、色の非寂滅を習はず、受想行識も亦是の如し。色を空と習はず、空を非空と習はず、受想行識も亦是の如し。色を有相と習はず、色を無相と習はず、受想行識も亦是の如し。色を有作と習はず、色を無作と習はず、受想行識も亦是の如し。是菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、是念を作さず。我般若

【五】佛菩提と薩婆若は合せずといふを明す。

波羅蜜を行す、般若波羅蜜を行ぜず、般若波羅蜜を行するに非ず、行せざるに非ず」と。
舍利弗、菩薩摩訶薩の是の如く習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

問うて曰はく、「菩薩及び菩薩の法は、薩婆若と合せざるべきも、云何が佛及び菩提も亦合せざる。」答へて曰はく、「佛は是れ人、薩婆若は是れ法なり。人は是れ假名、法は是れ

因縁なり。衆生乃至知者見者は無なるが故に、佛も亦無なり。衆生の中にて尊上第一なる是を名けて佛と爲す。是故に合せざるなり。復次に、薩婆若を得るが故に、名けて佛と爲す。若し佛、薩婆若を得ば、先には以て是佛は薩婆若を須ひず、若し佛、薩婆若を得るに非ずんば、何を以てか佛は薩婆若を得と言はん。是を以ての故に和合の因縁より生ず、先後を言ふを得ず。復次に、佛を離れて薩婆若無く、薩婆若を離れて佛無し、薩婆若を得るが故に佛と名け、佛の所有なるが故に薩婆若と名く。問うて曰はく、「佛は是れ人なるが故に合せざるべきも、菩提は是れ無上道なり、云何が合せざる。」答へて曰はく、「菩提を名けて佛の智慧と爲し、薩婆若を名けて佛の一切智慧と爲す。十力智を菩提と爲し、第十一の如實智を名けて薩婆若と爲す。二智は一心の中に生ずるを得ず。復次に、是十力等の諸佛の法、及び佛の菩提は、皆是れ菩薩の憶想分別にして實に非ず、唯、佛の所得の薩婆若のみ是れ實なり。今此菩提は、是れ菩薩の菩提なり。是心中は、虚妄にして未だ實ならず、云何が薩婆若と合せん。復次に此經の中に、佛自ら不合の因縁を説きたまへり。

何を以ての故に、佛は即ち是れ薩婆若、薩婆若は即ち是れ佛、菩提は即ち是れ薩婆若、

【十智】一三世智
二佛法智、三法界無礙智、四法界無礙智、五充滿一切世界智、六普照一切世界智、七住持一切衆生智、八知一切法智、九知一切諸佛智、十知無

【六】五衆を觀するに有に非ず、無に非ずといふを釋す。

【四見】一異、當非常等の義に就て總て四句あり、一切の妄計必ず其に墮するを四見といふ。復本論七、華嚴經疏三等に同種の見を明す。

婆娑否は即ち是れ菩提なればなり。舍利弗、菩薩摩訶薩の是の如く習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

釋して曰はく、一若し菩薩、五衆を觀するに、有に非ず、無に非ず。是に於ても亦青せずんば、爾時、般若波羅蜜と相應す。所以は何ん。一切の世間は、二見の、若は有、若は無に著すればなり。生死の流に順する者は、多く有に著し、生死の流に逆み者は、多く無に著す。我見多き者は、有に著し、邪見多き者は、無に著す。復次に四見多き者は有に著し、邪見多き者は無に著す。三毒多き者は有に著し、無明多き者は無に著して、五衆の因縁集りて、有に著するを生ずるを知らず。集を知らざる者は無に著し、惡知識及び邪見、外書に近づくが故に斷滅無罪福の中に墮す。無の見の者は無に著し、餘は有に著す。或は衆生有り、謂はく、「一切皆空なり」と。心是空に著す、是空に著するが故に、名けて無の見と爲す。或は衆生有り、謂はく、「一切の六根もて知らるる法は皆有なり」と。是を有の見と爲す。愛多き者は、有の見に著し、見多き者は無の見に著す。是の如き等の衆生は有見、無見に著す。是二種の見は、虛妄にして實に非ず、中道を破す。譬へば人の狭道を行くに、一邊は深水、一邊は大火にして、二邊俱に死するが如し。有に著し、無に著するの二事は、俱に失あり。所以は何ん。若し諸法は實に定んで有ならば、因縁無し、若し因縁に從つて和合して生ぜば、是法は自性無し。若し自性無ければ、即ち是れ空なり。若し法無くんば、是れ實に則ち罪福無く縛無く解無く、亦諸法の種種の異無し。復次に有の見の

【七】五衆の常無常を習はずといふを釋す

者は、無の見の者と相違し、相違するが故に、是非有り。是非の故に共に諍ひ、諍有るが故に、諸の結使を起し、結使の故に、業を生じ、業を生ずるが故に、惡道の門を開く。實相の中には相違、是非鬪諍有ること無し。復次に有に著する者は、事若し無常なれば、則ち憂惱を生ず。若し無に著する者は、諸の罪業を作し、死して地獄に墮して苦を受く。有無に著せざる者は、是の如き等の種種の過失有る無し。應に捨すれば、是れ則ち實を得べし。

復次に是五衆は、若は常なり、若は無常なりとは、是事は然らず。所以は何ん。若し五衆にして常ならば、則ち生無く滅無し、生無く滅無きが故に、則ち罪福無く、罪福無きが故に、則ち善惡の果報無ければなり。世間は涅槃の如く、不壞の相なりとは、是の如き妄語を、誰か當に信すべき者有らん。現に死亡を見て啼哭す、是れ則ち衆生の無常なり、草木の凋落し、華果の磨滅するが如きは、是れ則ち外物の無常なり、大劫盡くる時は、一切都て滅す。是を大の無常と爲す。是の如き等の種種の因縁有り、是の如く五衆は常に不可得なり。復次に無常は常を破す、無常を以て、是と爲すべからず。所以は何ん。若し諸法は、無常の相にして、念念に皆滅せば、則ち六情は六塵を取る能はざればなり。所以は何ん。内心、外塵は俱に住する無きが故に、縁するを得べからず、知るを得べからざればなり。亦修習の因縁無し。果報の因縁多きが故に、果報も亦多しと、此事得べからず。又常見と無常見と有るを以て共に諍ふ。是の如き等の種種の因縁あり。五衆は無常ならば則

【八】五衆の寂滅を習はずといふを釋す。

ち苦樂、我非我、若は空、若は實、有相と無相、有作と無作を得べからず。此義は先に處處に説くが如し。

五衆の寂滅とは、因縁生なるが故に無性なり、無性なるが故に寂滅、寂滅なるが故に涅槃の如し。三毒熾然なるが故に寂滅ならず。無常の火然ゆるが故に寂滅ならず。三毒の實相に著せざるが故に寂滅ならず。三毒は、各各分別の相なるが故に寂滅ならず。此義は先に未だ説かざるが故に、今是中に説かん。若し菩薩摩訶薩は能く是の如きの二邊を離れて中道を行じ、般若波羅蜜を行するも亦著せず。所以は何ん。菩薩不可得なれば、般若波羅蜜も亦不可得なればなり。般若波羅蜜を行ぜざるにも亦著せず。所以は何ん。餘の諸の凡夫は、菩薩の如く諸法の實相を觀する能はず、云何が當に「我は般若波羅蜜を行ぜず」と言はん。行すると行せざるとにも亦著せず。二は俱に過あるが故なり。是を般若波羅蜜と相應するの相と名く。

復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の爲の故に般若波羅蜜を行せず。檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、屬提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜の爲の故に般若波羅蜜を行せず。阿耨跋致地の爲の故に般若波羅蜜を行せず。衆生を成就するが爲の故に般若波羅蜜を行せず。佛世界を淨むるが爲の故に般若波羅蜜を行せず。佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法の爲の故に、般若波羅蜜を行せず。内空の爲の故に般若波羅蜜を行せず。外空、内外空、空空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、散空、性空、諸法空、自

【九】六度乃至如法性實際の爲に智度を行せざること

相空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空の爲の故に、般若波羅蜜を行ぜず。如、法性、實際の爲の故に、般若波羅蜜を行ぜず。何を以ての故に。是菩薩は、般若波羅蜜を行ずる時諸法の相を壊せざればなり。是の如く習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

問うて曰はく、「六波羅蜜乃至如、法性、實際、此は是れ佛法なり。菩薩、若し是佛法の爲の故に、般若波羅蜜を行ぜずんば、更に何の法有りてか爲に般若波羅蜜を行すべき。」答へて曰はく、「佛、此中に自ら説きたまふが如くんば、諸法は破壊する者有る無し、諸法の相を壊せざるが故に、亦是は檀、是は繫乃至は三界、是は實際と分別せざるなり。復次に、菩薩有り、此善法に於て深心に繫著す。繫者を以ての故に、能く罪を生ず、是人の爲の故に、是六波羅蜜乃至實際は皆空にして、自性有る無く、夢の如く幻の如し。汝、著を生ずる莫れ。眞の菩薩は、是が爲の故に行ぜずと説く。菩薩有り、心に著する所無く、六波羅蜜乃至實際を行す。是人の爲の故に、是事の爲の故に、般若波羅蜜を行するを説く。すなはち後品の中に説くが如し。六波羅蜜を具せんが爲に、乃至衆生を教化し、佛世界を淨めんが爲の故に、般若波羅蜜を行するを説く。

復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行するに、如意識神通の爲の故に、般若波羅蜜を行せず、天眼の爲の故にせず、他心智の爲の故にせず、宿命智の爲の故にせず、天眼の爲の故にせず、漏盡神通の爲の故に般若波羅蜜を行せず。何を以ての故に。菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行するすら、尙般若波羅蜜を見ず、何に況んや菩薩の神通を見んや。舍

【一〇】五神通の爲に智度を行ぜざるを釋す。

利弗、菩薩摩訶薩の是の如く行ずる、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

問うて曰はく、「先に禪波羅蜜を説く中に、已に具に五神通を説けり。今何を以てか復重ねて説く。」答へて曰はく、「彼中には、總相を説いて名字を列ねず、此中には別相を説けり。復次に功德果報は謂ゆる五神通なり。菩薩は是五神通を得て廣く能く衆生を利益す。復次に慈悲、般若波羅蜜行りと雖も、五神通無ければ、鳥の兩翼なくんば、高く翔る能はざるが如く、健人の諸の器仗無くして、敵陣に入るが如く、樹の華果なくんば、饑益する所無きが如く、枯渠の水無くんば潤及する所無きが如し。是を以ての故に重ねて、五神通を説き、及び餘の無量を、佛法の中に別説するも咎無し。問うて曰はく、「若し爾らば、佛何を以てか五神通の爲の故に、般若波羅蜜を行ずる莫れと言へる。」答へて曰はく、「有無の方便多し。菩薩は五神通を得て、餘の菩薩を輕んじ、心に擡高を生ず。是が爲の故に説く。」所以は何ん。菩薩は般若波羅蜜、諸佛の母に於てすら、尙著せず、何に況んや五神通をや。

【一〇】復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じて、是念を作さず。「我は如意神通を以て飛んで東方に到り、如恆河沙等の諸佛を供養し恭敬せん。南西北方、四維上下も、亦是の如し」と。復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、是念を作さず。「我は天耳を以て、十方諸佛の説きたまふ所の法を聞かん」と。是念を作さず。「我は他心智を以て、當に十方衆生の心に念する所を知るべし」と。是念を作さず。「我は宿命通を以て、

【二】下五神通の功用をえんが爲の故に智度を行ぜざることゝを釋す。

十方衆生の宿命に作す所を知らん」と。是念を作さず、「我は天眼を以て、十方衆生の此に死し彼に生ずるを見ん」と。舍利弗、菩薩摩訶薩の是の如く行する、是を般若波羅蜜と相應し、亦能く無量阿僧祇の衆生を度すと名く。

釋して曰はく、「先には五神通の名を説くと雖も、今此中には其功用を説く。問うて曰はく、「菩薩何を以ての故に、是念を作さざる。我は如意神通を以て、飛んで十方に到り、如恆河沙等の諸佛を供養し恭敬せん」と。答へて曰はく、「已に我見の根本を抜けるが故に、橋慢の山を摧破するが故に、善く三解脱門、三昧を修するが故に、佛身は妙なりと雖も、亦三解脱門に入る。熱金丸は、色は妙に見ゆと雖も、手に觸るべからざるが如く、又諸法は、幻の如く化の如く、來無く去無く、近無く、遠無く、定相有る無し。幻化の人の如く、誰か來り、誰か去らん。神通、國土、此彼、近遠の相を取らざるが故に答無し。若し能く佛前に在りて禪定に住し、變じて無量の身と爲り、十方に至りて、諸佛を供養するに、分別する所無し。已に法愛を斷するが故なり。餘通も亦是の如し。菩薩は是五神通を得、諸佛を供養せんが爲の故に、無量の身に變じ、大神力を顯し、十方世界の三惡趣の中に於て、無量の衆生を度すること、往生品の中に説くが如し。

舍利弗、菩薩摩訶薩の能く是の如く般若波羅蜜を行するに、惡魔も其便を得る能はず、世間の衆事の欲する所は意に隨ふ。十方の各如恆河沙等の諸佛は、皆悉く、是菩薩を擁護して、聲聞辟支佛地に墮せざらしめ、四天王天乃至阿迦尼吒天も、皆亦是菩薩を擁護

【二】 如上に智度
を行じて得る功德
に就いて釋す。

して、礙有らしめず。是菩薩は有ゆる重罪を現世に輕受す。何を以ての故に。是菩薩摩訶
薩は、普く慈を用て、衆生に加ふるが故なり。舍利弗、是菩薩摩訶薩の是の如く行する、
是を般若波羅蜜と相應すと名く。

釋して曰はく、『今は是菩薩の、上の如く般若波羅蜜を行じて、大功德を得るを讀す。
是菩薩の智慧功力の果報は、此五利を得と名く。問うて曰はく、『魔は是れ欲界の主にして、
菩薩は是れ人、肉眼にして自在を得ず、云何が其便を得る能はざる。』答へて曰はく、『此中
に佛自ら説きたまひしが如く、諸佛、諸大天の擁護するが故に。復次に、是菩薩、畢竟
不可得自相空を行するが故に、一切法の中に於て皆著せず。著せざるが故に、違錯無し。
違錯無きが故に、魔も其便を得る能はず。譬へば人身に瘡あらざれば、毒屑の中に臥すと
雖も、毒も亦入らざれども、若し小瘡有れば則ち死すること疑無きが如し。又是菩薩は、
諸佛の中に於て心著せず、諸魔の中に於て心瞋らず、是故に魔も便を得ざるなり。』復次に
に、菩薩は、深く忍波羅蜜、慈三昧に入るが故に、一切の外惡も中傷する能はず。謂ゆる
水火刀兵等の世間の衆事は、資生の須ふる所なり。謂ゆる治生の諸偶なり。種を蒔き果を
樹る、曠路に井を作り、客舎を安立し、事を理むるに、皆意の如くなるを得。若し塔寺を
造立して、大福德を作さんと欲し、若は大施を作し、若は法を説いて衆生を救度せんと欲
するに、皆意の如くなるを得、是の如き等の世間の衆事の、若は大なる、若は小なる、皆
法の如くにして意に隨ふを得。所以は何ん。是菩薩は、世世に無量の福德智慧の因縁を集

むるが故に。復次に、是菩薩は般若波羅蜜を行じ、一切法の中に於て心著せず、心著せざるが故に結使薄く、結使薄きが故に能く深厚の善根を生じ、深厚の善根を生ずるが故に所願意の如し。復次に、是菩薩、般若波羅蜜を行ずるが故に、諸大天は皆是菩薩を敬念し、其名を讚歎稱揚す。諸の龍鬼等も、諸天の稱説を聞いて、亦來りて其事を助成す。是故に世間の衆事は、皆意の如くなるを得。復次に、菩薩、諸佛の爲に念せられ、威徳を加へられて、皆意の如くなるを得。

【三】 諸佛諸天のこの菩薩を擁護すといふを釋す。

問うて曰はく、『十方諸佛の心は等し、何を以てか偏に是菩薩を念ずる。』答へて曰はく、『是菩薩、智慧功德大なるが故に、諸佛の心は平等なりと雖も、法として應に是菩薩を念じ、以て餘人を勸進すべし。又是菩薩は佛の智慧の氣分を得るが故なり。善惡を別知し、好人を賞念するは佛に過ぎたるは無し。是故に佛は念じたまふ。復次に、佛念じて、聲聞、辟支佛に墮せしむるを欲したまはざるが故に。所以は何ん。空、無相、無作に入りて、佛を念ずるを以ての故に墮落せざればなり。譬へば魚子の母の念ずるが故に、則ち生ずるを得、念ぜざれば則ち壞するが如し。諸大天の擁護する者は、其所行を失せしむるを欲せず。諸天は佛念に效ふが故なり。又諸天は菩薩の般若波羅蜜を行じて、都て著する所無く、世樂を樂まず、但衆生を教化せんと欲するが故に、世間に住し、其尊貴を知るが故に、有ゆる重罪の者を念ず。先世の重罪は應に地獄に入るべきも、般若波羅蜜を行ずるを以ての故に、現世に輕く受く。譬へば重囚の死すべきに、勢力有る者護れば則ち鞭杖のみを受くる

【四】普く慈を用て衆生に加ふるが故にといふを釋す。

が如し。又王子の重罪を作すと雖も、輕罰を以て之を除くが如し、是れ王種の中に生ずるを以ての故なり。菩薩も亦是の如し、能く般若波羅蜜を行じて、實の智慧を得るが故に、即ち佛種の中に入りて生じ、佛種の中に生ずるが故に、重罪有りとは雖も、云何が重く受けん。復次に、譬へば鐵器の中空なるが故に、水に在りて能く浮び、中實なれば則ち没するが如し。菩薩も亦是の如し、般若波羅蜜を行じて、智慧の心虚なるが故に、重罪に没せず。凡人は智慧無きが故に、重罪に没す。復次に、佛は此中に自ら因縁を説きたまへり。五功德を得る所以の者は、普く慈を用て衆生に加ふるが故なり」と。』

問うて曰はく、「先には般若波羅蜜を行ずるが故に、五功德を具すと云へり。今何を以てか、普く慈を用て衆生に加ふるが故にと言ふ、答へて曰はく、「能く無量の福を生ずるは、慈より過ぎたるは無し。是慈は般若波羅蜜に因りて生じて無量の利益を得。復次に、惡障も便を得ず、諸佛に念ぜられて、重罪を今世に輕く受くるは、是れ般若波羅蜜の力なり。世間の衆事の欲する所、意に隨ひ、諸天の擁護する、是れ大慈の力なり。復次に二種の縁あり、一には衆生、二には法なり。是菩薩若し衆生を縁するは、則ち是れ慈心にして、若し法を縁するには、則ち是れ般若波羅蜜を行す。是慈は般若波羅蜜より生じ、般若波羅蜜に隨順す。是故に慈を説くも皆無し。」

【經】復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行する時、疾かに諸の陀羅尼門、諸の三昧門を得、所生の處に在つて常に諸佛に值ひ、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで

【三昧】 諸の陀羅尼三昧を疾に得といふを釋す。

終に佛を見るを離れず。舍利弗、菩薩摩訶薩の是の如く習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

釋して曰はく、「陀羅尼、三昧門は先に説くが如し。疾かに得とは、福徳の因縁の故に、

心柔軟に、深般若波羅蜜を行するが故に、智慧の心利なり。是を以ての故に疾かに得。上説の如く、五功德の故に疾かに得。所生の處に、常に諸佛に値ふとは、是菩薩は諸佛の母

なる般若波羅蜜を除いて、其餘の一切の衆事に皆愛著せず、是を以て所生の處に在りて、常に諸佛に値ふ。人常に鬪諍を喜めば還活ながら地獄に生じ、復び刀杖を執りて、共に相

害を加へ、姪欲多きが故に、常に胞胎を受け、又姪鳥と作り、瞋恚多きが故に、還りて毒獸、蛇虺の屬に生ずるが如く、愚癡多き者は、燈蛾の火に赴き、地中に蟲の隠るる等の如

し。是諸の菩薩は、佛及び實相般若波羅蜜を愛敬し、及び念佛三昧の業を修するが故に、所生の處に、常に諸佛に値ふなり。復次に、先に、菩薩の諸佛を見んと願ふ中に説くが如

し。終に佛を見るを離れずとは、又人は一世に佛を見んと雖も、更に復値はず。毘婆尸佛の時、王師婆羅門の如きは、佛及び僧を見るを得と雖も、而も惡口毀訾して言はく、「此人

等は畜生の如し。好人を別たす、我を見て起たす」と。是罪を以ての故に、九十一劫を経て畜生の中に墮せり。復次に、深く佛を念するが故に終に佛を離れず、世世善く念佛三昧

を修するが故に、菩薩の心を失せざるが故に、佛を離れざるの願を作し、生じて佛世に在らんと願ふが故に、佛に値ふの業縁を種え、常に相續して斷せざるが故に、乃ち阿耨多羅

【二六】般若波羅蜜と相應すといふに就いて明す。

【二七】法と法との合不合、等不等といふを釋す。

三藐三菩提に至るまで、終に佛を見るを離れざるなり。

問うて曰はく、「此は是れ果報の事なり、云何が般若波羅蜜と相應すと説く。」答へて曰はく、「般若波羅蜜に相應するが故に、佛に値ふなり。或時は果中に因を説くが故なり。相應に二種有り、一には心相應、二には菩薩の行に應ず。謂ゆる好處に生れて、諸佛に値遇し、常に法を聞いて正憶念す。是を相應と名く。

【二八】復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行する時、是念を作さず、法と法と、若し合し、若し合せず、若し等しく、若し等しからざる有り」と。何を以ての故に、是菩薩摩訶薩、是法と餘法と、若し合し、若し合せず、若し等しく、若し等しからざるを見ればなり。舍利弗、菩薩摩訶薩の是の如く習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

【二九】釋して曰はく、「一切の法は、法と法と共に合する者有る無し。何を以ての故に、諸法は少分の合無きが故に。譬へば二指の四方有り、其一方は合するも、三方は合せざるが如し。合せざるもの多きが故に、何を以てか名けて合せずと爲さざらん。」問うて曰はく、「合する處有るを以ての故に、名けて合すと爲す。云何が合せずと言ふ。」答へて曰はく、「合處は指と爲さず、是れ指の分なり。但是れ指の分にして、更に指法無し。二指の相近づくを以ての故に、假に名けて合すと爲すも更に合法無し。復次に、色香味觸を總て名けて指と爲す。但觸にのみ合する力有り、餘の三は合すること無し。是を以ての故に指合すと云ふを得ず。復次に、異類にして處を同じくするが如きは、名けて合相と爲さず、相各異な

るが故なり。諸法も亦爾なり。地相は地中、水相は水中、火相は火中に有り。是の如く性異なれば、名けて合すと爲さず。是を以ての故に法と法と、合すること有る無しと言ふ。若し合し若し合せず。等しとは、一切法は、一相なるが故に、等しと名くるなり。皆是れ有相、皆是れ無常相、皆是れ苦相、皆是れ空、無我の相、皆是れ不生不滅の相にして、事異なる無きを以ての故に、名けて等しと爲す。等しからずとは、各各別相なるが故なり。色相、無色相、堅相、濕相の如し。是の如き等各異にして同じからざる、是を等しからずと名く。菩薩は等と不等とを見ず。何を以ての故に。一切の法は無なるが故に、自性空なるが故に法無きなり。法無きが故に見るべからず、見るべからざるが故に等、不等無きなり。等と合とは是れ習相應、不合と不等とは是れ不相應なり。

問うて曰はく、「何を以てか相應を説き竟りて、然る後に讚歎せざる。」答へて曰はく、「聽く者、厭懈す。是故に佛は果報功德を讚歎したまふ。聞く者、心に悅樂を得るが故に。」
 復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じて、是念を作さず、「我、當に疾かに法性を得、若し得ざるべし」と。何を以ての故に、法性は得の相に非ざればなり、舍利弗、菩薩摩訶薩の是の如く習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

釋して曰はく、「法性とは諸法の實相なり。心中の無明、諸の結使を除き、清淨の實觀を以て諸法の本性を得るを、名けて法性と爲す。性とは眞實に名く、衆生は邪觀を以ての故に縛せられ、正觀の故に解かる。菩薩は是念を作さず、「我、疾かに法性を得ん」と。

【二八】法性の得不
 得といふに就いて
 釋す。

【一九】法あり法性を
を出す者を見ずと
いふを釋す。

【二〇】法性は諸法
を分別すといふに
就いて明す。

何を以ての故に。法性は無相にして遠近有る無ければなり。亦、「我は久久しうして、當に得べし」と言はず。何を以ての故に。法性は遅きこと無く、久しきこと無ければなり。法性の義は、如、法性、實際の義の中に説くが如し。

【二一】復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、法有り、法性を出す者を見ず。是の如く習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

【二二】釋して曰はく、「無明等の諸の煩惱、一切法中に入るが故に、諸法の自性を失し、自性を失するが故に、皆邪曲にして正しからず。聖人は無明等を除却し、諸法の實性は還明顯なるを得。譬へば陰雲は虚空の清淨性を覆ひ、陰雲を除けば、則ち虚空の清淨性現するが如し。若し法有り、無明入らざれば、是れ則ち法性を出す。但是事は然らず。法有りて、無明を出す者無し。是故に菩薩は、是法の法性を出す者を見ず。譬へば業流は皆海に歸するが如く、粟散の小王は皆轉輪聖王に屬するが如く、衆小の明は皆日に屬するが如し。」

【二三】復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、是念を作さず、「法性は諸法を分別す」と。是の如く習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

【二四】問うて曰はく、「何を以ての故に、「法性は諸法を分別す」と、是念を作さざる。」答へて曰はく、「法性に著するが爲に法性を貴ぶ。是因縁を以て諸の結使を生ず、是故に是念を作さず。爾うて曰はく、「若し法性は空にして一相無相ならば、云何が諸法を分別する。」答

さず。爾うて曰はく、「若し法性は空にして一相無相ならば、云何が諸法を分別する。」答

へて曰はく、「是法性を得て無明等の諸の煩惱を滅し、諸法實相を破し、然る後、心清淨に、智慧明了にして諸法の實を知る。法性に隨ふ者を善と爲し、法性に隨はざる者を不善と爲す。婆蹉梵志の佛に問へるが如し、「世尊、天地の間に善惡好醜有りや不や」と。佛言はく、「有り」と。婆蹉言さく、「我久しく佛に歸命せり、願くは我爲に善く説きたまへ」と。佛言はく、「三種の惡、三種の善と、十種の惡、十種の善と有り。謂ゆる食欲は是れ惡にして、貪を除けば是れ善なり。瞋恚と愚癡とは是れ惡にして、悲と癡とを除けば是れ善なり。殺生は是れ惡にして、殺生を除けば是れ善なり。乃至邪見は是れ惡にして、邪見を除けば是れ善なり。能く如實に善惡を分別すれば、是れ我弟子にして、法性に入るを名けて得道と爲す」と。

復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、是念を作さず、「是法は能く法性を得、若し得ず」と。何を以ての故に、是菩薩は是法の能く法性を得、若し得ざるを用ふるを見ざればなり。舍利弗、菩薩摩訶薩の是の如く智應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

釋して曰はく、「云何が法性を得、八聖道分を行じ、諸法實相を得る。謂ゆる涅槃は、是れ法性を得と名く。復次に性を諸法實相と名け、法を般若波羅蜜と名く。菩薩は是念を作さず、「般若波羅蜜を行じて、是諸の法性を得ん」と。何を以ての故に。般若波羅蜜、及び諸法の性、是二法は異なる有ること無く、皆畢竟空なるが故に、云何が般若波羅蜜を

【二】是法は能く法性を得、又得ずといふを明す。

【三二】法性と空と合せず等といふを明す。

【三三】十八界と空と合せずといふを釋す。

以て法性に達するを得ん。

【釋】復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、法性と空と合せず、空と法性と合せず、是の如く相應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

【論】釋して曰はく、菩薩は法性は是れ空なりと觀ぜず、空は是れ法性なりと觀ぜず、空を行じて法性を得、法性を緣じて空を得。是を以ての故に異なる無し。所以は何ん。是二は畢竟空なるが故に。

【釋】復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、眼界は空と合せず、空は眼界と合せず、色界は空と合せず、空は色界と合せず、眼界は空と合せず、空は眼識界と合せず、乃至意界は空と合せず、空は意界と合せず、法界は空と合せず、空は法界と合せず、意識界は空と合せず、空は意識界と合せず。是故に舍利弗、是空と相應するを名けて、第一相應と爲す。

【釋】釋して曰はく、眼界は空と合せず、空は眼界と合せずとは、眼は是れ有、空は是れ無なり。空と有と云何が合せん。復次に、菩薩は種種の因縁を分別して是眼を散滅するに、眼は則ち空なり。空にして眼の名無く、本に因るが故に有り、眼は空なり、空も亦無分別なり。是眼の空は是れ眼の空に非ず、是れ則ち眼と空と合せず、又空は眼の因縁より生ぜず、何を以ての故に、是二法は本自ら空なるが故に。乃至意識界も亦是の如し。問うて曰はく、此中何を以てか五衆等の諸法を説かずして但十八界を説く。答へて曰はく、應に説

【三】第一習相應
といふに就いて明

くべくして、或時は誦寫する者忘失す。復有人言はく、「若し十八界を説けば則ち一切法を攝す。有衆生は、心色の中に於て錯り、心法の中に錯らず、應に十八界を聞いて度するを得べし。是故に但十八界を説くなり。」

問うて曰はく、「何を以てか名けて第一習相應と爲す。答へて曰はく、「空は是れ十方諸佛の深奥の藏なり、唯一の涅槃門にして更に餘門無く、能く諸の邪見戲論を破す。是相應は壞すべからず、破すべからず、是故に名けて第一と爲す。復次に、佛は自ら第一因縁を説きたまふ。謂ゆる、

舍利弗、空を行ずる菩薩摩訶薩は、聲聞辟支佛地に墮せず、能く佛土を淨め、衆生を成就し、忉かに阿耨多羅三藐三菩提を得。舍利弗、諸の相應中、般若波羅蜜相應を最第一、最尊、最勝、最妙と爲し、上行無しと爲す。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜相應、謂ゆる空、無相、無作を行ずればなり。當に是菩薩は記を受くるが如くして異なる無く、若は近く記を受くるを知るべし。舍利弗、菩薩摩訶薩の是の如く相應する者は、能く無量阿僧祇の衆生の爲に、益を作すこと厚し。是菩薩摩訶薩は、亦是念を作さず、我般若波羅蜜と相應す、諸佛は當に我に記を授けたまふべく、我當に近く記を受くべし。我當に佛土を淨むべし。我阿耨多羅三藐三菩提を得て、當に法輪を轉すべし」と。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は、法有りて法性を出すを見ず、亦法有りて般若波羅蜜を行するを見ず、亦法有りて諸佛の記を授くるを見ず、亦法有りて阿耨多羅三藐三菩提を得るを見ず。

【五】 聲聞辟支佛
 地に墮せず乃至
 阿耨多羅三藐三
 菩提を得といふを
 釋す。

何を以ての故に、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、我相、衆生相、乃至知者、見者相を生ぜず。何を以ての故に、衆生は畢竟不生不滅なるが故なり。衆生は生有ること無く、滅有ること無く、若くは法あり、生相、滅相有ること無し。是法ありて、當に般若波羅蜜を行すべし。是の如く、舍利弗、菩薩摩訶薩は、衆生を見ざるが故に、般若波羅蜜を行するを爲す。衆生は受けざるが故に、衆生は空なるが故に、諸の衆生は不可得なるが故に、衆生は離るるが故に、般若波羅蜜を行するを爲す。舍利弗、菩薩摩訶薩は、諸の相應の中に於て最第一相應と爲す。謂ゆる空相應なり。是空相應は餘の相應に勝れたり。菩薩摩訶薩、是の如き空を習うて能く大慈大悲を生ず。菩薩摩訶薩、是相應を習うて憍心を生ぜず、犯戒の心を生ぜず、瞋心を生ぜず、懈怠心を生ぜず、亂心を生ぜず、無智心を生ぜざるなり。

釋して曰はく、聲聞辟支佛地に墮せずとは、空相應に二種有り、一には但空、二には不可得空なり。但空を行すれば、聲聞辟支佛地に墮し、不可得空を行すれば、空も亦不可得にして、則ち處として墮すべき無し。復二種の空有り。一には無方便空にして、二地に墮し、二には有方便空にして、則ち墮する所無く、直に阿耨多羅三藐三菩提に至る。復次に、本深き悲心有りて空に入れば則ち墮せず、大慈心無ければ則ち墮す。是の如き等の因縁もて二地に墮せず。能く佛の世界を淨め、衆生を成就すとは、菩薩は是空相應の中に住して復礙する所無く、衆生を教化して十善道及び諸の善法を行せしむ。衆生の善法を行する因縁を以ての故に佛土清淨に、不殺生を以ての故に壽命長く、劫せず盡せざるを以て

【二六】般若波羅蜜相應乃至益を作すこと厚しを釋す。

の故に佛土豐樂なり。應に念ずれば則ち至るべし。是の如き等の衆生、善法を行すれば則ち佛土莊嚴なり。問うて曰はく、「衆生を教化すれば則ち佛土淨し、何を以てか別に説く。」答へて曰はく、「衆生は善を行すと雖も、要す菩薩の行願、廻向の方便力の因縁を須ふるが故に、佛土清淨なり。牛力の車を挽くに、要す御者を須ふれば、乃ち所至の處に到るを得るが如し。是を以ての故に別に説けり。疾かに得とは、是空を行するに、相應して障礙有る無ければ、則ち能く疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。」

問うて曰はく、「先には空相應を説き、今は般若波羅蜜相應を説き、後には無相無作相應を説けり、何の差別か有る。」答へて曰はく、「二種の空有り。一には般若空、二には非般若空なり。先に空相應を言ふに、聽く者疑うて、一切空と謂ふが故に、是般若波羅蜜空を説く。復人有り、疑うて但空は第一にして、無相無作は第一に非ざらんかと言ふ。是故に空無相無作相應は、亦是れ第一なりと説く。何を以ての故に、空なれば、則ち是れ無相なり、若し無相なれば、則ち是れ無作なり。是の如く、一の名字の爲に別と爲し、最上なるが故に尊と言ひ、有を破するが故に勝と言ひ、是相應を得て復餘を樂まざる、是を最妙と爲す。一切衆生の中、佛を無上と爲し、一切法の中にて涅槃は無上に、一切有爲の法の中にて善法は智相應を無上と爲すが如し。餘の義は讚般若品の中に説くが如し。問うて曰はく、「若し能く是の如く空相應を行すれば、便ち應に受記すべし。云何が記を受くるが如くにして異なる無く、若し近く記を受くと言ふ。」答へて曰はく、「是菩薩は新に道を行じ、肉身に未

だ無生法忍を得ず。未だ般若三昧を得ず。但智慧力を以ての故に、能く是の如く分別して深く空に入る。佛は其空に入るの功德を讀じたまふが故に、記を受くるが如くにして異なる無しと言ふ。三種の菩薩の受記を得る者有り、記を受くるが如き者、近く記を受くる者、記を受くるを得る者なり。阿毘跋致品中に説くが如く、三種は此中に説くが如し。問うて曰はく、「此の如く相應は第一無上なりと説く、云何が受記を興へざる。」答へて曰はく、「餘の功德、方便、禪定等未だ集らず、但智慧のみ有り、是故に未だ受記を興へず。復次に、是菩薩は復利根にして智慧ありと雖も、餘の功德未だ熟せざるが故に、現前の受記を聞きて或は憍慢を生ず。是故に未だ受記を興へず。讀敷する所以は以て其心を勸進せんと欲す。利根なる者は是空相應を行じ、記を受くるが如くにして異なる無く、鈍根なる者は是空相應を行じ、若は近く記を受け、衆生をして常に安隱に涅槃を得しむ。是を利益と名く。復二種の利益有り、一には苦を離れ、二には樂を興ふ。復二種有り、衆生の身苦と心苦とを滅す。復三種有り、天樂と人樂と涅槃樂となり。復三種有り、三界を離れて三乘に入る。是の如く菩薩摩訶薩、無量阿僧祇に衆生を利益す。衆生の義は先に説くが如し。世人は功動有れば則ち憍心を生じ、其報賞を求む。報を求むるを以ての故に則ち不淨を爲す。菩薩は則ち然らず。般若波羅蜜と相應して無量の衆生を利益すと雖も、我心無く憍慢無きが故に功報を求まず、地の物を利する功重しと雖も、其報を求めざるが如し。是を以ての故に是菩薩は是念を作さず、「我般若と相應す、諸佛當に我に記を授くべし、若は近く記を受

【二七】法あつて法生を出すことを見ず。乃至六度と破するの心を生ぜずといふを釋す。

けん。我當に佛土を淨め、無上道を得、法、轉を轉すべし」と。轉法輪の義は先に説くが如し。
 (二七上) 問うて曰はく、何等の法か法性を出すか。答へて曰はく、此中に佛答へたまふ、謂ゆる般若波羅蜜を行ずる者なり。般若波羅蜜を行ずる者は即ち是れ菩薩なり。知者、見者は、即ち是れ衆生なり。法性の中には、衆生變じて法性と爲る。是を以ての故に、菩薩は自ら高心を生ぜず、衆生に従うて恩分を求めず、諸佛の受記を與へたまふを見ず。菩薩の空なるが如く、佛も亦是の如し。行者の空なるが如く、阿耨多羅三藐三菩提を得る者も亦空なり。何を以ての故に。佛自ら説きたまはく、「菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じて衆生相、乃至知者賢者相を生ぜず」と。菩薩、般若波羅蜜を行ずるすら、尙法相を生ぜず、何に況んや衆生相をや。何を以ての故に。佛自ら因縁を説きたまはく、「是衆生は畢竟不生なり。不生なるが故に不滅なり」と。若し法、不生不滅なれば、即ち是れ法性の相なり。法性は即ち是れ般若波羅蜜なり。云何が般若波羅蜜なる。般若波羅蜜を行ずるなり。菩薩は、衆生を受けずとは、神を受けざるなり。但虚安もて我を計する有るのみ。衆生は空なりとは、衆生の法は所有無きが故なり。衆生は不可得なりとは、實智を以て求索するに不可得なるが故なり。衆生は離るとは、一切法は、自相を離るるが故なり。一切は自相を離るとは、火の熱相を離るる等の如し。相空の中に廣く説くが如し。第一相應にして餘の相應に勝るとは上説の如し。菩薩は是衆生空、法空を行じ、深く空相應に入り、本願を憶うて衆生を度し、衆生の狂惑顛倒して、空事の中に於て種種に著を生ずるを見て、即ち大悲心を生じ、

「我は是事を知れりと雖も、餘者は知らず」と。教化を以ての故に大慈大悲を生じ、亦能く常に六波羅蜜の法を破するを生せず。所以は何ん。初發心の菩薩は六波羅蜜を行するに、六惡難行を以ての故に、六波羅蜜増長せず、増長せざるが故に、疾かに道を得ず。今は諸法の相を知りて、是六惡法の根本を抜く。所以は何ん。菩薩は布施を善と爲し、慳心は不善なり、能く餓鬼、貧窮の中に墮すと知り、慳貪は是の如しと知り、自ら其身を惜みて世間の樂に著するが故に、還慳心を生ず、是菩薩は輕物を能く施し、重物を能くせず。外物を能くし、内物を能くせず。我に著するを以て受者に著し、相を取るを以て財物に著す。是を以ての故に、檀波羅蜜を破す。施す所有りと雖も、而も清淨ならず。是菩薩は空相應を行するが故に、我を見ず、亦世間の樂を見ず。云何が著を生じて檀波羅蜜を生ぜん。問うて曰はく、「若し我を見ず、世間の樂を見ざるが故に破せずんば、亦應に檀を見ざるべし、云何が布施を行する。答へて曰はく、「是菩薩は布施を見ずと雖も、清淨の空心を以て布施して、是念を作さく、「是布施は、空にして所有無し。衆生の須ふるが故に施與すと。小兒は土を以て、金銀と爲せども、長者は則ち是を金銀と見ざるが如し。便ち意に隨つて與ふるも、竟に與ふる所無し。餘の五法も亦是の如し。是を以ての故に、同じく空にして慳を破すと雖も、而も檀を破せず。舍利弗、菩薩摩訶薩は是空相應中に住して、能く常に六惡心を生ぜず」と。

大智度論卷第三十七

大智度論釋往生品第四之上

卷第三十八

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

【一】何處より來りて此間に生ずる

舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行じて、能く是の如く相應を習ふ者は、何處より來りて終に此間に生じ、此間より終に當に何處に生ずべき。』佛、舍利弗に告げたまはく、『是菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行じて、能く是の如く相應を習ふ者は、或は他方の佛國より來りて此間に生じ、或は兜率天上より來りて此間に生じ、或は人道中より來りて此間に生ず。舍利弗、他方の佛國より來る者は、疾かに般若波羅蜜と相應し、般若波羅蜜と相應するが故に、身を捨て來りて此間に生じ、諸の深法の要皆現在前し、後に還般若波羅蜜と相應し、所生の處に在りて、常に諸佛に值ふ。舍利弗、一生補處の菩薩あり、兜率天上より、終に來りて此間に生ず。是菩薩、六波羅蜜を失せず、所生の處に隨つて、一切の陀羅尼門、諸の三昧門、疾かに現在前す。舍利弗、菩薩、人中に命終して、還人中に生ずる者有り、阿毘跋致を除く。是菩薩は根鈍にして、疾かに般若波羅蜜と相應する能はず、諸の陀羅尼門、三昧門は能く疾かに現在前せず』と。

問うて曰はく、『是般若波羅蜜中には、衆生の畢竟不可得なること上品に説けるが如し、

やの間に佛が三事を以て答へたまふを釋す。

舍利弗、一切衆生は不可得にして、壽者、命者、乃至知者見者等、衆生の請の異なる名字は皆空にして實無きが如し。此中何を以てか、何所より來り、去りて何所に至り止まると問ふ。衆生の異名は即ち是れ菩薩なり、衆生無なるが故に菩薩も亦無なり。又此經の中に、菩薩は但名字のみ有りて實法有る無しと説けり。今舍利弗、何を以てか此問を作す。』答へて曰はく、『佛法中に二諦有り、一には世諦、二には第一義諦なり。世諦の爲の故に、衆生有りと説き、第一義諦の爲の故に、衆生は所有無しと説く。復二種有り、有は名字の相を知れると、有は名字の相を知らざるとなり。譬へば軍の立てたる密號を知る者有ると、知らざる者有るとの如し。復二種有り、有は初て習ひ行じ、有は久しく習ひ行す。著する者有り、著せざる者有り。他意を知る者有り、他意を知らざる者有り。(言辭の知る有りと雖も其言に寄せて以て理を宣ぶ)名字の相を知らざる、初めて習ひ行する、著する他意を知らざる者の爲の故に、衆生無しと説き、名字の相を知る、久しく習ひ行する、著せざる、他意を知る者の爲の故に、説いて衆生有ると言ふ。舍利弗は、天眼を以て明かに六道の衆生の生死善惡を見、此に於て疑無く、但他方の無量阿僧祇の世界より、諸の菩薩の來れる者を知らざるが故に問へるのみ。有諸の大菩薩は此問より、終に他方の無量阿僧祇の佛國に生る、舍利弗は、天眼もて見ざる所なるが故に問ふ。復次に、聲聞の人有り、菩薩の六波羅蜜を行じ、久しく生死の中に住し、漏未だ盡さざるが故に、種種の智慧、内外の經書を集め、而も實際を證せず、未だ生老病死を免れざるを見て、惑んで而も之を

輕んじて言はく、「此等は命終せんに、三毒未だ盡きざるを以ての故に、當に何處に墮すべき」と。佛、説きたまふが如くば、「諸の凡夫の人は、常に三惡道の門を聞き、三善道に於て客と爲り、三惡處に於て家を爲す。三毒の力強く、過去世無量劫の罪業を積集して、涅槃を取らず、將に衆の苦を受けんとす、甚た之を慙むべし。是の如き等の小乘の人は、是菩薩を輕んじ慙む」と。舍利弗は、一切の聲聞の中に於て第一の大法將爲り。是事有るを知りて、衆生をして敬心を菩薩に於て起さしめんと欲するが故に問へば、佛は三事を以て答へたまへり。一には他方の佛國より來り生ず、二には兜率天上より來る、三には人道中より來ると。問うて曰はく、「如し他方の佛國より來る者は、遠きを以ての故に舍利弗は知らざらんも、兜率天上、人道中より來る者を、何を以てか知らざる。答へて曰はく、「舍利弗は他方の佛國より來る者を知らざるが故に問へるに、佛爲に所應の如く分別して、三處より來る有り」と答へたまへり。問うて曰はく、「世間に六道有り、何を以ての故に、天中に於て兜率天より來るを別説し、人道の中に處所の、他方の佛國より來る者を分別せず、亦天道と人道とを分別せざる。答へて曰はく、「六趣中の三は是れ惡道なり。惡道の中より來るは、苦を受くる因縁もて心鈍なるが故に、道を得るに任へず、是故に説かざるなり。』問うて曰はく、「三惡道中より來るも、亦道を得る者有り。舍利弗の太子子の牛足比丘の如きは、五百世、牛の中に生じ、末後に人身を得、是猶牛に似たるも、而も阿羅漢道を得たり。復、摩偷婆尸他比丘有り、五百世、獨猴の中に生じ、末後に人身を得、三明六通の阿

【三惡道】地獄、餓鬼、畜生、三善道とは阿修羅、人天をいふ。

羅漢を得たるすら、猶跳擲を好む、餘習有るを以ての故なり。是の如き等は皆道を得。何を以てか任へずと言ふ。答へて曰はく、一得る者有りとなし、少くして言ふに足らず。又此人は先世に深く涅槃の善根を種ゑ、少しく謬錯有るが故に、惡道の中に墮するも、罪を償ふこと既に畢り、涅槃の善根熟するが故に、道果を成ずるを得。此中には聲聞道を成ぜず、但阿耨多羅三藐三菩提を得るが爲に、前身と後身と次第す。譬へば垢心起りてより次第に無漏に入るを得ず、中間には必ず善の有漏心有るが如し。無漏心實きを以ての故に、三惡道より出づるも任へず、次第に阿耨多羅三藐三菩提心を得と言ふ。天人、阿修羅は則ち然らず、下の三天は結使利にして深く、上の二天は結使深くして利ならず。兜率天は結使深からず利ならず。所以は何ん。常に善善有りて法法するが故に。是故に除處を説かず。或は有ること少きが故に説かず。色界の諸天の得道する者は、復來下せず、未だ得道せざる者は、禪味に樂著するが故に下らず、味に著するを以ての故に、智慧も亦鈍なり。是故に説かず。阿修羅は、下の二天と同じきが故に説かず。他方の神國より來る者は、諸佛の前より來りて是間に生じ、諸根猛利なり、所以は何ん。無量阿僧祇劫の罪を除くが故なり。又諸佛に遇ひて心に隨つて教導せらるるが故なり。刀の好むを得れば則ち利なるが如し。又常に聞いて誦し、正しく般若波羅蜜を憶念するが故に利なり。是の如き等の因縁もて、則ち菩薩の心は利なり。人中より來る者は、此間の佛弟子なり。般若波羅蜜を聞き、諸の功徳を集め、身を捨て、還是間に生じ、或は異國土に於て、佛有る無しと雖も、佛法に値

遇して聽受し、書寫し、正憶念し、力の多少に隨つて福德智慧を修す。是人は諸根鈍なりと雖も、般若波羅蜜を受くるに堪へたり。現在の佛を見ざるを以ての故に心鈍なるのみ。他方の佛より來る者は、利根なるが故に、般若波羅蜜を修行して、疾かに相應するを得。相應するを以ての故に、常に諸佛に值へり。佛に值ふの因縁は、先に説くが如し。問うて曰はく、「兜率天上は、何を以てか一生補處を説き二生三生を説かざる。」答へて曰はく、「人身は罪結煩惱の處る所なり。唯大菩薩のみは之に處するも、則ち染累無し。鵝は水に入るも、水に濕ほはしめざるが如し。是の如く、菩薩は一切世間の法に能く著せざる所なり。所以は何ん。佛自ら因縁を説きたまはく、「六波羅蜜、諸の陀羅尼門、諸の三昧門を失せず、疾かに現在前す。是菩薩は是世界に於て、應に衆生を利益すべし」と。其餘の菩薩は十方に分布す。譬へば大智慧の人已に一處に在れば、其餘の大智は則ち異處に至るが如し。是故に説かず。復次に、有人言はく、但大のみを説けば小を限らずと。復次に、餘天中より來り生ずる者は、餘處に當に廣説すべし。人中に死し人中に生ずる者は、上の二處に如かず。何を以ての故に。人身は、地大多きを以ての故に、身重く心鈍く、心心數法は身の疆弱に隨ふを以ての故なり、又諸業の結使は、因縁生なるが故なり。彼二處より來る者は、是れ法身の菩薩なり、身を變ずること無量にして、以て衆生を度す、故に來りて是間に生ず。人道中の者は皆是れ肉身なり。問うて曰はく、「阿毘跋致の菩薩は結業を以て身を受けず、何を以ての故か人道の中に説く。」答へて曰はく、「此間に來り生じ、阿毘跋致を得

て、未だ肉身を捨てざるが故に、鈍根を以ての故に、諸の陀羅尼、三昧門、疾かに現在前
せす、疾かに現在前せざるが故に、疾かに般若と相應せざるなり。」

【經】舍利弗、汝が問ふ所は、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と相應せば、此間より、終に當に何
處に生ずべき者ぞと。舍利弗、此菩薩摩訶薩は一佛國より一佛國に至り、常に諸佛に値ひ
て、終に佛を離れず。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、方便を以てせずして、初禪に入り乃至第
四禪も、亦六波羅蜜を行す。是菩薩摩訶薩は、禪を得るが故に、長壽天に生じ、彼壽の終
るに隨うて、來りて是間に生じ、人身を得、諸佛に値ふ。是菩薩の諸根は利ならず、舍利
弗、菩薩摩訶薩有り、初禪乃至第四禪に入り、亦般若波羅蜜を行じ、方便を以てせざるが
故に、諸禪を捨てて欲界に生ず。是菩薩の諸根も亦鈍なり、舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初
禪乃至第四禪に入り、慈心乃至捨に入り、虚空處乃至非有想非無想處に入り、四念處乃至
八聖道分を修し、十力乃至大慈大悲を行す。是菩薩は方便力をもち、禪に隨うて生ぜず。
無量心に隨うて生ぜず、四無色定に隨うて生ぜず、有ゆる佛處に在りて中に於て生じ、常
に般若波羅蜜の行を離れず、是の如き菩薩は賢劫中に、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。
【論】問うて曰はく、「舍利弗今前世と後世とを問へり。佛何を以ての故に前世中に三種を答
へ、後世中に廣く分別したまへる。答へて曰はく、「入肉眼を以て過去未來を見ざるが故に
邪疑を生じ、二處を疑ふと雖も、而も未來世に當に受くべきが故に廣く分別せり。譬へば
已に滅せる火は、復救ふを求めず、但多く方便して未來の火を防ぐが如く、又病を治する

【二】更に此間よ
り何處に生ずべき
やとの間に、廣く
分別して答へたま
ふを明す。中に先
づ後世に廣く分別

して往生を説く所
以を明す。

に、已に滅せるの病は、復治を加へず、但將に生すべきの病を治するが如し。復次に、佛は無量の辯才を自ら恣にし、舍利弗の問ふ所少しと雖も、佛廣く其爲に説きたまへり。問は般若波羅蜜と相應するの一事なれども、而も佛種種に分別したまへるが如し。貧者の、大富にして施を好む者より乞ふに、乞ふ所は少しと雖も、與ふる所は甚だ多きが如し。佛も亦是の如し、無量の無漏の佛法を具足するの富有り、大慈悲を以て好んで施與を行じたまふ。因りて舍利弗少しく問へるが故に、佛大衆の爲に、廣く分別して説きたまへり。復次に、是般若波羅蜜の中の、種種の因縁譬喩は多く空法を説く。新發意の者有り、空相を取りて、是空法に著し、生死の業因縁の中に於て、疑を生ず。「若し一切法は畢竟空ならば、來無く、去無く、出無く、入無きの相なり。云何が死して而も生ずる有らん。現在眼に見る法すら尙有るべからず。何に況んや死して後、餘處に生ぜんこと、見るべからずして而も有らんや」と。是の如き等の種種の邪疑、顛倒の心を斷ずるを爲す。是故に佛は種種の因縁もて廣く死有り生有るを説きたまへり。」

問うて曰はく、「死生の因縁有る無し。何を以ての故に。人死して滅に歸すればなり。滅に三種有り。一には火に燒かれて灰と爲り、二には虫に食はれて糞と爲り、三には終に土に歸す。今は但其滅を見るのみにして、更に出づる者有りて、後身を受くるを見ず。見ざるを以ての故に、則ち無と爲すを知る。」答へて曰はく、「若し汝は身滅して便ち無なりと謂はば、云何が衆生の、先世に習ふ所の憂喜怖畏等有らんや。小兒の生るる時、或は啼き、

或は笑ふが如き、先に憂喜を習ふが故に、今人の教ふる無くして、而も憂喜續生す。又積子は生れながらにして、乳に趣くを知り、猪羊の屬は、其生るる未だ幾ばくならざるに、便ち乾牡の合有るを知るが如し。子は父母を同うするも、好醜、貧富、聰明、闇鈍、各各不同なり。若し先世の因縁無くんば、異り有るべからず。是の如き等の、種種の因縁もて、後世有るを知る。又汝は先に、別に去る者有るを見ずと言へり。人身中には、獨り眼根のみ能く見るにあらず。身中の六情は、各所知有り、法有り。聞くべく、嗅ぐべく、味ふべく、觸るべく、知るべき者有り。聞くべき法すら尙見るべからず、何に況んや知るべき者をや。生有り、死有る法も、亦見るべく、亦知るべし。汝肉眼の故に見ざるなり。天眼の者は了了に能く見、是人の一房より一房に出入するを見るが如く、此身を捨てて、後身に至るも亦是の如し。若し肉眼もて能く見ば、何んが天眼を求むるを用ひん。若し爾らば、天眼と肉眼、愚と聖とは異り無けん。汝畜生に同する見を以て、何んが能く後世の知るべき者を見ん。人の死生の如きは、來去する者無しと雖も、而も煩惱盡きざるが故に、身情意に於て相續して更に身情意を生ず。身情意の造業は亦後世に至らざるも、而も是因縁に従つて、更に生じて後世の果報を受く。譬へば乳中に毒を著けんに、乳變じて酪と爲り、酪變じて酥と爲る。乳は酪酥に非ず、酪酥は乳に非ず、乳は酪に變ずと雖も、而も皆毒有るが如し。此身も亦是の如し、今世の五衆の因縁の故に更に後世を生じ、五衆の行業相續して異ならざるが故に、而も果報を受く。又冬木は未だ華葉果實あらずと雖も、時節會す

るを得れば、則ち次第に而も出づるが如し。是の如き因縁の故に、死生有るを知る。復次に、現世に宿命を知る者有り、人の夢に行きて疲極し、睡臥覺め已りて、經由する所を憶するが如し。又一切の聖人、内外の經書は皆後世を説けり。復次に、現世に不善法を動發して過重く、瞋恚、嫉妬、疑悔を生じ、内に憊むが故に、身は即ち枯悴し、顔色悦はず。惡不善法の害を受くる是の如し。何に況んや、身業口業を起さんをや。若し善法、淨信業の因縁を生ずれば、心清淨にして、如實の智慧を得、心則ち歡悅して身に輕軟を得、顔色和適す。苦樂の因縁有るを以ての故に善不善有り、今定んで善不善有るが故に、當に必ず後世有るを知るべし。但衆生の肉眼は見ず、智慧薄きが故に而も邪疑を生じ、福事を修すと雖も所作淺薄なり。譬へば藥師の王の爲に病を療じ、王は密に爲に宅を起すに、而も藥師は知らず、既に歸りて之を見、乃ち悔を意に加へず、力を盡くして、王を治するが如し。復次に、聖人は今現在の事を説くに、實に信すべきが故に、後世の事を説くも亦皆信すべし。人の夜、險道を行くに、導師手を授けんに、信すべしと知るが故に、則使隨逐するが如し、比智及び聖人の語もて定んで後世有るを知るべし。汝は肉眼なり。重罪にして比智薄きを以ての故に、又天眼無し。既に自ら智無く、又聖人の語を信せず、云何が後世を知るを得ん。復次に、佛法の中には、諸法は畢竟空にして亦斷滅せず。生死相續すと雖も、亦是れ常ならず、無量阿僧祇劫の業因縁は過ぎ去ると雖も、亦能く果報を生じて滅せず、是を微妙にして知り難しと爲す。若し諸法都て空ならば、此品中に往生を説くべか

【三】次に文に就いて釋す。中に一佛國より一佛國に値ふといふを釋す。

らず、何んが智有る者、前後相違せん。若し生死の相は實有ならば、云何が諸法は畢竟空

なりと言はん。但諸法中の愛著、邪見、顛倒を除かんが爲の故に畢竟空と説く。後世を破

せんが爲の故に説くにあらず。汝は天眼の明無きが故に後世を疑ひ、自ら罪惡に陥らんと

欲す。是罪業の因縁を遮せんが故に、種種に往生を説く。佛法は有に著せず、無に著せず、

有無にも亦著せず、非有非無にも亦著せず、不著にも亦著せざるなり。是の如きの人は、

則ち難を容れず。譬へば刀を以て、空を破せんに、終に傷くる所無きが如し、衆生の爲の

故に、縁に隨つて説法するも自ら著する所無し、是を以ての故に、『中論』の中に説かく、

一切の諸法は實なり、一切の法は虚妄なり

諸法は實にして亦虚なり、實に非ず亦虚に非ず

涅槃の際を眞と爲せば、世間の際も亦眞なり

涅槃と世と別無し、小異も得べからず

是を畢竟空の相と爲す。畢竟空は生死の業因縁を遮せず、是故に往生を説くなり。

問うて曰はく、『若し般若波羅蜜は一相、謂ゆる無相ならば、云何が般若と相應して、一

佛國より一佛國に至り、常に諸佛に値ふ。答へて曰はく、『般若波羅蜜は一切法を攝す。譬

へば大海の如し、是を以ての故に難を作すべからず。復次に、汝は自ら般若波羅蜜は一相

無相なりと説けり。若し無相ならば云何が難有る。汝は則ち無相中に相を取れり。是事は

然らず。復次に、般若波羅蜜に因るが故に、念佛三昧等の諸善法を行じ、生れて諸佛に値

ふなり。復次に、般若波羅蜜を行する者は深く大悲に入ること、慈父の子を見るに、直する所の物無きが爲の故に死するも、父甚だ之を慙むが如し。此兒は但虚誑の爲の故に死するのみ。諸佛も亦是の如し、諸法は畢竟空にして不可得と知りたまふも、而も衆生は知らず。衆生は知らざるが故に空法の中に於て染著し、善の因縁の故に大地獄に墮す。是故に深く大悲に入り、大悲の因縁を以ての故に、無量の福德を得。無量の福德を得るが故に、諸佛に生れ値ひ、一佛國より一佛國に至る。是菩薩、此に死して、彼間に生じ、彼間に死して復彼間に至りて生じ、是の如く乃ち佛を得るに至るまで終に佛を離れず。譬へば有福の人の一大會より一大會に至るが如し。或は是間に死して、彼間に生ずるあり。彼に於て五神通力を以ての故に、一佛國より一佛國に至り、諸佛を供養し、衆生を度脱す、是れ初の菩薩なり、佛國とは、十方如恆河沙等の諸の三千大千世界、是を一佛土と名く。諸佛の神力は能く普遍に自在無礙なりと雖も、衆生の度せらるる者は局有り。諸佛は現に在すとは、佛は現に其佛國土中に在す者なり。第二の菩薩は、方便無くして、初禪に入り、乃至、六波羅蜜を行す。

【四門】下無方便、長壽天、鉢根等を習す。

方便無しとは、初禪に入るとき、衆生を念ぜず、住する時も、起つ時も、亦衆生を念ぜず。但禪味に著し、初禪と和合して般若波羅蜜を行する能はず。是菩薩、慈悲心薄きが故に功德薄少なり。功德薄少なるが故に、初禪の某報の爲に牽かれて長壽の天に生ず。復次に、初禪の福德を以て、衆生に與へ、共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向する能はず。是の如

【慧根】 眞理を思惟すること。

【命根】 有情一期の壽命をいふ。
【信根】 三寶、四諦の教を信するなり。

き等の無量は、方便無きの義なり。長壽の天とは、非有想非無想處にして、壽八萬大劫なり。或は有人言はく、一切の無色定を通じて長壽の天と名く。無形にして、化すべからざるを以ての故に、得道に任へず。常に是れ凡次に處するが故に、或は無想天を説いて名けて長壽と爲す。亦得道に任へざるが故に、或は説いて、初禪より四禪に至るまで、淨居天を除いて、皆長壽と名く」と。味に著し、邪見なるを以て、道を受くる能はざる者は、還人間に生じ、佛に値ふ者は本、阿耨多羅三藐三菩提心を發すを以ての故に、或は禪の中に於て諸の福徳を集む。所以は何ん、彼間は味に著し、善心生じ難きが故なり。經中に説くが如し。佛、比丘に問ひたまふが如き、「甲頭の土多きや、地上の土多きや」と。諸の比丘言さく、「地の土は甚だ多く、嘘と爲すべからず」と。佛ははく、「天上に命終して、還人中に生ずる者は甲頭の土の如く、地獄に墮する者は地土の如し」と。問うてははく、「鈍根とは、二十二根中の何者か是なる。」答へてははく、「有人言はく、『慧根もて能く諸法を觀じ、久しく禪味を受け著するを以ての故に鈍なり』と。有人言はく、『信等の五根は皆道法を助成するも、受報著味を以ての故に鈍なり』と。有人言はく、『菩薩は清淨の福徳智慧の因縁の故に、十八根皆利なるも罪の故に則ち鈍なり』と。眼等の六根は、『法華經』に説くが如し。命根は老病貧窮等の爲に惱されず、安隱に樂を受く。是を命根の利喜樂等と爲す。五根は了了に覺知するが故に利なりと言ふ。復次に、樂を受くる時、樂は無常等の過有りと知りて、隨逐して貪欲を生ぜざるが故に利なり。餘の受も亦是の如し。信根は牢堅

【三無漏根】未知當知根、已知根、具知根これなり、見修無學三道の無漏智をいふなり。

【跋陀劫】バドドラカルバ(Bhadrika) 現在に在り劫【九】劫に就いて問す。

深固にして、難事を能く信ずるが故に、利なりと言ふ。亦應に是の如く相に隨うて分別すべし。男根淨き者は、陰藏の相を得、細滑に著せざるが故に、欲の過爲を知る。是を利と爲す。復次に、三の善根利なるが故に、名けて利と爲す。菩薩、或時、三無漏根に於て、實際を證せざるが故に利なり、利と相違するが故に鈍なり。問うて曰はく、「第三の菩薩、若し能く禪を捨てば、云何が方便無しと言ふ。」答へて曰はく、「是菩薩は命終の時、不善心に入り、諸の禪定方便を捨て、菩薩は、若し欲界繫の善心、若し無記心に入り、諸禪に入り、慈悲心に入り衆生を憐愍して、是念を作さく、「我若し禪定に隨つて生ぜば、廣く衆生を利益する能はざらん」と。欲界に生ずとは、十處有り。四天下の入と、六欲天となり。三惡道は菩薩の生ぜざる所なり。鈍根とは第二の菩薩に説くが如し。第四の菩薩は位に入りて菩薩道を得、三十七品を修して能く十八空乃至大慈大悲に住す。此を方便と名く、上の二菩薩は、但禪定のみ有りて、直に六波羅蜜を行す、是を以ての故に方便無し。第四の菩薩は、方便力の故に、禪定に隨はずして無量心生ず。所以は何ん。四念處乃至大慈大悲を行するが故に。命終の時は衆生を憐愍して、他方の現在の佛國に生じ、續いて般若波羅蜜と相應せんと願ふ。所以は何ん、般若波羅蜜を愛敬し隨順するが故なり。問うて曰はく、「此は是れ何等の菩薩なる。」答へて曰はく、「佛自ら説きたまはく、「跋陀劫中に菩薩あり、或は非跋陀劫中に菩薩あり、但其大なる者を取ら」と。」問うて曰はく、「云何が跋陀と名け、云何が劫と名くる。」答へて曰はく、「經に説くが如く

んば、一比丘有り。佛に問うて曰はく、「世尊、幾許を劫と名くる」と。佛、比丘に告げた
 まはく、「我能く説くと雖も、汝知る能はざらん。當に譬喩を以て解くべし。方百由旬の城
 有り、芥子を溢滿せんに、長壽の人有り、百歳を過ぎて、一の芥子を持ち去らんに、芥子
 都て盡くれども、劫猶漸きず、又方百由旬の石あり、人有りて百歳に迦尸輕軟の曇衣を持
 して、一たび來りて之を拂はんに、石は盡くれども、劫猶漸きざるが如し。時の中に最も
 小なる者は、六十念中の一念なり。大なる時を劫と名く。劫に三種有り、一には大劫と爲
 し、二には小劫と爲す。大劫とは、上の譬喩の如し。劫盡きんと欲する時は、衆生は自然
 に心樂を遠離す。樂を遠離するが故に、五蓋を除きて初禪に入る。是人は生を離れて喜樂
 し、是より起ち已りて聲を擧げ、大いに唱へて言はく、「諸の衆生の甚だ惡むべき者は是れ
 五欲第一にして、安隱なる者は是れ初禪なり」と。衆生は是唱を聞き已り、一切衆生の心
 皆自然に五欲を遠離して初禪に入り、自然に覺觀を滅す。第二禪に入るも亦是の如く唱へ、
 或は二禪三禪を離るるも亦是の如し。三惡道の衆生は、自然に善心得、命終して皆人中
 に生ず。若し重罪なる者は、他方の地獄に生ずること泥犁品中に説くが如し。是時、三千
 大千世界に一衆生として在る者無し。爾時、二の日出づるより乃ち七の日出づるに至りて、
 三千大千世界の地は盡く皆燒盡ること、十八空中に廣く劫の生滅の相を説くが如し。復
 有人言はく、「四大の中の三大は、動作する所有るが故に、三種の劫有り、或時は火劫起り
 て、三千大千世界より乃ち初禪四處に至るまでを燒き、或時は水劫起り漂ひて、三千大千

世界より乃ち二禪八處に至るまでを壞し、或時は風劫起りて、三千大千世界より乃ち三禪十二住處に至るまでを吹き壞る。是を大劫と名く。小劫にも亦三種あり。外に三大發るが故に世界滅し、内に三毒發るが故に衆生滅す。謂ゆる飢餓、刀兵、疾病なり一と。復有人言はく、「時節歲數を名けて小劫と爲す。『法華經』中に説くが如くんば、舍利弗の佛と作る時、正法の世に住すること二十小劫、像法の世に住すること二十小劫なり。佛三昧より起ち、六十小劫の中に於て『法華經』を説きたまふ。是樂の小劫の和合せるを名けて大劫と爲す。劫簸を秦に分別時節と言ひ、跋陀とは秦に善と言ふ」と、千萬劫過ぎ去り、空にして佛有る無し。是一劫中に、千佛興る有り、諸の淨居天、歡喜するが故に名けて善劫と爲す。淨居天は何を以てか此劫に當に千佛有るべきを知る。前の劫盡き已りて、靡然として都て空なり。後に大水有り。水底に湧出する千枚の七寶の光明の蓮華有り。是れ千佛の相なり。淨居諸天は、是に因りて千佛有るを知る。是を以ての故に、是菩薩は、此劫中に於て阿耨多羅三藐三菩提を得と説くなり。

○舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初禪、乃至第四禪に入り、慈心、乃至捨に入り、空處、乃至非有想非無想處に入り、方便力を以ての故に禪生に隨はず、還つて欲界若くは利利の大家、婆羅門の大家、居士の大家に生ず。衆生を成就せんが故なり。

○問うて曰はく、「菩薩に二種有り。一には業に隨つて生じ、二には法性を得たる身なり。衆生を度せんが爲の故に種種に變化し、身は三界に生れて佛の功德を具す。衆生を度脱す

【六】業因縁生の方便の利等の故に欲界の利等に生ずといふを釋す

るが故なり。一の中、今是れ何者ぞ。答へて曰はく、『是菩薩は、是れ業因縁生の身なり。所以は何、諸禪の方便力に入るが故に、禪に随つて生ぜざればなり。法身の菩薩は、變化自在にして、則ち大いに方便を須ひず。禪方便に入るの義は先に已に説けり。問うて曰はく、『若し禪定に随はずんば、何を以て欲界に生じて他方の清淨世界に生ぜざる。』答へて曰はく、『諸の菩薩の行は、各不同なり。或は菩薩有り、禪に於て心を轉じて、他方の佛國に生ず。菩薩の心を廻して欲界に生ずるも、亦是の如し。問うて曰はく、『他方の佛國に生ずとは、是を欲界と爲すや。欲界に非ざるや。』答へて曰はく、『他方の、佛國の雜惡不淨なる者を、則ち欲界と名く。若し清淨なる者は、則ち三惡道三毒無く、乃至三毒の名も無し。亦二乗の名も無く、亦女人も無し。一切の人は、皆三十二相有り、無量の光明は常に世間を照し、一念の頃に無量の身と作り、無量の如恆河沙等の世界に到りて、無量阿僧祇の衆生を度し、還本處に來る。是の如き世界は、地上に在るが故に色界と名けず。欲無きが故に欲界と名けず。形色有るが故に無色界と名けず。諸の大菩薩は、福德清淨業の因縁の故に、別に清淨の世界を得て、三界より出づ。或は大慈大悲心を以て、衆生を憐愍する有るが故に、此欲界に生ず。』

問うて曰はく、『若し命終の時、此禪定を捨てば、初め何を以てか學を求むる。』答へて曰はく、『欲界の心は、狂して定まらず。柔軟の爲に、心を攝するが故に禪に入り、命終の時、衆生を度せんが爲に、欲界の心を起す。』問うて曰はく、『若し人中に生ずるに、何を以ての

故に正しく刹利等の大家に生じ、餘處に生ぜざる。答へて曰はく、「刹利に生ずるは、勢力有るが爲なり。婆羅門家に生ずるは、智慧有るが爲なり。居士家に生ずるは、大富の故に、能く衆生を利益せんが爲にして、貧窮の中には自らを利する能はず。何んが能く人を益せん。欲界天に生ずるは、次に當に説くべし。」

〔釋〕舍利弗、復菩薩摩訶薩有り。初禪、乃至第四禪に入り、慈心、乃至捨に入り、空處、乃至非有想非無想處に入り、方便力を以ての故に、禪に隨つて生ぜず。或は四天王天處に生じ、或は三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天に生じ、是中に於て衆生を成就し、亦佛世界を淨め、常に諸佛に値ふ。

〔論〕是義は上に同じ、天に生ずるを異と爲すのみ。問うて曰はく、「欲界の諸天は、情、五欲に著し、化度すべき難し。菩薩何を以てか彼に生じて人中に生ぜざる。」答へて曰はく、「諸天の著心、大なりと雖も、菩薩の方便力も亦大なり。説くが如くんば、三十三天上に須浮摩樹林あり。天中の聖天は五欲を厭捨し、中に在りて止住し、諸天を化度す。兜率天上に、恒に一生補處の諸の菩薩有り。常に法を聞くを得、密迹金剛力士も亦四天王天の上

に在り、是の如き等は、諸天を教化す。

〔釋〕復次に舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行じ、方便力を以て初禪に入り、此間に命終し、梵天處に生じて大梵天王と作り、梵天處より一佛國に遊び、一佛國に至るに、有る諸佛在りて阿耨多羅三藐三菩提を得、未だ法輪を轉せざる者を勸請して轉せしむ。

〔七〕先の菩薩が欲天に生ずといふを釋す。

【八】 智度を行ずるの菩薩が方便の故に梵天となりて轉法輪勸請をなすの義を釋す。

【九】 一生補處の菩薩が諸行を修習して佛前に生じ梵行を修すといふを釋す。

問うて曰はく、「若し初禪に隨つて生ずるに何の方便か有る。」答へて曰はく、「生ずると雖も、而も味に著せず、佛道を念じ、本願を憶し、慈心に入りて、念佛三昧の時と、禪と和合するが故に、名けて方便と爲す。問うて曰はく、「何を以ての故に梵王と作る。」答へて曰はく、「菩薩、福德の因縁を集むること大なるが故に、世に常に物の主と爲り、乃至鹿中に生ずるも、亦其王と爲る。復次に是菩薩の本願は、佛に轉法輪を請せんと欲す、散天と作すべからず。或時、此中の三千大千世界に佛無し、一佛國より一佛國に至りて、初めて成佛して、未だ法輪を轉せざる者を求見す。所以は何ん。梵天王の法は、常に應に諸佛の轉法輪を勸請すべきが故に。」

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、一生補處にして、般若波羅蜜を行じ、方便力を以て、初禪乃至第四禪に入り、慈心乃至捨に入り、空處、乃至非有想非無想處に入り、四念處、乃至八聖道分を修し、空三昧、無相無作三昧に入り、禪に隨つて生せず、生じて佛處に有りて梵行を修し、若し兜率天上に生じ、其壽の終るに隨つて善根を具足し、正念を失せず、以て無數百千億萬の諸天の眞に、圍遶し恭敬せられ、來りて此間に生じて、阿釋多羅三藐三菩提を得。

問うて曰はく、「是一生の菩薩、十住地に在りて已に諸の功徳を具足す。今何を以てか諸行を修習する。」答へて曰はく、「心未だ涅槃に入らざれば、要す所行有り。謂ゆる四禪乃至三三昧なり、復次に是菩薩、天人の中に於て人法の修行を行じて、道を求むるを指示す。」

復次に是菩薩、十住地に在りと雖も、猶煩惱の習の在る有り。又諸法に於て猶知らざる所有り、是故に道を修す。復次に是菩薩、深行を行すと雖も、三十七品、三解脱門等、猶未だ證を取らず。今證を爲すが故に更に諸行を修す。復次に是れ大菩薩なりと雖も、佛より猶小なり。譬へば大火聚は能く照らす有りと雖も、日に於ては則ち現ぜざるが如し。放鉢經の中に彌勒菩薩、文殊尸利に語るが如し、「如し我後身に佛と作らば、如恆河沙等の文殊尸利も、我足を擧げ、足を下す事を知らざらん」と。是を以ての故に、十住に在りと雖も、猶應に修行すべし。問うて曰はく、「三生の菩薩何を以てか廣く衆生を度せずして、而も要す佛前に生ずる。」答へて曰はく、「是菩薩は度する所已に多し、今成佛せんと欲するに垂んとして應に佛前に在るべし。所以は何ん。但衆生を度して、成佛を得るのみに非ず、諸佛の深法、應當に聽聞すべきが故に。」問うて曰はく、「若し佛事を諮問するが爲の故に佛前に在らば、何を以ての故に、釋迦文佛は菩薩と作りし時、迦葉佛の前に在りて惡口毀背したまへる。」答へて曰はく、「是事は先に已に説けり。法身の菩薩、種種に身を變化して以て衆生を度し、或時は人法を行じて飢渴、寒熱、老病、憎愛、瞋喜、讚歎、呵罵等有り。諸の重罪を除けば餘の者を皆行す。是釋迦文菩薩、爾時、迦葉佛の弟として鬱多羅と名く。兄は智慧熟して多語を好まず、弟は智慧未だ備らざるが故に、多く論議を好む。時人弟を謂ひて勝れたりと爲す。兄は後に出家して、佛道を成ずるを得、號して迦葉と名く、弟は闍浮提の王、訖梨杓の師と爲り、五百の弟子有り、婆羅門の書教を以て、諸の婆

羅門に授く。諸の婆羅門等は、佛法を好まず。爾時、一陶師有り、難陀婆羅と名く、迦葉
 佛の五戒の弟子なり。三道を得、王師の鬱多羅と善友爲り。其心善にして淨信なるを以て
 の故に、爾時、鬱多羅、金車に乗り四の白馬に駕し、弟子と俱に城門を出づるに、難提婆
 羅は路に於て鬱多羅に相逢ふ。問うて言はく、「何の所よりか來る」と。答へて言はく、「汝
 が兄阿耨多羅三藐三菩提を得、我供養して還れり。汝共に行きて佛を覲見すべきが故に、
 來りて相迎ふ」と。鬱多羅は是念を作さく、「若し我徑に佛所に到らば、我諸の弟子、當
 に疑怪を生ずべし。汝本論義して智慧恒に勝る。今往いて供養するは、將に是れ親屬を愛
 するなり。故に必ず我に隨はじ」と。其佛を見るの因縁を破するを恐るるが故に、諸法實
 相の智中に住し、無上方便の慧に入りて、衆の弟子を度するが故に、口に惡言を出す。此
 禿頭の人、何んが能く菩提道を得ん」と。爾時、難提婆羅善友、瞋るが如き狀を爲し、頭
 を捉へ、挽いて言はく、「汝、止まるを得ざれ」と。鬱多羅、弟子に語りて言はく、「其事是
 の如し、吾止むるを得ず」と。即時に師徒俱に行いて佛に詣り、佛の光相を見て、心即
 ち清淨なり。前んで佛の足を禮し、一面に在りて坐す。佛、爲に意に隨つて法を説きた
 まふに、鬱多羅は無量の陀羅尼門、諸の三昧門皆聞くを得、五百の弟子還阿耨多羅三藐三
 菩提心を發せり。鬱多羅、座より起ち、佛に白して言さく、「願くは佛、我出家して其丘と
 作るを聽したまへ」と。佛言はく、「善來」と。即ち沙門を成す。是方便を以ての故に、
 現じて惡言を出すも是れ實に非ず。虚空は破すべく、水は火と作すべく、火は水と作すべ

くも、三生の菩薩、凡夫の中に於て瞋心を得、何に況んや佛に於てをや。問うて曰はく、若し爾らば、佛何を以てか第八罪報を受けて、六年苦行したまへる。答へて曰はく、小乘法と大乘法と異なり。若し異なる無くんば、大小有るべからず、小乗の法中には法身の菩薩、秘奥の深法、無量不可思議の神力を説かず、多くは結使を斷じて直に涅槃の法を取るを説けり。

復次に、若し佛は第八罪報を受けたまはずば、諸天、神仙、龍鬼、諸の長壽の者有り。此惡業有りて、而も罪報を受けざるを見て、業報の因縁無しと爲すと謂はん。是を以ての故に、現在に惡業無しと雖も、亦罪報を受く。又今世の因縁有り、諸の外道等は苦行に信著す。若し佛、六年苦行したまはずば、則ち人信ぜず。是王子、樂に串うて苦行する能はずと言はん。是を以ての故に、佛六年苦行したまふ。外道の苦行する者有り。或は三月、半歳、一歳にして、能く六年、日に一麻一米を食する者無し。諸の外道謂はく、「此は苦行の極爲り。是人、若し道無しと言はば、眞に道無けん」と。是に於て信受して皆正道に入る。是二因縁を以ての故に、六年苦行したまふも、實の罪に非ず。何を以ての故に、諸佛一切の不善法を斷じ、一切の善法を成就したまふが故に、佛若し實に罪報を受けたまはば、一切の善法を成じて、一切の不善法を斷じたまふと言ふを得ざればなり。復次に、小乘法の中には、佛、小心の衆生の爲の故に説きたまふ。二生の菩薩、猶惡口して佛を毀るも、二生の菩薩、尙小兒を罵らず、云何が實に佛を毀らんや。皆是方便にして衆生の爲の故な

り。何を以てか之を知る。是釋迦文佛は毘婆尸佛の時、大婆羅門と作り、佛、衆僧の食疾じきはるきを見て、是言を發すらく、「是の如き人輩は應に馬麥を食すべし」と。是罪に因るが故に、こゝにどうとう黒繩等の地獄に墮し、無量世の苦を受け已りて、餘罪の因縁もて佛道を成ずと雖も、而もしんじつ三月馬麥を食せり。又聲聞法中に説かく、佛、三阿僧祇劫を過ぎて常に男子と爲り、常に貴處に生じ、常に諸根を失せず、常に宿命を識り、常に三惡道中に墮せず、毘婆尸佛より來、九十一劫、汝が法の如くす。九十一劫中、惡道に墮すべからず、何に況んや末後の一劫をや。是を以ての故に、是は實に非ず、方便の故に説くを知る。問うて曰はく、「佛の二罪は、毘尼雜藏中の説なれば、是は信受すべし。三阿僧祇の後、百劫、惡道に墮せずとは、初阿僧祇より亦惡道に墮すべからず。若し墮せずんば何を以てか但百劫と説く。佛は説無し。但是れ阿毘曇毘婆沙論議師の説なり。」答へて曰はく、「阿毘曇は是れ佛説なり、汝聲聞の人、阿毘曇の論議に隨つて是を毘婆沙と名く、錯有るべからず。又薄拘盧の如きは、一の阿梨勒果を以て僧に施し、九十一劫の中に於て惡道に墮せず、何に況んや菩薩は無量世より來、身を以て布施し、諸の功德を修するに、而も小罪の因縁を以て地獄に墮在せんや。是の如き事は毘婆沙に錯るべからず、是を以ての故に小乘の人は菩薩の方便を知らず。復次に汝は毘婆沙の錯らざるを聽す。佛自ら菩薩の本起を説きたまふ。菩薩初生の時、行くこと七歩にして、口に自ら説いて言はく、「我生する所以の者は、衆生を度せんが爲の故なり」と。言ひ已りて默然し、乳を餵むこと三年、行かず語らず、漸次に長大

【二】兜率天上に生ずといふを釋す

して、行き語ること法の如し。一切の嬰孩は、小時にして未だ行き語る能はず、漸次に長大して、能く人法を具す。今云何が菩薩、初生に能く行き能く語り、後に便ち能はざる。當に是れ方便力の故なるを知るべし。若し是方便を受けば、一切の佛語悉く皆通するを得、若し受けずんば一實一虚なり。是の如き種種の因縁もて衆生を度するが爲の故に、惡口を現行するを知る。

(二〇七) 問うて曰はく、『三生の菩薩、何を以てか但兜率天上に生じて餘處に生ぜざる。』答へて曰はく、若し他方の世界より來る者在れば、諸の長壽の天、龍、鬼神、其來處を求めて知る能はず、則ち疑心を生じ、謂ひて幻化と爲さん。若し人中に在りて死し、人中に生じ、然る後に佛と作らば、人は輕慢を起し、天は則ち法を信ぜざらん。應に天來りて人を化すべく、人、天を化すべからず、是故に天上より來りて生ず。則ち是れ天より人と爲れば、人則ち敬信す。無色界中には形無く、法を説くを得ざるが故に、中に在りて生ぜず。色界中には色身有りて爲に法を説くべしと雖も、而も深く禪味に著して、大いに衆生を利益する能はざるが故に、是故に中に在りて生ぜず。下の三の欲天は、深厚なる結使、蠶心錯亂し、上の二天は結使既に厚く、心軟かくして利ならず。兜率天上は結使薄く心軟かく、利にして常に是れ菩薩の住處なり。譬へば太子の將に王位に登らんとするや、先づ靜室に於て七日齋潔し、然る後正殿に登りて王位を受くるが如し。補處の菩薩も亦是の如し、兜率天上は齋處の如し。彼末後に於て天樂を受け、壽終りて後に來り下り、末後に人樂を受け

て、便ち阿毘三佛を成じ、無量百千萬億の諸天園遊して是間に來り生ず。菩薩先づ常に無始の生死の中に於て、天上人間に往反せしも、今は末後の天身復更に來りて、天に生ぜざるを以て、是故に咸く皆侍送するなり。菩薩彼に於て壽盡き、當に下りて佛と作るに、諸天の壽盡くる者有り、盡きざる者は願を作して下生し、菩薩の檀越と爲れり。復次に諸天の下る者は、常に菩薩を侍衛せんと欲す。百億の魔怨有り、來りて菩薩を惱亂するを恐るればなり。故に此菩薩は人中に生じて老病死を厭ひ、出家して阿耨多羅三藐三菩提を得るは、『菩薩本起經』中に説くが如し。

〔釋〕復次に舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六神通を得、欲界、色界、無色界に生ぜず、一佛國より一佛國に至り、諸佛を供養し恭敬し、尊重し讚歎す。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、遊戯神通も一佛國より一佛國に至るに、至る所、到る處に聲聞辟支佛乘有る無く、乃至二乘の名も無し。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、遊戯神通も一佛國より一佛國に至り、至る所、到る處は、其壽無量なり、舍利弗、菩薩摩訶薩有り、遊戯神通も一佛國より一佛國に至るに、至る所、到る處は、佛法僧無き處にして、佛法僧の功德を讚する有りて、諸の衆生等、佛の名、法の名、僧の名を聞くが故に、此に於て命終して諸佛の前に生ず。

〔釋〕釋して曰はく、『菩薩に二種有り、一には生身の菩薩、二には法身の菩薩なり。一は結使を斷じ、二は結使を斷ぜず。法身の菩薩、結使を斷じて六神通を得、生身の菩薩、結使を斷ぜず。或は欲を離れて五神通を得。六神通を得る者は、三界に生ぜず、諸の世界に遊

【二】法身の菩薩が六通を得て諸佛の國に遊戯するを明す。

びて十方の諸佛を供養す。遊戯神通の者、十方世界に到りて衆生を度し、七寶を雨らす。至る所の世界は皆一乘清淨にして、壽は無量阿僧祇劫なり。問うて曰はく、『菩薩の法應に衆生を度すべし、何を以てか但清淨無量壽佛の世界の中にのみ至る。』答へて曰はく、『菩薩に二種有り。一には慈悲心有りて多く衆生の爲にし、二には多く諸佛の功德を集む。たのしんで多く諸佛の功德を集むる者は、一乘清淨の無量壽の世界に至り、好みて多く衆生の爲にする者は、佛法の衆無き處に至る。三寶の音を讚歎するは、後章に説くが如し。』

〔經〕舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初發意の時、初禪、乃至第四禪を得、四無量心を得、四無色定を得、四念處、乃至十八不共法を修す、是菩薩は欲界、色界、無色界中に生ぜず、常に生ずれば衆生を益するの處に有り。

〔論〕釋して曰はく、『此菩薩、或は無佛世界に生じ、或は有佛世界に生ず。世界は不淨にして三惡道有りて貧窮下劣なり。或は清淨世界に生ず。無佛世界に至り、十善道、四禪、乃至四無色定を以て衆生を利益し、三寶に信向せしめ、五戒及び出家戒を稱説して、禪定の智慧功德を得しむ。不清淨の世界に二種有り、現に佛の在すと及び佛の滅度の後と有り。佛の滅度の後に、或時は出家し、或時は在家にして、財施法施を以て種種に衆生を利益し、若し佛の在世に種種の因縁を作り、衆生を引導して佛の所に至らしむ。清淨世界は、衆生未だ功德を具せざる者には、其をして満足せしむ、是を所生の處に在りて衆生を利益すと名く。』

〔三〕所生の處にありて衆生を利益すと云ふに就いて明す。

【三】三種の菩薩を明す。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初發意の時、六波羅蜜を行じ、菩薩位に上りて阿毘跋致地を得。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初發意の時、便ち阿耨多羅三藐三菩提を得、法輪を轉じて無量阿僧祇の衆生の與に益厚を作し已りて、無餘涅槃に入る。是佛の般涅槃の後、餘法は、若は一劫に住し、若は一劫を減ず。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初發意の時、般若波羅蜜と相應し、無數百千億の菩薩の與に一佛國より一佛國に至る。佛世界を淨めんが爲の故に。

論 釋して曰はく、三種の菩薩有り、利根は心堅く、未だ發心せざる前に久しく諸の無量の福德智慧を來集す。是人は佛に遇ひて是大乗の法を聞き、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、即時に六波羅蜜を行じて菩薩位に入り、阿毘跋致地を得。所以は何ん。先に無量の福德を集め、利根にして心堅く、佛に従つて法を聞くが故に。譬へば遠く行くに、或は羊に乗つて去る有り、或は馬に乗つて去る有り、或は神通もて去る者有らんに、羊に乗る者は久久にして乃ち到り、馬に乗る者は差つて速に、神通に乗る者は意を發す頃に便ち到るが如し。是の如く言ふを得され、意を發す間に云何が到るを得ん」と。神通の相は爾にして疑を生ずべからず。菩薩も亦是の如し、阿耨多羅三藐三菩提を發すとき、即ち菩薩の位に入る。菩薩有り、初めて意を發すに、初は心好しと雖も、後に諸惡を雜へ、時時に念を生ずらく、「我佛道を求め、諸の功德を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向す」と。是人は久久にして、無量阿僧祇劫に、或は至り或は至らず、先世の福德の因縁薄く、而も復鈍根に

して心堅固ならざればなり。羊に乗る者の如し。人有り、前世に少しく福德有りて利根なり。發心して漸漸に六波羅蜜を行じ、若し三、若し十、若し百阿僧祇劫に、阿耨多羅三藐三菩提を得。馬に乗る者の如く、必ず到る所有り。第三に神通に乗る者は、上説の如し。是三種の發心は、一には罪多くして福少く、二には福多くして罪少く、三には但清淨の福德を行す。清淨に二種有り。一には初發心の時に即ち菩薩道を得、二には少く住して十方の諸佛を供養し、菩薩道に通達するが故に菩薩位に入る。即ち是れ阿鞞跋致地なり。阿鞞跋致地の菩薩の義は先に説くが如し。次に後の菩薩、大いに世間を厭ひ、世世より已來、常に眞實を好みて欺誑を惡む。是菩薩も亦利根堅心にして、久しく無量の福德智慧を集め、初發心の時、便ち阿耨多羅三藐三菩提を得、即ち法輪を轉じて無量の衆生を度し無餘涅槃に入る。法の住する、若し一劫、若し一劫を減じ、化佛を留めて衆生を度す。佛に二種の神通力あり。一には現在時、二には滅後なり。劫の義は上説の如し、劫中に度する所の衆生も、亦復少からず。次に後の菩薩も亦利根にして心堅く、久しく福德を集め、發心して即ち般若波羅蜜と相應し、六神通を得て無量の衆生と共に十方の清淨世界を觀じ、而して自ら其國を莊嚴す。阿彌陀佛は先世の時、法華比丘と作りしに、佛は將ひ導き、遍く十方に至りて清淨の國を示し、淨妙の國を撰擇して以て自ら其國を莊嚴せしめたまひしが如し。

大智度論卷第三十八

大智度論釋往生品第四之中

卷第三十九

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

【經】舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行ずる時、四禪、四無量心、四無色定を得、其中に遊戲して初禪に入り、初禪より起ちて滅盡定に入り、滅盡定より起ちて乃至四禪に入る。四禪より起ちて滅盡定に入り、滅盡定より起ちて虚空處に入り、虚空處より起ちて滅盡定に入り、滅盡定より起ちて乃至非有想非無想處に入り、非有想非無想處より起ちて滅盡定に入る。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に超越定に入る。

【二】 智度を行じて次第定に入り、或は超越定に入るといふを明す。

【論】 問て曰はく、若し凡夫の人、能く滅盡定に入る能はず、云何が菩薩、初禪より起ちて滅盡定に入る。答へて曰はく、阿毘曇轉婆沙中の小乗には、是の如く説く、佛の三藏の説にあらず。又是菩薩聖人すら、尙及ばず、何に況んや當に是れ凡夫なるをや。譬へば六牙の白象は毒箭を被ると雖も、猶怨賊を憐愍するが如し。是の如きの慈悲心は、阿羅漢に無き所なり。畜生の中にてすら猶尙是の如し、何に況んや人身と作りて欲を離れ、禪に入りて而も滅盡定を得ざらんや。

問うて曰はく、若し菩薩の滅盡定を得るは爾るべし。超越定の法は二を過ぐる能はず、若し初禪より起ちて、乃至滅盡定に入ると言ふは、是法有る無し。答へて曰はく、餘人も定法有りと雖も、力少きが故に遠く超ゆる能はず。菩薩、無量の福德智慧力もて深く禪定に入り、心も亦著せざるが故に能く遠く超ゆる。譬へば人中の力士の趨は、三四丈に過ぎず、若し天中の力士は復限數無きが如し。小乘法中の一に超ゆる者は、是れ定法なり。菩薩は禪定力大にして、心に著する所無きが故に、遠近意に隨ふ。問うて曰はく、若し爾らば超越定は是れ大にして、次第定は大と爲すべからず。答へて曰はく、二は俱に大と爲す。所以は何ん。初禪より起ちて二禪に至り、更に餘心無く一念もて入るを得ればなり。乃至滅盡定も皆爾り。超越とは、初禪より起ちて第三禪に入るも、亦餘心をして雜らしめず、乃ち滅盡定に至る、逆順皆爾なり。有人言はく、超越定は勝れたり、所以は何ん。但餘心を雜ふる無く、而も能く超越するが故に、譬へば、繫馬の廻轉の意に隨ふが如し」と。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行ずる時、四念處乃至十八不共法を修し、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道を取らず。方便力を以て衆生を度せんが爲の故に、八聖道分より起ち、是八道を以て須陀洹果乃至辟支佛道を得しむ。佛、舍利弗に告げたまはく、「一切の阿羅漢、辟支佛果、及び智は是れ菩薩摩訶薩の無生法忍なり。舍利弗、當に知るべし、是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じ、阿鞞跋致地中に在りて住す。」

【二】 四念處乃至十八不共法を修して乃至不退地に在りて住すの文を釋す。

問うて曰はく、「何を以てか、是菩薩の六波羅蜜を行するを説かずして、而も但四念處を得るを説く。」答へて曰はく、「若し説き、若し説かず。當に知るべし、是菩薩は皆六波羅蜜を行じ、三十七品に於て或は行じ、或は行ぜず。聲聞辟支佛の道を證せざる者、大慈大悲有りて深く方便力に入る等は、先に説くが如し。問うて曰はく、「自ら諸の道果を得ず、云何が能く以て人を化する。」答へて曰はく、「佛自ら因縁を説きたまふ。謂ゆる聲聞辟支佛の果及び智は皆是れ菩薩の法忍なり。但諸の道果名字果及び智を受けず、皆無生法忍中に入ると。復次に、唯證のみを取らず、餘の者をも皆行して、菩薩道を得るが故に、名けて阿鞞跋致地と爲す。」

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜に任して兜率天上を淨む、常に知るべし、是は賢劫中の菩薩なり。

【三】 賢劫中の菩薩を釋す。

釋して曰はく、「菩薩に各々の道、各々の行、各々の願有り。是菩薩、業因縁を修して兜率天上に生じ、菩薩の會中に入りて次第に佛と作る。是の如き相は、當に知るべし、是れ賢劫中の菩薩なり。」

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、四禪乃至十八不共法を修し、未だ四諦を證せず。當に知るべし、是菩薩は一生補處なり。

【四】 一生補處の菩薩を釋す。

問うて曰はく、「是一生補處の菩薩は、應に兜率天に生ずべし。云何が四禪等を得と説く。」答へて曰はく、「是菩薩は兜率天上に生じ、欲を離れて四禪等を得。復次に、是補處の

菩薩は欲を離れてより來、久しく佛法を具足し、方便力を以て、補處の法に隨つて兜率天に生ず、未だ四諦を證せざる者は故に留めて證せず、若し證を取る者は辟支佛と成り、佛と成らんと欲するが故に證せず。

釋 舍利弗、菩薩摩訶薩有り、無量阿僧祇劫に修行して阿耨多羅三藐三菩提を得。

論 釋じて曰はく、「是菩薩は善根を種ゑて阿耨多羅三藐三菩提を求むと雖も、鈍根雜行を以ての故に久しうして乃ち之を得、深く善根を種うるを以ての故に必ず得。」

【五】 無量阿僧祇劫に修行して阿耨多羅三藐三菩提を得といふ菩薩に就いて明す。

釋 舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜に住し、常に勤めて精進して衆生を利益し、無益の事を説かず。

論 釋して曰はく、「是菩薩は先づ惡口有るが故に菩薩心を發し、願つて言はく、「我永く口の四過を離れて是道を行はん」と。復次に、此菩薩、是般若波羅蜜の中に、諸法は定相有る無く、著すべからず、説くべからざるの相を知るが故に、是の如く能く利益する者は皆是れ佛法なり、若し利益する能はずんば、種種に語を好むと雖も、是れ佛法に非ずと知る。

【六】 六度に住して無益の事を説かざる菩薩に就いて明す。

釋 舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜を行じ、常に勤めて精進して、衆生を利益し、一

佛國より一佛國に至り、衆生の三惡道を斷ず。

論 舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜を行じ、常に勤めて精進して、衆生を利益し、一佛國より一佛國に至り、衆生の三惡道を斷ず。

釋 舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜を行じ、常に勤めて精進して、衆生を利益し、一佛國より一佛國に至り、衆生の三惡道を斷ず。

論 舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜を行じ、常に勤めて精進して、衆生を利益し、一佛國より一佛國に至り、衆生の三惡道を斷ず。

釋 舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜を行じ、常に勤めて精進して、衆生を利益し、一佛國より一佛國に至り、衆生の三惡道を斷ず。

【七】六度を修して衆生の三惡道を斷ずる菩薩に就いて明す。
【上中下三種の不善道】地獄、餓鬼、畜生の三惡道をいふ。

【八】衆生上樂を與へ人を憐愍する菩薩を明す。

【九】菩薩の變じて佛身となり、三惡道の衆生に說法すと云ふを釋す。

釋して曰はく、『是菩薩は六神通に住し、十方世界に到り、上中下三種の不善道を遮す。』
舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜に住し、檀を以て首と爲し、一切衆生を安樂にし、飲食を須ふれば飲食を與へ、衣服、臥具、瓔珞、華香、房舍、燈燭、其須ふる所に隨うて皆之を給與す。

釋して曰はく、『菩薩に二種有り。一には能く衆生をして苦を離れしめ、二には能く樂を與ふ。復二種有り。一には三惡道の衆生を憐愍し、二には人を憐愍す。是菩薩は衆生に樂を與へ、人を憐愍するが故に、須ふる所に隨つて皆之を與ふ。』

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行ずるとき、身を變ずること佛の如くし、地獄の中の衆生の爲に說法し、畜生餓鬼の中の衆生の爲に說法す。

問うて曰はく、『是菩薩は何を以ての故に變じて佛身と作る、佛を尊重せざるに似たり。答へて曰はく、『衆生は佛身を見て度を得る者有り、或は轉輪聖王等の餘身を見て度を得る者有り。是を以ての故に身を變じて佛と作る。』復次に世間、佛の名字を是れ大悲、是れ世尊と稱す。若し佛身を以て地獄に入れば、則ち閻羅王、諸の鬼神も遮礙せず、是れ我尊ぶ所の者は師なり、云何が遮すべけん。問うて曰はく、『若し地獄の中には火燒きて常に苦痛有り、心常に散亂して法を受くるを得ず、云何が化すべき。』答へて曰はく、『是菩薩は不可思議神通力を以て錢を破り、火を滅し、獄卒を禁制し、光を放ちて之を照せば衆生の心樂む。乃ち爲に法を説くに、聞いて則ち受持す。問うて曰はく、『若し爾らば地獄の衆』

生には道を得る者有りや不や。答へて曰はく、『道を得ずと雖も得道の善根因縁を種う。所以は何ん。重罪を以ての故に道を得べからず、畜生道中に當に分別すべし。或は得る者あり、或は得ざる者あり。阿那婆達多龍王、娑竭龍王等の如きは菩薩道を得、鬼神道中にも、夜叉、蜜迹金剛、鬼子母等の如き見道を得る有り、是れ大菩薩なり。』

釋 舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜を行ずる時、身を變じて佛の如くし、遍く十方の恆河沙等の如き、諸佛の世界に至り、衆生の爲に說法し、亦諸佛に供養し、及び佛世界を淨め、諸佛の說法を聞き、十方淨妙の國土の相を觀探して、而も已に自ら殊勝の世界を起す、其中の菩薩摩訶薩は皆是れ一生補處なり。

【一〇】佛身に變ぜる菩薩の十方衆生の爲に說法し、並に諸佛を供養す等を釋す。

釋して曰はく、『是菩薩は遍ねく六道の爲に說法し、佛身を以て十方衆生の爲に說法す。若し衆生、弟子の教を聞かば信受する能はざるも、若し佛獨尊自在者の說法を聞かば其語を信受せん。是菩薩は二事の因縁の故に諸佛を供養し、世界を莊嚴す。世界を莊嚴するの法を聞き、十方の佛國に到りて清淨世界の相を取り、行業の因縁轉た復殊勝にして、光明も亦多し。所以は何ん。此國中は皆一生補處の菩薩なればなり。』

問うて曰はく、『若し先に已に兜率天上の一生補處の菩薩を説けり、今云何が他方世界の菩薩は皆一生補處なりと説く。』答へて曰はく、『兜率天上の一生補處は是れ三千世界の常法なり、餘處は不定なり、謂ゆる第一清淨の者は、身を轉じて佛を成ずるが故なり。』

釋 舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜を行ずる時、三十二相を成就して諸根淨利なり、

【二】三十二相成就の菩薩に就いて明す。

【一】諸根淨なる菩薩に就いて明す。

諸利淨利なるが故に衆人愛敬し、愛敬を以ての故に漸く三乗の法を以て之を度脱す。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、常に身清淨、口清淨を學すべし。

釋して曰はく、是菩薩は衆生をして眼に其身を見て、得度せしめんと欲するが故に、三十二相を以て身を莊嚴す。諸根淨利なりとは、眼等の諸根明利にして餘人に出過し、信慧根、諸の心數俱淨第一にして、見る者は其希有を歎じ、我に此事無しといひ、是菩薩を愛敬して、其語を信受し、世世に道法を具足し、三乗道を以て涅槃に入る。是三十二相、眼等の諸根は皆身口の業の因縁清淨より得。是を以ての故に、佛、菩薩は應に身口の業を淨むべしと説きたまへり。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜を行じて諸根淨なるを得、是淨根を以て而も自ら高ぶらず、亦他をも下しません。

釋して曰はく、是菩薩は常に深く淨く、六波羅蜜を行ずるが故に、眼等の諸根淨利なるを得て人皆愛敬す。慧等の諸心數法の根、淨利にして比無し、衆生を度せんが爲の故なり。世間の常法は、若し殊異を得れば心則ち自ら高ぶり、諸餘の人を輕んじて是念を作さく、「汝には此事無く、我獨り此有り」と。是因縁を以ての故に邊つて佛道を失す。經中に説くが如くんば、菩薩は餘の菩薩を輕んじ、念念一劫に佛道と遠ざかり、爾所の劫を経て更に佛道を修す。是を以ての故に自ら高ぶらず、亦他をも下しません。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初發心住、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜より乃至阿耨多羅三藐三菩提まで

【三】初發心住乃至不退地まで終に惡道に墮せざる菩薩に就いて明す。

【四】初發心より不退地まで十善行を捨てざる菩薩に就いて明す。

終に惡道に墮せず。

釋して曰はく、「是菩薩は初より已來、性として惡道を畏れ、作す所の功德を墜墮せざらん」と願ふ。乃至阿鞞跋致地までとは、未だ到らざる中間に、惡道に墮するを畏るるを以ての故に願を作すなり。菩薩是念を作さく、「若し我三惡道に墮せば自ら度する能はず、何んが能く人を度せん。又三惡道の苦惱を受くる時は、瞋惱を以ての故に結使增長し、還つて惡業を起して、復苦報を受く。是の如くにして無窮ならば、何の時か當に佛道を修行するを得べき」と。問うて曰はく、「若し持戒の果報は惡道に墮せずんば、何を以てか復布施を説く。答へて曰はく、「持戒は是れ惡道に墮せず、根本の布施も亦能く墮せず。」

復次に、菩薩の持戒は能く惡道中に墮せずと雖も、人中に生じて貧窮にして自ら利する能はず、又人を益せず、是を以ての故に布施を行す、餘の波羅蜜も各其事あり。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、初發心より乃ち阿鞞跋致地まで常に十善行を捨てず。

釋して曰はく、「佛は戒を持つが故に惡道に墮せず、布施は隨逐すと説きたまふ。今云何が尸羅波羅蜜より乃ち阿鞞跋致地に至るまでを行せんかを知らず、是故に復常に十善を行すと説きたまふ。復次に、先に菩薩の持戒牢固ならざれば、布施もて隨助すといひ、今は但持戒牢固にして十善を捨てざれば三惡道に墮せずと説きたまふ。」

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜中に住し、轉輪聖王と作りて衆生を十善道に安立し、亦財物を以て衆生に布施す。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜中に住し、轉輪聖王と作りて衆生を十善道に安立し、亦財物を以て衆生に布施す。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜中に住し、轉輪聖王と作りて衆生を十善道に安立し、亦財物を以て衆生に布施す。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜中に住し、轉輪聖王と作りて衆生を十善道に安立し、亦財物を以て衆生に布施す。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜中に住し、轉輪聖王と作りて衆生を十善道に安立し、亦財物を以て衆生に布施す。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜中に住し、轉輪聖王と作りて衆生を十善道に安立し、亦財物を以て衆生に布施す。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜中に住し、轉輪聖王と作りて衆生を十善道に安立し、亦財物を以て衆生に布施す。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜中に住し、轉輪聖王と作りて衆生を十善道に安立し、亦財物を以て衆生に布施す。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜中に住し、轉輪聖王と作りて衆生を十善道に安立し、亦財物を以て衆生に布施す。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜中に住し、轉輪聖王と作りて衆生を十善道に安立し、亦財物を以て衆生に布施す。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜中に住し、轉輪聖王と作りて衆生を十善道に安立し、亦財物を以て衆生に布施す。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜中に住し、轉輪聖王と作りて衆生を十善道に安立し、亦財物を以て衆生に布施す。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜中に住し、轉輪聖王と作りて衆生を十善道に安立し、亦財物を以て衆生に布施す。

【二五】檀尸の二波羅蜜に住するが故に轉輪王と作るの菩薩に就いて明

【二六】施戒の波羅蜜に住し無量世に轉輪王と作るの菩薩に就いて明す。

釋して曰はく、「是檀と尸の波羅蜜の因縁の故に、轉輪聖王と作り、尸羅波羅蜜を行ずるが故に、能く衆生をして十善を信受せしめ、檀波羅蜜を行するが故に、財寶を以て衆生に給施するも亦盡くべからず。」問うて曰はく、「一切の菩薩は皆是二波羅蜜を行じて轉輪聖王と作るや不や。」答へて曰はく、「必ずしも然らず。何を以ての故に、此品中の如くんば、諸の菩薩は種種の法もて佛道に入る。菩薩有り、轉輪聖王の儀法を聞いて此處に在りて能く衆生を利益するが故に、是願を作す。或は菩薩有り、轉輪聖王の因縁を種る、願を作さずと雖も亦轉輪聖王の報を得、自ら二波羅蜜を行するが故に轉輪聖王と作り、亦一切衆生をして十善道を行せしめ、亦自ら布施を行す。聞く者疑を生ずらく、「一世に作すと爲んや、世世に作すと爲んや」と。是を以ての故に。」

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜に住し、無量千萬世に轉輪聖王と作り、無量百千の諸佛に值遇して、供養恭敬尊重讚歎す。

釋して曰はく、「若し菩薩は轉輪聖王と作り大いに衆生を益するを知らば、便ち轉輪聖王と作り、若し自ら餘身は益大なりと知らば、亦餘身と作る。復次に世間の法を以て大いに佛を供養せんと欲するが故に、轉輪聖王と作る。」

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、常に衆生の爲に法を以て照明し、亦以て自ら照し、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで終に照明を離れず。舍利弗、是菩薩摩訶薩は佛法の中に於て已に尊重を得。舍利弗、是を以ての故に菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行する時、身口意の不

【七】 智慧の光明
 もて自ら並に衆生
 を利益するの菩薩
 に就いて明す。

淨なるを妄起せしめず。

釋して曰はく、「上の菩薩は檀波羅蜜を行じて轉輪聖王と作り、是菩薩は但諸經を分別し、諸法を誦讀し、憶念し、思惟し、分別して以て佛道を求め、是智慧の光明を以て自ら利益し、亦能く衆生を利益す。人の闇道中に燈を然せば亦能く自らを益し、亦能く人を益するが如し。終に離れずとは、是因縁の故に終に智慧の光明を離れず、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至る。復次に是菩薩は清淨に法施し、名利、供養、恭敬を求めず、弟子を貪らず、智慧を恃まず、亦自ら高ぶり餘人を輕んぜず、亦譏刺せず、但十方の諸佛を念じ、慈心もて衆生を念す。我も亦是の如く佛道を學し、法を説き、依止する所無く、適當すこ所無く、但衆生の爲に諸法實相を知らしめん。是の如く清淨に法を説き、世世に智慧の光明を失はず、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至る。已に尊重を得とは、上の諸の菩薩の、能く是の如くなる者は、諸の衆生に於て皆尊重を爲すなり。身口意の不淨なるを妄起せしめずとは、能く清淨の法施を以てする者は身口意の惡業を雜起すべからず。所以は向ん、若し身口意の惡を起さば、聞かざる者、或は信受せず。若し意業不淨なれば智慧明かならず、智慧明かならざれば、善く菩薩道を行する能はざればなり。復次に、但此一菩薩のみにあらず、上來の菩薩の能く此法を行する者は皆佛の教を尊重すと名く。若し菩薩にして菩薩道を行せんと欲せば皆罪行を雜ふべからず。一切の惡罪業を妄起せしめず、雜行の者は行道に於て則ち難く、疾かに佛道を成する能はず、罪業の因縁は諸の福德を壞するが

【八】菩薩の三業不淨を問ふ。

故なり。

舍利弗、佛に白して言さく、「世尊、云何が、菩薩の身業不淨、口業不淨、意業不淨な

る。」

問うて曰はく、「舍利弗は智慧第一なり、何を以ての故に身口意の悪業を識らざる。」答

へて曰はく、「舍利弗は聲聞法中に於ては則ち知れり、菩薩の事は異なるが故に知らざるな

り。説くが如くんば、若し菩薩にして聲聞辟支佛心を生ずれば是を菩薩の破戒と爲す。是

を以ての故に舍利弗の疑へるは何者か是れ菩薩の罪なるか罪に非ざるかを知らざるなり。

復次に、舍利弗は身の三不善道、口の四不善道、意の三不善道を知り、是を身口意の罪と

爲す。此中に佛、答へたまはく、「若し菩薩、身口意の相を取れば、是は則ち菩薩の身口意

の罪と爲す」と。是の如き等の因縁の故に、舍利弗は問へるなり。」

佛、舍利弗に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、是念を作さく、「是身、是口、是意は是

の如く相を取りて縁と作す」と。舍利弗、是を菩薩の身口意の罪と名く。舍利弗、菩薩摩

訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、身を得ず、口を得ず、意を得ず。舍利弗、菩薩摩訶薩の般

若波羅蜜を行ずる時、若し身を得、口を得、意を得て是を用ひば、身口意を得るが故に、

能く慳心、犯戒心、瞋心、懈怠心、亂心、癡心を生ず。當に知るべし、是菩薩は六波羅蜜

を行ずる時、能く身口意の雑業を除かず。

釋して曰はく、「佛、舍利弗に示したまはく、「法空の中に菩薩は是三業を見ず、是を無

【九】三業の相を不淨と名くるを明す

罪と爲す。若し是三業を見ば是を罪と爲す」と。聲聞法中にては十不善道、是を罪業と爲し、摩訶衍中には身口意の所作有りと見るも是を罪と爲す。所以は何ん。作有り見有らんに、作者見者は、皆是れ虚誑なればなり。羅人には則ち羅罪あり、細人には則ち細罪あり。欲界の欲を離るる時の如きは五欲、五蓋を惡罪と爲し、初禪には善の覺觀を攝して無罪と爲す。初禪を離れて二禪に入る時は、覺觀を罪と爲す。二禪に攝する所の義は意を無罪と爲す、乃至非有想非無想處も亦是の如し。諸法實相中に入れば一切の諸觀、諸見、諸法は皆名けて罪と爲す。小乗の人は三惡道を畏るるが故に十不善業を以て罪と爲し、大乘の人は一切の能く著心を生じて相を取るの法の三解脱門と相違する者を以て名けて罪と爲す。是事の異なるを以ての故に名けて大乘と爲す。若し是三業有るを見るは惡を起さずと雖も亦牢固と名けず。是身口意、是三業の根本を見ざる是を牢固と爲す。是菩薩は法は空なるが故に是三事を見ず。是三事を用ふれば慳貪相、犯戒相、瞋恚相、懈怠相、散亂相、愚癡相を起すも、因無きが故に果も亦無きなり。樹無ければ則ち蔭無きが如し。若し能く是の如く觀すれば則ち能く身口意の諸業を除く。問うて曰はく、「先には罪業と説く、今何を以ての故に罪業と言ふ。」答へて曰はく、「罪業と罪業とは異なる無し、罪は即ち是れ業にして、名けて細と爲さず。復次に、聲聞の人は、身口の不善業を以て名けて羅と爲し、意の不善業を名けて細と爲し、瞋恚邪見等の諸の結使を名けて羅罪と爲し、愛慢等の結使を名けて細罪と爲し、三惡覺、謂ゆる欲覺、瞋覺、惱覺を名けて羅と爲し、親里覺、國土覺、不

【三〇】三業の不淨を除く因縁を詳す

死覺を名けて細と爲し、但善覺を名けて微細と爲すも、摩訶衍中に於ては盡く皆盡と爲す。是を以ての故に此を蠱罪と説く。」

【三〇】舍利弗、佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩は云何が身口意の蠱業を除く。」佛、舍利弗に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩身を得ず、口を得ず、意を得ずんば、是の如き菩薩摩訶薩は能く身口意の蠱業を除く。復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は初發意より十善道を行じて聲聞心を生ぜず、辟支佛心を生ぜず、是の如く菩薩摩訶薩は能く身口意の蠱業を除く。」

【三〇】問うて曰はく、「何等か身口意の細業と相異なる者を蠱と爲す。」答へて曰はく、「前に説く所の者の如きは是なり。復次に、凡夫人の業は聲聞の業に於て蠱と爲し、聲聞の業は大乗に於て蠱と爲す。復次に、垢業を蠱と爲し、垢に非ざる業を細と爲す。能く苦受の因縁を生ずる業を蠱と爲し、苦受の因縁を生ぜざる業を細と爲す。有覺有觀の業を蠱と爲し、無覺無觀の業を細と爲す。復次に、我乃至知者見者を見るを蠱と爲し、若し我乃至知者見者を見ず、但三業の處、五衆、十二入、十八界を見るを細と爲す。」

復次に、見る所有る者を名けて蠱と爲し、見る所無き者を名けて細と爲す。是を以ての故に、佛、舍利弗に告げたまはく、「若し菩薩、身口意を得ざれば是時則ち三蠱業を除く。」復次に、初發意に畢竟空中に住するに、一切法は不可得なり。而も常に十善道を行じて、聲聞辟支佛心起さず、相を取らざる心を以て一切諸の善根、皆阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是を菩薩は身口意業の蠱業罪を除くと名け、名けて清淨と爲す。

【三】六度を行じて三業の不淨を除く。これ菩薩の佛道といふを釋す。

【釋】舍利弗、菩薩摩訶薩有り。般若波羅蜜を行じ、佛道を淨むる時に、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜を行す。是を菩薩摩訶薩は身口意の穢業を除くと名く。舍利弗、佛に白して言さく、「世尊、何等か是れ菩薩摩訶薩の佛道なる。佛、舍利弗に告げたまはく、「佛道とは若し菩薩摩訶薩の身を得ず、口を得ず、意を得ず、檀波羅蜜を得ず、乃至般若波羅蜜を得ず、聲聞辟支佛を得ず、菩薩を得ず、佛を得ざるなり。舍利弗、是を菩薩摩訶薩の佛道と名く。謂ゆる一切諸法は不可得なるが故なり。」

【釋】して曰はく、「是菩薩は、六波羅蜜の總相に依りて、佛道を淨む。」問うて曰はく、「舍利弗、佛に従つて三惡三蘊を除くを聞けり、即ち是れ佛道を淨むるなり。今何を以てか更に問ふ。答へて曰はく、「先には三業の清淨の相を説き、今は一切法の清淨の相を説く。先には略説し、今は別相を説く。先には但三業を得ざるをいひ、今は六波羅蜜、諸の賢聖、菩薩及び佛を得ざる、是を佛道を淨むと名く。一切法は皆不可得なるが故に、身を得ず、乃至般若波羅蜜を得ざる、是を法空と名け、聲聞乃至佛を得ざる、是を業生空と名く。菩薩は二空の中に住し、漸漸に一切不可得空を得。不可得空は即ち是れ諸法實相なり。是不可得空の義は先に十八空の中に説くが如し。」

【釋】舍利弗、菩薩摩訶薩有り、六波羅蜜を行する時、能く壞する者無し。舍利弗、佛に白して言さく、「世尊、云何が菩薩摩訶薩の六波羅蜜を行する時、能く壞する者無きや。」佛、舍利弗に告げたまはく、「若し菩薩摩訶薩、六波羅蜜を行する時、色乃至識有るを念ぜず、

【三】六度を修するの菩薩は能く壞するものなきを明す。

【三】般若度の中に住して智を具する菩薩は常に富樂を得といふに就いて明す。

眼乃至意有るを念せず、色乃至法有るを念せず、眼界乃至法界有るを念せず、四念處乃至八聖道分有るを念せず、檀波羅蜜乃至般若波羅蜜有るを念せず、十力乃至十八不共法有るを念せず、須陀洹果乃至阿羅漢果有るを念せず、辟支佛乃至阿耨多羅三藐三菩提有るを念せず、舍利弗、菩薩摩訶薩の是の如く行じ、六波羅蜜を行じ増益するとき能く壞する者無し。

釋して曰はく、「佛は舍利弗の爲に、種種に諸の菩薩を分別し、次に爲に菩薩有りて、發心の時より、能く壞する者有る無きを説きたまへば、舍利弗は、驚喜して諸の菩薩を恭敬せり。是故に問はく、「菩薩は結使未だ斷ぜず、未だ實相に於て證を作さざるに、何の因縁の故に破壞すべからざるか」と。佛答へたまはく、「若し菩薩、色有るを念せず、乃至阿耨多羅三藐三菩提有るを念せず、是法空を得るが故に亦衆生空を得。若し是法空觀は空なる者も亦空なり。是無礙般若波羅蜜の中に住すれば、能く壞する者有る無し。」

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜の中に住して智慧を具足し、是智慧を以て常に惡道に墮せず、弊惡人中に生ぜず、貧窮人と作らず、受くる所の身體は、天人阿修羅の爲に憎惡せられず。

釋して曰はく、「此菩薩は先世より、大智慧を愛樂し、一切の經書を學し、觀察し思惟して諸法を聽採し、自ら智力を以て一切法中の實相を推求し、是一切法の實相を得るが故に諸佛の爲に深心に愛念せられ、は無量の智慧福徳の因縁の故に身心を具足して常に富樂

を受くるも諸の不可無し。

【一四】 智度に住する菩薩の智慧に就いて釋す。

舍利弗、佛に白して言さく、「世尊、何等か是れ菩薩摩訶薩の智慧なる。佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は是智慧の成就せるを用て十方恆河沙等の如き諸佛を見、法を聴き、僧を見、亦嚴淨の佛土を見る。菩薩摩訶薩は是智慧を以て佛想を作さず、菩薩想を作さず、聲聞辟支佛想を作さず。我想を作さず、佛國想を作さず。是智慧を用て檀波羅蜜を行するも亦檀波羅蜜を得ず、乃至般若波羅蜜を行するも亦般若波羅蜜を得ず、四念處を行するも亦四念處を得ず、乃至十八不共法を行するも亦十八不共法を得ざるなり。舍利弗、是を菩薩摩訶薩の智慧と名く。是智慧を用ふれば能く一切法を具足するも亦一切法を得ず。』
釋して曰はく、「是中に佛は二種の智慧を説きたまふ。一には破壊の諸法を分別して而も相を取らず、二には不著の心にして相を取らず、十方の諸佛を見て法を聴く。』問うて曰はく、「云何が檀波羅蜜を行じて、而も檀を得ざる。』答へて曰はく、「不得の檀の中には、若は一、若は異、若は實、若は空なり。是檀は和合の因縁より生じ、是檀の中に於て衆生をして富樂を得しめ、及び佛道を勧助す、是を以ての故に檀を行するも亦檀を得ず。得ざるの議は上説の如し。乃至、十八不共法も亦是の如し。是を菩薩の智慧、能く一切法を具足して而も諸法を得ずと名く。』

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行する時、五眼を淨む。肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼なりと。舍利弗、佛に白して言さく、「世尊、云何が菩薩摩訶薩の肉眼は淨なる。』佛、

【二五】 智度を行ずるの菩薩は五眼淨なる中、先づ肉眼淨といふを釋す。

舍利弗に告げたまはく、「有菩薩は肉眼もて百由旬を見、有菩薩は肉眼もて二百由旬を見、有菩薩は肉眼もて一閻浮提を見、有菩薩は肉眼もて二天下、三天下、四天下を見、有菩薩は肉眼もて小千世界を見、有菩薩は肉眼もて中千世界を見、有菩薩は肉眼もて三千大千世界を見る。舍利弗、是を菩薩摩訶薩の肉眼淨と爲す。」

問うて曰はく、「佛、何を以てか般若波羅蜜を行じて、五眼を生ずるを説かず、而も五眼を淨むるを説きたまふ。」答へて曰はく、「菩薩は先に肉眼有り、亦四眼の分有るも、諸界結使を以て覆ふが故に清淨ならず、鏡性には照明有るも垢の故に見えず、若し垢を除けば則ち照明は本の如くなるが如し。菩薩は六波羅蜜を行じて、諸の垢法を滅するが故に眼清淨なるを得。肉眼は業因縁の故に清淨なり。天眼は禪定及び業因縁の故に清淨なり。餘の三眼は無量の智慧福德を修する因縁の故に清淨なること最大なり。菩薩の肉眼は最も勝れて三千大千世界を見る。問うて曰はく、「若し三千大千世界の中には、百億の須彌山、諸山、鐵圍、山阜、樹木等、是れ障礙を事とす。云何が遍く見るを得ん。若し能く見るを得ば、何んが天眼を用ひん、若し見る能はずんば、此中に云何が三千大千世界を見ると説く。」答へて曰はく、「障礙を以ての故に見ず。若し障礙無ければ三千世界を見ること掌を覆るが如きと異なる無きを得ん。復次に有人言はく、「菩薩の天眼に二種有り、一には禪定力より得、二には先世の行業の果報として得。業報は天眼を生じて常に肉眼の中に在り。是を以ての故に三千大千世界に有ゆる物は、礙を爲す能はず、天眼に因つて障を聞き、

肉眼もて見るを得。是故に肉眼に得るを果報生の天眼と名け、常に現じて前に在り、心を攝するを待たず。』と。問うて曰はく、『佛を世尊と爲し、力皆周遍す。何を以てか但一の三千大千世界を見るのみにして、多くを見る能はざる。』答へて曰はく、『若し肉眼にして、能く三千大千世界に過ぎて復見る所有らば、何んが天眼を用ひん。肉眼は及ぶ能はざるを以ての故に天眼を修學す。復次に、三千大千世界は劫初に一時に生じ、劫盡くるとき一時に滅す。世界の外の無央數山句は皆是れ虚空なり。空中には常に風有り。肉眼と風とは相違す。相違するを以ての故に、異なる世界を過見するを得る能はず。或は菩薩有り、三千世界の境上に住し、其道數を計りて、亦應に他方の近き世界を見るべし。問うて曰はく、『菩薩及び佛は何を以てか、無量清淨の福德を集めて、肉眼をして遠く見る所有らしめざる。』答へて曰はく、『是肉眼の因縁は虚誑にして淨ならず、天眼の因縁は清淨なり。若し天眼無くんば當に肉眼を修して強ひて遠く見しむべし。』復次に、經中に説くが如くば、極めて遠きは三千世界を見るなり。佛法は不可思議にして經法甚だ多く、或は能く遠く見る、但此中には小しく遠く佛道を見るを説かず。菩薩は二千の中世界を見る。清淨の業因縁を種うる能はざるが故に、小にして復如かざる者は小千世界を見、復如かざる者は四天下、一須彌山、一日月處を見、又三天下、二天下、一天下、千山句乃至百山句を見る。是を最小の肉眼の淨と名く。問うて曰はく、『何を以てか九十、八十等の山句を説いて以て小と爲さざる。』答へて曰はく、『轉輪聖王の見る所は餘人に過ぎたり。又人は先世に然燈等

の因縁の故に、堅固の眼根を得て能く遠く見る所有り。遠しと雖も終に百由旬を見る能はず、是を以ての故に菩薩の小なる者は百由旬を見る。問うて曰はく、日月は上に在りて地を去ること四萬二千由旬、人皆能く見る、何を以てか百由旬を見る能はざらん。百由旬を見るは何んが稱するに足らん。答へて曰はく、日月は遠しと雖も自ら光明有り、還つて其形を照し、人は之を見るを得るも、餘色は然らず。又日月は遠きが故に、見ると雖も而も顛倒せり。所以は何ん。日月は方に圓きこと五百由旬なるに、而も今見る所は扇の如きに過ぎず、大なるを而も小と見るは顛倒にして實に非ず、菩薩の肉眼は則ち然らず。問うて曰はく、菩薩は既に肉眼を得て、能く何事を見ん。答へて曰はく、可見の色を見る、色の義は色衆中に廣説せり。

舍利弗、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩の天眼淨なる。佛、舍利弗に告げたまはく、菩薩摩訶薩の天眼は一切四天王の見る所を見、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天の見る所を見、梵天王の見る所、乃至阿迦尼吒天の見る所を見、菩薩の天眼の見る所の者は四天王乃至阿迦尼吒天の知らず、見ざる所なり。舍利弗、是菩薩摩訶薩の天眼は十方の恆河沙等の如き、諸佛の世界の中の衆生の、此に死し彼に生ずるを見る。舍利弗、是を菩薩摩訶薩の天眼は淨なりと爲す。

釋して曰はく、菩薩の天眼に二種有り、一には果報得、二には修禪得なり。果報得は、常に肉眼と合して用ひ、唯夜闇には、天眼のみ獨り用ふ。諸人は果報の天眼を得て四天下

【三】次に天眼淨といふを得ず。

を見、欲界の諸天は下を見て上を見ず、菩薩所得の果報の天眼は三千大千世界を見る。禪定し欲を離れたるの天眼の見る所は先に十力の天眼明中に説くが如し。菩薩は是天眼を用ひて十方の恆河沙等の如き世界中の衆生の生死、善惡、好醜及び善惡業の因縁を見て障礙せらるる無し。一切皆見、四天王乃至阿迦尼吒天の見る所、又能く之に過ぐ。是諸天の菩薩は、天眼の見る所を知る能はず。何を以ての故に、是菩薩は三界を出でて法性生身を得、菩薩の十力を得るが故なり。是の如き等の因縁もて菩薩の天眼は淨なり。餘の菩薩の天眼の論議は菩薩の五神通を讀する中に説くが如し。

舍利弗、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩の慧眼は淨なる。佛、舍利弗に告げたまはく、慧眼の菩薩は是念を作さず、法有り、若は有爲、若は無爲、若は世間、若は出世間、若は有漏、若は無漏なり。是慧眼の菩薩は法として見ざる無く、法として聞かざる無く、法として知らざる無く、法として講らざる無し。舍利弗、是を菩薩摩訶薩の慧眼は淨なりと爲す。

【七七】次に慧眼淨といふを釋す。初に慧眼の相を明す

釋して曰はく、肉眼は障外の事を見る能はず、又遠く見ること能はず、是故に天眼を求む。天眼は復能く見ると雖も、亦是れ虚誑にして一異の相を見、男女の相を取り、樹木等の諸物の相を取り、衆物和合の虚誑の法を見る。是を以ての故に慧眼を求むるに、慧眼の中には、是の如き過無し。問うて曰はく、若し爾らば何等か是れ慧眼の相なるや。答へて曰はく、有人言はく、一八聖道の中、正しく是慧眼の相を見、能く五受衆の實相を見る、

諸の顛倒を破するが故なり」と。有人言はく、「能く涅槃の慧を縁するを名けて慧眼と爲す。所縁は破壊すべからざるが故に、是智慧は虚妄に非ず」と。有人言はく、「三解脱門相應の慧、是を慧眼と名く。何を以ての故に、是慧は能く涅槃門を聞くが故なり」と。有人言はく、「智慧現前して能く實際を觀じ、了了に深く入り、通達して悉く知る、是を慧眼と名く」と。有人言はく、「能く法性に通達し、直に過ぎて礙無し」と。有人言はく、「定心にして諸法の相を知る、是の如きを慧眼と名く」と。有人言はく、「法空是を慧眼と名く」と。有人言はく、「不可得空中には亦法空も無し、是を慧眼と名く」と。有人言はく、「十八空は皆是れ慧眼なり」と。有人言はく、「癡と慧は一に非ず異に非ず、世間の法は出世間に異ならず、出世間の法は世間に異ならず、世間の法は即ち是れ出世間、出世間の法は即ち是れ世間なり。所以は何ん。異は不可得なるが故なり。諸觀は諸の心行を滅し、轉遷去滅する所無く、一切の語言世間の法相は涅槃の如くにして異ならず、是の如きの智慧、是を慧眼と名く。復次に、此中に佛自ら慧眼を説きたまはく、「菩薩は一切法中に有爲、若は無爲、若は世間、若は出世間、若は有漏、若は無漏等を念せず、是を慧眼と名く」と。若し菩薩は有爲、世間、有漏を見れば即ち有見の中に墮し、若し無爲、出世間、無漏を見れば、即ち無見の中に墮す。是有無の二見を捨て、以て戲論せず、慧を中道に於て行ずる、是を慧眼と名く。」

是慧眼を得れば法として見ざる無く、法として聞かざる無く、法として知らざる無く、

【是慧眼を得れば等】次に慧眼淨を明す。

法として識らざる無し。所以は何ん。是慧眼を得れば邪曲を破すればなり。諸法の無明、諸法の總相、別相も各皆是の如し。問うて曰はく、阿羅漢辟支佛も亦慧眼を得。何を以てか法として見ざる無く、法として聞かざる無く、法として知らざる無く、法として識らざる無く、法として別相なり。ざる無しと説かざるや。答へて曰はく、慧眼に二種有り、一には總相、二には別相なり。聲聞辟支佛は、諸法の總相を見る、謂ゆる無常、苦、空等なり。佛は、總相と別相の慧を以て、諸法を觀じたまふ。聲聞辟支佛は、慧眼有りと雖も、量有り、限有り。復次に、聲聞辟支佛の慧眼は諸法實相を見ると雖も、因縁少なきが故に慧眼も亦少く、遍く法性を照す能はず。譬へば燈油の柱は淨しと雖も、小なるが故に廣く照す能はざるが如し。諸佛の慧眼は、諸法實相を照して、其邊底を盡す。是を以ての故に、法として見ざる無く、法として聞かざる無く、法として知らざる無く、法として識らざる無し。譬へば劫盡の火は三千世界を燒くに、明にして照さざる無きが如し。復次に、聲聞辟支佛の慧眼にして、法として知らざる者無くんば、一切智人と何等の異有らん。菩薩は世世に、福德智慧に集めて苦行す、何んが施用せられん。問うて曰はく、佛は佛眼を用て、法として知りたまはざる無し、是れ慧眼に非ず、今云何が慧眼は法として知らざる無しと言ふ。答へて曰はく、一切法中に皆悉く明了なればなり。佛眼の中に説くが如く、法として見聞知識せざる無し。是を以ての故に肉眼、天眼、慧眼、法眼は、成佛の時、其本名を失して、但佛眼と名く。

譬へば闍浮提の四大河は、大海中に入れば、則ち其本名を失するが如し。何を以ての故に
肉眼は諸の煩惱、有漏業より生ずるが故に、虚誑にして實ならず、但佛眼には誑法無し。
天眼も亦禪定に従ひ、因縁和合して生ずるが故に、虚誑にして、實の如く事を見る能はず。
慧眼、法眼は、煩惱の習未だ盡きざるが故に、畢竟清淨ならざるが故に捨つ。佛眼の中
には、謬錯有る無く、其邊極を盡す、是を以ての故に、阿羅漢辟支佛の慧眼は、畢竟清
淨なる能はざるなり。故に法として見ざる無き能はず。問うて曰はく、「佛は現に果報を得
て、肉眼もて能く色を見たまへり、是事云何。」答へて曰はく、「肉眼は眼識を生ずと雖も、
而も佛は其用に随はず、以て實と爲したまはず。聖自在神通中に説くが如し。佛、阿羅に
告げたまはく、「見る所の好色中に、厭惡心を生じ、眼に悪色を見るも、不厭惡心を生じ、
或時は色を見て、汚穢、不汚穢を生ぜず、但捨心を生ず。是の如くなれば、則ち肉眼も施
す所の用無し」と。復次に有人言はく、「聖道を得る時は、五情清淨にして木に異なる」と。
と。復次に、諸法の畢竟空、及び諸法の通達無礙、是二を總じて慧眼と爲す。」

大智度論卷第三十九

大智度論釋往生品第四之下

卷第四十

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩の法眼は淨なる。』佛、舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩は法眼は以て知るなり、是人は隨信行なり、是人は隨法行なり、是人は空解脫門を行じ、是人は無相解脫門を行す。是人は無作解脫門を行じて五根を得、五根を得るが故に無間三昧を得。無間三昧を得るが故に解脫智を得、解脫智を得るが故に常に三結、有衆見、疑、齋戒取を斷ず。是人は名けて須陀洹と爲す。是人は思惟道を得て、婬患癡を薄くし、當に斯陀含を得べく、思惟道を増進し、婬患を斷じて阿羅漢を得。是人は空、無相、無作の解脫門を行じて五根を得、五根を得るが故に無間三昧を得。無間三昧を得るが故に解脫智を得、解脫智を得るが故に所有の集法は皆是れ滅法なるを知りて辟支佛と作ると、是を菩薩の法眼は淨なりと爲す。復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は知るなり、是菩薩は初發意に檀波羅蜜を行じ乃至般若波羅蜜を行す。信根、精進根、善根を成就し、純ら厚く方便力を用ふるが故に、衆生の爲に身を受けて、若は刹利の大姓に生じ、若は婆羅門の大姓に生じ、

【二】次に法眼淨といふを明し、文に就いて釋す。

薩摩訶薩の法眼は淨なりと爲す。

釋して曰はく、『菩薩摩訶薩は、初發心の時、肉眼を以て、世界の衆生の諸の苦患を受くるを見、心に慈愍を生じ、諸の禪定を學し、五通を修得し、天眼を以て、遍く六道中の衆生の、種種の身心の苦を受くるを見て、益憐愍を加ふるが故に、慧眼を求めて以て之を救濟せんとし、是慧眼を得已りて、衆生の心相の種種異なるを見、云何が衆生をして是實法を得しめんと。故に法眼を求めて衆生を引導し、法中に入らしむるが故に法眼と名く。謂ゆる是人は隨信行なり、是人は隨法行なりとは、初め無漏道に入るに鈍根なる者を隨信行と名く。是人は初め信力に依るが故に道を得、名けて隨信行と爲す。利根なる者を隨法行と名く、是人は諸法を分別するが故に道を得、是を隨法行と名く。是二人は、十五心中には、亦名けて無相行と爲し、是を過ぎて已往は、或は須陀洹と名け、或は斯陀含と名け、或は阿那含と名く。十五心中に疾速にして、人の能く其相を取る者無し。故に無相と名く。有人無始世界より來、性、常に質直にして、好んで實事を樂ぶ者、有人は好みて捨離を行する者、有人は世世常に善寂を好む者あり。實を好む者は、空解脱門を用て道を得、諸實中の空を以て第一と爲すが故なり。捨を行するを好む者は、無作解脱門を行じて道を得、善寂を好む者は、無相解脱門を行じて道を得。問うて曰はく、何を以てか五根を得と説く。』答へて曰はく、『有人の言はく、一切聖道を名けて五根と爲す。五根成立するが故に。八根は皆是れ善なりと雖も、而も三無漏根は別異有る無し。是を以ての故に但五根

【精進根】心を精にして善行を勤め勵むといふこと。

を説く、一果を取る時、相應の三昧を無間三昧と名く。是三昧を得已りて解脱智を得、是解脱智を以て三結を斷じ果證を得。有衆見とは五受衆中に於て我若は我所を生ず。疑とは三寶、四諦中に於ても信ぜざるなり。齋戒取とは九十六種の外道法中には是法を取りて苦の解脱を得んを望む。問うて曰はく、「見諦に斷ずる所は十結にして、須陀洹果を得。何を以ての故に但三を説いて七を説かざる。」答へて曰はく、「若し有衆見を説き已れば一切の見結を説く。經に、有衆見を六十二見の根本と爲すが故に、若し人我に著し、復我を思惟して、是を常と爲し、是を無常と爲すと説くが如し。若し無常と謂はば斷滅の中に墮して而も邪見を生じ、罪福有る無し。若し常と爲すと謂はば、常見の中に墮して、而も齋戒取を生じ道を得んと計望し、或は後世の福德を修す。此二事を得んと樂欲するが故に、戒を取り、苦樂の因縁を求むるが故に、天の所作と謂ひ、便ち見取を生ず。若し有衆見を説けば則ち是二見を攝す、邊見と邪見なり。若し齋戒取を説けば、已に見取を説く。餘の四結は、未だ根本を抜かざるが故に是を説かず。十結は、三界四諦所斷に於て、分別するに八十八あり。須陀洹乃至辟支佛なり。聲聞辟支佛道を分別するは、先に説くが如し。菩薩の法眼に二種有り、一には分別して、聲聞辟支佛の方便得道門を知り、二には菩薩の方便行道門を知る。聲聞辟支佛の事は、先に已に處處に説けり、今は當に菩薩法を分別すべし。若し菩薩は是菩薩の深く六波羅蜜を行じて、諸の煩惱を薄くするを知るが故に、信根と精進根を用ひ、及び方便して、衆生を度せんが爲の故に身を愛く。是菩薩は、生死の肉身にして、

未だ法性、神通、法身を得ず。是を以ての故に三根を説かず。未だ欲を離れざるが故に、今世に布施の功德、信根、精進根を行じ、後世に刹利の大家乃至他化自在天に生ず、先づ因を知りて後に果を知るなり。復次に、是菩薩の不退なる者は、先に説くが如し、不退轉の相も、亦後の阿鞞跋致品中に説くが如し。此と相違するを名けて退となす。不退の菩薩に二種有り、一には受記するもの、二には未だ記を受けざるものなり。首楞嚴三昧の四種の受記中に説くが如し。神通を具足すとは、十方恆河沙世界の中に於て一時に能く無量の身を變化し、諸佛を供養して法を聴き、説法して衆生を度す。是の如き等は佛を除いて、能く及ぶ者無し。是を末後身の菩薩と爲し、此と相違する者を具足せずと名く。復次に、各各自地中に、少くる所無きを名けて、具足と爲し、各各の地中に、未だ成就せざるは、是れ不具足なり。神通を得るに二種あり。有用の者と有不用の者となり。未だ神通を得ずとは、菩薩有り。新發意の故に未だ神通を得ず、或は未だ欲を離れざるが故に、懈怠の心の故に、餘法を行するが故に、是を未だ得ずと爲し、上と相違する。是を得と爲す。佛世界の故に、餘法を行するが故に、是を未だ得ずと爲し、上と相違する。是を得と爲す。佛世界を淨むると未だ世界を淨めざるとは、先に説くが如し。衆生を成就する者に二種有り、先づ自ら功德を成じ、然る後に衆生を度する者有り。先づ衆生を成就し、後に自ら功德を成ずる者有り。寶華佛の如きは、涅槃せんと欲する時、二菩薩の心を觀するに、彌勒、釋迦文菩薩は、彌勒菩薩は自らの功德を成就し、弟子未だ成就せず。釋迦文菩薩は、弟子を成就して、自身未だ成就せず。多人を成ずるは難く、自らを成ずるは則ち易し」と。

【悲門】菩薩が下
化衆生にして利他
に屬する功德なり
これあるが故に菩
薩は衆生を度して
涅槃に住せざるな
り。

是念を作し已りて、雪山の谷の寶窟の中に入り、身より光明を放ちたまへり。是時、釋迦文菩薩は、佛を見、其心清淨に、一足もて立つこと七日七夜にして、一偈を以て佛を讚す。是因縁を以ての故に、九劫を超越せり。是の如き等は、衆生を成就すると、衆生を成就せざる者を知るなり。諸佛の稱譽は先に説くが如し。此と相違するを名けて、稱譽せずと爲す。諸佛に親近する、無量の壽命の、無量の比丘僧純の菩薩は、僧と爲りて苦行を修せず、初品は未だ説かざるが如し。一生補處とは、或は相を以て知る者あり。阿私陀仙人の如きは、其身相を觀じて、今世の成佛を知れり、彌若婆羅門は、乳糜を見て、今日成佛する者の、應に食すべきを知り、遍吉菩薩、觀世音菩薩、文殊師利菩薩等の如きは、是菩薩の、諸佛の相の如くなるを見て、當に成佛すべきを知る。是の如き等は道場に坐する者なり。有菩薩は、菩薩の行處を見るに、地下に金剛地有りて、是菩薩を持す。又天龍鬼神の種種の供養の具を持し、送りて道場に至るを見る。是の如き等は道場に坐するを知る。魔有りとは、宿世に他の行道、及び種種の佛道を求むる因縁を遮し、慈を行ずるを喜ばず、空等の餘法を行ずるを好む。是の如き等の因縁もて、宿世に他の行道を破するを以ての故に魔有りて破壊す。問うて曰はく、「云何が末後身の菩薩は、惡業報を受け、魔來りて壞を爲す。答へて曰はく、「菩薩、種種の門を以て佛道に入る。或は悲門より、或は精進智慧門より佛道に入る。是菩薩は、精進智慧門を行じて、悲心を行ぜず、好く精進智慧を行ずるが故なり。譬へば貴人の、種種の好衣有りと雖も、或時は一を著して、餘を著せざ

【智慧門】先の悲と共に佛菩薩所具の一雙の徳なり。これは菩薩が上求菩提にして自利に屬する徳なり。これがあるが故に菩薩は自ら惑を斷じ、生死に住せざるなり。

【二】次に佛眼淨といふに就いて、初に佛眼を明す。

るが如し。菩薩も亦是の如し、種種の行を修して、以て佛道を求め、或は精進智慧の道を行じて、慈悲心を息む。行道を成ずる者は、増上慢の故なり。諸の長壽の天、龍、鬼神の方便を識らざる者は、惡行の因縁を作し、若し報を受けざるを見て、斷滅の見を生ず。是故に佛は現に報を受けたまへり。是故に罪の因縁無しと雖も、實の魔來るは、方便力を以ての故に、魔有るを現するなり。是の如き等の一切の聲聞、辟支佛、諸の菩薩の種種の方便門は、衆生をして道に入らしむ。是を法眼淨と名く。』

舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩の佛眼は淨なる。佛、舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩有り、佛道を求むるの心、次第に如金剛三昧に入りて、一切種智を得。爾時、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲を成就す。是菩薩摩訶薩は、一切種を用て、一切法の中に、法として見ざる無く、法として聞かざる無く、法として知らざる無く、法として識らざる無し。舍利弗、是を菩薩摩訶薩の、阿耨多羅三藐三菩提を得る時の、佛眼淨なりと爲す。是の如く、舍利弗、菩薩摩訶薩は、五眼を得んと欲せば、當に六波羅蜜を學すべし。何を以ての故に。舍利弗、是六波羅蜜の中には、一切善法、若し聲聞法、辟支佛法、菩薩法、佛法を攝すればなり。舍利弗、若し實語有り、能く一切善法を攝するは、般若波羅蜜是なり。舍利弗、般若波羅蜜は、能く五眼を生ず。菩薩の五眼を生ず。菩薩の五眼を學する者は、阿耨多羅三藐三菩提を得。』
釋して曰はく、『菩薩は十地の中に住して、六波羅蜜乃至一切種智を具足す。菩薩は如

【已に佛眼を等】
次に佛眼の所用を
明す。

金剛三昧に入りて、諸の煩惱の習を破し、即時に諸佛の無礙解脱を得て、即ち佛眼を生ず。謂ゆる、一切種智、十力、四無所畏、四無礙智、乃至大慈大悲等の諸の功德、是を佛眼と名く。問うて曰はく、「智慧は物を見る、是れ眼の相なり。云何が大慈悲等を名けて眼と爲す。」答へて曰はく、「諸の功德は、皆慧眼と相應するが故に、通じて名けて眼と爲す。復次に、慈悲心に三種有り、衆生縁と、法縁と、無縁となり。凡夫人は衆生縁なり。聲聞、辟支佛及び菩薩は、初は衆生縁にして後は法縁なり。諸佛は、善く畢竟空を修行するが故に名けて無縁と爲す。是故に慈悲をも亦佛眼と名く。已に佛眼を説けり。今佛眼の所用を説かん。是眼は法として見ざる、聞かざる、知らざる、識らざる無し。復次に有人謂はく、「十住の菩薩と佛とは、差別有る無し。遍吉、文殊師利、觀世音等の如きは、佛の十力の功德等を具足し、而も佛と作らず、廣く衆生を度するが爲の故なり。是故に疑を生ず」と。是を以ての故に佛眼の相は十方の衆生、及び諸法の中に、見ざる無く、聞かざる無しと説く。是諸の菩薩は、餘の菩薩より大なりと爲すも、佛に比すれば遍く知る能はず、月の光明は大なりと雖も、日に於ては則ち現ぜざるが如し。問うて曰はく、「眼は見相と爲す、云何が聞を説く。」答へて曰はく、「衆生の智慧は、六情生じて六塵を知る。人謂はく、「佛は聞かざる所有り。外の經書の中に、或は聞かざる所有りと言ふが如し」と。是故に「佛の智慧は、聞かざる所無く、又耳識の因縁は、智慧を生じ、智慧の知る所は、法として聞かざる無し」と言ふ。』問うて曰はく、「何を以ての故に三識の知る所を合して一と爲す。三識

の知る所は、別して三と爲す。眼を名けて見と爲し、耳を名けて聞と爲し、意の知るを名
 けて識と爲し、鼻舌身識を名けて覺と爲す。答へて曰はく、「是三識は助道の法多し、是故
 に別して説く、餘の三識は爾らず、是故に合説す。是三識は但世間の事を相る、是故に合
 して一と爲す。餘の三は亦世間を知り、亦出世間を知る、是故に別説す。復次に、是三識
 は但無記法を緣じ、餘の三識は、或は善を緣じ、或は不善を緣じ、或は無記を緣す。復次
 に、是三識は能く三乘の因縁を生ず。眼に佛及び佛弟子を見、耳に法を聞き、心に籌量し
 正憶念するが如し。是の如き等の種種の差別あり。是を以ての故に、六識の知る所の事を
 分ちて四分と爲す。一切種智とは、人の眼の如きは、近を見て遠を見ず、内を見て外を見
 ず、塵を見て細を見ず、東を見て西を見ず、此を見て彼を見ず、和合を見て散を見ず、生
 ずる時を見て滅を見ず、肉眼もて見るも天眼もて見ず。眼根は成就すれども、未だ欲を離
 れざる凡夫の人なるが故に天眼無し。天眼もて見るも慧眼もて見ず。凡夫の人は、天眼神
 通のみを得るが故に、慧眼無し。慧眼もて見るも、法眼もて見ず、未だ欲を離れざる聲聞
 の聖人は、種種に衆生を度するの道を知らざるが故に法眼無し。法眼もて見るも、佛眼も
 て見ず。菩薩は道種智を得て、種種に衆生を度するの道を知るも、未だ成佛せざるが故に、
 佛眼無きなり。復次に、肉眼、天眼もて見るも、慧眼、法眼、佛眼もて見ず。凡夫の人は、
 眼根成就し、天眼神通を得るのみなるが故に、慧眼、法眼、佛眼無し。肉眼、慧眼もて見
 るも、法眼、佛眼もて見ず。眼根成就せる聲聞の聖人は、種種に衆生を度するの道を知ら

ざるが故に、法眼無く、聲聞の人なるが故に佛眼無し。肉眼、法眼もて見るも、佛眼もて
 見ず、初めて無生忍を得て、未だ法性生身を受けざる菩薩は、道種智を得れども、未だ
 成佛せざるが故に、佛眼無きなり。天眼、慧眼もて見るも、法眼、佛眼もて見ず。欲を離
 れたる聲聞の聖人は、天眼、神通を得れども、菩薩に非ざるが故に道種智無く、道種智無
 きが故に、法眼無く、聲聞の人なるが故に佛眼無し。天眼、法眼もて見るも、佛眼もて見
 ず。菩薩は神通を得て、種種に衆生を度する道を知れども、未だ成佛せざるが故に、佛眼
 無し。慧眼、法眼もて見るも、佛眼もて見ず。菩薩は無生法忍を得、無生法忍を得已りて、
 能く一切衆生の得道の因縁を觀じ、種種の道を以て、之を度脱するも、未だ成佛せざるが
 故に、佛眼無きなり。復次に、肉眼、天眼、慧眼もて見るも、法眼、佛眼もて見ず、眼根
 成就せる聲聞の聖人は、天眼、神通を得れども、道種智無きが故に、法眼無く、聲聞の人
 なるが故に佛眼無し。天眼、慧眼、法眼もて見るも、佛眼もて見ず。法性正身の菩薩は、
 六神通を具し、種種の道を以て、衆生を度すれども、未だ成佛せざるが故に、佛眼無きな
 り。復次に、肉眼、天眼、慧眼、法眼もて見るも、佛眼もて見ず。初めて無生法忍を得た
 る菩薩は、未だ肉身を捨てず、菩薩の神通、無生法忍を得て、道種智を具足すれども、未
 だ成佛せざるが故に、佛眼無きなり。是の如き等は、法として見聞覺識せざる無しと名け
 ず、若し佛眼を以て諸法を觀する、是を見ざる所無く、聞かざる所無く、覺せざる所無く、
 識らざる所無しと名く。五塵を義に隨つて分別するも亦是の如し。

【三乘等の諸の等】
次に五眼淨を結す

三乘等の諸の善法、是五眼の因縁たる諸の善法は、皆六波羅蜜に攝し、是六波羅蜜は、般若波羅蜜を本と爲す。是を以ての故に般若波羅蜜は、能く五眼を生ずと説く。菩薩は漸漸に是五眼を學し、久しからずして當に佛と作るべし。

舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行する時、神通波羅蜜を修し、是神通波羅蜜を以て、種種なる如意の事を受け、能く大地を動し、一身を變じて無數の身と爲し、無數の身を還一身と爲し、隱顯自在にして、山壁樹木皆過ぐるに、無礙なること空中を行くが如く、水を履むこと地の如く、虛を凌ぐこと鳥の如く、地中に出沒すること水に出入するが如く、身より烟炎を出すこと、大火聚の如く、身中より水を出すこと、雲山の水流の如くす。日月の大徳威力の當り難きを、而も能く摩捫し、乃ち梵天に至るまで身自在を得るも、亦是如意神通に著せざるなり。神通の事及び己身は皆不可得なり。自性空なるが故に、自性を離るるが故に、自性は無生なるが故に是念を作さず、我は如意神通を得たり。薩婆若心たるを除く一と。是の如く、舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、如意神通智證を得。是菩薩は天耳の淨くして人耳に過るを以て、二種の聲、天聲と人聲を聞くも、亦是天耳神通に著せず、天耳と聲と及び己身は皆不可得なり。自性空なるが故に、自性を離るるが故に、自性は無生の故に、是念を作さず、我是天耳有り。薩婆若心たるを除く一と。是の如く、舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、天耳神通智證を得。是菩薩は如實に他の衆生の心を知る。若は欲心は如實に欲心と知り、離欲心は如實に離欲心と

知る。瞋心は如實に瞋心と知り、離瞋心は如實に離瞋心と知り、癡心は如實に癡心と知り、離癡心は如實に離癡心と知り、渴愛心は如實に渴愛心と知り、無渴愛心は如實に無渴愛心と知り、有愛心は如實に有愛心と知り、無愛心は如實に無愛心と知り、攝心は如實に攝心と知り、散心は如實に散心と知り、小心は如實に小心と知り、大心は如實に大心と知り、定心は如實に定心と知り、亂心は如實に亂心と知り、解脫心は如實に解脫心と知り、不解脫心は如實に不解脫心と知り、有上心は如實に有上心と知り、無上心は如實に無上心と知り、亦是心に著せず。何を以ての故に、是心は心相に非ず、不可思議なるが故に、自性は空なるが故に、自性を離るるが故に、自性は無生なるが故なり。證を得たり」と、薩婆若心爲るを除く。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、他心神通智證を得。是菩薩は宿命智證通を以て一心より乃ち百心に至るまでを念じ、一日より乃ち百日に至るまでを念じ、一月より乃ち百月に至るまでを念じ、一歳より乃ち百歳に至るまでを念じ、一劫より乃ち百劫に至り、無數百劫、無數千劫、無數百千劫より乃ち無數百千萬億劫世に至るまでを念じ、我は是處、是の如きの性、是の如きの名字にして、是の如きの生、是の如きの食、是の如きの久住、是の如きの壽限なりし、是の如く長壽なりし、是の如く苦樂を受けたり、我は是中に死して、彼處に生じ、彼處に死して、是の處に生ぜりと。相有り、因縁有り、亦是宿命神通にも著せず、宿命神通の事及び已身は皆不可得なり。自性は空なるが故に、自性を離るるが故に、自性は無生なるが故なり。

是念を作さず、我は是宿命神通有りと、薩婆若心たるを除く。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、宿命神通智證を得。是菩薩は天眼を以て衆生の死時、生時、端政、醜陋、惡處、好處、若は大、若は小を知り、衆生は業因縁に隨ふを知る。是諸の衆生は身の惡業を成就し、口の惡業を成就し、意の惡業を成就するが故に聖人を謗毀し、邪見の因縁を受くるが故に身壞し命終して惡道に墮し、地獄の中に生ず。是諸の衆生は身の善業を成就し、口の善業を成就し、意の善業を成就して聖人を謗毀せず、正見の因縁を受くるが故に命終して善道に入り天上に生ず、亦是天眼通にも著せず、天眼通の事及び己身は、皆不可得なり。自性は空なるが故に、自性は離るるが故に、自性は無性なるが故なり。是念を作さず、我は是天眼神通有りと、薩婆若心爲るを除く。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、天眼神通智證を得。亦十方如恆河沙等の世界の中の衆生の生死より乃至天に生ずるを見る、上の四神通も亦是の如し。是菩薩摩訶薩の漏盡神通は漏盡神通を得と雖も、聲聞辟支佛地に墮せず。乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで亦異法に依らず、亦是漏盡神通に著せず、漏盡神通の事及び己身は皆不可得なり。自性空なるが故に、自性を離るるが故に、自性は無生なるが故なり。是念を作さず、我は漏盡神通を得たり」と。薩婆若心爲るを除く。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、漏盡神通智證を得。是の如く、舍利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、神通波羅蜜を具足し、神通波羅蜜を具足し已りて阿耨多羅三藐三菩提を増益す。

【三】六度を行ずる菩薩が神通波羅蜜を具足して阿耨多羅三藐三菩提を増益すといふを釋す。

釋して曰はく、大海の中に、種種の寶珠有りて、能く毒を殺す有り、能く鬼を遮する有り、能く病を破する有り、能く寒熱飢渴を除く有り、能く人の願ふ所に隨うて、皆能く與ふる者有るが如し。是の如き等の無量無數の寶珠有り。大乘の海中にも、亦是の如く種種の菩薩の寶有りて、菩薩の能く三惡道を破する有り、能く三善門を開く有り、能く五眼を生ずる有り、能く神通波羅蜜を修行する有り。是故に諸の菩薩は、能く奇特希有の事を爲す。謂ゆる空相を多く、地相を少く取れば、則ち能く意に隨ひて地を動し、一身を能く多とし、多身を能く一とす。虛空の中には、常に微塵有りて中に滿つ。是人は欲を離れ、福德の因縁あるが故に、諸の微塵を集めて、以て諸身の爲に皆相似ならしむ。有人言はく、一諸の非人は、是離欲の菩薩を恭敬し、其身中に入り、其意の欲する所に隨うて變化し、則ち皆能く化す」と。轉輪聖王は未だ欲を離れざるも、少しく福德の因縁有るが故に、諸の鬼人すら尙其使と爲る、何に況んや欲を離れ無量心を行する人をや。復次に、是心相は、住する處有ること無く、若は内、若は外、若は大、若は小なり。禪定の力を以ての故に、其心調柔にして疾く諸身に廻く、還りて復亦速なり。譬へば千頭の龍の眼耳各二千有り、及び千の口有るが如く、心は一時に用ふ、龍は是れ體身なるすら尙爾なり、何に況んや菩薩をや。有人言はく、「坐禪の人の事は、所有の勢力不可思議なり。故に一身を無量身と爲し、無量身を一身と爲す。石壁に無礙なる者は、石壁に虚空の相を取り、微塵開闢して概を土に入るるが如し。水を履む者は、地相を取ること多きが故に、水を履むこと地の

如し。水相を取ること多きが故に地に入ること水の如く、火相を取ること多きが故に、身より烟炎を出す、日月を捫摸する者は、神通不可思議の力の故に、手をして日月に及ぼしむ。火定に入るが故に、月を冷やかならしむる能はず、水定に入るが故に、日を熱からしむる能はず。問うて曰はく、「是神通力、乃至四禪の中、此には何を以てか但梵世に至りて身自在を得と言ふ。答へて曰はく、「此は先に已に説けり。梵は是れ初門なるが故に、梵世と言へば、則ち一切の色界を攝す。又世人は、皆梵王を眞びて以て世界の主と爲すが故に、又は菩薩は、欲界の散亂心に於て、其自在を現するを欲せず、是故に乃至離欲の人の中に能く所作有り。是の如く神通の相は、無量無數なれども、解し易きが爲の故に、少く譬喩を説く。諸の外道は、此神通に於て二事の錯有り。一には吾我の心を起し、我能く是事を起すと、而して傲慢を生ず。二には是神通に著す。譬へば貧人の寶に著するが如し。是を以ての故に、外道の神通は、聖人の神通に及ばず。菩薩は是神通力に於て、一切法は、自性不生なりと知るが故に著せず、但一切種智を念す。衆生を度せんが爲の故なり。餘の五神通も亦是の如し。其法の分別の如きは、先づ其相を説いて後皆空を説く。六神通の餘の義は、讚菩薩品中の五神通の義に説くが如し。是六神通は、廣く衆生を利益するを以ての故に、具足するを得と説く。是の如き神通は阿耨多羅三藐三菩提を増益す。

圖 舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行ずる時、檀波羅蜜に住して薩婆若の道を淨む。畢竟空にして堅心を生ぜざるが故なり。舍利弗、菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行ず

【四】 智度を行ずる菩薩が六度を住して、阿婆若の道を淨め、乃至一切種智を得といふを釋す。

る時、尸羅波羅蜜に住して薩婆若の道を淨む。畢竟空にして罪、不罪に著せざるが故なり。舍利弗、菩薩摩訶薩有り。般若波羅蜜を行ずる時、瞋提波羅蜜に住して薩婆若の道を淨む。畢竟空にして瞋らざるが故なり。舍利弗、菩薩摩訶薩有り。般若波羅蜜を行ずる時、憍波羅蜜に住して薩婆若の道を淨む。畢竟空にして不亂不味なるが故なり。舍利弗、菩薩摩訶薩有り。般若波羅蜜を行ずる時、禪波羅蜜に住して薩婆若の道を淨む。畢竟空にして不亂不味なるが故なり。舍利弗、菩薩摩訶薩有り。般若波羅蜜を行ずる時、般若波羅蜜に住して薩婆若の道を淨む。畢竟空にして疑心を生ぜざるが故なり。是の如く、舍利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、六波羅蜜に住して薩婆若の道を淨む。畢竟空なるが故に、不來不去なるが故に、不施不受なるが故に、非戒非犯なるが故に、非忍非瞋なるが故に、不進不怠なるが故に、不定不亂なるが故に、不智不愚なるが故なり。爾時に菩薩摩訶薩、布施と不布施、持戒と犯戒、忍辱と瞋恚、精進と懈怠、定心と亂心、智慧と愚癡とを分別せず、毀害輕慢と恭敬とを分別せず。何を以ての故に、舍利弗、無生法中には毀を受くる者有る無く、害を受くる者有る無く、輕慢恭敬を受くる者有る無ければなり。舍利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行じて、是の如き諸の功德を得、聲聞辟支佛の得る有る無き所なり。是の功德を具足し、衆生を成就し、佛世界を淨め、一切種智を得。釋して曰はく、「是菩薩は、初發意に般若波羅蜜を行じ、漸く餘の功德を行す。謂ゆる檀波羅蜜等なり。菩薩は檀波羅蜜に住して薩婆若の道を修治し、一切法の畢竟空を觀じて、

慳貪の心を生ぜず、是二事を以ての故に、薩婆若の道を開く。所以は何ん。畢竟空の中に
 は、慳貪有る無く、慳貪の根本を斷するが故に、檀波羅蜜を具足し、檀波羅蜜を具足する
 が故に、般若波羅蜜を莊嚴す。乃至般若波羅蜜は、畢竟空なるが故に、常に癡心を生ぜざ
 るなり。所以は何ん。佛自ら説きたまはく、「一切法は不來不去なり。無施無受なるが故
 なり、不智不愚なるが故なり」と。」

問うて曰はく、「若し能く是の如く觀じて六波羅蜜を行ぜば、何等の利益を得る。」答へて
 曰はく、「此中に佛自ら説きたまはく、「此菩薩は施與する所有り、施與する所無きを念ぜ
 ず、若し施有るを念すれば、虛妄の法中に入り、又布施に著して心に憍慢を生ず。若し施
 す所無きを念すれば、即ち邪見の中に墮す」と、是布施の論議は、是れ佛法の中の初門な
 り。云何が無乃至不念、有癡、有慧と言はん。是人は、金剛山の如く、四面より風起るも
 動ぜしむる能はず。是菩薩は、爾時、若し罵詈譁歎ありとも、心に異なり有る無し。何を
 以ての故に、此中に佛自ら説きたまはく、「無生法中には、罵る者有る無く、害する者有
 ること無く、恭敬する者無し」と。聲聞、辟支佛は、害を加ふる者有らんに、深く慈悲心
 有る能はず、若し默然し、若し遠離す。菩薩は則ち然らず、能く深く慈心を加へ、之を愛
 する子の如く、方便もて之を度す。是故に一切の聲聞、辟支佛に勝りて、能く一切衆生を
 教化し、忍辱慈悲の方便深きが故に、願に隨うて業の因縁を清淨にするが故に、能く佛
 世界を淨め、是法を具足するが故に、久しからずして當に一切種智を得べし。」

【五】下略して菩薩の相を説かんとして菩薩の等心を得等といふを釋す

復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行ずる時、一切衆生の中に等心を生じ、一切衆生の中に等心を生じ已りて一切諸法の等を得、一切諸法の等を得已りて一切衆生を諸法等の中に立つ。是菩薩摩訶薩は現世に十方諸佛の爲に念ぜられ、亦一切の菩薩、一切の聲聞辟支佛の爲に念ぜらる。是菩薩は、所生の處に在りて、眼に終に不愛の色を見ず、乃至意不愛の法を覺せざるなり。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を滅せざるなり。

釋して曰はく、佛若し廣く、諸の菩薩の相を説きたまはば、則ち劫を窮むるも盡きざらん。今佛此品の末に、略して其相を説きたまふ。是相は、是れ諸の菩薩の通行する所と爲すに足る。謂ゆる大悲の故に、初めて一切衆生を度せんとの心を發すが故に、諸佛の等心を學して衆生を觀るが故に、一切の法は自性空なるが故に、是の如き等の因縁の故に、一切衆生の中に於て等心を生じ、是等心を得已りて一切諸法の等を得るなり。一切法の等とは、先に衆生の等、法の等の義を説くが如し。今當に更に説くべし。四生の衆生は慈愍し、一心に利益を欲するを衆生の等と名け、四念處を觀するにも、亦身を見ざるを名けて法の等と爲す。四正勤等、諸の四法も亦是の如し。復次に五道中の衆生を念するに、皆無常、老、病、死に没す。是を衆生の等と名く。是信等の五根を行じ、若し五神通を以て一心に是衆生を度せんと欲する、是を法の等と名く。復次に、衆生の中に、忍辱、慈悲等の福を行ずれば、功德無量なり。功德無量なるが故に、心柔軟に、心柔軟なるが故に、

疾かに禪定を得、禪定を修するが故に、心如意調柔に、心如意調柔なるが故に、世間の長短、男女、白黒等を破して、一相の法に入る、謂ゆる無相なり。是法の等を得じりて、一切衆生をして、是法の等を得しむ。是菩薩、是二の等を得て、無量の福德、智慧を成就するが故に、現世の果報を得、諸佛の爲に念せられ、餘人に念せらる。愛著して念を生ずる者は、皆是虚妄なり、唯諸佛の念のみ是を實の念と爲す、愛著せざるが故なり。是人は、諸佛すら尙念じたまふ、何に況んや聲聞辟支佛菩薩をや。聲聞辟支佛の結を斷ざる者すら猶尙愛念す、何に況んや凡夫の未だ欲を離れざる者をや。菩薩、福德の因縁より生ずるを以ての故に、是の如き等の無量の今世の果報を得。後世の所生の處には、眼に終に悪色を見ざるなり。悪色とは、謂ゆる能く苦受を生ずる聲、香、味、觸、法、乃至能く憂心を生ずる者なり。六欲天の六情、所對の淨妙の五欲の如きは、意に隨つて歡喜す。衆生の少福德を植ゑて、天上に生ずるすら是の如し。何に況んや菩薩は福德、實智慧、無量無邊にして、十方の諸佛、諸餘の賢聖の爲に念せらるるをや。

是般若波羅蜜品を説きたまふ時、三百の比丘、座より起ちて著くる所の衣を以て佛に上り、阿耨多羅三藐三菩提心を發す。佛、爾時、微笑し、種種の色の光を口中より出たまふ。爾時、慧命阿難、座より起ち、衣服を整へ、合掌し、右の膝を地に著け、佛に白して言さく、「佛は何の因縁ありてか微笑したまふ」と。佛、阿難に告げたまはく、「是三百の比丘は、是より已後六十一劫に、當に佛と作るを得べく、皆號して大相と名けん。是三

【六〇】得益受記を説く中、先づ會中の比丘が所著の衣をもて佛を布施するを釋す。

百の比丘は此身を捨てて當に阿閼佛國に生ずべし。及び六萬の欲天子は、皆阿釋多羅三藐三菩提心を發し、彌勒佛の法中に於て出家し佛道を行せん。是時、佛の威神の故に此間の四部の衆は、十方に向あたり各千佛を見る。是十方世界は嚴淨にして此娑婆世界の及ぶ能はざる所なり。爾時、十千人は願を作して言はく、「我等は淨願行を修し、淨願行を以ての故に、當に彼佛の世界に生ずべし。爾時、佛、是善男子の深心なるを知り、復微笑して種種の色の光を口中より出したまふ。阿難、衣服を整へ合掌して、佛に白さく、「佛、何の因縁ありてか、微笑したまふ。」佛、阿難に告げたまはく、「汝は十千人を見るや不や。」阿難言はく、「見る。佛言はく、「是十千人は此に於て壽終り、當に彼世界に生ずべし。終に諸佛を離れず、後に當に佛と作るべく、皆莊嚴王と號せん。」

問うて曰はく、「佛の結戒の如くんば、比丘の三衣は應に少くべからず。是諸の比丘は、何を以ての故に尸羅波羅蜜を破りて、檀波羅蜜を作す。答へて曰はく、「有人言はく、「佛、十二歳を過ぎて、然る後に結戒したまへり。是比丘の衣を施す時は、未だ結戒したまはざりき」と。有人言はく、「是比丘は、淨く衣を施すの心生する有りて、當に受くべし。是を以ての故に施せり」と。有人言はく、「是諸の比丘多知多識にして、即ち能く更に事を得て宿を經ず」と。復次に有人言はく、「是諸の比丘、佛の諸の菩薩は、檀波羅蜜を行じて、諸の功德の力勢無量なるが故に、般若波羅蜜と相應するを得と説きたまふを聞き、心大に勇躍して、即ち衣を以て施し、復他念無し、故に破戒にあらず」と。復次に諸

の比丘、佛法は畢竟空にして著する所無く、法愛を斷ず、世諦の爲の故に結戒して、第一義には非ずと知る。是比丘、佛に従つて第一義、及び布施等の、六波羅蜜を聞き、諸の菩薩の、種種の大威力もて衆生を愍念するを聞けども、諸の煩惱の爲に覆はれて、是菩薩の功德を得る能はず、是故に大悲心を生じ、衆生の爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の意を發す。是を以ての故に衣をもつて布施せり。若し人、貪欲、瞋恚、怖畏、邪見を以て、恭敬せず、心に佛語を輕んじて而も戒を持たざる、是を名けて破戒と爲す。是諸の比丘は、都て此心無し、是故に破戒の罪無し。

【七】次に佛が微笑したまふ因縁を釋す。

問うて曰はく、「佛は何を以ての故に微笑したまひし。」答へて曰はく、「笑に種種有り。有人、妓樂の事を見て笑ひ、有人内に瞋恚を懷いて笑ひ、有人憍慢の故に笑ひ、有人、物を輕んずるが故に笑ひ、有人事を辨じて歡喜するが故に笑ひ、有人、作すべからざるを而も作すを見るが故に笑ひ、有人詐を懷きて善を揚ぐるが故に笑ひ、有人、希有の事を見るが故に笑ふ。佛、今比丘の一の婁婆を以て施すが故に、未來世の中に佛道を成辦するを見て、是を希有と爲す。是を以ての故に笑ひたまへり。問うて曰はく、「阿難、何を以てか常に佛の笑ひたまふを問ひ、而も餘の比丘、問はざる。」答へて曰はく、「是諸の比丘は、佛に親近せず。又微難の心多きが故に、敢て自ら問はず。阿難は善く人の相を知り、諸の比丘の意を知り、又佛の笑ひたまふを見て疑ふが故に、是念を作さく、「佛、衆生相無く、法相有る無く、三界は夢の如く、幻の如しと知りたまふ。今何事ありてか能く佛をして笑

はしむる。佛は須彌山王、大地、大海の如し、小因縁を以ての故に動じたまはず」と。是を以ての故に、笑の因縁を問ふ。

佛、阿難に告げたまはく、「業因縁の果報は、相續して不可思議なり。是三百の比丘は、却つて後、六十一劫にして、當に佛と作るを得べく、號して大相、施すに手を以て物を擧げ顯示して相と爲す、故に因を以て名と爲す」と名けん」と。六十一劫の中、是人は利根にして、佛の說法に値ひ、般若波羅蜜と相應するが故に、是諸人は疾かに佛と作るを得。是諸の比丘は、未だ天眼を得ざるが故に、自ら疑つて何處に生ずるを知らず。恐らくは諸の功德を集むるを得る能はず、道に至るを得ざらん。是故に佛は、是身を捨てて、當に阿闍佛の世界に生ずべしと言ふ。六萬の欲天子は、必ず是れ宿世に、福德の因縁を共にするが故に、三百の比丘と俱に、阿耨多羅三藐三菩提心を發さん。是れ彌勒の度すべき所なり。是故に佛は、彌勒の時に當に出家すべしと記したまへり。今佛は、諸の比丘の阿闍佛の世界に生ぜんと記したまふが故に、諸人は咸諸佛の清淨世界を見んと欲す。是故に佛は大衆をして、而り各千佛を見しめたまふ。是四衆は、是清淨莊嚴の佛世界を見、諸佛の身の須彌山より大なる者を見、一生補處の菩薩の大衆は圍繞し、梵音聲は無量無邊の世界に徹するを以て、各自ら其身を鄙薄にし、衆生を憐愍するが故に、無量の佛法を求むるが爲に、願を作さく、「彼佛の世界に生ぜん」と。清淨世界は、行願の中に説くが如く、笑の因縁は先に説くが如し。是十千人は、此に於て壽終り、當に彼國に生ずべし。彼國に生

する、行業の因縁を具足するに隨ふが故に、此間に深厚無量の福徳を集むるが故に、終に諸佛を離れず、諸の莊嚴せる佛世界を見て、發心するが故に、皆莊嚴王佛と號す。

大智度論釋數度品第五

爾時、慧命舍利弗、慧命目犍連、慧命須菩提、慧命摩訶迦葉、是の如き等の諸多の知識の比丘、及び諸の菩薩摩訶薩、諸の優婆塞優婆夷、座より起ちて合掌し、佛に白して言さく、世尊、摩訶波羅蜜は、是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり、尊波羅蜜、第一波羅蜜、勝波羅蜜、妙波羅蜜、無上波羅蜜、無等波羅蜜、無等等波羅蜜、如虛空波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり。世尊、自相空波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり、世尊、自性空波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり、諸法空波羅蜜、無法有法空波羅蜜、一切功德波羅蜜、成就一切功德波羅蜜、不可壞波羅蜜は是れ諸の菩薩摩訶薩の般若波羅蜜なり、諸の菩薩摩訶薩は是れ般若波羅蜜の無等等の布施を行じ、無等等の檀波羅蜜を具足し、無等等の身を得、無等等の法を得、謂はる阿耨多羅三藐三菩提なり。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜も亦是の如し。世尊の本、亦復此般若波羅蜜を行じ、無等等の六波羅蜜を具足し、無等等の法を得、無等等の色、無等等の受、想、行、識を得、佛は無等等の法輪を轉じたまふ。過去の佛も亦是の如く、此般若波羅蜜を行

【八】本品は舍利
 佛會中の聖衆佛
 說をきいて領解稱
 歎するを明すもの
 釋の中初に阿羅漢
 等の讚歎を明す。

じ、無等等の布施を具足したまひ、乃至無等等の法輪を轉じたまへり。未來世の佛も、亦此般若波羅蜜を行じて、當に無等等の布施を作したまふべく、乃至當に無等等の法輪を轉じたまふべきなり。是を以ての故に、世尊、菩薩摩訶薩にして、一切法の彼岸に度らんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。唯世尊、是般若波羅蜜を行する菩薩摩訶薩をば、一切世間の天及び人、阿修羅は應當に禮敬供養すべしと。佛、衆の弟子及び諸の菩薩摩訶薩に告げたまはく、「是の如く是の如し、諸の善男子、般若波羅蜜を行する者をば、一切世間の天及び人、阿修羅は、應當に禮敬供養すべし。何を以ての故に。菩薩の來るに因るが故に、人道、天道、刹利の大家、婆羅門の大家、居士の大家、轉輪聖王、四天王天、乃至阿迦尼吒天を出生し、須陀洹乃至、阿羅漢、辟支佛、諸佛を出生し、菩薩の來るに因るが故に、世間に便ち、飲食、衣服、臥具、房舍、燈燭、摩尼、眞珠、毘琉璃、珊瑚、金銀等の諸の寶物ありて生ずるなり。舍利弗、世間の所有の樂具、若し人中の、若し天上の、若し離欲樂の、是一切の樂具は皆菩薩に由りて有り。何を以ての故に。舍利弗、菩薩摩訶薩は菩薩道を行する時、六波羅蜜に住して自ら布施を行じ、亦布施を以て衆生を成就し、乃至自ら般若波羅蜜を行じ、亦般若波羅蜜を以て衆生を成就するなり。舍利弗、是故に菩薩摩訶薩は、一切衆生を安樂にせんが爲の故に世に出現すと。」

【九】問うて曰はく、「五千の比丘中には上に千餘の上座あり。謂ゆる漚樓頻螺迦葉等なり。何を以てか止此四人の名のみを説く。」答へて曰はく、「是四比丘は是れ現世の無量の福田に

【無淨定】空理に安住して他と諍はざる禪定の謂。
 【十二頭陀】頭陀(Thūṭa)抖擻と譯す。衣食住に對する三種の貪著を抖擻する行法なり。十二は下の如し。一納衣(糞掃衣)、二三衣(但三衣)、三乞食、四不作餘食、五一坐食、六一搗食、七阿蘭若處、八塚間坐、九樹下坐、十露地坐、十一齋坐、十二常坐不臥。

【無等等】アサマサ(Asamantam)佛道或は佛の尊號。佛道は一切に超越して等しきない、唯佛と佛と等しければ等といふ。

して、舍利弗は、是れ佛の右面の弟子、目犍連は、是れ佛の左面の弟子、須菩提は、無淨定を修し、空行第一にして、摩訶迦葉は十二頭陀を行ずること第一なり。世尊は衣を施し、坐を分ち、常に深心に衆生を憐愍したまへり。佛在世の時、若し人有り、今世の果報を求めんと欲する者は是れ四人を供養すれば、輒ち願の如くなるを得。是故に是多知多識の比丘、及び四衆は、般若波羅蜜を讚す。問うて曰はく、『是阿羅漢は、最後身にして所作已に辦ぜり。何を以てか復般若波羅蜜を讚歎する。』答へて曰はく、『人は皆、阿羅漢は無漏道を得と知り、菩薩は智慧大なりと雖も、結使未だ斷ぜざるを以ての故に貴ばず、又阿羅漢、慈悲心有り、佛を助けて化を揚ぐるを以ての故に、之を以て證と爲す。佛道は世間の中に於て最も大なり。是般若は能く此事を興ふるが故に、名けて大波羅蜜と爲し、一切法の中に於て智慧第一なるが故に、尊波羅蜜と言ひ、能く正しく五度を導くが故に、第一波羅蜜と名け、五度は及ばざるが故に、名けて勝波羅蜜と爲し、五情の如きは、意の能く自を利し、人を利するに及ばざるが故に、名けて妙波羅蜜と爲す。一切法の中に過ぐる者有る無きが故に、無上波羅蜜と名け、法として同じき者ある無きが故に、無等波羅蜜と名け、諸佛を無等と名け、般若波羅蜜より生ずるが故に、無等等波羅蜜と名け、是般若波羅蜜は、畢竟清淨にして、戲論を以て破壊すべからざるが故に、如虚空波羅蜜と名く。般若波羅蜜の中には、一切法の自相は不可得なるが故に、名けて自相空波羅蜜と爲し、此波羅蜜の中には、一切法は自性空なるが故に、諸法は因縁和合の生にして、自性有る無きが故に、名けて自性空

波羅蜜と爲し、諸法の中には自法有る無きが故に、名けて諸法空波羅蜜と爲す。此衆生空と、法空とを以ての故に、諸法を破して所有無からしめ、無所有も亦無所有なり、是を無法有法空波羅蜜と名く。菩薩は是般若波羅蜜を行じて、功德として而も攝せざる者有ると無し。日の出づる時は、華の敷かざる無きが如きが故に、開一切功德波羅蜜と名け、是菩薩の心中に、般若波羅蜜の日出づれば、一切諸の功德を成就して、皆清淨の般若波羅蜜ならしむ、是れ一切善法の本なり。是故に名けて、成就一切功德波羅蜜と爲し、世間法として、能く傾動する者有る無きが故に、不可壞波羅蜜と名く。是れ諸の阿羅漢の讚歎する因縁なり。謂ゆる三世の佛は、皆般若波羅蜜より生じたまふ。謂ゆる無比の布施乃至無比の智慧は、世間の中に等しき者有ること無きが故に、無比と言ひ、是六波羅蜜は畢竟清淨にして、過有る無きが故に、名けて無比と爲す。無比は即ち是れ無等等なり。復次に、無等等とは諸佛を無等と名け、諸佛と等しきが故に名けて無等等と爲す。問うて曰はく、「三世諸佛の中に、已に釋迦文佛有り、何を以てか別に説く。」答へて曰はく、「今座上の衆は、皆釋迦文佛に由りて得度し、恩を感ずる重きが故に、別に説くなり。舍利弗の説けるが如し、我師出でたまはずんば、我等は永く盲冥爲らん」と。諸の阿羅漢は、三世の諸佛の、皆般若波羅蜜中より出でたまふを知る。是を以ての故に諸の阿羅漢は、「世尊、諸の菩薩摩訶薩にして、遍く一切法を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を習ふべし」と説けり。阿羅漢の讚歎するや、菩薩は時に心に恭敬を生ず。是故に禮敬供養と説く。天、

【九】次に佛の印可を明す。

【阿迦尼吒】アカニシタ(Akanishita)色究竟天のこと。

【三福】世福とは孝養父母、本師長、慈心不殺と修十善業にして世俗根の故に名あり。戒福は受持三歸、具足衆戒、不犯威儀にして佛戒の故に名あり。行福とは發菩提心、深信因果、不謗大乘、勸進行者にして大乘の行法なるが故に名あり。

人、阿修羅とは、三善道を説くなり。三惡道は、別に知る所無きが故に説かず。
佛、羅漢の讚歎するを聞き已り、佛、印可して言はく、「是の如く、是の如し、應當に般若波羅蜜を行ずる者を禮敬供養すべし」と。汝は一切智慧無しと雖も、而も説くこと、錯らざるが故に、重ねて「是の如く、是の如し」と言へり。何を以ての故に。此中に、佛、自ら説きたまはく、「菩薩に因るが故に人道、天道、乃至一切諸の菩薩を生ず、一切衆生を安樂にせんが爲の故なり」と。刹利の大臣、乃至阿迦尼吒を説き、須陀洹、乃至諸佛は、皆先に説くが如し。問うて曰はく、「若し菩薩に因りて飲食等及び諸の寶物有らば、人は何んが力作して生を求め、諸の辛苦を受けて乃ち得るや。」答へて曰はく、「飢餓助の時、人は其功力を説くと雖も、亦得る所無し。衆生の罪重きを以ての故なり。菩薩、世世に布施、持戒、善心を讚歎す。是三福の因縁の故に、上中下有り、上なる者は念ずれば便即ち得、中なる者は、人中に尊重せられ、供養、自ら至り、下なる者は、施の功力によりて乃ち得。是を以ての故に、菩薩に因りて得と説くは、實にして虚ならず。樂の因縁は、甚だ多く稱げて計ふべからず、今佛は略して天樂、人樂、涅槃樂、皆菩薩に由りて得と説きたまへり。此中に佛、自ら説きたまはく、「菩薩、六波羅蜜に住して、自ら布施を行じ、亦衆生をして布施を行ぜしむ。衆生、自ら布施を行すと雖も、菩薩の教導無ければ、則ち行する能はず」と。問うて曰はく、「解脱の樂を除いて、此二種の樂は、是れ衆生の結使を生ずる處にして、貪欲の因縁の故に悲を生ず、菩薩、何を以てか此結使の因縁を教導する。」

答へて曰はく、「菩薩には咎無し、所以は何ん。菩薩は慈悲清淨心にして、衆生に樂の因縁を與へ、修福の事を教ふればなり。若し衆生、清淨にして、福徳を行する能はざる者あらんに、菩薩に於て何の咎かあらん。人の好心にして井を作り、盲人中に墮ちて死せんに、作者に罪無きが如く、人の好食を設けて人に施し、量を知らざる者、多く食して患を致さんに、施す者に罪無きが如し。復次に若し諸佛菩薩にして、衆生に福徳を作すの因縁を教へずんば、則ち天無く、人無く、阿修羅無く、但三惡道を長じて、罪より出づるを得る者無けん。復次に、衆生は、樂の因縁の故に貪を生じ、貪の因縁の故に患を生じ、患の因縁の故に、苦を生じ、苦の因縁の故に罪を生ず。今衆生は、第五の罪の中より免れんと欲す。是故に樂を與ふ。復次に定んで樂の因縁は、貪欲を生ずるに非ず、或は正憶念の故に、樂を善福の因縁と爲し、邪憶念の故に貪欲を生ず、今正憶念の樂の爲の故に、福徳の因縁を生ぜしむ。復次に唯佛一人のみ錯無く失無し。是菩薩は、未だ佛道を成就せず、未だ佛眼を得ざるが故に、三種の樂を以ての故に、度すべき衆生を教化す。諸佛は但解脱の樂を以て衆生を教化したまふ。

大智度論釋舌相品第六

爾時、世尊、舌相を出して遍く三千大千世界を覆ひ、其舌相より無數無量の色を出し、

【二】以下第二段に空義を明す爲の起説として本品あるを釋す。

出したまふ。阿難、佛に白して言さく、「世尊、何の因縁の故に微笑したまふ。」佛、阿難に告げたまはく、「是衆中の十萬億人は諸法中に於て無生忍を得たり、是諸人は未來世に於て、六十八億劫を過ぎて、當に佛と作るを得べく、劫を華積と名け、佛を普覺花と號せん。」

問うて曰はく、「初品の中に、佛、已に舌相を出したまへり。今何を以てか、重ねて出したまふ。」答へて曰はく、「是事は、一日一坐の説に非ず、前に舌相を出すは、大會を和合し一切衆生を度せんが爲に、舍利弗の問に佛の答へたまひしなり。今此時を異にし、更に餘人の爲にす。須菩提は巧に空を説くが爲の故に、佛命じて更に説かしむ。是故に舌相より光明を出したまふ。問うて曰はく、「舍利弗は智慧第一なり、竟に何の少くる所ありてか復須菩提に命じたまひし。答へて曰はく、「佛弟子は衆多なり、一人説き已れば、次に一人に命じたまふ。譬へば、王者は群臣衆多なれば、次第に共に語るが如し。問うて曰はく、「若し爾らば、日連迦葉等甚だ多し、何を以てか次第して皆與に語らざる。答へて曰はく、「此經は智慧と名く、舍利弗は智慧第一なり、是故に問ふ。須菩提は種種の因縁有り」と雖も、二因縁大なるを以ての故なり。一には好みて無諍定を行じ、常に衆生を慈悲し、廣く衆生を度する能はずと雖も、而も常に菩薩を助け、菩薩の事を以て、佛に問ふ。二には好んで深く空法を行す。是般若の中には多く空法を説けり。是故に須菩提に命じて、是舌相の光明を説かしむ。諸の菩薩の來往の義、乃至華臺、供養の義は、先に説くが如し。爾時、衆生は是大神通力、謂ゆる十方如恆河沙等の世界の中の諸佛を見、諸佛及び釋迦文佛

は、無量の光明を出したまふを以ての故に、衆生は佛の神力を蒙りて、舌相の三千大千世界を覆ふを見、及び諸佛の大衆中に在りて、法を説きたまふを聞見して、即ち無生法忍を得、是願を作して言はく、「我等が未來世の、神通變化も亦當に今佛の如くなるべし」と。佛、衆生の無生法忍を得たるを知るが故に、微笑したまへり。笑の義に佛の答へたまへるは、先に説くが如し。是人は、六十八億劫を過ぎて佛と作るとは、是人は、十方の諸の菩薩の、七寶の華を持し來りて、供養するに、變じて七寶の華臺と成るを見る、是を見已るに因りて、其心清淨にして無生法忍を得、是故に佛と作る。時に劫を乾積と名け、佛を皆覺華と號す。

大智度論釋三假品第七

卷第四十一

龍樹菩薩造

後秦龜茲國鳩摩羅什詔を奉じて譯す

爾時、佛、慧命須菩提に告げたまはく、「汝、當に諸の菩薩摩訶薩に般若波羅蜜を教ふるに、諸の菩薩摩訶薩の成就すべき所の般若波羅蜜の如くすべし。即時に諸の菩薩摩訶薩及び聲聞の大弟子、諸天等は是念を作さく、「慧命須菩提は自ら智慧力を以て當に諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜を説くべきか、是れ佛力と爲んや。」慧命須菩提は諸の菩薩摩訶薩、大弟子、諸天の心に念する所を知り、慧命舍利弗に語るらく、「敢て佛弟子の説く所の法、教授する所は皆是れ佛力なり。佛の説法したまふ所の法相に相違言せず。是善男子は是法を學し、此法を證するを得。佛の説は燈の如し。舍利弗、一切の聲聞、辟支佛は實に力の能くする無し。菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜を説く。爾時、慧命須菩提、佛に白して言さく、「世尊の説きたまふ所の菩薩、菩薩の字は何等の法をか菩薩と名くる。世尊、我等は是法の菩薩と名くるを見ず。云何が菩薩に般若波羅蜜を授へん。」佛、須菩提に告げたまはく、「般若波羅蜜も亦但名字のみ有り、名けて般若波羅蜜と爲す。菩薩、菩薩の字も亦但名字のみ有り。是名字は内に在らず、外に在らず、中間に在らず。須菩提、譬

へば、我名を説くは和合の故に有りて、是我名は不生不滅にして但世間の名字を以ての故に説くが如く、衆生、壽命、生者、養育、衆數人、作者、使作者、起者、使起者、受者、使受者、知者、見者等は和合法の故に有り。是諸の名は不生不滅にして、但世間の名字を以ての故に説くが如し。般若波羅蜜、菩薩、菩薩の字も亦是の如く、皆和合の故に有り。是れ亦不生不滅にして但世間の名字を以ての故に説く。須菩提、譬へば身は和合の故に有り、是も亦不生不滅にして但世間の名字を以ての故に説くが如し。須菩提、譬へば色受想行識も亦和合の故に有り、是も亦不生不滅にして但世間の名字を以ての故に説く。須菩提、般若波羅蜜、菩薩、菩薩の字も亦是の如し、皆是れ和合の故に有り、是も亦不生不滅にして但世間の名字を以ての故に説く。須菩提、譬へば眼の如きは和合の故に有り、是も亦不生不滅にして、但世間の名字を以ての故に説く。是眼は内に在らず、外に在らず、中間に在らず、耳、鼻、舌、身、意も和合の故に有り。是も亦不生不滅にして但世間の名字を以ての故に説く。色より乃至法も亦是の如し。眼界は和合の故に有り、是も亦不生不滅にして、但世間の名字を以ての故に説く。乃至意識界も亦是の如し。須菩提、般若波羅蜜、菩薩、菩薩の字も亦是の如し、皆和合の故に有り、是も亦不生不滅にして但名字を以ての故に説く。是名字は内に在らず、外に在らず、中間に在らず。須菩提、譬へば内身の如きは名けて頭と爲すも但名字のみ有り。頂、肩、臂、背、肋、髀、脚は是れ和合の故に有り、是法及び名字も亦不生不滅にして但名字を以ての故に説く。是名字も亦内に在らず、

【一】下須菩提に命じて空を説かしたまふ中、先づ名受法の三悉く假説なるを明す中、初に、須菩提をして空を説かしたまふ所以を明す。

外に在らず、中間に在らず。須菩提、般若波羅蜜、菩薩の字も亦是の如し、皆和合の故に有り、但名字を以ての故に説く。是も亦不生不滅にして内に在らず、外に在らず、中間に在らず。須菩提、譬へば外物、草木、枝葉、莖節の如く、是の如く一切は但名字を以ての故に説く。是法及び名字も亦不生不滅にして、内に非ず、外に非ず、中間に非ずして住す。須菩提、般若波羅蜜、菩薩の字も亦是の如し、皆和合の故に有り。是法及び名字も亦不生不滅にして、内に非ず、外に非ず、中間に非ずして住す。須菩提、譬へば過去の諸佛の名字の如きは和合の故に有り、是も亦不生不滅にして但名字を以ての故に説く。是も亦内に非ず、外に非ず、中間に非ずして住す。般若波羅蜜、菩薩の字も亦是の如し。須菩提、譬へば夢、響、影、幻、炎、佛の化したまふ所は皆是れ和合の故に有り、但名字を以て説く。是法及び名字も亦不生不滅にして、内に非ず、外に非ず、中間に非ずして住す。般若波羅蜜、菩薩の字も亦是の如し。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を修行して名も假の施設なり、受も假の施設なり、法も假の施設なり、是の如く應當に學すべし。

(一七二)

問うて曰はく、一佛に自ら説きたまはず、諸の菩薩摩訶薩の稱徳あり、智慧あり、利根にして、諸の聲聞に勝れたり。何を以ての故に、須菩提に命じて説かしたまへる。答へて曰はく、一先の吾相中に、已に二因縁有るが故に、須菩提をして説かしたまへり。復次に、佛の威徳を尊重し、畏敬する心の故に、敢て佛に問はず、畏んで自ら説かず。復次に佛、衆中の心に疑ふ所、衆人の佛を敬ひ慕るが故に、敢て問を發せざるを知りたまへ

り。所以は何ん。衆生、佛身を見るに、須彌山に過ぎ、舌は三千大千世界を覆ひ、身より
 種種無量の光明を出したまふ。是時、衆會は心に皆驚怖し、敢て問を發せず。各各自ら
 念すらく、「我當に云何が佛より法を聞かん」と。是を以ての故に、佛、須菩提に命じ、衆
 人の爲に法を説かして言はく、「汝が説く所の者は、皆是れ佛力なり」と。經中に説くが
 如し。復次に、般若波羅蜜に二種有り。一には聲聞、菩薩に共して合説し、二には但諸
 の法身の菩薩の與に説く。雜へて説くが爲の故に、須菩提を首と爲し、及び彌勒、舍利弗、
 釋提桓因に命じたまふ。爾時、衆會、佛の須菩提に命じて説かしたまふと聞いて、心
 皆驚疑す。須菩提、衆人の心を知り、舍利弗等に告げて言はく、「一切の聲聞の説く所知
 る所は、皆是れ佛力なり。我等當に佛の威神を承けて、衆人の爲に説くべし。譬へば傳語
 の人の如し。所以は何ん。佛の説きたまふ所の法の、法相と相違背せざればなり。是弟子
 等、是法を學して證を作す。敢て所説有るは皆是れ佛力なり。我等の所説は、即ち是れ佛
 説なり。所以は何ん。現に佛前に在りて説けばなり。我等は智慧の眼有りと雖も、佛法に
 値はずんば、則ち見る所無し。譬へば夜輪道を行かんに、人の燈を執る無ければ、必ず
 過ぐるを得ざるが如し。佛も亦是の如し、若し智慧の燈を以て我等を照したまはまれば、
 則ち見る所無けん」と。又舍利弗に告ぐ、「一切の聲聞、辟支佛、實には力無きも、能く諸
 の菩薩の爲に般若波羅蜜を説く、況んや我一人をや」と。所以は何ん。菩薩の智慧は、甚
 深にして、問答玄遠なり。諸餘の淺近の法を、菩薩の邊に於て説くすら猶難し、何に況ん

【二】次に名受法の三畢竟空なるを釋す。

や深法をや。人の能く一斛の飯を食する有りて、一斗を有する者より索め、以て飯を除かんと欲せんに、是れ除く能はざるが如し。是を以ての故に聲聞辟支佛は、力無くして能く菩薩の爲に般若を説くと説く。須菩提は大剛なり。菩薩も尊貴なれども、佛は亦然も須菩提をして、實相の法中に於て説かんと欲せしめたまふべし。是故に言はく、「一切法の中に、菩薩を求むるに不可得なり。菩薩不可得なるが故に、字も亦不可得なり。菩薩、菩薩の字は不可得なるが故に、般若波羅蜜も亦不可得なり。是三事不可得なるが故に、我云何が當に菩薩に般若波羅蜜を教ふべき」と。問うて曰はく、「佛、須菩提に命じて、諸の菩薩の爲に般若を説かしめたまふに、而も須菩提は菩薩無しと言ひ、佛と相反せり。佛は何を以てか之に同じたまへる。答へて曰はく、「二種の説有り。一には著心の説、二には不著心の説なり。今須菩提は不著心を以て空を説くに、佛は之を訶したまはず。復次に、須菩提は、常に空三昧を行じて、諸法の空を知るが故に、佛、須菩提に告げて、諸の菩薩の爲に、般若波羅蜜を説かしめたまふ。

而も菩薩は畢竟空なり。是故に須菩提は驚いて言はく、「云何が菩薩と名けん」と。佛、即ち述成したまはく、「菩薩是の如く發心してより已來、乃ち佛道に至るまで、皆畢竟空なるが故に不可得なり。若し是の如く教ふるは、是れ即ち菩薩に般若波羅蜜を教ふるなり」と。復次に、凡そ二法有り。一には名字、二には名字の義なり。火の如く能く照し、能く燒くは、是れ其義なり。照すは是れ造色、燒くは是れ火大にして、是二法の和合するを名

けて火と爲す。若し是二法を離れて火有らば、更に應に第三の用有るべし。燒くを除き、照すを除いて、更に第三の業無し。是を以ての故に、二法の和合せるを假に名けて、火と爲すを知る。是火の名は二法の内に在らず、何を以ての故に、是法は二にして、火は是れ一なればなり。一は二と爲らず、二は一と爲らず、義を以て二と名くるも、法は相合せず。所以は何ん。若し二法合せば、火と説く時應に口を燒くべく、若し離るれば、火を求めて應に水を得べし。是の如き等の因縁もて内に在らざるを知る。若し火は二法の外に在らば、火の名を聞いて、二法中に火想を生ずべからず。若し兩中間に在らば、則ち依止する處無し。一切有爲の法は、依止する處有る無し。若し兩中間に在らば、則ち知るべからず。是を以ての故に火は三處に在らず、但假名のみ有り。菩薩も亦是の如し、二法の和合するを菩薩と名く。謂ゆる名色なり。色と事は異なり、名と事は異なる。若し定んで菩薩有らば、應に更に第三の事有るべし。而も事有る無ければ、則ち假名は是れ菩薩なるを知る。菩薩の名も亦是の如し、内に在らず、外に在らず、兩中間に在らず。是中に、佛は譬喩もて説きたまはく、「五衆和合するが故に、名けて我と爲すが如し。實我は不可得なり。衆生、乃至知者、見者は、皆是れ五衆の因縁の和合より假名の法を生ず。是諸法は、實に不生不滅にして、世間は但名字を用ひて説くのみ。菩薩、菩薩の字、般若波羅蜜も亦是の如し、皆是れ因縁和合の假名の法なり」と。是中に佛、更に譬喩を説きたまへり。有人言はく、「但五衆和合して、衆生有り、而も衆生は空にして、但五衆の法のみ有り」と。佛言はく、「衆

生なまは空くうなり、五衆ごしゆも亦また和合わがふするが故ゆゑに假かりに名字なまうぢ有り。十二處じふにちゆ、十八界じふはちがいも亦是またの如ごとし」と。
 復次またつぎに、菩薩ぼさつの二種ふたしゆ有り。一いちには坐禪ざぜん、二にには誦經じゆきやうなり、坐禪ざぜんの者ものは、常つねに身みを觀くわんずらく、
 「骨等こつたうの諸分しよぶん和合わがふするが故ゆゑに、名なづけて身しんと爲なす」と。即すなはち所觀しよくわんを以もつて、譬喩へいごと爲なして言いはく、
 「頭かぶは、骨分こつぶんの和合わがふの故ゆゑに、名なづけて頭かぶと爲なし、脚あしは骨分こつぶんの和合わがふの故ゆゑに名なづけて脚あしと爲なし、頭脚かぶあし
 の骨等こつたうの和合わがふの故ゆゑに、名なづけて身しんと爲なす。一いち推尋すいじんするに、皆みな根本こんぽん無し」と。所以ゆゑは何ん、
 此こゝは是こゝれ常つねに習なひ、常つねに觀くわんするが故ゆゑに、以もつて譬喩へいごと爲なせばなり。坐禪ざぜんせざる者ものは、草木そうもく、
 枝葉えだ、華實けしつを以もつて喩たとと爲なすなり。過去こわこの諸佛しよぶつの如ごときも、亦また但ただ名字なまうぢのみ有り、是こゝ名字なまうぢを用もち
 説とくべし。十譬喩じゆへいごも亦また但ただ名字なまうぢのみ有り。菩薩ぼさつの義ぎも亦是またの如ごとし。十喩じゆごの義ぎは先まづに説とくが如ごと
 し。菩薩ぼさつは應まをに是こゝの如ごとく、三さん種しゆの波羅聶提ばらなつだいを學まなすべし。五衆ごしゆ等の法ほふは、是こゝを法波羅聶提ほふばらなつだいと
 名なづけ、五衆ごしゆの因緣いんねん和合わがふするが故ゆゑに、名なづけて衆生しゆじやうと爲なし、諸骨しよこつ和合わがふするが故ゆゑに、名なづけて頭骨かぶこつ
 と爲なし、根莖こんけい枝葉えだ和合わがふするが故ゆゑに、名なづけて樹じゆと爲なすが如ごとく、是こゝを受波羅聶提うへばらなつだいと名なづけ、是こゝ名
 字なまうぢを用もちひて、一いち法ほふの相さうを取り、是こゝ二種ふたしゆを説とく、是こゝを名字なまうぢ波羅聶提ばらなつだいと爲なす。復次またつぎに、衆
 の微塵みぢちんの法ほふ和合わがふするが故ゆゑに、塵法ちんほふ生なする有り、微塵みぢちん和合わがふするが故ゆゑに、露色ろしき有あるが如ごとし。是
 を法波羅聶提ほふばらなつだいと名なづく。法ほふに從したがつて法有ほふあるが故ゆゑに、是こゝ塵法ちんほふ和合わがふして名字なまうぢ有りて生なず。能よく照
 すと、能よく燒やくとをもて火ひの名字なまうぢ有りて生なずるが如ごとし。名色なみしき有あるが故ゆゑに人ひとと爲なす、名色なみしき
 是こゝれ法ほふ、人ひとは是こゝれ假名けななり。是こゝを受波羅聶提うへばらなつだいと爲なす。色しきを取り、名なを取とるが故ゆゑに、名なづけて
 多おほく名字なまうぢの邊へんを受うくと爲なす。更さらに名字なまうぢ有り、梁やう、椽せん、瓦等ゐたうの名字なまうぢの邊へんに、更さらに屋やの名字なまうぢ有

りて生ずるが如し。樹枝、樹葉の名字の邊に、樹の名有りて生ずるが如し。是を名字波羅
 毘提と爲す。行者は先づ名字波羅毘提を壞して、受波羅毘提に到り、次に受波羅毘提を破
 りて、法波羅毘提に到り、法波羅毘提を破して、諸法實相の中に到る。諸法實相は、即ち
 是れ諸法及び名字の空般若波羅蜜なり。

【釋】

復次に、須菩提、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、色の名字、是れ常なるを見

ず、受想行識の名字、是れ常なるを見ず、色の名字、無常なるを見ず、受想行識の名字、
 無常なるを見ず、色の名字、樂なるを見ず、色の名字、苦なるを見ず、色の名字、我なる
 を見ず、色の名字、無我なるを見ず、色の名字、空なるを見ず、色の名字、無相なるを見
 ず、色の名字、無作なるを見ず、色の名字、寂滅なるを見ず、色の名字、垢なるを見ず、
 色の名字、淨なるを見ず、色の名字、生なるを見ず、色の名字、滅なるを見ず、色の名字、
 内なるを見ず、色の名字、外なるを見ず、色の名字、中間住なるを見ず、受想行識も亦是
 の如し。眼色、眼識、眼觸、眼觸因緣生の諸受、乃至意法、意識、意觸、意觸因緣生の諸
 受も、亦是の如し。何を以ての故に、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じて、般若波羅蜜の
 字、菩薩、菩薩の字、有爲性の中にも亦見ず、無爲性の中にも亦見ざればなり。菩薩摩訶
 薩は、般若波羅蜜を行するに、是法、皆分別を作さず。是菩薩は、般若波羅蜜を行じ、不
 壞法の中に住し、四念處を修する時、般若波羅蜜を見ず、般若波羅蜜の字を見ず、菩薩を
 見ず、菩薩の字を見ず、乃至十八不共法を修する時、般若波羅蜜を見ず、般若波羅蜜の字

を見ず、菩薩を見ず、菩薩の字を見ず。菩薩摩訶薩、是の如く、般若波羅蜜を行ずる時、但諸法實相を知る。諸法實相とは、無垢無淨なり。是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、當に是知を作すべし、「名字は假の施設なり」と。假の名字を知り已りて、色に著せず、受想行識に著せず、眼乃至意に著せず、色乃至法に著せず、眼識に著せず、乃至意識に著せず。眼觸に著せず、乃至意觸に著せず。眼觸因緣生の受、若は苦、若は樂、若は不苦不樂に著せず、乃至意觸因緣生の受、若は苦、若は樂、若は不苦不樂に著せず。有爲性に著せず、無爲性に著せず、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜に著せず、三十二相に著せず、菩薩身に著せず、菩薩の肉眼に著せず、乃至佛眼に著せず、智波羅蜜に著せず、神通波羅蜜に著せず、内空に著せず、乃至無法有法空に著せず。眞實衆生に著せず、淨佛世界に著せず、方便法に著せず。何を以ての故に。是諸法には、著する者無く、著する法無く、著する處無く、皆無なるが故なり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、一切法に著せず、便ち檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜を増益し、菩薩の位に入りて、阿耨多羅致地を得。菩薩の神通を具足し、一佛國に遊ぶより一佛國に至り、衆生を成就し、諸佛を恭敬し、尊重し、讚歎し、佛世界を淨むるを爲し、諸佛を見て供養し、供養の具、善根を成就するが故に、意に隨つて悉く得。亦諸佛の説きたまふ所の法を聞き、聞き已りて乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至り、終に忘失せず。諸の陀羅尼門、諸

薩ならんや。佛、須菩提に告げたまはく、善い哉善い哉、是の如し。須菩提、菩薩摩訶薩、衆生不可得なるが故に般若波羅蜜も亦不可得なり。當に是學を作すべし。須菩提、意に於て云何、色は是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。受想行識は是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。須菩提、意に於て云何、色の常、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。受想行識の常、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。色の無常、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。受想行識の無常、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。色の樂、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。受想行識の樂、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。色の苦、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。受想行識の苦、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。色の我なる、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。受想行識の我なる、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。色の非我なる、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。受想行識の非我なる、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。須菩提、意に於て云何、色の空なる、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。受想行識の空なる、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。色の非空なる、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。受想行識の非空なる、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。色の相、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。受想行識の相、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。色の無相なる、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。受想行識の無相なる、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。色の作なる、是れ菩薩の義なりや不や。不、世尊。受想行識の作なる、是

佛、須菩提に告げたまはく、『汝は何等の義を觀てか、色は菩薩の義にあらず、受想行識は菩薩の義にあらず、乃至色受想行識の無作なるは、菩薩の義にあらず、乃至老死も亦是の如しと言ふや。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、色は畢竟不可得なり、何に況んや無色是れ菩薩の義ならんや。受想行識も亦是の如し。世尊、色の常なるは畢竟不可得なり、何に況んや色の無常なるはれ菩薩の義ならんや。乃至識も亦是の如し。世尊、色の樂なるは畢竟不可得なり。何に況んや色の苦なるはれ菩薩の義ならんや。乃至識も亦是の如し。世尊、色の我なるは畢竟不可得なり。何に況んや色の非我なるはれ菩薩の義ならんや。乃至識も亦是の如し。世尊、色の有なるは、畢竟不可得なり。何に況んや色の空なるはれ菩薩の義なることをや。乃至識も亦是の如し。世尊、色の相は、畢竟不可得なり。何に況んや色の無相なるはれ菩薩の義ならんや。乃至、識亦是の如し。世尊、色の作なるは、畢竟不可得なり。何に況んや色の無作なるはれ菩薩の義ならんや。乃至識も亦是の如し。』佛、須菩提に告げたまはく、『善い哉善い哉、是の如し。須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずるに、色の義は不可得なり。受想行識の義の不可得なる、乃至無作の義不可得なるは、當に是般若波羅蜜を學すと作すべし。須菩提、汝は、「我は法を見ざるをば、菩薩と名く」と言へり。須菩提、諸法は諸法を見ず、諸法は法性を見ず、法性は諸法を見ず、法性は地種

【三】法性と空と合せず等といふを明す。

以て法性に達するを得ん。

【四】復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、法性と空と合せず、空と法性と合せず、是の如く習應する、是を般若波羅蜜と相應すと名く。

【五】釋して曰はく、「菩薩は法性は是れ空なりと觀せず、空は是れ法性なりと觀せず、空を行じて法性を得、法性を緣じて空を得。是を以ての故に異なる無し。所以は何ん。是二は畢竟空なるが故に。」

【六】復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、眼界は空と合せず、空は眼界と合せず、色界は空と合せず、空は色界と合せず、眼識界は空と合せず、空は眼識界と合せず、乃至意界は空と合せず、空は意界と合せず、法界は空と合せず、空は法界と合せず、意識界は空と合せず、空は意識界と合せず。是故に舍利弗、是空と相應するを名けて、第一相應と爲す。

【三】十八界と空と合せずといふを釋す。

【七】釋して曰はく、「眼界は空と合せず、空は眼界と合せずとは、眼は是れ有、空は是れ無なり。空と有と云何が合せん。復次に、菩薩は種種の因緣を分別して是眼を散滅するに、眼は則ち空なり。空にして眼の名無く、本に因るが故に有り、眼は空なり、空も亦無分別なり。是眼の空は是れ眼の空に非ず、是れ則ち眼と空と合せず、又空は眼の因緣より生ぜず、何を以ての故に、是二法は本自ら空なるが故に。乃至意識界も亦是の如し。問うて曰はく、「此中何を以てか五業等の諸法を説かずして但十八界を説く。」答へて曰はく、「應に説

【四】第一習相應す。いふに就いて明

くべくして、或時は誦寫する者忘失す。復有人言はく、「若し十八界を説けば則ち一切法を攝す。有衆生は、心色の中に於て錯り、心法の中に錯らず、應に十八界を聞いて度するを得べし。是故に但十八界を説くなり。」

問うて曰はく、何を以てか名けて第一習相應と爲す。答へて曰はく、「空は是れ十方諸佛の深奥の藏なり、唯一の涅槃門にして更に餘門無く、能く諸の邪見戲論を破す。是相應は壞すべからず、破すべからず、是故に名けて第一と爲す。復次に、佛は自ら第一因縁を説きたまふ。謂ゆる、

舍利弗、空を行ずる菩薩摩訶薩は、聲聞辟支佛地に墮せず、能く佛土を淨め、衆生を成就し、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得。舍利弗、諸の相應中、般若波羅蜜相應を最第一、最尊、最勝、最妙と爲し、上を行無しと爲す。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜相應、謂ゆる空、無相、無作を行すればなり。當に是菩薩は記を受くるが如くして異なる無く、若は近く記を受くるを知るべし。舍利弗、菩薩摩訶薩の是の如く相應する者は、能く無量阿僧祇の衆生の爲に、益を作すこと厚し。是菩薩摩訶薩は、亦是念を作さず、「我般若波羅蜜と相應す、諸世は當に我に記を授けたまふべく、我當に近く記を受くべし。我當に佛土を淨むべし。我阿耨多羅三藐三菩提を得て、當に法輪を轉すべし」と。何を以ての故に。是菩薩摩訶薩は、法有りて法性を出すを見ず、亦法有りて般若波羅蜜を行するを見ず。亦法有りて諸佛の記を授くるを見ず。亦法有りて阿耨多羅三藐三菩提を得るを見ず。

と言へり。菩薩は、衆生の空にして、不可得なるを知るが故に、應に般若波羅蜜を行すべし。色は是れ菩薩の義、乃至無作、畢竟空も、亦是の如し。須菩提は、諸法の深空の中に入りて、疑はざるが故に、能く諸の菩薩を益するが故に、佛は讚じて、「善い哉善い哉」と言へり。菩薩の法は、應に是の如く、一切法の不可得空、般若波羅蜜を學すべし。須菩提の説くが如くんば、「我是法を見ざるをば、名けて菩薩と爲す」と。佛言はく、「但菩薩のみ獨り見るべからざるに非ず、都て法の法を見る者有ること無し。無性は無量にして見るべからざるが故に。是故に諸法は法性を見ず。諸法は、因縁和合して生じ、自性有る無く、畢竟空なるが故に、法性は諸法の色性を見ず、色性は法性を見ず。法性の色性乃至識性を見ざるも、亦是の如し。五衆の性は、法性と同名なるが故に、名けて性と爲す。十二處、十八界、有爲法、無爲法も、亦是の如し。略して因縁を説く。有爲の性を離れて無爲の性を説くを得ず。無爲の性を離れて有爲の性を説くを得ず。是二法の中に、一切法を攝するが故に、是菩薩は、一切法を見ずと雖も、亦怖畏せず。何を以ての故に、見る所有り、見ざる所有れば、即ち恐懼有り、若し都て見る所無ければ、即ち畏るる所無ければなり。五衆乃至十八不共法なり」と。

問うて曰はく、「若し佛は已に長せざるの因縁を説きたまへり。須菩提は何が故に重ねて問へる。」答へて曰はく、「須菩提、若し法は都て空にして所有無くんば、邪見に墮せんを恐るる所以は何ん。佛弟子は、正見を得るが故に、名けて行道の人と爲す。云何が都て見

【四】次に諸法空なれば畏怖無きの因縁を重ねて問答するを釋す。

るべからずと言はん」と謂はば、佛は、須菩提の意を知りたまふが故に、説いて言はく、
 「一切の心心數法は、不可得なり、見るべからざるが故に、畏ること無し」と。凡夫の人は、
 空中に入らんと欲して、心心數法を得べく、外法は、得べからずと見るが故に恐怖す。
 菩薩は、心心數法の虛妄にして實ならず、顛倒の果報にして、能く人に實事を示さず、故
 に恐怖せず。是異義を以ての故に重ねて問へり。問うて曰はく、『若し爾らば、何を以てか
 復第三の問有る。』答へて曰はく、『心心數法は意識の中に見るべし、意及び意識は、是れ心
 心數法の根本なり。所以は何ん。意識の中に、多く分別するが故に、恐怖を生ず。五識は
 時頃の促すが故に、分別する所無し。怖畏の根本を破せんと欲す。是を以ての故に重ねて
 問ふも答無し。若し菩薩は、能く是の如く、般若波羅蜜を行ぜば、四種の事、菩薩、菩薩
 の字、般若波羅蜜、般若波羅蜜の字を見ずと雖も、能く三種の因縁もて畏れず、即ち是れ
 菩薩に般若波羅蜜を教ふるなり。若し但菩薩、般若波羅蜜の相を了せば、是を般若波羅蜜
 を行ずと爲す。十方より求めず、亦與ふる者無く、亦金銀寶物の如く、力もて求めて得る
 にあらず。

大智度論釋勸學品第八

爾時、須菩提、佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩は、檀波羅蜜を具足せんと欲せ

【五】本品は廣く三乗をして般若を學せしめんと勸むるを明す中、先づ初品に既に勸學のことありしを今重ねて説く所以を明し次に交に就いて釋す。

【六觸】眼耳鼻舌身の六觸、觸とは觸著或は觸對の義【六受】六受は六境に對して起す苦樂捨の事、受は觸受乃至意觸受これなり。

淨三昧、不退神通三昧、出鉢三昧、諸三昧、幢相三昧を得んと欲し、是の如き等の諸三昧門を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。復次に、世尊、菩薩摩訶薩は、一切衆生の願を満さんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

問うて曰はく、「初品中に、種種に得る所有らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言へり。今何を以てか重ねて説く。答へて曰はく、「先には但是諸の功德を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を行すべし」と讚歎し、未だ般若波羅蜜を説かず、今は已に般若波羅蜜の味を聞けり。餘の功德、謂ゆる六波羅蜜等を得んと欲するに因りて、當に般若波羅蜜を學すべし。復次に、上には種種の因縁もて、諸法の空を説けり。人有り、「佛法は斷滅にして復作す所無し」と謂はん。是人の疑を斷せんが爲の故に、「布施等の種種の功德を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を行すべし」と言ふ。若し般若波羅蜜は、實に空にして所有無く、斷滅せば、應に布施等の功德を行すべしと説くべからず。有智の者の説にして、何に緣りてか前後相違せんや。復次に、前には廣説し此には略説す。彼は是れ佛説、此は是れ須菩提の説なり。復次に、般若波羅蜜は、深妙なるが故に重ねて説くなり。譬へば徳の美を讃するが故に、「善い哉善い哉」と言ふが如し。六波羅蜜の義は、先に説くが如し。五衆を知る者は、無常、苦、空、總相、別相等を見る。六情、六塵、六識、六觸、六受も亦是の如し。一切世間の繫縛は、受を主と爲す。受を以ての故に、諸の結使を生ず。樂受は貪欲を生じ、苦受は瞋恚を生じ、不苦不樂受は愚癡を生じ、三毒は諸の煩惱及び業因縁を起

す。一切世間の繫縛は、受を主と爲す。受を以ての故に、諸の結使を生ず。樂受は貪欲を生じ、苦受は瞋恚を生じ、不苦不樂受は愚癡を生じ、三毒は諸の煩惱及び業因縁を起す。一切世間の繫縛は、受を主と爲す。受を以ての故に、諸の結使を生ず。樂受は貪欲を生じ、苦受は瞋恚を生じ、不苦不樂受は愚癡を生じ、三毒は諸の煩惱及び業因縁を起す。

識、色は是れ無我、乃至識との念著を受く。是を菩薩の順道に法愛生ずと爲す。是れ苦なり。應に知るべし、集應に斷ずべし、盡應に證すべし、道應に修すべし、是れ垢法なり、是れ淨法なり、是れ近づくべく、是れ近づくべからず、是れ菩薩の行すべき所、是れ菩薩の行すべき所に非ず、是れ菩薩の道、是れ菩薩の道に非ず、是れ菩薩の學、是れ菩薩の道に非ず、是れ菩薩の學に非ず、是れ菩薩の檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜、是れ菩薩の檀波羅蜜に非ず、乃至般若波羅蜜、是れ菩薩の方便なり、是れ菩薩の方便に非ず、是れ菩薩の熱なり、是れ菩薩の熱に非ずと。舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じて、是諸法に念著を受くべし、是を菩薩摩訶薩の順道に法愛生ずと爲す。

【一八】般若に相應せざる墮頂と法愛とを説くを釋す。

問うて曰はく、『何等の善根の故に、惡道貧賤に墮せず、及び聲聞辟支佛は、亦頂に墮せざる、亦頂に墮せざる。』答へて曰はく、『有人言はく、「不貪の善根を行ずるが故に、愛等の諸結使衰薄にして、深く禪定に入り、不瞋の善根を行ずるが故に、瞋等の諸結使薄くして、深く慈悲心に入り、不癡の善根を行ずるが故に、無明等の諸の結使薄くして、深く般若波羅蜜に入る」と。是の如く、禪定、慈悲、般若波羅蜜の力の故に、事として得ざるなし、何に況んや四事をや。問うて曰はく、『何を以てか四事の中、但頂に墮するを問ふ。』答へて曰はく、『三事は先に已に説けり、頂に墮するは、未だ説かざるが故に問へり。』問うて曰はく、『頂とは是れ法位なり、此義は先に已に説く、今何を以てか重ねて説く。』答へて曰はく、『其義を説くと雖も、名字は各異り。方便無くして三解脱門に入り、及び方

便行るは、先に已に説けり。法愛は、無生法忍の中に於て利益有る無きが故に、名けて生
 と曰ふ。譬へば多く食して消せざるに、若し療治せざれば身に於て患と爲るが如し。菩薩
 も亦是の如し、初發心の時に法食を食受し、謂ゆる方便無くして、諸の善法を行じ、深
 心に無生法忍に繋著す。是を則ち生と爲し、病と爲す。法愛に著するを以ての故に、不生
 不滅に於ても亦愛す。譬へば、必死の人の諸の藥を加ふと雖も、藥は反つて病と成るが
 如し。是菩薩は、畢竟空、不生不滅、忍法中に於て愛著を生じ、反つて其患を爲す。法愛
 は、人天の中に於ては妙と爲すも、無生法忍に於ては累を爲す。一切法の中に、諸觀の是
 非を憶想分別し、法に隨つて愛する、是を名けて生と爲し、諸法實相の水を盛るに任へず、
 生と相違する、是を菩薩の熟と名く。問うて曰はく、『是一事は何を以ての故に名けて頂と
 爲し、名けて位と爲し、名けて不生と爲す。答へて曰はく、『柔順忍と、無生忍との中間に
 於ける有ゆる法を名けて、頂と爲す。是頂上に住して、直に佛道に趣き復畏れ墮せざる
 なり。譬へば聲聞法の中の、煖と忍の中間を名けて、頂法と爲すが如し。』問うて曰はく、
 『若し頂を得て墮せずんば、今云何が頂より墮すと言ふ。』答へて曰はく、『近く得べきに垂
 んとして、而も失する者を名けて墮すと爲す。頂を得る者は智慧あり、安隱にして、則ち
 畏れ墮せず、譬へば山に上るに、既に頂に到るを得れば、則ち畏れ墮せず、未だ到らざ
 るの間は、傾き危く畏れ墮するが如し。頂の増長し堅固なるを、名けて菩薩位と爲す。是
 位の中に入れて、一切の結使、一切の魔民は、動搖する能はず、亦無生法忍と名く。所以

は何ん。生に異なるが故なり。愛等の結使の、諸の善法に雜はるを名けて生と爲す。復次に、諸法實相の智慧の火無きが故に、名けて生と爲し、諸法實相の智慧の火有るが故に、名けて熟と爲す。是人、能く諸佛の實相の智慧を信受するが故に、名けて熟と爲す。譬へば熟瓶は能く水を盛り受くるも、生瓶は、則ち爛壞するが如し。復次に、生滅の智慧に依止するが故に、顛倒を離るるを得。生滅の智慧を離るるが故に、不生不滅なり。是を無生法と名く。能く信じ、能く受け、能く持するが故に、名けて忍と爲す。復次に、位とは、一切の無常等の諸の觀法を抜くが故に、名けて位と爲す。若し是の如くならざれば、是を順道に法愛生すと爲す。

舍利弗、須菩提に問はく、『云何が菩薩摩訶薩の無生と名くる。』須菩提言はく、『菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、内空中に外空を見ず、外空中に内空を見ず、内外空中に外空を見ず、内外空中に空空を見ず、空空中に内外空を見ず、空空中に大空を見ず、大空中に空空を見ず、大空中に第一義空を見ず、第一義空中に大空を見ず、第一義空中に有爲空を見ず、有爲空中に、第一義空を見ず、有爲空中に無爲空を見ず、無爲空中に有爲空を見ず、無爲空中に畢竟空を見ず、畢竟空中に無爲空を見ず、畢竟空中に無始空を見ず、無始空中に畢竟空を見ず、無始空中に散空を見ず、散空中に無始空を見ず、散空中に性空を見ず、性空中に散空を見ず、性空中に諸法空を見ず、諸法空中に性空を見ず、諸法空中に自相空を見ず、自相空中に諸法空を見ず、自相空中に不可得空を

見ず、不可得空中に自相空を見ず、不可得空中に無法空を見ず、無法空中に不可得空を見ず、無法空中に有法空を見ず、有法空中に無法空を見ず、有法空中に無法有法空を見ず、無法有法空中に有法空を見ず。舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じて、菩薩の位に入るを得。復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を學せんと欲せば、應に是の如く學すべし。色受想行識を念せず、眼乃至意を念せず、色乃至法を念せず、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜、乃至十八不共法を念せず。是の如く、舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じて、是心、念すべからず、高うすべからず。無等等の心、念すべからず、高うすべからず。大心、念すべからず、高うすべからず。何を以ての故に、是心は心に非ず、心相は、常に淨きが故なり。舍利弗、須菩提に語らく、『云何が心相は常に淨しと名くる。』須菩提言はく、『若し菩薩、是心相を知れば、婬、怒、癡と合せず、離れず。諸纏流縛等の諸の結使、一切の煩惱と合せず、離れず。聲聞辟支佛心と合せず、離れざるなり。舍利弗、是を菩薩の心相は、常に淨しと名く。』舍利弗、須菩提に語らく、『是無心の相に心有りや不や。』須菩提、舍利弗に報して言はく、『無心の相中に心相有らば、無心の相は得べきや不や。舍利弗言はく、『得べからず。』須菩提言はく、『若し得べからずんば、是無心の相に心有りや不やと問ふべからず。舍利弗復問はく、『何等か是れ無心の相なる。』須菩提言はく、『諸法壞せず分別せざる、是を無心の相と名く。』舍利弗、須菩提に問はく、『但是心のみ壞せず、分別せざるや。色も亦壞せず分別

せず、乃至佛道も亦壞せず分別せざるや。須菩提言はく、「若し能く心相の壞せず、分別せざるを知れば、是菩薩は亦能く色乃至佛道の壞せず分別せざるを知らん。爾時、慧命、舍利弗、須菩提を讚すらく、「善い哉善い哉、汝は眞に是れ佛子なり。佛口より生じ、法を見りより生じ、法化より生じ、法分を取り、財分を取らず、法中に自ら信じ、身に證を得。佛の説きたまふ所の如くんば、無諍三昧を得たる中にて、汝は最も第一なり。」實に佛の擧げたまふ所の如し。須菩提、菩薩摩訶薩は、應に是の如く、般若波羅蜜を學すべし。是中亦當に分別して知るべし。菩薩、汝が所説の如く行すれば、則ち般若波羅蜜を離れず。須菩提、善男子善女人にして、聲聞地を學せんと欲するも、亦當應に般若波羅蜜を聞いて、持し誦し讀み正憶念して、説の如く行すべし。辟支佛地を學せんと欲するにも、亦當應に般若波羅蜜を聞いて持し誦し讀み正憶念して、説の如く行すべし。菩薩地を學せんと欲するにも、亦當應に般若波羅蜜を聞いて持し誦し讀み正憶念して、説の如く行すべし。何を以ての故に、是般若波羅蜜の中には、廣く三乘を説く。是中の菩薩、摩訶薩、聲聞、辟支佛は、當に學すべければなり。

【七】次に法愛念著なきを無生を説くを釋し先づ菩提心と無等心と大心との別を明す。

釋して曰はく、「内空中に外空を見ず、外空中に内空を見ずとは、有人言はく、「外の四大は飲食して、其身の中に入るが故に、名けて内と爲し、若し身死すれば遺外と爲る。一切法は、來去の相無きが故に、外空は内空中に有らず、餘の十七空も亦是の如し。不生不滅にして、異相無く、來去無きが故に、各各の中に住せず。復次に、菩薩の位相は、一

切の色を念じて、有と爲さず。乃至十八空も、亦是を有なりと念ぜず。有と念ぜざるの義は先に説くが如し。

問うて曰はく、「菩提心と無等等心と大心とは、何の差別か有る。答へて曰はく、「菩薩は初發心に、無上道を縁じて、「我當に作佛すべし」と。是を菩提心と名く。無等は、名けて佛と爲す。所以は何ん。一切の衆生、一切の法の與等なる者無ければなり。是菩提心は、佛と相似す。所以は何ん。因、果に似たるが故に、是を無等等心と名く。是心は、事として行ぜざる無く、恩恵を求めず、深固に決定す。復次に、檀尸波羅蜜、是を菩提心と名く。所以は何ん。檀波羅蜜の因縁の故に、大富を得て、乏少する所無く、尸羅波羅蜜の因縁の故に、三惡道を出で、人天の中の尊貴に住し、二波羅蜜の果報力の故に、安立して能く大事を成す。是を菩提心と名く。羸提、毘梨耶波羅蜜の相は衆生の中に於て奇特の事を現す。謂ゆる人來りて肉を割り、髓を出すこと、樹木を截るが如きも、而も怨家を慈念し、血化して乳と爲る。是心は佛心の如きに似たり。十方の六道の中の、一一の衆生に於て、皆深心を以て清度す。又諸法の畢竟空なるを知るも、而も大悲を以て能く諸行を行す、是を奇特と爲す。譬へば人の空中に樹を種えんと欲せば、是を希有と爲すが如し。是の如き等の精進波羅蜜の力勢は、無等と相似す、是を無等等と名く。禪定に入りて、四無量心を行じ、十方に遍滿して、大悲の方便と合するが故に、一切衆生の苦を抜く。又諸法實相は、一切の觀を滅し、諸の語言斷えて、而も斷滅の中に墮せざる、是を大心と名く。復次に、

【八】次に舍利弗が心相淨の義等を問へるに就いて明す。

初發心を、菩提心と名け、六波羅蜜を行するを、無等等心と名け、方便心中に入る、是を大心と名く。是の如き等の各の差別有り。復次に、菩薩は、是の如き大智の心を得るも、亦心を高うせず。相常に清淨なるが故なり。虚空の相は、常に清淨なるも、烟雲塵霧の假りに來るが故に、覆蔽して不淨なるが如し。心も亦是の如し、常に自ら清淨なるも、無明等の諸の煩惱の客、來りて覆蔽するが故に、以て不淨と爲り、煩惱を除去すれば、本の如く清淨なり。行者の功は、夫れ微薄なり。此清淨は、汝が所作に非ず、自ら高うすべからず、念すべからず、何を以ての故に。畢竟空なるが故に。

問うて曰はく、「舍利弗は、心相の常に淨なるを知る、何を以ての故に問へる。」答へて曰はく、「菩薩は阿耨多羅三藐三菩提の心を發すを以て、深く入り、深く著するが故に、心は畢竟空にして常に清淨なりと聞くと雖も、猶憶想分別して、は無心の相を取る。是を以ての故に問へるなり。是无心の相の心は、有と爲し無と爲す。若し有なれば、云何が無心の相と言はん。若し無なれば、何を以てかは無等等心は當に佛道を成すべしと讚歎せん。須菩提答へて曰はく、「是无心の相の中は、畢竟清淨にして有無を得べからず、難すべからず」と。舍利弗復問はく、「何等か是れ無心の相なるや」と。須菩提答へて曰はく、「畢竟空にして一切の諸法は分別無し。是を無心の相と名く」と。舍利弗復問はく、「但心相は、壞せず分別せずんば、餘法も亦是の如けん」と。須菩提答へて曰はく、「諸法も亦是の如し」と。若し問らば、阿耨多羅三藐三菩提も、亦虚空の如く、壞する無く、分別する無けん。

【九】舍利弗須菩提の善解を讚するに就いて明す。
 【四姓】印度古代民族の階級にして婆羅門、刹闍、毘舍、首陀羅これなり。

【四信】起信論にては信佛、信法、信僧、信名經には信佛、信法、信僧、信戒をいひ、法華經にては、佛の壽命の長遠なるを聞いて一念の信解を生ずれば功德無量ならん等の四を擧ぐ。(分別功德品參照)

諸の菩薩は、深く阿耨多羅三藐三菩提に著するが故に、是念を作さく、「諸の凡夫の法は、虚誑と言ふべし。不眞實なるを以ての故なり。菩薩は漏未だ盡くさざるが故に、亦不清淨と言ふべし。云何が阿耨多羅三藐三菩提も、亦復虚誑ならん。是時、心驚きて悦ばず。須菩提は、其心を知り已りて、思惟し籌量すらく、「我今應に爲に實相の法を説くべきや不や」と。思惟し已りて自ら念すらく、「今佛前に在り、當に實相を以て答ふべし。若し我に失有らば、佛は自ら當に説きたまふべし」と。重ねて思惟し竟る、是を以ての故に説けり。「阿耨多羅三藐三菩提は、是れ第一なりと雖も、亦虚誑法邊より生ずるが故に、亦是れ空にして壞せず、分別せざるの相なり。是を以ての故に行者は、當に阿耨多羅三藐三菩提の相に隨つて行すべく、相を取り、自ら高うすべからず」と。

爾時、舍利弗、須菩提を讚して言はく、「善哉、善哉」と。佛、時に默然として、須菩提の答ふる所を聴きたまへり。亦可し、舍利弗の歎する所、佛の口より生ずとは、有人言はく、「婆羅門は、梵天王の口邊より生ずるが故に、四姓の衆生中に於て第一なり」と。是を以ての故に、舍利弗讀じて言はく、「汝は眞に佛の口より生ず」と。所以は何ん。法を信、法を知れるが故なり。未だ得道せざる者有らば、佛に依るが故に供養を得。是を財分を取ると名く。又弊惡の子の、父の教に隨はずして、但財分を取ると名く。四分を得るが故に、名けて法中に自ら信すと爲す。諸の神通、滅盡定等を得て、身中に著くが故に、

是を身に證を得と名く。舍利弗は、智慧の中に於て第一、目犍連は、神足第一、摩訶迦葉は、頭陀第一、須菩提は、無諍三昧の中に於て第一を得るが如し。無諍定を得たる阿羅漢とは、常に人心を觀じて、人をして諍を起さしめず、是三昧は、根本四禪の中に攝し、亦欲界の中用ふ。問うて問はく、『般若波羅蜜は是れ菩薩の事なり。何を以てか、三乘を得んと欲する者は、皆當に習學すべしと言ふや。』答へて曰はく、『般若波羅蜜の中に諸法實相を説く、即ち是れ無餘涅槃なり。三乘の人は、皆無餘涅槃の爲の故に精進して習行す。復次に般若波羅蜜の中には、種種の因縁により、空解脱門の義を説く。經中に説くが如くんば、若し空解脱門を離れては、道無く、涅槃無し。是を以ての故に、三乘の人は、皆應に般若を學すべし。復次に、舍利弗は、自ら因縁を説き、般若波羅蜜の中に於て、廣く三乘の相を説けり。是中に三乘の人は、應に學を成すべし。』

大智度論釋集散品第九

卷第四十二

龍樹菩薩造

後秦龜茲國鳩摩羅什詔を奉じて譯す

爾時、慧命須菩提、佛に白して言さく、「世尊、我は是菩薩の般若波羅蜜を行するを覺

らず、得ざるなり、當に誰が爲にか般若波羅蜜を説くべき。世尊、我は一切諸法の集散を

得ず。若し我菩薩の爲に字を作りて、菩薩と言はば、或は當に悔ゆること有るべし。世尊、

是字は住せず、亦住せざるにあらず。何を以ての故に。是字は、所有無きが故に。是を以

ての故に是字は住せず、亦住せざるにあらず。世尊、我は色の集散、乃至識の集散を得ず。

若し得べからずんば、云何が當に名字を作るべき。世尊、是因縁を以ての故に、是字は住

せず。亦住せざるにもあらず。何を以ての故に、是名字は、所有無きが故に。世尊、我は

亦眼の集散、乃至意の集散を得ず。若し得べからずんば、云何が當に名字を作りて、是れ

菩薩なりと言ふべき。世尊、是眼の名字は住せず、亦住せざるにあらず。

何を以ての故に、是名字は、所有無きが故に。是を以ての故に、是字は住せず、亦住せざ

るにあらず。世尊、我は色の集散、乃至法の集散を得ず。若し得べからずんば、云何が當

に名字を作りて、是れ菩薩なりと言ふべき。世尊、是色の字、乃至法の字は住せず、亦住

せず。亦住せざるにもあらず。何を以ての故に、是名字は、所有無きが故に。世尊、我は

せざるにあらす。何を以ての故に。是字は、所有無きが故なり。是を以ての故に、是字は住せず、亦住せざるにあらす。眼識乃至意識、眼觸乃至意觸、眼觸因縁生の受、乃至意觸因縁生の受も亦是の如し。世尊、我は無明の集散を得ず、乃至老死の集散を得ず。世尊、我は無明盡の集散を得ず、乃至老死盡の集散を得ず。世尊、我は姪、怒、癡の集散を得ず、諸の邪見の集散も、皆亦是の如し。世尊、我は六波羅蜜の集散、四念處の集散、乃至八聖道分の集散、空、無相、無作の集散、四禪、四無量心、四無色定の集散、念佛、念法、念僧、念戒、念捨、念天、念善、念入出息、念身、念死の集散を得ず。我亦佛の十方、乃至十八不共法の集散を得ず。世尊、我若し六波羅蜜、乃至十八不共法の集散を得ずんば、云何が當に字を作りて、是れ菩薩なりと言ふべき。世尊、是字は住せず、亦住せざるにあらす。何を以ての故に、是字は、所有無きが故なり。是を以ての故に、是字は住せず、亦住せざるにあらす。世尊、我は夢の如き、五陰の集散を得ず。我は響の如き、影の如き、焰の如き、化の如き、五陰の集散を得ざるも、亦上説の如し。世尊、我は離の集散を見ず、我は寂滅、不生、不滅、不示、不垢、不淨の集散を得ず。世尊、我如、法性、實際、法相、法位の集散を得ざるも、亦上説の如し。我は諸善不善法の集散を得ず、我は有爲無爲の法、有漏、無漏の法の集散、過去、未來、現在の法の集散、不過去、不未來、不現在法の集散を得ず。何等か是れ不過去、不未來、不現在なるや。謂ゆる無爲法なり。世尊、我亦無爲法の集散を得ず。世尊、我亦佛の集散をも得ず。世尊、我は亦十方如恆河沙等の世界の諸

【一】法愛を除かんと
 ために色等の集散
 を得ざるを明す。本
 品の要旨なり。集
 とは縁和して生ず
 るをいひ、散とは
 離れて滅するをい
 ふ。以下本品を釋
 する中、初に集散
 をえず、住不住に
 先づ菩薩の字を見
 ず等といふは法愛
 の過難見難き爲に
 重説するを明す。

佛、及び菩薩、聲聞の僧の集散を得ず。世尊、若し我諸佛の集散を得ずんば、云何が菩薩摩訶薩に般若波羅蜜を教ふべき。世尊、是菩薩の字は住せず、亦住せざるにあらず。何を以ての故に、是字は所有無きが故に。是を以ての故に、是字は住せず、亦住せざるにあらず。世尊、我は亦是諸法實相の集散を得ず。云何が菩薩の與に字を作りて、是は菩薩なりと云ふべけんや。世尊、是諸法實相の名字は住せず、亦住せざるにあらず。何を以ての故に。是名字は所有無ければなり。是を以ての故に、是名字は住せず、亦住せざるにあらず。

問うて曰はく、「先の品中に已に菩薩、菩薩の字を見ず、般若波羅蜜は、一切諸法の内ならず、外ならず、中間ならざる等を説けり。今何を以てか重ねて説く。答へて曰はく、「四種の愛有り。欲愛、有愛、非有愛、法愛なり。欲愛は見易く、其過は不淨等なり。有愛は不淨等無く、小しく遣り難し。非有愛は有を破して、智慧に似たるが故に、遣り難し。法愛は諸の善法を愛し、道者を利益す。法愛中の過難は見難きが故に重ねて説くなり。譬へば、小草は功を加ふること少くして、除き易く、大樹は功重くして除き難きが如し。復次に、上の法と此法とは、同有り、異有り。彼は「菩薩の字を見ず」と説くを聞けども、此中には「菩薩の字を覺せず得ず」と説く。覺せず、得ざるを以ての故に見ず。是は智慧力少なきが故に、見ざるに非ざるなり。」

問うて曰はく、「未だ般若波羅蜜を行ぜざる時、菩薩有りと爲さば、今何を以ての故に、

菩薩の般若波羅蜜を行ずるを見ずと言ふや。答へて曰はく、「無始より已來、衆生は不可得なり。般若波羅蜜を行ずるが故に、不可得なるに非ず、但虚誑顛倒を以て、凡夫の人は、是假名に隨ふが故に、謂うて有と爲す。今般若波羅蜜を行じて、虚誑顛倒を滅し、其無を了知するに、本有今無に非ず。本有今無なれば則ち斷滅に墮す。復次に、須菩提は、心に妄語戒を破るを悔い畏る。所以は何ん。佛法の中には、一切の諸法は決定して我無し。而も我は説いて「菩薩有り、爲に般若波羅蜜を説く」と言はば、則ち妄語の罪に墮すればなり。是故に心悔ゆ。復次に、心悔ゆるの因縁有り。一切法は、不可得空なるを以ての故に、皆空なり。所以は何ん。集まる無く、散する無きが故に。譬へば、眼と色との因縁もて、眼識を生ずるが如し。三事和合するが故に眼觸を生じ、眼觸の因縁の中に即ち愛、想、思等の心數法を生ず。是中に邪憶念するが故に、諸の煩惱罪業を生じ、正憶念するが故に、諸の善法を生じ、善惡業もて六道の果報を受け、是身邊より、復善惡業を種ゑ、是の如く展轉して無窮なる、是を名けて集と爲す。餘情も亦是の如し。散ずとは、是眼識等の諸法は、念念に滅するが故に、諸の因縁を離るるが故に、是眼識等の法は生ずる時、來る處なし。田の上の穀を運びて、彙集を致すが如きに非ず。若し滅する時も、去る處無く、穀を散じて、民に與ふるが如きに非ず。是れ略して諸法の集散の相を説くと名くるなり。生ずる時は、從來する所無く、散する時は、去る所無し。是諸法は、皆幻化の如く、但眼を誑惑するのみ。問うて曰はく、若し爾らば、集散の相有り、須菩提は何を以てか、覺ら

す得ざるなりと言ふや。答へて曰はく、「來る處無きが故に、集は不可得なり、去る處無きが故に、散も不可得なり。」

復次に、生ずる無きが故に、集は不可得なり。滅無きが故に、散は不可得なり。畢竟空なるが故に、集は不可得なり。業因縁は失せざるが故に、散は不可得なり。復次に、世間の滅諦を觀するが故に、集は不可得なり。世間の集諦を觀するが故に、散は不可得なり。是の如き等の義によりて、當に集散の不可得なるを知るべし。云何が當に菩薩の字を作るべき。若し強ひて名と爲すも、是名は、亦住も無く、亦不住も無し。問うて曰はく、「是名字は、何を以ての故に住せざる。」答へて曰はく、「名字は法中に在りて住す。法は空なるが故に、名字は住處無し。車は、輪、輞、輻、轂等都合するが故に車の名有るが如し。若し是和合を散すれば、則ち車の名を失す。是車の名は、輪等の中に住するに非ず、亦輪等の中を離れて、住するにあらず。車の名字を、一異の中に求むるに、皆得ず。車の名を失するが故に、名字は住處無し。因縁の散する時すら尙無し、何に泥んや因縁の滅するをや。衆生も亦是の如し、色等の五衆和合するが故に、衆生の字有り。若し五衆離散すれば、名字は住處無し。五衆の離散する時すら尙無し、何に泥んや五衆無きをや。問うて曰はく、「若し散する時は、名字は不可得ならんも、和合して未だ散ぜざる時は、則ち名字有らん、何を以てか不可得と言ふ。」答へて曰はく、「是菩薩の名字は一にして、五衆には則ち五有り。一は五と作らず、五は一と作らず。若し五、一と作らば、五匹の物の如きは一匹の用を爲

すを得ず。若し一、五と作らば、一匹の物の如きは、五匹の用を爲すを得ず。是を以ての故に、一の菩薩の字は、五衆中に住するを得ず。住せざるに非ずとは、若し名字の因縁和合無ければ、則ち世俗の語言、衆事は都て滅し、世諦無きが故に、第一義諦も亦無く、二諦無きが故に、諸法錯亂するなり。復次に、若し因縁中に名字有らば、如し火と説けば則ち口を焼き、有と説けば則ち口を塞がん。若し名字は、法中に在らずんば、火と説くも火想を生ずべからず、火を求めて亦水を得べし。久遠より已來、共に名字を傳ふるが故に、名に因りて則ち事を識る。是を以ての故に、名字の義は住するに非ず、住せざるに非ずと説く。復次に、是中に、須菩提は自ら説けり、「因縁には、所有無きが故に、是名字は住するに非ず、住せざるに非ず」と。菩薩の名字の如く、五衆、十二入、十八界等の諸法も、亦是の如し。問うて曰はく、「上來説くが如くんば、五衆、諸法の集散は不可得なり。今何を以てか復五衆を説く。」答へて曰はく、「上には直に五衆を説けり、今五衆は、夢の如く、幻の如しと説けり。復次に、有人謂はく、「凡夫の人の五衆は虚誑不實にして夢の如く、聖人の五衆は是れ虚誑に非ず。是を以ての故に、須菩提は夢の如く、幻の如くにして、同じく皆住せずと説けり」と。問うて曰はく、「十の譬喩の中何を以てか唯五事を説く。」答へて曰はく、「若し十事を説くも、在ること無し。但衆生の心に隨ふを以て、五喩を説けば、事を辯ずるが故に、盡く説かざるなり。或は五衆を以ての故に五喩を説く。餘法も亦是の如し。離に二種有り。一には身離、二には心離なり。身離とは、家、恩愛、世事等を捨

てて、靜處じやうじよに閑居けんこす。心離しんりとは、諸もろくの結使けつしに於て、悉ことごとくく皆遠離みなをんりするなり。復また二種にふの離有りり。一いには、諸法しよほふは名字みやなを離れ、二にには諸法しよほふは各各ごうごうの自相じじやうを離る。此このな中に説けるは、後のちの二種にふの離なり。所以ゆゑは何ん。此このな中には、名字みやなを破するが故に、餘處よゝの自相じじやうを離すればなり。小乘せうじやうの法中ほふちゆうには、多く前の二種にふを説く。寂滅じやくめつに亦二種にふ有り、一いには淳善相じゆんぜんじやうにして惡事じやくじを寂滅じやくめつし、二にには涅槃ねはんの寂滅相じやくめつじやうの如し、世間せけんの諸法しよほふを觀くわんするも亦是またの如し。此このな中には但後たごの寂滅じやくめつのみを説けり。不生ふじやうにも亦二種にふ有り。一いには未來みらいの無爲法むゐほふを不生ふじやうと名け、二にには一切法いっさいほふは實じつに無生むじやうの相じやうなり。生じやうは不可得ふかたくなるが故に。此このな中には但後たごの不生ふじやうのみを説く。不滅ふめつに三種さんじゆ有り、智緣滅ちゑんめつ、非智緣滅ひぢゑんめつ、無常滅むじやうめつなり。此このな中に無常滅むじやうめつを説き、此このと相違さうゐするが故に不滅ふめつと名く。示しさすとは、一切いっさいの諸觀しよくわんを滅して、語言ごんごんの道斷だうだんゆるが故に、法ほふとして示しすべき無なく、是法こふほふは如になり。是相こふじやうは、若しは有う、若しは無む、若しは常じやう、若しは無常等むじやうとうなり。不垢ふく、不淨ふじやう、如に、法性ほふじやう、實際じつじやう、法相ほふじやう、法位ほふゐの義ぎは、先まづに説くが如し。問とうて曰いはく、『五衆ごしゆの法ほふには、集散じふさん有り。此このと相違さうゐするが故に、集あつまらず、散さんぜずと言いふ。如に、法性ほふじやう、實際等じつじやうとうは、相違さうゐ無なきが故ゆゑに、云何いんなんが集あつまらず、散さんぜずと言いはん。答こたへて曰いはく、行者ぎやうじやは如に、法性等ほふじやうとうを得るが故に、名なけて集あつと爲なし、失しつするが故に、名なけて散さんと爲なす。虛空こくうの如にきは、集あつ無なく散さん無なしと雖いへども、尸牖しよくを繋なづが故に、名なけて集あつと爲なし、寒ふぐが故に、名なけて散さんと爲なす、善ぜん不善ふぜん、乃至乃至十方じふぱう如に恆河沙等こんがしやとうの諸佛しよぶつの義ぎは、先まづに説くが如し。是諸佛こふしよぶつの法ほふ及び佛ぶつの名字みやなは、依止いしする所無なきが故ゆゑに、皆空みなくうにして住じやうせず、住じやうせざるに非あらざるなり。

世尊、諸法は因縁和合にして、假名の施設なり。謂ゆる菩薩の是名字は、五受陰の中に於て説くべからず、十二入、十八界、乃至十八不共法の中にも説くべからず、和合法の中に於ても亦説くべからず。世尊、譬へば、夢は諸法の中に於て説くべからず、響、影、焰、化は、諸法の中に於て、亦説くべからざるが如し。譬へば、虚空と名くるも、亦法の中に説くべき無きが如し。世尊、地水火風の名も、法の中に説くべき無きが如く、戒、三昧、智慧、解脫、解脫知見の名も、亦法の中に説くべき無し。須陀洹の名字、乃至阿羅漢、辟支佛の名字の如きも、亦法の中に説くべき無し。佛の名、法の名の如きも、亦法の中に説くべき無し。謂ゆる若は善、若は不善、若は常、若は無常、若は苦、若は楽、若は我、若は無我、若は寂滅、若は離、若は有、若は無なり。世尊、我是義を以ての故に、心に悔ゆ。一切諸法の集散の相は不可得なり。若し菩薩の爲に字を作りて、是れ菩薩なりと言はんや。世尊、是字は住せず、亦住せざるにあらず、何を以ての故に。是字は、所有無きが故に、是を以ての故に、是字は住せず、亦住せざるにあらず。若し菩薩摩訶薩、是般若波羅蜜は是の如きの相、是の如きの義なりと説くことを作すを聞いて、心没せず、悔いず、驚かず、畏れず、怖かすんば、當に知るべし。是菩薩は、必ず阿鞞跋致性の中に住せん。不住の法に住するが故なり。

釋して曰はく、上來は住に非ず、不住に非ざる門もて、菩薩の名字、及び諸法を破せり。今は異門を以て、菩薩の名字を破す。法として説くべき無きを菩薩と爲す。何を以て

異門相對して菩薩の名字の説くべき無きを釋す

の故に、菩薩は是れ五衆に非ず、五衆は是れ菩薩に非ず、五衆の中に菩薩無く、菩薩の中に五衆無く、五衆は菩薩に屬せず、菩薩は五衆に屬せず、五衆を離れて菩薩無く、菩薩を離れて五衆無し。是の如く、菩薩の名字は不可得なり。當に是れ空なるを知るべし。乃至十八不共法も亦是の如し。譬へば夢中に見る所有るは、皆是れ虚妄にして、説くべからざるが如し。此夢中に定法の相有る無し。謂ゆる五衆、十二入、十八界は、但誑心のみ有り。餘の影、響、焰、化も、亦是の如く、但耳目を説はすこと、虚空の如くにして、一切法の中に説くべからず。無相なるが故に。虚空と色と相違するが故に説いて名けて色と爲すを得ず、色の盡くる處も、亦虚空に非ず、更に別法無きが故なり。若し出入を虚空の相と爲すと謂はば、是事は然らず。是身業は、虚空の相に非ず、若し無相なれば、則ち無法なり。是を以ての故に、虚空は但名字のみ有り。菩薩の名字も亦是の如し。

問うて曰はく、「夢、虚空等の如きは、但名字のみ有るべし。云何が地水火風の實法も、亦但名字のみ有るや。」答へて曰はく、「無智の人は、地等の諸物を謂うて以て實と爲す。聖人、慧眼もて之を觀するに、皆是れ虚誑なり。譬へば、小兒は鏡中の像を見て、以て實と爲し、歡喜して取らんと欲し、謂うて眞實と爲し、大人は、之を但人の眼を誑惑すと觀するが如く、諸の凡夫の人は、微塵の和合して地を成すを見て、謂うて實の地と爲し、餘の天眼を有する者は、此地を散じて、但微塵なりと見、慧眼は分別して此地を破散し、都て不可得とす。復次に、初品の論中に、種種に身相を破し、身を破し、亦地をも破するが

如し。」

復次に若し地は是れ實ならば、云何が一切の火を觀る時、皆是れ火なるや。若し禪定を以て觀じて實と爲さば、佛は、一切法は空にして、虛妄と爲すと説きたまへり。但是事は然らず、水火風も亦是の如し。四大の如き、身の木と爲すものすら尙爾り。何に況んや身に作す所の、持戒等の諸業にして、空ならざらんや。戒等の如き、麤業すら尙空なり、何に況んや禪定、智慧、解脫、解脫知見等にして、空ならざらんや。若し戒等の五衆すら空ならば、何に況んや是因縁もて得たる、諸の聖道の果にして、空ならざらんや、若し聖道の果すら空ならば、何に況んや須陀洹の人乃至佛にして、空ならざらんや。是を以ての故に、菩薩の名字は、善法乃至有無の法中に出づと雖も名けて善と爲さず、乃至名けて有無と爲さず、集散不可得なるが故なり。須菩提の空相を知るは是の如し。云何が説いて菩薩と名け、般若波羅蜜を説くと爲さん。若し菩薩にして、是を聞いて恐れず畏れずんば、則ち是の阿耨跋致の性中に住せん。不住の法にして、住するが如くなるを以ての故なり。阿耨跋致の性とは、是菩薩は、未だ無生法忍を得ず、未だ諸佛より授記せず、但福德智慧力の故に、能く諸法の畢竟空を信樂す。是を阿耨跋致の性中に住すと名く。阿耨跋致の氣分を得るが故なり。小兒の貴性の中に在りて生せんに、未だ事を成さずと雖も、姓貴なるを以ての故に、便ち貴きが如し。

復次に、世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行せんと欲せば、色の中に住すべからず、

受想行識の中に住すべからず。眼耳鼻舌身意の中に住すべからず、色聲香味觸法の中に住すべからず、眼識乃至意識の中に住すべからず、眼觸乃至意觸の中に住すべからず。眼觸の縁生を受乃至意觸の縁生を受の中に住すべからず。地種、水火風空識種の中に住すべからず。無明乃至老死の中に住すべからず。何を以ての故に、世尊、色の色たる相は空なり、受想行識の識たる相は空なればなり。世尊、色は空なれば、名けて色と爲さず、空を離れても亦色無し。色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。受想行識も空なれば、名けて識と爲さず、空を離れても、亦識無し。識は即ち是れ空、空は即ち是れ識なり。乃至老死の老死たる相は空なり。世尊、老死は空なれば、名けて老死と爲さず、空を離れても亦老死無し。老死は即ち是れ空、空は即ち是れ老死なり。世尊、是因縁を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、色の中に住すべからず、乃至老死の中にも、亦住すべからず。復次に、世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、四念處の中に住すべからず、何を以ての故に、世尊、四念處の四念處たる相は空なればなり。世尊、四念處は空なれば、名けて四念處と爲さず、空を離れても亦四念處無し。四念處は即ち是れ空、空は即ち是れ四念處なり。乃至十八不共法も亦是の如し。世尊、是因縁を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、四念處乃至十八不共法の中にも住すべからず。復次に、世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、檀波羅蜜の中に住すべからず、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜の中に住すべからず。何を以て

の故に、檀波羅蜜の檀波羅蜜たる相は空なり。乃至般若波羅蜜の般若波羅蜜たる相も、空なればなり。世尊、檀波羅蜜は空なれば、名けて檀波羅蜜と爲さず、空を離れても、亦檀波羅蜜無し。檀波羅蜜は、即ち是れ空、空は即ち是れ檀波羅蜜なり。乃至般若波羅蜜も亦是の如し。世尊、是因縁を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行せんと欲せば、應に六波羅蜜の中に住すべからず。

【四】次に不住門を以て般若を説くと釋す。

釋して曰はく、「上に須菩提は、謙讓門を以て、般若を説けり。説かずと言ふと雖も、而も實に諸の菩薩の爲に、般若波羅蜜を説けり。今須菩提は、不住の門を以て、直に菩薩の爲に、般若波羅蜜を説く。般若波羅蜜に、種種の名字有り、觀、修、相應、合入、習住等なり。是れ皆般若波羅蜜を修行すと名く。但種種の名字を説くに聞かず歡喜す。復次に、少しく差別有るの行を、聽聞、讀誦、書寫、正憶念と名け、思惟、籌量、分別、修習等乃至阿耨多羅三藐三菩提を説くを、總じて名けて行と爲す。是行中に分別するが故に、初なる者を觀と名く、初始て物を見るが如し、日々に漸く學する、是を習と名け、般若波羅蜜と相應するの相、是を合と名くべく、般若波羅蜜に隨順するを相應と名け、般若波羅蜜に通徹する是を名けて入と爲し、分別して相を取り、是事有るを名けて念と爲し、常に行じて息まず、與に相似せしむる、是を名けて學と爲し、學し已り、巧に方便して、是非得失を觀知する。名けて思惟と爲し、禪定心を以て、共に行ずるを名けて修と爲し、是般若波羅蜜の道を得て失はざる、是を住と名け、住と相違するを不住と名く。問うて曰はく、

『先に諸法は空にして、即ち是れ不住なりと説き、今何を以てか諸法の中に住すべからずと説く。』答へて曰はく、『先に説くと雖も、法に著する愛心は遣り難きが故に、今更に説くなり。復次に、無相三昧有り、是三昧に入れば、一切法に於て相を取らず、而して滅定に入らず。菩薩の智慧は、不可思議にして、一切の法相を取らずと雖も、而も能く道を行す。鳥の虚空の中に於て依る所無く、而も能く高く飛ぶが如し。菩薩も亦是の如し、諸法の中に於て、住せずして而も能く菩薩の道を行す。問うて曰はく、『人心は縁を得て便ち起る。云何が菩薩は一切法に於て住せずして、而も滅定中に入らざるや。』答へて曰はく、『此中に須菩提は自ら説けり。謂ゆる色と色相とは、自ら空なり、色の空なるを非色と爲すも、亦空を離れずして色有り。色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。是義は第二品の中に已に説けり。乃至、六波羅蜜の中に住すべからざるも、亦是の如し、空なるを以ての故に、住する所無きなり。』

復次に世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、文字の中に住すべからず、一字門、二字門、是の如き種種の字門の中に住すべからず、何を以ての故に。諸字の諸字たる相は、空なるが故なり。亦上に説けるが如し。復次に世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、諸の神通の中に住すべからず、何を以ての故に。諸の神通の神通たる相は空なればなり。神通は空なれば、名けて神通と爲さず、空を離るるも亦神通無し。神通は即ち是れ空、空は即ち是れ神通なり。世尊、是因縁を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若

【五】 下不住門の
中文字、神通に住
すべからざるを釋

【淨】 ブー (Bhu)
【閻藍】 チヤラ
【波尼藍】 パーニ

【阿字】 一切語言
の根本、衆字の母

なり。この語を聞
く時は此語を頭と

せし種種の言語を
想起するより、こ

れに本不生等の義
ありといふ。

【眞佉】 ツフカ
【眞佉】 苦の義

【阿尼吒】 アニチ
ヤ (Aniya) 無常

の義

若波羅蜜を行せんと欲せば、諸の神通の中に住すべからず。

釋して曰はく、「二種の菩薩有り。一には禪定を習ひ、二には學讀す。坐禪の者は神通

を生じ、學讀の者は、文字を分別するを知る。一字門とは一字一語にして、地を浮と名く

るが如し。二字門とは、二字一語にして、水を閻藍と名くるが如し。三字門とは水を波尼藍

と名くるが如し。是の如き等、種種の字門有り。復次に、菩薩は一字を聞いて、即ち一切

諸法の實相の中に入る。阿字を聞いて、即ち諸法は本より已來、無生なるを知るが如き、

是の如き等なり。眞佉を聞いて、一切法の中に苦相を生じ、即時に大悲心を生ずるが如く、

阿尼吒を聞いて、一切法の無常相を知り、即時に道に入りて聖行するが如し。餘は文字

陀羅尼の中に廣く説くが如し。神通の義は、先に已に説けり。是二事は畢竟空なるが故に、

菩薩は中に於て住せざるなり。

復次に世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行せんと欲せば、色、是れ無常に住すべから

ず。受想行識、是れ無常に住すべからず。何を以ての故に。無常の無常たる相は、空なれ

ばなり。世尊、無常、空なれば、無常と名けず、空を離れても、亦無常無し。無常は即ち

是れ空、空は即ち是れ無常なり。世尊、是因縁を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を

行せんと欲せば、色、是れ無常に住すべからず、受想行識、是れ無常に住すべからず、色、

是れ苦に住すべからず、受想行識、是れ苦に住すべからず、色、是れ無我に住すべからず、

受想行識、是れ無我に住すべからず、色、是れ空に住すべからず、受想行識、是れ空に住

すべからず、受想行識、是れ空に住すべからず、受想行識、是れ空に住すべからず、

受想行識、是れ空に住すべからず、受想行識、是れ空に住すべからず、受想行識、是れ空に住

すべからず、色、是れ寂滅に住すべからず、受想行識、是れ寂滅に住すべからず、色是れ
 離に住すべからず、受想行識、是れ離に住すべからず、亦上説の如し。復次に、世尊、菩
 薩摩訶薩、般若波羅蜜を行せんと欲せば、如相の中に住すべからず、何を以ての故に。如
 相の如たる相は、空なればなり。世尊、如相、空なれば名けて知と爲さず、空を離るるも
 亦如無し。如は即ち是れ空、空は即ち是れ如たり。世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜ
 んと欲せば、法性、法相、法位、實際の中に住すべからず。何を以ての故に、實際は、空
 なればなり。世尊、實際、空なれば、名けて實際と爲さず、空を離るるも亦實際無し。實
 際は即ち是れ空、空は即ち是れ實際なり。復次に、世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜ
 んと欲せば、一切の陀羅尼門の中に住すべからず。一切の三昧門の中に住すべからず。何
 を以ての故に、陀羅尼門の陀羅尼門たる相は空なり、三昧門の三昧門たる相は、空なれば
 なり。世尊、陀羅尼門、三昧門、空なれば、名けて陀羅尼門、三昧門と爲さず。空を離る
 るも亦陀羅尼、三昧門無し。陀羅尼、三昧門は即ち是れ空、空は即ち是れ陀羅尼、三昧門
 なり。世尊、是因縁を以ての故に、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行せんと欲せば、乃至陀羅
 尼、三昧門の中に住すべからず。世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行せんと欲し、方便無
 きが故に、吾我の心を以ての故に、色の中に於て住するが如きは、是菩薩は、色に行を作
 す。吾我の心を以ての故に、受想行識の中に於て住せば、是菩薩は、識に行を作す。若し
 菩薩、行を作す者は、般若波羅蜜を受けず、亦般若波羅蜜を具足せず、般若波羅蜜を具足

せざるが故に、薩婆若を成就するを得る能はず。世尊、是の如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲し、方便無きが故に、吾我の心を以て、十二入乃至陀羅尼、三昧門の中に住す。是菩薩、十二入に作し、乃至陀羅尼、三昧門に行を作す。若し菩薩、行を作す者は、般若波羅蜜を受けず、亦般若波羅蜜を具足せず。般若波羅蜜を具足せざるが故に。薩婆若を成就するを得る能はず。何を以ての故に。色は、是れ不受なり。受想行識、是れ不受なればなり。色、不受なれば則ち識に非ず、性空なるが故なり。識に非ず、性空なるが故なり。受想行識、不受なれば則ち識に非ず、性空なるが故なり。十二入は是れ不受なり、乃至陀羅尼三昧門は是れ不受なり。十二入、不受なれば、即ち十二入に非ず、乃至陀羅尼、三昧門、不受なれば、即ち陀羅尼、三昧門に非ず。性空なる故なり。般若波羅蜜も亦不受なり、般若波羅蜜、不受なれば則ち般若波羅蜜に非ず。性空なるが故なり。是の如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、應に諸法の性空を觀すべし、是の如く觀すれば、心、行處無し。是を菩薩摩訶薩の不受三昧と名く、廣大の用、聲聞、辟支佛と共ならず、是薩婆若の慧も亦不受なり、内空の故に外空、内外空、空空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、散空、性空、自相空、諸法空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空の故に。何を以ての故に、是薩婆若は、相行を以て得べからず、相行に垢有るが故なり。何等か是れ垢相なる。色相乃至諸の陀羅尼、三昧門の相、是を垢相と名く。是相は若は受け、若は修して薩婆若を得べき者なり。

【六】無常等の聖行及び如法性實際陀羅尼三昧門等に住すべからざるを釋す。

【七】不受三昧は二乘と共ぜずといふに就いて明す。

釋して曰はく、「無常等の聖行及び如、法性、實際、陀羅尼、三昧門は先に已に説けり。」

問うて曰はく、「垢法の中には住すべからず、罪を以ての故なり、善、無記法の中に何を以てか住すべからざるや。」答へて曰はく、「是れ罪に非ずと雖も、而も罪を生ずる因縁なり。」

佛の此中に説きたまへるが如し、「菩薩有り、吾我の心を以て般若波羅蜜を行せん、色中に住して色に著す。色を生ずるが爲の故に諸業を作す、受想行識も亦是の如し。五衆を起すが爲の故に行ずる、是を般若波羅蜜を取らずと爲す。是人は、「我は般若波羅蜜を行す」と云ふと雖も、是は世間の行と爲す。般若波羅蜜を具足せざるが故に、一切智に至る能はず、乃至陀羅尼、三昧門も、亦是の如し」と。

此中に須菩提は自ら説けり、「因縁に住せず。謂ゆる色は是れ不受なり、若し色にして不受ならば、則ち色に非ず、性は常に空なるが故に」と。

問うて曰はく、「是色は無常、苦、空等の過罪の故に受けず。譬へば熱せる金丸は金の食ぼるべき有りと雖も、但熱せるを以ての故に、取るべからざるが如し。是の如き何の譬か有らん。而も強ひて五衆の法を破するや。」答へて曰はく、「二種の譬有り。一には欲に著し、二には見に著す。有人、は無常、苦等を觀じ、欲著を破して解脱を得、或は有人、無常等を觀ずと雖も、猶法に著して、見を生ず。是人の爲の故に、色相の空を分別す、是の如くすれば、則ち見著を離る。乃至、陀羅尼、三昧門も亦是の如し。」

問うて曰はく、「聲聞辟支佛は、一切法を受けざるが故に、漏を盡す。此中に、云何が不受三昧は二乘と共ぜずと説く。」答へて曰はく、「彼に不受三昧有りと雖も、廣大の用有る

不受三昧は二乘と共ぜずと説く。」答へて曰はく、「彼に不受三昧有りと雖も、廣大の用有る

無く、利ならず、深からず、亦堅固ならざるなり。復次に、聲聞、辟支佛は、漏を盡すの時、諸法を受けざるを得、菩薩は久しきより來、一切法の不受を知り、皆無餘涅槃の如く、畢竟空なり。是故に二乘と共ならずと説くなり。復次に、二乘は習氣有り、礙有り、障有るが故に、無受三昧有り、清淨ならず。摩訶迦葉の如きは、菩薩の伎樂を聞き、坐處に於て自ら安んずる能はず。諸の菩薩は問うて曰はく、「汝は頭陀第一なり、何が故に欲を起して舞ふに似たる」と。迦葉答へて言はく、「我人天の五欲の中に於て永く舞れて動ぜず。此は是れ大菩薩の福德業の因縁の變化の力なり。我未だ忍ぶ能はず」と。須彌山の如きは、四面より風起るに皆能く堪忍するも、若し嵐風の至るに隨つては、自ら安んずる能はず。聲聞、辟支佛の習氣は、菩薩に於ては煩惱と爲す。復次に、此無受三昧は惟佛のみ過く知りたまふ。菩薩は佛道を求むるが故に、遍きこと能はずと雖も、而も二乘より勝る。是を以ての故に、二乘と共ならずと説く。人、是不受三昧を貴重するを以て、而も著心を生ず。是故に須菩提は説けり、「但是三昧のみ不受ならず。色乃至一切種智、皆不受なり」と。所以は何ん、須菩提は自ら因縁を説けり。謂ゆる十八空の故に受けず」と。問うて曰はく、「何を以ての故に十八空を用て諸法皆空なりと觀する。」答へて曰はく、「此中に須菩提は自ら因縁を説く、「相を取りて著するが故に、諸の結使を生ず。相とは、色乃至乾羅尼門、諸の三昧門に相にして、皆是れ煩惱の根本なり。若し佛法の中には、乃至法の微相をも、取るべき者有る無し」と。』

⑧ 先尼梵志、一切智中に於て終に信を生ぜず、云何が信と爲す。般若波羅蜜を信じて、分別し解知し稱量し思惟するに、相法を以てせず。無相の法を以てせず。是の如く、先尼梵志、相を取らず、信行の中に住す。性空の智を用て、諸の法相に入り、色を受けず、受想行識を受けず。何を以ての故に。諸法の自相は空なるが故に、受くるを得べからざればなり。是先尼梵志は、内觀の故に、是智慧を得るに非ず。外觀を得るが故に、是智慧を得るに非ず、非内非外觀の故に、是智慧を得るに非ず。亦無智慧觀の故に、是智慧を得るに非ず。何を以ての故に、梵志は是法と、知者と知法と知處とを見るが故なり。此梵志は、内色の中に是智慧を見るに非ず、内の受想行識の中に、是智慧を見るに非ず。外色の中に是智慧を見るに非ず。外の受想行識の中に、是智慧を見るに非ず。内外色の中に是智慧を見るに非ず。内外受想行識の中に是智慧を見るに非ず。亦色受想行識の中に離れて、是智慧を見るに非ず。内外空なるが故なり。先尼梵志は、此中に、心一切智を信解するを得たり。是を以ての故に、梵志は、諸法の實相を信す。一切法は不可得なるが故に、是の如く信解し已らば、法として受くべき無し。諸法は相無く、憶念無きが故なり。是梵志は、諸法に於て、亦得る所無し。若は取り、若は捨つるに、取捨は不可得なるが故なり。是梵志は、智慧も亦念せず、諸法の相は無念なるが故なり。世尊、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と名く。此彼岸は不度なるが故に。是菩薩の色受想行識は不受なり、一切法は不受なるが故なり。乃至諸の陀羅尼、三昧門も亦不受なり、一切法は不受なるが故に。是菩薩は、是中

【八】先尼梵志の例を借りて無相般若を明すを釋す。

に於て、亦涅槃を取らず、未だ四念處、乃至八聖道分を具足せず、未だ十力、乃至十八不共法を具足せず。何を以ての故に。是四念處は四念處に非ず、乃至、十八不共法は、十八不共法に非ず、是諸法は法に非ず、亦法に非ざるに非ず、是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と名く。色不受、乃至十八不共法も不受なればなり。

問うて曰はく、「此中に何の因縁もてか先尼梵志を説く。答へて曰はく、「此經に、種種の因縁もて法空を説き、乃至微相だも取るべき無し。人心は疑ひ怪みて信ぜず、是理は見難し、畢竟無相を以ての故なり。是を以ての故に須菩提は引證せり。小乗中にすら尙法空有り、何に況んや大乘法を行ずる者にして而も法空を信せざらんや。復次に剛若婆娑羅門の如きは、善く一切智人の相を知り、菩薩の乳糜を食するを見て、今日當に成佛すべしと知れり。先尼は是れ其舅なり。耆年にして智徳有り、大名聞有り、出家して廣く一切の經書を読み、心を修め、坐禪學道する時、時に智慧を求めんと欲するが故に、論議堂に往詣せり。諸の梵志言はく、「六師は皆自ら一切智と稱す。不蘭迦葉は、大名聞有り、是れ大衆の師なり。其弟子死するに、若は小、若は大、皆其生處を説かず。餘の五師に弟子死するに、若は小、若は大、皆其生處を説かず。佛も亦是れ大師にして、大名聞有り。其弟子死するに、小なる者は其生處を説き、大なる者は其生處を説かず」と。先尼は聞き已り、異時に佛の所に詣り、問訊し已りて一面に坐し、佛に問うて言さく、「佛、當に問を聽したまへ」と。佛、言はく、「汝が所問を恣にせよ」と。先尼言さく、「昔我一時曾て論堂に到り

て、諸人と論議す。昔、聞く所は、具に向に佛の説きたまへるが如し。是時、我是念を作さく、「佛法には、弟子の小なる者は更に生じ、大なる者は生ぜずと説く。何れをか定と爲さん」と。佛、先尼に告げたまはく、「我法は甚深微妙にして解し難し。汝等は長夜に諸の異見、異欲、異法に著す。汝は我法に於て疾に見る能はず」と。先尼梵志、佛に白して言さく、「我心に佛を敬す。願くは慈愍を加へ、爲に妙法を説き、我をして坐に於て、眼を得しめ、空しく起たしめたまふ無かれ」と。佛、梵志に問ひたまはく、「汝が意に於て云何、汝は是色を如去と見るや不や」と。答へて言はく、「不」「受想行識は、如去なりや不や」と。答へて言はく、「不」「色の中は、如去なりや不や」と。答へて言はく、「不」「受想行識を離れて、如去なりや不や」と。答へて言はく、「不」「汝は更に色無く受想行識無くして、如去なる者を見るや不や」と。答へて言はく、「不」と。若し汝種種の門に、如去を見ずんば、應に疑を生じて言はん、佛法は何れをか定と爲すや」と。答へて言はく、「應ぜざるなり」と。佛、先尼に告げたまはく、「若し我弟子にして是法の中に了了に知らざれば、後生有りと説く。本來の我慢等の残るもの有るが故なり。若し我弟子にして是義を解知せば、其生處を説かず。本來の我慢等の残るもの無きが故なり」と。先尼是を聞き已りて、即時に道を得たり。道を得已りて坐より起ち、佛に白して言さく、「願くは出家を得て、道の爲にせん」と。即時に鬚髮自ら墮ち、便ち沙門と成り、久

しからずして阿羅漢を得たり。佛に從へば、眼を得ること、虚しからざるが故なり。是經に論議せる先尼の信は、佛、能く我をして、道を得しめたまふと信ず、是を初信と名く。然る後に佛吾我を破して、本より已來、常に自ら無我なり、無我なるが故に、諸法は屬する所無く、幻の如く、夢の如く、虚誑、不實、不可得なりと聞いて、是信力を取得し、已にして諸法實相に入り、色は是れ如去、乃至識は是れ如去なるを受けざるなり。問うて曰はく、「梵志は何を以てか、佛に答へて、皆不と言ふや。」答へて曰はく、「梵志は本總相を我と爲す、佛は今一別に問ひたまふ。是を以ての故に、佛に答へて「不」と言へり。復次に梵志は、人の二種に我を説くを聞く。或は「五衆は即ち是れ我なり」と説く有り。或は「五衆を離れて別に我有り」と説く有り。若し五衆にして、即ち是れ我ならば、則ち別に我無し。所以は何ん、我は是れ一、衆は是れ五にして、一は五と作らず、五は一と作らざればなり。

復次に五衆は無常生滅の相なり。五衆にして是れ我ならば、亦應に生滅すべし。若し生滅せば則ち罪福を失す。是五衆は、因縁の和合より生じて自在ならず。我、若し爾らば、我を用て何か爲ん。自在ならざるが故に。是の如き等の過罪の故に説いて、「色は如去、受想行識は如去」と言ふを得ず。五衆を離れて、亦應に我有るべからず、無相なるが故に、若し受等を見て、是れ皆五衆の相なりと知らば、是れ我相に非ず、智者は云何が五衆を離れて而も我有りと説かん。是を以ての故に、「不」と言へり。若し有が言はく、別に更に我

有りて五衆無し」と。是も亦然らず。皆是れ顛倒妄見の分別なり。是の如き種種の因縁もて、無我なるを知る。我は即ち是れ如去、諸法も亦爾り、皆同じく如去なり。主無きを以ての故に、法とし屬する所無し。復次に、梵志は得道の智慧を推求し、四處に於て之を求むるに、皆定相無し。謂ゆる自身の五衆を觀するを名けて内と爲し、外、他身を觀するを名けて外と爲し、彼此を名けて内外と爲す。是三種の智慧は、道を得ず。智慧無きも亦道を得ず。復次に、内とは内の六入、外とは外の六入なり。復次に、内を能觀の智慧に名け、外を所觀の處に名く。是先尼は、諸觀、皆過罪有ることを知る。何を以ての故に。内の智慧力を以ての故に、外の諸法は是れ常なり、無常なり、有なり、無なり等と謂ふ。外法には、定相有るに非ず。若し定相有らば、則ち智は用無し。又此智慧は、外法の因縁より生ず。外法の相は、不定なるが故に、智慧も亦不定なり。稱は物の爲の故に、物は稱の爲の故にして、二事相待つが如し。若し物を離れては稱無く、稱を離れては物無し。無量教の智を得道と名け、方便して得るを、聖道の果を得と名く。復次に、略して實智慧の義を説かば、謂ゆる内、五衆の中を見ず、外、五衆の中を見ず、亦内外、五衆の中を見ず、亦五衆の中を離るるを見ず、是智慧を見るを實と爲す。無常の智慧を以て、五衆の無常を觀す。是智慧は、因縁の和合に従ふが故に有り、實ならず。觀に著する者は邪見なり。著せざる者は道を得。若し無常の相にして是れ實ならば、何が故に著して而も道を得ざらん。是を以ての故に、一切の内外に、定んで智慧を見ず、若しは無常等の觀を離れて道を得ば、一

切の凡人も亦應に道を得べし。是を以ての故に、是智慧を離るるも亦所得無しと説く。爾時、梵志、是智慧を以て一切法の中に於て、心に遠離を得、智慧に於ても亦復一切の我見等を遠離し、取相の邪見一切皆滅す。亦無智に従うて得ず。爾時、梵志歡喜して無量の法の性相を觀じ、佛を眞に大師と爲せり。捨てずとは、諸法の中に、皆助道の力有るが故なり。受けずとは、諸法實相は畢竟空にして所得無きが故に受けざるなり。復次に、諸の結使煩惱は顛倒虛妄なるが故に捨つる所無し。但諸法の如實の相、無想、無憶念を知るが故に、是を菩薩の不受不捨の波羅蜜と名け、名けて般若波羅蜜と爲す。此彼岸に度らざるが故に、世間は即ち是れ涅槃の相、涅槃の相は即ち是れ世間の相なり。一相は謂ゆる無相なり。若し是の如く知らば應當に滅すべし、未だ諸の功德を具足せざるを以ての故に滅せざるなり。大慈悲の本願力の故に滅せざるなり。佛道を求むと雖も、此法の中に於て、亦好龍の相、及受捨の相無し。是を以ての故に、法に非ず、亦法に非ざるに非ず。是を菩薩の般若波羅蜜は一切の相受けずと名く。

大智度論釋集散品第九下

卷第四十三

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

【釋】復次に世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行せんと欲せば、應に是の如く思惟すべし。何者か是れ般若波羅蜜なる。何を以ての故に、般若波羅蜜と名くる。是れ誰の般若波羅蜜なる。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行せば、是の如く念ずらく、「若し法にして所有無く、不可得なれば、是れ般若波羅蜜なり。」と。爾時、舍利弗、須菩提に問はく、「何等の法か所有無く不可得なる。須菩提言はく、「般若波羅蜜は是れ法にして、所有無く不可得なり。禪波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、羼提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀波羅蜜は、是れ法にして、所有無く不可得なり。内空の故に、外空、内外空、空空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、散空、性空、自相空、諸法空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空の故なり。舍利弗、色法は所有無く不可得なり。受想行識法も、所有無く不可得なり。内空は、法にして所有無く不可得なり。乃至無法有法空は、法にして所有無く不可得なり。舍利弗、四念處は、法にして所有無く不可得なり。乃至十八不共法は、所有無く不可得なり。舍利弗、諸の神通法は、所有無く不可得なり。如相法は、所有無く不可得なり。法性、法相、

法住、法位、實際法は、所有無く不可得なり。舍利弗、佛は所有無く不可得なり。薩婆若
 は法にして、所有無く不可得なり。一切種智は、法にして所有無く不可得なり。内空乃至
 無法有法空の故なり。舍利弗、若し菩薩摩訶薩、是の如く思惟し、是の如く觀する時は、
 心没せず、悔いず、驚かず、畏れず、怖かず。當に知るべし、是菩薩は、般若波羅蜜の行
 を離れず。舍利弗、須菩提に問はく、「何の因縁の故に、當に菩薩は、般若波羅蜜の行を離
 れざるを知るべき。」須菩提言はく、「色は、色の性を離れ、受想行識は、識の性を離れ、六
 波羅蜜は、六波羅蜜の性を離れ、乃至實際は、實際の性を離るればなり。舍利弗、復須菩
 提に問はく、「云何が是れ色の性なる、云何が是れ受想行識の性なる、云何が是れ乃至實際
 の性なる。」須菩提言はく、「所有無きは、是れ色の性なり。所有無きは、是れ受想行識の性
 なり。乃至所有無きは、是れ實際の性なり。舍利弗、是因縁を以ての故に、當に知るべし、
 色は色の性を離れ、受想行識は、識の性を離れ、乃至實際は、實際の性を離るることを。
 舍利弗、色は亦色相を離れ、受想行識は識の相を離れ、乃至、實際も亦實際の相を離れ、
 相も亦相を離れ、性も亦性を離る。舍利弗、須菩提に問はく、「菩薩摩訶薩、若し是の如く
 學せば、薩婆若を成就するを得るや。」須菩提言はく、「是の如く是の如し。舍利弗、若し菩
 薩摩訶薩、是の如く學せば、薩婆若を成就するを得。何を以ての故に、諸法は生ぜず、成
 就せざるを以ての故なり。舍利弗、須菩提に問はく、「何の因縁の故に、諸法は生ぜず、成
 就せざる。」須菩提言はく、「色の色空たるは、是れ色の生、成就にして、不可得なり。」受想

【一】下先の不住
門に次いで、般若
の無所有不可得な
りと説くを釋す。

行識の識空たるは、是れ識の生、成就にして、不可得なり。乃至、實際の實際空たるは、是れ實際の生、成就にして、不可得なり。舍利弗、菩薩摩訶薩は、是の如く學せば、漸く薩婆若に近き、漸く身清淨、心清淨、相清淨を得ん。漸く身清淨、心清淨、相清淨を得るが故に、是菩薩は染心を生ぜず、瞋心を生ぜず、憍慢心を生ぜず、淨をうるが故に、是菩薩は染心を生ぜず、瞋心を生ぜず、憍慢心を生ぜず、慳貪心を生ぜず、邪見心を生ぜざるなり。是菩薩は、染心を生ぜず、乃至邪見心を生ぜざるが故に、終に母人の腹中に生ぜずして、常に化生するを得て、一佛國より一佛國に至り、衆生を成就し、佛世界を淨め、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に諸佛を離れず。舍利弗、菩薩摩訶薩は、當に是般若波羅蜜を行するを作すべく、當に是般若波羅蜜を學するを作すべし。

(一)上 問うて曰はく、「上來、廣く般若波羅蜜を説く。今須菩提は何を以てか是言を作す、」菩薩摩訶薩は、應に是の如く思惟すべし、何者か是れ般若波羅蜜なる」と。答へて曰はく、「須菩提は、上來、護法門を説き、次に不住門を説き、今は般若波羅蜜の體を明す。何等か是れ般若波羅蜜なる。般若波羅蜜とは、是れ一切諸法の實相にして、破すべからず、壞すべからずし。若し佛有り、若し佛無きも、常住の諸の法相法位は、佛に非ず、群支佛に非ず、菩薩に非ず、聲聞に非ず、天人の所作に非ず、何に況んや其餘の小なる衆生をや。復次に、常も是れ一邊、斷滅も是れ一邊なり、是二邊を離れて、中道を行する、是を般若波羅蜜と爲す。又復、常と無常、苦と樂、空と實、我と無我等も亦是の如し。色法も是れ一

邊、無色法も是れ一邊なり。可見法と不可見法、有對と無對、有爲と無爲、有漏と無漏、
 世間と世出間等の諸の二法も亦是の如し。復次に、無明も是れ一邊、無明の盡くるも是
 れ一邊、乃至、老死も是れ一邊、老死の盡くるも是れ一邊、諸法の有も是れ一邊、諸法の
 無も是れ一邊なり。是二邊を離れて中道を行する、是を般若波羅蜜と爲す。菩薩も是れ一
 邊、六波羅蜜も是れ一邊、佛も是れ一邊、菩提も是れ一邊なり。是二邊を離れて中道を行
 する、是を般若波羅蜜を爲す。略して内の六情を説くも是れ一邊、外の六塵も是れ一邊な
 り。是二邊を離れて中道を行する、是を般若波羅蜜と名く。此般若波羅蜜も是れ一邊、此
 般若波羅蜜に非ざるも是れ一邊なり。是二邊を離れて中道を行する、是を般若波羅蜜と名
 く。是の如き等の二門もて、廣く無量の般若波羅蜜の相を説く。復次に有を離れ、無を離
 れ、非有非無を離れ、愚癡に墮せずして、能く善道を行する、是を般若波羅蜜と爲す。是
 の如き等の三門は、是れ般若波羅蜜の相なり。復次に須菩提は、此中に自ら説く、是法は
 所有無く不可得なり」と。是般若波羅蜜は空なるが故に所有無く、常、無常等の諸觀の求
 覓するに、定相無きが故に不可得なり。復次に所有無しとは、此中に、須菩提は自ら説く、
 「般若波羅蜜、乃至五波羅蜜の法は所有無し。取るべからず、受くべからず、著すべからざ
 るが故なり」と。復次に十八空の故に、是六波羅蜜は、所有無く、不可得なり。譬へば、
 大風の能く諸の雲を破散するが如く、亦大火の乾れたる草木を燒くが如く、金剛寶の大
 山を摧破するが如し。諸の空も亦是の如し、能く諸法を破す。何を以ての故に、般若波

【二】 諸の智慧の中
に般若第一なる
所以を明す。

羅蜜と名くとは、般若とは 秦に智慧 一切諸の智慧の中に、最も第一爲り、無上、無比、無等にして、更に勝者無く、窮盡して邊に到る。一切衆生の中には、佛を第一と爲し、一切諸法の中にては涅槃を第一と爲し、一切衆の中にては比丘僧を第一と爲すが如し。問うて曰はく、『汝は先に、「諸法實相は是れ般若波羅蜜なり。謂ゆる法位法住、佛有るも佛無きも、常住にして異らず」と説けり。今何を以てか 諸の智慧の中にて、般若波羅蜜の第一なること、譬へば諸法の中にて涅槃を第一と爲すが如しと説く。』答へて曰はく、『世間の法は、或時は因中に果を説き、或時は果中に因を説くも咎無し。人の日に數匹の布を食すが如きは、布は食すべからず、布の因縁より食を得るなり。是を因中に果を説くと名く。好畫を見て、好手なりと言ふが如きは、是を果中に因を説くと名く。諸法實相に因りて智慧を生ずとは、是れ即ち果中に因を説くなり。』復次に、是菩薩は、不二入法門に入り、是時、能く直に此般若波羅蜜を行じ、是は因、是は果、是は縁、是は智、是は内、是は外、是は此、是は彼なり等と分別せず、謂ゆる、一相無相なり。是を以ての故に難すべからず。復次に、世間に三種の智慧有り。一には世俗の巧便、博識、文藝、仁智、禮敬等なり。二には離生の智慧、謂ゆる欲界、乃至無所有處を離るるなり。三には出世間の智慧、謂ゆる我及び我所を離れ、諸漏盡きたる、聲聞、辟支佛の智慧なり。般若波羅蜜を最も殊勝と爲す。畢竟清淨にして、著する所無きが故なり、一切衆生を饒益するが故なり。聲聞辟支佛の智慧は、漏盡くるが故に、清淨なりと雖も、大慈悲無く、一切を饒益す

る能はざるが故に如かず。何に況んや世俗の罪垢有り、不淨なる欺誑の智慧をや。三種の智慧は、是智慧に及ばざるが故に、名けて般若波羅蜜と爲す。復次に、是智慧は、一切衆生を度するが爲の故に、佛道を得るが爲の故に、是智慧相應の受想行識、及び智慧より起る身業、口業、及び生、住等の心不相應の諸行、是諸法の和合を名けて、波羅蜜と爲し、是諸の波羅蜜の中には、智慧多きが故に、名けて般若波羅蜜と爲し、念、定等多きが故に、名けて禪波羅蜜と爲す。餘の波羅蜜の義も亦是の如し。是の如き等の種種無量の因縁の故に、名けて般若波羅蜜と爲す。是れ誰の般若波羅蜜なるやとは、第一義中には知者、見者、得者無く、一切法は我無く、我所の相無く、諸法は但空にして、因縁和合し、相續して生ず。若し爾らば、般若波羅蜜は當に誰にか屬すべき。佛法に二種有り。一には世諦、二には第一義諦なり。世諦の爲の故に、般若波羅蜜は、菩薩に屬す。凡夫の人の法には、種種の過罪有りて、清淨ならざるが故に、則ち凡夫人に屬せず。般若波羅蜜は、畢竟清淨にして、凡夫の樂はざる所なり、蠅の樂んで不淨に處し、蓮華を好まざるが如し。凡夫人は復怨を離ると雖も、吾我の心有り、離怨の法に著するが故に、般若波羅蜜を樂はず。聲聞、辟支佛は般若波羅蜜を樂はんと欲すと雖も、深き慈悲無きが故に、大いに世間を厭ひ、一心に涅槃に向ふ。是故に具足して、般若波羅蜜を得る能はず。是般若波羅蜜は、菩薩の成佛する時は、轉じて一切種智と名く。是を以ての故に、般若は佛に屬せず、聲聞、辟支佛に屬せず、凡夫に屬せず、但菩薩に屬す。

【三】無所有を門
すに六波、五蘊等
と序も説けるに
就いて明す。

問うて曰はく、「此經の中に常に、「五衆は前に在り、一切種智は後に在り」と説けり。今何を以てか先づ六波羅蜜を説く。」答へて曰はく、「舍利弗、須菩提に所有無きの義を問ふに、五衆は、種種の因縁觀もて強ひて所有無からしむれば解し難く、般若波羅蜜は、即ち是れ所有無ければ解し易し。譬へば、水中の月よ、其空なるを明め易く、天上の月は、無所有ならしめ難きが如し。五波羅蜜は、般若波羅蜜と同名同事なり。是故に續いて五波羅蜜を説き、然る後に、五衆乃至一切種智の所有無く、不可得なるを説く。菩薩は是門に入りて、諸法實相を觀じ、恐れず怖かずとは、常に知るべし、是菩薩は般若波羅蜜を離れず。離れずとは、常に般若波羅蜜を行じて、虚しからざれば、必ず果報有り。此中に須菩提は自ら、「因縁を離れず」と説けり。謂ゆる色は色の性を離るれば、色の中に色の相無く、虚誑にして、所有無し。菩薩は、能く是の如く、離れざるを知る。實智慧乃至實際も、亦是の如し、菩薩は、能く是無障礙の道を行じて、薩婆若に至るを得。一切法は不生、不出の故なり。舍利弗、須菩提に問はく、「云何が一切法は不生なりや」と。須菩提答ふらく、「色の色たる相は空なるが故に、色は生無く、成就無し。乃至實際も亦是の如し。若し菩薩、能く是の如く行すれば、是れ清淨第一にして、無上無比なるが故に、漸く薩婆若に近く。漸く薩婆若に近くが故に、心に邪見、煩惱、戲論を生ぜず、即時に心清淨なるを得。心清淨の果報の故に、身清淨なるを得。三十二相、八十隨形好もて、其身を莊嚴し、三種の清淨を得るが故に、諸の虚誑、取相の法を破し、法性生身を受く。謂ゆる常に化

生を得て、胞胎に處らざるなり。』問うて曰はく、『若し力有れば、此の如く何んが、化生を用て其身に貪著し、而して涅槃を取らざる。』答へて曰はく、『二事の因縁有るが故なり。諸佛、是衆生の中の寶を以て供養して厭く無からんと欲するが故に本願有りて、衆生を度して、佛世界の未だ満たざるを淨むるが故に。是菩薩は、福德の方便力の故に、常に諸佛を離れざるなり。』

大智度論釋行 相品第十

爾時、須菩提、佛に白して言さく、「世尊、若し菩薩摩訶薩、方便無くして、般若波羅蜜を行ぜんと欲せば、若し色を行じて行相と爲し、若し受想行識を行じて、行相と爲し、若し色は是れ常なりと行するを、行相と爲し、若し受想行識は是れ常なりと行するを、行相と爲し、若し色は、是れ無常なりと行するを、行相と爲し、若し受想行識は、是れ無常なりと行するを、行相と爲し、若し色は、是れ樂なりと行するを、行相と爲し、若し受想行識は、是れ樂なりと行するを、行相と爲し、若し色は、是れ苦なりと行するを、行相と爲し、若し受想行識は、是れ苦なりと行するを、行相と爲し、若し色は、是れ有なりと行するを、行相と爲し、若し受想行識は、是れ有なりと行するを、行相と爲し、若し色は、是れ空なりと行するを、行相と爲し、若し受想行識は、是れ空なりと行するを、行相と爲し、若し色は、

是れ我なりと行するを行相と爲し、若は受想行識は是れ我なりと行するを行相と爲し、若は色は是れ無我なりと行するを行相と爲し、若は受想行識は是れ無我なりと行するを、行相と爲し、若は色は是れ離なりと行するを行相と爲し、若は受想行識は、是れ離なりと行するを、行相と爲し、若は色は、是れ寂滅なりと行するを、行相と爲し、若は受想行識は、是れ寂滅なりと、行するを行相と爲す。世尊、若し菩薩摩訶薩は、方便無くして、四念處を行するを行相と爲し、乃至十八不共法を行するを行相と爲す。世尊、若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、是念を作さく、「我般若波羅蜜を行するに、有所得の行も亦是れ行相なり」と。世尊、若し菩薩摩訶薩、是念を作さく、「能く是の如く行せば、是般若波羅蜜を修行せりとするも、亦是れ行相なり」と。當に知るべし、是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行するに方便無し。須菩提、舍利弗に語らく、「若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行する時、色に於て受念妄解し、若は色と爲すが故に行を作し、若は色と爲して行を作さば、生老病死、憂悲苦惱、及び後世の苦を離るるを得ず。若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行する時、方便無く、眼を受念妄解し、乃至意、色乃至法、眼識界乃至意識界、眼觸乃至意觸、眼觸因縁生の受乃至意觸因縁の受、四念處、乃至十八不共法の受念妄解を十八不共法と爲すが故に、行を作し、若は爲に行を作さば、是菩薩は、生老病死、憂悲苦惱、及び後世の苦を離るるを得る能はず。是の如き菩薩は、尚聲聞辟支佛地の證を得る能はず。何に況んや、阿耨多羅三藐三菩提を得んや。是處有る無し。舍利弗、當に知るべし、是菩薩摩訶薩、般

若波羅蜜を行するに、方便無し」と。舍利弗、須菩提に問はく、「云何が當に是菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行するに、方便有り」と知るべきや」と。須菩提、舍利弗に語るらく、「若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行せんと欲する時、色を行ぜず、受想行識を行ぜず、色相を行ぜず、受想行識相を行ぜず、色受想行識は、常なりと行ぜず、色受想行識は、無常なりと行ぜず、色受想行識は、樂なりと行ぜず、色受想行識は、苦なりと行ぜず、色受想行識は、我なりと行ぜず、色受想行識は、無我なりと行ぜず、色受想行識は、空なりと行ぜず、色受想行識は、無相なりと行ぜず、色受想行識は、無作なりと行ぜず、色受想行識は、離なりと行ぜず、色受想行識は、寂滅なりと行ぜず、何を以ての故に。舍利弗、是色は空にして色に非ずと爲し、空を離れて色無く、色を離れて空無く、色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。受想行識は空にして、識に非ずと爲し、空を離れて、識無く、識を離れて空無く、空は即ち是れ識、識は即ち是れ空なり。乃至十八不共法は空にして、十八不共法に非ずと爲し、空を離れて十八不共法無く、十八不共法を離れて空無く、空は即ち十八不共法、十八不共法は即ち是れ空なればなり。是の如く、舍利弗、當に知るべし、是菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行するに方便有り。是菩薩摩訶薩は、是の如く般若波羅蜜を行じて、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。是菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行する時、行も亦受けず、不行も亦受けず、行不行も亦受けず、非行非不行も亦受けず、不亦受けず、舍利弗、須菩提に語るらく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、何の因縁の故に受けざる」と。須菩提

【四】若し色等の
行相を行ぜば方便
善巧なしとし、無
相を以て諸法を總
するこれ本品の總
意なり。今初に諸
法の取相皆行相な
ることを明すを釋
して行相畢竟虛妄
となきを明す。

言はく、「是般若波羅蜜行するの自性は、不可得なるが故に、受けず。何を以ての故に、所有の性無き、是れ般若波羅蜜なればなり。舍利弗、是を以ての故に、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行するに、行も亦受けず、不行も亦受けず、行不行も亦受けず、非行非不行も亦受けず、不亦も亦受けず。何を以ての故に、一切の法は、性として所有無く、諸法の行に隨はず、諸法の相を受けざるが故なり。是を菩薩摩訶薩の、諸法無所受三昧と名く。廣大の用、聲聞辟支佛と共にならず。是菩薩摩訶薩は、是三昧を行じて離れずんば、疾に阿耨多羅三藐三菩提を得ん」と。

釋して曰はく、「前品には、空門を用て諸法を破し、此品には、無相門を以て諸法を破せんと欲す。若し菩薩、方便無くして、色を觀すれば、則ち相中に墮し、相中に墮するが故に、般若波羅蜜の行を失す。所以は何ん、一切法は、空なるを以ての故に、相として取るべき無ければなり。問うて曰はく、「人は善惡の果報を知り、果報の相を取り已りて、善惡を分別し、善なる者を取り、惡なる者を捨つ、是故に道を行す。云何が諸法は無相の相なりと説く。答へて曰はく、「相を取るとは、初學者の爲に説き、無相とは、道を行じて解脱門に住する者の爲に説く。麤事を以て難を爲すべからず。今行者は、善の相を取りて不善の相を破す。謂ゆる男女等の相は、諸の煩惱の因縁を生じ、後に無相の相を以て善法の相を破す。若し不善を破して、而も善相を破せずんば、善は即ち患と爲らん。諸の著を生ずるが故なり。無相の相を以て善法を破し、無相も亦自ら破す。所以は何ん。無相

は善法に攝する所なるが故に。譬へば雹墮ちて穀を害せんに、雹も自ら消滅するが如し。復次に一切の法は無相の相を實と爲す。譬へば身には不淨充滿し、九孔より常に流れて、淨相有る無きも、而も人は無明の故に、強ひて以て淨と爲し、煩惱を生じて諸罪を作すが如く、小兒の不淨物の中に於て淨相を取り、以て樂と爲すを、長者は之を觀て、而して笑ひ、處妄と爲すを知るが如し。是の如き等の種種の取相は皆虛妄と爲す。頗梨珠の色に隨うて變じ、自ら定色無きが如し。諸法も亦是の如く、定相有る無く、心に隨つて異と爲り、若し常、若し無常等の相有り。瞋心を以て、此人を見て弊と爲し、若し瞋心休息すれば嫉欲の心生じて、此人を見て還りて復好しと爲し、若し憍慢心生ずるを以て、此人を見て以て卑賤と爲し、其徳有るを聞いて、還つて敬心を生ずるが如し。是の如き等、理有りて憎愛し、理無くして憎愛するは、皆是れ虛妄の憶想なり。若し虛妄の想を除けば、亦空相、無相の相、無作の相無し。破する所無きが故なり。是色は種種の因縁の和合するに從つて有り。譬へば水沫の如く、幻の如く、夢の如し。若し菩薩は色の中に於て、一相を取れば、即ち般若波羅蜜を失す。色性は是れ無相の相なるが故なり。是色相を受け已りて、色を見るに、散壞磨滅す。是を無常と謂ふ。若し和合するを見て少許の時住するを謂ひて常有と爲す。常に二種有り。一には若し住すること、百歲、千萬億歲、若は一劫、若しは八萬劫にして、然る後に歸滅す。二には常住不壞の菩薩なり。若し邊邪滅するが故に、亦復眞實の常を觀せず、若し常を觀すれば、是れ久しく住すと知るが故に、常は是れ眞實

に非ず。若し邊邪滅せざれば、色を觀じて眞實の常と爲し、是念を作さく、「草木は零落還歸して土と爲る、但離合に時有り」と。是故に是菩薩は方便無しと説く。菩薩は或は色の無常を觀ず。無常に亦二種有り。一には、念念の滅なり、一切の有爲法は一念の任に過ぎず。二には、相續の法は壞するが故に、名けて無常と爲す。人命の盡くるが如く、火の草木を燒くが若く、水を煎すれば、消盡するが如し。若し初發心の菩薩は、是相續の斷を行す、麤なる無常の心に厭ふが故なり。若し久行の菩薩は、能く諸法は念念に生滅して無常なりと觀ず。是二菩薩は、皆相を取る中に墮す。所以は何ん。是色の常、無常の相の不可得なるは、先に説く如くなればなり。受想行識も亦是の如く苦樂、我、非我も、亦爾り。』問うて曰はく、『是五衆は常、無常等の觀を作すべし。云何が五衆は、是れ寂滅遠離の相なりと言ふ。』答へて曰はく、『行者は五衆の常、無常の相を見ざるが故に、是五衆は自相を離るを知る。若し五衆の自相を離るるを知れば、即ち是れ寂滅にして涅槃の如し。』問うて曰はく、『若し爾らば初より自ら無相なり。云何が説いて方便無くして相中に墮すと言ふや。』答へて曰はく、『是菩薩は、根鈍にして自覺せず、心、五衆の著を離れて、轉復遠離寂滅に著し、無相の中に於て著を生ず。三十七品乃至十八不共法も、亦應に是の如く、義に隨つて分別すべし。若し菩薩、外の諸法は皆無相なりと觀じ、「我は能く是觀を作す」と言はば、我心の殘有るを以ての故に、亦相中に墮す。若し菩薩は、能く此著相の非道を離れて、眞淨無相の智慧を行じ、是念を作さく、「能く是の如き内外清淨の行、是を般若波羅

蜜みつを修行しゆぎやうすと爲なす」と。是人このひとも、亦また相中さうちゆうに墮だするなり。所以ゆゑんは何ん。著ちやくすべからずして著ちやくし、取とるべからずして取とるが故ゆゑなり。是菩薩このぼさつは名なけて方便ほうべん無しと爲なし、愛見あいけんに依止いしし、善法ぜんぽうに著ちやくするが故ゆゑに、是菩薩このぼさつ福德ふくどく有ありと雖いへども、亦また老病らうびやう死し、憂悲うひ苦惱くたう、雜行ざつぎやうの道だうを離はなるるを得えず。故ゆゑに尙なほ小乘せうじやうを得える能あたはず、何いかに況いはんや大乘だいじやうをや。上かみと相違さうゐするを名なけて方便ほうべん有ありと爲なす。一切いっさい法ぽうに於おつて受うけず、著ちやくせず、諸法しよぽうは、和合わがふの因緣いんげん生しやうにして、自性じしやう無なきが故ゆゑなり。問とうて曰いはく、『前まへには無受むじゆせん三昧さんまいを説とき、此こゝには不受ふじゆせん三昧さんまいを説とく。何等なんらの異いか有ある。』答こたへて

曰いはく、『前者ぜんぜうは空くうの爲ための故ゆゑなり、此こゝは無相むさうの爲ための故ゆゑなり。遠離えんりせずとは、常つねに行ぎやうじて息そくせず、休やすせず、大慈だいじ悲心ひしんを以もつての故ゆゑなり。疾ちやくかに佛道ぶつだうを得えるとは、是三昧さんまいに入りて、障礙しやうがい無なきが故ゆゑに、行ぎやうする所ところの智慧ちゑは、佛ぶつと相似さうじし、若しは無量阿僧祇劫むりやうあそんぎせつに應おうて得えべく、或時あるときは一阿僧祇劫あそんぎせつ、百劫ひやくせつ乃至いた六十一劫むそいちせつを超こゆ。弗沙佛ふさふつの釋迦文佛しやくかぶんぶつを讚歎さんたんして、九劫くせつを超こ越こせしが如ごとし。

【經】舍利弗言しやりふごんはく、『但ただ是三昧さんまいを離はなれずば、菩薩摩訶薩ぼさつまかさつをして、疾ちやくかに阿耨多羅三藐三菩提あうたらくさんびやくさんぼだいを得えしむるや、更さらに諸もろの餘の三昧さんまい有ありや」と。須菩提すもぼだい、舍利弗しやりふに語りて言いはく、『更さらに諸もろの餘の三昧さんまい有ありや」と。菩薩摩訶薩ぼさつまかさつ、是三昧さんまいを行ぎやうずれば、疾ちやくかに阿耨多羅三藐三菩提あうたらくさんびやくさんぼだいを得えん」と。

舍利弗言しやりふごんはく、『何等なんらの三昧さんまいか、菩薩摩訶薩ぼさつまかさつ、是これを行ぎやうじて、疾ちやくに阿耨多羅三藐三菩提あうたらくさんびやくさんぼだいを得えるや」と。須菩提すもぼだい言ごんはく、『諸もろの菩薩摩訶薩ぼさつまかさつに、三昧さんまい有あり、首楞嚴しゆらうげんと名なく。是三昧さんまいを行ぎやうぜば、菩薩摩訶薩ぼさつまかさつをして、疾ちやくかに阿耨多羅三藐三菩提あうたらくさんびやくさんぼだいを得えしむ。寶印三昧ほういんさんまい、師子遊戯三昧ししゆぎさんまい、妙月三昧めうげつさんまい、月輪相三昧げつりんさうさんまい、諸法印三昧しよぽういんさんまい、觀頂三昧くわんとうさんまい、畢法性三昧ひふぽうじやうさんまい、畢幢相三昧ひつじやうさうさんまい、金剛三昧こんかうさんまい、入法

印三昧、三昧王安立三昧、王印三昧、放光三昧、力進三昧、出生三昧、必入辯才三昧、
 入名字三昧、觀方三昧、陀羅尼印三昧、不忘三昧、攝諸法海印三昧、遍覆虛空三昧、金剛
 輪三昧、寶斷三昧、普照三昧、不求三昧、無處住三昧、無心三昧、淨燈三昧、無邊明三昧、
 能作明三昧、普遍明三昧、堅淨諸三昧、三昧無垢明三昧、作樂三昧、電光三昧、無盡三昧、
 威德三昧、離盡三昧、不動三昧、莊嚴三昧、日光三昧、月淨三昧、淨明三昧、能作明
 三昧、作行三昧、相知三昧、如金剛三昧、心住三昧、遍照三昧、安立三昧、寶頂三昧、妙
 法印三昧、法等三昧、生喜三昧、到法頂三昧、能散三昧、壞諸法處三昧、字等相三昧、離
 字三昧、斷緣三昧、不壞三昧、無種相三昧、無處行三昧、離闇三昧、無去三昧、不動三昧、
 度緣三昧、集諸功德三昧、住無心三昧、妙淨華三昧、覺意三昧、無量辯三昧、無等等三昧、
 度諸法三昧、分別諸法三昧、散疑三昧、無住處三昧、一相三昧、一性三昧、生行三昧、
 一行三昧、不行三昧、妙行三昧、達一切有底散三昧、入語言三昧、離音聲字語三昧、然
 炬三昧、淨相三昧、破相三昧、一切種妙足三昧、不喜樂苦三昧、不盡行三昧、多陀羅尼三
 昧、攝諸邪正相三昧、滅憎愛三昧、逆順三昧、淨光三昧、堅固三昧、滿月淨光三昧、
 大莊嚴三昧、能照一切世三昧、三昧等三昧、無淨行三昧、無生處樂三昧、如住定三昧、壞
 身衰三昧、壞語如虛空三昧、離著如虛空不染三昧と名くる有り。舍利弗、是菩薩摩訶薩は、
 是諸の三昧を行ぜば、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得ん。復無量阿僧祇の三昧門、陀羅
 尼門あり。菩薩摩訶薩は、是三昧門、陀羅尼門を學せば、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得

んと。慧命須菩提、佛の心に隨つて言はく、「當に知るべし。是菩薩摩訶薩にして、是三昧を行ずる者は、過去の佛の爲に諸に授記せらるるを以て、今現在十方の諸佛も、亦是菩薩に記を授く。是菩薩は、是諸の三昧を見ず。亦是三昧を念ぜず。亦我當に是三昧に入るべく、我今是三昧に入り。我已に是三昧に入れりと念ぜず。是菩薩摩訶薩は、都て分別の念無きなり」と。舍利弗、須菩提に問はく、「菩薩摩訶薩は、是諸の三昧に住して、已に過去の佛に従つて、記を授かりしや」と。須菩提報じて言はく、「不、舍利弗、何を以ての故に。般若波羅蜜は、諸の三昧に異らず、諸の三昧は般若波羅蜜に異らず。菩薩は般若波羅蜜及び三昧に異らず。般若波羅蜜及び三昧は菩薩に異らず。般若波羅蜜及び三昧は即ち是れ般若波羅蜜、菩薩は即ち是れ般若波羅蜜及び三昧、般若波羅蜜及び三昧は、即ち是れ菩薩なり」と。舍利弗、須菩提に語らく、「若し三昧は、菩薩に異らず、菩薩は、三昧に異らず、三昧は、即ち是れ菩薩、菩薩は、即ち是れ三昧ならば、菩薩は云何が一切諸法は、三昧に等しと知るや」と。須菩提言はく、「若し菩薩、是三昧に入らば、是時、是念を作さず。我は是法を以て是三昧に入れりと。是因縁を以ての故に舍利弗、是菩薩は、諸の三昧に於て、知らず念ぜざるなり」と。舍利弗言はく、「何を以ての故に、知らず念ぜざる」須菩提言はく、「諸の三昧は、所有無きが故に、是故に菩薩は、知らず、念ぜざるなり」と。爾時、佛讚じて言はく、「善い哉善い哉、須菩提、我説の如く、汝は無諍三昧を行すること第一なり。此義と相應せり。菩薩摩訶薩は、應に是の如く、般若波羅蜜

昧なり。若し三昧、菩薩にして異らば、諸佛は其に記を授けたまはんや不や。異なるが故に授記無し」と。舍利弗、復問はく、「若し爾らば、三昧及び一切法は、平等にして異らずや」と。須菩提言はく、「諸の菩薩には、諸の法等三昧有り。是三昧の中に入れば、諸法は異なること無し」と。復次に先に説けるが如く、諸の三昧に於て、憶想、分別を作さず、覺ると覺らざるとなり。諸の三昧の自性は所有無きが故に、菩薩は知らず、念せざるなり。佛は須菩提の、自ら未だ是三昧を得ずして、而も善く菩薩の微妙三昧陀羅尼を説き、般若波羅蜜の中に念ぜず、著せざるを以て、是故に讀じて言はく、「善い哉、我、汝が無諍三昧を得ること第一にして、我讀する所の如く、虚しからずと説かん」と。

○舍利弗、佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩の、是の如く學するを、般若波羅蜜を學すと爲すや。」佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の是の如く學するを、般若波羅蜜を學すと爲す。是法は不可得なるが故なり。乃至檀波羅蜜を學するも、是法亦不可得なるが故なり。四念處、乃至十八不共法を學するも、是法不可得なるが故なり。」舍利弗、佛に白して言さく、「世尊、是の如く、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を學するも、是法不可得なりや。」佛言はく、「是の如く菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を學せば、是法不可得なり。」舍利弗言はく、「世尊、何等の法か不可得なる。」佛言はく、「我は不可得なり、乃至知者、見者も不可得なり、畢竟淨なるが故なり。五陰は不可得なり、十一入も不可得なり、十八界も不可得なり、畢竟淨なるが故なり。無明は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。乃至老死も

不可得なり、畢竟淨なるが故なり。苦諦は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。集滅道諦は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。欲界は不可得なり、色界、無色界は、不可得なり。畢竟淨なるが故なり。四念處は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。乃至十八不共法も不可得なり、畢竟淨なるが故なり。六波羅蜜も不可得なり、畢竟淨なるが故なり。須陀洹も不可得なり、畢竟淨なるが故なり。斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛も不可得なり、畢竟淨なるが故なり。菩薩は不可得なり。畢竟淨なるが故なり。佛は不可得なり、畢竟淨なるが故に。舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、何等か是れ畢竟淨なる。』佛言はく、『出でず、生ぜず、得る無く、作す無き、是を畢竟淨なりと名く。舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩、若し是の如く學するを何等の法を學すと爲す。舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩、是の如く學せば諸法に於て、學する所無し。何を以ての故に。舍利弗、諸法の相は、凡夫所著の如くならざればなり。舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、諸法實相は、云何が有なる。』佛言はく、『諸法は所有無し、是の如く有り、是の如く所有無し、是事を知らざるを名けて無明と爲す。舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、何等か所有無く、是事を知らざるを名けて無明と爲す。佛、舍利弗に告げたまはく、『色受想行識は所有無し、内空、乃至無法有法空の故に。四念處、乃至十八不共法も所有無し、内空、乃至無法有法空の故に。是中に、凡夫は無明の力を以て、渴愛するが故に、妄見分別して、是を無明、是を凡夫と説き、二邊の爲に縛せらる。是人は、諸法の所有無き

を知らず見ずして、憶想分別して色乃至十八不共法に著す。是人は著するが故に、所有無きの法に於て而も知識の見を作す。是れ凡夫の知らず、見ざるなり。何等をか知らず見ざる。『色を知らず見ず、乃至十八不共法も亦知らず、見ざるなり。是を以ての故に、凡夫の數に墮す。小兒の如し。是人は出でず。』何より出でざる。『欲界を出でず、色界を出でず、無色界を出でず。聲聞辟支佛の法中より出でず。是人も亦信ぜず。』何等をか信ぜざる。『色の空なるを信ぜず、乃至十八不共法の空なるを信ぜざるなり。是人は住ぜず。』何等をか住せざる。『檀波羅蜜に住せず、乃至般若波羅蜜に住せず。阿毘跋致地に住せず、乃至十八不共法に住せざるなり。是因縁を以ての故に、名けて凡夫と爲す。小兒の如し。亦著する者と名く。』何等をか著と爲す。『色乃至識に著し、眼入乃至意入に著し、眼界乃至意識界に著し、姪怒癡に著し、諸の邪見に著し、四念處に著し、乃至佛道に著するなり。』舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩、是の如き學を作すも、亦般若波羅蜜を學せずんば、薩婆者を得ざる。』舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、學せずんば、薩婆者を得ざるや。』佛、舍利弗に語りたまはく、『菩薩摩訶薩は、是の如き學を作すも、亦般若波羅蜜を學せずんば、薩婆者を得ず。』舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、何を以ての故に、菩薩摩訶薩は、亦般若波羅蜜を學せざれば、薩婆者を得ざる。』佛、舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩は、方便無きが故に、想念分別して、般若波羅蜜に著し、禪波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、辱提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀波羅蜜、乃至十八不共法、一切種智に著し、隨念分別して著す。是因縁を以ての故に、菩薩摩訶薩は、是の如く學するも、

【六】諸三昧不可得實相無所有と學する、これ般若を學し、即ち薩婆若を得といふを釋す

亦般若波羅蜜を學せずんば、薩婆若を得ず。舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、若し菩薩摩訶薩は、是の如く學するも、亦般若波羅蜜を學せずんば、薩婆若を得ざるや。』佛、舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩、是の如く學するも、般若波羅蜜を學せずんば、薩婆若を得ず。舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩は、今云何が應に般若波羅蜜を學し、薩婆若を得べき。』佛、舍利弗に告げたまはく、『若し菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を學する時、般若波羅蜜を見ず。舍利弗、菩薩摩訶薩は、是の如く般若波羅蜜を學せば、薩婆若を得ん。不可得なるを以ての故に。』舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、云何が不可得と名くる。』佛言はく、『諸法内空、乃至無法有法空なるが故なり。』

【七】釋して曰はく、『舍利弗は、上に問はく、『但無受三昧を以て疾に佛を得。更に餘の三昧有りや』と。須菩提説かく、『更に餘の三昧有りて、疾に佛を得。是菩薩は、是三昧を念せず、著せざれば、過去、現在の諸佛は授記したまふ』と。佛讀じて言はく、『善い哉、菩薩摩訶薩は、應に是の如く、般若波羅蜜乃至一切の佛法を學すべし』と。是時、舍利弗是念を作さく、『般若波羅蜜は是れ空相なり。諸の三昧には種種の分別の相有り。云何が諸の三昧を學する、是を般若波羅蜜を學すと爲すや』と。是故に問へるに、佛、舍利弗に答へたまはく、『是の如く般若波羅蜜を學するは、皆不可得なるを以ての故なり。般若波羅蜜の氣分の相は、皆諸の三昧の中に在るを以て、能く是の如く學す。是を般若波羅蜜乃至十八不共法を學すと爲す』と。佛は即ち之を許したまふ。舍利弗復問はく、『何等の法

か不可得なる」と。佛此中自ら説きたまはく、「衆生は空なるが故に、畢竟清淨なるが故に、我は不可得なり。乃至知者、見者、須陀洹乃至佛も不可得なり。法は空なるが故に、畢竟清淨なるが故に、五衆は不可得なり、乃至十八不共法は不可得なり」と。畢竟清淨とは、不出、不生、不得、不作等なり。因は邊に起らざるが故に、名けて不出と爲し、縁は邊に起らざるが故に、名けて不生と爲す。定んで、生相は不可得なるが故に、名けて不出、不生と爲し、不出、不生の故に、不可得と名け、不可得なるが故に、無作、無起と名く。是起作の法は、皆是れ虚誑なり。是の如きを離るるを、畢竟清淨と名く。舍利弗、佛に問ふ、「菩薩は能く是の如く、畢竟眞淨の道を行じて、何の法をか學すと爲し、何の法をか得ると爲す」と。佛答へたまはく、「能く是の如く學するを、學する所無く、得る所無しと爲す」と。問うて曰はく、「菩薩は是畢竟空を用て、六波羅蜜、乃至十八不共法を學す。云何が法として、學すべきもの無しと言ふや。答へて曰はく、「此中に、佛、自ら説きたまはく、「諸法は凡夫の著する所の如くならず。凡夫の人の心には、無明邪見等の結使有りて、聞く所、見る所、知る所、皆法相に異り、乃至佛の説法を聞くも、聖道の中、果報の中に於て皆著して道を染汚す」と。舍利弗、佛に白して言さく、「若し凡夫の人の見る所、皆是れ實ならずんば、今是諸法は、云何が有なる」と。佛言はく、「諸法は所有無し。凡夫の人は所有無き處に於て、亦以て有と爲す。所以は何ん。是凡夫の人は、無明邪見を離るれば、觀する所有る能はざればなり。是を以ての故に、所有無きに著するが故に名けて

無明と爲すと説く。譬へば、空拳を以て小兒を誑はすに小兒は著するが故に、謂うて以て有と爲すが如し」と。舍利弗、佛に問はく、「何等の法をか、所有無きに著するが故に無明と名くる」と。佛答へたまはく、「色、乃至十八不共法なり。是中、無明の愛の故に、是れ明なり、是れ無明なりと憶想分別し、有邊、無邊に墮して、智慧の明を失す。智慧の明を失するが故に、色の畢竟空にして、所有無きの相を見ず知らず、自ら憶想分別を生じて、而も乃至識衆、十二人、十八界、十二因縁に著す。或は善法、謂ゆる六波羅蜜、乃至十八不共法を聞くも、亦世間の法の如く、憶想分別して著す。聖人も亦是の如し。是を以ての故に、凡夫の數に墮すと名く。小兒の人の爲に輕笑せらるるが如く、人の指を以て月を示すに、愚者は但指を見て月を看ざるが如し」と。智者は輕笑して言はく、「汝、何んが示す者の意を得ざる。指は月を知るの因縁たり。而も更に指を見て、月を知らず」と。「諸佛、賢聖は、凡夫の人の爲に、法を説きたまふに、而も凡夫は音聲語言に著して、聖人の意を取らず、實義を得ず。實義を得ざるが故に還つて實中に於て著を生ず」と。佛今説いて、「凡夫は失する所有るが故に三界を過ぐる能はず、亦二乗を離るる能はず」と言ふ。聖人の意を得ざるが故に、諸法の空を説くを聞いて而も信ぜず、信ぜざるが故に行ぜず、六波羅蜜、乃至十八不共法に住せざるなり。是の如きの功德を失するを以ての故に、名けて凡夫、小兒と爲す。是小兒は、五衆、十二入、十八界、三毒、諸の煩惱に著し、乃至六波羅蜜、十八不共法、阿耨多羅三藐三菩提に著著す。是故に名けて著者と爲す。舍利弗問はく、「若

し菩薩の是の如く行ぜば、是を般若波羅蜜を行ぜずと名く。般若波羅蜜を行ぜざれば、薩
 婆者を得ざらん」と。佛、舍利弗を可して言はく、「是の如く是の如し。即ち爲に因縁を説
 かん。謂ゆる新行の菩薩は方便力無く、是般若波羅蜜を聞いて憶想し、分別し、尋求して
 取らんと欲し、是念を作さく、「我は世間の樂を捨つ。復般若波羅蜜を得る能はずんば、是を
 兩失と爲すと、専ら求めて得んと欲す」と。或は謂はく、「空を説くは、是れ般若波羅蜜なり」
 と。或は、「空も亦空なりと説くは、是れ般若波羅蜜なり」と。或は「諸法如實の相を説く
 は、是れ般若波羅蜜なり」と。是の如く、六十二見、九十八使の煩惱心を用て、是般若波
 羅蜜に著す、乃至一切種智も亦是の如し。是善心を以て諸法を學すれば、薩婆者を得る能
 はず。此と相違する者は、能く般若波羅蜜を行じ、亦能く薩婆者を得。謂ゆる般若波羅蜜
 を見ず、行者を見ず、緣法を見ず、見ざるをも亦見ざるなり」と。舍利弗更に見ざるの因
 縁を問ふに、佛答へたまはく、「是菩薩は十八空に入るが故に、見ざるなり。無智を以て
 の故に、見ざるにはあらず」と。』

大智度論釋幻人無作品第十一 卷第四十四

龍 樹 菩 薩 造

後秦龜茲國鳩摩羅什詔を奉じて譯す

爾時、慧命須菩提、佛に白して言さく、「世尊、若し當に人有り、問うて言ふべし、幻人、般若波羅蜜を學せば、當に薩婆若を得べきや不や。幻人、禪波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、屬提波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀波羅蜜を學し、四念處、乃至十八不共法、及び一切種智を學せば、薩婆若を得るや不やと、我當に云何が答ふべきや。佛、須菩提に告げたまはく、「我還汝に問はん。汝の意に隨つて我に答へよ。須菩提、汝が意に於て云何。色と幻と異り有りや不や。受想行識と幻と異り有りや不や。佛言はく、「汝が意に於て云何。眼と幻と異り有りや不や。乃至意と幻と異り有りや不や。色乃至法と幻と異り有りや不や。眼界乃至意識界と幻と異り有りや不や。眼觸乃至意觸、眼觸因縁生の受、乃至意觸因縁生の受と幻と、異り有りや不や。須菩提言はく、「不、世尊。」汝が意に於て云何。四念處と幻と異り有りや不や、乃至八聖道分は幻と異り有りや不や。『不、世尊。』汝が意に於て云何、空、無相、無作と幻と異り有りや不や。『不、世尊。』須菩提、汝が意に於て云何、檀波羅蜜と幻と異り有りや不や。乃至十八不共法と幻と異り有りや不や。『不、

世尊。』須菩提、汝が意に於て云何、阿耨多羅三藐三菩提と幻と異り有りや不や。』不、世尊、何を以ての故に。色は幻と異ならず、幻は色と異ならず、色は即ち是れ幻、幻は即ち是れ色なり。世尊、受想行識は、幻と異ならず、幻は、受想行識と異ならず、識は、即ち是れ幻、幻は、即ち是れ識なり。世尊、眼は幻と異ならず、幻は眼と異ならず、眼は即ち是れ幻、幻は即ち是れ眼なり。眼觸因縁生の受、乃至意觸因縁生の受も亦是の如し。世尊、四念處は幻と異ならず、幻は、四念處と異ならず、四念處は、即ち是れ幻、幻は、即ち是れ四念處なり。乃至、阿耨多羅三藐三菩提は、幻と異ならず、幻は、阿耨多羅三藐三菩提と異ならず、阿耨多羅三藐三菩提は、即ち是れ幻、幻は即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり。佛、須菩提に告げたまはく、『汝が意に於て云何、幻に垢有りや、淨有りや不や。』不、世尊。』須菩提、汝が意に於て云何、幻に生有りや、滅有りや不や。』不、世尊。』若し法、生ぜず、滅せず、是法、能く般若波羅蜜を學せば、當に薩婆若を得べきや不や。』不、世尊。』汝が意に於て云何、五受陰假名は、是れ菩薩なりや不や。』是の如し、世尊。』汝が意に於て云何、生滅垢淨有りや不や。』不、世尊。』汝が意に於て云何、口業にあらす、意にあらす、意業にあらす、不生不滅、不垢不淨、是の如きの法、能く般若波羅蜜を學せば、薩婆若を得るや不や。』不、世尊。』菩薩摩訶薩、若し能く是の如く、般若波羅蜜を學せば、當に薩婆若を得べし。所得無きを以ての故に。』須菩提、佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩

訶薩は、應に是の如く、般若波羅蜜を學せば、阿耨多羅三藐三菩提を得べし。幻人の學するが如くなるべし。何を以ての故に。世尊、當に知るべし。五陰は、即ち是れ幻人、幻人は、即ち是れ五陰なればなり。佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於て云何。是五陰は般若波羅蜜を學せば、當に薩婆若を得べきや不や。」一不、世尊。何を以ての故に。是五陰の性は所有無し、所有無きの性も、亦得べからざればなり。佛、須菩提に告げたまはく、「汝が意に於て云何。夢の如きの五陰、般若波羅蜜を學せば、當に薩婆若を得べきや不や。」一不、世尊。何を以ての故に、夢の性は所有無し、所有無きの性も、亦得べからざればなり。「汝が意に於て云何。響の如き、影の如き、焰の如き、化の如き五衆、般若波羅蜜を學せば、當に薩婆若を得べきや不や。」一不、世尊。何を以ての故に、響、影、焰、化の性は所有無し、所有無きの性も得べからざればなり。世尊、識は即ち是れ六情、六情は即ち是れ五衆なり。是法は、皆内空の故に不可得なり、乃至無法有法空の故に不可得なり。」

【一】 虚なる幻人が般若を學すると若しが般若を學すると別異ありや否やの疑を轉じて本品の要旨にして先づ、幻と諸法と幻人と菩薩と無二無別と説けるを釋す。

問うて曰はく、「須菩提、何を以ての故に、是事を以て佛に問ひしや。」若し人、幻人は般若波羅蜜を學して、佛と作るを得るや不や」と問はば、應に答へて、「得ず」と言ふべし。幻人は虚誑にして、本末有る無し。是事は答へ易し。何を以ての故に、佛に問ひしや。」答へて曰はく、「上品に、佛は舍利弗に甚深の空義を答へたまへり。須菩提、是念を作さく、「諸法は一相にして分別無し。若し爾らば、幻人及び實の菩薩は、異なる無けん。而も菩

薩は諸の功德を行じて、佛と作るを得、女人は實無くして、但人の眼を誑し、佛と作る能はず」と。

問うて曰はく、「幻人は功德を行する能はず、心識無きを以てなり。云何が行すと言ふや。」答へて曰はく、「實には行ぜずと雖も、人の見るに、行するに似たるが故に、名けて行と爲す。幻人の飲食、財物、七寶を以て、出家に布施し、持戒、忍辱、精進、坐禪、說法する等の如きは、無智の人は、是を謂うて行すと爲す。是れ幻なるを知らざるなり。須菩提、是念を作さく、「若し佛の説きたまふが如くんば、諸法は一相にして所有無く、但是れ虚誑なり。幻人及び實の菩薩、乃至佛は、等しうして異り有無し。幻人も亦幻に佛と作り、六波羅蜜を行じ、魔兵を降し、道場に坐して、佛道を成じ、光明を放ち、法を説いて、人を度するが如きと、實の菩薩の實道を行じて、佛と作るを得、衆生を度すると何の差別か有る」と。佛言はく、「我還汝に問ふ、汝が意に隨つて我に答へよ」と。問うて曰はく、「佛は何を以てか直答せずして、還つて問ひ、意に隨つて答へしめたまひしや。」答へて曰はく、「須菩提は空の智慧を以て三界の五衆、皆空なりと觀じ、心に厭を生ず。諸の煩惱の習を離るるが故に能く總相もて諸佛の法の空なるを知ると雖も、猶貴ぶ所有りて佛法は幻の如く所有無きを觀する能はず。是を以ての故に方に諭説したまはく、「汝、五衆の空を以て、證と爲すが如し。諸佛の法も亦爾なり。汝は世間の五衆を觀じて空と爲す。我佛法を觀するも亦爾なり」と。是故に問ひたまはく、「須菩提、汝が意に於て云何。色は幻と

異なる有りや不^{いな}や。幻^{げん}は色^{しき}と異^{こと}なる有りや不^{いな}や。乃至^{乃至}受想行識も亦是^{この}の如^{ごと}し。若^もし異^{こと}なら
 ば汝^{なんぢ}は應^{たま}に問^とふべし。若^もし異^{こと}ならずんば是^{この}問^とを作^なすべからず」と。須^{しゆ}菩提^{ぼだい}言^ごはく、「異^{こと}なら
 ず」と。問^とうて曰^{いは}はく、「若^もし色^{しき}と異^{こと}ならざるは爾^{しか}るべし。幻^{げん}人^{にん}には色^{しき}有^あるが故^{ゆゑ}に、云^い
 何が受^{じゆ}想^{さう}行^{ぎやう}識^{しき}は幻^{げん}の如^{ごと}くにして異^{こと}ならずと言^いふや。答^{こた}へて曰^{いは}はく、「幻^{げん}人^{にん}には喜^き樂^{らく}憂^う苦^くの相^{さう}
 有^あり、無^む智^ちの人^{ひと}見^みて謂^いへらく、受^{じゆ}想^{さう}行^{ぎやう}識^{しき}有^ありと爲^なすと。復^{また}次に、佛^{ぶつ}は譬^ひ喩^いして、五^ご受^{じゆ}衆^{しゆ}の
 虚^こ誑^{わう}なること幻^{げん}の如^{ごと}きを知らしめんと欲^{ほつ}したまへり。五^ご受^{じゆ}衆^{しゆ}は幻^{げん}と異^{こと}る無しと雖^いも、佛^{ぶつ}は
 解^げせしめんと欲^{ほつ}したまふが故^{ゆゑ}に爲^なに譬^ひ喩^いを作^{つく}りたまへり。衆^{しゆ}生^{じやう}謂^いへらく、「幻^{げん}は是^これ虚^こ誑^{わう}
 なり。五^ご受^{じゆ}衆^{しゆ}も有^あなりと雖^いも、幻^{げん}と異^{こと}なる無し」と。是^{この}故^{ゆゑ}に、須^{しゆ}菩提^{ぼだい}は、一^{いつ}心^{しん}に籌^{ちゆう}量^{りやう}して五^ご
 衆^{しゆ}と幻^{げん}と異^{こと}ならざるを知る。所以^{ゆゑ}に曰^{いは}はく、幻^{げん}人^{にん}の色^{しき}の肉^{にく}眼^{がん}を誑^{まど}はして能^よく憂^う喜^き苦^く樂^{らく}を生^{しやう}ぜし
 むるが如^{ごと}く、五^ご受^{じゆ}衆^{しゆ}も亦^{また}能^よく慧^え眼^{がん}を誑^{まど}はして貪^{えん}欲^{よく}、瞋^{しん}恚^い、諸^{しよ}の煩^{ぼん}惱^{なん}等^{とう}を生^{しやう}ぜしむ。幻^{げん}は少^{せう}
 許^{せう}の咒^{じゆ}術^{じゆつ}に因^よつて物^{もの}事^じを語^ご言^{ごん}するを本^{もと}と爲^なし、能^よく種^{しゆ}種^{じゆ}の事^じ、城^{じやう}郭^{くわく}、魔^ま觀^{くわん}等^{とう}を現^{げん}ずるが如^{ごと}
 く、五^ご受^{じゆ}衆^{しゆ}も亦^{また}、先^{せん}世^{せい}の少^{せう}許^{せう}の無^む明^{めい}の術^{じゆつ}の因^よ縁^{えん}を以^{もつ}て、諸^{しよ}の行^{ぎやう}識^{しき}名^な色^{しき}等^{とう}の種^{しゆ}種^{じゆ}有^あり。是^{この}
 を以^{もつ}ての故^{ゆゑ}に異^{こと}ならずと説^{とく}く。人^{ひと}の幻^{げん}事^じを見て、著^{ちやく}心^{しん}を生^{しやう}じ、共^き生^{じやう}業^{ごう}を廢^{はい}し、幻^{げん}滅^{めつ}する時^{とき}、
 悔^げを生^{しやう}ずるが如^{ごと}し。五^ご受^{じゆ}衆^{しゆ}も亦是^{この}の如^{ごと}く、先^{せん}業^{ごう}の因^よ縁^{えん}の幻^{げん}により、今^{いま}の五^ご衆^{しゆ}を生^{しやう}じて、五^ご
 欲^{よく}を受け、貪^{えん}瞋^{しん}を生^{しやう}ず。無^む常^{じやう}の壞^{わい}する時^{とき}は、心^{しん}に乃^{すなは}ち悔^げを生^{しやう}ずらく、「我^{われ}は云^い何が是^{この}幻^{げん}の五^ご
 衆^{しゆ}に著^{ちやく}して、諸^{しよ}法^{ぽう}實^{じつ}相^{さう}を失^{しつ}する」と。佛^{ぶつ}、須^{しゆ}菩提^{ぼだい}に樂^{らく}説^{とく}法^{ぽう}門^{もん}を問^とひたまふ。故^{ゆゑ}に答^{こた}へて言^いは
 く、「幻^{げん}と色^{しき}と異^{こと}ならず」と。若^もし異^{こと}ならずんば、是^{この}色^{しき}法^{ぽう}は即^{すなは}ち是^{この}れ空^{くう}にして、不^ふ生^{じやう}不^ふ滅^{めつ}の

法中に入らん。法若し不生不滅ならば、云何が般若波羅蜜を行じて、作佛するを得ん。須菩提、是念を作さく、「若し爾らば、菩薩は何を以ての故に、種種に道を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を求むる」と。佛、其念を知りて、即ち答へたまはく、「五衆は虚誑なり、但假名を以ての故に、號して菩薩と爲す。是假名の中には、業無く、業の因縁無く、心無く、心數法無く、垢無く、淨無し。畢竟空なるが故なり」と。佛言はく、「菩薩は、應に幻人の如く、般若波羅蜜を行すべし。五衆は即ち是れ幻人と異なる無く、先世の業因縁に従つて幻業出づるが故に、是五衆も亦、佛を成就するを得る能はず。何を以ての故に。性は所有無ければなり。餘の夢、化、影、響等も亦是の如し」と。問うて曰はく、「何を以ての故に、識は即ち是れ六情、六情は即ち是れ五衆なりと説く。」答へて曰はく、「是識は十二因縁中の第一事なり。是中にも亦色有り。亦心數法有り。未だ熟せざるが故に識の名を受け、識より六入を生ず。是二時は俱に五衆有り。色成するが故に五情と名け、名成するが故に意情と名く。六情は五衆を離れず。是を以ての故に識は即ち是れ六情なりと説けり。」問うて曰はく、「若し爾らば、十二因縁中の處處に皆五衆有り。何を以てか但六情に五衆有りと説く。」答へて曰はく、「是識は今身の本なり。衆生は現在法の中に於て多く錯れり。名色は未だ熟せず。未だ能くする所有らざるが故に説かざるなり。六情は苦樂を受けて、能く罪福を生ずるが故に説く。其餘は十一因縁なり、故に五衆を説く。復次に佛、五百歳の後、學者の諸法の相を分別すること各異なり、色法を離れて識を説き、識法を離れて色を説くを知

り、是諸見を破して畢竟空に入らしめんと欲したまふが故に、識中には、五情無しと雖も、而も識は即ち是れ六情なりと説き、六情中には、五衆を具せずと雖も、而も六情は即ち是れ五衆なりと説きたまへり。復次に先世には、但心有りて六情に住し、種種の憶想分別を作すが故に、今世の六情、五衆の身を生ず。今世の身より種種の結使を起し、後世の六情、五衆を造り、是の如く展轉す。是故に識は即ち是れ六情なり、六情は即ち是れ五衆なりと説く。是法は内容中に不可得なり、乃至無法有法空中にも不可得なり。」

須菩提、佛に白して言さく、「世尊、新に大乘の意を發せる菩薩は、般若波羅蜜を説くを聞き、將に驚き怖畏すること無かるべき。佛、須菩提に告げたまはく、「若し新に大乘の意を發せる菩薩は、般若波羅蜜に於て方便無く、亦善知識をも得ずんば、是菩薩は、或は驚き、或は怖き、或は畏れん。須菩提、佛に白して言さく、「世尊、何等か是れ方便なる。菩薩、是方便を行せば、驚かず、怖かず、畏れざるや。佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩有り、般若波羅蜜を行じ、薩婆若に應ずる心もて、色の無常相も、是れ亦不可得なりと觀じ、受想行識の無常相も、是れ亦不可得なりと觀ず。須菩提、是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜の中の方便を行すと名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は薩婆若に應ずる心もて、色の空相も、是れ亦不可得なりと觀ず。受想行識も亦是の如し。薩婆若に應ずる心もて、色の無我相も是れ亦不可得なりと觀ず。受想行識も亦是の如し。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心もて、色の空相も、是れ亦不可得なりと觀ず。受想行識も亦是の如し。」

如し。色無相の相も、是れ亦不可得なりと觀ず。受想行識も亦是の如し。色無作の相も、
 是れ亦不可得なりと觀ず。受想行識も亦是の如し。色寂滅の相も、是れ亦不可得なりと觀
 ず。乃至識も亦是の如し。色の離相も、是れ亦不可得なりと觀ず。乃至識も亦是の如し。
 是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜の中の方便を行すと名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は、般
 若波羅蜜を行じて、色の無常相も、是れ亦不可得なりと觀ず。色の苦相、無我相、空相、
 無相相、無作相、寂滅相、離相も、是れ亦不可得なりと觀ず。受想行識も亦是の如し。是
 時、菩薩は是念を作さく、「我當に一切衆生の爲に、は無常の法を説くも、是れ亦不可得な
 るべく、當に一切衆生の爲に、苦相、無我相、空相、無相相、無作相、寂滅相、離相を説
 くも是れ亦不可得なるべし」と。是を菩薩摩訶薩の檀波羅蜜と名く。復次に須菩提、菩薩摩
 訶薩は、聲聞辟支佛心を以てせず、色の無常を觀するも亦不可得なり。聲聞辟支佛の心を
 以てせず、識の無常を觀するも、亦不可得なり。聲聞辟支佛の心を以てせず、色の苦、無
 我、空、無相、無作、寂滅、離を觀するも、亦不可得なり。受想行識も亦是の如し。是を
 菩薩摩訶薩の不著の尸羅波羅蜜と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、是般若波羅蜜を行じ
 て、是諸法の無常相、乃至離相に於て忍欲樂する、是を菩薩摩訶薩の羼提波羅蜜と名く。
 復次に須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、薩婆若に應ずる心もて、色の無常相も亦
 不可得、乃至、離相も亦不可得、受想行識も亦是の如しと觀じ、薩婆若に應ずる心もて、
 捨てざる息まざる、是を菩薩の毘梨耶波羅蜜と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、般若波

羅蜜を行じ、聲聞辟支佛の意、及び餘の不善の心を起さず、是を菩薩摩訶薩の禪波羅蜜と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じ、是の如く思惟す。色を空するを以ての故に、色は空ならず、色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり。受想行識も亦是の如し。眼を空するを以ての故に、眼は空ならず、眼は即ち是れ空、空は即ち是れ眼なり。乃至、意觸因縁生の受も、受を空するを以ての故に、受は空ならず、受は即ち是れ空、空は即ち是れ受なり。四念處を空するを以ての故に、四念處は空ならず、四念處は、即ち是れ空、空は即ち是れ四念處なり。乃至、十八不共法を空するを以ての故に、十八不共法は空ならず。十八不共法は、即ち是れ空、空は即ち是れ十八不共法なり。是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じて、驚かず、畏れず、怖かざるなり。須菩提、佛に白して言さく、世尊、何等か是れ、菩薩摩訶薩は、善知識に守護せらるるが故に、是般若波羅蜜を説くを聞いて、驚かず、畏れず、怖かざるや。佛、須菩提に告げたまはく、菩薩摩訶薩の善知識とは、色の無常も、亦不可得なるを説き、是善根を持ち、聲聞辟支佛道に向はしめず、但一切智に向はしむ。是を菩薩摩訶薩の善知識と名く。受想行識の無常も亦不可得なるを説き、是善根を持ち、聲聞辟支佛道に向はしめず、但一切智に向はしむ。是を菩薩摩訶薩の善知識と名く。須菩提、菩薩摩訶薩には復善知識有り、色の苦も、亦不可得なりと説き、受想行識の苦も、亦不可得なりと説き、色の無我、受想行識の無我も、亦不可得なりと説き、色の空、無相、無作、寂滅、離も亦不可得なり。受想行識の空、無相、無

作、寂滅、離も亦不可得なりと説き、是善根を持して、聲聞辟支佛道に向はしめず、但一切智に向はしむ。須菩提、是を菩薩摩訶薩の善知識と名く。須菩提、菩薩摩訶薩には復善知識有り。眼の無常、乃至、離も亦不可得なりと説き、乃至、意觸因縁生の受の無常乃至離も亦不可得なりと説き、是善根を持して、聲聞辟支佛に向はしめず、但一切智に向はしむ。是を菩薩摩訶薩の善知識と名く。須菩提、菩薩摩訶薩には復善知識有り。四念處法を修するに、乃至離も亦不可得なるを説き、是善根を持して、聲聞辟支佛道に向はしめず、但一切智に向はしむ。須菩提、是を菩薩摩訶薩の善知識と名く。乃至、十八不共法を修し、一切智を修するも、亦不可得なるを説き、是善根を持して、聲聞辟支佛道に向はしめず、但一切智に向はしむ。是を菩薩摩訶薩の善知識と名く。』

【二】次に新發意の菩薩の但五衆の法を空するなく、般若を行ずるなく、と聞いて疑を生ずるもの爲に方便並に善知識守護の因縁を明すことを釋す。

問うて曰はく、「須菩提は何を以てか此疑を生ずる。佛に問うて言さく、「新發意の菩薩は是を聞いて特に恐怖すること無きや」と。答へて曰はく、「有菩薩の般若波羅蜜を行ずる者は、但五衆の法を空すること無く、亦般若波羅蜜を行ずる能はずと聞く。是を以ての故に疑を生ずらく、「誰か當に般若を行すべき」と。是故に佛に問ふ。佛言はく、「若し菩薩は、内外の因縁を具足せんば、當に恐怖有るべし」と。内の因縁とは、正憶念無く、利き智慧無く、衆生中に於て深き悲心無く、内に是の如き等の方便無きなり。外の因縁とは、中國の土に生ぜざれば、般若波羅蜜を聞くを得ず、善知識の能く疑を斷する者を得ず、是等の如き外の因縁無きなり。内外の因縁和合せざるが故に、驚怖畏を生ず、今須菩

提は是方便を問ふ。佛答へたまはく、「一切種智相應の心もて、諸法を觀するも、亦諸法を得ず」と。問うて曰はく、「方便して、色の無常等の、種種の相を觀する有るが故に、怖畏せず、今何を以てか但薩婆若相應の心もて、諸法を觀するが故に、恐れず怖れずと説く。」答へて曰はく、「菩薩は先來但諸法の空を觀じ、心慧なるが故に著を生ず。今憶想分別して、佛意のごくに觀じ、衆生の中に於て大悲を起し、一切の法に著せず、智慧に於て所礙無く、但衆生を度せん」と欲し、無常、空等を以て種種に諸法を觀じ、亦是法を得ず。是の如く諸法を觀じ已りて、是念を作さく、「我是法を以て衆生を度し、顛倒を離れしめん」と。是を以ての故に心著せず、定んで實に一法有りて見ざるなり。譬へば、藥師の諸藥を和合し、冷病には熱藥を與ふるに、熱病の中に於ては、藥に非ずと爲すが如し。二施の中にては、法施大なるが故に、是を檀波羅蜜と名く。五波羅蜜も亦是の如く、義に隨つて分別す。復次に、菩薩の方便とて、十八空の故に、色をして空ならしむるにあらず。何を以ての故に。是空相を以て、強ひて空ならしめざるを以ての故に、色は即ち是れ空なり。是色は本より已來、常に自ら空なり。色相は空なるが故に、空は即ち是れ色なり。乃至諸佛の法も亦かの如し。善知識とは、人を教ふるに、是智慧を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せしむ。菩薩は、先に無常、空等の諸觀を知れり。今は惟廻向を説くを異と爲す。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊、云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行するるとき、方便無く、惡知識に隨つて、是般若波羅蜜を説くを聞き、驚き怖畏するや。」佛、須菩提に告

げたまはく、菩薩摩訶薩、一切智を離れたる心もて、般若波羅蜜を修し、是般若波羅蜜を得。是般若波羅蜜、禪波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀波羅蜜を念じ皆得、皆念す。復次に、須菩提、菩薩摩訶薩、薩婆若を離れたる心もて、色の内空、乃至無法有法空を觀じ、受想行識の内空、乃至無法有法空を觀じ、眼の内空、乃至無法有法空を觀じ、諸法空に於て所念有り、所得有るなり。復次に、須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じて、薩婆若を離れたる心もて四念處を修し、亦念じ亦得。乃至十八不共法を修し亦念じ亦得。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行するとき、方便無きを以ての故に、是般若波羅蜜を聞いて驚き怖畏す。須菩提、佛に白して言さく、世尊、云何が菩薩摩訶薩は、惡知識に隨ひ、般若波羅蜜を聞いて驚き怖畏する。須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の惡知識は、般若波羅蜜を離れ、禪波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀波羅蜜を離れしむ。須菩提、是を菩薩摩訶薩の惡知識と名く。須菩提、菩薩摩訶薩には復惡知識有り、魔事を説かず、魔事を説かず。是言を作さず。惡魔、佛の形像を作し來つて、菩薩をして、六波羅蜜を離れしめ、菩薩に語りて言はく、「善男子、般若波羅蜜を修するを用て爲んや。禪波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、尸羅波羅蜜、檀波羅蜜を修するを用て爲んや」と。當に知るべし、是れ菩薩摩訶薩の惡知識なり。復次に須菩提、惡魔、復佛の形像を作し、菩薩の前に到り、爲に聲聞經の、若は修始踏、乃至優波提舍を説き、是の如きの經を教詔

し、分別し、演説するは、終に魔事魔罪なりと説くを爲さず、當に知るべし。是れ菩薩摩訶薩の悪知識なり。復次に須菩提、悪魔は佛の形像を爲し、菩薩の所に到りて、是語を作さく、「善男子、汝は眞の菩薩心無し、亦阿毘跋致地に非ず。汝は亦阿耨多羅三藐三菩提を得る能はず」と。是の如きは魔事魔罪なりと説くを爲さず。當に知るべし、是菩薩の悪知識なり。復次に須菩提、悪魔は佛の形像を爲し、菩薩の所に到りて、菩薩に語りて言はく、「善男子、色は空にして我無く我所無し。受想行識は空にして我無く我所無し。眼は空にして、我無く我所無し。乃至意觸因縁生の受は空にして、我無く我所無し、檀波羅蜜も空乃至般若波羅蜜も空、四念處も空、乃至十八不共法も空なり、汝は阿耨多羅三藐三菩提を用て爲んや」と。是の如きは魔事魔罪なりと説かず教へず、當に知るべし、是れ菩薩の悪知識なり。復次に須菩提、悪魔、辟支佛の身と作り、菩薩に語りて言はく、「善男子、十方皆空なり。是中に佛無く、菩薩無く、聲聞無し」と。是の如きは魔事魔罪なりと説くを教へず。當に知るべし、是れ菩薩摩訶薩の悪知識なり。復次に須菩提、悪魔は和尙、阿闍梨の身と作り、菩薩の所に到りて、菩薩道を離るるを教へ、一切種智を離るるを教へ、四念處、乃至八聖道分を離るるを教へ、檀波羅蜜を離るるを教へ、乃至十八不共法を離るるを教へ、空、無相、無作に入るを教へ、是言を作さく、「善男子、汝、是諸法を修念して、聲聞の證を得よ、阿耨多羅三藐三菩提を用て爲んや」と。是の如きは、魔事魔罪なりと説かず教へず。當に知るべし、是れ菩薩の悪知識なり。復次に須菩提、悪

【三】次に無方便
惡知識を廣説する
を釋す。

魔は父母の形像と作り、菩薩の所に到りて、菩薩に語りて言はく、「子、汝は須陀洹果の證の爲の故に、勤めて精進し、乃至阿羅漢果の證の故に勤めて精進せよ。汝、阿耨多羅三藐三菩提を用て爲んや。阿耨多羅三藐三菩提を求めば、當に無量阿僧祇の生死を受け、手を截ち脚を截ち諸の苦痛を受くべし」と。是の如きは、魔事魔罪なりと説かず教へず。當に知るべし、是れ菩薩の惡知識なり。復次に須菩提、惡魔は、比丘の形像と作り、菩薩の所に到り、菩薩に語りて言はく、「眼の無常は可得の法なり。乃至意の無常も可得の法なり。眼の苦、眼の無我、眼の空、無相、無作、寂滅、離も、可得の法なり」と説き、乃至意も亦是の如しとし、有所得の法を用て、四念處を説き、乃至、有所得の法を用て、佛の十八不共法を説く。須菩提、是の如きは魔事魔罪なりと教へず説かず。當に知るべし、是れ菩薩の惡知識なり。知り已りて當に之を遠離すべし。」

釋して曰はく、「先には略して方便無きを説き、今は廣く方便無きを説かんと欲す。謂ゆる一切種智相應の心を離れて、般若波羅蜜を行じ、是般若波羅蜜の定相を取る。五波羅蜜、乃至諸佛の法も亦是の如し。是れ自ら方便無ければ、又惡知識の教を得るが故なり。復次に惡知識、大いに利益を失し、種種に人を壞る。是大惡の因縁の故に佛は更に種種の因縁もて惡知識の相を説きたもふ。惡知識とは、人をして六波羅蜜を遠離せしめ、或は罪福の報を信ぜざるが故に遠離せしめ、或は般若波羅蜜に著するが故に、誚法は畢竟空なり。汝は何の行ずる所ぞ」と言ひ、或は小乘を讚歎して、「汝但、自ら老病死の苦を免れよ。衆

生は何んが汝が事に豫らん」と。是の如き等の種種の因縁もて教へて遠離せしむ。是を惡知識と名く。復次に惡知識、弟子を教へて、魔は是れ佛の賊なるを覺知せしめず。魔とは、欲界の主にして大力勢有り、常に行道の者を憎む。佛の威力大なるが故に、魔は能くする所無く、但能く小なる菩薩を壞り、乃至、佛の形像と作り、來りて菩薩の六波羅蜜を行ずるを壞す。或は讚歎し、聞解し、論說し、聲聞に應ずる所に隨うて、經法を學ぶ。或は佛身と作りて、來りて之に語りて言はく、「汝は佛を得るに任へず」と。或は、「眼等の一切の諸法は空なり。何んが是阿耨多羅三藐三菩提を用て爲んや」と説く。或は辟支佛身と作り、或は、「十方世界の中に三乘の人は空なり。佛道を求むる者は、但空名のみ有り。汝云何が佛と作らんと欲するや」と説く。或は教へて菩薩の三十七品を遠離せしめ、聲聞の三解脱門中に入らしめ、「汝是三門に入らば、實際に作證し衆苦を盡すを得。汝が勤めて精進するは汝が四果を得んが爲の故なり。何んが阿耨多羅三藐三菩提を用て爲ん」と。或は和尚、阿闍梨、父母と作り、來り教へて佛道を遠離せしめ、空しく當に是を受けば、手脚耳鼻等を截つて以て求むる者に與ふべし。若し與へずんば、則ち佛意を求むるを破し、若し與ふれば、則ち是辛苦を受けん」と。或時、阿羅漢の比丘り作り、服を被ひ來りて爲に説く、「眼は是れ定んで、無常相、苦、空、無我相、無作、寂滅、離なり。乃至、諸佛の法も亦是の如し」と。有所得を用て相を取り、憶念分別して説く。是等の如く種種無量の魔事を教へて覺知せしめざる、是を惡知識と爲す。遠離とは其利益無きを以てなり。軟語の人の

轉來りて親近し、近けば則ち人を害するが如し。惡知識は復是に過ぎたり。所以は何ん。是賊は、但能く今世の一身を害し、惡知識は、則ち三世に人を害す。賊は但能く命を害し財を奪ひ、惡知識は、則ち慧念命の根を害し、佛法の無量の寶を奪ふ。知り已らば、急に當に心身を遠離すべし。」

大智度論釋句義品第十二

爾時、須菩提、佛に白して言さく、「世尊、云何が菩薩の句義と爲す。佛、須菩提に告げたまはく、「句義無き、是れ菩薩の句義なり。何を以ての故に。阿耨多羅三藐三菩提の中には、義處ある無く、亦我無ければなり。是を以ての故に、句義無きは、是れ菩薩の句義なり。須菩提、譬へば、鳥の虚空を飛んで、足跡有ること無きが如く、菩薩の句義の所有無きこと、亦是の如し。須菩提、譬へば夢中見の所は、處所無きが如く、菩薩の句義の所有無きも、亦是の如し。須菩提、譬へば幻に、實義有る無きが如く、焰の如く、響の如く、影の如く、佛の所化の如く、實義有る無し。菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、譬へば如、法性、法相、法位、實際の、義有る無きが如く、菩薩の句義の所有無きも、亦是の如し。須菩提、譬へば幻人の色に、義有る無く、幻人の受想行識に、義有る無きが如く、菩薩摩訶薩の般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも、亦是の如し。須菩提、

幻人の眼に、義有る無く、乃至意に、義有る無きが如く、須菩提、幻人は色に、義有る無
 く、乃至法に義有る無く、眼觸乃至意觸因縁生の受到、義有る無きが如く、菩薩摩訶薩の
 般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも、亦是の如し。須菩提、幻人の内空を行
 ずる時、義有る無く、乃至無法有法空を行ずるに、義有る無きが如く、菩薩摩訶薩の、般
 若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも、亦是の如し。須菩提、幻人の四念處、乃
 至十八不共法を行ずるに、義有る無きが如く、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜を行ずる時、菩
 薩の句義の所有無きも、亦是の如し。須菩提、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀の色に、
 義有る無きが如く、是色、有る無きが故に、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩
 の句義の所有無きも、亦是の如し。須菩提、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀の受想行識
 に、義有る無きが如く、是識、有る無きが故に、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜を行ずる時、
 菩薩の句義の所有無きも、亦是の如し。須菩提、佛眼に處所無く、乃至意に處所無く、色
 乃至法に處所無く、眼觸乃至意觸因縁生の受到、處所無きが如く、菩薩摩訶薩の、般若波
 羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも、亦是の如し。須菩提、佛の内空に、處所無く、
 乃至無法有法空に、處所無きが如く、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義
 の所有無きも、亦是の如し。須菩提、佛の四念處に處所無く、乃至十八不共法に處所無き
 が如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも、亦是の如し。須
 菩提、有爲性の中に、無爲性の義無く、無爲性の中に、有爲性の義無きが如く、菩薩摩訶

薩の、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも、亦是の如し。須菩提、不生不滅の義に、處所無きが如く、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも、亦是の如し。須菩提、不作、不出、不得、不垢、不淨に、處所無きが如く、菩薩の句義の所有無きも、亦是の如し。須菩提、佛に白して言さく、「何の法か、不生不滅の故に、處所無く、何の法か、不作、不出、不得、不垢、不淨の故に、處所無きや。」佛、須菩提に告げたまはく、「色は不生不滅の故に、處所無く、受想行識は、不生不滅の故に、處所無し。乃至不垢不淨も亦是の如し。入界は不生不滅の故に、處所無く、乃至不垢不淨も亦是の如し。四念處は不生不滅の故に、處所無く、乃至不垢不淨も亦是の如し。乃至、十八不共法は不生不滅の故に、處所無く、乃至不垢不淨も亦是の如し。須菩提、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、四念處の淨の義は畢竟不可得なるが如く、須菩提、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、四正勤乃至十八不共法の淨の義は、畢竟不可得なるが如く、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも、亦是の如し。須菩提、淨の中の我は、不可得なるが如き、我は所有無きが故に。乃至淨の中の知者見者は不可得なり、知者見者は所有無きが故に。須菩提、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、譬へば日の出づる時は、黒闇行る無きが如く、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも、亦是の如し。須菩提、譬へ

【四】以下句義
(定義條件の義)を
説いて般若を示す
を本品とす。先づ
菩薩の句義の無釋
無所有なるを釋
す

へば劫燒くる時、一切の物無きが如く、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも、亦是の如し。須菩提、佛戒の中には破戒無し。須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも、亦是の如し。須菩提、佛の定中に、亂心無く、佛の慧の中に、愚癡有る無く、佛の解脫の中に不解脫無く、解脫知見の中に不解脫の知見無きが如く、須菩提、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。須菩提、譬へば佛光の中には、日月の光現れず、佛光には、四天王天、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天、他化自在天、梵衆天、乃至阿迦尼吒天の光現せざるが如く、須菩提、菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜を行ずる時、菩薩の句義の所有無きも亦是の如し。何を以ての故に、是阿耨多羅三藐三菩提、菩薩、菩薩の句義、は一切の法は、皆合せず、散せず、色無く、形無く、對無く、一相、謂ゆる無相なればなり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は、一切法の無礙の相の中に、應當に學すべく、亦應當に知るべし。

【四】問うて曰はく、「上來、佛は須菩提の與に種種の因縁もて、菩薩の字を破したまへり。今何を以てか菩薩の句義を問ふ。」答へて曰はく、「須菩提、菩薩の字を破せるも、佛破したまはず、言はく、「菩薩の字は本より已來、畢竟空なり。但五衆の中の數にして、假に菩薩と名く、而るに衆生は、假名を以て實と爲す」と。佛言はく、「假名は實無し。但諸の法數の和合に従つて名と爲す」と。」

復次に、諸佛の法は、無量無邊不可思議なり。須菩提は、菩薩の字の空に因りて、般若

波羅蜜の相を説き、今、佛の菩薩の字義を説きたまふを聞き、是に因りて般若波羅蜜を説かんと欲するなり。復次に、應に問ふべき因縁は無量無邊なり。謂ゆる佛の音聲に六十種の莊嚴有りて、能く諸天をして専ら聽かしたまふ、何に況んや人をや。但音聲のみすら人をして聞かんと樂はしむ。何に況んや、大利益の義を説きたまふをや。須菩提は佛より是事を聞き、未だ意を發さざる人をして、當に阿耨多羅三藐三菩提を發さしむべし。意を發すとは、未だ六波羅蜜を行ぜざるを、當に行ぜしむべし。行者にして、清淨ならざれば、當に清淨ならしむべく、清淨の行者は、當に阿耨多羅三藐三菩提を成就し、佛法を具足し、乃至一生補處ならしむべし。是の如き等の、種種無量の因縁利益の故に、佛須菩提を以て問主と爲し、一切の十方世界の在會の衆生に語りたまへり。佛、須菩提に告げたまはく、「句義無きは是れ菩薩の句義なり。阿耨多羅三藐三菩提には處る所無く、亦我無く、名無く、是中に於て依處する處無し。即ち是法は空にして、我無く、名有無く、得道の者無し」と。佛、須菩提に謂ひたまはく、「若し汝、我無く、我所無しと知らば、阿羅漢を得る者なり。菩薩も亦是の如し、阿耨多羅三藐三菩提の中に於て、我無く、我所無し、譬へば鳥の虚空を飛ぶに、足跡有る無きが如く、菩薩の句義も亦是の如し。諸法を行するに、虚空の中には、依止し著する處無し。是を以ての故に、菩薩には句義無しと言ふ。問うて曰はく、「何等か是れ菩薩の句義なる。」答へて曰はく、「天竺の語法は衆語和合して語を成し、衆語和合して句を成し、善を一字と爲し、提を一字と爲す。是二合せざれば則ち語

無く、若し和合すれば、名けて菩提と爲すが如し。秦には無上智慧と言ふ。薩埵は、或は衆生と名け、或は是れ大心なり。無上の智慧の爲の故に、大心を出すを名けて菩提薩埵と爲し、願うて衆生をして、無上道を行ぜしめんと欲す。是を菩提薩埵と名く。復次に此品に佛及び佛の弟子は、種種の因縁もて、菩薩摩訶薩の義を説けり。菩提も一語、薩埵も一語にして、二語和合するが故に、名けて義を爲す。若し名字語句を説けば、皆同一事にして所在無し。今須菩提、何の定相の法を以てか菩薩と爲す。」と問ふ。句義とは、天竺に波陀と言ひ、秦に句と言ふ。是波陀に種種の義有り。後の、譬喩の中に説くが如し。問うて曰はく、「但鳥の虚空を飛ぶを以て、句義を明にするに足れり。何を以てか種種に廣く説く。」答へて曰はく、「衆生の聽受するは、種種にして同じからず。義を好む者有り、譬喩を好む者有り。譬喩は以て義を解すべく、譬喩に因れば、心則ち樂著す。人の生れてより端政なるに、加ふるに嚴飾を以てすれば、其光榮を益すが如し。此譬喩の中には多く譬喩を以て義を明す。後に説く所の如し。謂ゆる夢の如く、影の如く、響の如し。佛の化したまふ所の如きは、是事は虚誑なること、先に説けるが如し。菩薩の義も亦是の如く、但身に虚誑無實を聞くべし。是を以ての故に、菩薩は自ら高うすべからず。法性、法相、實際等の句の如きも、定義有ること無し。幻人には五衆、乃至諸佛の法無し。佛には、五衆、乃至一切法無きが如く、有爲法の中には、無爲法無きが如く、無爲法の中には、有爲法無きが如く、無爲法の不生不滅等の諸法の中には、不生不滅の相無く、亦異相無く、三十七

品に清淨の相無きが如し。何を以ての故に、人有り、是三十七品の法に著すれば、即ち是れ結使なればなり。我、乃至知者、見者の淨相は、不可得なるが如し。問うて曰はく、『我、乃至知者、見者等は、云何が淨なる。答へて曰はく、『種種の私の相を求覓するに不可得なり。是を我は淨なりと名く。第一義の中には、淨無く不淨無し。譬へば臭き死狗を洗ひ、乃ち皮毛、血肉、骨髓、都て盡くるに至れば、是時は犬に非ず、猪に非ず、淨と言ふを得ず不淨と言ふを得ざるが如く、我乃至知者見者も亦是の如し。無我、空の智慧を以て、我相を求むるに不可得にして、是時、我有るに非ず、我無きに非ざるなり。日出づれば、闇無く、劫盡くる時は、一切の物無きが如し、佛の五衆の戒中には、破戒は不可得なるが如く、日月、星宿、眞珠等、諸天、鬼神、龍王の光は、佛の光の中に於ては則ち現ぜざるが如し。大福德神通力より生ずるが故なり。菩薩の句義も亦是の如し、是般若波羅蜜の、智慧の光中に入れば則ち現ぜず。是譬喩に因りて諸の菩薩を教へ、當に一切法を學して、相を取らざるべし。所得無きが故なり。』

須菩提、佛に白して言さく、『世尊、何等か是れ一切法なる。云何か一切法の中に、無礙の相を應に學すべく應に知るべき。佛、須菩提に告げたまはく、『一切法とは善法、不善法、記法、無記法、世間法、出世間法、有漏法、無漏法、有爲法、無爲法、共法、不共法なり。須菩提、是を名けて一切法と爲す。菩薩摩訶薩はは一切法、無礙の相の中に、應に學すべく、應に知るべし。須菩提、佛に白して言さく、『世尊、何等をか世間の善法と名く

る。佛、須菩提に告げたまはく、「世間の善法とは、父母に孝順し、沙門、婆羅門に供養し、尊長に敬事し、布施福處、持戒福處、修定福處、勸導福事、方便生の福徳、世間の十善道、九相、眼相、血相、壞相、膿爛相、青相、嗽相、散相、骨相、燒相、四禪、四無量心、四無色定、念佛、念法、念僧、念戒、念捨、念天、念善、念安般、念身、念死、是を世間の善法と名く。何等か不善法なる、他の命を奪ひ、與へざるを取り、邪淫、妄語、兩舌、惡口、非時の語、貪欲、惱害、邪見、是十不善道等、是を不善法と名く。何等か記法なる。若は善法、若は不善法、是を記法と名く。何等か無記法なる。無記の身業、口業、意業、無記の四大、無記の五衆、十二入、十八界、無記の報、是を無記法と名く。何等か世間法と名くる。世間法とは五衆、十二入、十八界、十善道、四禪、四無量心、四無色定、是を世間法と名く。何等か出世間法と名くる。四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、空解脫門、無相解脫門、無作解脫門、三無漏根、未知欲知根、知根、知己根、三三昧、有覺有觀三昧、無覺無觀三昧、明解脫、念、慧、正憶、八背捨、何等か八なる。内に色相ありて、外に色を觀る、是れ初背捨なり。内に色相無くして外に色を觀る、是れ二背捨なり。淨背捨の身もて證を作す、是れ三背捨なり。一切の色相を過ぐるが故に、有對の相を滅するが故に、一切の異相念ぜざるが故に、無邊虛空處に入る、是れ四背捨なり。一切無邊虛空處を過ぎて、一切無邊識處に入る、是れ五背捨なり。一切無邊識處を過ぎて、無所有處に入る、是れ六背捨なり。一切無所有處を過ぎて、非有

想非無想處に入る、是れ七背捨なり。一切の非有想非無想處を過ぎて、滅受想定に入る、
 是れ八背捨なり。九次第定なり。何等か九なる欲を離れ、惡不善法を離れ、有覺有觀、離
 生喜樂ありて初禪に入る。諸の覺觀を滅して内清淨なるが故に、一心に覺無く觀無く、
 定生喜樂ありて、第二禪に入る。喜を離るるが故に、捨を行じ、身樂を受く、聖人は能く
 説き、能く捨念行樂し、第三禪に入る。苦樂を斷ずるが故に、先に憂喜を滅するが故に、
 苦ならず、樂ならず、捨念淨く、第四禪に入る。一切の色相を過ぐるが故に、有對相を滅
 するが故に、一切の異相念ぜざるが故に、無邊虛空處に入る。一切の無邊虛空處を過ぎて、
 一切の無邊識處に入る。一切の無邊識處を過ぎて、無所有處に入る。一切の無所有處を過
 きて、非有想非無想處に入る。一切の非有想非無想處を過ぎて、滅受想定に入るなり。復
 出世間の法有り。內空、乃至無法有法空、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十不共法、
 一切智、是を出世間の法と名く。何等をか有漏法と爲す。五受業、十二入、十八界、六種、
 六觸、六受、四禪、乃至四無色定、是を有漏法と名く。何等をか無漏法と爲す。四念處、
 乃至十八不共法、及び一切種智、是を無漏法と名く。何等をか有爲法と爲す。若し法の生、
 住、滅、欲界、色界、無色界、五衆、乃至、意觸因緣生の受、四念處、乃至十八不共法、
 及び一切智、是を有爲法と名く。何等をか無爲法と爲す。不生、不住、不滅、若は染、盡
 き、斷盡き、癡盡き、如、不異、法相、法性、法住、實際、是を無爲法と名く。何等をか
 共法と爲す。四禪、四無量心、四無色定、是等の如きを共法と名く。何等をか不共法と爲

【五】次に一切法を總舉して釋す。

すや。四念處、乃至十八不共法、是を不共法と名く。菩薩摩訶薩は、是自相空の法中に於て著すべからず、動ぜざるが故なり。菩薩は亦應に一切法の不二の相を知るべし、動ぜざるが故に。是を菩薩の義と名く。

問うて曰はく、須菩提は何を以ての故に、先づ世間の善法を問ひ、後に出世間の法を問ふ。答へて曰はく、先づ塵を問ひ、後に當に細を問ふべく、先づ世間の相を知りて、後に則ち能く出世間の相を知る。世間の善法とは、有罪有福の果報に、今世、後世有り。世間有り、涅槃有り、佛等の諸の賢聖には、今世、後世、及び諸法實相の證有るを知る。謂ゆる父母に孝順なる等より、乃ち十念に至る。如法に物を得て、沙門、婆羅門に供養し供給す。沙門を名けて、出家求道の人と爲し、婆羅門を名けて、在家學門の人と爲す。是二人は、世間に於て爲し難きを能く爲し、衆生を利益するが故に應當に供養すべし。尊長とは、叔伯姉兄等なり。恭敬供養は、是れ一切修家の法なり。布施、持戒、修定、圓導は、初品の中に説くが如し。方便して福德を生ずとは、懺悔し、隨喜し、佛を請じて久しく住し、涅槃せず、法輪を轉ずるが如き、空を行すと雖も、空に著せず、還諸善を修行するが如き、是の如き等は、方便して諸の福德を生ずるなり。十善道、乃至四無色は、先に説くが如し。十念の中の八事は、先に説くが如し。善念とは、善業の因縁を思惟し、分別して其心を制伏するなり。復次に、涅槃は是れ眞の善法にして、常に心を繫けて涅槃を念す、是れ善念なり。身念は、即ち是れ身念處なり。善法と相違する、是を不善法と名く。無記

法とは、謂ゆる威儀心、工巧心、變化心、及び是身業、口業を起す。善、不善の五衆を除いて、餘の五衆及び虚空、非數緣滅等なり。世間の法とは、五衆、或は善、或は不善、或は無記、十二人の八無記の四三種、十八界の八無記の十三種、十善道、四禪、四無量心、四無色定なり。是善法は、凡夫の人も、能く成就するを得るが故に、又自ら世間を出づる能はざるが故に、世間の法と爲す。出世間とは、三十七品、三解脱門、三無漏根、三三昧なり。先に説くが如し。明、解脱とは、明は三明、解脱は、有爲解脱と、無爲解脱となり。念とは、十念、慧とは、十一智慧なり。正憶とは、諸法實相に隨つて觀じ、身法に隨つて觀するが如き、一切善法の本なり。復次に八背捨、九次第定、十八空、十力、四無所畏、十八不共法は先に義の中に廣説するが如し。是四念處等は一心に道と爲るが故なり。又八背捨、九次第定等は、凡夫の人の得ざる所にして、名けて出世間と爲す。念、慧、正憶には、二種の世間と出世間と有りと雖も、此中には出世間のみを説く。有漏法とは、五衆等、四禪、四無色定なり。無漏法とは、世間に非ず、是れ四念處、乃至十八不共法なり。有爲法には略して三相を説く。謂ゆる生、住、滅にして三界の繫なり。乃至四念處、乃至十八不共法は、無爲法と爲すと雖も、作法なるを以ての故に、是を有爲法と爲す。有爲と相違するは、是れ無爲法と爲す。復次に三毒等の諸の煩惱を滅し、五衆等は次第に相續せず。法相、法性、法住、實際等の如き、是を無爲法と名く。問うて曰はく、色は如色にして、如を離れず、如は色を離れず、色は是有爲なるに、云何が是れ無爲なる。答へて曰はく、

「色に二種有り。一には凡夫の肉眼もて憶想分別する色、二には聖人の心の知る所の色にして、實相、如、涅槃なり。凡夫の人の、知る所の色を名けて色となす。是色は、如の中にいれれば、更に不生不滅なり。有爲の如きは、是れ五衆なりと雖も、而も種種の名字有り。謂ゆる十二入、十八界、因縁等なり。無爲法に三種有りと雖も、亦種種に名字を分別す。謂ゆる如、法相、法住、實際等なり。共法とは凡夫、聖人の生ずる處、入定の處を共にするが故に、名けて共法と爲す。不共法とは、四念處、乃至、十八不共法なり。菩薩は分別して、此諸法の各々の相を知る。是法は、皆因縁の和合より生ずるが故に無性なり。無性なるが故に自性空なり。菩薩は無障礙の法の中に住して動ぜず。不二入の法門を以て、一切法に入りて動ぜざるが故なり。

大智度論卷第四十四

大智度論釋摩訶薩品第十三

卷第四十五

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

爾時、須菩提、佛に白して言さく、「世尊、何を以ての故に、名けて摩訶薩と爲す。佛、須菩提に告げたまはく、「是菩薩、畢定衆の中に於て上首爲り、是故に名けて摩訶薩と爲す。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊、何等をか畢定衆と爲して、是菩薩摩訶薩は、而も上首爲る。佛、須菩提に告げたまはく、「畢定衆とは、性地の人、八人、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、初發心の菩薩、乃至阿鞞跋致地までの菩薩なり。須菩提、是を畢定衆と爲す。菩薩は上首爲り、菩薩摩訶薩は、是中に於て、大心を生じ、壞すべからざる」と金剛の如く、當に畢定衆の爲に上首と作るべし。」須菩提、佛に白して言さく、「世尊、何等か是れ菩薩摩訶薩の大心を生じ、壞すべからざること金剛の如くなる。」佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩、應に是の如きの心を生ずべし。我當に無量生死中に於て、大誓もて莊嚴すべし。我應當に一切の所有を捨つべし。我應當に心を一切衆生に於て等しうすべし。我應當に三乗を以て、一切衆生を度脱して無餘涅槃に入らしむべし。我一切衆生を度し已りて、乃至一人も涅槃に入る者有る無けん。我應當に一切諸法の不生の相を解すべし。」

し。我應當に純ら薩婆若心を以て、六波羅蜜を行すべし。我應當に智慧を學して、一切法を了達すべし。我應當に諸法一相の智門を了達すべし。我應當に乃至無量相の智門を了達すべし。須菩提、是を菩薩摩訶薩の大心を生じて壞すべからざること、金剛の如しと名く。是菩薩摩訶薩、是心中に住せば、諸の畢定衆中に於て、而も上首と爲る。是法は所得無きを用ての故に。須菩提、菩薩摩訶薩、應に是の如きの心を生すべし。我當に十方の一切衆生、若は地獄の衆生、若は畜生の衆生、若は餓鬼の衆生に代りて、諸の苦痛を受け、一一の衆生の爲に、無量百千億劫、代りて地獄の中の苦を受け、乃ち衆生を無餘涅槃に入るに至るべし。是法を以ての故に、是衆生の爲に、諸の勤苦を受く。是衆生は無餘涅槃に入り已りて、然る後に自ら善根を種ゑ、無量百千億阿僧祇劫に、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。須菩提、是を菩薩摩訶薩の大心もて、壞すべからざること金剛の如く、是心中に住して、畢定衆の爲に、上首と作ると爲す。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は、大快心を生じ、是大快心の中に住して、畢定衆の爲に、上首と作る。須菩提、佛に白して言さく、『世尊、何等か是れ菩薩摩訶薩の大快心なる。』佛言はく、『菩薩摩訶薩、初發意より乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、染心、瞋恚心、愚癡心を生ぜず、憍心を生ぜず、聲聞辟支佛心を生ぜず。是を菩薩摩訶薩の大快心と名く。是心中に住して、畢定衆の爲に上首と作り、亦是心有ることを念ぜず。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は、應に不動心を生すべし。』須菩提、佛に白して言さく、『云何が不動心を名くる。』佛言はく、『當に一切種智心を念じ、

亦是心有るを念ぜざる、是を菩薩摩訶薩の不動心と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は、一切衆生の中に於て應に利益安樂の心を生ずべし。云何が利益安樂の心と名くる。一切衆生を救濟して一切衆生を捨てず。是事も亦是心有るを念ぜず。是を菩薩摩訶薩は、一切衆生の中に於て、利益安樂心を生ずと名く、是の如く、須菩提、是菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じて畢定衆の中に於て、最も上首爲り。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、應當に欲法、喜法、樂法の心を行すべし。何等か是れ法なる。謂ゆる諸法の實相を破らざる、是を名けて法と爲す。何等をか名けて欲法、喜法と名くる。法を信じ、法を忍び、法を受くる、是を欲法、喜法と名く。何等をか樂法と名くる。常に是法を修行する、是を樂法と名く。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じて、畢定衆の中に於て、能く上首と爲る。是法、所得無きを用ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、内空乃至無法有法空に住し、能く畢定衆の爲に上首と作る。是法は所得無きを用ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じ、四念處の中に住じ、乃至十八不共法のの中に住し、能く畢定衆の爲に上首と爲る。是法は、所得無きを用ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、如金剛三昧、乃至離著虚空不染三昧の中に住し、畢定衆に住して上首と作る。是法は、所得無きを用ての故なり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は、是諸法の中に住して、能く畢定衆の爲に上首と作る。是因縁を以ての故に名けて摩訶薩と爲す。」

【一】大心を發し不動にして壞すべからざることを金剛の如くならば、これ摩訶薩なることを本品に説くを以て、上首の大心として十大願を起しては大決心等あつて摩訶薩と名くる所以を釋す。

【二】釋して曰はく、「須菩提は已に佛に従うて菩薩の義を聞き、今摩訶薩の義を問ふ。摩訶」とは、秦に大と言ひ、薩埵とは秦に心と言ひ、或は衆生と言ふ。是衆生は、世間の諸の衆生の中に於て、第一最上なるが故に、名けて大と爲す。又大心を以て、一切法を知り、一切衆生を度せんと思はる、是を名けて大と爲す。復次に菩薩なるが故に摩訶薩と名け、摩訶薩なるが故に菩薩と名く。發心を以て無上道と爲すが故なり。復次に菩薩摩訶薩の義を讚する品の中の如く、此中に應に廣く説くべし。復次に佛此中に自ら摩訶薩の義を説きたまふ。衆生に三分有り。一には正定にして、必ず涅槃に入り、二には邪定にして、必ず惡道に入り、三には不定なり。正定は衆生の中に於て常に最大なるが故に摩訶薩と名く。大衆とは、佛を除きて餘の一切の賢聖なり。謂ゆる性地の人なり。是れ聖人の性中生ず、故に名けて性と爲す。小兒の貴家に在りて生じ、小にして未だ能くする所有らずといへど、後に必ず大事を成せんと望むが如し。是地の優法より乃ち世間第一法に至る八人は、見諦道と名けて、十五心の中に行ず。問うて曰はく、「是十五心の中は、何を以てを名けて八人と爲す。答へて曰はく、「思惟道の中には、智を用ふる多く、見諦道の中には、見を用ふる多し。忍智は忍に隨ふ、所以は何ん、忍の功大なるが故なり。復次に、忍智の二事、能く證し能く證して、八忍の中に住す、故に名けて八人と爲す。眞陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛の義は、先に説くが如し。初發意の菩薩とは、有人言はく、「初發意とは、無生法忍を得、阿耨多羅三藐三菩提の相に隨つて發心する、是を初發意と名け、眞の發心

と名け、了了に諸法實相を知り、及び心相を知り、諸の煩惱を破するが故に。阿耨多羅三藐三菩提心に隨ふが故に、破せざるが故に、顛倒せざるが故に、此心を名けて、初發心と爲す」と。有人言はく、「諸の凡夫の人は、諸の結使に往すと雖も、佛の功德を聞いて大悲心を發し、衆生を憐愍して、我當に佛と作るべし」と。此心は煩惱の中に在りと雖も、心尊貴なるが故に、天人に敬せらる。轉輪聖王の太子は、初めて受胎する時、諸子に勝り、諸天、鬼人皆共に尊貴するが如く、菩薩の心も亦是の如し。結使の中に在りと雖も、諸天、神通の聖人に勝る」と。復次に菩薩、初發心、乃至、未だ阿耨多羅三藐三菩提を得ざるも、授記有りて法位に入る。無生法忍を得とは、阿鞞跋致に名く、阿鞞跋致の相は、後に當に廣く説くべし。是の如き等の大衆を、當に上首と作すべきが故に、摩訶薩と名く。是菩薩は、一切の聖人の主爲らんと欲するが故に、大心を發して、一切の苦を受け、心の堅きこと金剛の如し、不動なるが故なり。金剛心とは、一切の結使煩惱も動かす能はざる所なり。譬へば、金剛山の、風の爲に傾搖せられざるが如し。諸の惡衆生、魔人來りて意に隨つて行ぜず、其語を信受せず、瞋罵し、誘毀し、打撃し、閉繫し、斫刺し、割截すれども、心變異せず。有は來りて頭目、髓腦、手足、皮肉を乞ひ索むれば、盡く能く之を求むる者に與へ、意に猶厭足する無く、更に瞋恚し、罵詈するも、爾時、心に忍びて動ぜず。譬へば、牢固の金剛山は、人來りて斷鑿し毀壞し、諸の蟲來りて齧めども、虧損する所無きが如し。是を金剛心と名く。復次に、佛は自ら金剛心の相を説きたまへり。謂ゆる菩薩

は、應に是念を作すべし。我一月、一歳、一世、二世、乃至千萬劫世、大に誓ひて莊嚴すべからず。我は應に無量無數無邊世の生死の中に、一切衆生を利益し度脱すべし。一には、我は應に一切の内外に、所有する貴重の物を捨つべし。三には、一切衆生の中に、等心にして憎愛無けん。四には、我當に三乘の如を以て、一切衆生を度脱すべし。五には、是の如きの衆生を度し已りて、實に度する所無く、而も其功無く、此中にも悔いす。沒せざらん。六には、我應に一切法の不生不滅、不來不去、不垢不淨等の諸相を知るべし。七には、我應當に清淨無染の心を以て六波羅蜜を行じ、薩婆若に廻向すべし。八には、我應當に善く一切世間の所作の事、及び出世間の應に知るべき所の事、皆通達し了知すべし。九には、我應當に諸法一相の智門、謂ゆる一切諸法の畢竟空を解了し、一切諸法を觀すること、無餘涅槃の相の如く、諸の憶想分別を離るべし。十には、我應當に諸法の二相、三相、乃至無量相の門を知り、通達し明了なるべし。二相とは、一切法に二種有り。若は有なると、若は無なると、若は生ずると、若は滅すると、若は作なると、若は不作なると、若は色と、若は無色と等なり。三門とは、若は一と、若は二と、若は多となり。三より以上は、皆名けて多と爲す。若は有と、若は無と、若は非有非無と、若は上と、若は中と、若は下と、若は過去と、若は未來と、若は現在と、三界、三法、善と不善と無記と等の三門あり。四門あり、五門あり。是の如き等の無量の法門に、皆通達無礙にして、是中は心悔いす、怯えず、疑はず、信受し、通達無礙にして、常に行じて息まず。諸の煩惱及び

其果報、及び諸の障礙の事を滅して、皆敗壞せしむること、金剛寶の能く諸山を摧破するが如く、是金剛心の中に住して、當に大衆に於て、而も上首と作るべし。不可得空を以ての故なり。不可得空とは、若し菩薩、是の如き大心を生ぜば、金剛の如くならん。而も憍慢を生ずる者は、罪凡夫に過ぎたり。是を以ての故に、無所得を用ふと説く。諸法は定相無く、幻の如く化の如し。復次に金剛の如しとは、我當に、三惡道に墮せる有ゆる衆生に代りて勤告を受け、一の衆生の爲の故に、代りて地獄の苦を受くべし。乃至、是衆生は、三惡道より出でて、諸善の本を集め、無餘涅槃に至りて、復一切衆生を救ひ、是の如く展轉して一切衆生盡く度し已りて、後當に自ら爲に諸の功德を集め、無量阿僧祇劫にして、乃ち當に佛と作るべし。是中に心悔いず縮まず、能く是の如く、衆生に代りて、勤告を受け、自ら諸の功德を作し、久しく生死に住して、心悔いず、没せず、金剛地の能く、三千大千世界を持して、動搖せざらしむるが如し。是心の牢堅なるが故に、名けて金剛の如しと爲す。大快心とは、牢固の心有りと雖も、未だ是れ大快ならず。馬の大力有りと雖も、而も未だ大に快たらざるが如し。衆生の中に於て一種の等心を得るが故に、欲染の心を生ぜず。若し偏愛有れば、即ち是れ賊と爲り、我等の心を破る。佛道の本の爲に、常に慈悲心を行す、故に瞋心有る無し。常に諸法は因縁和合の生にして、自性有る無きを觀するが故に、則ち癡心無く、衆生を愛念すること赤子よりも過ぎたるが故に、憊心有る無く、衆生を捨てず、佛道を貴ぶが故に、聲聞辟支佛心を生ぜざるなり。問う

て曰はく、「若し心牢固なること金剛の如くんば則ち是れ不動なり、今何を以てか更に不動心を説く。答へて曰はく、「或時は復牢固なりと雖も、心に猶増減有り。樹は牢固なりと雖も、猶動搖すべきが如し。動に二種有り。一には、外の因縁によりて動くこと先に説くが如し。二には、内の因縁によりて動く、諸の邪見、疑等なり。若し常に一切の智慧、佛道を憶念せば、我當に是果報を得べきが故に心動せず。復次に菩薩は、應に種種の因縁もて、衆生を利益すべし。飲食、乃至伽藍、もつて衆生を利し、常に衆生を捨てず、苦を離れしめんと欲す。是を安樂心と名く。亦是心有るを念せず。復次に菩薩の樂法を名けて上首と爲す。法は諸法の相を破壊せざるなり。諸法の相を破壊せずとは、法として著すべき無く、法として受くべき無きが故なり。謂ゆる不可得なり。是不可得空は、即ち是れ涅槃なりと、常に信受し忍する、是を名けて欲法、善法と爲し、常に三解脱門を行するを名けて、樂法と爲す。復次に、菩薩は是十八空の中に住して、十八意行に隨はざるが故に、罪業を起さず。四念處、乃至十八不共法に住して、諸の煩惱を滅し、諸の善法を集むるが故に、能く上首と爲る。復次に、菩薩は、金剛三昧に入り、等心にして、快樂を受け、世樂を厭うて、善根を増長し、智慧、方便の故に、大聖衆に於て而も上首と爲る。若し能く大を爲す者は上首と作す、何に況んや小なる者をや。是故に名けて摩訶薩と爲す。

大智度論釋斷見品第十四

爾時、慧命舍利弗、佛に白して言さく、「我も亦摩訶薩爲る所以を説かんと欲す。佛、

舍利弗に告げたまはく、「便ち説け。舍利弗言さく、「我日、衆生見、壽見、命見、生見、養

育見、衆數見、人見、見見、作見、使作見、起見、使起見、受見、使受見、知者見、見者見、斷

見、常見、有見、無見、陰見、入見、界見、識見、因緣見、四念處見、乃至十八不共法見、

佛道見、成、就衆生見、淨佛世界見、佛見、轉法輪見、是の如き諸見を斷ぜんが爲の故に、

而も爲に法を説く。是を摩訶薩と名く。須菩提、舍利弗に語りて言はく、「何の因縁の故に、

色見は是れ妄見なりや。何の因縁の故に、受想行識、乃至轉法輪見は、是を名けて妄見と

爲すや。舍利弗、須菩提に語るらく、「菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行する時、方便無きが

故に、色に於て見を生ず。有所得を用ての故なり。受想行識、乃至轉法輪に於て見を生ず。

有所得を用ての故なり。是中、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じ、方便力を以て、諸の

見網を斷じ、而も爲に法を説く。無所得を用ての故に。

問うて曰はく、「佛、五百の阿羅漢を將ゐて、阿那婆達多龍王池に到り、遠離の樂を

受け、自身及び弟子の本業の因縁を説かんと欲したまふに、而も舍利弗に在らず。佛は日連

をして、之を命ぜしめたまふ。時に目連、神通力を以て祇洹に到る。時に舍利弗は衣を縫

【二】本品は舍利弗等が衆生を利益せんが爲の故に、摩訶薩たる所以を説けるを明す。先づ初に舍利弗が諸見を斷ずる是れ摩訶薩なりと説けるを釋す。

へり。目連に語りて言はく、「小しく住し、衣を縫ひ縫るを待ちて當に去るべし」と。目連は催促すらく、「疾かに去れ」と。時に目連手を以て衣を摩するに、衣は即ち成り竟れり。舍利弗、目連を見て、其神通を貴び、即ち腰の帯を以て地に擲ち、語りて言はく、「汝、此帯を擧し去れ」と。目連、兩手を以て、此帯を擧するに、地を離す能はず。即ち前の深き定に入りて、之を擧するに地は爲に大に動ぜしも、帯は猶地に著けり。時に橋陳如、佛に問はく、「何の因縁を以てか地大に震動する」と。佛言はく、「目連、甚深の禪定に入りて大神通力を作し、舍利弗の帯を擧せんと欲するに、而も擧する能はず」と。佛、諸の比丘に告げたまはく、「舍利弗の出入する所の禪定は目連乃至、其名だも識らず。佛の入りたまふ所の禪定は、舍利弗乃至、其名だも識らず」と。舍利弗の智慧は、佛と懸に殊なれり。何を以てか、我も亦誰かんと樂ふと言ふ。答へて曰はく、「舍利弗、大衆の中に於て其智慧高心を顯さんと欲するが故に説くに非ず。舍利弗、佛を返うて法輪を轉する人にして、廣く衆生を益す。是摩訶薩の義は益する所甚だ廣し。是故に、佛説き已りたまへば舍利弗は次に説くなり。復次に多くの人、舍利弗の語を信樂す。所以は何ん。宿世の因縁を以ての故に、多く菩薩の心を發せばなり。佛は大慈悲心を以ての故に、吾我の心及び習の根本を已に抜き、又法愛已に斷じたまふが故に、是の如き種種の因縁の故に聽く。舍利弗言はく、我見及び知者、見者、佛見、菩薩見、諸の衆生見等、及び有無、斷常等の邪見、五衆、乃至諸佛の法の轉法輪等の諸法の見、是菩薩能く是三種の見を斷するが故に、當に大

衆の中に於て說法すべし。是三種の見は、無始の世より來、習著して骨髓に入れり。須菩提、是念を作さく、「佛説きたまはく、五衆等、乃至諸佛の法は、是れ菩薩の行なりと。

何を以てか、諸見を斷ずるが爲の故に、法を説く」と。是念を作し已りて、舍利弗に問ふに、舍利弗答ふらく、「方便無き菩薩は、般若波羅蜜を行ぜんと欲し、色を觀じて定相を求め、色は一切相を取りて色見を生ず。此と相違するを名けて方便有りと爲し、是菩薩は色を觀ずと雖も、妄見を生ぜず、而も能く諸の邪見等を斷ず」と。

爾時、須菩提、佛に白して言さく、「世尊、我も亦摩訶薩たる所以を説かんと欲す。佛言はく、「便ち説け。」須菩提言さく、「世尊、是阿耨多羅三藐三菩提心、無等等心は、聲聞辟支佛の心と共ならず。何を以ての故に、是一切智心は、無漏にして不繫なるが故なり。是一切智心は、無漏不繫の中にも、亦著せず。是因縁を以ての故に、摩訶薩と名く。舍利弗、須菩提に語るらく、「何等をか菩薩摩訶薩の無等等の心は、聲聞辟支佛の心と共ならずと爲す。」須菩提言はく、「菩薩摩訶薩は、初發意より已來、法に生有り、滅有り、増有り、減有り、垢有り、淨有るを見ず。舍利弗、若し法に生無く、滅無く、乃至垢無く、淨無くんば、是中に聲聞心無く、辟支佛心無く、阿耨多羅三藐三菩提心無く、佛心無きなり。舍利弗、是を菩薩摩訶薩の無等等の心は、聲聞辟支佛の心と共ならずと名く。舍利弗、須菩提に語るらく、「須菩提の説くが如し、一切智心は、無漏心にも、不繫心の中にも著せざるなり。須菩提、色にも亦著せず、受想行識にも亦著せず、四念處にも亦著せず、乃ち十八

不共法に至るも亦著せず。何を以ての故に、但是心にのみ著せずと説く。『須菩提言はく、
 『是の如く是の如し。舍利弗、色にも亦著せず、乃至十八不共法にも亦著せざるなり。』舍利
 弗、須菩提に語るらく、『凡夫の人の心も亦無漏不繫なり。性空なるが故なり。』諸の聲聞
 辟支佛の心、諸佛の心も、亦無漏不繫なり。性空なるが故なり。』須菩提言はく、『是の如し、
 舍利弗。』舍利弗言はく、『須菩提、若は色も亦無漏不繫なり。性空なるが故なり。受想行識
 も無漏不繫なり。性空なるが故なり。乃至意觸因縁生の受も無漏不繫なり。性空なるが故
 なり。』須菩提言はく、『爾り。』舍利弗言はく、『四念處も亦無漏不繫なり。性空なるが故なり。
 乃至十八不共法も亦無漏不繫なり。性空なるが故なり。』須菩提言はく、『爾り。舍利弗の言
 ふ所の如し。凡夫の人の心も亦無漏不繫なり。性空なるが故なり。乃至十八不共法も、亦
 無漏不繫なり。性空なるが故なり。』舍利弗、須菩提に語るらく、『須菩提の説く所の、空、
 無心の故に、是心に著せずとするが如く、須菩提、色は無なるが故に、色に著せず。受想
 行識、乃至意觸因縁生の受は無なるが故に、受に著せず。四念處は無なるが故に、四念處
 に著せず、乃至十八不共法も無なるが故に、十八不共法に著せず。』須菩提言はく、『是の如
 し、舍利弗、色は無なるが故に色中に著せず。乃至十八不共法も無なるが故に、十八不共
 法中にも著せざるなり。』是の如く、舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、阿耨
 多羅三藐三菩提の心、無等等の心、聲聞辟支佛の心と共ならざるを以て、是心有るを念
 ぜず、亦是心に著せず、一切法は所得無きを以ての故なり。是を以ての故に摩訶薩と名

【三】次に須菩提が無等心の故に摩訶薩なりといふを釋す。

く。」

釋して曰はく、「須菩提の説かく、「摩訶薩の無等等心は、是心に於ても亦著せず」と。著せずとは、是菩薩は初發心より已來、法の定相の若は生じ、若は滅し、若は増し、若は減じ、若は垢づき、若は淨きこと有るを見ず。是心は畢竟空にして、是中に心相有る無く、心相は諸相に非ず、畢竟清淨なるが故なり。是を以ての故に、聲聞心、辟支佛心、菩薩心、佛心無し。須菩提の貴しと稱する菩薩は、是の如く心も亦美にして、菩薩是心に著して、亦尊貴と爲さず。舍利弗は、須菩提を難ぜんと欲して、是言を作さく、「但一切智のみ無漏不繫なるに非ず、菩薩は自ら高くすべからず。所以は何ん。凡夫の人の心も、亦無漏不繫なり。性は常に空なるが故に。聲聞、辟支佛、佛の心も無漏不繫なるが如く、是凡夫の人の心も、實の相性は空なり。空も相性空なれば清淨にして著せず。先に説ける陰雲は日月を翳ふるも、日月を汗す能はざるが如し。又諸の煩惱は實相に與して、常に性空なれば、心相、異なる無し。但凡夫地の中に住すれば、是れ垢、是れ淨なり。聖人の地中に住すれば、無相の智慧を修するが故に、分別する所無く、但衆生を憐愍するが故に、復説く有り」と雖も、心に著する所無し。獨り凡夫の人の心のみ無漏不繫なるに非ず、五衆乃至十八不共法も亦是の如し」と。須菩提は然可す。又舍利弗の言はく、「是心は無なり。心相は空なるが故なり。色の中に著せず、色相は無なるが故なり。亦乃至諸佛の法に著せざるも、亦是の如し」と。須菩提言はく、「是の如し」と。是を以ての故に、菩薩は、能く

諸法の性の常に空、不可得空、畢竟清淨なるを觀す。是を以ての故に、阿耨多羅三藐三菩提心、無等等心は聲聞、辟支佛心と共に共ならず、是心有るを念せず、亦是心に著せず、能く疾く阿耨多羅三藐三菩提に至ると説く。釋第十四 品竟る

大智度論釋 大莊嚴品第十五

爾時、富樓那彌多羅尼子、佛に白して言さく、『世尊、我も亦摩訶薩爲る所以を説かんと樂ふ。』佛言はく、『便ち説け。』富樓那彌多羅尼子言さく、『是菩薩、大に莊嚴す、是菩薩、大乘に發趣す、是菩薩、大乘に乗る。是を以ての故に、是菩薩を摩訶薩と名く。』舍利弗、富樓那に語りて言はく、『云何が菩薩摩訶薩の大莊嚴と名くる。』富樓那、舍利弗に語りて、『菩薩摩訶薩、分別して、爾所の人の爲の故に檀波羅蜜に住し、檀波羅蜜を行ぜず。一切衆生の爲の故に、檀波羅蜜に住し、檀波羅蜜を行ふ。爾所の人の爲の故に尸羅波羅蜜に住し、尸羅波羅蜜を行ぜず。瞋提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜、一切衆生の爲の故に、般若波羅蜜に住し、般若波羅蜜を行ふ。菩薩摩訶薩の大莊嚴は、衆生を齋限せず、我當に若干人を度すべく、餘人を度せざらん。我若干人をして、阿耨多羅三藐三菩提に至らしめ、餘人を至らざらしめん』とは言はず。是菩薩摩訶薩は、一切衆生の爲の故に、大いに莊嚴す。復是念を作さく、『我當に自ら檀波羅蜜を具足し、亦一切衆生をして檀波羅蜜を具足せしむべし。』

蜜を行ぜしむべし。自ら尸羅波羅蜜、屬提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜を具足し、自ら般若波羅蜜を具足し、亦一切衆生をして般若波羅蜜を行ぜしむべし」と。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、檀波羅蜜を行ずる時、有ゆる布施、薩婆若に應ずる心もて、一切衆生と共に阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。舍利弗、是を菩薩摩訶薩、檀波羅蜜を行ずる時の、檀波羅蜜大莊嚴と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、檀波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心もて布施し、聲聞、辟支佛地向はず、舍利弗、是を菩薩摩訶薩、檀波羅蜜を行ずる時の、尸羅波羅蜜大莊嚴と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、檀波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心もて布施し、是諸の施法に於て、信忍欲す。是を檀波羅蜜を行ずる時の、屬提波羅蜜大莊嚴と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、檀波羅蜜を行ずる時の、薩婆若に應ずる心もて布施し、勤修して息まず。是を檀波羅蜜を行ずる時の、毘梨耶波羅蜜大莊嚴と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、檀波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心もて布施し、心を攝して聲聞、辟支佛の意を起さず。是を檀波羅蜜を行ずる時の、禪波羅蜜大莊嚴と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、檀波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心もて布施し、諸法は、幻の如く、施者を得ず、所施物を得ず、受者を得ずと觀す。是を檀波羅蜜を行ずる時の、般若波羅蜜大莊嚴と名く。是の如く、舍利弗、若し菩薩摩訶薩は薩婆若に應ずる心もて、諸の波羅蜜相を取らず、得ずんば、當に知るべし、是れ菩薩摩訶薩の大莊嚴なりと。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心もて布施し、一切衆

生と共に、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是を菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行する時の、檀波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行する時、諸法を信忍欲す。是を菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行する時の、羼提波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行する時の、毘梨耶波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行する時の、聲聞、辟支佛の心を受けず。是を菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行する時の、禪波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行する時の、般若波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行する時、諸の波羅蜜を攝す。是を以ての故に大莊嚴と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行する時、薩婆若に應ずる心もて布施し、一切衆生と共に、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是を菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行する時の、檀波羅蜜と爲す。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行する時、聲聞、辟支佛の心を受けず、但薩婆若の心のみを受く。是を菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行する時の、尸羅波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行する時、薩婆若に應ずる心もて身心精進し、休せず、息せず。是を菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行する時の、毘梨耶波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行する時、心を一處に攝し、苦事有りと雖も心を散亂せず。是を菩薩摩訶薩、羼提波羅蜜を行する時の、禪波羅蜜と

名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、毘提波羅蜜を行する時、薩婆若に應ずる心もて、諸法
 は空にして、作者無く、受者無しと觀じ、若し呵罵し割截する者有るも、心は幻夢の如し。
 是を菩薩摩訶薩、毘提波羅蜜を行する時の般若波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、
 毘梨耶波羅蜜を行する時、薩婆若に應ずる心もて布施し、身心をして懈怠ならしめず。是
 を菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜を行する時の檀波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、
 毘梨耶波羅蜜を行する時、薩婆若に應ずる心もて始終具足し、清淨に戒を持つ。是を菩
 薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜を行する時の尸羅波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、毘
 梨耶波羅蜜を行する時、薩婆若に應ずる心もて忍辱を修行す。是を菩薩摩訶薩、毘梨耶波
 羅蜜を行する時の羼提波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜を行する
 時、薩婆若に應ずる心もて心を攝し欲を離れて、諸の禪定に入る。是を菩薩摩訶薩、毘
 梨耶波羅蜜を行する時の禪波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜を行
 する時、薩婆若に應ずる心もて一切諸法の相を取らず、相を取らざるに於ても亦著せず。
 是を菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜を行する時の般若波羅蜜と名く。是の如く、舍利弗、菩薩
 摩訶薩は毘梨耶波羅蜜を行する時、諸の波羅蜜を攝す。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、禪
 波羅蜜を行する時、薩婆若に應ずる心もて定心に布施し、心をして亂れしめず。是を菩薩
 摩訶薩、禪波羅蜜を行する時の、檀波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、禪波羅蜜
 を行する時、薩婆若に應ずる心もて持戒し、禪定力の故に、破戒の諸法入ることを得せし

めず。是を菩薩摩訶薩、禪波羅蜜を行する時の尸羅波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、禪波羅蜜を行する時、薩婆若に應ずる心もて慈悲定の故に、諸の惱害を忍ぶ。是を菩薩摩訶薩、禪波羅蜜を行する時の屬提波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、禪波羅蜜を行する時、薩婆若に應ずる心もて禪に於て味せず、著せず、常に増進を求めて、一禪より一禪に至る。是を菩薩摩訶薩、禪波羅蜜を行する時の、毘梨耶波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、禪波羅蜜を行する時、薩婆若に應ずる心もて、一切法に於て、依止する所無く、亦禪に隨うて生ぜず。是を菩薩摩訶薩、禪波羅蜜を行する時の、般若波羅蜜と名く。是の如く、舍利弗、菩薩摩訶薩、禪波羅蜜を行する時、諸の波羅蜜を攝す。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行する時、薩婆若に應ずる心もて布施し、内外の所有、受借する所無く、與者受者及び財物を見ず。是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行する時の檀波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行する時、薩婆若に應ずる心もて持戒破戒の二事を見ざるが故に、是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行する時の尸羅波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行する時、薩婆若に應ずる心もて訶者、罵者、打者、殺者を見ず。亦是空を用て能く忍辱するを見ず。是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行する時の屬提波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行する時、薩婆若に應ずる心もて諸法の畢竟空を觀じ、大悲心を以ての故に、諸の善法を行す。是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行する時の毘梨耶波羅蜜と名く。復次に舍利弗、菩

薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、薩婆若に應ずる心もて禪定に入り、諸禪の離相、空相、無相相、無作相を觀ず。是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時の、禪波羅蜜と名く。是の如く舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、諸の波羅蜜を攝す。舍利弗、是の如きを名けて、菩薩摩訶薩の大莊嚴と爲す。是大莊嚴の菩薩をば、十方の諸佛は歡喜して、大衆中に於て、稱名讚歎すらく、某の世界の、某の菩薩摩訶薩は、大莊嚴し、衆生を成就して、佛世界を淨む」と。

【四】本品は富樓那が次で摩訶薩たる所以を説けるを明せるものにして富樓那は摩訶薩に大莊嚴の發趣大乘乗の三義を説く中、本品は前二を説くなり。先初に大莊嚴これ摩訶薩と説けるを釋す。

論 釋して曰はく、「富樓那は、上の二大弟子の摩訶薩の義を説くに、而も佛可して、「善哉」と言ふを聞き、又富樓那「佛は大衆の中に法師の上なり」と讚歎し、復摩訶薩の義を説かんと欲して佛に白して言さく、「我も亦説かんと樂ふ」と。佛、即ち聽許したまふ。」問うて曰はく、「須菩提は、般若波羅蜜を説くの主なり。舍利弗は、應に須菩提に問ふべし。今何を以てか乃ち富樓那に問へる。」答へて曰はく、「此二人、同じく是れ婆羅門にして、俱に母の字を以て名と爲す。此二人は佛法の中に俱に大なり。舍利弗は智慧の中に大なり。富樓那説法して種種に莊嚴し、衆情を牽引して説法の中に大なり。是故に二人は等等なり。故に佛前に於て共に論ぜり。又富樓那、先に已に舍利弗と共に論議して善能く相答へたり。『七車譬輪經』の中に説くが如くんば、已に共に親厚を爲し、好く共に理を論ぜり。須菩提は是因縁無し。又富樓那は摩訶薩の義を説く。是故に應に問ふべし。云何が乃ち須菩提に問はん。説く所の摩訶薩の義とは、謂ゆる是れ人の大莊嚴なり。人の遠く行く

に、重く資糧有るが如く、又賊を破るに諸の器仗を備ふるが如し。是菩薩も亦是の如し。魔人煩惱の賊を破せんと欲するが故に、六波羅蜜を行じて以て自ら莊嚴す。是人無量劫より來、生死に住して諸の福德智慧を集め、以て資糧と爲し、三種の乗中、大乘に趣かんが爲の故に、發心して六波羅蜜を行じ、是大乘に乗せり。舍利弗、富樓那に問はく、聲聞辟支佛も亦道に越く、何を以てか大莊嚴と名けず、而も但菩薩の大莊嚴のみを説く」と。富樓那答へて言はく、「聲聞辟支佛は布施等の六事を行ずと雖も、量有り、限有り、自ら爲に身を度し、及び餘の衆生の度すべき者を度す。是故に大莊嚴と名けず。菩薩は度する所を分別せず、齊限せず、若干の衆生の爲の故に、布施乃至智慧もて是念を作さず、「我は若干の人を度して、三乗を得しめ、若干の人をして、阿耨多羅三藐三菩提を得しめ、若干の人を度する能はず」と。菩薩は是莊嚴を作し、一切衆生をして、盡く大乘に入りて作佛せしむ。菩薩は大莊嚴を行じて、自ら檀波羅蜜を行じ、亦一切衆生をして檀波羅蜜を行ぜしむ。乃至般若波羅蜜も亦是の如し。問うて曰はく、「云何が大莊嚴と名くる」と。答へて曰はく、「衆生を度せんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提の爲の故に、諸の善福功德を行する者なり。略して是を説かば、六波羅蜜なり。富樓那の次第説の如し。若し菩薩、一切智慧の爲の故に、檀波羅蜜を行ぜば、是福德は一切衆生と共にあり。共なりとは、此布施の福德、我と及び衆生と同等なるなり。我此を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。廻向とは、此福德に於て、人王、天王、世間の禪定の樂を求めず。衆生、乃至涅槃の爲にも、亦此果

報はうを持ちせんと求めず、盡ことごとく衆生しゆじやうを度とせんが爲ための故ゆゑに佛法ぶつぽふを求もとむるなり。是かくの如ごとき等の相さう、
 是これを檀波羅蜜だんぱらみつの大莊嚴だいしやうごんと名なく。是こゝろ菩薩ぼさつ、布施ふせを行ぎやうする時とき、若もし諸もろの辟支佛びやくしぶつ、阿羅漢あらかんの大だい、
 神通じんとうを現げんじて、漏盡ろうじゆんくるを得え、涅槃ねはんに入るいるを見るみるも、中なかに於おいて貪とんせず著ちやくせず、一心いつしんに佛道ぶつだう
 を修しゆす。是これを檀波羅蜜だんぱらみつもて、尸羅波羅蜜しやらぱらみつを生しやうずと名なく。布施ふせの時とき人ひと有り、惡口あくくし罵詈めり罵詈めりし刀たう
 杖ちやうもて毀害きがいし乞こひに應おうぜざる所ところの者ものにして、而しかも強かひて乞こふも瞋しんらず悔くいずして諸法しよほふの相さう中ちゆう
 に入る。謂いゆる畢竟空ひつじやうくうなり。是これを檀波羅蜜だんぱらみつもて屬提波羅蜜ぶつだいはらみつを生しやうずと名なく。布施ふせを行ぎやうする時とき、
 財物さいもつを和合わがふし彼かれを守護しゆごし施ほこして、身心しんしんに懈おらず息やすまざる、是これを檀波羅蜜だんぱらみつもて、毘梨耶波羅びりやぱら
 蜜みつを生しやうずと名なく。布施ふせの時とき、一心いつしんに佛ぶつを念ねんじ、諸佛しよぶつの法ほふを念ねんじ、聲聞しやうもん辟支佛びやくしぶつの心こころをして
 入いらしめず。是こゝろ布施ふせに因よりて即すなはち禪定ぜんぢやうに入る。是これを檀波羅蜜だんぱらみつもて、禪波羅蜜ぜんぱらみつを生しやうずと名なく。
 布施ふせの時とき、菩薩ぼさつは是念こゝろを作なさく、一いち施者ししや、受者じゆしや、財物さいもつの因緣いんごん、和合わがふして生しやうずるが故ゆゑに、自性じしやう
 無く、自性じしやう無なきが故ゆゑに、空くうにして幻まぼろしの如ごとく、夢ゆめの如ごとく。衆生しゆじやう空くうなるが故ゆゑに、受者じゆしやう無く施せ
 者しや無く、法空ほふくうの故ゆゑに、財物さいもつ無なし」と。是これを檀波羅蜜だんぱらみつもて、般若波羅蜜ぼんげぱらみつを生しやうずと名なく、若もし
 菩薩ぼさつ、一切智いつしやくちの爲ための故ゆゑに、諸もろの波羅蜜ぱらみつの相さうを取とらず、而しかも能たく諸もろの波羅蜜ぱらみつを行ぎやうせば、
 是これを菩薩ぼさつの大莊嚴だいしやうごんと名なく。此こゝろの中なかの一いち波羅蜜ぱらみつは、備つに諸もろの波羅蜜ぱらみつを生しやうず。此經こゝろの中なかに自みづか
 其義そのぎを分別ぶんべつするに、古今ここんの語異ごごなり、義ぎ不ふ了りやうなるが故ゆゑに助すけけて分別ぶんべつして説とき、論議ろんぎ門もんを開ひら
 く。餘よの五波羅蜜ごぱらみつも、亦また應まに是こゝろの如ごとく、義ぎに隨したがうて説とくべし。問とうて曰いはく、「何なにを以もつてか
 但ただ檀波羅蜜だんぱらみつの中なかにのみ六波羅蜜ろくぱらみつを生しやうずと説とき、餘よの波羅蜜ぱらみつの中なかには、但ただ五ごを生しやうずと説とく。」

答へて曰はく、「若し後の五波羅蜜の中に、各各六を生ずるも亦咎無し。六波羅蜜は、一時に非ず、一念の法に非ず、無量劫の中に、六種の功德を集め、和合するを名けて六波羅蜜と爲す。先づ小を生じ、後に中と大とを生ずるに、何の咎か有らん。一切の諸法は、皆初は小にして、後は大なり。是を以ての故に、諸の餘の波羅蜜も各各應に六を生ずべし。復次に一切の諸佛、説法する時、檀波羅蜜を初門と爲したまふ。經中に説くが如くんば、佛は常に初に衆生の爲に布施を説き、持戒を説き、生天を説き、五欲の味を説きたまふ。先づ世間の苦惱、道德の利益を説き、後に爲に四諦を説きたまふ。是を以ての故に初に檀を説くなり。」問うて曰はく、「佛は何を以ての故に、檀を説いて、初門と爲したまへる。」答へて曰はく、「衆生を攝する法は、檀に過ぎたるは無し。大小貴賤、乃至畜生は、檀皆之を攝す。乃ち怨家に至るまで、施を得れば、則ち中人と爲り、中人にして施を得れば、則ち親善と成る。諸佛の三十二相、八十隨形好、諸の功德の具足、所願意の如くなるは、皆布施に依りて得らる。寶掌菩薩等の如きは、七寶を手中より出して、衆生に給施し、又能く衆生をして歡喜し、柔軟にして涅槃を得るに任ふべからしむ。是の如き等の義の故に、檀波羅蜜を初と爲す。問うて曰はく、「富樓那は、何を以ての故に、一波羅蜜の中に、檀波羅蜜を生ずるをば、大莊嚴と爲すと説ける。」答へて曰はく、「是波羅蜜は、各各別に行ずれば力勢少し、譬へば、兵人未だ集まらざれば、則ち戦力無く、若し大軍都て集りて莊嚴し、器仗を執持すれば、則ち能く敵を破るが如し。菩薩も亦是の如し、六波羅蜜を一時

に莊嚴し、能く諸の煩惱、魔人の賊を破し、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得。是を以ての故に、一波羅蜜の中に、諸の波羅蜜を具すと説く、十方の諸佛の名を稱へ、讚歎し、衆生を成就し、佛世界を淨むるは、先に説けるが如し。

慧命、舍利弗、富樓那彌多羅尼子に問はく、「云何が菩薩摩訶薩は、大乘に發趣する。」
富樓那、舍利弗に語るらく、「菩薩摩訶薩、六波羅蜜を行する時、諸の欲を離れ、諸の惡不善の法、有覺有觀にして、離生喜樂有り、初禪に入り、乃至第四禪の中に入る。慈、廣大無二無量なるを以て、無怨無恨、無惱の心行、一方、二三四方、四維上下に遍滿し、一切世間に過す。悲、喜、捨の心も亦是の如し。是菩薩は、禪に入る時、起つ時、諸禪無量心、及び支をば、一切衆生と共に薩婆若に廻向す。是を菩薩摩訶薩の禪波羅蜜に於て、大乘に發趣すと名く。是菩薩摩訶薩、禪無量心に住して是念を作さく、「我當に一切種智を得て、一切衆生の煩惱を斷ずるが爲の故に、當に法を説くべし」と。是を菩薩摩訶薩、禪波羅蜜を行する時の、檀波羅蜜と名く。若し菩薩摩訶薩は薩婆若に應ずる心もて、初禪を修し、初禪に住すれば、二三四禪も亦是の如し。餘心、謂ゆる聲聞、辟支佛心を受けず。是を菩薩摩訶薩、禪波羅蜜を行する時の、尸羅波羅蜜と名く。若し菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心もて、諸禪に入れば、是念を作さく、「我一切衆生の煩惱を斷ぜんが爲の故に、當に法を説き、是諸心に忍を欲樂すべし」と。是を菩薩摩訶薩、禪波羅蜜を行する時の、羼提波羅蜜と名く。若し菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心もて諸禪に入れば、諸善根、皆

薩婆若に廻向し、勤修して息まず。是を菩薩摩訶薩、禪波羅蜜を行ずる時の毘梨耶波羅蜜
 と名く。若し菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心もて四禪及び支に入り、無常相、苦相、無
 我相、空相、無相、無作相を觀じ、一切衆生と共に薩婆若に廻向す。是を菩薩摩訶薩、
 禪波羅蜜を行ずる時の、般若波羅蜜と名く。舍利弗、是を菩薩摩訶薩の、大乘に發越すと
 名く。復次に菩薩摩訶薩、慈心を行じて、是念を作さく、「我當に一切衆生を安樂にし、悲
 心に入るべし。我當に一切衆生を救濟して喜心に入るべし。我當に一切衆生を度して捨心
 に入るべし。我當に一切衆生をして諸漏の盡くるを得しむべし」と。是を菩薩摩訶薩、無
 量心を行ずる時の、檀波羅蜜と名く。復次に菩薩摩訶薩、是諸禪、無量心もて、聲聞辟
 支佛地に向はず。但薩婆若に廻向す。是を菩薩摩訶薩、無量心を行ずる時の、尸羅波羅蜜
 と名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、四無量心を行じて、聲聞辟支佛地を食らず、但忍
 んで薩婆若を樂欲す。是を菩薩摩訶薩、無量心を行ずる時の、屬提波羅蜜と名く。若し菩
 薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心もて、四無量心を行じ、但清淨の行を行す。是を菩薩摩訶
 薩、無量心を行ずる時の、毘梨耶波羅蜜と名く。復次に菩薩摩訶薩、禪に入り無量心に入
 る時、亦禪に隨つて無量心生ぜず。是を菩薩摩訶薩、無量心を行ずる時の方便般若波羅蜜
 と名く。舍利弗、是を菩薩摩訶薩の、大乘に發越すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、
 大乘に發越して一切種四念處を修し、乃至一切種八聖道分を修し、一切種三解脱門乃至十
 八不共法を修す。是を菩薩摩訶薩の大乘に發越すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、内

空の中の智慧、無所得を用ての故に、乃至無法有法空の中の智慧、無所得を用ての故に、是を菩薩摩訶薩大乘に發越すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は、一切法の中に、亂ならず、定ならざるの智慧有り。是を菩薩摩訶薩大乘に發越すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は、大乘に發越するに、常に非ず、無常に非ざるの智慧、樂に非ず、苦に非ず、實に非ず、虚に非ず、我に非ず、無我に非ざるの智慧有り。是を菩薩摩訶薩大乘に發越すと名く。無所得を用ての故なり。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩の智は、過去世に行かず、未來世に行かず、現在世に行かず、亦三世を知らざるにも非ず。是を菩薩摩訶薩大乘に發越すと名く。無所得を用ての故なり。復次に菩薩摩訶薩、大乘智に發越し欲界に行かず、色界に行かず、無色界に行かず、亦欲界、色界、無色界を知らざるに非ず。無所得を用ての故なり。是を菩薩摩訶薩大乘に發越すと名く。復次に菩薩摩訶薩、大乘智に發越するに、世間法を行ぜず、出世間法を行ぜず、有爲法を行ぜず、無爲法を行ぜず、有漏法を行ぜず、無漏法を行ぜず。亦世間法、出世間法、有爲無爲、有漏無漏法を知らざるに非ず。無所得を用ての故なり。舍利弗、是を菩薩摩訶薩大乘に發越すと名く。

【五】次に發趣大乗これ摩訶薩といふを釋す。

問うて曰はく、「六波羅蜜の中、若し道に説かば、則ち應に般若波羅蜜を説き、次に禪を説くべし。若し願には應に先づ檀波羅蜜を説くべし。今何を以てか乃ち禪波羅蜜を説いて首と爲す。」答へて曰はく、「大莊嚴を發すれば、衆生の能く破壊する者有る無し。若し菩薩に禪定心無く、未だ欲を離れざれば、餘の波羅蜜を行ずと雖も、則ち壞し易し。禪波

羅蜜を行すれば、能く慈無量に入り、是時能く壞する無し。説くが如くんば、慈三昧を行すれば、刀も傷くる能はず、水火も害せず、亦神通力有りて、種種に變化し、能く大莊嚴を發す。佛の説きたまへるが如し、「鳥に兩翼無ければ飛翔する能はず。菩薩に神通力無ければ大莊嚴を發する能はず」と。禪波羅蜜の中に入れば、能く慈無量を生じ、五神通の故に物能く傷くる無し。是を以ての故に今此禪波羅蜜を説いて首と爲す。問うて曰はく、「四禪の中に種種の功德有り、皆六波羅蜜を行すべきなり。今何を以てか但四無量心の中に六波羅蜜を行するを説く。」答へて曰はく、「四無量心は、無生相を取りて衆生を縁す。菩薩は常に衆生の爲の故に道を行す。是四無量等の中には慈悲心有れば、能く衆生を利益す。餘の八背捨、九次第定等には是の如き利益無し。問うて曰はく、「菩薩は五神通に住して能く廣く衆生を利益す。何を以ての故に説かざる。」答へて曰はく、「大悲は是れ菩薩の根本なり。又五神通は先に已に説き、後にも當に説くべし。四無量心は未だ説かざるが故に今説くなり。若し菩薩の但四無量心を行するは、大乘に發趣すと名けず、六波羅蜜の和合の故に、名けて大乘に發趣すと爲す。四無量心は、六波羅蜜を生ず。富樓那は此中に自ら因縁を説けり。」

問うて曰はく、「云何が一切種に、四念處、乃至十八不共法を修する。」答へて曰はく、「三種有り。信行性と法行性となり。信行性は無常、苦を觀じ、或は但無常を觀じ、或は但苦を觀ず。法行性の人は、空と無我とを觀じ、或は但空を觀じ、或は但無我を觀ず。」

菩薩は衆生を度するが故に、一切の門、皆修し皆學す。復次に大乘を發する者は、十八空を以て十八種の法を破し、亦是十八種の空の智慧を捨つ。復次に若し菩薩は、諸法の常定を觀するも、亦定相を取らず。是を定まらず、亂れざるの智慧と名く。復次に、常樂の顛倒に墮せんを畏るるが故に、諸法の常樂等を觀せず。斷滅に墮せんを畏るるが故に、無常等を觀せず。復次に若し菩薩、三世、三界中の智慧もて、觀せず、行せず、相を取らずんば、皆虛誑なりと知りて、無明に墮せず。復次に、世間、出世間の中は、亦智に非ず、不智に非ず。智に非ずとは、空なるが故なり。定相無きが故なり。畢竟清淨なるが故なり。不智に非ずとは、無常、苦、空等を觀じ、般若波羅蜜の中に入るが故なり。智を行せざるに非ず。行せずとは、見を遮し、法愛を斷じて、依止を離るるが故なり。智に非ざる無しとは、是中に愚癡無く、凡夫に異なるが故なり。又行者は、戒を持し、禪定を修し、諸觀を習ふ。云何が智に非ずと言はんや。佛・利衆・生經の中に説きたまへるが如し。

行者は諸法を捨てて、亦慧に依せず
亦分別する所無し、是を決定智と爲す

大智度論釋乘乘品第十六

卷第四十六

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

爾時、慧命舍利弗、富樓那に問はく、「云何が菩薩摩訶薩は大乗に乗すと名くる。」富樓那、舍利弗に答へて曰はく、「菩薩摩訶薩よ、般若波羅蜜を行ずる時、檀波羅蜜に乗するも、亦檀波羅蜜を得ず、亦菩薩を得ず、亦受者を得ず、無所得を用ての故なり。是を菩薩摩訶薩は、檀波羅蜜に乗すと名く。菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行ずる時、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜に乗じ、般若波羅蜜に乗するも、亦般若波羅蜜を得ず、無所得を用ての故なり。是を名けて、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜に乗すと爲す。是の如く舍利弗、是を菩薩摩訶薩は、大乘に乗すと爲す。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は、摩訶衍の一心、薩婆若に應じ四念處を修す。法壞するが故なり。乃至、一心は薩婆若に應じ、十八不共法の法を修す。法壞するが故に是れ亦不可得なり。是の如く舍利弗、是を菩薩摩訶薩、大乘に乗すと名く。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、是念を作さく、「菩薩は但名字のみ有り、衆生は不可得なるが故なり」と。是を菩薩摩訶薩、大乘に乗すと名く。復次に舍利弗、若し菩薩摩訶薩、是念を作さく、「色は但名字のみ有り、色は不可得なるが

故なり。受想行識も但名字のみ有り、識は不可得なるが故なり。眼は但名字のみ有り、眼は不可得なるが故なり。乃至意も亦是の如し。四念處は但名字のみ有り、四念處は不可得なるが故なり。乃至八聖道分も但名字のみ有り、八聖道分は不可得なるが故なり。内空は但名字のみ有り、内空は不可得なるが故なり。乃至無法有法空も但名字のみ有り、無法有法空は不可得なるが故なり。乃至十八不共法は但名字のみ有り、十八不共法は不可得なるが故なり。諸法の如は但名字のみ有り、如は不可得なるが故なり。法相、法性、法住、法位、實際は但名字のみ有り、實際は不可得なるが故なり。阿耨多羅三藐三菩提及び佛は但名字のみ有り、佛は不可得なるが故なり。舍利弗、是を菩薩摩訶薩は大乗に乗ずと名く。復次に舍利弗、若し菩薩摩訶薩は、初發意より已來、菩薩の神通を具足し、衆生を成就し、一佛國より一佛國に至り、諸佛を恭敬し供養し、尊重し讚歎し、諸佛より法名を聽受す。謂ゆる菩薩の大乗なり。是菩薩、此大乗に乗す。一佛國より一佛國に至り、佛世界を淨め衆生を成就するも、初より佛國想無く、亦衆生想も無し。此人は不二法の中に住して衆生の身に受け、其所應に隨うて、自ら其形を變じて之を教へし、乃至一切智まで、終に菩薩乘を離れず。是菩薩、一切種智を得已りて、法輪を轉ず。聲聞、辟支佛及び天龍、鬼神、阿修羅、世間、人民の轉する能はざる所なり。爾時、十方如恆河沙等の諸佛は、皆歡喜し、稱名し、讚歎して、是言を作さく、「某の方、某の國の某の菩薩摩訶薩は、大乗に乗じて一切種智を得、法輪を轉ず」と。舍利弗、是を菩薩摩訶薩、大乗に乗すと名

【一】本品は富樓那が三種に摩訶薩を説ける中、大乘を説けるものにして、今これを釋す。

く。

釋して曰はく、「富樓那は三事を以て摩訶薩を明す。上に已に二事を説けり。今第三事の大乗に乗ずることを問ひ、富樓那答へ、有人言はく、「菩薩は直に内外の物を布施すれば、吾我の相を破する能はざるも、是を大莊嚴と名く。若し能く吾我の相を破して、衆生空に入れば、未だ法空に入らざるも、是を大莊嚴を發すと名く。衆生空に因りて法空の中に入り、檀波羅蜜を行じて、三事、施者、受者、財物を見ず。若し能く是の如くなれば、是を大乘に乗すと名く。餘の波羅蜜も亦是の如し。是菩薩は、雜心ならざるを以て、諸の煩惱及び二乗の意を離る。薩婆若の爲の故なり。四念處を修行し、修相も亦不可得にして、畢竟清淨なるが故なり。是を大乘に乗すと名く。乃至十八不共法も亦是の如し。復次に若し菩薩、一切法は假名字なり、名字の和合の中に於て復名字有り、一切の世間、若し出世間は、皆是れ假名なりと知れば、是を大乘に乗すと名く。復次に菩薩は大莊嚴を發し、菩薩の神通を具足す。菩薩の神通を具足するが故に、衆生を成就し、一佛國より一佛國に至り、經る所の諸國に、七寶の蓮華を雨らして、諸佛を供養し、三惡道の衆生を拔き、身を變ずること無數に、各各諸佛の前に至り、大乘法を聽受し、化して諸佛の前より、大乘の相に趣き、此大乘に乗じて、一佛國より一佛國に至り、衆生を成就し、佛世界を淨め、衆生相を生ぜず、佛國相を取らず、不二入の地中に住し、諸の衆生の度すべき所の者に隨つて之を化度し、衆生の爲の故に身を受け、常に大乘に乗じ、初より休息無し。是菩薩

は大乗に乗じ、佛と成るを得て法輪を轉す。諸の聲聞、辟支佛の轉する能はざる所なり。何に況んや、餘の小凡夫をや。十方如恆河沙等の世界の諸佛は、是菩薩を讚歎して、「某の方、某の國、某甲菩薩は、大乗に乗じて成佛し、法輪を輪じたまふ」と。是の如きの相を名けて、大乗に乗すと爲す。復次に大乘を畢竟清淨の六波羅蜜と名く。菩薩摩訶薩は大乗に乗する時、五神通を以て自ら莊嚴す。菩薩は是乘の中に住し、一時に身を變ずること無數にして、十方世界に到り、諸佛を供養し、衆生を度脱す。是菩薩は、常に諸佛を離れず、乃至佛道を得るも、常に此大乘に乗す。』

大智度論卷第十七

爾時、須菩提、佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩の大莊嚴は、何等か是れ大莊嚴にして、何等の菩薩か能く大莊嚴するや。』佛、須菩提に語りたまはく、『菩薩摩訶薩の摩訶衍の大莊嚴は、謂ゆる檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜の莊嚴なり。四念處の莊嚴、乃至八聖道分、乃至空莊嚴なり。乃至無法有法空、十力なり。乃至十八不共法、及び一切種智の莊嚴なり。身を變ずること佛の莊嚴の如く、光明遍く三千大千世界を照し、亦東方如恆河沙等の世界を照す。南西北方四維上下も亦復是の如し。三千大千世界六種に振動し、亦東方如恆河沙等の諸の世界を動す。南西北方、四維上下も亦復是の如し。是菩薩摩訶薩は、檀

波羅蜜、摩訶衍の大莊嚴に住し、是三千大千世界を變じて琉璃と爲し、化して轉輪聖王と
 作り、衆生の欲する所に隨つて、食を須てば食を與へ、飲を須てば飲を與へ、衣服、臥具、
 華香、瓔珞、搗香、澤香、房舍、燈燭、醫藥の種種の須ふる所、盡く之に給與し、與へ
 已りて爲に法を説き、謂ゆる六波羅蜜の法に應ず。衆生にして是法を聞く者、終に六波羅
 蜜を離れず、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至る。是の如く須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍
 大莊嚴と名く。須菩提、譬へば、工幻師、若は幻師の弟子の、四衢道中に於て大衆を化作
 し、前に於て食を須てば食を與へ、飲を須てば飲を與へ、乃至種種の須つ所、盡く之に
 給與するが如し。須菩提、意に於て云何。是幻師には實に衆生有りて、給與するもの有る
 や否や。須菩提言さく、不、世尊。須菩提、菩薩摩訶薩も亦是の如し、化して轉輪聖王
 と作り、種種具足し、食を須てば食を與へ、飲を須てば飲を與へ、乃至種種の須ふる所、
 盡く之に給與し、施す所有りと雖も、實に與ふる所無し。何を以ての故に、須菩提、諸
 法の相は幻の如くなるが故なり。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は、尸羅波羅蜜に住し、現
 に轉輪聖王の家に生じ、十善道を以て衆生を教化し、又四禪、四無量心、四無色定、四念
 處、乃至十八不共法を以て衆生を教化す。是法を聞く者は阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、
 終に是法を離れず。譬へば、幻師、若は幻師の弟子の、四衢道中に於て大衆を化作し、十
 善道を以て教化して行ぜしめ、又四禪、四無量心、四無色定、四念處、乃至十八不共法を
 以て、教化して行ぜしむるが如し。須菩提、汝が意に於て云何。是幻師は、實に衆生有り

て教化し、十善道、乃至十八不共法を行ぜしむるや否や。『須菩提言さく、『不、世尊。』須菩提、菩薩摩訶薩も亦是の如し。十善道を以て衆生を教化して行ぜしめ、乃ち十八不共法に至るも、實には衆生の、十善道、乃至十八不共法を行する無し。何を以ての故に、諸法の相は、幻の如くなるが故なり。須菩提、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は屬提波羅蜜に住し、衆生を教化して忍辱ならしむ。須菩提、云何が菩薩摩訶薩は、屬提波羅蜜に住して衆生を教化し、忍辱波羅蜜の中に著せん。須菩提、菩薩摩訶薩は初發意より已來、是の如く大莊嚴あり。若し一切衆生、來りて罵詈し、刀杖もて傷害するも、菩薩摩訶薩、此中にて一心をも起さず。亦一切衆生を教へて此忍辱を行はしむ。譬へば、幻師、若し幻師の弟子の四衢道の中に於て、化して大衆と作り忍辱を行ぜしむるが如し。餘は上説の如し。須菩提、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜に住し、一切衆生を教化して毘梨耶波羅蜜を行ぜしむ。須菩提、云何が菩薩摩訶薩、毘梨耶波羅蜜に住し、一切衆生に教へて毘梨耶波羅蜜を行ぜしむる。須菩提、菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心もて身心精進にして衆生を教化す。譬へば幻師若しは幻師の弟子の四衢道の中に於て化して大衆と作り、教へて身心精進を行ぜしむるが如し。餘は上説の如し。是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。

復次に須菩提、菩薩摩訶薩、禪波羅蜜に住し、一切衆生を教へて禪波羅蜜を行ぜしむ。須菩提、云何が菩薩摩訶薩、禪波羅蜜に住し、一切衆生を教へて禪波羅蜜を行ぜしむる。

須菩提、菩薩摩訶薩、淨法の尊の中に住して、法の若し願若し定を見ず。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、檀波羅蜜に住し、一切衆生を教へて檀波羅蜜を行せしめ、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に檀波羅蜜を離れず。譬へば、幻師、若し幻師の弟子の、四衢道の中に於て化して大衆を作り、教へて檀波羅蜜を行せしむるが如し。餘は上説の如し。須菩提、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜に住し、一切衆生を教へて般若波羅蜜を行せしむ。須菩提、云何が菩薩摩訶薩、般若波羅蜜に住し、一切衆生を教へて般若波羅蜜を行せしむる。須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行する時、法の此岸、彼岸を得る有る無し。是の如く菩薩摩訶薩、般若波羅蜜の中に住し、一切衆生を教へて般若波羅蜜を行せしむ。譬へば幻師若し幻師の弟子の、四衢道の中に於て化して大衆を作り、教へて般若波羅蜜を行せしむるが如し。須菩提、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の大莊嚴は、十方如恆河沙等の世界の中に、其應する所に隨つて自ら其身を變じ、檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜に住し、亦衆生を教へて、檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜を行せしむ。是衆生は是法を行ひ、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に是法を離れず。須菩提、譬へば、幻師若し幻師の弟子の、四衢道の中に於て化して衆生を作り、教へて六波羅蜜を行せしむるが如し。餘は上説の如し。是の如く須菩提、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の大莊嚴は、薩婆者に應ずる心にて、是念を生ぜず、「我若干人を教へて、檀波羅蜜に住せしめ、若干人を教へて、檀波羅蜜

に住せしめず。乃至、般若波羅蜜も、亦是の如し」と。是念を生ぜず、「我若千人を教へて四念處に住せしめ、若千人を教へて四念處に住せしめず」と。乃至十八不共法も亦是の如し。亦是念を生ぜず、「我若千人を教へて、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、一切種智を得しめ、亦若千人を教へて須陀洹果、乃至一切種智を得しめず。我當に無量無邊阿僧祇の衆生をして、檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜に住せしめ、衆生を四念處、乃至十八不共法に立たしめ、無量無邊阿僧祇の衆生をして、須陀洹乃至一切種智を得しむべし」と。譬へば幻師若し幻師の弟子の、四衢道の中に於て化して大衆と作り、教へて六波羅蜜に住し、乃至一切種智を得しむるが如し。餘は上説の如し。須菩提、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴と名く。」

【二】以下本品に須菩提が大莊嚴に就いて佛の法を求めしを以て、佛爲に菩薩の大莊嚴を説けるを明す。今先づ六度等大莊嚴といふを釋す。

釋して曰はく、「上に富樓那は、大莊嚴、及び大誓、莊嚴の相を發するを説く。今須菩提是念を作さく、「富樓那未だ一切智を得ず。今、大莊嚴を説くと雖も、或は當に錯有るべし」と。是故に佛に問ひて定を取れり。佛、須菩提の爲に檀波羅蜜の大莊嚴、乃至一切智を説きたまへり。是諸の善法の果報の故に、菩薩の大神通力を得、出家好道の衆生の爲の故に、化して佛神と作り、大光明を放ちて十方世界を照し、大地を震動し、衆生をして發心して善法を行せしめ、其應する所に隨つて、爲に法を説いて、三乗を得しめ、在家好樂の衆生の爲に、轉輪聖王と作り、三千世界に變じて、悉く琉璃と物し、障礙せざるが爲の故に、七寶の車に乗り、身より光明を放ちて、諸の寶物を雨らし、衆生の須ふる所

に隨つて、皆充足せしめ、然る後、爲に菩薩の法を説く。菩薩は上乘の中に住して、二施を以て衆生を利益す。謂ゆる財施と法施なり。衆生は聞き已りて、六波羅蜜、乃至十八不共法を行じ、阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に是法を離れず。菩薩は是變化の中に住すと雖も、亦諸法の中に於て、著相を生ぜず。亦自ら高からず」と。須菩提、是念を作さく、「菩薩能く是の如き大事を作す。又諸漏未だ盡きざるが故に、云何が諸法に於て著せず、亦高心を生ぜざるを得んや」と。是中に、佛自ら譬喩を説きたまはく、「若し幻師の四衢道の中に於て種種の物を化作し、人の須ふる所に隨うて、悉く能く之を與へんに、須菩提、意に於て云何。是幻師は實に與ふる所有りや不や。受くる者有り、用ふる者有りや不や」須菩提言さく、「時れ俱虚誑にして、實に有る所無し」と。佛言はく、「菩薩も亦是の如し、佛身、轉輪聖王と作り、財と法とを以て衆生に施すと雖も、亦幻師の實に與ふる所無きが如し。何を以ての故に。諸法の相は畢竟空にして、幻の如くなればなり」と。餘の五波羅蜜も亦是の如し、義に隨うて分別す。

復次に檀波羅蜜、尸羅波羅蜜の因縁の故に、人中の富貴轉輪聖王と作り、餘の波羅蜜は、或は梵王と作り、或は法身の菩薩と作る。一問うて曰はく、「六波羅蜜の外、更に何の法有りてか莊嚴す可き」答へて曰はく、「諸の功德は皆六波羅蜜の中に攝す。有人言はく、「別に智波羅蜜及び方便等有り」と。十方如恆河沙等の世界の中に於て度すべき所に隨つて、種種の因縁を作し、法を説いて衆生をして六波羅蜜に住せしむ。」復次に決定誓願を名けて、

大莊嚴と爲す。謂ゆる菩薩は是念を作さず、「我は若干人を度して檀波羅蜜に住せしめ、餘人を度する能はず」と。乃至十八不共法も亦是の如し。亦是念を作さず、「我は若干人をして、須陀洹果を得しめ、若干人をして、須陀洹果を得しむる能はず」と。乃至佛道も亦是の如し、「我當に悉く無量阿僧祇の衆生をして諸の功德の中に住し、檀波羅蜜、乃至一切種智自ら立たしむべし」と。幻師の如しとは、先に説くが如し。是を大莊嚴を發すと名く。

爾時、須菩提、佛に白して言さく、「我佛に聞く所の義の如くんば、菩薩摩訶薩は大莊嚴無きを大莊嚴と爲す。諸法の自相は空なるが故に。謂ゆる色と色相は空なり。受想行識と識相は空なり。眼と眼相は空なり、乃至意識と意相は空なり。色と色相は空なり、乃至法と法相は空なり。眼識と眼識相は空なり。乃至意識と意識相は空なり。眼觸と眼觸相は空なり、乃至意觸と意觸相は空なり。眼觸因縁生の受と、受相は空なり。世尊、檀波羅蜜と檀波羅蜜の相は空なり。乃至般若波羅蜜と般若波羅蜜の相は空なり。内空と内空の相は空なり。乃至無法有法空と無法有法空の相は空なり。四念處と四念處の相は空なり。乃至十八不共法と十八不共法の相は空なり。菩薩の相は空なり。世尊、是因縁を以ての故に、當に知るべし、菩薩摩訶薩、大莊嚴無きを大莊嚴と爲す。』佛、須菩提に告げたまはく、「是の如く是の如し。汝が説く所の如し。須菩提、薩婆若は作法に非ず、衆生も亦作法に非ず。菩薩は、是衆生の爲に大莊嚴す。』須菩

提、佛に白して言さく、『世尊、何の因縁の故に、薩婆若は作法に非ず、是衆生も亦作法に非ずして、菩薩は是衆生の爲に大莊嚴する。』佛、須菩提に語りたまはく、『作者は不可得の故に、薩婆若は作に非ず、起法に非ず。是諸の衆生も亦作に非ず、起法に非ず。何を以ての故に。須菩提、色は作に非ず、不作に非ず。受想行識も作に非ず、不作に非ず。眼は作に非ず、不作に非ず。乃至意は作に非ず、不作に非ず。色乃至法、眼識乃至意識、眼觸乃至意觸、眼觸因縁生の受乃至意觸因縁生の受は作に非ず、不作に非ず。須菩提、我は作に非ず、不作に非ず。乃至知者、見者は、作に非ず、不作に非ず。何を以ての故に。是諸法は、畢竟不可得なるが故に。須菩提、夢は作に非ず、不作に非ず。何を以ての故に。畢竟不可得の故に。幻、響、影、焰、化は作に非ず、不作に非ず。何を以ての故に。畢竟不可得なるが故に。須菩提、内空は作に非ず、不作に非ず。畢竟不可得なるが故に。乃至無法空は、作に非ず、不作に非ず。畢竟不可得なるが故に。須菩提、四念處は作に非ず、不作に非ず、畢竟不可得なるが故に。乃至十八不共法は、作に非ず、不作に非ず。何を以ての故に。是法は皆畢竟不可得なるが故に。須菩提、諸法の如、法體、法性、法住、法位、實際は、作に非ず、不作に非ず。畢竟不可得なるが故に。須菩提、菩提は作に非ず、不作に非ず。畢竟不可得なるが故に。薩婆若及び一切種智は、作に非ず、不作に非ず。畢竟不可得なるが故に。是因縁を以ての故に、須菩提、薩婆若は作に非ず、起法に非ず。是衆生も亦作に非ず、起法に非ず。菩薩、是衆生の爲に、大莊嚴するなり。爾時、須菩提、佛に

白して言さく、我佛の所説の義を觀するが如くば、世尊、色は縛無く、脱無し。受想行識も縛無く脱無し。爾時、富樓那彌多羅尼子、須菩提に語らく、「色は是れ縛無く脱無く、受想行識も是れ縛無く脱無し。』須菩提言はく、「是の如く是の如し。色は是れ縛無く脱無し。受想行識も是れ縛無く脱無し。』富樓那彌多羅尼子、須菩提に問はく、「何等の色か縛無く脱無き。何等の受想行識か縛無く脱無き。』須菩提言はく、「夢の如き色は、縛無く脱無し。夢の如き受想行識は、縛無く脱無し。響の如く影の如く、幻の如く焰の如く、化の如き色は縛無く脱無し。未來の色は縛無く脱無し。過去の色は縛無く脱無し。現在の色は縛無く脱無し。現在の受想行識は縛無く脱無し。何を以ての故に縛無く脱無き。是色は所有無きが故に、縛無く脱無し。受想行識は、所有無きが故に、縛無く脱無し。離の故に、寂滅の故に、不生の故に、縛無く脱無し。富樓那、善の色受想行識も縛無く脱無し。不善の色受想行識も縛無く脱無し。無記の色も縛無く脱無し。無記の受想行識も縛無く脱無し。世間、出世間、有漏、無漏の色も縛無く脱無し。受想行識も亦縛無く脱無し。何を以ての故に、所有無きが故に、離の故に、寂滅の故に、不生の故に、縛無く脱無し。富樓那、一切の法も亦縛無く脱無し。所有無きが故に、離の故に、寂滅の故に、不生の故に、富樓那、檀波羅蜜は、縛無く、脱無し。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜は縛無く脱無し。所有無きが故に、離の故に、寂滅の故に、不生の故に、縛無く脱

無し、富樓那、内空も亦縛無く、脱無し。乃至無法有法空も、亦縛無く脱無し。四念處は縛無く脱無し。乃至十八不共法も縛無く脱無し。所有無きが故に、離の故に、寂滅の故に、不生の故に、縛無く脱無し。阿耨多羅三藐三菩提は、縛無く脱無し。一切智一切種智も、縛無く脱無し。菩薩も縛無く脱無し。佛も亦縛無く脱無し。所有無きが故に、離の故に、寂滅の故に、不生の故に、縛無く脱無し。富樓那、諸法の如、法相、法性、法住、法位、實際、無爲法は、縛無く脱無し。所有無きが故に、離の故に、寂滅の故に、不生の故に、縛無く脱無し。富樓那、是を菩薩摩訶薩の無縛無脱と名け、檀波羅蜜乃至般若波羅蜜、四念處、乃至一切種智は、縛無く脱無し。是菩薩摩訶薩、無縛無脱の檀波羅蜜中に住し、乃至無縛無脱の般若波羅蜜に住し、無縛無脱の四念處に住し、乃至無縛無脱の一切種智に住し、無縛無脱にして衆生を成就し、無縛無脱にして佛世界を淨め、無縛無脱にして諸佛を供養すべく、無縛無脱にして當に法を聽くべく、無縛無脱にして諸佛終に離れず。無縛無脱にして諸神通終に離れず。無縛無脱にして五眼終に離れず。無縛無脱にして陀羅尼門終に離れず。無縛無脱にして諸三昧終に離れず。無縛無脱にして當に道種智を生ずべく、無縛無脱にして當に一切種智を得べく、無縛無脱にして法輪を轉じ、無縛無脱にして衆生、三乘に安立す。是の如く富樓那、菩薩摩訶薩は無縛無脱の六波羅蜜を行す。當に知るべし、一切法は縛無く脱無し。所有無きが故に、離の故に、寂滅の故に、不生の故に、富樓那、是を菩薩摩訶薩の無縛無脱の大莊嚴と名く。』

【三】次に大莊嚴なきこと、不縛不離なりといふを釋す。

釋して曰はく、『須菩提、言はく、「我佛に聞ける義の如くば、大莊嚴無きを大莊嚴と爲す。何を以ての故に。」と。』問うて曰はく、『須菩提は何を以てか是の如く説く。』答へて曰はく、『佛、「大莊嚴を發するの義は甚深にして、得難く解し難し」と説きたまへり。會中の衆生、是事を聞いて心或は退没す。是の如き莊嚴は畢竟空にして、亦神通力を以ての故に、一時に能く遍く、十方如恆河沙世界に至る。可適の衆生は、「此は是れ聖王の事なり。我等云何が能く知らん」と言ふ。是を以ての故に、須菩提説く、「大莊嚴を發するは、深きに非ず、難きに非ず、但大莊嚴の自相は空にして、行じ易く、得易きを發するに非ず。色と色中の定相は不可得なり、乃至十八不共法も亦爾なり。若し菩薩、能く是の如く、諸法の空、寂滅の相を知りて、本願を捨てず精進す。是故に大莊嚴を發すと名く。是れ得難きに非ず」と。佛、須菩提の所説を説するが故に、「是の如し」と。作法は皆是れ虚誑なるが故に、薩婆若は作法無しと言ふ。衆生も畢竟空なるが故に、亦作法無し。佛説きたまはく、「作者、不可得なるが故に一切智は作相に非ず。衆生、不可得なるが故に、作者は不可得なり。作者、不可得なるが故に、薩婆若は作に非ず、起相に非ず」と。復次に色も亦能く作る所無し、法は空なるが故に。乃至諸佛の法も亦是の如し。須菩提等謂はく、「諸法の中に定まれる作相有る無し。幻の如くにして實事無しと雖も、而も來去の相有り」と。是を以ての故に、佛、「幻の如く、焰等の如く、作相無し、畢竟不可得なるが故に」と説きたまふ。是時、聽者、是念を作さく、「十八空は能く一切法を破す。

則ち是れ用有り。是れ則ち實と爲す」と。謂ひて「作有り」と言ふ。是を以て佛言はく、「内
容は所作無し。乃ち無法有法空より、十八不共法に至るも亦所作無し」と。若し謂はく、
「今十八空は有爲、虚誑、無實なるが故に、作無かるべきも、如、法性、實際は、是れ眞實
の法にして、應當に作有るべし。何を以ての故に。一切の有爲法は、各各共に無爲法に因
り、亦有爲の與に因と作るが故に」と。佛言はく、「如、法性、實際、法住、法位も、亦無作な
り」と。又謂はく、「菩薩と佛と一切種智とは、是れ實法にして能く所作有り」と。是を以て
の故に佛言はく、「是法も亦畢竟空なるが故に、亦所作無し。作相は因縁生なるが故に
と。行者念じて言はく、「佛法は甚だ難く、甚だ希有なりと爲す。諸法は都て作無く縛無く、
解無き者なり。我等云何が當に苦より脱するを得べき」と。是故に須菩提、佛に白して言
さく、「我佛の所説の義を知るが如くば、五業は、縛無く、解無し。若し畢竟空にして、作
者有る無くんば、誰か縛し、誰か解せん。凡夫の人の法は、虚誑にして不可得なるが故に、
縛に非ず。聖人の法は、畢竟空にして、不可得なるが故に、解に非ず。夢等の如き五業及
び三世の五業、善、不善等の五業、一切法も亦是の如し。乃至實際等も、亦復是の如し。
所有無きが故に、聲の故に、不生の故に、縛無く、解無し。是を菩薩摩訶薩の不縛不解と
名く。菩薩の道は、是道中に住し、諸の煩惱に牽かれて、凡夫の中に墮せざるが故に不
縛と言ひ、諸の無漏法を以て煩惱を破せざるが故に不解と言ふ。衆生を教化し佛世界を
淨め、乃至五神通、五眼、諸陀羅尼、三昧門は、終に佛を離れず。及び衆生を三乘に安立

するも、亦縛無く、解無し。所以は何ん。諸法は所有無きが故に、離の故に、寂滅の故に、不生の故に、畢竟空なるが故に。是の如き等の因縁、是を菩薩摩訶薩の大莊嚴相を發すと名く。謂ゆる不縛不解なり。

大智度論釋摩訶衍品第十八

爾時、須菩提、佛に白して言さく、「世尊、何等か是れ菩薩摩訶薩の摩訶衍なる。云何が當に菩薩摩訶薩の、大乘に發趣するを知るべき。是乘は何の處にか發し、是乘は何の處にか至り、當に何の處にか住すべき。誰か是乘に乗じて出づべき者ぞ。」と。佛、須菩提に告げたまはく、「汝、何等か是れ菩薩摩訶薩の摩訶衍なる」と問ふ。須菩提、六波羅蜜は、是れ菩薩摩訶薩の摩訶衍なり。何等か六なる、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜なり。云何が檀波羅蜜と名く。須菩提、菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心を以て、内外の所有を、共に一切衆生に布施し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。無所得を用ての故に。須菩提、是を菩薩摩訶薩の檀波羅蜜と名く。云何が尸羅波羅蜜と名くる。須菩提、菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心を以て、自ら十善道を行ひ、亦他をして十善道を行はしむ。無所得を用ての故に。是を菩薩摩訶薩の尸羅波羅蜜と名く。云何が羼提波羅蜜と名くる。須菩提、菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心を以て、自ら忍辱を

具足し、亦他をして忍辱を行はしむ。無所得を用ての故に。是を菩薩摩訶薩の辱提波羅蜜と名く。云何が毘梨耶波羅蜜と名くる。須菩提、菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心を以て五波羅蜜を行ひ、勤修して息まず。亦一切衆生を五波羅蜜に安立す。無所得を用ての故に。是を菩薩摩訶薩の毘梨耶波羅蜜と名く。云何が禪波羅蜜と名くる。須菩提、菩薩摩訶薩は、薩婆若に應ずる心を以て、自ら方便を以て諸禪に入り、禪に隨つて生ぜず、亦他を教へて諸禪に入らしむ。無所得を用ての故に。是を菩薩摩訶薩の禪波羅蜜と名く。云何が般若波羅蜜と名くる。須菩提、菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心を以て、一切の法に著せず、亦一切の法性を觀ず。無所得を用ての故に。亦他をして、一切の法に著せず、亦一切の法性を觀ず。無所得を用ての故に。是を菩薩摩訶薩の般若波羅蜜と名く。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶行と爲す。復次に須菩提、菩薩摩訶薩に、復摩訶行有り、謂ゆる内空、外空、内外空、空空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、散空、性空、自相空、諸法空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空なり。一須菩提、佛に白して言はく、一何等をか内空と爲す。一佛言はく、一内空は、眼、耳、鼻、舌、身、意に名く、眼の眼とするは空なり。常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。耳の耳とするは空なり。鼻の鼻とするは空なり。舌の舌とするは空なり。身の身とするは空なり。意の意とするは空なり。常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。是を内空と名く。何等をか外空と爲す。外法空は、色、聲、香、

味、觸、法に名く。色の色とするは空なり。常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。聲の聲とするは空なり。香の香とするは空なり。味の味とするは空なり。觸の觸とするは空なり。沙の法とするは空なり。常に非ず滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。是を外空と名く。何等をか内外空と名くる。内外法は内の六入、外の六入に名く。内法の内法とするは空なり。常に非ず滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。外法の外法とするは空なり。常に非ず滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。是を内外空と名く。何等をか空空と爲す。一切法は空にして、是空も亦空なり。常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。是を空空と名く。何等をか大空と爲すや。東方の東方とするは空なり。常に非ず滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。南西北方四維上下の南西北方四維上下とするは空なり。常に非ず滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。是を大空と名く。何等をか第一義空と爲す。第一義とは涅槃に名く。涅槃の涅槃とするは空なり。常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。是を第一義空と名く。何等をか有爲空と爲す。有爲法とは、欲界、色界、無色界に名く。欲界の欲界とするは空なり。色界の色界とするは空なり。無色界の無色界とするは空なり。常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。是を有爲空と名く。何等をか無爲空と爲す。

無爲空とは、名けて無生相、無住相、無滅相と爲す。無爲法の無爲法とするは、空なり。
 常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。是を無爲空
 と名く。何等をか畢竟空と爲す。畢竟とは、諸法の至竟不可得なるに名く。常に非ず滅に
 非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。是を畢竟空と名く。何等を
 か無始空と爲す。若し法の初の來處は不可得なり。常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以
 ての故に。性として自ら爾ればなり。是を無始空と爲す。何等をか散空と爲す。散とは
 諸法の無滅に名く。常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾れ
 ばなり。是を散空と爲す。何等をか性空と爲す。一切の法性、若は有爲法性、若は無爲法
 性、是性は聲聞辟支佛の所作に非ず、佛の所作に非ず、亦餘人の所作にも非ず。是性の
 性とするは、空なり。常に非ず、滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾
 ればなり。是を性空と名く。何等をか自相空と爲す。自相とは色の境相、受の受相、想の
 取相、行の作相、識の識相に名く。是の如き等の有爲の法、無爲の法は、各各自相空なり。
 常に非ず滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。是を自相空と
 名く。何等をか諸法空と爲す。諸法は色受想行識、眼耳鼻舌身意、色聲香味觸法、眼界色
 界眼識界、乃至意界法界意識界に名く。是諸法の諸法たるは空なり。常に非ず滅に非ざる
 が故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。是を諸法空と爲す。何等をか不
 可得空と爲す。諸法を求むるに不可得なり。是不可得は空なり。常に非ず滅に非ざるが故

に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。是を不可得空と名く。何等をか無法空と爲す。若し法の無なる、是れ亦空なり。常に非ず滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。是を無法空と名く。何等をか有法空と爲す。有法とは、諸法の和合中、自らの性相有るに名く。是有法は空なり。常に非ず滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。是を有法空と名く。何等をか無法有法空と爲す。諸法の中法無きと、諸法和合の中自らの性相有ると、是無法有法は空なり。常に非ず滅に非ざるが故に。何を以ての故に。性として自ら爾ればなり。是を無法有法空と名く。復次に須菩提、法の法相とするは空なり。無法の無法相とするは空なり。自法の自法相とするは空なり。他法の他法相とするは空なり。何等をか法の法相とするは空なりと名くる。法とは五衆に名く。五衆は空なり。是を法相空と名く。何等をか無法の無法相とするは空なりと名くる。無法は無爲法に名く。是を無法の無法相とするは空なりと名く。何等をか自法の自法とするは空なりと名くる。諸法は自法空なり。是空は智の作に非ず、見の作に非ず。是を自法の自法とするは空なりと名く。何等をか他法の他法とするは空なりと名くる。若は佛出でたまふも、若は佛出でたまはざるも、法住、法相、法位、法性、如、實際、此を過ぐる諸法は空なり。是を他法の他法とするは空なりと名く。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。

問うて曰はく、是經を名けて般若波羅蜜と爲す。又佛は須菩提に命じて菩薩の爲に般

【四】本品は大乘の法住法相等を詐と説く、般若即大乘の義を釋するに、先ず大乘即般若を明

若波羅蜜を説かしたまふ。須菩提は應に般若波羅蜜を問ふべく、佛も亦應に般若波羅蜜を答へたまふべし。今須菩提、何を以てか乃ち摩訶衍を問ひ、佛も亦摩訶衍を答へたまへる。』答へて曰はく、『般若波羅蜜は摩訶衍の一義にして、但名字異なるのみ。若し般若波羅蜜を説くに、摩訶衍を説くも咎無し。摩訶衍とは佛道に名く。是法を行すれば、佛に至るを得。謂ゆる六波羅蜜なり。六波羅蜜中、第一に大なるは般若波羅蜜なり。後品に、佛、種種に大因縁を説きたまふが如し。若し般若波羅蜜を説けば、則ち六波羅蜜を攝す。若し六波羅蜜を説けば、則ち具に菩薩道を説く。謂ゆる初發意より乃ち佛を得るに至る。譬へば、王來れば必ず營從有り。從者を説かずと雖も、當に必ず有るを知るべきが如し。摩訶衍も亦是の如し。菩薩の初發意の所行は、佛道を求めんが爲の故なり。修集する所の善法は、隨ちて衆生を度すべし。説く所の種種の法とは、謂ゆる木起經、斷一切衆生疑經、華手經、法華經、雲經、大雲經、法雲經、彌勒問經、六波羅蜜經、摩訶般若波羅蜜經なり。是の如き等の無量無邊阿僧祇の經は、或は佛の説、或は化佛の説、或は大菩薩の説、或は聲聞の説、或は諸の得道の天の説なり。是事の和合するを、皆摩訶衍と名く。此諸經の中にて、般若波羅蜜、最も大なるが故に摩訶衍と説き、即ち知り已りて般若波羅蜜を説く。諸餘の助道法は、般若波羅蜜と和合する無ければ、則ち佛に至る能はず。是を以ての故に、一切の助道法は皆是れ般若波羅蜜なり。後品の中に、佛、須菩提に、『汝が説く摩訶衍は、般若波羅蜜と異らず』と語りたまふが如し。』問うて曰はく、『若し爾らば、初に何を以てか先づ摩

訶衍を説かざる。答へて曰はく、「我上に般若波羅蜜を説くは、最大なるが故に、應に先づ説くべし。又佛は意に摩訶般若波羅蜜を説かんと欲して、大光明を放ちたまふに、十方の諸の菩薩は、各自ら佛に、「今何を以てか光明有ること問へり。諸佛は各答へて言はく、「娑婆世界に佛有り、釋迦牟尼と名く。般若波羅蜜を説かんと欲す」と。彼諸の菩薩、及び諸の天人は和合して來る。舍利弗、佛に問はく、「世尊、云何が菩薩摩訶薩は、一切法を知らんと欲して、般若波羅蜜を習行する」と。又佛は初品の中に、種種に般若波羅蜜の功徳を讚じて、「若し是を得んと欲する者は、當に般若波羅蜜を習行すべし」と。是の如き等の因縁有るが故に、佛に始に般若波羅蜜を説くべし。佛、須菩提に命じたまはく、「汝は、諸の菩薩の爲に、般若波羅蜜を説け」と。須菩提は謙して言さく、「菩薩は空にして、但名のみ有り」と。後に言さく、「能く是の如く解了して菩薩の相を知れば、即ち是れ般若波羅蜜を行するなり」と。既に是を知り已りて、菩薩の句義を問ひ、次に摩訶薩の義有り。摩訶薩の義中に大莊嚴の摩訶衍有り。勇夫の種種の器械の莊嚴有りと雖も、駛馬に乗らずんば、則ち能く爲す無きが如し。是大乗は、天竺の語に摩訶衍と名く。諸佛は法愛を斷するが故に、又般若波羅蜜の義を問すに、異なる無きが故に、佛は訶したまはず。是を以ての故に、須菩提、更に異名を作りて、摩訶衍を問へり。」

(五七) 問うて曰はく、「摩訶衍の序中に説くが如くは、初發心より乃ち佛道に至るまで、佛道の爲の故に、一切の善法を集むるを、皆摩訶衍と名く。今何を以てか但六波羅蜜を説いて摩

【五】次に六波羅蜜を明

阿衍と爲す。答へて曰はく、「先に説くが如し。般若波羅蜜は、則ち六波羅蜜を説く。六波羅蜜を説けば、則ち一切の善法を攝す。是を以ての故に、應に是問を作すべからず。諸の善法は多し。何を以てか但六波羅蜜を説かんや。復次に摩訶衍、初發心に願を作すより、乃ち後の方便等の六波羅蜜に至るまでなり。是諸法は名けて波羅蜜と爲さずと雖も、然も義は皆六波羅蜜中に在り。如し初發心に願を作すは、大悲等の心力大なるが故に、毘梨耶波羅蜜と名け、小利を捨て大乘を取るを、般若波羅蜜と名く。方便は即ち是れ智慧なり。智慧は淳淨なるが故に、變じて方便と名く。衆生を教化し、佛世界を淨むる等は、皆六波羅蜜の中に在り。義に隨うて相攝するのみ。」問うて曰はく、「若し爾らば、後に何を以てか更に十八空、百八三昧等を説いて、摩訶衍と名くる。」答へて曰はく、「六波羅蜜は是れ摩訶衍の體なり。但後に廣く其義を分別す。十八空、四十二字等の如きは、是れ般若波羅蜜の義なり。百八三昧等は是れ禪波羅蜜の義なり。是を以ての故に初に六波羅蜜を説く。問うて曰はく、「何を以ての故に、正しく六波羅蜜を説けば多からず少からざる。」答へて曰はく、「佛を法王と爲す。衆生の度すべきに隨うて、或時は略して一三三四と説き、或時は廣く説きたまふ。寶助經の八萬四千の波羅蜜の如し。復次に六道の衆生、皆身心の苦惱を受く。地獄の衆生の如きは拷掠の苦あり、畜生の中には相殘害するの苦あり、餓鬼の中には飢餓の苦あり、人中には欲を求むるの苦あり。天上には所愛の欲を離るる時の苦あり。阿修羅道には鬪諍の苦あり。菩薩は大悲心を生じ、六道の衆生の苦を滅せんと欲するが故に、

六波羅蜜を生ず。是を以ての故に六波羅蜜を説けば、多からず少からざるなり。問うて曰はく、『檀波羅蜜に種種の相有り。此中に佛は何を以てか但五相を説きたまへる。謂ゆる薩婆若に相應する心を用て、内外の物を捨てて是福を一切衆生と共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。無所得なるを用ての故に。何を以てか大悲心、諸佛を供養すること、及び神通、布施等を説かざる。』答へて曰はく、『是五種の相の中に一切の布施を攝す。薩婆若に相應する心もて布施すとは、此佛道を緣じ佛道に依るなり。内外を捨つとは、則ち一切の煩惱を捨つるなり。衆生と共にすとは、則ち是れ大悲心なり。廻向すとは、此布施を以て但佛道を求めて餘報を求めざるなり。無所得なるを用ての故にとは、諸法の實相たる般若波羅蜜の氣分を得るが故なり。檀波羅蜜は誑に非ず倒に非ず、亦窮盡無し。』問うて曰はく、『若し爾らば、則ち五種の相を須たすして、但薩婆若相應の心を説けば、則ち足らん。』答へて曰はく、『此事は爾るべし。但衆生、云何が薩婆若に應ずる心の布施の義なるやを知らざるを以ての故に、是故に四事を以て其義を分別す。薩婆若に應ずる心とは、菩薩の心を以て佛の薩婆若を求め、緣と作し念と作し、心を繋けて是布施を持し、薩婆若の果を得んと欲し、今世の因縁、名聞、恩分等を求めず、亦後世の轉輪聖王、天王の富貴の處を求めず。衆生を度せんが爲の故に、涅槃を求めず、但一切智等の諸佛の法を具せんと欲す。一切衆生の苦を盡さんが爲の故なり。是を薩婆若に應ずる心と名く。内外の物とは、内は頭腦、骨髓、血肉等の捨て難きに名くるが故に、初に在りて説く。外物は、國土、妻子、七寶、

飲食等なり。一切衆生と共にとは、是布施の福德の果報を、一切衆生と共に用ふるなり。
 譬へば、大家の穀を種ゑて、人と共に食するが如し。菩薩の福德の果報は、一切衆生、皆
 來りて依附す。譬へば、好果の樹には、衆鳥歸り集るが如し。廻向とは是福德の邊は餘報
 を求めず。但阿耨多羅三藐三菩提を求むるなり。問うて曰はく、「先には薩婆若に應ずる心
 と言ひ、後には廻向と言ふ。何等の異か有る。」答へて曰はく、「薩婆若に應ずる心は、諸
 の福德の因縁を起さんが爲なり。廻向とは、餘報を求めずして、但佛道を求むるなり。復
 次に、薩婆若相應の心は、阿耨多羅三藐三菩提に應ずるが爲の故なり。施は先に義を説く
 が如し。薩婆若を主と爲せば、一切の功德は、皆薩婆若の爲なり。佛を讚するの智慧に二
 種有り。一には無上正智を阿耨多羅三藐三菩提と名く。二には一切種智を薩婆若と名く。
 無所得を用ふとは、般若波羅蜜の心を以て布施し、諸法實相に順じて虚誑ならざるなり。
 是の如き等に檀波羅蜜の義を説く。問うて曰はく、「尸羅波羅蜜は、則ち一切の戒法を總ふ。
 譬へば大海の衆流を總攝するが如し。謂ゆる不飲酒、中食を過さず、杖を衆生に加へざる
 等、是事は十善中に攝せず。何を以てか但十善を説く。」答へて曰はく、「佛は總相に六波羅
 蜜を説きたまふ。十善は總相城と爲す。別相には無量の戒有り。不飲酒と中食を過ごさざ
 るは不食の中に入れ、杖を衆生に加へざる等は、不瞋の中に入れ、餘道は義に隨うて相從
 ふ。戒は身業、口業に名け、七善道の所攝なり。十善道は初後に及ぶ。如し心を發して殺
 さんと欲し、是時方便を作して、惡口し鞭打し、繫縛し斫刺し、乃至死に垂んたらしむる

は、皆初に屬し、死して後、皮を剥ぎ食噉し、割截し歡喜するは皆後と名く。命を奪ふは是れ本體なり。此三事の相合するを、總て殺不善道と名く。是を以ての故に十善道を説けば、則ち一切の戒を攝するを知る。復次に是菩薩、慈悲心を生じて阿耨多羅三藐三菩提を發し、布施して衆生を利益し、其須ふる所に隨うて、皆之を給與す。持戒して衆生を惱さず、諸苦を加へず、常に無畏を施すは、十善道を根本と爲す。餘は是れ衆生を惱まさざるの遠因縁なり。戒律は今世に涅槃を取るが爲の故なり。婬欲は衆生を惱さずと雖も、心繫縛するが故に、大罪と爲す。是を以ての故に、是戒律中には、婬欲を初と爲す。白衣には、不殺戒、前に在り、福德を求むるが爲の故なり。菩薩は今世の涅槃を求めず、無量世中に於て生死に往返し、諸の功德を修し、十善道を舊戒と爲し、餘の律儀を客と爲す。復次に若し佛、好世に出でたまへば、則ち此戒律無し。釋迦文佛の如きは、惡世に在すと雖も、十二年の中は亦此戒無し。是を以ての故に、是れ客となるを知る。復次に二種の戒有り、有佛の時は、或は有り或は無し。十善は佛有るも佛無きも、常に有り。復次に戒律中の戒は復細微なりと雖も、攝すれば則ち清淨なり。十善戒を犯せば復懺悔すと雖も、三惡道の罪を除かれず。比丘、畜生を殺せば復悔するを得と雖も、罪報猶除かざるが如し。是の如き等の種種の因縁の故に但十善業道を説く。亦自ら行ひ、亦他に教ふるを名けて、尸羅波羅蜜と爲す。十善道は、七事は是れ戒、三は守護と爲すが故に、通じて名けて尸羅波羅蜜と爲す。餘は波羅蜜も、亦是の如し、義に隨うて分別す。初品の中に六波羅蜜の論議を

廣説するが如し。是經を般若波羅蜜と名く。般若波羅蜜は、捨離相と名く。是を以ての故に。一切法中、皆無所得を用ふるが故に。

問うて曰はく、『若し有所得を用て、諸の善法を集むるすら、猶尙難しと爲す。何に況んや無所得を用てするをや。』答へて曰はく、『若しは無所得の智慧を得れば、是時、能く善行を妨げ、或は邪疑を生ず。若しは無所得の智慧を得ざれば、是時、妨ぐる所無く、亦邪疑を生ぜず。佛も亦心に著して相を取り、諸の善道を行するを稱したまはず。何を以ての故に。虚誑にして世間に住し、終に盡に歸すればなり。若し心に著して善を修すれば、破する者則ち易し。若し空に著して悔を生ずれば、還りて是道を失す。譬へば火を草中に起すに、水を得れば則ち滅し、若し水中に火生ずれば、則ち物能く滅する無きが如し。初めて習行し、心に著して相を取り、菩薩の福徳を修するは、草に生ずる火の滅を得べきこと易きが如く、若し實相を體得せる菩薩の、大悲心を以て、衆行を行するの破り得べきこと難きは、水中に生ずる火の能く滅する者無きが如し。是を以ての故に、無所得の心を用て衆行を行すと雖も、心も亦弱からず、疑悔を生ぜず。是を略して六波羅蜜の義を説くと名く。廣説は初品の中の如し。

一一の波羅蜜に、皆十八空を具足すとは、六波羅蜜の中に般若波羅蜜の義を説き、諸法に著せざるなり。所以は何ん。十八空を以ての故に。十八空の論議は初品の中の如し。佛、舍利弗に告げたまはく、『菩薩摩訶薩、十八空に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべ

【六】次に十八空或は四空即大乘といふを解す。

し。彼義は應に此中に廣説すべし。問うて曰はく、『十八空の、内空等の後に、皆「常に非ず滅に非ざるが故に」と言ふ。此義云何。答へて曰はく、『若し人此空を習はずんば、必ず二邊に墮せん。若は常、若は滅なり。所以は何ん。若し諸法實に有ならば、則ち滅の義無く、常の中に墮せん。人の一舎より出でて一舎に入るは、眼に言すと雖も、名けて無と爲さざるが如し。諸法も亦爾なり。未來世より現在世に入り、現在世より過去世に入る。是の如くなれば則ち滅せず。行者は有を以て患と爲す。空を以て有を破し、心に復空を貴ぶ。空に著する者は則ち斷滅に墮す。是を以ての故に、是空を行じて以て有を破し、亦空に著せず。是二邊を離れ以て中道を行す。是十八空は、大悲心を以て衆生を度せんが爲なり。是故に十八空の後に、皆「常に非ず滅に非ず」と言へり。是を摩訶衍と名く。若し此に異なる者は、則ち是れ戲論狂人なり。佛法の中に於ては空にして所得無し。人の珍寶の聚中に於て水精の珠を取り、眼に見て好しと雖も、價直する所無きが如し。問うて曰はく、『若し十八空、已に諸空を攝せば、何を以てか更に四空を説く。答へて曰はく、『十八空の中に現空盡く攝す。諸佛に二種の説法有り。或は何に略して後に廣く、或は初に廣くして後に略す。初に略にして後に廣きは、義を解せんが爲の故なり。初に廣くして後に略するは、持し易きが爲の故なり。或は後會の衆生の爲に、略して其要を説き、或は偈頌を以てす。今佛は前に廣く十八空を説き、後に略して四空の相を説きたまふ。法の法相たるは空なりとは、一切法の中に法相は不可得なり、色の中に色相の不可得なるが如し。復次に法中に

法を生ぜざるが故に、名けて法の法たるは空なりと爲す。無法の無法たるは空なりとは、無爲法を無法と名く。何を以ての故に。相は不可得なるが故に。二問うて曰はく、「佛三相を以て無爲法を説きたまふ。云何が無相と言ふ。」答へて曰はく、「然らず。生を破するが故に無生と言ひ、住を破するが故に無住と言ひ、滅を破するが故に無滅と言ふ。皆生住滅の邊に從うて此名有り。別に無生無滅の法無し。是を無法の無法とするは空なりと名く。是義は無爲空の中に説くが如し。自法の自法とするは空なりとは、自法とは、諸法の自性に名く。自性に二種有り。一には世間の法の如し、地の堅性等等なり。二には聖人は如、法性、實際を知る。此法は空なり。」所以は何ん。智見に由りて知らざるが故なり。二性有り、空なるは先に説くが如し。問うて曰はく、「如、法性、實際は無爲法の中に已に攝す。何を以てか復更に説く。」答へて曰はく、「觀する時分別して、五衆の實相なる法性、如、實際を説く。又空の智慧觀に非ざるが故に、空性を以て自ら觀らしむ。」問うて曰はく、「色の如きは、是れ自法にして、識を他法と爲す。此中に、何を以てか如、法性、實際は、佛有るも佛無きも常住にして、是を過ぎたるを名けて他法空と爲すと説く。」答へて曰はく、「有人は、未だ善く貝結を斷せざるが故に、處處に著を生ず。是人は是如、法性、實際を聞き、是を過ぎ已りて更に餘法有り」と謂ふ。是を以ての故に、如、法性、實際を過ぐるも亦空なりと説く。

大智度論卷第四十六

大智度論釋摩訶衍品第十八之餘

卷第四十七

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる首楞嚴三昧、寶印三昧、師子遊戲三昧、妙月三昧、月幢相三昧、出諸法三昧、觀頂三昧、畢法性三昧、畢幢相三昧、金剛三昧、入法印三昧、三昧王安立三昧、放光三昧、力進三昧、高出三昧、必入辯才三昧、釋名字三昧、觀方三昧、陀羅尼印三昧、無誑三昧、攝諸法海三昧、遍覆虛空三昧、金剛輪三昧、寶寶三昧、能照三昧、不求三昧、無住三昧、無心三昧、淨燈三昧、無邊明三昧、能作明三昧、普照明三昧、堅淨諸三昧、無垢明三昧、歡喜三昧、電光三昧、無盡三昧、威德三昧、離盡三昧、不動三昧、不退三昧、日燈三昧、月淨三昧、淨明三昧、能作明三昧、作行三昧、相知三昧、如金剛三昧、心住三昧、普明三昧、安立三昧、寶聚三昧、妙法印三昧、法等三昧、斷喜三昧、到法頂三昧、能散三昧、分別諸法句三昧、字等相三昧、離字三昧、斷緣三昧、不壞三昧、無種相三昧、無處行三昧、離瞋味三昧、無去三昧、不變異三昧、度緣三昧、集諸功德三昧、住無心三昧、妙淨華三昧、覺意三昧、無量辯三昧、無等等三昧、度諸法三昧、分別諸法三昧、散疑三昧、無住處三昧、一莊嚴三昧、生行三昧、一行三昧、

不一行三昧、妙行三昧、達一切有底散三昧、入名語三昧、離音聲字語三昧、然炬三昧、淨
 相三昧、滅相三昧、一切種妙是三昧、不喜喜樂三昧、無盡相三昧、陀羅尼三昧、攝諸邪正
 相三昧、滅憎愛三昧、逆順三昧、淨光三昧、堅固三昧、滿月淨光三昧、大莊嚴三
 昧、能照一切世三昧、三昧等三昧、攝一切有淨無淨三昧、不樂一切住處三昧、如住處三昧、
 壞身衰三昧、壞語如虛空三昧、離著虛空不染三昧と名く。云何が首楞嚴三昧と名くる。諸
 の三昧行處を知る、是を首楞嚴三昧と名く。云何が寶印三昧と名くる。是三昧に住し、能
 く諸三昧を印す、是を寶印三昧と名く。云何が師子遊戲三昧と名くる。是三昧に住し、能
 く諸三昧中に遊戲すること、師子の如し。是を師子遊戲三昧と名く。云何が妙月三昧と名
 くる。是三昧に住し、能く諸の三昧を照すこと淨月の如し。是を妙月三昧と名く。云
 何が月幢相三昧と名くる。是三昧に住し能く諸の三昧の相を持す、是を月幢相三昧と名
 く。云何が出諸法三昧と名くる。是三昧に住し能く諸の三昧を出生す、是を出諸法三昧
 と名く、云何が觀頂三昧と名くる。是三昧に住し能く諸の三昧の頂を觀ず、是を觀
 頂三昧と名く。云何が畢法性三昧と名くる。是三昧に住し決定して法性を知る。是を畢法
 性三昧と名く。云何が畢幢相三昧と名くる。是三昧に住し能く諸の三昧の幢を持す。是
 を畢幢相三昧と名く。云何が金剛三昧と名くる。是三昧に住し能く諸の三昧を破す。是
 を金剛三昧と名く。云何が入法印三昧と名くる。是三昧に住し諸の法印に入る。是を入
 法印三昧と名く。云何が三昧王安立三昧と名くる。是三昧に住し一切の諸三昧の中に安立

して、住すること王の如し。是を三昧王安立三昧と名く。云何が放光三昧と名くる。是三昧に住し、能く光を放ちて、諸の三昧を照す。是を放光三昧と名く。云何が力進三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧に於て能く力勢を作す。是を力進三昧と名く。云何が高出入辯才三昧と名くる。是三昧に住し、能く諸の三昧を増長す。是を高出入三昧と名く。云何が釋名字三昧と名くる。是三昧に住し、能く諸の三昧を辯說す。是を必入辯才三昧と名く。云何が觀方三昧と名くる。是三昧に住し、能く諸の三昧の方を觀す。是を觀方三昧と名く。云何が陀羅尼印三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の印を持す。是を陀羅尼印三昧と名く。云何が無誑三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧に於て毀誑せず。是を無誑三昧と名く。云何が攝諸法海三昧と名くる。是三昧に住し、能く諸の三昧を攝すること大海の水の如し、是を攝諸法海三昧と名く。云何が遍覆虛空三昧と名くる。是三昧に住し、遍く諸の三昧を覆ふこと虛空の如し、是を遍覆虛空三昧と名く。云何が金剛輪三昧と名くる。是三昧に住し、能く諸の三昧の分を持す。是を金剛輪三昧と名く。云何が斷寶三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の垢を斷ず。是を斷寶三昧と名く。云何が能照三昧と名くる。是三昧に住し、能く光明を以て、諸の三昧を照照す。是を能照三昧と名く。云何が不求三昧と名くる。是三昧に住し、法として求むべき無し。是を不求三昧と名く。云何が無住三昧と名くる。是三昧に住し、一切の三昧中に法住を見ず。是を無住三昧と名く。

云何が無心三昧と名くる。是三昧に住し、心心數法行せず。是を無心三昧と名く。云何が
 淨燈三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧中に於て明と作ること燈の如し。是を淨燈三
 昧と名く。云何が無邊明三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の與に無邊の明を作す。
 是を無邊明三昧と名く。云何が能作明三昧と名くる。是三昧に住し即時に能く諸の三昧
 の爲に明と作る。是を能作明三昧と名く。云何が普照明三昧と名くる。是三昧に住し即ち
 能く諸の三昧門を照す。是を普照明三昧と名く。云何が堅淨諸三昧三昧と名くる。是三
 昧に住し、能く堅く諸の三昧の垢を淨む。是を堅淨諸三昧三昧と名く。云何が無垢明三
 昧と名くる。是三昧に住し、能く諸の三昧の垢を除き、亦能く一切の三昧を照す。是を
 無垢明三昧と名く。云何が歡喜三昧と名くる。是三昧に住し、能く諸の三昧の喜を受く。
 是を歡喜三昧と名く。云何が電光三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧を照すこと電光
 の如し、是を電光三昧と名く。云何が無盡三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧に於て
 盡を見ず、是を無盡三昧と名く。云何が威德三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧に於
 て威德照然たり。是を威德三昧と名く。云何が離盡三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三
 昧の盡くるを見ず。是を離盡三昧と名く。云何が不動三昧と名くる。是三昧に住し、諸の
 三昧をして不動不戲ならしむ。是を不動三昧と名く。云何が不退三昧と名くる。是三昧に
 住し、能く諸の三昧の退くを見ず。是を不退三昧と名く。云何が日燈三昧と名くる。是
 三昧に住し、光を放ちて諸の三昧門を照す。是を日燈三昧と名く。云何が月淨三昧と

名くる。是三昧に住し、能く諸の三昧の闇を除く。是を月淨三昧と名く。云何が淨明
 三昧と名く。是三昧に住し、諸の三昧に於て四無礙智を得。是を淨明三昧と名く。云
 何が能作明三昧と名く。是三昧に住し、諸の三昧門に於て能く明を作す。是を能作明三
 昧と名く。云何が作行三昧と名く。是三昧に住し、能く諸の三昧をして各所作有ら
 しむ。是を作行三昧と名く。云何が相知三昧と名く。是三昧に住し、諸の三昧の相知を
 見る。是を相知三昧と名く。云何が如金剛三昧と名く。是三昧に住し、能く諸法に貫達
 し亦達するをも見ず。是を如金剛三昧と名く。云何が心住三昧と名く。是三昧に住し、
 心動せず、轉せず、惱せず、亦是心有るを念せず。是を心住三昧と名く。云何が普明三昧と
 名く。是三昧に住すれば、普く諸の三昧の明を見る。是を普明三昧と名く。云何が安
 立三昧と名く。是三昧に住し、諸の三昧に於て安立して動せず。是を安立三昧と名く。
 云何が寶聚三昧と名く。是三昧に住し、普ねく諸の三昧を見ること寶聚を見るが如し。
 是を寶聚三昧と名く。云何が妙法印三昧と名く。是三昧に住し、能く諸の三昧を印し、
 無印を以て印するが故に、是を妙法印三昧と名く。云何が法等三昧と名く。是三昧に住
 し、諸法等しうして法の等しからざる無きを觀ず。是を法等三昧と名く。云何が斷喜三昧
 と名く。是三昧に住し、一切法中の喜を斷ず。是を斷喜三昧と名く。云何が到法頂三昧
 と名く。是三昧に住すれば、諸法の闇を滅し、亦諸の三昧の上に在り、是を、到法頂
 三昧と名く。云何が能散三昧と名く。是三昧中に住し、能く諸法を破散す。是を能散三

味と名く。云何が分別諸法句三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の諸の法句を分別す。是を分別諸法句三昧と名く。云何が字等相三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の字等を得。是を字等相三昧と名く。云何が離字三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧中に、乃ち一字をも見ざるに至る。是を離字三昧と名く。云何が斷縁三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の縁を斷ず。是を斷縁三昧と名く。云何が不壞三昧と名くる。是三昧に住し、諸法の變異を得ず。是を不壞三昧と名く。云何が無種相三昧と名くる。是三昧に住し、諸法の種種なるを見ず。是を無種相三昧と名く。云何が無處行三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の處を見ず。是を無處行三昧と名く。云何が離瞋味三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の微闇を離る。是を離瞋味三昧と名く。云何が無去三昧と名くる。是三昧に住し、一切の三昧の去相を見ず。是を無去三昧と名く。云何が不變異三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の變異の相を見ず。之を不變異三昧と名く。云何が度緣三昧と名くる。是三昧に住し、一切の三昧の緣境界を度る。是を度緣三昧と名く。云何が集諸功德三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の功德を集む。是を集諸功德三昧と名く。云何が住無心三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧に於て心入る所無し。是を住無心三昧と名く。云何が淨妙華三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧をして、淨妙なること、華の如くなるを得しむ。是を淨妙華三昧と名く。云何が覺意三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の中に七覺分を得。是を覺意三昧と名く。云何が無量辯三昧と名くる。是三昧に住し、

諸法の中に於て無量の辯を得。是を無量辯三昧と名く。云何が無等等三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧中に無等等の相を得。是を無等等三昧と名く。云何が度諸法三昧と名くる。是三昧に住し、一切の三昧の界を度る。是を度諸法三昧と名く。云何が分別諸法三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧及び諸法を分別して見る。是を分別諸法三昧と名く。云何が散疑三昧と名くる。是三昧に住し、諸法の疑を散するを得。是を散疑三昧と名く。云何が無住處三昧と名くる。是三昧に住し、諸法の住處を見ず。是を無住處三昧と名く。云何が一莊嚴三昧と名くる。是三昧に住し、終に諸法の二相を見ず。是を一莊嚴三昧と名く。云何が生行三昧と名くる。是三昧に住し、諸行の生ずるを見ず。是を生行三昧と名く。云何が一行三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の此岸彼岸を見ず。是を一行三昧と名く。云何が不一行三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の一相を見ず。是を不一行三昧と名く。云何が妙行三昧と名くる。此三昧に住し、諸の三昧の二相を見ず。是を妙行三昧と名く。云何が這一切有底散三昧と名くる。是三昧に住し、一切有一切三昧に入り、智慧通達して亦達する所無し。是を達一切有底散三昧と名く。云何が入名語三昧と名くる。是三昧に住し、一切の三昧の名語に入る。是を入名語三昧と名く。云何が離音聲字語三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の音聲字語を見ず。是を離音聲字語三昧と名く。云何が然炬三昧と名くる。是三昧に住し、威徳照明にして、炬の如し。是を然炬三昧と名く。云何が淨相三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の相を淨む。是を淨相三昧と名く。云

何が破相三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の相を見ず。是を破相三昧と名くる。云何が一切種妙足三昧と名くる。是三昧に住し、一切の諸の三昧の種、皆具足す。是を一切種妙足三昧と名くる。云何が不喜苦樂三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の苦樂を見ず。是を不喜苦樂三昧と名くる。云何が無盡相三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の盡くるを見ず。是を無盡相三昧と名くる。云何が多陀羅尼三昧と名くる。是三昧に住し、能く諸の三昧を持す。是を陀羅尼三昧と名くる。云何が攝諸邪正相三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧に於て邪正の相を見ず。是を攝諸邪正相三昧と名くる。云何が滅憎愛三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の憎愛を見ず。是を滅憎愛三昧と名くる。云何が逆順三昧と名くる。是三昧に住し、諸法諸三昧の逆順を見ず。是を逆順三昧と名くる。云何が淨光三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の明垢を得ず。是を淨光三昧と名くる。云何が堅固三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の不堅固を得ず。是を堅固三昧と名くる。云何が滿月淨光三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧を滿足すること月の十五日の如し。是を滿月淨光三昧と名くる。云何が大莊嚴三昧と名くる。是三昧に住し、大莊嚴の諸の三昧を成就す。是を大莊嚴三昧と名くる。云何が能照一切世三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧及び一切法を能く照す。是を能照一切世三昧と名くる。云何が三昧等三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧に於て定亂の相を得ず。是を三昧等三昧と名くる。云何が攝一切有證無證三昧と名くる。是三昧に住し、能く諸の三昧をして有證無證を分別せざらし

【一】次に百八三昧を擧げ、これ大乘といふを釋す中先に就いて明す。

【首楞嚴三昧等】首楞嚴三昧を解す

【寶印三昧等】下寶印三昧を明す。

む。是を攝一切有淨無淨三昧と名く。云何が不樂一切住處三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の依處を見ず。是を不樂一切住處三昧と名く。云何が如住定三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の如相を過ぎず。是を如住定三昧と名く。云何が壞身衰三昧と名くる。是三昧に住し、身相を得ず。是を壞身衰三昧と名く。云何が壞語如虛空三昧と名くる。是三昧に住し、諸の三昧の語業を見ざることを虛空の如し。是を壞語如虛空三昧と名く。云何が離著虛空不染三昧と名くる。是三昧に住し、諸法を見ることを虛空の礙無く、亦染せざるが如し。是三昧をば離著虛空不染三昧と名く。須菩提、是を迦陵摩訶薩の摩訶衍と名く。釋して曰はく、上には十八空を以て、般若波羅蜜を釋し、今は百八三昧を以て、禪波羅蜜を釋す。百八の三昧は、佛自ら其義を説きたまひしに、是時は人、利根なるが故に、皆信解するを得たり。今は則ち然らず。論者は重ねて其義を釋して、易く解するを得しむ。首楞嚴三昧とは秦に健相と言ひ、諸の三昧の行相の多少深淺を分別して知ること、大將の諸兵の力の多少を知るが如し。復次に菩薩是三昧を得れば、諸の煩惱の塵、及び魔人の能く壞する者無し。譬へば、轉輪聖王の主兵、寶將の往く所、至る處、降伏せざる無きが如し。寶印三昧とは能く諸の三昧を印す。諸寶の中に於て法寶は是れ寶寶にして、今世後世より乃ち涅槃に至るまで能く利益を爲す。經中に説くが如し。佛、比丘に語りたまはく、「汝が爲に法を説かん。所説の法は謂ゆる法印なり。法印は即ち是れ寶印なり。寶印は即ち是れ三無所畏門なり」と。復次に有人言はく、「三法印を名けて寶印三昧と爲す。一切の法は無

【師子遊戯三昧等】次に師子遊戯三昧を明す。

【妙月三昧等】次に妙月三昧を明す。

【月輪相三昧等】次に月輪相三昧を明す。

【出諸法三昧等】次に諸法三昧を明す。

【觀頂三昧等】次に觀頂三昧を明す。【畢法性三昧等】次に畢法性三昧を明す。

我なり。一切の作法は無常なり。寂滅は涅槃なり。是三法印は、一切の天人の、能く如法に壞する者無し。是三昧に入れば能く三種に諸法を觀す。是を寶印と名く」と。復次に般若波羅蜜は是れ寶にして、是に相應する三昧を印と名け是を寶印と名く。師子遊戯三昧とは、菩薩是三昧を得れば一切の三昧の中に於て出入迅速、皆自在なるを得。譬へば、衆獸の戲るる時、若し師子を見れば率に皆怖慄し、師子の戲るる時は、自在にして畏れ難る所無きが如し。復次に師子の戲むるとき、諸の群獸に於て強きものは則ち殺し、伏するものは則ち放つ。菩薩も亦是の如し。是三昧を得、諸の外道に於て強き者は之を破り、信する者は之を度す。復次に師子遊戯とは、初品の中に説くが如く、菩薩、是三昧の中に入れば、地處に六反に震動し、一切十方世界地獄の湯をして冷かならしめ、盲者は觀るを得、聾者は聽くを得る等なり。妙月三昧とは、月滿ちて清淨なれば諸の翳障無く、能く夜闇を除くが如く、此三昧も亦是の如し。菩薩是三昧に入れば、能く諸法の邪見、無明、闇蔽等を除く。月輪相三昧とは、大軍將の幢寶を以て月像と作せば、此幢寶を見て人皆隨從するが如く、菩薩是三昧の中に入れば、諸法に通達すること無礙にして、皆悉く隨從す。諸法三昧とは、菩薩是三昧を得れば、諸の三昧をして增長せしむること、譬へば時雨の林木を茂盛ならしむるが如し。觀頂三昧とは、是三昧の中に入れば能く過く諸の三昧を見ること、山頂に住して悉く衆物を見るが如し。畢法性三昧とは、法性は量無く二無く、執持すべき難し。是三昧に入れば必ず能く定相を得ること、譬へば虚空は能く住する

【畢幢相三昧等】次に畢幢相三昧を明す。

【金剛三昧等】次に金剛三昧を明す

【入法印三昧等】次に入法印三昧を明す。

【三昧王安立三昧等】次に三昧王安立三昧を明す。

【放光三昧等】次に放光三昧を明す

【照諸三昧等】次に照諸三昧を明す

【力進三昧等】次に力進三昧を明す、信等の五種の力とは、信、念、定、慧の五力のこと。

者無きも、神足力を得れば則ち能く之に處するが如し。畢幢相三昧とは、是三昧に入れば則ち諸の三昧に於て最も尊長と爲す。譬へば軍將の幢を得れば其大相を表すが如し。金剛三昧とは、譬へば金剛の物として陥らざる無きが如し。此三昧も亦是の如し、諸法に於て通達せざる無く、諸の三昧をして、各其用を得しむること、車裏、瑪瑙、琉璃は唯金剛のみ能く穿つが如し。入法印三昧とは、人の安隱の國に入るに、印有れば入るを得、印無ければ入るを得ざるが如く、菩薩も是三昧を得れば、能く諸法實相の中、謂ゆる諸法畢竟空に入る。三昧王安立三昧とは、譬へば、大王の正殿に安住し、諸の群臣を召すに、皆悉く命に従ふが如く、菩薩は三昧王に入りて大光明を放ち、十方を請召するに、悉く集まらざる無く、又化佛を遣して遍く十方に至らしむ。安立とは、譬へば國王の正殿に安處し、身心坦然として畏懼する所無きが如し。放光三昧とは、常に火を修して一切に入るが故に神通力を生じ、意に隨うて種種の色光を放ち、衆生の樂所隨うて若は熱、若は冷、若は不熱不冷なり。照諸三昧とは光明に二種有り、一には色光、二には智慧光なり。是三昧の中に住すれば、諸の三昧を照して、邪見、無明等有る無し。力進三昧とは、先づ諸法の中に於て、信等の五種の力を得、然る後に諸の三昧の中に於て、自在の力を得、又三昧に住すと雖も、而も常に能く神通變化して諸の衆生を度す。高出三昧とは、菩薩、是三昧に入れば、有ゆる福德智慧、皆悉く增長し、諸の三昧の性、心に從つて出づ。必入辯才三昧とは、四無礙の中の辯給相應の三昧なり。菩薩、是三昧を得れば、悉く衆生の語

【高田三昧等】次に高田三昧を明す
【必入辯才三昧等】次に必入辯才三昧を明す。

【釋名字三昧等】次に釋名字三昧を明す。

【觀方三昧等】次に觀方三昧を釋す

【陀羅尼印三昧等】次に陀羅尼印三昧を明す。

【無誑三昧等】次に無誑三昧を解す

【諸去海三昧等】次に諸去海三昧を明す。

【遍復虚空三昧等】次に遍復虚空三昧を明す。

【金剛輪三昧等】次に金剛輪三昧を明す。

【寶三昧等】次に寶三昧を釋す

【能照三昧等】次に能照三昧を釋す

【不求三昧等】次に不求三昧を明す

【無住三昧等】次に無住三昧を釋す

言の次第を知り、及び經書、名字等悉く能く分別して礙無し。釋名字三昧とは、諸法は空なりと雖も、名字を以て諸法の義を辯じ、人をして解を得しむ。觀方三昧とは、十方の衆生に於て慈悲を以て憐愍し、平等心もて觀ず。復次に方とは、道理に循するを名けて方を得と爲し、是三昧力の故に諸の三昧に於て其道理を得、出入自在無礙なり、陀羅尼印三昧とは、是三昧を得る者は、能く諸の三昧を分別して皆陀羅尼有るを得。無誑三昧とは、有三昧は、愛、悲、無明、邪見等を生ず。是三昧は諸の三昧に於て都て迷悶の事無し。攝諸法海三昧とは、一切の衆流、皆海に歸するが如く、三乘の法は皆是三昧の中に入るも亦是の如し。又諸法の三昧は皆是三昧の中に入ること、四禪四無色の中に、諸の解脱九次第等を攝して皆其中に入るが如し。遍復虚空三昧とは、是虚空は無量無邊なり。是三昧力は、悉く能く虚空に遍覆し、或は結跏趺坐し、或は光明を放ち、或は音聲を以て其中に充滿す。金剛輪三昧とは、眞金剛輪の往く所無礙なるが如く、是三昧を得る者は、諸法の中に於て至る所無礙なり。復次に能く諸の三昧の分界を分別するが故に輪と名く、輪は分界なり。寶三昧とは、有寶の能く寶寶を淨治するが如く、是三昧も亦見の如し。能く諸の三昧の煩惱の垢を除く、五欲の垢は遣り易く、諸三昧の垢は却け難し、能照三昧とは、是三昧を得れば、能く十種の智慧を以て、諸法を照了す。譬へば、日出でて闇浮提を照すに、事皆顯了なるが如し。不求三昧とは、諸法を觀すること幻化の如く、三界の愛を斷ずるが故に都て求むる所無し。無住三昧とは、是三昧を無作三昧と名け、是三昧の中

【無心三昧等】次に無心三昧を釋す

【淨燈三昧等】次に淨燈三昧を明す

【無邊明三昧等】次に無邊明三昧を明す

【能作明三昧等】次に能作明三昧を釋す

【普照明三昧等】次に普照明三昧を釋す

【堅淨諸三昧三昧等】次に堅淨諸三昧三昧を釋す

【無垢明三昧等】次に無垢明三昧を明す

【歡喜三昧等】次に歡喜三昧を釋す

【電光三昧等】次に電光三昧を釋す

に住して、諸法は念念に無常にして、住する時有る無しと觀す。無心三昧とは、即ち是れ滅盡定、或は無想定なり。何を以ての故に。佛、自ら因縁を説く、「是三昧の中に入れば、諸の心心數法、行ぜざればなり」と。淨燈三昧とは、燈は智慧の燈に名け、諸の煩惱を垢と名く。是垢を離るる慧は則ち清淨なり。無邊明三昧とは、無邊は無量無數に名く。明に二種有り、一には衆生を度するが故に、身より光明を放ち、二には諸法の總相、別相を分別するが故に、智慧の光明かなり。是三昧を得れば、能く十方無邊の世界、及び無邊の諸法を照す。能作明三昧とは、諸法に於て、能く爲に明と作ることを、闇中に炬を燃すが如し。普照明三昧とは、轉輪聖王の寶珠の、軍衆の外の四邊に於て各一由旬を照すが如く、菩薩、是三昧を得れば、普く諸法の種種の門を照す。堅淨諸三昧三昧とは、菩薩は是三昧の力を得るが故に、諸の三昧をして、清淨堅牢ならしむ。無垢明三昧とは、三解脱門相應の三昧なり。是三昧を得れば一切の三昧の垢を離れ、一切の無明、愛等を離れ、亦能く一切の諸の三昧を照す。歡喜三昧とは、是三昧を得れば諸法に於て歡喜の樂を生ず。何者か是なる。有人言はく、「初禪是なり」と。佛の説きたまふが如くんば、四修定有り。一には是三昧を修して、現在の歡喜の樂を得、二には定を修し、知見を得て衆生の生死を見る、三には定を修して智慧分別を得、四には定を修して、漏盡くるを得るなり。復次に是三昧を得れば、無量無邊の法、歡喜の樂を生ず。電光三昧とは、電の暫く現すれば、行く者路を得るが如く、是三昧を得れば、無始世界より來、道を失して還得。無盡三昧と

【無盡三昧等】次
 【威德三昧等】次
 【離盡三昧等】次
 【不動三昧等】次
 に無盡三昧を釋す
 に威德三昧を釋す
 に離盡三昧を釋す
 に不動三昧を釋す

【不退三昧等】次
 に不退三昧を明す

【日燈三昧等】次
 【月淨三昧等】次
 に日燈三昧を釋す
 に月淨三昧を釋す

は、是三昧を得れば諸法の無常等の相を滅して、即ち不生不滅に入るなり。威德三昧とは、菩薩、是三昧を得れば威德をもて莊嚴す。離盡三昧とは、菩薩、是三昧を得れば無量阿僧祇劫の善本功德を必ず得。果報は失せざるが故に。不動三昧とは、有人言はく、「第四禪は是れ不動なり。欲界の中は、五欲の故に動き、初禪の中は、覺觀の故に動き、二禪の中は、喜多きが故に動き、三禪の中は、樂多きが故に動き、四禪は出入の息を離れ、諸の動相無きが故に動かす」と。有人言はく、「四無色定は是れ不動なり、諸色を離るるが故に」と。有人言はく、「滅盡定は是れ不動なり、心心數法を離るるが故に」と。有人言はく、「諸法實相は畢竟空なりと知るの智慧は、三昧に相應するが故に不動なり。是三昧を得れば、一切の三昧、一切の法に於て都て戲論せず」と。不退三昧とは、是三昧に住すれば、阿耨多羅三藐三菩提を見ず。論者言はく、「菩薩、是三昧に住すれば、常に退轉せず。即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提、智慧相應の三昧なり。退せずとは、頂より墮せざるなり」と。頂より墮せざる義の中に説くが如し。日燈三昧とは、是三昧を得れば、能く一切諸法の種種の門、及び諸の三昧を照すこと、譬へば日の出でて能く一切の闇浮提を照すが如し。月淨三昧とは、月の十六日より漸漸に滅じ、三十日に至りて都て盡くるが如く、凡夫の人も亦是の如し。諸善の功德漸漸に滅じ、盡きて三惡道に墮す。月の一日より漸漸に増長し、十五日に至りて光明清淨なるが如く、菩薩も亦是の如し。是三昧を得れば、發心より來、世世に漸く善根を増し、乃ち無生法忍の授記を得るに至り、智慧清淨にして衆生を利益し、又能く

【淨明三昧等】次に淨明三昧を釋す

諸の三昧の中の無明を破す。淨明三昧とは明を慧と名け、垢を礙と爲す。是三昧を得れば、諸法に於て障礙無し。是を以ての故に、佛は此に於て、「是三昧の中に住すれば、四無礙智を得」と説きたまへり。問うて曰はく、「佛は何を以てか獨り此中に於て四無礙智を説きたまへる。答へて曰はく、「三昧の中に於て覺觀の心無く、樂説すべき所、定と相違す。

是事を難と爲す。此三昧の力の故に、四無礙智を得。四無礙智の義は、先に説くが如し。

能作明三昧とは、明は即ち是れ智慧なり。諸智慧の中にては般若の智慧は最も第一なり。

【能作明三昧等】次に能作明三昧を釋す。

是れ般若相應の三昧なり。能作明作行三昧とは、是三昧力を得れば、能く先に得る所の諸の三昧を發起す。知相三昧とは、是三昧を得れば、一切の諸の三昧の中に、實智慧の相有るを見る。如金剛三昧とは、是三昧を得れば、智慧を以て能く一切の諸法に通達し、

【作行三昧等】次に作行三昧を明す

【知相三昧等】次に知相三昧を釋す

【金剛三昧等】次に如金剛三昧を釋す。

亦通達を見ず。無所得を用ての故に。問うて曰はく、「三種の三昧は何を以てか皆金剛と言ふ。答へて曰はく、「初には金剛と言ひ、中には金剛輪と言ひ、後には如金剛と言ふ。如

金剛三昧とは、佛説きたまはく、「能く一切の諸法を貫穿し、亦是を見ず」と。是金剛三昧は、能く諸の三昧に通達す。金剛輪三昧とは、是三昧を得れば、即ち能く諸の三昧の

輪を持す」と。是れ皆佛自ら説きたまへる義なり。論者言はく、「如金剛とは、能く一切

の諸の煩惱、結使を破して、遺餘有る無し。譬へば、釋提桓因の、手に金剛を執りて

阿修羅の軍を破るが如し。即ち是學人の末後心は、是心に從うて次第に三種の菩提を得。

聲聞の菩提と、辟支佛の菩提と、佛の無上菩提となり。金剛三昧とは、能く一切の諸法を

【心住三昧等】次に心住三昧を明す

【普明三昧等】次に普明三昧を釋す

【安立三昧等】次に安立三昧を釋す

【寶聚三昧等】次に寶聚三昧を明す

【妙法印三昧等】次に妙法印三昧を

破して、無餘涅槃に入り、更に有を受けず。譬へば、眞の金剛は、能く諸山を破し、滅盡して餘無からしむるが如し。金剛論とは、此三昧は能く一切の諸法を破して、遮無く廢無し。譬へば、金剛輪の轉する時、破せざる所無く、障礙せらるる無きが如し。復次に初には金剛、二には金剛輪、三には如金剛なり。名字分別するに、佛の其義を説きたまふも亦異なり、論者の其因縁を釋するも、亦異なり。釋を致すべからず。心住三昧とは、心相は輕爽にして、遠く逝き、相無く、動し難く、持し難し。常に是れ動相なり。寶聚の子の如く、又暴雷の如く、亦非舌の如し。是三昧を得るが故に、能く攝して住せしめ、乃至天の欲心も動轉せざるなり。何に況んや人の欲をや。普明三昧とは、是三昧を得れば、一切の法に於て光明の相を見て、黑闇の相無く、盡の所見の如く、夜も亦是の如し。如し前を見、後を見るも亦爾なり。如し上を見、下を見るも亦爾なり。心中にも無礙なり。是三昧を修するが故に天眼通を得、普く光明を見て了了にして無礙なり。普く是神通を修するが故に天眼通を得、普く諸法を照し見る所無礙なり。安立三昧とは、是三昧を得る者は、一切の諸の功德、善法の中に安立して、牢固なること、須彌山の大海に在りて、安立不動なるが如し。寶聚三昧とは、是三昧を得れば、有る處土悉くし寶と成る。而うて曰はく、此は是れ肉眼の見る所なりや、禪定の見る所なりや。答へて曰はく、天眼、肉眼は皆能く見る。何を以ての故に。外の六塵は不定なるが故に、行者は常に禪定を修得す。是故に能く木相を轉す。妙法印三昧とは、妙法は諸佛菩薩の深功德と智慧とに名く。是三

釋す。

【法等三昧等】次

【斷喜三昧等】次

【到法頂三昧等】次

【能散三昧等】次

【分別諸法句三昧等】次

【字等相三昧等】次

【離字三昧等】次

【不壞三昧等】次

【無種三昧等】次

【無處行三昧等】次

【微翳無明等】次

【離塵昧三昧等】次

【不壞三昧等】次

【無種三昧等】次

【無處行三昧等】次

【微翳無明等】次

【離塵昧三昧等】次

【不壞三昧等】次

【無種三昧等】次

【無處行三昧等】次

【微翳無明等】次

【離塵昧三昧等】次

【不壞三昧等】次

【無種三昧等】次

【無處行三昧等】次

味を得れば、諸の深妙の功德と智慧を得。法等三昧とは、等に二種有り、衆生等と法等となり。法等相應の三昧を名けて法等と爲す。斷喜三昧とは、是三昧を得れば、諸法の無常、

苦、空、無我、不淨等を觀じ、心に厭離を生ず。十想中の一切世間不可樂想に相應する三昧是なり。到法頂三昧とは、法は菩薩法、謂ゆる六波羅蜜に名け、到は、般若波羅蜜中に

方便を得るの力にして、法山の頂に到るなり。是三昧を得れば能く是法山の頂に住し、

諸の無明煩惱、動搖する能はず。能散三昧とは、是三昧を得れば能く諸法を破散す。散

空相應の三昧是なり。分別諸法句三昧とは、是三昧を得れば、能く一切諸法の語言字句を

分別し、衆生の爲に説いて辭に滯礙無し。樂說相應三昧是なり。字等相三昧とは、是三昧

を得れば、諸字諸語を觀するに、皆悉く平等にして、呵罵讚歎する、憎愛有る無し。離

字三昧とは、是三昧を得れば、字の義中に在るを見ず、亦義の字中に在るを見ず。斷縁三

昧とは、是三昧を得れば、若は内、若は外、樂の中に喜を生ぜず、苦の中に瞋を生ぜず、

不苦不樂の中に捨心を生ぜず、此三受到於て遠離して著せず、心則ち歸滅す。心若し滅

すれば縁も亦斷ず。不壞三昧とは法性を緣じ、畢竟空に相應する三昧にして、戲論も破す

る能はず、無常も轉ずる能はず。先づ已に壞するが故に。無種三昧とは是三昧を得れば、

諸法の種種の相を見ず。但一相、謂ゆる無相を見る。無處行三昧とは、是三昧を得れば、

三毒の火の、三界に然ゆるを知るが故に、心依止せず、涅槃は畢竟空なるが故に、亦依止

せざるなり。離塵昧三昧とは、是三昧を得れば、諸の三昧の中に於て、微翳無明等、悉く

【無去三昧等】次
に無去三昧を得ず
【不變異三昧等】
次に不變異三昧を
得ず

【度縁三昧等】次
に度縁三昧を得ず
【集諸功德三昧等】
次に集諸功德三昧
を得ず

【住無心三昧等】
次に住無心三昧を
得ず
【淨華三昧等】
次に淨華三昧を得
ず

【定意三昧等】次
に定意三昧を得ず
【散疑三昧等】
次に散疑三昧を得
ず

【無等三昧等】
次に無等三昧を得
ず
【度諸法三昧等】
次に度諸法三昧を
得ず

【散疑三昧等】次
に散疑三昧を閉す

皆除き盡く。無去三昧とは、是三昧を得れば、一切法の來去の相を見ず。不變異三昧とは、是三昧を得れば、一切の諸法を觀するに因は變ぜずして果と爲ること、乳の變ぜずして酪と作るが如し。諸法は皆自相に住して動ぜざるが故に。度縁三昧とは、是三昧を得れば、六塵の中に於て諸の煩惱盡滅し、六塵の大海を渡り、亦能く一切の三昧を過ぎ、智慧を緣生す。集諸功德三昧とは、是三昧を得れば、諸の功德を集め、信より智慧に至り、初夜後夜、修習して息まざること、日月の運轉して初より休息せざるが如し。住無心三昧とは、是三昧の中に入れば心に隨はず、但智慧に隨ひ、諸法實相の中に至りて住す。淨妙華三昧とは、樹華の敷開して、場をして嚴飾ならしむるが如く、是三昧を得れば、諸の三昧の中に諸の功德の華を開き、以て自ら莊嚴す。定意三昧とは、是三昧を得れば、諸の三昧をして、變じて無漏と成り、七覺と相應せしむ。譬へば、石汁一斤もて能く千斤の銅を變じて金と爲すが如し。無量辯三昧とは、即ち是れ樂空辯なり。是三昧の力を得るが故に、乃ち一句を樂説し、無量劫にして、而も窮盡せざるに至る。無等三昧とは、是三昧を得れば、一切の衆生を觀すること、皆佛の如く、一切法を觀するに、皆同じく淨法にして無等者なり。般若波羅蜜相應是なり。度諸法三昧とは、是三昧を得れば、三解脱門に入りて三昧を越出し、三長の衆生を度し、諸法を分別す。三昧とは、即ち是れ分別慧相應の三昧なり。是三昧を得れば、諸法の善、不善、有漏、無漏、有爲、無爲等の相を分別す。散疑三昧とは、有人言はく、即ち是れ見諦道中の無相三昧なり。疑結は見諦智相應の三昧の斷な

【無住處三昧等】次に無住處三昧を明す。

【一莊嚴三昧等】次に一莊嚴三昧を明す。

【生行三昧等】次に生行三昧を明す。

【一行三昧等】次に一行三昧を明す。

【不一行三昧等】次に不一行三昧を明す。

【妙行三昧等】次に妙行三昧を明す。【達一切有底散三昧等】次に達一切有底三昧を明す。

るが故に」と。有人言はく、「菩薩の無生法忍相應の三昧なり。是時一切法中の疑網悉く斷じ、十方の諸佛を見、一切諸法の實相を得」と。有人言はく、「無礙解脫相應の三昧是なり。諸佛は是三昧を得已りて、諸法の中に於て、疑無く、近きこと無く、遠きこと無く、皆掌中を觀るが如し」と。無住處三昧とは、即ち是れ無受智慧相應の三昧なり。是三昧を得れば、一切諸法の定んで住處有るを見ず。一莊嚴三昧とは、是三昧を得れば、一なりと觀す。或は一切法は、有相なるが故に一なり。或は一切法は、無なるが故に一なり。或は一切法は、空なるが故に一なり。是の如き等の無量は皆一なり。一相の智慧を以て、是三昧を莊嚴するが故に、一莊嚴と言ふ。生行三昧とは、行は觀に名く。是三昧を得れば、能く種種の行相、入相、住相、出相を觀じ、又是行も皆空にして見るべからず。一行三昧とは、是三昧は常に一行にして、畢竟空相應の三昧の中には、更に餘行の次第、無常行の中には、次に苦行有り、苦行の中には、次に無我行有るが如き無し。又菩薩は是三昧に於て此岸を見ず、彼岸を見ず。諸の三昧の入相を此岸と爲し、出相を彼岸と爲す。初めて得る相を此岸と爲し、滅相を彼岸と爲す。不一行三昧とは、上の一行と相違する者是なり。謂ゆる諸餘の觀行なり。妙行三昧とは、即ち是れ畢竟空相應の三昧なり。乃ち不二の相をも見ざるに至り、一切の戲論も破する能はず。達一切有底散三昧とは、有とは三有に名け、底とは非有想非無想にして、到り難きを以ての故に、底と名け、達とは無漏の智慧を以て、乃至非有想非無想を離れ、無餘涅槃に入りて三界五樂散滅するなり。復次に

【入名語三昧等】次に入名語三昧を明す。

【離音聲字語三昧等】次に離音聲字語三昧を明す。

【然炬三昧等】次に然炬三昧を明す。

【淨相三昧等】次に淨相三昧を明す。

【破相三昧等】次に破相三昧を釋す。

【一切種妙足三昧等】次に一切種妙足三昧を明す。

【不喜苦樂三昧等】次に不喜苦樂三昧を明す。

【無盡相三昧等】次に無盡相三昧を明す。

に菩薩、是不生不滅の智慧を得て一切諸有に通達し散壞して、皆所有無し。入名語三昧とは、是三昧を得れば、一切衆生、一切の物、一切の法の名字を識り、亦能く此名字語を以て人を化し、一切の語言を解了せざる無く、皆次第有り。離音聲字語三昧とは、是三昧を得れば、一切諸法を觀するに、皆音聲語言無く、常に寂滅の相なり。然炬三昧とは、炬を捉りて夜行けば、險處に墮せざるが如く、菩薩是三昧を得れば、智慧の炬を以てして、諸法の中に錯無く、著無し。淨相三昧とは、是三昧を得れば能く清淨にして、三十二相を具足し莊嚴す。又能く如法に、諸法の總相別相を觀じ、亦能く諸法の無相清淨、謂ゆる空、無相、無作を觀す。相品の中に廣説するが如し。破相三昧とは、是三昧を得れば、一切の法相を見ず。何に況んや諸の三昧の相をや。即ち是れ無相三昧なり。一切種妙足三昧とは、是三昧を得れば、諸の功德を以て具足し莊嚴す。謂ゆる好姓、好家、好身、好眷屬、禪定、智慧、皆具足して清淨なり。不喜苦樂三昧とは、是三昧を得れば、世間の樂の過多く、患多く、虛妄顛倒にして、愛樂すべきに非ずと觀じ、世間の苦は、病の如く、箭の身に入るが如しと觀じ、心に喜樂せず。一切の法は、虛誑なるを以ての故に、其樂を求めず。何を以ての故に。異時に變じて苦となる、樂すら尙喜ばず。何に況んや苦に於てをや。無盡相三昧とは、是三昧を得れば、一切の法を觀するに壞する無く盡くる無し。問うて曰はく、若し爾らば云何が常邊に墮せざる。答へて曰はく、如し菩薩は、無常を觀すと雖も、滅中に墮せず。若し不盡を觀するも常中に墮せず。此二相は、諸法の中に於て皆

【陀羅尼印三昧等】次に陀羅尼印三昧を明す。

【攝諸邪正相三昧等】次に攝諸邪正相三昧を明す。

【滅憎愛三昧等】次に滅憎愛三昧を明す。

【逆順三昧等】次に逆順三昧を明す。

【淨光三昧等】次に淨光三昧を明す。

【堅固三昧等】次に堅固三昧を明す。

【滿月淨光三昧等】次に滿月淨光三昧を明す。

不可得なり。因縁有るが故に修行す。謂ゆる罪福を失せざるが爲の故に常と言ひ、著を離るるが故に無常と言ふ。陀羅尼印三昧とは、是三昧力を得るが故に、聞持等の諸の陀羅尼、皆自然に得。攝諸邪正相三昧とは、是三昧を得れば、三聚の衆生、謂ゆる正定、邪定、不定を見ず。邪て棄つる所無く、一心に攝取す。又諸法に於て定まれる正相、定まれる邪相を見ず。諸法に定相なきが故に。滅憎愛三昧とは、是三昧を得れば、喜ぶべき法の中にも愛を生ぜず、憎むべき法の中にも瞋を生ぜざるなり。逆順三昧とは、是三昧を得れば、諸法の中に於て逆順自在にして、能く諸の邪逆の衆生を破し、能く順じて衆生を化すべく、又著を離るるが故に一切の法を破し、善根增長するが故に一切の法を成じ、亦諸法の逆順を見ず、是事も亦見ず。所有無きを以ての故に。淨光三昧とは、是三昧を得れば、一切法の中の、諸の煩惱の垢は不可得なり。不可得なるが故に、諸の三昧は皆清淨なり。堅固三昧とは、有人言はく、「金剛三昧は是なり。堅固にして壞せざるが故に」と。有人言はく、「金剛は非なり。所以は何ん。金剛も亦破し易きが故に。是諸法實相の智相應の三昧は、破すべからざるごとく虚空の如し。是を以ての故に牢固と言ふ」と。滿月淨光三昧とは、是三昧を得れば、言ふ所清淨にして、諸の錯謬無し。秋時の虚空清淨にして、月滿ち、光明添しく、雲を棄むべく、諸の惡むべき無きが如く、菩薩も亦是の如し。諸の功徳を修するが故に、月滿ちて無明の闇を破するが如くなるが故に、淨智光明を具足して、愛恚等の火を滅するが故に、清涼の功徳を具足し、大に衆生を利益するが

【大莊嚴三昧等】次に大莊嚴三昧を明す。

【能照一切世間三昧等】次に能照一切世間三昧を明す。

【三昧等三昧等】次に三昧等三昧を明す。

【攝一切有淨無淨三昧等】次に攝一切有淨無淨三昧を明す。

【不樂一切住處三昧等】次に不樂一切住處三昧を明す。

【如住定三昧等】次に如住定三昧を明す。

【壞身衰三昧等】次に壞身衰三昧を明す。

故に、樂しむべし。大莊嚴三昧とは、十方如恆河沙等の世界を見るに、七寶の華香を以て、佛處を莊嚴し其中に是の如き等の清淨なる莊嚴あり。是三昧を得るが故に、一時に諸の功德を莊嚴す。又此莊嚴を觀するに、空にして所有無く、心に著する所無し。能照一切世間三昧とは、是三昧を得るが故に、能く三種の世間、衆生世間、住處世間、五衆世間を照す。三昧等三昧とは是三昧を得れば、諸の三昧を觀するに皆一平等なり。謂ゆる心相を攝す。是三昧は皆因縁を得るより生ず、有爲作法にして深淺無し。是三昧を得れば皆悉く平等なり。是を名けて等と爲す。餘法與に亦等うして異なる無し。是を以ての故に義中に説く、「一切法中に定亂の相は不可得なり」と。攝一切有淨無淨三昧とは是三昧を得れば是法の如是の相、是法の不如是の相を見ず。諸法の有淨、無淨を分別せず。一切法の中に於て通達無礙なり。衆生の中に於ても亦好醜、淨論無く、但衆生の心行に隨うて、是を度脱す。是三昧を得るが故に、諸の三昧に於て皆隨順して逆はざるなり。不樂一切住處三昧とは、是三昧を得れば、世間に住するを樂しまず、非世間に住するを樂しまず。世間は無常の過を以ての故に、樂しまず。非世間の中には、一切法無く、是れ大に畏るべき處にして、樂を生ずべからず。如住定三昧とは、是三昧を得るが故に、一切法の如實相を知り、法として是如を過ぐる者有るを見ず。如の義は先に説くが如し。壞身衰三昧とは、血肉筋骨等相合するが故に、名けて身と爲す。是身は患多く、常に飢寒冷熱等と淨あり、是を身衰と名く。是三昧を得るが故に、智慧の力を以て、分分に身衰の相を破壊し、乃至不可得の

【壞語如虛空三昧等】次に壞語如虛空三昧を釋す。

【離著虛空不染三昧等】次に離著虛空不染三昧を明す

【二】百八三昧即大乘といふを結す

相をも見ざるなり。壞語如虛空三昧とは、語は内に名く、風の發して、七處に觸るること有るが故に聲有り、聲に依るが故に語有るなり。是の如く、語言の因縁を觀するが故に、能く語言を壞し、我相及以愛憎を生ぜず。有人言はく、「二禪に覺觀無し、是れ壞語三昧なり。賢聖は默然たるが故なり」と。有人言はく、「無色定三昧なり。彼中に身無く、一切の色を離るるが故なり」と。有人言はく、「但是れ諸の菩薩の三昧にして、能く先世の結業の因縁を破す。不淨身にして、而も法身を受け、度すべき衆生に隨うて、種種に形を現す」と。離著虛空不染三昧とは、菩薩は般若波羅蜜を行じ、諸法の畢竟空を觀するに、不生不滅にして虛空の如く、物として喻ふべき無きが如し。鈍根の菩薩は、此虛空に著し、此三昧を得るが故に、虛空等の諸法に著するを離れて、亦是三昧に染著せず。人の没して泥中に在るに、人有り、挽き出して脚を鎖し、奴と爲すが如く、三昧有り、能く虛空に著するを離れ、而も復此三昧に著するも亦是の如し。今は三昧は、能く空空に著するを離れ、亦自ら著を離るるなり。

問うて曰はく、「佛多く諸の三昧を説きたまふ。汝何を以てか但諸法のみを説く。」答へて曰はく、「佛多く果報を説きたまふに、論者は因縁と果報とを合して説く。譬へば人の身不淨を觀じて、不淨三昧を得るが如し。身は是れ因縁、三昧は是れ果なり。又人の五衆の無常、苦空等を觀じて七覺意三昧を得、能く八聖道四沙門の果を生ずるが如し。復次に佛、衆生に應適するが故に、但一法のみを説きたまふ。論者は廣説して諸事を分別す。譬へば

一切の有漏は、皆是れ苦の因なり。而も佛は但愛を説きたまふ。一切の煩惱の滅するを滅諦と名く。佛は但愛の盡くるを説きたまふが如し。是菩薩、諸の觀行の中に於て必ず諸の三昧を疑はず。未だ了ぜざるが故に。佛但三昧を説きたまふに、論者は諸法を説く。一切の三昧皆已に中に在り。是諸の三昧の末後には、皆應に「無所得を用て」と言ふべし、般若に同じきを以ての故に。是の如き等の無量無邊の三昧の和合するをば、名けて摩訶衍と爲す。

大智度論釋四念處品第十九

卷第四十八

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

佛、須菩提に告げたまはく、「菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる四念處なり。何等をか四となす。須菩提、菩薩摩訶薩、内身中、身に循うて觀するに、亦身覺無し。不可得なるを以ての故に。外身中、内外身中、身に循うて觀するに、亦身覺無し。不可得なるを以ての故に。勤めて精進して、一心に世間の食憂を除く。内受、内心、内法、外受、外心、外法、内外受、内外心、内外法、法に循うて觀するに、亦法覺無し。不可得なるを以ての故に。勤めて精進して一心に世間の食憂を除く。須菩提、菩薩摩訶薩は、云何が内身中、身に循うて觀する。須菩提、若し菩薩摩訶薩、行する時行を知り、住する時住を知り、坐する時坐を知り、臥する時臥を知り、身の所行の如く、是の如くに知る。須菩提、菩薩摩訶薩は、是の如く内身中、身に循うて觀し、勤めて精進して、一心に世間の食憂を除く。不可得なるを以ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩は、若は來り、若は去るも、視瞻一心なり。屈伸し俯仰し、僧伽梨を服し、衣鉢を執持し、飲食し、臥息し、坐立し、睡覺し、語默し、禪に入り、禪より出づるも、亦常に一心なり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜

を行じ、内身中、身に循うて觀ず、不可得なるを以ての故に。

復次に須菩提、菩薩摩訶薩、内身中、身に循うて觀する時、一心に念じ、入息の時、入

息を知り、出息の時、出息を知り、入息長き時、入息の長きを知り、出息長き時、出息の

長きを知り、入息短き時、入息短きを知り、出息の短き時、出息の短きを知る。譬へば旋

師、若は旋師の弟子の、繩長ければ長きを知り、繩短ければ短きを知るが如し。菩薩摩訶

薩も亦是の如し、一心に念じて入息の時、入息を知り、出息の時、入息を知り、入息長き

時は入息の長きを知り、出息長き時は出息の長きを知り、入息短き時は入息の短きを知り、

出息短き時は出息の短きを知る。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、内身中、身に循うて觀

じ、勤めて精進して一心に世間の貪憂を除く。不可得なるを以ての故に。復次に須菩提、

菩薩摩訶薩、身の四大を觀じて是念を作さく、身中に地大、水大、火大、風大有りと。

譬へば屠牛師、若は屠牛の弟子の刀を以て牛を殺し、分ちて四分と作し、四分と作し已り

て、若は立ち、若は坐して、此四分を觀するが如し。菩薩摩訶薩も亦是の如し、般若波羅

蜜を行ずる時、種種に身の四大、地大、水大、火大、風大を觀ず。是の如く須菩提、菩薩

摩訶薩、内身中、身に循うて觀ず。不可得なるを以ての故なり。復次に須菩提、菩薩摩訶

薩、内身を觀じ、是より頂に至るまで薄皮を周匝し、種種の不淨、身中に充滿す。是念

を作さく、身中に髮毛、爪齒、薄皮、厚皮、筋肉、骨髓、脾胃、心膈、肝肺、小腸、大腸、

胃脘、尿管、垢汗、目淚涕、涎唾、膿血、黃白痰陰、肪膜、腦膜有り」と。譬へば田夫の

倉中に隔てて雜穀を盛り、種種の稻、麻、黍、粟、豆、麥を充滿せんに、明眼の人は倉を開けば、即ち、是は麻、是は黍、是は稻、是は粟、是は麥なりと知り、分別して悉く知るが如し。菩薩摩訶薩も亦是の如し、是身は足より頂に至るまで、薄皮を周匝して、種種の不淨、身中に充滿す。髮毛爪齒より、乃至腦膜を觀す。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、内身を觀じ、勤めて精進して一心に世間の食變を除く。不可得なるを以ての故に。

復次に須菩提、菩薩摩訶薩、若し棄てられたる死人の身の、一日二日五日に至り、臃腫し、青痲し、膿汁の流出するを見て、自ら念すらく、「我身も亦、是の如きの相、是の如きの法なり。未だ此法を脱せず」と。是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩、内身中、身に循うて觀じ、勤めて精進して一心に世間の食變を除く。不可得なるを以ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、若し棄てられたる死人の身の、若は六日、若は七日にして、烏鴉、鸚鵡、豺狼、狐狗、是の如き等の種種の禽獸、體み裂きて之を食ふを見て、自ら念すらく、「我身も、是の如きの相、是の如きの法なり。未だ此法を脱せず」と。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、内身中、身に循うて觀じ、勤めて精進して、一心に世間の食變を除く。不可得なるを以ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、若し棄てられたる死人の身の、禽獸食し已り不淨爛臭なるを見れば、自ら念すらく、「我身も是の如きの相、是の如きの法なり、未だ此法を脱せず」と。乃至世間の食變を除く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、若し棄てられたる死人の身の、骨瑣、血肉塗染し、筋肉相連なるを見れば、自ら念すらく、「我身も是の如きの相、是

【二】本品は四念處に就いて大乘を辨じ、次に他の四乘等の道法即大乘なることを明す今釋して初に四念處に就いて明す

の如きの法なり。未だ此法を脱せず」と。乃至世間の貪憂を除く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、若し棄てられたる死人の身の骨、骨瑣已に散じて地に在るを知らば、自ら念すらく、「我身も是の如きの相、是の如きの法なり、未だ此法を脱せず」と。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、内身を觀じ乃至世間の貪憂を除く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、若し棄てられたる死人の身の骨散じて地に在り、脚骨處を異にし、膊骨、胛骨、腰骨、肋骨、脊骨、手骨、頂骨、鬚髯各各處を異にするを見れば、自ら念すらく、「我身も是の如きの相、是の如きの法なり、未だ此法を脱せず」と。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩、内身を觀じ、乃至世間の貪憂を除く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、是棄てられたる死人の骨、地に在ること歳久しく、風吹き日曝し、色白くして貝の如きを見れば、自ら念すらく、「我身も是の如きの相、是の如きの法なり、未だ此法を脱せず」と。是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩、内身を觀じ、乃至世間の貪憂を除く。不可得なるを以ての故に。』

問うて曰はく、「四念處の中には種種の觀有り。何を以てか但十二種の觀、謂ゆる若は内、若は外、若は内外を説く。復次に何等か是れ内なる、何等か是れ外なる。内外觀已りて何を以てか復次に別に内外を説く。復次に四念處中の一念處は是れ内なり、内法の中に攝す。謂ゆる心なり。二念處は是れ外なり、外法の中に攝す。謂ゆる受と法となり。一念處は是れ内外なり。内外の法中に攝す。謂ゆる身なり。何を以てか四法を説けば都て是れ内、都て是れ外、都て是れ内外なる。何を以てか但身を觀すと云はずして、而も身に循う

【三十七品】 佛道修行の法法の分類、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七菩提分、八聖道分これなり
 【五蓋】 心を蓋ふ五種の煩惱、欲貪蓋、瞋恚蓋、昏眠蓋、掉悔蓋、疑蓋のこと
 【三種の邪行】 或は身を、或は財を、又は兩者を重ねて執すること

【九受入】 眼耳等九孔をいふ。

て観ずと言ふ。云何が身を觀じて而も身覺を生ぜざる。何を以てか勤めて精進すること一心なりと言ふ。三十七品皆應に一心と言ふべし、何を以てか但此中に一心と言ふ。此中に若し四念處を修行する時は、一切の五蓋は應に除くべし。何を以てか獨り貪を除くと云ふ。世間の喜も亦能く道を妨ぐ、何を以てか但憂を除くと云ふ。身法を觀するに、種種の門有り。無常、苦、空、無我等なり。今何を以てか但不淨と言ふ。若し但不淨のみを觀せば、何を以てか復身の四威儀等を念ずる。此事は知り易し、何ぞ問ふに足らん。答へて曰はく、是三種の觀は、行者は此に従うて定心を得。先づ三種の邪行を來し、若は内、若は外、若は内外の三種の邪行を破す。是故に三種の正行有り。有人は内に著するの情多くして外に著するの情少し。人の身の爲の故に、能く妻子親屬寶物を捨つるが如し。有人は外に著するの情多くして、内に著するの情少し。人の財を食りて身を喪ひ、欲の爲に命を破するが如し。有人は内外に著するの情多し。是故に三種の正行を説く。復次に自身を内身と名け、他身を外身と名く。九受入を名けて内身と爲し、九不受入を名けて外身と爲す。眼等の五情を名けて内身と爲し、色等の五塵を名けて外身と爲す。是の如き等は内外を分別す。行者は先づ不淨、無常、苦、空、無我等の智慧を以て、内身を觀じ、是身の好相を得ず。若は淨相、若は常相、若は樂、若は我、若は實は内に既に得ず。復外身を觀じて淨、常、我、樂を求むるに實に亦不可得なり。若し得ざれば、便ち疑を生ず。「我内を觀する時、外に於て、或は錯り、外を觀する時、内に於て、或は錯る。今内外一時に俱に觀する

に亦不可得なり」と。是時、心に正定を得。是身の不淨、無常、苦、空、無我にして、病の如く、癰の如く、瘡の如く、九孔より穢を流す、是を行廁と爲し、久しからずして破壊し、離散し、盡く滅し、死するの相にして、常に飢渴、寒熱、鞭杖、繫閉、罵詈、毀咎、老病等の諸苦有りて常に尙遶し、自在なることを得ず。内空にして主無く、亦知者、見者、作者、受者無し。但空なるも諸法の因縁和合して而も有り、自ら生じ、自ら滅して、繫屬する所無き、猶草木の如しと知る。是故に、内外俱に觀ず。餘の内外の義は十八空の中に説くが如し。身に循うて觀ずとは、尋隨觀察して其不淨、衰老、病死、爛壞、臭處、骨節の腐敗磨滅して土に歸するを知る。我此身の如きは覆ふに薄皮を以てし、人をして狂惑し、蕪端憂畏せしむ。是を以ての故に身相の如く、内外隨逐し本末觀察す。又佛の説きたまふが如し、「身に循うて法を觀ず」と。身覺を生ぜずとは、身に一異の相を取りて而も戲論を生ぜざるなり。衆生は是身中に於て種種の覺を起す。淨覺を生ずる有り。不淨覺を生ずる有り。曠覺を生じて他の過罪を念ずる有り。有人は此身を觀じて身を何法とか爲す。諸の身分邊を一と爲し、異と爲す。是の如き種種の覺を生ぜず。所以は何ん。利益する所無く、涅槃の道を妨ぐるが故なり。復次に餘の凡夫、聲聞の人は、身相に取りて能く身を觀じ、菩薩は身相を取らずして而も能く身を觀ず。勤めて精進し、一心にとは、餘の世事巧便は無始世界より來、常に習ひ常に作す。若し常人と離別するは易く知識は離別し難し、知識を離別するは易く父子は離別し難し。父子を離別するは易く其身は自ら離れ難し。自

ら其身を離るるは易く其心を離るるは難し。自ら一心に勤めて精進せざれば此は得べからざるなり。譬へば燈をかりて火を求むるに、一心に勤めて著し、休まず息まざれば乃ち火を得べきが如し。是故に一心に勤めて精進すと説く。世間の貪憂を除くとは、貪を除けば則ち五蓋盡き去る。猶竹を破するに初節既に破すれば餘節皆去るが如し。復次に行者は五欲を遠離して出家學道し、既に世樂を捨て、未だ定樂を得ず。或時は心に憂念を生ず。魚の水を樂しむが如し。心相も是の如し、常に樂事を求め還りて本の欲する所を念ず。行者は多く是二心を生ず。是故に佛は、「當に貪憂を除くべし」と説きたまへり。貪を説くは即ち是れ世間を説くなり。喜、相應するを以ての故に。初に不淨を觀ずとは、人身は不淨にして薄皮を覆ふが故に、先づ淨相を生じ後に餘の倒生ず。是を以ての故に初に不淨觀を説く。復次に衆生は多く貪著して淨相を取らんと欲す。瞋恚、邪見は兩らざるが故に、是を以て先づ貪欲を治するに不淨を觀ず。身の四威儀等を念ずとは、先づ身賊を破せんと欲し、一心に人の爲す所の事、皆能く成辦することを得。是を以ての故に先づ其身の所爲、所行を尋繹し、來去臥覺に坐禪し、身の所作を觀ず。常に一心に安詳として錯らず、亂れず、是の如き觀察を作す。不淨三昧は得易きを以て、身は安詳なりと雖も、内に種種の惡しき覺觀有りて、其心を破亂す。是を以ての故に安那般那、十六分を説き、以て覺觀を防ぐ。安那般那の義は先に説くが如し。身既に安詳にして心錯亂無く、然る後に不淨觀を行すれば安隱牢固なり。若し先づ不淨觀を行すれば狂心錯亂するが故に、不淨反つて淨相と作

【安那般那】 アー
 ナーバーナ (Anāpāna) 數息觀と譯す。

【三念處】四念處の中、身念處を除く。
 【三十六】内身にある三十六の不淨物の謂、外相に髮毛、爪、齒、眵、

る。佛法の中には此二法を甘露の初門と名く。不淨觀とは、謂ゆる菩薩摩訶薩は、身を觀する草木瓦石の如くにして異なる無し。是身は外の四大變じて飲食と爲り、内身に充實す。堅き者は是れ地、濕ふ者は是れ水、熱する者は是れ火、動く者は是れ風なり。是四事、内に入れば即ち是れ身なり。是四分の中には各各我無く、我所無く、自相を隨逐して人意に隨はず。苦、空等も亦是の如く説くなり。若し坐し、若し立つとは、臥するは則ち懈怠なり。身動ぜざるが故に心も亦動ぜず。行けば則ち心亂る。身靜かならざるが故に、心も亦靜かならず。眼を以て事を見んと欲す。況んや見ざる所をや。故に譬喩を説く。牛は即ち是れ行者の身、屠兒は即ち是れ行者、刀は是れ利なる智慧なり。牛の命を奪ふは即ち是れ身の一相を破するなり。四分は即ち是れ四大なり。屠者は牛の四分を觀するに更に別牛無し、亦是牛にもあらず。行者の身の四大を觀するも亦是の如し。是四大は名けて身と爲さず。所以は何ん、此四身は一なるが故なり。又四大は是れ體相、身は是れ別相なり。若し外の四大を名けて身と爲さず、身中に入るを假に名けて身と爲す。我は四大の中に在らず、四大は我の中に在らず。我は四大を去ること遠く、但顛倒を以て安計して身と爲す。是散空の智慧を用て四大及び造色を分別し、然る後に、三念處に入りて道に入るを得。又此身は、是より髮に至り、髮より足に至るまで薄皮もて周匝す。反覆して思惟するに一として淨處無し。髮毛等より乃ち腦膜に至るまで、略説すれば則ち三十六、廣く説けば則ち業多なり。穀倉は是れ身、農夫は是れ行者、田に穀を種うるは、是れ行者の身業の因縁、實を

漢、涎、唾、尿、
 瀝、垢、汗の十二
 身器に、皮、膚、
 骨、肉、筋、脈、
 腦、髓、助、脊、内
 合に、肝、膽、腸、
 胃、脾、腎、心、
 肺、生藏、熟藏、
 赤痰、白痰の十二
 合して三十六なり

結びて倉に入るは、是れ行者の因縁熟して得る身なり。稻、麻、黍、粟等は、是れ身中の種種の不淨なり。農夫の倉を開いて、即ち麻、黎、麥、豆の、種種の別異を知るは是れ行者の不淨觀なり。慧眼を以て、是身倉を開見するに、此身中には不淨充滿し、必ず當に敗壞すべく、若し他來りて害し、若し當に自ら死すべきを知る。此身中には但屎尿の不淨、種種の惡露等のみ有り。已に内身の不淨を觀じ、今外身の敗壞を觀ず。是故に二種の不淨を説く。一には已に壞し、二には未だ壞せず。先づ己身の未だ壞せずして識有るを觀するに、若し結使薄き利根の人は即ち患厭を生ず。鈍根にして結厚き者は、死人の已に壞して畏るべく惡むべきを觀ず。若し死して一日より五日に至るまでは視里猶尙守護し、是時禽獸未だ食はず。青瘀腫脹し、膿血流出し、腹脹れて破裂し、五藏爛壞し、屎尿の臭處、甚だ惡厭すべし。行者苦心に念すらく、「此色は、先には好く行き來し、言語し、妖蠱の姿、だ惡厭すべし。行人苦心に念すらく、「此色は、先には好く行き來し、言語し、妖蠱の姿、則ち人情を惑亂し、姪者愛著せり。今之を觀るに好色安に在る」と。佛の説きたまふ所の如くんば、眞に是れ幻法にして、但無智の眼を誑はすのみ。今此實事露現す。行者は即ち念すらく、「我身と彼と等しうして異なる有る無し。未だ此法を脱せず。云何が自に著し彼に著せん。又亦何ぞ自ら重んじ、他を輕んずることを爲さん」と。是の如く觀じしりて、心則ち調伏し、以て道を求め、能く世間の貪憂を除くべし。又復思惟すらく、「此屍は初め死する時、鳥獸之を見て、死人に非ずと謂ひ、敢て來り近づかず。是を以ての故に説けり、一六七日を過ぐれば靉成既に去り、鳥鷲、野干の屬競ひ來り之を食ひ、皮肉既に盡き、

【四樂行】一に糞
 被衣、二に乞會、
 三に樹下坐、四に
 身心寂靜なり、四
 樂業ともいふ。

日日に變異す。是を以ての故に説けり。但骨人のみ有り、其を見るに此の如し。と。更に
 厭心を生じ、念じて言はく、「是心狂、皮肉には、實に我有ること無し。但是の都合するに
 因りて罪福の因縁を集め、苦を受くること無量なり」と。即ち復自ら念すしく、「我身も、
 久しからずして、會して當に是の如くなるべし。未だ此法を離れず」と。或時、行者は骨
 人の地に在りて、雨水に滲浸し日に曝し、風吹き、但白骨のみ有るを見る。或は久しうし
 て骨筋斷え、節解分散して處を異にし、其色腐の如く、或は腐朽爛壞して土と色を同
 るを見る。初に二十人物を觀じ、死屍腫脹の一日より五日に至るは是れ不淨體なり。白膿
 來り食するより肉と土と色を同うするに至るまでは是れ無常體なり。是中に我と我肉とを
 求むるに不可得なる先に説くが如し。因縁生にして自在ならざるが如なり。是れ我體な
 り。身相を觀するに此の如くにして一として樂むべきもの無く、若し著有る者は即ち樂言
 を生ず。是を苦觀と名く。四樂行を以て外身を離す。自ら己身を知るも、亦復是の如く
 然して後内外俱に觀す。若し心散亂せば、當に老病死、三惡道の苦、身命の無常、佛法の
 滅せんと欲するを念すべし。是の如き等、心を離ちて伏せしめ、還つて不淨觀中に繋ぐ。
 是を勤めて精進すと名く。一心に勤めて精進するが故に、能く貪癡を除く。貪癡の賊は
 我法寶を劫がす。行者は是念を作さく、「是身は無常、不淨にして、思むべきこと是の如し。
 學生は何が故に此身に貪著し、種種の罪の因縁を起す」と。是の如く思惟し已りて、「是身
 中には五情有、外には五欲有りて和合するが故に世間の顛倒の樂を生ず」と知る。人心

は樂を求めて初より住する時無し。當に此樂を觀ずべし。實とせんか、虚とせんか、身の
 堅固なるすら猶尙散滅す。何に況んや此樂をや。此樂も亦住する時無し。未來は未だ有ら
 ず。過去は已に滅す。現在に住せずして念念に皆滅す。苦を遮するを以ての故に樂と名く。
 實の樂有ること無し。譬へば、飲食の如し。飢渴の苦を除くが故に暫くもて樂と爲せども、
 度を過ごせば、則ち復苦を生ずる、先に樂を破する中に説けるが如し。則ち知る、世間の
 樂は皆苦の因縁より生じ、亦能く苦果を生ず、人を誑はす須臾にして、後の苦は無量なる
 を。譬へば美食に毒を雜へて食するに、香美なりと雖も毒は則ち人を害するが如し。世間
 の樂も亦是の如く、淫欲煩惱等の毒の故に、智慧の命を奪ひ、心則ち狂惑し、利を捨て
 て衰を取る。誰か此樂を受くるや。唯心識のみ有り。此心を諦觀するに念念生滅の相續有
 るが故に、相を取ることを得べし。譬へば水波、燈焰の如し。苦を受くる心は樂心に非ず。
 樂を受くる心は苦心に非ず。不苦不樂を受くる心は、苦樂心に非ず。時相各異り。是を
 以ての故に心は無常なり。無常なるが故に自在ならず、自在ならざるが故に我無し。想思、
 憶念等も亦是の如し。餘の三念處の内外の相は先に説くが如し。是四聖行を行すれば四
 顛倒を破し、四顛倒を破するが故に實相門を開き、實相門を開き已りて本智ふ所を愧づ。
 譬へば人の夜、不淨地に食し、非を了知するや、其事を羞愧す。是四法を觀するに不淨、
 無常等なり。是を苦諦と名く。是苦は愛等の諸の煩惱に因る。是れ集諦なり。愛等の諸
 の煩惱斷するは是れ滅諦なり。愛等の諸の煩惱を斷する方便は是れ道諦なり。是の如く

【二】四念處と四正勤と四如意足との同異に就いて明

四諦を觀じ、涅槃の道を信じ、心快樂に住して、無漏の如きに似たり。是を煖法と名く。人の火を擡るに並に煖氣有れば必ず火を望み得るが如し。此法を信じ已りて心に佛の是法を愛樂す。佛の説きたまへる所の如し。如し好藥を服して病を差せば、師を妙と爲す。其の藥を服せんに病差ゆれば人中第一なりと知る。是れ則ち僧を信するなり。是の如く三寶を信じ、煖法増進し、罪福停等なるが故に名けて頂法と爲す。人の山に上りて頂に至れば、兩邊の道里、俱に等しきが如し。頂より忍乃至阿羅漢に至るは是れ一邊の道なり、煖より頂に至るも是れ一邊の道なり。聲聞法の中にて四念處を觀じ、得る所の果報は是の如し。菩薩の法は、是觀の中に於て本願を忘れず、大悲を捨てず。先づ不可得空を用て心地を調伏し、是地中に住すれば煩惱有りと雖も心常に墮せず。人の未だ賊を殺さずと雖も一處に繫閉するが如し。菩薩の頂法は先の法位の中に説くが如し。忍法、世間第一法は則ち是れ菩薩の柔順法忍なり。須陀洹道より乃ち阿羅漢、辟支佛道に至るは即ち是れ菩薩の無生法忍なり。佛、後品に自ら説きたまへるが如し、「須陀洹の若は智、若は果は、皆是れ菩薩の無生法忍なり」と。

四正勤、四如意足は各各別なりと雖も、位は皆四念處中に在り。慧多きが故に四念處と名け、精進多きが故に四正勤と名け、定多きが故に四如意足と名く。問うて曰はく、「若し闍らば何を以てか智處を説かずして念處を説く。答へて曰はく、「初めて習行する時は未だ智有るに及ばず、念を初門と爲して常に其事を念す。是智慧は念に隨ふ、故に念を以て名と

爲す。四念處の實體は是れ智慧なり。所以は何ん。内外の身を觀するは即ち是れ智慧なればなり。智慧を念持し、緣中に在りて散亂せしめざるが故に念處と名く。九十六種の邪行の、道を求むると相違す。故に正勤と名く。諸の外道等は五欲を捨て、自ら身を苦しむるも惡不善を捨つること能はず、諸の善法を積む能はず。例には兩種の斷有り。惡不善法の已に來る者は除き却け、未だ來らざる者は防ぎて生ぜざらしむ。善法にも亦二種有り。未だ生ぜざる善法を生ぜしめ、已に生ぜる善法を増長せしむ。是を正勤と名く。智慧の火は、正勤の風を得れば燒かざる所無し。正勤若し過ぐれば、心則ち散亂して智火微弱なり。火の風を得るを過ぐれば或は滅し、或は微にして燒燬する能はざるが如し。是故に須らく定を以て過ぐるを制すべし。精進の風は則ち定を得べし。定に四種有り。欲定と、精進定と、心定と、思惟定となり。四念處中の過ぐるを制するは智慧なり。是時、定慧の道は、精進を得るが故に欲する所意の如し。後に意の如く、事を辦ずることを得るが故に如意足と名く。足とは如意の因縁に名け、亦分に名く。是十二法を、鈍根の人の中にては名けて根と爲す。樹に根有るも未だ力有らざるが如し。若し利根の人の中にては名けて力と爲す。是事を了了に能く、疾に辦する所有り、利刀の物を截るが如くなるが故に力有りと名く。事未だ辦せざるが故に名けて道と爲す。事辦じ、思惟し、修行するが故に名けて覺と爲す。三十七品の論議は先に説くが如し。

(三) 問うて曰はく、『若し菩薩、此三十七品を修せば云何が涅槃を取らざる。』答へて曰はく、

【三】菩薩三十七品等を修するも涅槃を明す。

「本願牢きが故に、大悲心深く入るが故に、了了に諸法實相を知るが故に、十方諸佛の護念したまふが故に。經に説くが如し。菩薩住地に到れば、外に諸法の空を觀し、内に無我を觀す。人の夢中に繩を縛び、河を渡るに中流にして覺めて、是念を作すが如し。我空しく自ら疲れ苦しむ、河無く、楫無し、我何の渡る所ぞ」と。菩薩の爾時も、亦是の如く、心に則ち悔い厭ひ、「我何の度る所ぞ、何の滅する所かある」と。且自ら倒心を滅せんと欲す。是時、十方の佛は手を伸べ、頭を摩で、「善哉、佛子、悔心を生ずること莫れ、汝が本願を念せよ。汝は此衆生の未だ悟らざるを知ると雖も、汝、當に此空法を以て、衆生を教化すべし。汝が得る所の者は、始、是一門なり。諸佛の無量の身、無量の音聲、無量の法門、一切の智慧等、汝は皆未だ得ず。汝は諸法の空を觀するが故に是涅槃に著す。諸法空の中には滅處有る無く、善處有る無し。若し實に滅あらば汝は先より來已に滅せり。汝は未だ六波羅蜜、乃至十八不共法を具足せず。汝、當に此法を具足して道果に坐する、諸佛の法の如くなるべし」と。復次に三三昧、十一智、三無漏根、覺觀三昧、十念、四禪、四無量心、四無色定、八背捨、九次第定は、先に説くが如し。復次に佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法は、初品の中に説くが如し。是諸法は、後若無所得を用ての故に、般若波羅蜜と畢竟空との和合を以ての故に、世間の食養を除くと名く。不可得なるを以ての故に。

〔釋〕 復次に須菩提、菩薩摩訶薩、是乘てられたる死人の、骨地に在る歳久しく、其色顏の

精進力、念力、定力、慧力、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故に。
 復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる七覺分なり。何等か七なる。菩薩摩訶薩
 は念覺分を修し、離に依り、無染に依りて涅槃に向へば、擇法覺分、精進覺分、喜覺分、除
 覺分、定覺分、捨覺分の離に依り、無染に依りて涅槃に向ふ。不可得なるを以ての故に。
 是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる八聖道
 分なり。何等か八なる。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定な
 り。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶
 薩の摩訶衍とは、謂ゆる三三昧なり。何等か三なる。空、無相、無作の三昧なり。空三昧
 とは、諸法の自相空に名く。是を空解脫門と爲す。無相は諸法の相を壊し、憶せず、念せ
 ざるに名く。是を無相解脫門と爲す。無作は、諸法の中の不作願に名く。是を無作解脫門
 と爲す。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故に。復次に須菩提、菩薩
 摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる苦智、集智、滅智、道智、盡智、無生智、法智、比智、世智、
 他心智、如實智なり。云何が苦智と名くる。苦の不生なるを知る、是を苦智と名く。云何
 が集智と名くる。集の應に斷すべきを知る、是を集智と名く。云何が滅智と名くる。苦の
 滅するを知る、是を滅智と名く。云何が道智と名くる。八聖道分を知る、是を道智と名く。
 云何が盡智と名くる。諸の姪、怒、癡の盡くるを知る、是を盡智と名く。云何が無生智
 と名くる。諸有の中の無生を知る、是を無生智と名く。云何が法智と名くる。五衆の本事

を知る、是を法智と名く。云何が比智と名くる。眼の無常なる、乃至意憊因縁生の受の無常なるを知る、是を比智と名く。云何が世智と名くる。因縁名字を知る、是を世智と名く。云何が他心智と名くる。他の衆生の心を知る、是を他心智と名く。云何が如實智と名くる。諸佛の一切種智を知る、是を如實智と名く。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる三根、即ち未知欲知根、知根、知者根なり。云何が未知欲知根と名くる。諸の學人の未だ果を得ざる、信根、精進根、念根、定根、慧根、是を未知欲知根と名く。云何が知根と名くる。諸の學人の果を得たる、信根、乃至慧根、是を知根と名く。云何が知者根と名くる。諸の學人、若は阿羅漢、若は時支佛、諸佛の信根、乃至慧根、是を知者根と名く。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる三三昧なり。何等か三なる。有覺有觀三昧、無覺有觀三昧、無覺無觀三昧なり。云何が有覺有觀三昧と名くる。諸欲を離れ、惡、不善の法を離れて有覺有觀、離生喜樂、初禪に入る、是を有覺有觀三昧と名く。云何が無覺有觀三昧と名くる。初禪と二禪の中間の禪、是を有覺無觀三昧と名く。云何が無覺無觀三昧と名くる。二禪、乃至非有想非無想定、是を無覺無觀三昧と名く。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる十念なり。何等か十念なる。佛念、法念、僧念、戒念、捨念、天念、滅念、出入息念、身念、死念なり。須菩提、是を

菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる四無量心、四無色定、八背舍、九次第定なり。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる佛の十力なり。何等をか十となす。佛の如實に一切法の是處、不是處の相を知りたまふは、一の力なり。如實に他の衆生の過去、未來、現在の諸業、諸受の法を知り、造業の處を知り、因縁を知り、報を知りたまふは二の力なり。如實に諸禪、解脫、三昧、定の垢淨の分別の相を知りたまふは三の力なり。如實に他の衆生の諸根の上下の相を知りたまふは四の力なり。如實に他の衆生の種種の欲解を知りたまふは五の力なり。如實に世間の種種の無數の性を知りたまふは六の力なり。如實に一切の至る處の道を知りたまふは七の力なり。種種の宿命に相有り、因縁有りて、一世二世乃至百千世劫、初劫より盡くるまで、我、彼衆生の中に在りて生じ、是の如きの姓、是の如きの名、是の如きの飲食、苦樂、壽命長短にして彼中に死し、是間に生じ、是間に死し、還つて是間に生じ、此間の生の姓名、飲食、苦樂、壽命の長短も、亦是の如しと知りたまふは、八の力なり。佛の天眼は淨うして諸の天眼に過ぎ、衆生の死時、生時、端正、醜陋、若は大、若は小、若は惡道に墮し、若は善道に墮す。是の如きの業因縁の受報、是諸の衆生の惡身業を成就し、惡口業を成就し、惡意業を成就し、聖人を謗毀して、邪見の業因縁を受くるが故に、身壞死する時惡道に入り、地獄中に生ず。是諸の家生の善身業を成就し、善口業

を成就し、善意業を成就し、聖人を誘毀せず、正見の業因縁を受くるが故に、身壞に就く時、善道に入り、天上に生ずるを見たまふは九の力なり。佛、如實に諸漏盡くるを知りたまふが故に、無漏心解脱し、無漏慧解脱し、現在法の中、自ら證知して是法に入りたまふ。謂ゆる我生は已に盡き、梵行を已に作し、今世より復後世を見たまはざるは十の力なり。須菩提、是を善喜薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは謂ゆる四無所畏なり。何等か四なる。佛は誠言を作したまはく、「我は是れ一切正智の人なり」と。若は沙門、婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆有りて如實に難じて言はく、「是法知らず」と。乃至是微畏の相をも見ず。是を以ての故に我は安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住し、大衆の中に在りて獅子吼し、能く梵輪を轉ず。諸の沙門、婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘の衆の實に轉ずる能はざるは一の無畏なり。佛、誠言を作したまはく、「我は一切の漏を盡せり」と。若は沙門、婆羅門有り、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘の衆は如實に難じて言はく、「是れ漏盡きず」と。乃至是微畏の相を見ず。是を以ての故に我は安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住し、大衆の中に在りて能く獅子吼し、能く梵輪を轉ず。諸の沙門、婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘の衆の實に轉ずる能はざるは二の無畏なり。佛、誠言を作したまはく、「我は障法を説く」と。若は沙門、婆羅門有り、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆は如實に難じて言はく、「是法を受くるも道を障へず」と。乃至是微畏の相を見ず。是を以て

の次に我は安隱を得、畏るる所無きを得、聖主の處に安住し、大衆の中に在りて、獅子吼して能く梵輪を轉ず。諸の沙門、婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆の實に轉ずる能はざるは三の無畏なり。佛、誠言を作したまはく、「我説く所の聖道は、能く世間を出づ。是行に隨へば、能く苦を盡くす」と。若は沙門、婆羅門有り、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆は如實に難じて言はく、「是道を行するも世間を出づること能はず、苦を盡くすこと能はず」と。乃至是微畏の相をも見ず。是を以ての故に我は安隱を得、畏るる所無きを得、聖主の處に安住し、大衆の中に在りて獅子吼し、能く梵輪を轉ず。諸の沙門、婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆の實に轉ずる能はざるは四の無畏なり。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる四無礙智なり。何等か四なる。義無礙、法無礙、辭無礙、樂無礙なり。義無礙とは、諸法真相の義を知り、法無礙とは、諸法の名を知り、辭無礙とは、辭中の無礙なるを言ひ、樂無礙とは、審論に言うて盡くる無きなり。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる十八不共法なり。何等か十八なる。一に諸佛は身に失無し。二に口に失無し。三に念に失無し。四に異想無し。五に不定の心無し。六に不知已捨の心無し。七に欲減する無し。八に情進減する無し。九に念減する無し。十に慧減する無し。十一に解脫減する無し。十二に解脫知見減する無し。十三に一切の身業、智慧に隨うて行ず。十四に一

切の口業智慧に隨うて行す。十五に一切の意業智慧に隨うて行す。十六に智慧もて過去世
 を知見するに礙無く障無し。十七に智慧もて未來世を知見するに礙無く障無し。十八に智
 慧もて現在世を知見するに礙無く障無し。須菩提、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。不可
 得なるを以ての故に。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる字等、語等、諸字
 入門なり。何等か字等、語等、諸字入門なる。阿字門は一切法初めより生ぜざるが故に。
 羅字門は一切法垢を離るるが故に。波字門は一切法第一義なるが故に。遮字門は一切法終
 に得べからざるが故に。諸法は終らず生ぜざるが故に。那字門は諸法は名を離れ、性相、
 得ず失せざるが故に。邏字門は諸法、世間を度するが故に、亦愛妙の因縁滅するが故に。
 陀字門は諸法、善心生ずるが故に、亦施相の故に。婆字門は諸法、婆字を離るるが故に。
 荼字門は諸法、荼字淨きが故に。沙字門は諸法、六自在正性清淨なるが故に。和字門は
 諸法に入るに、語言の道斷するが故に。多字門は諸法に入るに、如相は不動なるが故に。
 夜字門は諸法に入るに、實の如く不生なるが故に。吒字門は諸法に入るに、制伏は不可得
 なるが故に。迦字門は諸法に入るに、作者は得べからざるが故に。婆字門は諸法に入るに
 時得べからざるが故に。諸法は、時未だ轉ぜざるが故に。磨字門は、諸法に入るに我所は
 得べからざるが故に。伽字門は、諸法に入るに去る者は不可得なるが故に。他字門は、諸
 法に入るに處不可得なるが故に。闍字門は、諸法に入るに生は不可得なるが故に。箴字門
 は、諸法に入るに箴字は不可得なるが故に。歎字門は諸法に入るに性は不可得なるが故に。

に。賧字門は、諸法に入るに定は不可得なるが故に。吐字門は、諸法に入るに虚空は不可得なるが故に。又字門は、諸法に入るに盡は不可得なるが故に。哆字門は、諸法に入るに有は不可得なるが故に。若字門は、諸法に入るに智は不可得なるが故に。抱字門は、諸法に入るに拖字は不可得なるが故に。婆字門は、諸法に入るに破壞は不可得なるが故に。車字門は、諸法に入るに轍は不可得なるが故に。影の如く、五衆も亦不可得なるが故に。魔字門は、諸法に入るに魔字は不可得なるが故に。火字門は諸法に入るに喚は不可得なるが故に。蹉字門は、諸法に入るに蹉字は不可得なるが故に。伽字門は諸法に入るに原は不可得なるが故に。他字門は、諸法に入るに處不可得なるが故に。拏字門は、諸法に入るに不來、不去、不立、不坐、不臥なるが故に。頗字門は、諸法に入るに邊は不可得なるが故に。歌字門は、諸法に入るに聚は不可得なるが故に。薩字門は、諸法に入るに聲字は不可得なるが故に。遮字門は、諸法に入るに行は不可得なるが故に。陀字門は、諸法に入るに驅は不可得なるが故に。荼字門は、諸法に入るに變竟の處なるが故に終ら字生せず。茶を過ぎて字の得べき無し。何を以ての故に。更に字無きが故に。諸字は爾無く、名無く、亦減せず、亦説くべからず、示すべからず、見るべからず、書くべからず。須菩提、當に知るべし、一切の諸法は虚空の如し。須菩提、是を陀羅尼門と名く。謂ゆる阿字の義、若は菩薩摩訶薩、是諸字門即、阿字即、若は聞き、若は受け、若は誦し、若は讀み、若は持し、若は他の爲に説く。是の如く知らば當に二十の功德を得べし。何等か二十なる。強き

識念を得、慚愧を得、堅固心を得、經の旨趣を得、智慧を得、樂說無礙を得、諸の陀羅
 尼門を得易し。疑悔無き心を得、善を聞くも喜ばず、惡を聞くも怒らざるを得。高からず、
 下からず、住し、心に増減無きを得、善巧に衆生の語を知るを得、巧に五衆、十二入、十
 八界、十二因縁、四縁、四諦を分別するを得、巧に衆生の諸根の利鈍を分別するを得、巧
 に他心を知るを得、巧に日月、歲節を分別するを得、巧に天耳通を分別するを得、巧に宿
 命通を分別するを得、巧に生死通を分別するを得、能く巧に是處、非處を説くを得、巧に
 往來坐起等の身の威儀を知るを得、須菩提、是陀羅尼門、字門、阿字門等、是を菩薩摩訶
 薩の摩訶衍と名く。不可得なるを以ての故に。

【四】次に四正勤
 これ大乘等と明す
 中字語等これ大乘
 といふを釋す。先
 づ四十二字を説く

釋して曰はく、「字等語等とは是陀羅尼は、諸字に於て平等にして愛憎有る無く、又此
 諸字は因縁未だ會せざる時も亦終歸する無く、亦現在する無く、亦無所有なり。但吾我の
 心中に住して憶想、分別、覺觀の心もて説くのみ。是散亂の心もて説くも實事を見ず。風
 の水を動かせども、則ち見る所無きが如し。等とは畢竟空涅槃と同等なり。菩薩は此陀羅尼
 を以て一切諸法に於て通達無礙なり。是を字等語等と名く。問うて曰はく、「若し略説すれ
 ば則ち五百の陀羅尼門、若し廣説すれば無量の陀羅尼門有り。今何を以てか是字等の陀羅
 尼門を説き、名けて諸の陀羅尼門と爲す。答へて曰はく、「第一の大なる者を説けば則
 ち餘は皆説けるを知る。此は是れ諸の陀羅尼門の初門なり。初を説けば餘も亦説くべしなり。
 復次に諸の陀羅尼の法は、皆分別に従うて字語生ず。四十二字は是れ一切字の根本なり。

字に因りて語有り。語に因りて名有り、名に因りて義有り。菩薩は若し字、字に因るを聞けば、乃至能く其義を了る。是字の初は阿、後は荼なり。中に四十有りて、是字陀羅尼を得。菩薩若し一切の語の中に、阿字を聞けば即時に義に隨ふ。謂ゆる一切法は初より來不生の相なり。阿提とは秦に初と言ふ。阿耨波陀は秦に不生と言ふ。言し羅字を聞けば即ち義に隨うて一切法の垢相を離るるを知る。羅闍は秦に垢と言ふ。若し波字を聞けば即時に一切法の第一義中に入るを知る。波羅木陀は秦に第一義と言ふ。若し迦字を聞けば即時に一切諸行皆行に非ざるを知る。遮梨夜は秦に行と言ふ。若し那字を聞けば即ち一切法は不得、不失、不來、不去なるを知る。那是秦には不と言ふ。若し邏字を聞けば即ち一切法の法は輕重の相を離るるを知る。邏求は秦に輕と言ふ。若し陀字を聞けば即ち一切法の善相を知る。陀摩は秦に善と言ふ。若し婆字を聞けば即ち一切法の縛無く解無きを知る。婆陀は秦に縛と言ふ。若し荼字を聞けば即ち諸法の不熱相を知る。南天竺の荼闍他は秦に不熱と言ふ。若し沙字を聞けば即ち人身の六種の相を知る。沙は秦には六と言ふ。若し波字を聞けば即ち一切諸法は語言の相を離るるを知る。和波他は秦に語言と言ふ。若し多字を聞けば即ち諸法は如の中に在りて、動ぜざるを知る。多他は秦に如と言ふ。若し夜字を聞けば即ち諸法は實相中に入りて不生不滅なるを知る。夜他跋は秦に實と言ふ。若し吒字を聞けば即ち一切法は障礙の相無きを知る。吒婆は秦に障礙と言ふ。若し迦字を聞けば即ち諸法中に作者有る無きを知る。迦邏迦は秦に作者と言ふ。若し婆字を聞けば即ち一切法、

一切種は不可得なるを知る。薩婆は秦に一切と言ふ。若し麁字を聞けば即ち一切法は我所を離るるを知る。魔迦羅は秦に我所と言ふ。若し伽字を聞けば即ち一切法の底は不可得なるを知る。伽陀は秦に底と言ふ。若し他字を聞けば即ち四句の如去は不可得なるを知る。多陀阿伽陀は秦に如去と言ふ。若し聞字を聞けば即ち諸法の生老は不可得なるを知る。聞提闍羅は秦に生老と言ふ。若し濕波字を聞けば即ち一切法は皆不可得なるを知る。濕波字の如きは不可得なり。濕波字は義無きが故に釋せず。若し駄字を聞けば即ち一切法中法性は不可得なるを知る。駄摩は秦に法と言ふ。若し賒字を聞けば即ち諸法寂滅の相を知る。賒多是秦に寂滅と言ふ。若し呿字を聞けば即ち一切法虚空は不可得なるを知る。呿伽は秦に虚空と言ふ。若し又字を聞けば即ち一切法の盡は不可得なるを知る。又耶は秦に盡と言ふ。若し哆字を聞けば即ち諸法の邊の不可得なるを知る。阿利迦哆度求那は秦に是事の邊に何の利をか得ると言ふ。若し若字を聞けば即ち一切法の中に智相無きを知る。若那は秦に智と言ふ。若し他字を聞けば即ち一切法の義は不可得なるを知る。阿他は秦に義と言ふ。若し婆字を聞けば即ち一切法は破す可らざるの相なるを知る。婆伽は秦に破と言ふ。若し車字を聞けば即ち一切法のよる所無きを知る。伽車提は秦に去と言ふ。若し濕伽字を聞けば即ち諸法は牢堅にして、金剛石の如くなるを知る。阿濕伽は秦に石と言ふ。若し火字を聞けば、即ち一切法は音聲の相無きを知る。火夜は秦に喚來と言ふ。若し賒字を聞けば、即ち一切法は慳無く麁相無きを知る。末賒羅は秦に慳と言ふ。若し伽字を聞けば即ち諸法

は厚からず、薄からざるを知る。伽那是秦に厚と言ふ。若し茶字を聞けば即ち諸法は住處
 無きを知る。南天竺の他那は秦に處と言ふ。若し拏字を聞けば、即ち一切法、及び衆生の
 不來、不去、不坐、不臥、不立、不起なるを知る。衆生も空、法も空なるが故に。南天竺
 の拏は秦に不と言ふ。若し頗字を聞けば、即ち一切法は因果空なるを知る。故に頗羅は秦
 に果と言ふ。若し歌字を聞けば即ち一切法、五蘊は不可得なるを知る。歌大は秦に衆と言
 ふ。若し醜字を聞けば即ち醜字は空なり、諸法も亦爾なるを知る。若し遮字を聞けば即ち
 一切法は不動の相なるを知る。遮羅地は秦に動と言ふ。若し吒字を聞けば即ち一切法は、
 此彼の岸、不可得なるを知る。多羅は秦に岸と言ふ。若し茶字を聞けば即ち一切法は必ず
 不可得なるを知る。波茶は秦に必と言ふ。茶の外に更に字無し。若し更に有れば是れ四十
 二字の枝派なり。是字は常に世間に在りて相似相續するが故に、一切の語に入るが故に、
 無礙なり。國國に不同にして一定の名無し。故に無名と言ふ。聞き已りて便ち盡くるが故
 に滅と言ふ。諸法は法性に入れれば皆不可得なり。而も況んや字けて説くべけんや。諸法は
 憶想分別無し、故に示すべからず。先づ意業もて分別す、故に口業有り。口業の因縁の故
 に身業もて字を作る。字は是れ色法にして或は眼に見、或は耳に聞き、衆生は強ひて名字
 を作せども因縁無し。是を以ての故に見るべからず、書くべからず。諸法は常に空なるこ
 と、虚空の相の如し。何に況んや字をや。説き已れば便ち滅す。是れ文字陀羅尼なり。是
 れ諸の陀羅尼門なり。

【五】陀羅尼を知れば二十の功徳を得といふを問す。

(五) 問うて曰はく、是陀羅尼門の因縁を知る者は、應に無量無邊の功徳を得べし。何を以てか但二十を説く。答へて曰はく、一佛も能く諸餘の無量無邊の功徳を説きたまへり。但般若波羅蜜を説くを廢するを以ての故に、但略して二十を説きたまへるのみ。強き識念を得とは、菩薩は是陀羅尼を得て、常に諸字の相を觀じ、修習し、憶念するが故に強き識念を得。慚愧を得とは、諸の善法を集め、諸の惡法を厭ふが故に大慚愧の心を生ず。堅固を得とは、諸の福德智慧を集むるが故に心に堅固なる、金剛の如くなるを得。乃至阿鼻地獄の事すら、尚阿耨多羅三藐三菩提を退かず。何に況んや餘の苦をや。經の旨趣を得とは、佛の五種の方便の説法を知るが故に、名けて經の旨趣を得と爲す。一には種種の門を作して説法するを知り、知りて法を説く。二には何事の爲に説くかを知る。三には方便を以ての故に説くを知る。四には理趣を示すが故に説くを知る。五には大悲心を以ての故に説くを知る。智慧を得とは菩薩は是陀羅尼に因りて、諸字を分別し破散するに、言語も亦空なり。言語空なるが故に名も亦空なり。名空なるが故に義も亦空なり。畢竟空を得れば、即ち是れ般若波羅蜜の智慧なり。樂説すとは既に是の如き、畢竟清淨無礙の智慧を得れば、本願の大悲心を以て、衆生を度するが故に樂説し易し。陀羅尼を得とは、譬へば、竹を破るに初節既に破るれば、餘は皆易きが如し。菩薩も亦是の如く、是文字陀羅尼を得れば、諸の陀羅尼は自然にして得。疑悔の心無しとは諸法實相の中に入れば、未だ一切の智慧を得ずと雖も、一切深法の中に於て疑無く悔無し。善を聞いて喜ばず、惡を聞いて瞋らずとは、

各各諸字を分別して、讚歎する無く、毀替する無きが故に、善を聞いて喜ばず、惡を聞いて曠らす。高からず下からずとは、憎愛を斷ずるが故なり。善く巧に衆生の語を知るとは、一切衆生の言語、三昧、解するを得るが故なり。巧に五衆、十二入、十八界、十二因縁、四縁、四諦を分別すとは、五衆等の義は先に説くが如し。巧に衆生の諸根の利鈍を分別すとは、他心、天眼、宿命を知る。巧に是處非處を説くとは十力の中に説くが如し。巧に往來坐起等を知るとは、阿耨跋致の中に説く所の如し。日月歲節とは、日とは日より且に至るに名け、初分、中分、後分なり。夜も亦三分なり。一日一夜に三十時あり。春秋分の時には、十五時は晝に屬し、十五時は夜に屬す。餘時は増減有り。五月に至れば晝は十八時、夜は十二時なり。十一月に至れば夜は十八時、晝は十二時なり。一月は或は三十日、或は三十日半、或は二十九日、或は二十七日半なり。四種の月有り。一には日の月、二には世間の月、三には月の月、四には星宿の月なり。日の月とは三十日半なり。世間の月とは三十日なり。月の月とは二十九日に、六十二分の三十を加ふ。星宿の月とは二十七日に六十七分の二十一に加ふ。閏月とは、日の月、世間の月の二事の中より出づ。是を十三月と名く。或は十二月或は十三月を一歳と名く。是の歳は三百六十六日なり。周りて而して復始まる。菩薩は日中の分時、前分已に過ぎ、後分未だ生せず、中分は中に住する處無く、相として取るべき無しと知る。日分は空にして無所有なり。三十日に到る時は二十九日は已に滅す。云何が和合して月を成さん。月、無なるが故に。云何が和合して歳を爲

さん。是を以ての故に、佛言はく、「世間の法は、幻の如く、夢の如し、但是れ心を誑はすの法なり」と。菩薩は能く世間の日、月、歳、の和合を知り、能く破散して、無所有なるを知る。是を巧に分別すと名く。是の如き等の種種の分別、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。』

大智度論釋發趣品第二十

卷第四十九

龍樹菩薩造
後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

佛、須菩提に告げたまはく、「汝問はく、「云何が菩薩摩訶薩、大乘に發趣する」と。
若し菩薩摩訶薩、六波羅蜜を行する時、一地より一地に至る、是を菩薩摩訶薩の大乗に發
趣すと名く。」と、須菩提、佛に白して言さく、「世尊、云何が菩薩摩訶薩、一地より一地に
至る。」佛言はく、「菩薩摩訶薩、一切法に來去の相無く、亦法の若は來り、若は去り、若
は至り、若は至らざるものある無きを知る。諸法の相の不滅なるが故なり。菩薩摩訶薩、
諸地に於て、念せず、思惟せず、而も地業を修治し、亦地を見ず。何等か菩薩摩訶薩の地業
を治むる。菩薩摩訶薩、初地に住する時、十事を行ふ。一には深心堅固、是れ不可得なる
が故なり。二には一切衆生の中に於て等心なり。衆生の不可得なるが故なり。三には布施
もて人に與ふ。受くる人不可得なるが故なり。四には善知識に親近して自ら高うせず。五
には法を求む。一切法不可得なるが故なり。六には常に出家す。家不可得なるが故なり。
七には佛心を愛樂す。相好不可得なるが故なり。八には法教を演出す。諸法の分別不可得
なるが故なり。九には憍慢を破す。法、生、慧不可得なるが故なり。十には實語す。諸語

不可得なるが故なり。菩薩摩訶薩、是の如く初地の中に住して十事を修治し地業を治む。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、二地の中に住して八法を念ず。何等か八なる。一には戒清淨なり。二には恩を知り、恩を報ず。三には忍辱に住す。四には歡喜を受く。五には一切の衆生を捨てず。六には大悲心に入る。七には師を信じ、恭敬し、諍受す。八には諸の波羅蜜を勤求す。須菩提、是を菩薩摩訶薩、二地の中に住して、應に満足すべき八法と名く。復次に、須菩提、菩薩摩訶薩、三地の中に住して五法を行す。何等か五なる。一には多く學問して厭足する無し。二には淨法を施して亦自ら高うせず。三には佛國土を莊嚴して亦自ら高うせず。四には世間の無量の勤苦を受けて以て厭ふを爲さず。五には慚愧處に住す。須菩提、是を菩薩摩訶薩、三地の中に住して應に満足すべき五法と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、四地の中に住して應に行を受け、十法を捨てざるべし。何等か十なる。一には阿練若住處を捨てず。二には少欲、三には知足、四には頭陀の功德を捨てず。五には戒を捨てず。六には諸欲を穢惡す。七には世間心を厭ふ。八には一切の所有を捨つ。九には心没せず。十には一切の物を惜まず。須菩提、是を菩薩摩訶薩、第四地の中に住して十法を捨てずと名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、五地の中に住して十二法をば遠離す。何等か十二なる。一には白衣に親むを遠離す。二には比丘尼を遠離す。三には他家を憚惜するを遠離す。四には無益の談處を遠離す。五には瞋恚を遠離す。六には自大を遠離す。七には蔑人を遠離す。八には十不善道を遠離す。九には大慢を遠離す。十には自用を遠離

す。十一には顛倒を遠離す。十二には姪、怒、癡を遠離す。須菩提、是を菩薩摩訶薩、五
 地の中に住して十二事を遠離すと名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、六地の中に住して當
 に六法をば具足すべし。何等か六なる。謂ゆる六波羅蜜なり。復六法有り、爲すべからざ
 る所なり。何等か六なる。一には聲聞、辟支佛の意を作さず。二には布施に憂心を生ずべ
 からず。三には索むる所有るを見ては心没せず。四には所有の物は布施す。五には布施の
 後に心悔いず。六には深法を疑はず。須菩提、是を菩薩摩訶薩、六地の中に住して應に六
 法を滿具し、六法を遠離すべしと名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩、七地の中に住して、
 二十の法に著すべからざる所有り。何等か二十なる。一には我に著せず。二には衆生に著
 せず。三には壽命に著せず。四には衆數乃至知者見者に著せず。五には斷見に著せず。六
 には常見に著せず。七には相を作すべからず。八には因見を作すべからず。九には名色に
 著せず。十には五衆に著せず。十一には十八界に著せず。十二には十二入に著せず。十三
 には三界に著せず。十四には著處を作らず。十五には所期の處を作らず。十六には依處を
 作らず。十七には佛に依る見に著せず。十八には法に依る見に著せず。十九には偈に依る
 見に著せず。二十には戒に依る見に著せず。是二十の法は著すべからざる所なり。復二十
 法の應に具足し滿すべきものあり。何等か二十なる。一には空を具足す。二には無相を證
 す。三には無作を知る。四には三分清淨なり。五には一切衆生の中に慈悲智具足す。六
 には一切の衆生を念す。七には一切法、等しく觀じ、是中にも亦著せず。八には諸法實相

を知り、是事をも亦念ぜず。九には無生法忍。十には無生智。十一には諸法一相を説く。
 十二には分別の相を破す。十三には憶想を轉ず。十四には見を轉ず。十五には煩惱を轉ず。
 十六には等定慧地。十七には意を調ふ。十八には心寂滅す。十九には無礙智、二十には
 愛に染ます。須菩提、是を菩薩摩訶薩、七地の中に住して應に具足すべき二十法と名く。
 復次に須菩提、菩薩摩訶薩、八地の中に住して應に五法を具足すべし。何等か五法なる。
 衆生の心に順入し、諸の神通に遊戲し、諸佛の國を觀て見る所の佛國の如く、自ら其國
 を莊嚴し、如實に佛身を觀じて自ら佛身を莊嚴す。是を五法を具足し満すと名く。復次に
 須菩提、菩薩摩訶薩、八地の中に住して復五法を具足す。何等か五なる。上下の諸根を知
 り、佛世界を淨め、如幻三昧に入り、常に三昧に入り、衆生所應の善根に隨うて身を受く。
 須菩提、是を菩薩摩訶薩、八地の中に住して五法を具足すと爲す。復次に須菩提、菩薩摩
 訶薩、九地の中に住して應に十二法を具足すべし。何等か十二なる。無邊世界に度する所
 の分を受け。菩薩是の如きの願を得、諸天、龍、夜叉、捷鬪婆の語を知りて而も爲に法を
 説き、處胎成就し、家成就し、所生成成就し、性成就し、眷屬成就し、出生成就し、
 出家成就し、莊嚴佛樹成就し、一切諸善功德成滿し具足す。須菩提、是を菩薩摩訶薩、
 九地の中に住して應に具足すべき十二法と名く。須菩提、十地の菩薩は當に知るべし。佛
 の如くなり。爾時、慧命須菩提、佛に白して言さく、『世尊、云何が菩薩摩訶薩は、深心に
 地業を治むる。』と。佛言はく、『菩薩摩訶薩、薩婆若に應ずる心もて、諸の善根を集む。』

是を菩薩摩訶薩、深心に地業を治むと名く。云何が菩薩、一切衆生の中に於て、等心なりとする。佛言はく、若し菩薩摩訶薩、薩婆智に應ずる心もて、四無量心を生ず。謂ゆら慈、悲、喜、捨なり。是を、一切衆生の中に於て、等心なりと名く。云何が菩薩、布施を修すとする。佛言はく、菩薩は、一切衆生に施與して、分別する所無し。是を布施を修すと名く。云何が菩薩、善知識に親近すとする。佛言はく、能く人をして、薩婆若の中に住せしむ。是の如く、善知識に親近し、諍受し、恭敬し、供養す。是を、善知識に親近すと名く。云何が菩薩、法を求むとする。佛言はく、菩薩は、薩婆に應ずるの心もて、法を求め、聲聞、辟支佛地に墮せず。是を、法を求むと名く。云何が菩薩、常に出家して、地業を治めんとする。佛言はく、菩薩は、世世に雜心ならず、佛法の中に出家して、能く障礙する者無し。是を、常に出家して地業を治むと名く。云何が菩薩、佛身を愛樂し、地業を治めんとする。佛言はく、若し菩薩、佛の身相を見たてまつるより、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、終に念佛を離れず。是を、佛身を愛樂し、地業を治むと名く。と。云何が菩薩、法教を演出して、地業を治めんとする。佛言はく、菩薩、若し佛現在し、若し、佛滅度の後、衆生の爲に說法し、初中後善く、妙義、好語、淨潔、純具、謂ゆる修妬路、乃至優波提舍なり。是を、法教を演出して、地業を治むと名く。云何が菩薩、憍慢を破り、地業を治めんとする。佛言はく、菩薩、是憍慢を破するが故に、終に下賤の家に生ぜず。是を、菩薩は、憍慢を破して、地業を治むと名く。と。云何

が菩薩は、實語して、地業を治めんとする。佛言はく、『菩薩、説く所の如く、説に隨うて行す。是を實語もて地業を治むと名く。』と。是を菩薩摩訶薩、初地の中に任して十事を修行して地業を治むと爲す。

【一】本品は先に須菩提が發趣大乘を問ひしに佛の答へたまふを明すなり。發趣とは菩薩の向上して初地より二地に進むをいふ。先づ發趣地の十分を釋す。

論 釋して曰はく、『須菩提は上に摩訶衍を問ひ、佛、種種に摩訶衍の相を答へたまへり。上には又大乘に發趣する者を問ひ、今は大乘に發趣するの相を答へたまふ。菩薩摩訶薩、是乘に乗じて、一切法の本より已來、不來、不去、無動、無發、法性常住なることを知るが故に、又大悲心を以ての故に、精進波羅蜜の故に、方便力の故に、還つて諸の善法を修し、更に勝地を求め、而も地相を取らず、亦此地を見ざるなり。』問うて曰はく、『應に大乘に發趣するを答ふべし、何を以てか地に發趣するを説く。』答へて曰はく、『大乘は即ち是れ地なり。地に十分有り。初地より二地に至る。是を發趣すと名く。譬へば馬に乗つて象に趣き、馬を捨てて象に乗り、象に乗りて龍に趣き、象を捨てて龍に乗るが如し。』問うて曰はく、『此中に、是れ何等か十地なる。』答へて曰はく、『地に二種有り。一には但菩薩地、二には共地なり。共地とは謂ゆる乾慧地より乃ち佛地に至るまでなり。但菩薩地とは歡喜地、離垢地、有光地、增曜地、難勝地、現在地、深入地、不動地、善相地、法雲地なり。此地相は十地經の中に廣く説くが如し。』

【乾慧地】 共地の第一地、この位は四念處觀を修行して智慧深きを未だ法性の理を證得せざるに名く。【歡喜地】 菩薩既に初阿僧祇劫の修行を滿じて初て聖性を獲得して見惑を破し

初地に入りて菩薩は應に十法を行すべし。深心より乃ち實語に至るまでなり。須菩提は知れりと雖も、衆生の疑ひを斷せんが爲の故に世尊に問へり。云何が是れ深法なると、佛

【二害の理を證し大歡喜を生ずる位】菩薩は此位に續波羅蜜を成就す。

【增曜地】精進波羅蜜を成じ、修惑を斷じ、慧察去忍をえて智慧顯發するをいふ。

【有光地】忍波羅蜜を成じて修惑を斷じ、慧察去忍をえて智慧顯發するをいふ。

【增曜地】精進波羅蜜を成じ、修惑を斷じ、慧察去忍をえて智慧顯發するをいふ。

【增曜地】精進波羅蜜を成じ、修惑を斷じ、慧察去忍をえて智慧顯發するをいふ。

【增曜地】精進波羅蜜を成じ、修惑を斷じ、慧察去忍をえて智慧顯發するをいふ。

答へたまはく、「薩婆若に應ずる心もて、諸の善根を集むるなり。」薩婆若心とは、菩薩摩訶薩、初めて阿耨多羅三藐三菩提の意を發して、是願を作さく、「我未來世に於て、當に佛と作るべし」と。是阿耨多羅三藐三菩提の意、即ち是れ薩婆若に應ずる心なり。摩訶薩とは心を繋けて、「我當に佛と作るべし」と願ふなり。若し菩薩利根なれば大いに福徳を集め、諸の煩惱薄く、過去の罪業少く、發意して即ち深心を得。深心とは深く佛道を樂しみ、世世に世間に於て心薄し、是を薩婆若に應ずる心と名く。作す所の一切の功徳の、若は布施、若は持戒、若は修定等もて、今世後世の福業、壽命、安隱を求めず。但薩婆若の爲にす。譬へば饜飡の人の因縁無ければ、乃至一錢をも施さず、貪惜し積聚して但增長せんを望むが如し。菩薩も亦是の如し、福徳の若は多きも、若は少きも、餘事に向けず、但愛惜し積集して薩婆若に向く。問うて曰はく、「是菩薩、未だ薩婆若を知らず、其味を得ず。」云何が能く深心を得る。答へて曰はく、「我先に已に覺けり。此人若し利根なれば諸の煩惱薄く、福徳淳厚にして世間を樂します。未だ大衆を讚歎するを聞かずと雖も、猶世間を樂します。何に況んや已に聞けるをやと。摩訶迦葉の如きは、金色の女を娶りて妻と爲せしも心に愛樂せず、棄捨して出家せり。又耶舎長者の子の如きは、中夜に衆の婦女の皆死狀の如くなるを見て、直十萬兩金の寶服を捨てて、水岸の邊に於て、直に渡りて佛に趣けり。是等の如く、諸の貴人、國王にして五欲を厭捨する者は無數なり。何に況んや菩薩は佛道の功徳、因縁を愛くを聞いて、而も即時に發心して深く入らざらんや。後の薩陀

【不動地】願波羅蜜を成就し、修惑を斷じて二乗の自度を遠離するに名く。此位に第二阿僧祇劫の行を終へしなり。

【善相地】力波羅蜜を成就し、修惑を斷じて十力を具足し、一切處に於て可度不可度を知つて能く説法するなり。

【法雲地】智波羅蜜を成就し、亦修惑を斷じて無邊の功徳を具足して無邊の功徳水を出生すること、大雲の虚空を覆うて清淨の樂水を出す如きに名く。

【二】次に初地に入りて能する深心等の十行を釋す。初に深心を釋す。

波輪の品中に、長者の女、佛の功徳を讚歎したてまつるを聞いて、即時に家を捨て、曇無竭の所に詣るが如し。復次に信等の五根を成就し、純熟するが故に能く是深心を得。譬へば、小兒は眼等の五情根、未だ成就せざるが故に五塵を分たず、好醜を識らざるが如し。信等の五根の未だ成就せざるも、亦復是の如く善惡を識らず、縛解を知らず、五欲を愛樂して、邪見に沒す。信等の五根を成就せる者は乃ち能く善惡を識別す。十善道、聲聞法すら尚愛樂す、況んや無上道にして而も深く念ぜざらんや。初めて無上道心を生じてより已に世間に於て最上たり。何に況んや成就するをや。復次に菩薩、始めて般若波羅蜜の氣味を得るが故に能く深心を生ず。人の閉せられて幽闇に在り、微隙より光を見、心則ち踊躍し、是念を作して衆人に、「獨り是の如きの光明を見ることが得」と言ひ、欣悅し愛樂して即ち深心を生じ、是光明を念じ、方便して出でんと求むるが如し。菩薩も亦是の如し、宿業の因縁の故に閉せられて、十二入無明黑闇の獄中に在り、所有の知見は皆是れ虚妄なるも、般若波羅蜜を聞いて少しく氣味を得、深く薩婆若を念じ、我當に云何が此六情の獄より出づることを得て、諸佛聖人の如くならん。復次に、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、願に隨うて行する所有り。是を以ての故に、深心を生ず。深心とは、一切諸法の中の愛は薩婆若の愛するに如くもの無く、一切衆生の中の愛は佛を愛したてまつり、又深く悲心に入りて衆生を利益するに如くもの無し。是の如き等を深心の相と名く。初地の菩薩は應に常に是心を行すべし。

【三】次に等心等の九を釋す。初に一切衆生に於て等心といふを釋す。

【捨心とは等】三に布施もて人に與ふるに就いて明す

【法を求む等】五に法を求むといふを釋す。

一切衆生に於て等心なりとは、菩薩は是深心を得已りて心を一切衆生に於て等うす。衆生は常に情もて其親しき所を愛し、其憎む所を惡む。菩薩は深心を得るが故に、怨親平等にして之を觀るに二無し。此中に佛自ら等心とは、四無量心なりと説きたまへり。是菩薩は衆生の受樂を見て、則ち慈喜を生じ、心には是願を作さく、「我當に一切衆生をして皆佛樂を得しめん」と。若し衆生の苦を受くるを見れば、則ち悲心を生じて之を慰み、是願を作す、「我當に一切衆生の苦を抜くべし」と。若し不苦不樂の衆生を見れば、則ち捨心を生じて是願を作す、「我當に衆生をして愛憎の心を捨てしむべし」と。四無量心の餘の義は先に説くが如し。捨心とは捨に二種有り。一には財を捨てて施を行じ、二には結を捨てて道を得。此繫を除くを以て捨と爲すは、第二の結を捨つるが與の因縁と作り、七地の中に至りて乃ち能く結を捨つるなり。問うて曰はく、「捨相に種種有り。内外、輕重、財施、法施、世間、出世間等なり。佛は何を以ての故に、但分別憶想無き出世間の施のみを説きたまへるや。答へて曰はく、「布施に種種の相有り。但大なる者を説いて相を取らざるなり。復次に佛は一切法に於て著したまはば、亦此を以て菩薩に布施を教へて、佛法の如きにも著せざらしめたまふ。此中に應に廣く無分別の布施を説くべし。餘の布施の相は處處に已に種種に説けり。善知識に近づくの義は先に説けるが如し。法を求むとは法に三種有り。一には諸法の中の無上なるもの、謂ゆる涅槃なり。二には涅槃を得るの方便たる八聖道なり。三には一切の善語實語にして、八聖道を助くるもの謂ゆる、八萬四千の法衆、十二部

經、四藏謂ゆる阿含、阿毘曇、毘尼、雜藏、摩訶般若波羅蜜等の、諸の摩訶衍經は皆名
 けて法と爲す。此中に法を求むとは、書寫し、讀誦し、正しく憶念するなり。是の如き等
 は、衆生の心病を治するが故に、諸法藥を集めて身命を惜まざるなり。釋迦文佛の如きは、
 本菩薩爲りし時、名けて樂法と曰へり。時に世に佛無く、善語を聞かず。四方に法を求め
 精勤懈らざりしも、了に得ること能はざりき。爾時、魔變じて婆羅門と作り、而して之
 に語りて言はく、「我に佛の説きたまふ所の一偈有り。汝能く皮を以て紙と爲し、骨を以て
 筆と爲し、血を以て墨と爲して、此偈を書寫せば、當に以て汝に與ふべし」と。樂法は即
 時に自ら念すらく、「我世に身を喪ふ、無數なれども是利を得ず」と。即ち自ら皮を剥ぎ、
 之を曝して乾かしめ。其偈を書せんと欲するに魔は便ち身を滅す。是時、佛、其至心を知
 り、即ち下方より踊出して、爲に深法を説きたまふに、即ち無生法忍を得たり。又薩陀波
 崙の如きは苦行して法を求め、釋迦文菩薩の如きは五百の釘を身に釘す。法を求めんが爲
 の故なり。又金堅王の如きは身を割くこと五百處、炷を燈し、巖に投じ、火に入るを爲す。
 是の如き等種種の苦行難行は衆生の爲に法を求むるなり。復次に佛、自ら求法の相を説き
 たまはく、「薩婆若の爲にして聲聞、辟支佛地に墮せず」と。常に出家すとは菩薩、家に在
 りては種種の罪の因縁有るを知る。「我若し家に在らば、自ら清淨の行を行ふを得ること
 能はず。何んが能く人をして諸の淨行を得しめん。若し在家の法に隨はば、則ち鞭杖
 等有りて衆生を苦惱す。若し善法に隨うて行せば則ち居家の法を破せん、二事を籌量する

【常に出家す等】
 六に常に出家すと
 いふを釋す。

【佛身を愛樂す等】
七に佛身を愛樂す
といふに就いて明

【法教を演出す等】
八に法教を演出す
といふを明す。

に、我今出家せざるも死する時は俱に亦當に捨つべし。今自ら遠離せば福德大なりと爲さん」と。復次に菩薩、是念を作さく、「一切の國王及び諸の貴人は力勢、天の如く、樂を求めて未だ已まず。死して之を強奪す。我今衆生の爲の故に、家を捨てて清淨戒を持し、尸羅波羅蜜の因縁を具足せん」と。此中に、佛は自ら説きたまはく、「菩薩は世世に雜心ならず」と。出家して雜心ならずとは、九十六種の道中に於て出家せず、但佛道中に於て出家するなり。所以は何ん、佛道中に二種有り。正見世間と正見出世間となり。正見の故に佛身を愛樂すとは、種種の讚佛の功德、十力、四無所畏、大慈大悲、一切智慧を聞き、又佛身の三十二相、八十隨形好、大光明を放ち、天人の供養して厭足する有る無きを見て自ら知るなり。「我今來世も亦當に是の如くなるべし」と。假令、佛を得る因縁無きすら猶尙愛樂す、何に況んや當に得べくして、而も愛樂せざらんや。是深心を得て佛を愛樂したてまつるが故に、世世に常に佛に値ふを得るなり。法教を演出すとは、菩薩は上の如く法を求め、已に衆生の爲に演説するなり。菩薩の家に在る者は多く財施を以てし、出家は佛を愛するの情重く常に法施を以てす。若は佛世に在すも、若は世に在さざるも、善く持戒に住し名利を求めず、心を一切衆生に等うして爲に法を説く。檀の義を讚歎するが故に名けて初善と爲し、分別して持戒を讚歎するを名けて中善と爲し、是二法の果報の、若は諸の佛國に生じ、若は大夫と作るを名けて後善と爲す。復次に、三界の五受衆の身の、苦惱多きを見て、即ち厭離の心を生ずるを名けて初善と爲し、居家を棄捨して身を離るる

【橋慢を破す等】
九に橋慢を破すと
いふを釋す。

【實語とは等】ト
實語すといふを
釋す。

が爲の故に中善と爲し、心の煩惱を離るるが爲の故に名けて後善と爲す。聲聞乘を解説するを名けて初善と爲し、辟支佛乘を説くを名けて中善と爲し、大乘を宣暢するを名けて後善と爲す。妙義好語とは、三種の語は復離妙なりと雖も、而も義味淺薄に義理深妙なりと雖も而も辭具足せず。是を以ての故に妙義好語を説く。三毒の垢を離るるが故に、但正法を説き非法を離へざる、是を清淨と名く。八聖道分、六波羅蜜を備ふるが故に名けて具足と爲す。修多羅十二部經は先に説けるが如し。橋慢を破すとは、是菩薩は出家して戒を持し、法を説いて、能く衆疑を斷ず。或時は自ら恃んで橋慢を生ず。是時、應に是念を作すべし、「我は頭を剃り染衣を著け鉢を持して食を乞ふ。此は是れ橋慢を破するの法なり。我云何が中に於て橋慢を生ぜん」と。又此橋慢は、人心の中に在りて則ち功德を覆没し、人の愛せざる所にして惡聲流布し、後身は常に弊惡の畜生中に生じ、若し人中の卑鄙下賤に生ず。是橋慢に、是の如き無量の過罪有りと知りて是橋慢を破す。阿耨多羅三藐三菩提を求むるが爲の故なり。如し人、財を求むるすら猶謙遜し意を下す、何に況んや無上道を求むるをや。橋慢を破するを以ての故に常に尊貴を生じ、終に下賤の家に在りて生せず。實語とは、是れ諸善の本にして、天に生ずるの因縁、人の信受する所なり。是實語を行する者は布施、持戒、學問を假らずして但實語を修すれば無量の福を得。實語とは説の如く隨うて行するなり。問うて曰はく、「口業に四種有り、何を以てか但實語を説く。」答へて曰はく、「佛法の中には實を貴ぶが故に實を説き、餘は皆四諦に攝す。實の故に涅槃を得るな

り。復次に菩薩は衆生と共に惡口、綺語、兩舌を事とし、或時は、能く妄語の罪有りて重きが故に、初地に應に是菩薩行を捨てし。初地には未だ具足する能はず。此四業を行するが故に但實語のみを説く。第二地の中には則ち能く具足す。問うて曰はく、「初地の中に、何を以てか但十事を説く。譬へて曰はく、「佛は法王爲り、諸法の中に自在を得たまふ。是十方を知れば能く初地を成ず。譬へば良醫は能く藥草の種數を知るも、若は五、若は十にして能く病を破するに足れるが如し。是中、其多少を量すべからず。」初地

釋 云何が菩薩は破清淨なりとする。若し菩薩摩訶薩、聲聞辟支佛心、及び諸の破戒、佛道を障ふる法を念ぜざる、是を破清淨なりと名く。云何が菩薩、恩を知り恩を報ずとする。若し菩薩摩訶薩、菩薩道を行じ、乃至小恩すら尙忘れず、何に況んや多きをや。是を恩を知り、恩を報ずと名く。云何が菩薩は、忍辱力に住すとす。若し菩薩、一切衆生に於て瞋無く憫無き、是を忍辱力に住すと名く。云何が菩薩、歡喜を受くとす。謂ゆる、衆生を成就し、此を以て喜と爲す。是を歡喜を受くと名く。云何が菩薩、一切衆生を捨てずとする。若し菩薩、念じて一切衆生を救はんと欲するが故に、是を一切衆生を捨てずと名く。云何が菩薩は大悲心に入るとする。若し菩薩は是の如く念ず、我一一の衆生の爲の故に、如恆河沙等の劫、地獄の中に勤苦を受け、乃ち是人、佛道を得て涅槃に入るに至るべし」と。是の如きを名けて、一切十方の衆生の爲に、苦を忍ぶと爲す。是を大悲心に入ると名く。云何が菩薩願を信じ、恭敬し、諮受するや。若し菩薩、諸師に於て世尊

の如く想ふ。是を師を信じ、恭敬し、諸受すと名く。云何が菩薩、諸波羅蜜を勤求すとす
 る。若し菩薩、一心に諸波羅蜜を求めて異事無し。是を諸波羅蜜を勤求すと名く。是を菩薩
 薩摩訶薩は、一地の中に住して八法を満足すと爲す。云何が菩薩摩訶薩、多く學問して厭
 足する無しとする。諸佛所説の法、若は是れ此間の世界、若は十方世界の諸佛の所説を盡
 く聞持せんと欲す。是を多く學問して厭足する無しと名く。云何が菩薩、法施を淨むとす
 る。法施する所有り、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を求めざるに至る。何に況んや餘事をや。是
 を名利を求めざる法施と名く。云何が菩薩、佛の世界を淨むとする。諸の善根を以て佛
 の世界を淨めんと趣向す。是を佛世界を淨むと名く。云何が菩薩、世間の無量の勤苦を受
 け、以て厭ふを爲さずとする。諸の善根を備具するが故に能く衆生を成就し、亦佛界を
 莊嚴し、乃ち薩婆若を具足するに至るまで終に疲厭せず。是を無量の勤苦を受くるを以て
 厭ふを爲さずと名く。云何が菩薩は慍慍處に住すとす。諸の聲聞、辟支佛の意を取つ、
 是を慍慍の處に住すと名く。是を菩薩摩訶薩、三地の中に住して五法を満足すと爲す。
 云何が菩薩、阿蘭若住處を捨てずとする。能く聲聞、辟支佛地を過ぐ。是を阿蘭若住處
 を捨てずと名く。云何が菩薩、少欲なりとする。乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るすら尙欲
 せず、何に況んや餘欲をや。是を少欲と名く。云何が菩薩、足るを知れりとする。一切種
 智を得るのみ、是を知足と名く。云何が菩薩、頭陀の功徳を捨てずとする。諸の深法忍
 を捨する、是を頭陀の功徳を捨てずと名く。云何が菩薩、戒を捨てずとする。戒相を取ら

ざる、是を戒を捨てずと名く。云何が菩薩、諸欲を穢惡とする。欲心起らざるが故に是を諸欲を穢惡すと名く。云何が菩薩、世間心を厭ふとする。一切の法は不作なるを知るが故に是を世間心を厭ふと名く。云何が菩薩、一切の所有を捨てんとする。内外の諸法を惜まざるが故に、是を一切の所有を捨てんと名く。云何が菩薩、心没せずとする。二種の識處に心生せざるが故に是を心没せんと名く。云何が菩薩、一切の物を惜まざる。一切の物に於て著せず念ぜざる、是を一切の物を惜まらずと名く。是を菩薩、四地の中に於て十法を捨てずと爲す。

云何が菩薩、白衣に親しむを遠離すとす。菩薩は生ずる所を出家し、一佛界より一佛界に至り、常に出家し、剃頭して袈衣を著す。是を白衣に親しむを遠離すと名く。云何が菩薩、比丘尼を遠離すとす。比丘尼と共に住せず、乃至彈指の頃も亦念を生ぜざる、是を比丘尼を遠離すと名く。云何が菩薩、他家を憍惜するを遠離すとす。菩薩、是の如く思惟すらく、「我應に衆生を安樂にすべし、他今、我を助けて安樂なり、云何が憍を生ぜん」と。是を他家を憍惜するを遠離すと名く。云何が菩薩、無益の談處を遠離すとす。若し談處有りて、或は憍、闘諍、支佛心を生ぜば、我當に遠離すべし、是を無益の談處を遠離すと名く。云何が菩薩、熾患を遠離すとす。瞋心、憍心、闘心をして、入るを得しめざる、是を瞋患を遠離すと名く。云何が菩薩、自大を遠離すとす。謂ゆる、内法を見ざるが故に是を自大を遠離すと名く。云何が菩薩、人を護むを遠離すとす。謂ゆる、外法を見ざ

るが故に是を人を蔑むを遠離すと名く。云何が菩薩、十不善道を遠離すとす。是十不善道は、能く八聖道を障ふ、何に泥んや阿耨多羅三藐三菩提をや。是を十不善道を遠離すと名く。云何が菩薩、大慢を遠離すとす。是菩薩、法として大慢を作すべき者を見ず。是を大慢を遠離すと名く。六何が菩薩、自用を遠離すとす。是菩薩、是法の自用すべき者を見ず。是を自用を遠離すと名く。云何が菩薩、顛倒を遠離すとす。顛倒の處は、不可得なるが故に是を顛倒處を遠離すと名く。六何が菩薩、姪、怒、癡の處を遠離すとす。姪、怒、癡の處は見るべからざるが故に、是を姪、怒、癡の處を遠離すと名く。是を菩薩は五地の中に住して十二法を遠離すと名く。云何が菩薩、六地の中に住して六法、謂ゆる、六波羅蜜を具足する。瞿師及び瞿闍、辟支佛、六波羅蜜の中に住して能く彼岸に渡る。是を六法を具足すと名く、云何が菩薩、聲聞、辟支佛の意を作さざる。是念を作さく、一聲聞、辟支佛の意は阿耨多羅三藐三菩提の道に非ず」と。云何が菩薩、布施して憂心を生ぜざる。是念を作さく、「此は阿耨多羅三藐三菩提の道に非ず」と。云何が菩薩、索むる所有を見て心没せずとする。是念を作さく、「此は阿耨多羅三藐三菩提の道に非ず」と。云何が菩薩、初發心の時、布施するに、「是は與ふべし、是は與ふべからず」と言はず。云何が菩薩、布施の後、心に悔いざる。慈悲力の故なり。云何が菩薩、深法を疑はざる。功德力を信するが故なり。是を菩薩、六地の中に

【四】次に菩薩が二地に於て念ずる八法を明す、初に戒清淨を釋す。

【恩を知り等】二に恩を知り恩を報ずといふを釋す。

住して六法を遠離すと名く。

論者言はく、「戒清淨なりとは、初地の中にては多く布施を行じ、次に持戒は布施に勝るを知る。所以は何ん。持戒は則ち一切衆生を攝するも、布施は則ち一切に普周する能はざればなり。持戒は遍く無量に滿つ。不殺生戒は、則ち一切衆生の命を施すが如し。衆生の無量無邊なるが如く、福德も亦無量無邊なり。諸の能く佛道を破する事を略説して、此中に皆破戒と名く。是破戒の垢を離るるを皆清淨と名く。乃ち聲聞辟支佛心に至るすら、尙是れ戒の垢なり。何に況んや餘惡をや。恩を知り恩を報ずとは、有人の言はく、「我當に宿世の福德因縁もて應に得べし」と。或は言ふ、「我は自然に尊貴なり。汝に何の恩か有らん」と。是邪見に墮す。是故に、佛説きたまはく、「菩薩は應に恩を知るべし」と。衆生は宿世の樂因有りと雖も、今世の事合せずんば則ち樂を得るに由無し。譬へば、穀種地に在れども雨無ければ則ち生ぜず。地は能く穀を生ずるを以ての故に、雨に恩無しと言ふべからざるが如し。受くる所の物は是れ宿世に種うる所なりと雖も、供奉の人の敬愛好心、豈恩分に非ざらんや。復次に恩を知るは是れ大悲の本、善業を聞くの初門なり。人に愛敬せられ、名譽遠く聞え、死して、則ち天に生じ終に佛道を成ず。恩を知らざる人は畜生よりも甚し。佛一本生經に説きたまふが如し。有人山に入りて木を伐り、迷惑して道を失す。時に暴雨に値ひ、日暮れ飢寒し、惡出毒獸來りて侵害せんと欲す。是人一の石窟に入るに、窟中に大なる熊有り。之を見て恐怖して出づ。熊之に語つて言はく、「汝恐怖

する勿れ。此舎は温暖なり、中に於て宿るべし」と。時に連雨七日なり。常に甘果、美水を以て此人に供給す。七日にして雨止む。熊此人を將ゐて其道徑を示し、熊は人に語りて言はく、「我は是れ罪身にして多くの怨家有り。若し問ふ者有りとも我を見たりと言ふ莫れ」と。人答へて言はく、「爾なり」と。此人前み行くに、諸の獵者を見る。獵者問うて言はく、「汝は何れより來るや。衆獸有るを見るや不や」と。答へて言はく、「我は一の大なる熊を見たるも、此熊は我に於て恩有り、汝に示すを得ず」と。獵者言はく、「汝は是れ人なり。當に人知を以て相親しむべし。何を以てか熊を惜むや。今一たび道を失すとも、何れの時か復來らん。汝我に示さば汝に多分を與へん」と。此人は心變じて、即ち獵者を將ゐて熊の處所を示す。獵者熊を殺して即ち多分を以て之に與ふ。此人手を展べて肉を取るに、肘俱に墮つ。獵者言はく、「汝は何の罪か有る」と。答へて言はく、「是熊は我を見る、父の子を視るが如し。我今恩に背けり。將に是れ是罪なり」と。獵者は恐怖して、敢て肉を食せず。持して衆僧に施す。爾時、上座の六通の阿羅漢、諸の下座に語るらく、「此は是れ菩薩なり、未來世に當に佛と作るべし」と。此肉を食ふこと無く、即時に塔を起てて供養す。王、此事を聞き、勅を國內に下す、「恩を知らざる人をして、此に住せしむる無からしめよ」と。又種種の因縁を以て恩を知る者を讃す。恩を知る人の義は闍浮提に遍く人皆信行すと。復次に菩薩、是念を作さく、「若し人の惡事を我に於て行するすら、猶尙度すべし。何に況んや我に於て恩有るをや」と。忍辱力に住すとは忍波羅蜜の中に廣く説くが如し。問うて

【忍辱力に等】三
に忍辱力に甘すと
いふを釋す。

【歡喜を受く等】
四に歡喜を受くと
いふを釋す。

【一切衆生を捨
つと云ふに就いて明
二明す】

【大悲心に入る等】
六に大悲心に入る
といふに就いて明
す。

「是はく、『種種の因縁は是れ忍辱の相なり。此中に何を以てか但不瞋不惱のみを説く。』答へて曰はく、『此は是れ忍辱の體なり。先づ瞋心不起して然る後に身口もて他を惱ます。是れ菩薩の初行なるが故に、但衆生忍を説いて法忍を説かざるなり。歡喜を受くとは、菩薩、是持戒を見るが故に、身口清淨に恩を知りて忍辱なるが故に、心清淨なるが故に、三業清淨なるが故に。則ち自然に歡喜を生ず。譬へば、人、香湯に沐浴し、好き新衣を著け、瓔珞もて莊嚴し、鏡中に自ら觀せば心に歡喜を生ずるが如し。菩薩も亦是の如く、是善法を得て自ら莊嚴す。戒は是れ禪定智慧の根本なり。我今淨戒を得れば無量無邊の福徳皆應に得易し。是を以て自ら喜ぶ。菩薩、是戒忍の中に住して衆生を教化し、他方の佛前に生ずるを得、及び天上人中に生じて樂を受けしめ、或は聲聞、辟支佛乘、佛乘を得しむる者なり。衆生の樂著を觀する。長者の小兒の共に戯るるを見て、亦之と同じく戯れ、更に少しく異なる物を以て之に與へ、前の好む所を捨てしむるが如し。菩薩も亦是の如し、衆生を教化して人天の福樂を得しめ、漸漸に誘進して三乘を得しむ。是を以ての故に、歡喜の樂を受くと云ふ。一切衆生を捨てずとは、善く大悲心を修習し誓つて衆生を度するが故に、發心牢固なるが故に、諸佛、賢聖の爲に輕笑せられざるが故に、一切衆生に負くを恐るるが故に捨てざるなり。譬へば、先人に物を許し、後、若し與へざれば則ち是れ虛妄の罪人なるが如し。是因縁を以ての故に衆生を捨てず。大悲心に入るとは先に説けるが如し。此中に佛自ら説きたまはく、『本願の初心は衆生の爲の故なり』と。謂ゆる、一一の

【師を信じ等】七
に信を信じ、恭敬
し、善受すといふ
に就いて明す。

人の爲の故に、無量劫に於て代りて地獄の苦を受け、乃ち是人をして功徳を集行して佛と作り、無餘涅槃に入らしむるに至る。』問うて曰はく、『代りて罪を受くる者有る無し、何を以てか是願を作す。』答へて曰はく、『是菩薩、弘大の心もて深く衆生を愛す。若し代る理有れば必ず代ること疑はざるなり。復次に菩薩、人間を見るに、天軀有り、人の肉血、五藏を用て羅刹鬼を祀る。人の代る者有れば則ち聽す、菩薩は是念を作さく、『地獄の中に若し當に是の如き代る理有らば、我必ず當に代るべし』と。衆人は菩薩の大心の是の如くなるを聞いて、則ち之を貴敬し尊す。所以は何ん。是菩薩、深く衆生を念する、慈母に踰ゆるが故なり。師を信じ、恭敬し、善受すとは、菩薩は師に因りて阿耨多羅三藐三菩提を得。云何が師を信敬し、供養せざらん。智徳高明なりと雖も、若し恭敬供養せずんば則ち大利を得る能はず。譬へば、深き井は美水なれども、若し練無ければ水を得るに由無きが如し。若し憍慢、高心を發して宗重敬伏なれば、則ち功徳の大利之に歸す。又雨は墮ちて山頂に住せず、必ず下處に歸するが如く、若し人、憍心にして、自ら高ければ則ち法水入らず、若し善法を恭敬すれば則ち功徳之に歸す。復次に佛説きたまはく、『善師に依止すれば持戒、禪定、智慧、解脫、皆增長するを得』と。譬へば、衆樹は雪山に依れば根莖、枝葉、華果、皆茂盛なるを得るが如し。是を以ての故に、佛説きたまはく、『諸の師に於て之を宗敬する、佛の如くせよ』と。』問うて曰はく、『惡師を云何が供養し、信受するを得ん。善師すら之を觀る、佛の如くなる能はず、何に況んや惡師をや。佛は何を以ての故に、此中に諸師

【諸波羅蜜を等】
八に語の波羅蜜を
勤求すといふを釋
す。

に於て尊ぶ、世尊を想ふが如くせよと説きたまふ。〔答へて曰はく、〕菩薩、世間の法に順ずべからず。世間の法に順ずれば善者は心著し、惡者は遠離す。菩薩は則ち然らず。若し能く深義を開釋し、疑結を解散する有りて、我に於て益有れば則ち心を盡して之を敬し、餘惡を念せず、弊糞に寶を盛らんに、囊の惡しきを以ての故に、其實を取らざるを得ざるが如く、又夜、輪道を行き、弊人炬を執るに、人の惡しきを以ての故に、其照を取らざるを得ざるが如し。菩薩も亦是の如し、師に於て、智慧の光明を得、其惡を計らず。復次に弟子は應に是念を作すべし、「師は般若波羅蜜を行するに、無量の方便の力有り。知らず、何の因縁を以ての故に此惡事有る」と。薩陀波輪の空中に、十方の佛の教を聞くが如し、「汝は法師に於て、其短を念する莫れ、常に敬畏を生ぜよ」と。復次に菩薩は念を作さく、「法師の惡を好むは是れ我事に非ず。我求むる所の者は唯法を聞いて以て自ら利益せんと欲す。泥像、木像の如きは、實の功德無けれども佛想を發するに因るが故に、無量の福德を得。何に況んや、是人は智慧、方便もて能く人の爲に説くをや。是を以ての故に、法師には過有りと雖も我に於て咎無し」と。世尊を想ふが如しとは、我先に菩薩は世人に異るを説けり。世人は好龍を分別して、好き者に愛著す、猶佛に如かず、惡しき者を輕慢するは、了に比數せず。菩薩は則ち然らず、諸法の畢竟空を觀じ、本より已來、皆無餘涅槃の相の如くし、一切衆生を觀じて之を視る佛の如くす。何に況んや法師をや。智慧利益有りて、能く佛事を作すを以ての故に、之を視る佛の如し。諸波羅蜜を勤求すとは、菩薩は是念を

【五】次に菩薩が
五法を明す。

作さく、「是六波羅蜜は、是れ無上正眞道の因縁なり。我當に一心に是因縁を行すべし」と。
譬へば、商人、農夫の滴する所の國土、須ふる所の物、地に宜しき所の種子に隨つて、勤
修し求辦するに事として成らざる無きが如く、又今世に布施を行すれば後に大富を得、戒
を持てば後に尊貴を得、禪定智慧を修すれば道を得るが如し。菩薩も亦是の如し、六波羅
蜜を行すれば則ち佛と成るを得。勤求道とは、常に一心に六波羅蜜を勤求するなり。所以
は何ん、若し軟心にして漸進せば、則ち煩惱の爲に覆はれ魔人に壞せらる。是を以ての故
に、佛説きたまはく、「二地の中に於て、勤求して懈る莫れ」と。
多く學問して厭足する無しとは、菩薩は多く學問して是智慧の因縁を知り、智慧を得れ
ば則ち能く分別して道を行す。人に眼有れば至る所に礙無きが如し。是故に菩薩、是願を
作さく、「十方の諸佛の説きたまふ所の法有り。我盡く受持せん。聞持陀羅尼力の故に、
清淨なる大身力の故に、不忘陀羅尼力を得るが故に」と。譬へば、大海の能く一切十方
の諸水を受持するが如し。菩薩も亦是の如し、能く十方諸佛の所説の法を受持す。法施を
淨むとは、苗中に草を生せんに、穢を除けば則ち茂るが如し。菩薩も亦是の如し、法施の
時、名利、後世の果報を求めず、乃至衆生の爲の故に、小乘の涅槃を求めず、但大悲のみ
を以て衆生に於て佛の轉法輪、法施の相、莊嚴なる佛國の相に隨ひ、世間の無量の勤苦を
受け、阿耨多羅三藐三菩提に住し、阿耨若住處を捨てざるなり。少欲知足は先に説くが如し。問うて曰
はく、「種種の因縁は生死の中に在りて厭はざるなり。何を以ての故に、但二因縁を厭はず

と説く。答へて曰はく、是れ善根備具の故に生死の中に在るも苦惱薄少なり。譬へば、人
 指有らんに、良藥を之に塗れば其痛瘳えて少し。菩薩は善根を得て清淨なるが故に、今
 世の憂愁、嫉妬、悪心等悉く皆止息す。若し更に身を受くれば、善根の果報を得、自ら
 輪樂を受け、亦種種の因縁もて衆生を利益し、其所隨に隨うて自ら世界を淨め、世界嚴淨
 にして、天宮に勝り、之を觀るに厭ふ無く、能く大菩薩の心を慰豫す。何に況んや凡夫を
 や、是を以ての故に、多くの因縁有りと雖も、但二事のみを厭ふ無しと説く。憍慢に種種
 有りと雖も、此中に大なる者は聲聞、聲聞、支那心なり。菩薩は發心して廣く一切衆生を度せ
 ると説く。善輪を少なくするを得て、獨り涅槃を取らんと欲するは是れ憍慢すべし。譬へ
 ば、人有りて、大に善輪を設けて衆人を請呼せんに、憍慢の心起りて使ち自ら獨り食する
 是れ憍慢憍慢すべきが如し。三地

【七】次に菩薩が
 阿蘭若住して捨てずと
 是れべき十法を明
 す

阿蘭若住處を捨てずとは、衆を離れて獨り住し、若し聲聞、聲聞、支那心を過ぐれば是れ衆
 を離ると名く。一切法は無所得空なるを以ての故に取らず。相に著せず、乃至阿耨多羅三
 藐三菩提も亦取らず、著心有る無きを用ての故に。菩薩、常に諸の功德を棄めて厭足す
 る無し。無上道を得れば則ち足り、更に勝法無きが故に。飲食、衣服、臥具に足るを知る
 とは、是れ善法の因縁にして以て要と爲さざるが故に説かず。頭陀の功德を捨てずとは、
 後に覺摩高の中に無生法忍を説くが如し。此中には無生法忍を以て頭陀と爲す。菩薩、願
 忍に住して無生忍を觀す。是十二頭陀は持戒清淨の爲の故に。持戒清淨なるは禪定の

【七】次に菩薩が
 行に於ては
 十二法を修
 す

爲の故に。禪定は智慧の爲の故に。無生法忍は即ち是れ眞の智慧、無生法忍は是れ頭陀の果報なり。果中に因を説けばなり。戒を捨てず、戒相を取らずとは、是菩薩は諸法實相を知るが故に、尙持戒を見ず、何に況んや破戒をや。種種の因縁ありと雖も戒を破らず、此れ最も大と爲す。空解脫門に入るが故なり。汗穢の諸欲は先に説けるが如し。此中に佛説きたまはく、「是心相は虚誑不實なりと知るが故に、乃ち欲心を生ぜざるに至る。何に況んや欲を受けんや」と。世間の心を厭ふとは、世間不可樂想中に説くが如し。此中に、佛説きたまはく、「厭心の果報は調ゆる、無作解脫門なり」と。一切の所有を捨つとは先に説くが如し。心を没せずとは、先に已に種種の因縁もて説けり。菩薩は是不没不畏の相を聞く。二識處に生ぜずとは、二識處とは、謂ゆる、眼の色中に眼識を生ぜず、乃至意法の中に意識を生ぜざるなり。菩薩、是不二門の中に住して六識の所知、皆是れ虚誑無實なるを觀じて大誓願を作さく、「一切衆生をして、不二法の中に住して是六識を離れしめん」と。一切の物を惜まずとは、一切の物を惜まざる中に種種の因縁有りと雖も、此因縁は最大なり。謂ゆる、菩薩は、一切法の畢竟空を知り、憶念して一切の取相を滅せず。是故に受者に於て恩を求めず、惠施の中に高心無く、是の如くにして清淨なる檀波羅蜜を具す。竟四地

白衣に親しむを遠離すとは、行者は道を妨ぐるを以ての故に出家せり。若し復白衣に習近せば、即ち本と異なる無けん。是を以ての故に、行者は先白度を求めて然る後に人を度す。若し未だ自ら度する能はずして而も人を度せんと欲する者は、浮ぶを知らざる人の溺るる

を救はんと欲して、相與俱に没するが如し。是菩薩、白衣に親しむを遠離すれば、則ち能く諸の清淨の功德を集め、深く佛を念するが故に、身を變じて諸の佛國に往至し出家して頭を剃り、染衣を著く。所以は何ん、出家の法を樂んで白衣に習近するを樂はざるが故なり。比丘尼を遠離すとは初品中に説くが如し。問うて曰はく、「菩薩は等心に一切衆生を視る、云何が共に住するを得ざる。容へて曰はく、「是菩薩は未だ阿鞞跋致を得ず、未だ諸漏を斷ぜず、諸の功德を集むる人にして樂に著する所なり。是を以ての故に共に住するを得ず。又人の誹謗を離るるが爲なり。若し誹謗する者は地獄に墮するが故なり。他家を慳惜するを遠離すとは、菩薩是念を作さく、「我自ら家を捨つるすら、尙貪らず惜まらず、云何が他家を貪惜せん」と。菩薩の法は、一切衆生をして、樂を得しめんと欲す。彼人は我衆生に樂を與ふるを助く、云何が慳惜せん。衆生は先世の福德因縁、今世に少く工夫有るが故に我を供養するを得、何を以てか慳嫉せん。無益の談説を遠離すとは、此は即ち是れ綺語にして、自心他心の愁事を解くを爲す。王法の事、賊の事、大海、山林、藥草、寶物、諸方の國土、是の如き等の事を説くは、福に於て益無く、道に於て益無し。菩薩は一切衆生の無常、苦火に没在するを愍念す。我當に救濟すべし。云何が安坐して空く無益の事を説かん。如し人火を失して、四邊に俱に起らば、云何が其内に安處して餘事を語り説かん。此中に佛説きたまはく、「若し聲聞辟支佛の事を説くすら、猶無益の言と爲す、何に況んや餘事をや」と。瞋恚を遠離すとは、心中に初めて生ずるを瞋心と名く。未

だ定まらざるを以ての故に。瞋心増長して事定まり、打斫し、殺害する是を憍心と名け、
 惡口し説謗する是を訟心と名け、若し殺害し、打縛する等は是を闘心と名く。菩薩は大慈
 悲の衆生なるが故に、則ち是心を生ぜず。常に此惡心を防ぎて入るを得しめず。自ら大に
 して人を蔑むを遠離すとは、内外の法を見ず、謂ゆる受の五衆、不受の五衆なり。十不善
 道を遠離すとは、菩薩は十不善道中の過罪、種種の因縁を觀するは先に説くが如し。此中
 に佛説きたまはく、「十不善道は小乘を破る、何に況んや大乘をや」と。大慢を遠離すとは、
 菩薩は十八空を行じて、諸法は定んで大小の相有るを見ず。自用を遠離すとは、七種の橋
 慢の根本を抜くが故に、又深く善法を樂むが故なり。顛倒を遠離すとは、一切法中に淨、
 樂、淨、我は不可得なるが故なり。三毒を遠離すとは三毒の義は先に説くが如し。又此三
 毒の所縁には定相有る無し。

【八】次に菩薩が六地にあつて具見すべき六法を釋す

六波羅蜜とは先に説くが如し。此中に佛説きたまはく、「三乘の人は皆此六波羅蜜を以て
 彼岸に到るを得」と。問うて曰はく、「此は是れ菩薩地なり。何を以てか聲聞辟支佛は彼岸
 に到るを得と説く。」答へて曰はく、「六波羅蜜は、多く能くする所有り、大乘法中には則
 ち能く小乘を舍受し、小乗は則ち能はず。是菩薩、六地の中に住し、六波羅蜜を具足し、
 一切諸法の空を觀するも、未だ方便力を得ずして聲聞、辟支佛地に墮せんを畏る。佛は將
 る護りたまふが故に、「聲聞、辟支佛心を生ずべからず」と説きたまへり。菩薩、深く衆生
 を念するが故に、大悲心の故に、一切諸法の畢竟空なるを知るが故に、施す時に惜む所無

く、求むる者有るを見れば、瞋らず、憂へず、布施の後心に亦悔いず、福德大なるが故に信
 力も亦大に、深く清淨に諸佛を信敬したてまつり、六波羅蜜を具足し、未だ方便を得ずと
 雖も無生法忍、般若三昧の深法の中に於て亦疑ふ所無く、是念を作さく、「一切の論議は
 皆過罪有り、唯佛の智慧のみは諸の戲論を滅して闕失有る無きが故に、而も能く方便を
 以て諸の善法を修す。是故に疑はず」と。六地

大智度論卷第四十九

大智度論釋發趣品第二十之餘

卷第五十

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

【經】云何が菩薩、我に著せずとする。畢竟無我なるが故に。云何が菩薩、衆生に著せず、壽命に著せず、衆數乃至知者、見者に著せずとする。是諸法は畢竟不可得なるが故に。云何が菩薩、斷見に著せずとする。法として斷するもの有ること無く、諸法は畢竟不生なるが故に。云何が菩薩、常見に著せずとする。若し法不生ならば是れ常と作さざればなり。云何が菩薩、相を取るべからずとする。諸の煩惱無きが故に。云何が菩薩、因見を作すべからずとする。諸見不可得なるが故に。云何が菩薩、名色に著せずとする。名色處の相は無なるが故に。云何が菩薩、五衆に著せず、十八界に著せず、十二入に著せずとする。是諸法の性、無きが故に。云何が菩薩、三界に著せずとする。三界の性、無きが故に。云何が菩薩、應に心に著を作すべからずとする。云何が菩薩、應に依止を作すべからずとする。是諸法の性無きが故に。云何が菩薩、佛に依るの見に著せずとする。依見を作せば佛を見たてまつらざるが故に。云何が菩薩、法に依るの見に著せずとする。法は、見るべからざるが故に。云何が菩薩、僧に依るの見

に著せずとする。僧相は、無爲にして依るべからざるが故に。云何が菩薩、戒に依るの見到著せずとする。罪無罪に著せざるが故に。是を菩薩、七地の中に住して、二十法に著すべからざる所と爲す。云何が菩薩、應に空を具足すべしとする。諸法は、自相空を具足するが故に。云何が菩薩、無相を證すとす。諸相を念ぜざるが故に。云何が菩薩、無作を知るとする。三界の中に於て、作さざるが故に。云何が菩薩、三分清淨なりとする。十善道を具足するが故に。云何が菩薩、一切衆生の中、慈悲智具足すとす。大悲を得るが故に。云何が菩薩、一切衆生を念ぜずとする。世界を淨むることを具足するが故に。云何が菩薩、一切法を等しく觀すとす。諸法に於て、損益せざるが故に。云何が菩薩、諸法實相を知るとす。諸法實相、知ること無きが故に。云何が菩薩、無生忍なる。諸法は不生不滅、不作の爲の故なり、云何が菩薩、無生智なる。名色の不生なるを知るが故に。云何が菩薩、諸法の一相を説くとす。心に二相を行ぜざるが故に。云何が菩薩、分別相を破するとす。一切法を分別せざるが故に。云何が菩薩、憶想を轉すとす。小大の無量の想、轉するが故に。云何が菩薩、見を轉すとす。聲聞、辟支佛地に於て、見を轉するが故に。云何が菩薩、煩惱を轉すとす。諸の煩惱を轉するが故に。云何が菩薩、定慧を等しする地とする。謂ゆる、一切種智を得るが故に。云何が菩薩、意を調ふとする。三界に於て、不動なるが故に。云何が菩薩、心寂滅なりとする。六根を制するが故に。云何が菩薩、無礙智なりとする。佛眼を得るが故に。云何が菩薩、愛に染ますとす。六塵

を捨つるが故に。是を、菩薩は、七地の中に住して、二十法を具足すと爲す。云何が菩薩、衆生の心に順入すとす。菩薩一心を以て、一切衆生の心、及び心數法を知るなり。云何が菩薩、諸の神通に遊戲すとす。是神通を以て、一佛國より一佛國に至り、亦佛國の想をも作さざるなり。云何が菩薩、諸の佛國を觀すとす。自ら其國に住し、無量の諸の佛國を見、亦佛界の想無きなり。云何が菩薩、見る所の佛國の如く、自ら其國を莊嚴すとす。轉輪聖王の地に住し、遍く三千大千世界に至り、以て自ら莊嚴するなり。云何が菩薩、如實に佛身を觀すとす。如實に法身を觀するが故に。是を菩薩、八地の中に住して、四法を具足すと爲す。云何が菩薩、上下の諸根を知るとす。菩薩は佛の十力に住して、一切衆生の上下の諸根を知るなり。云何が菩薩、佛國を淨むとす。衆生を淨むるが故に。云何が菩薩の如幻三昧とす。是三昧に住して、能く一切の事を成辨し、亦心相をも生ぜざるなり。云何が菩薩、常に三昧に入るとす。菩薩、報生三昧を得るが故に。云何が菩薩、衆生所應の善根に隨うて身を受くとす。菩薩、衆生の善根を生ずべき所を知り、爲に身を受けて、衆生を成就するが故に。是を菩薩、八地の中に住して五法を具足すと爲す。云何が菩薩、無邊の國土、度する所の分を受くとす。十方無量の國土中の衆生を、諸佛の法の如く、度すべき所の者は之を度脱するなり。云何が菩薩、願ふ所の如くなるを得とする。六波羅蜜を具足するが故に。云何が菩薩、諸天、龍、夜叉、提閻婆の語を知るとす。諸の辭辯の力の故に。云何が菩薩、胎生を成就すとす。菩薩、世

世に常に化生するが故に。云何が菩薩、家を成就すとする。常に大家に在りて生ずるが故に。云何が菩薩、所生を成就すとする。若は利利家に生じ、若は婆羅門家に生ずるが故に。云何が菩薩、姓を成就すとする。過去の菩薩の、生ずる所の姓の如く、此中より生ずるが故に。云何が菩薩、眷屬を成就すとする。純ら諸の菩薩摩訶薩を眷族と爲すが故に。云何が菩薩、出生成就すとする。生ずる時、光明遍く無量無邊の世界を照し、亦相を取らざるが故に。云何が菩薩、出家成就すとする。出家の時、無量百千億の諸天、出家に侍從し、は一切衆生、必ず三乘に至ればなり。云何が菩薩、佛樹を莊嚴するを成就すとする。是菩薩樹は、黄金を以て根と爲し、七寶を莖、節、枝、葉と爲し、莖節枝葉の光明、遍く十方阿僧祇の三千大千世界を照すなり。云何が菩薩、一切諸の善根、功德を成滿し具足する。菩薩は衆生を清淨にし、佛界をも亦淨むるを得、是を菩薩は九地中に住して、十二法を具足すと爲す。云何が菩薩、十地の中に住し、當に佛の如しと知るべしといふ。若し菩薩摩訶薩、六波羅蜜を具足し、四念處、乃至十八不共法、一切種智を具足し、滿じて、一切の煩惱、及び習を斷ず、是を菩薩摩訶薩、十地の中に住し、當に佛の如しと知るべしと爲す。須菩提、菩薩摩訶薩、是十地の中に住し、方便力を以ての故に六波羅蜜を行じ、四念處、乃至十八不共法を行じ、乾慧地、性地、八忍地、見地、薄地、離欲地、已作地、辟支佛地、菩薩地を過ぎ、是九地を過ぎて佛地に住す。是を菩薩の十地と爲す。是の如く須菩提、是を菩薩摩訶薩、大乘に發起すと名く。

【二】次に菩薩が七地に住して著すべからざる二十法と具足すべき二十法とを釋す。

論 論者言はく、『我等の二十法は不可得なるが故に著せず。不可得の因縁は先に種種に説けるが如し。我見、乃至知者、見者、佛見、僧見は、是れ衆生空に入るが故に是見に著すべからず。餘の斷常乃至戒見、是法は空なるが故に著すべからず。問うて曰はく、『餘は知るべし、因見は云何。』答へて曰はく、『一切の有爲法は展轉して因果と爲る。是法の中に著し、心に相を取りて見を生ずる是を因見と名く。謂ゆる、因に非ざるを因と説き、或は因果の一異等なり。空を具足すとは、若し菩薩、能く盡く十八空を行ぜば、是を空を具足すと名く。復次に能く二種の空、衆生空と法空を行ずる、是を空を具足すと名く。復次に若し菩薩、能く畢竟空を行じて、中に於て著せざれば是を空を具足すと名く。問うて曰はく、『若し爾らば、佛は此中に何を以てか但自相空のみを説きたまへる。』答へて曰はく、『此三種の空は皆是れ自相空なり。六地に住する菩薩、福德を以ての故に利根なり。利根なるが故に諸法を分別して相を取る。是を以ての故に七地の中には相空を以て具足空と爲す。佛、或時には、有爲空無爲空を説いて空を具足すと爲したまひ、或時には、不可得空を説いて空を具足すと名けたまへり。無相を證すとは、無相は即ち是れ涅槃にして證すべく修すべからず。修すべからざるが故に、知ると言ふを得ず。無量無邊にして分別すべからざるが故に、具足すと言ふを得ず。無作を知るとは三事は通ずと雖も、是二事を知りて更に義もて其名を立つ。無作は但名のみを知るに有り。三分、清淨なりとは、謂ゆる十善道にして身の三、口の四、意の三、是を三分と名く。上に二解脱門を説くが故に、此中には復説か

す。三分清淨なりとは、或は人の身業清淨にして、口業清淨ならず、口業清淨にして、身業清淨ならず。或は身口業は清淨なれども、意業は清淨ならざる有り。或は世間に三業清淨なるも、而も未だ著を離るる能はざるもの有り。是菩薩は三業清淨にして及び著を離るるが故に、是を三分清淨なりと名く。一切衆生の中に慈悲と智とを具足すとは、悲に三種有り、衆生縁、法縁、無縁なり。此中には無縁の大悲を説いて具足すと名く。謂ゆる法性空乃至實相に至るまで亦空なり。是を無縁の大悲と名く。菩薩は深く實相に入り、然る後に衆生を悲念す。譬へば人に一子有り、好き寶物を得、則ち深心に愛念して以て之を與へんと欲するが如し。一切衆生を念せずとは、謂ゆる世界を淨むるを具足するが故に。

問うて曰はく、「若し衆生を念せずんば、云何が能く佛世界を淨むる。答へて曰はく、「菩薩は衆生をして十善道に住せしめ、佛國を莊嚴するを爲す。莊嚴すと雖も未だ無礙の莊嚴を得ず。菩薩をして衆生を教化し、衆生の相を取らざらしむれば、諸の善根、福德、清淨なり。諸の善根、福德、清淨なるが故に是れ無礙莊嚴なり。一切の法等しく觀ずとは法等忍の中に説くが如し。此中に佛自ら説きたまはく、「諸法に於て増損せず」と。諸法の實相を知るとは、先に種種の因縁廣く説くが如し。無生法忍とは生滅無き諸法實相の中に於て、信受し通達して無礙不退なり、是を無生忍と名く。無生智とは初は忍と名け、後を智と名く。龜なる者は忍、細なる者は智なり。佛自ら説きたまはく、「名色の不生なる

を知るが故に」と。諸法は一相なりと説くとは、菩薩、内外の十二入は皆是れ魔網にして虚誑不實なり。此中に於て、六種の識を生ずるも亦是れ魔網にして虚誑なり」と知る。何者か是れ實にして唯不二の法なる。眼無く、色無く、乃至意無く、法無き等、是を實と名く。衆生をして十二入を離れしむるが故に、常に種種の因縁を以て是不二法を説く。分別の相を破すとは、菩薩は是不二法の中に住して、所縁の男女、長短、大小等、諸法を分別するを破す。憶想を轉ずとは内心に諸法等を憶想し、分別するを破す。見を轉ずとは是菩薩は先づ我見、邊見等の邪見を轉じ、然る後に道に入る。今法見、涅槃見を轉ずるは諸法に定相無きを以てなり。涅槃を轉ずとは、聲聞、辟支佛の見を轉じて直に佛道に趣くなり。煩惱を轉ずとは菩薩は福德、持戒の力を以ての故に、免なる煩惱を折伏して安隱に道を行ずるも、唯愛、瞋、慢等の微細の者の在る有り。今亦細なる煩惱をも離る。復次に菩薩は實智慧を用て、是煩惱、即ち是れ實相なりと觀ず。譬へば神通の人は、能く不淨を轉じて淨と爲すが如し。定慧を等用する地とは、菩薩は初め三地に於ては甚多く定少し、未だ心を攝する能はざるが故に。後の三地には定多く慧少し。是を以ての故に菩薩位に入るを得ず。今樂生空、法空にして、定慧等しきが故に、能く安隱に菩薩の道を行じ、阿耨跋致地より漸漸に一切種智を得。慧地に意を調ふとは、是菩薩、先づ老病死の三惡道を憶念し、衆生を愍念するが故に心意を調伏し、諸法實相を知らしむるが故に、三界に著せざるが故に調伏す。心寂滅とは菩薩は涅槃の爲の故に、先づ五欲の中に於て、五情を折伏し、

【一】次に菩薩が
八地に住して具足
すべき五法を明す

意情は折し難きが故に、今、七地に住して、意情寂滅なり。無礙智とは、菩薩は般若波羅蜜を得て、一切の實、不實の法中に於て無礙なり。是道慧を得て一切衆生を轉じて實法に入り、無礙解脫を得、佛眼を得て一切法の中に於て無礙ならん。問うて曰はく、「是七地の中に何を以てか佛眼を得と説く。」答へて曰はく、「是中に慧に佛眼を學すべし。諸法に於て無礙なる佛眼に似如せり。愛に染まらずとは、是菩薩は七地に於て、智慧力を得と雖も、猶先世の因縁有りて此肉身有り。禪定に入れば著せざれども、禪定を出づる時は著氣有りて、此肉眼の所見に隨ひ、好人を見ては觀愛し、或は是七地の智慧の實法を愛す。是故に佛眼きたまはく、「六塵の中に於て捨心を行じ、好惡の相を取らず」と。七地

衆生の心に順入すとは、菩薩は是八地の中に住し、一切衆生の心の遙く所を順觀し、動愛し思惟、深く念じて觀觀し、智慧を以て分別して知る。是衆生は永く得度の因縁無し。是衆生は無量阿僧祇劫を過ぎて然る後に度すべし。或は一劫、二劫、乃至、十劫にして度すべし。是衆生は或は一劫、一劫、乃至、今世に度すべし。是衆生は或は即時に度すべき者なり。是は熟せり、是は未熟なり。是人は聲聞乘を以て度すべく、是人は辟支佛乘を以て度すべし。一と。譬へば良醫の病を診して差ゆるの久しき、近き、治すべき、治すべからざるを知るが如し。諸の神通に遊戯すとは、先に諸の神通を得て、今自在に遊戯するを得、能く無量無邊の世界に至る。菩薩は七地の中に住する時涅槃を取らんと欲す。爾時、種種の因縁及び十方の諸佛有りて、擁護し還心を生じて心に衆生を度せんと欲す。

し、莊嚴神通を好むに、意に隨つて自在にして乃ち無量無邊の世界の中に聖礙する所無く、
 諸佛の國を見たてまつり、亦佛國の相をも取らざるに至る。諸佛の國を觀ずとは、菩薩有り、
 神通力を以て飛んで十方に到り、諸の清淨世界を觀じ、相を取りて自ら其國を莊嚴せ
 んと欲す。菩薩有り、佛將ひて十方に至り、清淨世界を示したまふに淨國の相を取りて
 自ら願行を作す。世自在王佛の法積比丘を將ひて十方に至り、清淨世界を示したまへ
 るが如し。或は有る菩薩は自らは木國に住し、天眼を用て十方の清淨世界を見、初は淨
 相を取るも、後に不著の心を得るが故に還つて捨つ。見る所の佛國の如く、其國を莊嚴すと
 は、先に説くが如し。是八地を轉輪地と名く。轉輪聖王の寶輪の至る處には、礙無く障無
 く、諸の怨敵無きが如し。菩薩は是地の中に住して、能く法寶を雨らし、衆生の願を満
 し、能く障礙するもの無し。亦能く見る所の淨國の相を取り、而して自ら其國を莊嚴す。
 如實に佛身を觀ずとは、諸佛の身を觀するに、幻の如く、化の如く、五衆、十二入、十八
 界の所攝に非ず。若は長、若は短、若干種の色は、衆生の先世の業因縁の見る所に隨ふ。
 此中に佛自ら説きたまはく、一、法身を見る者、是れ佛を見たてまつると爲す。法身とは不
 可得法空なり。不可得法空とは諸の因縁の邊より生じ、法として自性有る無しと。上下
 の諸根を知るとは十力の中に説くが如し。菩薩は先づ一切衆生の心の所行を知り、誰
 か鈍、誰か利、誰か布施多く、誰か智慧多しと、其多き者に因りて之を度脱す。
 佛國土を淨むとは二種の淨有り。一には菩薩は自ら其身を淨め、二には衆生の心を淨め

【三】更に八地に
 住して具足する五
 法を明す。

【四】次に菩薩が九地に住して具足す。き十二法を釋す。

て清淨の道を行ぜしむ。彼我の因縁清淨なるを以ての故に、所願に隨つて、清淨世界に入るを得。如幻三昧に入るとは、幻人は一處に住するも、所作の幻事は、世界に遍滿するが如し。謂ゆる四種の兵衆、宮殿、城郭、飲食、歌舞、殺活、憂苦等なり、菩薩も亦是の如く、是三昧の中に住して、能く十方世界に於て變化し、其中に遍滿し、先づ布施等を行じて衆生に充滿し、次に法を説き、教化して三惡道を破壊し、然る後に衆生を三乘に安立し、一切の利益すべき所の事は成就せざる事無し。是菩薩は心不動にして、亦心相をも取らず。常に三昧に入るとは、菩薩は如幻等の三昧を得て、役する所の心に、能く所作有り、今身を轉じて衆生三昧を得。人の色を見るに心力を用ひざるが如く、是三昧の中に住すれば、衆生を度すること安隱にして如幻三昧に勝り、自然に事を成じて役用する所無し。人の財を求むるに、力を役して得る者有り、自然に得る者有るが如し。衆生所應の善根に隨つて身を受くと、菩薩は二種の三昧、二種の神通の行得、報得を得。何の身を以て、何の語を以て、何の因縁を以て、何の事を以て、何の道を以て、何の方便を以てすべきかを知り、而して爲に身を受け、乃至畜生の身を受けて、之を化度す。入地

(四) 無邊の世界に度する所の分を受くと、は無量阿僧祇、十方世界の六道の中の衆生にして、是菩薩の教化して度すべき所の者は之を度す。是世界に三種有り、淨なる有り、不淨なるあり、雜なる有り。是三種の世界の中の衆生にして應に度すべき所、利益有る者は皆之を攝取す。譬へば燈を然すは、目有る人の爲にして盲者の爲ならざるが如し。菩薩も亦是

の如し、或は先に因縁有る者有り。或は始めて因縁を作す者あり。復次に三千大千世界を
一世界と名け、一時に起り、一時に滅す。是の如き等の十方の如恆河沙等の世界は是れ一
佛の世界なり。是の如き一佛の世界の數、如恆河沙等の世界は是れ一佛世界の海なり。是
の如き佛世界の海の數、如十方恆河沙の世界は是れ佛世界の種なり。是の如き世界の種は
十方に無量なり。是を一佛世界と名け、一切世界の中に於て是の如き分を取る。是を一佛
の度したまふ所の分と名く。所願の如くなるを得とは、是菩薩、福德智慧を具足するが故
に、願として得ざる無く、聽く者は無量無邊世界の度する所の分を聞く。疑は不可得なり。
是を以ての故に次に願ふ所意の如しと説く。此中に佛、自ら六波羅蜜の具足を説きたまへ
り。五度は則ち福德を具足し、般若は則ち智慧を具足す。諸天、龍、夜叉、健闥婆の語を
知るとは、我、上に福德智慧を具足すれば、願ふ所意の如しと説く。他人の種種の語を知
るは、即ち是れ願ふ所の事なり。復次に菩薩、宿命智清淨なるを得るが故に、處處の
生の一切の語を知る。復次に、願智を得るが故に立名を知る者は、心に強ひて種種の名字
語言を作す。復次に菩薩、解業生語言三昧を得るが故に、一切の語に通じて礙無し。復次
に自ら四無礙智を得、又復佛の四無礙智を學す。是を以ての故に、衆生の語言音聲を知る。
處胎成就すとは有人言はく、「菩薩は白象に乗り、無量の兎率の諸天の與に圍繞し恭敬し供
養し侍從せられて母胎に入る」と。有人言はく、「菩薩の母は如幻三昧力を得るが故に腹を
して廣大無量ならしめ、一切の三千大千世界の菩薩、及び天、龍、鬼神、皆入出するを

得、胎中に宮殿、臺觀有り。先づ床座を莊嚴し、繪幡蓋を懸け、華を散し香を燒く。皆是
 れ菩薩の福徳業の因縁の感ずる所なり。然る後に菩薩來り下りて、之に處す。亦三昧力を
 以ての故に下りて母胎に入り、兜率天上に於ては故の如し」と。生成純すとよ、菩薩生
 ぜんと欲する時、諸天、龍、鬼神、三千大千世界を莊嚴し、是時、七寶の蓮華座有りて、
 自然にして有り、母の胎中より無量の菩薩有りて先づ出で、蓮華の上に坐し、又手し讚歎
 して菩薩を俟待す。及び諸天、龍、鬼神、仙聖、諸の王女等は皆手を合せて一心に菩薩
 の生するを見んと欲す。然る彼に菩薩は母の右の脅より出づるに滿月の雲中より出づるが
 如く、大光を放ちて無量の世界を照す。是時、大名聲有りて、十方世界に遍滿し、唱へて
 言はく、「某國の菩薩、末後の身生す」と。或は有る菩薩は蓮華に化生す。四生の中に於て、
 菩薩は胎生、化生なり。四種の人の中に於ては菩薩は刹利、婆羅門の二姓の中に生す。比二
 種の姓に生るるは人の貴ぶ所なるが故に。家成就すとは、婆羅門の家は智慧有り、刹利の
 家は力勞有り。婆羅門は後世を利益し、刹利は今世を利益す。是二種は世に於て益有り、是
 故に菩薩は此中に在りて生す。復次に諸の功徳法の家は、謂ゆる不退轉の生なり。是を
 家生と名く。姓成就すとは、菩薩は兜率天上より世間の何姓を貴と爲して能く衆生を攝
 するかを觀じ、即ち是姓中に於て生す。七佛の中、初の三佛は、憍陳如姓の中に生れ、次の
 三佛は迦葉姓の中に生れ、釋迦牟尼佛は憍曇姓の中に生れたまへるが如し。復次に菩薩、
 初より深心にして牢固なり。是を諸佛の姓と名く。有人言はく、無生法忍を得る、是れ諸

【瞿毘耶】ゴト、
(Gopra)牛護と譯
す、悉達太子の夫
人、耶須達難のこ

佛の姓なり。是時、佛の一切種智の氣分を得るが故に。聲聞法の中の姓、地、人の如し」と。
 眷屬成就すとは、皆是れ智人、善人にして世世に功德を積む。此中に佛自ら説きたまはく、「純ら菩薩を以て眷屬と爲す」と。「不可思議經」中に説くが如きは、「瞿毘耶は是れ大菩薩なり。一切の眷屬は皆是れ阿鞞跋致地に住す。菩薩は方便三昧變化力を以て男と爲り女と爲り、共に眷屬と爲る。轉輪聖王の居士の寶もて、是夜叉、鬼神を人身に現作し、人と事を共にせしむるが如し」と。出家成就すとは、釋迦文菩薩の如きは夜宮殿に於て、諸の姪女を見るに皆死せる狀の如し。十方の諸天、鬼神は幡華、供養の具を齎持して迎へ奉りて出でんとす。是時、車匿は淨飯王の敕を受くと雖も、而も菩薩の意に隨うて自ら馬を牽きて至る。四天王の使者は馬足を接捺して城を踏えて出づ。諸の煩惱及び魔人を破せんが爲に一切の衆人に示すらく、「在家の穢は此の如し。大功德貴重の人すら猶尚出家す。況んや諸の凡細をや」と。是の如き等の因縁を出家成就と名く。佛樹を莊嚴するを成就すとは、菩提樹を莊嚴するは先に説けるが如し。佛此中に自ら説きたまはく、「是菩提樹は黄金を以て根と爲し、七寶を莖節枝葉と爲し、莖節枝葉の光明は、遍く十方無數阿僧祇の諸佛の世界を照す」と。或は佛有り。菩薩は七寶を以て佛樹を莊嚴す。或は是に如かさる者有り。所以は何ん。諸佛の神力は不可思議にして、衆生の爲の故に種種の莊嚴を現じたまへばなり。一切の諸善功德を成滿し具足すとは、菩薩は七地の中に住して諸の煩惱を破し、自利を具足し、八地九地に住して他人を利益す。謂ゆる衆生を教化し、佛世界を

【五】次に第十地には當に佛の如しと知るの義解。

淨む。自利利他、深大なるが故に一切の功德を具足す。阿羅漢、辟支佛の如きは自利を重んずと雖も、利他を輕んずるが故に具足と名けず。諸天及び小菩薩は能く他を利益すと雖も、而も自ら未だ煩惱を除かざるが故に亦具足せず。是を功德を具足すと名く。九地當に知るべし、佛の如しとは、菩薩は是の如く樹下に坐して第十地に入るを名けて、法雲地と爲す。譬へば大雲の雨を澍ぎ、連りに下りて間無きが如く、心に自然に無量無邊の清淨なる、諸佛の法を生ずる、念念に無量なり。爾時、菩薩は念を作さく、「欲界の魔王の心は、未だ降伏せず」と。眉間の光を放ちて、百億の魔宮をして闇蔽して現ぜざらしむ。魔は即ち顛惱し、其兵衆を集め來りて菩薩の頂より入りたまふ。是時、十地に得る所の功德は變じて佛法と爲り、一切の煩惱の習を斷じて無礙解脱を得、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲等の、無量無邊の諸佛の法を具す。是時、地は爲に六種に震動し、天は華香を雨らし、諸の菩薩、天、人は皆手を合せて讚歎す。是時、大光明を放ちて、遍く十方無量の世界を照すに、十方の諸佛、菩薩、天、人は、大聲に唱へて言はく、「某方、某國、某甲の菩薩、道場に坐して佛事を成具す。是れ其光明なり」と。是を十地と名く。當に知るべし、佛の如くなることを。復次に佛、此中に更に説きたまはく、「第十地の相とは謂ゆる菩薩の六波羅蜜を行じ、方便力を以ての故に、乾慧地、乃至菩薩地を過ぎて佛地に住するなり。佛地は即ち是れ第十地なり」と。菩薩は能く是の如く十地を行す。是を大乘

に發趣すと名く。」

大智度論釋 出 到品第二十一

佛、須菩提に告げたまはく、「汝が問ふ所の、是乘は何の處より出で、何の處に至りて住するかとは、佛言はく、是乘は、三界の中より出でて、薩婆若の中に至りて住す。不二の法を以ての故に。何を以ての故に。摩訶衍と薩婆若との是二法は、共にして、合せず、散ぜず、色無く、形無く、對無く、一相にして、謂ゆる無相なり。若し人、實際をして出でしめんと欲せば、是人は無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、如、法性、不可思議性をして出でしめんと欲せば、是人は無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、色空をして出でしめんと欲せば、是人は無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、受想行識空をして出でしめんと欲せば、是人は無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に。須菩提、色空の相は三界を出でず、亦薩婆若に住せず。受想行識空の相は三界を出でず、亦薩婆若にも住せざればなり。所以は何ん。色、色相は空なり、受想行識相は空なるが故に。若し人、眼空をして出でしめんと欲せば、是人は、無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、耳鼻舌身意空をして出でしめんと欲せば、是人は無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、乃至意觸因緣生の受空をして出で

しめんと欲せば、是人は無想の法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に。須菩提、眼空は三界を出でず、亦薩婆若に住せず、乃至意觸因縁生の受空も三界を出でず、亦薩婆若に住せざればなり。所以は何ん。眼、眼想は空なり、乃至意觸因縁生の受相は空なるが故に。若し人、夢をして出でしめんと欲せば、是入は無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、幻、焰、響、影、化をして出でしめんと欲せば、是人は無想の法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に。須菩提、夢想は三界を出でず、亦薩婆若に住せず、幻、焰、響、影、化の相も亦三界を出でず、亦薩婆若に住せざればなり。須菩提、若し人、檀波羅蜜をして出でしめんと欲せば、是人は無想の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、尸羅波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜をして出でしめんと欲せば、是人は無想の法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に。檀波羅蜜の相は三界を出でず、亦薩婆若にも住せず。尸羅波羅蜜、乃至般若波羅蜜の相は三界を出でず、亦薩婆若にも住せざればなり。所以は何ん。檀波羅蜜、檀波羅蜜の相は空なり。尸羅波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、般若波羅蜜、般若波羅蜜の相は空なるが故に。若し人、内空を出で、乃至、無法有法空を出でしめんと欲せば、是人は無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に。須菩提、内空の相、乃至無法有法空の相は、三界を出でず、亦薩婆若に住せざればなり。所以は何ん。内空、内空の性は空なり、乃至、無法有法空、無法有法空の性は、空なるが故に。若し人、

四念處をして出でしめんと欲せば、是人は無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に、四念處の性は三界を出でず、亦薩婆若に住せず。所以は何ん。四念處、四念處の性は空なるが故に。若し人、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分をして出でしめんと欲せば、是人は無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に、八聖道分の性は三界を出でず、亦薩婆若にも住せざればなり。所以は何ん。八聖道分の性は空なるが故に。乃至十八不共法も亦是の如し。須菩提、若し人、阿羅漢をして生處を出でしめんと欲せば、是人は無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、辟支佛をして生處を出でしめんと欲せば、是人は無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。若し人、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀をして出でしめんと欲せば、是人は無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に。須菩提、阿羅漢の性、辟支佛の性、佛の性は三界を出でず、亦薩婆若に住せざればなり。所以は何ん。阿羅漢、阿羅漢の性は空なり、辟支佛、辟支佛の性は空なり、佛、佛の性は空なるが故に。若し人、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、佛道、一切種智を出でしめんと欲せば、是人は無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。上に説くが如し。若し人、名字假名施設の相をして。但語言有りて出でしめんと欲せば、是人は無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に。名字は空にして三界を出でず、亦薩婆若に住せざればなり。所以は何ん。名字、名字の相は、空なるが故に。乃至施設も亦是の如し。若し人、不生不滅の法、不垢不淨無作の法

【六八】本品は第十
八品の問に答へて
何處に出、何處に
出、何處に到るか
を示す。先づ三界
を出でて一切智に
到るを出到とす
も、畢竟空無相に
して、實に出到の
すとるべきなきを明

をして出でしめんと欲せば、是人は無相の法をして出でしめんと欲すと爲す。何を以ての故に。不生、乃至無作の法性は三界を出でず、亦薩婆若に住せざればなり。所以は何ん。不生の性、乃至、無作の性は、性空なるが故に。須菩提、是因縁を以ての故に、摩訶衍は三界の中より出でて、薩婆若の中に至りて住す。動ぜざる法の故に。

問うて曰はく、「佛、已に須菩提の問ふ所を知りたまふ。今、何を以てか更に稱して、而も答へたまへる。」答へて曰はく、「是摩訶般若波羅蜜經は、十萬偈、三百二十萬言有り、四阿含と等し。此は一座に説き盡したまひしに非ず。又上に須菩提の問ふ所は、已に答へたまへり。二事は時を異にし、日を異にするが故に、第三問を稱して、而も答へたまひしなり。」

復次に有人言はく、「聲聞法の中には不思議の事有る無く、一日、一坐の中に説き盡くすを得ず」と。佛は無礙解脱有り、菩薩は不可思議三昧有りて、能く多時をして少事ならしめ、少時を多時と作し、亦能く大色を以て小に入れ、小色を大と作す。又六十小劫、「法華經」を説くに、人、且より食に至ると謂ふが如し。問うて曰はく、「色は有形にして見るべく、時は無形にして但名ののみ有り。云何が近きを以て遠しと爲し、遠きを以て近しと爲すを得ん。」答へて曰はく、「是を以ての故に、「不可思議神通の力を以てす」と説く。人の夢中に夢に見る所有りとし、自ら以て覺せりと爲し、夢中に復夢み、是の如く展轉するが故に是一夜あるが如し。是を以ての故に、更に其間を稱して而も答へたまへり。是乘は何處

より出で、何處に至りて住するやとは、佛、答へたまはく、「是乘は、三界の中より出でて薩婆若の中に至りて住す」と。問うて曰はく、「是乘は是れ佛法と爲んや、又は是れ菩薩の法と爲んや。若し是れ佛法ならば云何が三界より出でん。若し是れ菩薩の法ならば、云何が薩婆若の中に住する。」答へて曰はく、「是乘は是れ菩薩の法より乃ち金剛三昧に至る。是諸の功德は清淨にして、變じて佛法と爲る。是乘には大力有りて能く去る所有り、直に以て佛に至る。更に勝處の去るべき無きが故に住すと云ふなり。譬へば、劫盡の火、三千世界を燒き、勢力甚だ大なるも更に燒く所無きが故に、便ち自ら滅するが如く、摩訶衍も亦是の如し。一切の煩惱を斷じ、諸の功德を集めて其邊際を盡し、更に斷ずる所無く、更に知る所無く、更に集むる所無きが故に便ち自ら滅に歸す。不二の法とは諸の菩薩の著を斷ずるが故に説く。此中に佛自ら説きたまはく、「大乘と薩婆若とは二法は、一ならざるが故に合せず。異ならざるが故に六情の所知を散ぜず。虚妄を盡すが故に、色無く形無く、對無く一相なり」と。」

問うて曰はく、「先には一ならざるが故に合せずと言ふ。今何を以てか一相なりと言ふ。」答へて曰はく、「此中に一相と言ふは、謂ゆる無相なり。無相なれば則ち佛道に出至する有る無し。凡夫の人を引導せんが爲の故に説いて一相と言ふ。實際とは是れ諸法の末後なり、實相には出無く人無し。若し狂人有りて實際をして佛道に出至せしめんと欲せば、此人は則ち無相の法をして出でしめんと欲するなり。如、法性、法相は先に説くが如し。不可思

議性とは、有人言はく、「即ち是は如、法性、實際、無量無邊の心心數法は、滅なるが故に不可思議と言ふ」と。復有人言はく、「實際、涅槃を過ぎて更に諸法の實を求むるに、若し有、若し無なり。是を不可思議と名く」と。復次に一切諸佛の法は、能く思惟し、籌量する者有る無きが故に不可思議と言ふ。復有人言はく、「一切諸法を分別し思惟するに、皆同じく涅槃の相なり。是れ不可思議なり」と。若し人、空中をして出でしめんと欲せば、此人は則ち無相の法中をして出でしめんと欲するなり。此中に、佛自ら説きたまはく、「五衆は空相なり、三界を出づる能はず。薩婆若に至る能はず。五衆の中、五衆の相は空なるが故に。十二入、乃至意識因緣生の受の空なるも、亦是の如く、夢等の空の譬喩も亦是の如し。自相空なるが故に、出づる無く、至る無し。若し人、六波羅蜜をして出でしめんと欲せば、此人は則ち爲に無相の法をして出でしめんと欲するなり。何を以ての故に。六波羅蜜は因緣和合なるが故に、自性無く、自性無きが故に空なればなり。菩薩は六波羅蜜に著して、邪道に墮するが故に、爲に空を説く。十八空、乃至一切種智も亦是の如し」と。問うて曰はく、「六波羅蜜には道俗有り。俗は著すべきが故に空を説くべし。出世間の六波羅蜜、三十七品、乃至十八不共法は著する所無きが故に、何を以てか空を説く。答へて曰はく、「諸の菩薩は漏未だ盡くさず、轉徳智慧の力を以ての故に是法を行じ、或は相を取りて愛著するが故に、凡夫の法は虚妄顛倒なり。此法は凡夫の法の邊より生ず。云何が是れ實ならん。是を以ての故に佛説きたまはく、「是も亦空なり。喻を以てすれば、無相の法は是れ大乘に

して即ち是れ無相なり。無相ならば、云何が出有り至る有らん」と。諸法は皆空にして、但名字の相、假名、語言のみ有り。今名字等も亦空なり。喩を以てすれば、無相は第一義の中には不可得なり。世俗法の中には相有り。名字等の假名の相の義は先に説くが如し。是の如きの法を用て三界より出で、薩婆若の中に至りて住す。是は實法に非ず、亦動する所無し。」

〔經〕 須菩提、汝が問ふ所の、「是乘は何處に住する」とは、須菩提、是大乘には住處無し。

何を以ての故に、一切法には住相無きが故に。是乗若し住するも住法に住せず。須菩提、譬へば、法性の生ぜず、滅せず、垢づかず、淨からず、相無く、作無く、住に非ず、不住に非ざるが如し。須菩提、是乘も亦是の如く、住に非ず、不住に非ず。何を以ての故に。法性の相、乃至無作の相は、住に非ず、不住に非ざればなり。所以は何ん、法性は相性空なるが故に。乃至無作の性は無作の性性空なるが故に。諸餘の法も亦是の如し、須菩提、是因縁を以ての故に、是乘には住處無し。不住の法不動の法なるを以ての故に。

【七】 大乘の無住の住たるを釋す。即ち薩婆若に到りて住すといふも、定住することなきなり。

論 問うて曰はく、「上には是乘は薩婆若に到れば、更に勝法の去るべき無しと言へり。今何を以てか是乘には住する處無しと説く。」答へて曰はく、「先に説けるは、空にして不二の法なるを以ての故に住すと云ふ、幻の如く、夢の如し。坐臥行住有りと雖も、實に是れ住するに非ず。菩薩も亦是の如し、薩婆若に到りて住すと云ふと雖も、亦定住するところ無し。佛、此中に自ら説きたまはく、「一切法は本より已來、住相無し、云何が獨り大乘の

み住する有らんや。若し住する所有れば、畢竟空法を以て住す。譬へば如、法性、法相、實際は住するに非ず、住せざるに非ず、不生、不滅、不垢、不淨、不起、不作なるが如し。住せずとは自相の中に住せず、住せざるに非ずとは、異相の中に住せざるなり。住せずとは空を説きて有を破し、住せざるに非ずとは、世諦方便を説きて住する有りとし、住せずとは、無常を説きて常相を破し、住せざるに非ずとは滅相を破す。此中に佛自ら説きたまはく、「法性、法性の相は空なり。何を以ての故に、自相空なるが故なり。乃至、無起無作の諸餘の法も亦是の如し」と。

須菩提、汝が問ふ所の、誰か當に是乘に乗じて出づべき者ぞとは、人の是乘に乗じて出づる者有る無し。何を以ての故に、是乘及び出づる者、用ふる所の法、及び出づる時、は一切の法は皆所有無ければなり。若し一切法にして所有なくんば、何等の法を用てか、當に出づべけん。何を以ての故に、我は得べからず。乃至知者見者は得べからず、畢竟淨なるが故なり。不可思議性は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。衆、入、界は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。檀波羅蜜は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。乃至般若波羅蜜は不可得なり。畢竟淨なるが故なり。内空は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。乃至無法有法空は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。四念處は不可得なり、乃至十八不共法は不可得なり。畢竟淨なるが故なり。須陀洹は不可得なり、乃至阿羅漢、辟支佛、菩薩、佛に至るまで不可得なり、畢竟淨なるが故なり。須陀洹果乃至阿羅漢果、辟支佛

道、佛道、一切種智は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。不生、不滅、不垢、不淨、無起、無作は不可得なり、畢竟淨なるが故なり、過去世、未來世、現在世の生住滅は不可得なり、畢竟淨なるが故なり、増減は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。何の法か不可得なるが故に不可得なりとする。法性は不可得なるが故に不可得なり。如、實際、不可思議性、法性、法相、法位、檀波羅蜜は、不可得なるが故に不可得なり。乃至、般若波羅蜜は不可得なるが故に不可得なり。内空は不可得なるが故に不可得なり。乃至、無法有法空は不可得なるが故に不可得なり。四念處は不可得なるが故に不可得なり、乃至十八不共法は不可得なるが故に不可得なり。須陀洹は不可得なるが故に不可得なり、乃至、佛は不可得なるが故に不可得なり。須陀洹果は不可得なるが故に不可得なり。乃至佛道は不可得なるが故に不可得なり。不生、不滅、乃至不起、不作は、不可得なるが故に不可得なり。復次に須菩提、初地は不可得なるが故に不可得なり。乃至第十地は不可得なるが故に、不可得なり。畢竟淨なるが故なり。云何が初地乃至十地と爲す。謂ゆる乾慧地、性地、八人地、見地、薄地、離欲地、已作地、辟支佛地、菩薩地、佛地なり。内空中に初地は不可得なり、乃至無法有法空中に初地は不可得なり。内空乃至無法有法空中に第二、第三、第四、第五、第六、第七、第八、第九、第十地は不可得なり。何を以ての故に、須菩提、初地は得に非ず、不得に非ず。乃至十地も得に非ず、不得に非ず、畢竟淨なるが故なり。内空乃至無法有法空中、衆生成就は不可得なり、畢竟淨なるが故なり。内空乃至無

【八】次に一切法
畢竟不可得なるに
乗じて一切智を出
づるを明す。

法有法空の中、佛世界を淨むるは不可得なり。畢竟淨なるが故なり。内容乃至無法有法空の中、五眼は不可得なり。畢竟淨なるが故なり。是の如く須菩提、菩薩摩訶薩は、一切諸法の不可得を以ての故に、是摩訶衍に乗じて薩婆若を出づ。

【九】論者言はく、「出づとは是乘を行じて佛道の邊に到り出づるなり。又復成就を以ての故に出づと名く。是乘を以て薩婆若を成就する、是を名けて出づと爲す。此中に佛、自ら空の因縁を説きたまふ。乗とは是れ六波羅蜜なり。用ふる所の法とは是れ慈悲方便等の諸法にして六波羅蜜に攝せざる所なり。出づる者は是れ菩薩なり。是三法は皆空なり。此中に佛、復因縁を説きたまふ。我は不可得なり、乃至知者、見者は不可得なり。畢竟空なるが故なり。五衆、十二入、十八界、檀波羅蜜、乃至十八不共法、須陀洹、乃至薩婆若、不生、不滅、不垢、不淨、乃至三世、三相、増減等、是を法空と名く。我より乃ち知者、見者に至るまで須陀洹より乃ち佛に至るまで是を衆生空と名く。問うて曰はく、「二種の不可得有り。一には法有るも智慧少きが故に得る能はず。二には大智慧有りて推求すれども得る能はず。此は云何が不可得なる。」答へて曰はく、「是法は無なるが故に不可得なり。問うて曰はく、「一切法は本末不可得ならば、人に於て何の利有る。」答へて曰はく、「此中に佛、自ら説きたまはく、「畢竟清淨なるが故なり」と。畢竟とは行者は無に依りて有を滅し、有に於て清淨を得、無に於て未だ清淨ならず。依止するを以ての故なり。此中に佛、自ら不可得の因縁を説きたまへり、一切衆生は不可得なり。一切法は不可得なり。譬へば

如、法性、實際等、乃至不作、不起、不可得なるが如し。復次に十八空の故に法性は不可得なり。乃至不作、不起、十八空の中には、初地乃至十地無く、衆生を成就するも無く、佛世界を淨むるも無く、五眼も無し。十八空を以ての故に空なり。畢竟清淨なるが故に不可得なり。菩薩は不可得の法を用ひ、是乘に乗じて薩婆若を出づるなり。

大智度論釋勝出品第二十二

卷第五十一

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

慧命須菩提、佛に白して言さく、「世尊、摩訶衍、摩訶衍とは、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出す。世尊、是摩訶衍は虚空と等し。虚空の無量無邊阿僧祇の衆生を受くるが如く、摩訶衍も亦是の如し、無量無邊阿僧祇の衆生を受く、世尊、是摩訶衍は來處を見ず、去處を見ず。住處を見ず。是摩訶衍は前際も得べからず、後際も得べからず、中際も得べからず、三世は等しく是れ摩訶衍なり。世尊、是を以ての故に是乘を摩訶衍と名く。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如く是の如し、菩薩摩訶薩の摩訶衍は、謂ゆる六波羅蜜にして、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜なり。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる一切の陀羅尼門、一切の三昧門、謂ゆる首楞嚴三昧、乃至離著虚空不染三昧、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる内容乃至無法有法空なり。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。復次に須菩提、菩薩摩訶薩の摩訶衍とは、謂ゆる四念處、乃至十八不共法、是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。須菩提の言ふ所の如く、是

摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出せり。須菩提、若し欲界は當に實有りて虚妄ならず、異諦ならず、顛倒せずんば、常にして壞せざるの相有るべく、無法に非ずんば、是摩訶衍は一切世間及び諸天、人、阿修羅に勝出する能はざらん。須菩提、欲界は虚妄なるを以て憶想分別して名字を和合し、等しく一切無常の相のみ有りて法無し。是を以ての故に、摩訶衍は一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提、色界、無色界は、若し當に實有にして、虚妄ならず、異諦ならず、顛倒ならずんば、常に不壞の相有るべし。無法ならん。須菩提、色界、無色界は、虚妄の憶想分別を以て名字を和合し、有に等しきも一切無常、破壞の相にして法無し。是を以ての故に摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提、若し色は當に實有にして、虚妄ならず、異諦ならず、顛倒せずんば、常に不壞の相有るべし。無法に非ずんば、是摩訶衍は一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出する能はざらん。須菩提、色は虚妄の憶想分別を以て名字を和合し、有に等しきも、一切無常破壞の相にして法無し。是を以ての故に、是摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。受、想、行、識も亦是の如し。須菩提、若し眼乃至意、色乃至法、眼乃至意識、眼乃至意識、眼乃至意識の受、乃至意識因縁生の受、若し當に實有にして虚妄ならず、異諦ならず、顛倒せずんば、常に不壞の相有るべし。無法に非ずんば、是摩訶衍は、一切の世間及び諸天、人、阿修羅に勝出する能はざらん。須菩

提、眼乃至意觸因縁生の受は、虚妄の憶想分別を以て名字を和合し、有に等しきも、一切
 無常破壊の相にして法無し。是を以ての故に摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を
 勝出す。須菩提、若し法性は是れ有法にして、無法に非ずんば、是摩訶衍は、一切の世
 間及び諸天、人、阿修羅を勝出す能はざらん。須菩提、法性は法非法無きを以て、是
 を以ての故に摩訶衍は、一切の世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提、若し如、
 實際、不可思議性、是れ有法にして無法に非ずんば、是摩訶衍は一切の世間及び諸天、人、
 阿修羅を勝出す能はざらん。須菩提、如、實際、不可思議性は、法非法無きを以て、
 是を以ての故に摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提、若し檀波
 羅蜜是れ有法にして無法に非ずんば、是摩訶衍は一切の世間及び諸天、人、阿修羅を勝出
 する能はざらん。檀波羅蜜は、法非法無きを以て、是を以ての故に摩訶衍は、一切世間及
 び諸天、人、阿修羅を勝出す。若し尸羅波羅蜜、摩提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、
 般若波羅蜜は、是れ有法にして無法に非ずんば、是摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿
 修羅を勝出す能はざらん。尸羅波羅蜜、乃至般若波羅蜜法非法無きを以て是を以ての
 故に、摩訶衍は、一切世間、諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提、若し内容乃至無法有
 法空、是れ有法にして無法に非ずんば、是摩訶衍は一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出
 する能はざらん。内容乃至無法有法空、法非法無きを以て、是を以ての故に、摩訶衍は一切
 世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提、若し四念處乃至十八不共法は、是れ有法

にして無法に非ずんば、是摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出する能はざらん。四念處乃至十八不共法、法非法無きを以て、是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提、若し性人法は、是れ有法にして無法に非ずんば、是摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出する能はざらん。性人法は、法非法無きを以て、是を以ての故に摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提、若し八人法、須陀洹法、斯陀含法、阿那含法、阿羅漢法、辟支佛法、佛法は、是れ有法にして、無法に非ずんば、是摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出する能はざらん。八人法乃至佛法は、法非法無きを以て、是を以ての故に摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提、若し性人は、是れ有法にして、無法に非ずんば、是摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出する能はざらん。性人は、法非法無きを以て、是を以ての故に摩訶衍は、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提、若し八人、須陀洹、乃至佛は、是れ有法にして、無法に非ずんば、是摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出する能はざらん。八人乃至佛は、法非法無きを以て、是を以ての故に摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提、若し一切世間及び諸天、人、阿修羅は、是れ有法にして、無法に非ずんば、是摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出する能はざらん。一切世間、諸天、人、阿修羅は、法非法無きを以て、是を以ての故に摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出す。

須菩提、若し菩薩摩訶薩は、初發心より乃ち道場に至るまで、其中間の諸心に於て、若し當に是れ有法にして、無法に非ずんば、是摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出する能はざらん。菩薩は初發心より、乃ち道場に至るまで、諸心に於て、無法非法無きを以て、是を以ての故に、摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提、若し菩薩摩訶薩の金剛の如き慧は、法非法無きを以て、是故に菩薩、一切の結使及び習の法非法無きことを知りて、一切種智を得、是を以ての故に摩訶衍は、一切世間、及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提、若し諸佛の三十二相は、是れ有法にして無法に非ずんば、諸佛の威徳は照然として、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す能はざらん。須菩提、諸佛の三十二相は、法非法無きを以て、是を以ての故に諸佛の威徳は照然として、一切世間及び諸天、人、阿修羅を勝出す。須菩提、若し諸佛の光明は、是れ有法にして、無法に非ずんば、諸佛の光明は普く恆河沙等の世界を照す能はざらん。須菩提、諸佛の光明、法非法無きを以て、是を以ての故に諸佛は能く光明を以て、普く恆河沙等の世界を照したまふ。須菩提、若し諸佛の六十種の莊嚴音聲は、是れ有法にして無法に非ずんば、諸佛は六十種の莊嚴音聲を以て遍く十方無量阿僧祇の世界に至りたまふ能はざらん。須菩提、諸佛の六十種の莊嚴音聲は、法非法無きを以て、是を以ての故に諸佛は

能く六十種の莊嚴音聲を以て遍く十方無量阿僧祇の世界に至る。須菩提、諸佛の法輪は、若し是れ有法にして無法に非ずんば、諸佛は法輪を轉じたまふ能はざるべく、諸の沙門婆羅門、若は天、若は魔、若は梵及び世間の餘衆も、如法に轉ずる能はざる所の者ならん。須菩提、諸佛の法輪は、法非法無きを以て、是を以ての故に諸佛は法輪を轉じたまふ。諸の沙門、婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、及び世間の餘衆の、如法に轉ずる能はざる者なり。須菩提、諸佛は衆生の爲に法輪を轉じたまふに、是衆生、若し實に有法にして無法に非ずんば、是衆生をして無餘涅槃に於て般涅槃せしめたまふ能はざるなり。須菩提、諸佛は衆生の爲に法輪を轉じたまふに、是衆生は法非法無きを以て、是を以ての故に、能く衆生をして、無餘涅槃の中に於て已に滅し、今滅し、當に滅すべし。

【一】本品は大衆の一切世間等に勝出するを明すを以て今その所以を論ず。

論者言はく、須菩提上に五事を以て摩訶衍を問ひ、佛已に答へ竟りたまふ。須菩提歡喜讚歎して是言を作さく、世尊、是摩訶衍は、大力勢有りて人天世間を破壊し、已に能く中に於て勝出す。譬へば三人惡道を度るに、一は夜に於て迷遁して獨り其身を脱し、二は錢を以て免るるを求め、三は大王の如き大軍衆を將ゐて寇賊を摧破し、擧軍全く濟ひて畏難する所無きが如し。三乘も亦是の如し、阿羅漢の如きは、一切の總相別相を知る能はず、亦魔王を破する能はず、又外道を降伏する能はず、老病死を厭ひて直に涅槃に趣く。辟支佛の如きは諸法實相に入ること、聲聞より深く、少しく悲心有り、神通力を以て衆生を化度し、能く煩惱を破すれども、魔人及び外道を破する能はず。菩薩の如きは、初發心

より、一切衆生に於て大慈悲を起し、未だ佛を得ずと雖も、其中間に於て無量の衆生を利益し、決定して諸法實相を知り、六波羅蜜を具足するが故に、諸の魔王を破し、及び外道を壞り、煩惱の習を斷じ、一切種智を具足し、總相別相を悉く知り悉く了じ、阿耨多羅三藐三菩提を成ず。三人は俱に生死を免ると雖も、然も方便の道各異り。是故に須菩提、摩訶衍の一切世間を摧使し、人天、阿修羅の上に勝出するを讚歎す。譬へば虚空の一切の國土を含受して、而も虚空の故に盡きざるが如し。摩訶衍も亦是の如し、三世の諸佛及び諸の弟子を含受すれども、摩訶衍も亦満たず。又虚空は常相なるが故に、入相無く出相無く住相無きが如く、是乘も亦是の如し。未來世の人處無く、過去世の出處無く、現在世の住處無し。三時を破するが故に、三世等しく摩訶衍と名く、問うて曰はく、「佛應に須菩提の歎する所の言を「善哉」と讚じたまふべし。何を以てか更に摩訶衍を説きたまへる。」答へて曰はく、「佛は將に須菩提の歎する所に順じて、而して讚歎せんと欲したまふ。上に説く摩訶衍は、遠きを以ての故に、今略して摩訶衍の相を説き、然る後廣く述べたまふ。須菩提の讚する所の摩訶衍とは、謂ゆる六波羅蜜、諸の陀羅尼門、三昧門、十八空、四念處、乃至十八不共法等なり。須菩提の所説の如く、摩訶衍は一切世間を破壞し、人天阿修羅の上に勝出すとは、是事實に爾なり。何を以ての故に。是三界は虚誑にして、幻の如く、夢の如く、無明、虚妄の因縁の故に、因果有るも定實有る無く、一切無常にして、破壞し磨滅す、皆是れ空相なり。摩訶衍は、三界と相違するを以ての故に、能く摧破し勝

出す。若し三界は定實にして、常に虚妄ならずんば、是摩訶衍は、摧破し勝出する能はず。何を以ての故に、力等しきが故に。五衆、十二入、十八界、六觸の諸受を生ずるも、亦是の如し。若し法性は是れ有法にして無法に非ずんば、摩訶衍は世間を破して勝出するを得る能はざらん。須菩提のいふ、「法性は有に非ざるを以ての故に、摩訶衍は能く世間を勝出するを得」と。問うて曰はく、「有爲法は因縁和合して、虚誑なるが故に無と言ふも、如、法性、實際、不可思議性は、是れ無爲實法にして名けて實際と爲す、云何が無と言ふ。」答へて曰はく、「無爲は空なるが故に無と言ふ。復次に佛説きたまはく、「有爲を離れて無爲法は得べからず。有爲法の實相は即ち是れ無爲法なり」と。復次に是有爲は虚誑なり。如、法性、實際の如きは、是れ實なりと觀じ、人は法性に於て相を取り評を起すを以ての故に、法性無しと言ふ。或は有と説き或は無と説くも、各因縁有るが故に咎無し。如、實際、不可思議性も亦是の如し。世間の檀波羅蜜は、著の故に有なり。出世間の檀波羅蜜は、無なるが故に空なり。慳貪を破するが爲の故に、檀波羅蜜有りと言ひ、邪見を破するが故に、檀波羅蜜は無なりと言ふ。初學者を度せんが爲に説きて有と言ひ、若し聖人は心中に説いて無と言ふ。檀波羅蜜の如く、乃至若し衆生は、實有にして是れ無法に非ず、強ひて滅して無餘涅槃に入らしむべからず。問うて曰はく、「三十二相より已後、何を以てか説いて摩訶衍は勝出すと言はざる。」答へて曰はく、「應當に説くべきも、直に文煩はしきが故に説かず。復次に三十二相より、乃ち衆生の爲に法輪を轉ずるに至るまで、亦是れ

摩訶衍にして但名字を異にするのみ。復次に上に總相もて、摩訶衍は勝出すと説くも、云何が勝出せるかを知らざれば、今別相もて説くなり。謂ゆる佛の三十二相は乾嚴の身なるが故に、一切衆生に勝り、佛の光明は、日月諸天の一切の光明に勝り、佛の音聲は、一切の音聲、世界の妙聲、諸天の梵音に勝り、佛の法輪は、轉輪聖王の寶輪、及び諸の外道の一切の法輪に勝れて、無障無礙なり。餘の法輪は、利益する所微淺にして、或は一世、二世、極まるも千萬世に至るのみ。佛の法輪は、能く永く無餘涅槃に入り、復還つて生死に入らざらしむるなり。復次に若し衆生實有ならば、佛は衆生をして涅槃に入り、永く其根を抜かしめたまふべからず。此れ一身を殺すにも過ぎたり。是の如き大答有り。衆生、顛倒の心を以て我を見るが故に、佛其顛倒を破せんと欲し、説いて言はく、「涅槃には衆生の滅すべきもの無し」と。故に答無し。是の如き功德有るが故に、摩訶衍は能く一切世間を勝出す。問うて曰はく、「一切世間とは、十方六道の衆生なり。何を以てか獨り諸の天、人、阿修羅に勝出すと説く。答へて曰はく、「六道の中の三は是れ善道、三は是れ惡道なり。摩訶衍は、尙能く三善道すら破して勝出す、何に況んや惡道をぞ。問うて曰はく、「龍王の中に説く、「龍、菩薩道を得」と。何を以てか是を惡道なりと説く。答へて曰はく、「衆生は無量無邊にして、龍の道を得る者は少し。復次に有人言はく、「大菩薩、身を變化して教化するが故に、龍王の身と作る」と。」

大智度論釋卷受品第二十三

佛、須菩提に告げたまはく、汝が言ふ所の、行と空と等しきこと、是の如く是の如し。
 須菩提、摩訶衍と空とは等し。須菩提、虛空に東方無く、南方西方北方、四維上下無きが
 如く、須菩提、摩訶衍も亦是の如し。東方無く、南方西方北方四維上下無し。須菩提、虛
 空の長に非ず、短に非ず、方に非ず、圓に非ざるが如く、須菩提、摩訶衍も亦是の如し。
 長に非ず、短に非ず、方に非ず、圓に非ず。須菩提、虛空の青に非ず、黄に非ず、赤に非
 ず、白に非ず、黒に非ざるが如く、須菩提、摩訶衍も亦是の如し。青に非ず、黄に非ず、
 赤に非ず、白に非ず、黒に非ず。是を以ての故に、摩訶衍と空とは等しと説く。須菩提、
 虛空は過去に非ず、未來に非ず、現在に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。過去に非ず、
 未來に非ず、現在に非ざるなり。是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。須菩提、虚
 空は増さず、減せざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。増さず、減せざるなり。須菩提、虚
 空は垢無く、淨無きが如く、摩訶衍も亦是の如し。垢無く、淨無きなり。須菩提、虚空の
 生無く、滅無く、住無く、異無きが如く、摩訶衍も亦是の如し。生無く、住無く、
 異無きなり。須菩提、虚空は善に非ず、不善に非ず、記に非ず、無記に非ざるが如く、摩
 訶衍も亦是の如し。善に非ず、不善に非ず、記に非ず、無記に非ざるなり。是を以ての故

に摩訶衍は、空と等しと説く。虚空の見無く、聞無く、知無く、識無きが如く、摩訶衍も亦是の如し。見無く聞無く、知無く識無きなり。虚空は知るべからず、識るべからず、見るべからず、断すべからず、證すべからず、修すべからざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。

知るべからず、識るべからず、見るべからず、断すべからず、證すべからず、修すべからず。是を以ての故に摩訶衍は空と等しと説く。虚空は染相に非ず、離相に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。染相に非ず、離相に非ず。虚空は欲界に繫せず、色界に繫せず、無色界に繫せざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。欲界に繫せず、色界に繫せず、無色界に繫せざるなり。虚空の初發心無く、亦二三四五六七八九、第十心無きが如く、摩訶衍も亦是の如し、初發心、乃至第十心無し。虚空の乾慧地、性地、八人地、見地、薄地、離欲地、已辨地無きが如く、摩訶衍も亦是の如し。乾慧地無く、乃至已作地無きなり。虚空の須陀洹果無く、斯陀含果無く、阿那含果無く、阿羅漢果無きが如く、摩訶衍も亦是の如し。須陀洹果無く、乃至阿羅漢果無し。虚空の聲聞地無く、辟支佛地無く、佛地無きが如く、摩訶衍も亦是の如し。聲聞地無く、乃至佛地無きなり。是を以ての故に摩訶衍と空と等しと説く。

虚空の色に非ず、無色に非ず、可見に非ず、不可見に非ず、有對に非ず、無對に非ず、合に非ず、散に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。色に非ず、無色に非ず、可見に非ず、不可見に非ず、有對に非ず、無對に非ず、合に非ず、散に非ざるなり。是を以ての故に、

摩訶衍は空と等しと説く。須菩提、虚空の常に非ず、無常に非ず、樂に非ず、苦に非ず、我に非ず、無我に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。常に非ず、無常に非ず、樂に非ず、苦に非ず、我に非ず、無我に非ず、是を以ての故に摩訶衍は空と等しと説く。須菩提、虚空は空に非ず、不空に非ず、相に非ず、無相に非ず、作に非ず、無作に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。空に非ず、不空に非ず、相に非ず、無相に非ず、作に非ず、無作に非ず、是を以ての故に摩訶衍は空と等しと説く。須菩提、虚空の寂滅に非ず、寂滅ならざるに非ず、離に非ず、不離に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。寂滅に非ず、寂滅ならざるに非ず、離に非ず、不離に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。須菩提、虚空は闇に非ず、明に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。闇に非ず、明に非ず、是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。須菩提、虚空の可得に非ず、不可得に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。可得に非ず、不可得に非ず。是を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説く。須菩提、虚空は可説に非ず、不可説に非ざるが如く、摩訶衍も亦是の如し。可説に非ず、不可説に非ざるなり。是を以ての故に摩訶衍は空と等しと説く。須菩提、是諸の因縁を以ての故に、摩訶衍は空と等しと説くなり。

論者言はく、「須菩提は、「衍は虚空の如し」と讀じ、佛即ち廣く述べて、其事を感じたまふ。虚空には十方無きが如く、摩訶衍には亦十方無し。長短方圓青黃赤白等無し、是摩訶衍も亦是の如し。」問うて曰はく、「虚空は應に爾るべし。是れ無爲法にして無色無方

【二】本品は大乗のよく一切を包含し、容受することをもいふ、大乗の虚空に等しきを明せばなり。初に佛の廣くする所以を明し、虚空と大乗との關係を略釋す

なり。摩訶衍は是れ有爲法、是れ色法にして、謂ゆる布施、持戒等なり。云何が虚空と等しと言ふ』答へて曰はく、『六波羅蜜に二種有り、世間と出世間となり。世間とは、是れ有爲法、色法にして虚空と同じからず。出世間とは如、法性、實際、智慧と和合するが故に、虚空に似如し、無生忍を得てより已後、分別する所無きこと虚空の如し。復次に如し佛、無礙智を以て實相を觀たまふこと虚空の如し。餘人は則ち然らず、智慧未だ畢竟清淨ならざるが故なり。復次に、佛は前後に諸法畢竟空と説きたまふ。如し無餘涅槃の相は、虚空の如く、疑を致すべからず。餘法も亦是の如し。乃至虚空の説に非ず、不説に非ざるが如く、大乘も亦是の如し。問うて曰はく、『虚空の所有無きが如しと言へば便ち足る。何を以てか種種の相無しと説く。』答へて曰はく、『初發心の菩薩は、内外の種種の因縁法の中に於て心を著す。是を以ての故に、佛は虚空に種種の相無きが如く、摩訶衍も亦是の如しと説きたまへり。』

須菩提、汝が言ふ所の如し。虚空の無量無邊阿僧祇の衆生を受くるが如く、摩訶衍も亦無量無邊阿僧祇の衆生を受くることはこの如く是の如し。須菩提、衆生は無所有の故に、當に知るべし虚空も無所有なりと。虚空は無所有なるが故に、當に知るべし、摩訶衍も亦無所有なり。是因縁を以ての故に、摩訶衍は無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何を以ての故に、是衆生、虚空、摩訶衍、是法は皆不可得なるが故に。復次に須菩提、摩訶衍は所有無きが故に、當に知るべし、阿僧祇は所有無しと。阿僧祇は所有無きが故に、當に知るべし、

無量は所有無しと。無量は所有無きが故に、當に知るべし、無邊は所有無しと。無邊は所
 有無きが故に、當に知るべし、一切諸法は所有無しと。是因縁を以ての故に、須菩提、是
 摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何を以ての故に。是衆生、虚空、摩訶衍、阿僧
 祇、無量無邊、是一切法は不可得なるが故に。復次に須菩提、我は所有無く、乃至知者見
 者は、所有無きが故に、當に知るべし、如、法性、實際は所有無しと。如、法性、實際は
 所有無きが故に、當に知るべし、乃至無量無邊阿僧祇も所有無しと。無量無邊阿僧祇は所
 有無きが故に、當に知るべし、一切法は所有無しと。是因縁を以ての故に、須菩提、摩訶
 衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何を以ての故に。是衆生、乃至知者、見者、實際、
 乃至無量無邊阿僧祇、是一切法は不可得なるが故に。復次に須菩提、我は所有無く、乃至
 知者見者は、所有無きが故に、當に知るべし、不可思議性は所有無しと。不可思議性は所
 有無きが故に、當に知るべし、色受想行識は所有無しと。色受想行識は所有無きが故に、
 當に知るべし、虚空は所有なしと。虚空は所有無きが故に、當に知るべし、摩訶衍は所有
 無しと。摩訶衍は所有無きが故に、當に知るべし、阿僧祇は所有無しと。阿僧祇は所有無
 きが故に、當に知るべし、無量は所有無しと。無量は所有無きが故に、當に知るべし、無
 邊は所有無しと。無邊は所有無きが故に、當に知るべし、一切諸法は所有無しと。是因縁
 を以て須菩提、當に知るべし、摩訶衍は無量無邊阿僧祇の衆生を受くと。何を以ての故に。
 須菩提、我乃至知者、見者等、一切法は皆不可得なるが故に。復次に須菩提、我は所有無

く、乃至知者見者は、所有無きが故に、當に知るべし、眼は所有無く、耳鼻舌身意も所有
 無しと。眼乃至意は所有無きが故に、當に知るべし。虚空は所有無しと。虚空は所有無き
 が故に、當に知るべし。摩訶衍は所有無しと。摩訶衍は、所有無きが故に、當に知るべし。
 阿僧祇は所有無しと。阿僧祇は所有無きが故に、當に知るべし。無量は所有無しと。無量は
 所有無きが故に、當に知るべし。無邊は所有無しと。無邊は所有無きが故に、當に知るべし。
 一切諸法は所有無しと。是因縁を以ての故に、須菩提、摩訶衍は無量無邊阿僧祇の衆生を
 受く。何を以ての故に。須菩提、我、乃至一切諸法、皆不可得なるが故に。復次に須菩提、
 我は所有無く、乃至、知者見者は、所有無きが故に、當に知るべし、檀波羅蜜は所有無く、
 尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜は所有無しと。般若波羅
 蜜は所有無きが故に、當に知るべし、虚空は所有無しと。虚空は所有無きが故に、當に知
 るべし、摩訶衍は所有無しと。摩訶衍は所有無きが故に、當に知るべし、無量無邊阿僧祇
 は所有無しと。無量無邊阿僧祇は所有無きが故に、當に知るべし、一切諸法は所有無しと。
 是因縁を以ての故に須菩提、摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何を以ての故に。
 我、衆生乃至一切諸法、皆不可得なるが故に。復次に須菩提、我は所有無く、乃至、知者
 見者は所有無きが故に、當に知るべし、内空は所有無く、乃至無法有法空は所有無しと。
 無法有法空は所有無きが故に、當に知るべし、虚空は所有無しと。虚空は所有無きが故に、
 當に知るべし、摩訶衍は所有無しと。摩訶衍は所有無きが故に、當に知るべし、阿僧祇無

量無邊は所有無しと。阿僧祇無量無邊は所有無きが故に、當に知るべし、一切諸法は所有
 無しと。是因縁を以ての故に、須菩提、是摩訶衍は無量無邊阿僧祇の衆生を受く、何を以
 ての故に、我、衆生、乃至一切諸法は、皆不可得なるが故に。復次に須菩提、我、衆生、
 乃至知者見者は、所有無きが故に、當に知るべし、四念處は所有無しと。四念處は所有無
 きが故に、乃至十八不共法も所有無しと。十八不共法は所有無きが故に、當に知るべし、
 虛空は所有無しと。虛空は所有無きが故に、當に知るべし、摩訶衍は所有無しと。摩訶衍
 は所有無きが故に、當に知るべし、阿僧祇無量無邊は所有無しと。阿僧祇無量無邊は所有
 無きが故に、當に知るべし、一切諸法は所有無しと。是因縁を以ての故に。須菩提、是摩
 訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何を以ての故に。我、衆生、乃至一切諸法は、皆
 不可得なるが故に。復次に須菩提、我、衆生は所有無く、乃至、知者見者は所有無きが故
 に、當に知るべし、性地は所有無く、乃至已作地も所有無しと。已作地は所有無きが故に、
 當に知るべし、虛空は所有無しと。虛空は所有無きが故に、當に知るべし、摩訶衍は所有
 無しと。摩訶衍は所有無きが故に、當に知るべし、阿僧祇無量無邊は所有無しと。阿僧祇
 無量無邊は所有無きが故に、當に知るべし、一切諸法は所有無しと。是因縁を以ての故に、
 是摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何を以ての故に、我、衆生、乃至一切諸法は、
 皆不可得なるが故に。復次に須菩提、我、衆生、乃至、知者見者は、所有無きが故に、當
 に知るべし、須陀洹は所有無しと。須陀洹は所有無きが故に、當に知るべし、斯陀含は所

有無しと。斯陀舍は所有無きが故に、當に知るべし、阿那含は所有無しと。阿那含は所有無きが故に、當に知るべし、阿羅漢は所有無しと。阿羅漢は所有無きが故に、當に知るべし、乃至一切諸法も所有無しと。是因縁を以ての故に須菩提、是摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何を以ての故に、須菩提、我、乃至一切諸法は、皆不可得なるが故に。復次に須菩提、我、乃至、知者見者は、所有無きが故に、當に知るべし、聲聞乘は所有無しと。聲聞乘は所有無きが故に、當に知るべし、辟支佛乘は所有無しと。辟支佛乘は所有無きが故に、當に知るべし、佛乘は所有無しが故に、當に知るべし、聲聞人は所有無しと。聲聞人は所有無きが故に、當に知るべし、須陀洹は所有無しが故に、乃至、佛も所有無し。佛は所有無きが故に、當に知るべし、一切種智は所有無しと。一切種智は所有無きが故に、當に知るべし、虚空は所有無しと。虚空は所有無きが故に、當に知るべし、摩訶衍は所有無しと。摩訶衍は所有無きが故に、當に知るべし、乃至一切諸法は所有無しと。是因縁を以ての故に摩訶衍は、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。何を以ての故に。我、乃至一切諸法は、皆不可得なるが故に。譬へば須菩提、涅槃の性の中に無量無邊阿僧祇の衆生を受くるが如し、是摩訶衍も亦無量無邊阿僧祇の衆生を受く。是因縁を以ての故に須菩提、虚空の無量無邊阿僧祇の衆生を受くるが如く、是摩訶衍も亦是の如し、無量無邊阿僧祇の衆生を受く。

問うて曰はく、「何を以てか、虚空は廣大無邊なるが故に、一切の物を受くと説かずし

が虚空の一切を合受する如く、大乘も亦然るといひしを印可して廣説するを釋して虚空所有なきを以て一切の物と衆生とを受くといふを明す。

て、而も虚空は所有無きが故に、能く一切の物と衆生とを受く。摩訶衍も亦所有無しと言ふ。』答へて曰はく、『現に虚空を見るに所有無くして、一切萬物皆其中に有り、所有無きを以ての故に、能く受くればなり。』

問うて曰はく、『心心數法も亦形質無し。何を以てか一切の物を受けざる。』答へて曰はく、『心心數法は、覺知の相にして是れ受相に非ず。又住處の若は内、若は外、若は近、若は遠無し。但分別相を以ての故に、心形有るを知る。色法には住處有り。色處に因るが故に、虚空有るを知る。色は物を受けざるを以ての故に、則ち虚空は物を受くるを知る。色と虚空とは相違す。色若し受けざれば、則ち虚空は、是れ受くるを知る。無明を以ての故に、明有るを知り、苦を以ての故に樂有るを知るが如く、色の無なるに因るが故に、虚空有りて更に別相無しと説く。復次に、心心數法には更に受けざるの義有り。邪見の心は正見を受けず、正見は邪見を受けざるが如し。虚空は則ち然らず。一切皆受くるが故に。又心心數法は、生滅の相にして、是れ斷すべき法なり。虚空は則ち然らず。心心數法と虚空とは、但無色無形なるは同じきも、都て異ならずと言ふを得ず。是を以ての故に、諸法の中に於て虚空は能く一切を受くと説く。問うて曰はく、『我先の問意は然らず。何を以てか虚空は無量無邊なれば、能く一切の物を受くと言はずして、而も所有無ければ、一切の物を受くと言ふ。』答へて曰はく、『我は虚空には自相無く、色相を得つて虚空を説くと説けり。若し自相無ければ、則ち虚空無し。云何が無量無邊と云はんや。』問うて曰はく、『汝は受

相は則ち是れ虚空なり」と言へり。云何が無と言ふ。」答へて曰はく、「受の相には即ち是れ色相無し。色の到らざる處を名けて虚空と爲す。是を以ての故に無は虚空なり。若し實に虚空有りて未だ色有らざれば應に虚空有るべし。若し未だ色有らずして虚空あらば、虚空は則ち無相なり。何を以ての故に。未だ色有らざるを以ての故に。色に因りての故に虚空有るを知る。色有るが故に便ち無色有り。若し先づ色有りて後に虚空有らば、虚空は則ち是れ作法なり。作法は名けて常と爲さず。若し無相の法有らば、是れ不可得なり。是を以ての故に無は虚空なり。問うて曰はく、「若し常に虚空有りて、色に因るが故に、虚空の相を現せば、然る後の相も虚空に在るや。」答へて曰はく、「若し虚空は先に無相ならば、後の相も亦住する所無けん。若し虚空は先に有相ならば、相の相とする所無く、若し先に無相ならば、相として亦住する所無けん。若し相を離れて無相ならば、已に相の住する處なく、若し相に住處無ければ、相とする所の處も亦無く、相とする所の處無きが故に、相も亦無く、相及び相處を離れて更に法有る無けん。是を以ての故に、虚空を名けて相と爲さず、名けて所相と爲さず、名けて法と爲さず、名けて法に非ずと爲さず、名けて有と爲さず、名けて無と爲さず。諸の語言を斷ずること無餘涅槃の如し。餘の一切法も亦是の如し。問うて曰はく、「若し一切法、是の如くならば、即ち是れ虚空なり。何を以てか復虚空を以て喩と爲す。」答へて曰はく、「諸法の因果は皆是れ虚誑にして、無明に因るが故に、衆生の心を誑す有り。衆生は是法の中に於て著を生じ、而も虚空に於て著を生ぜず。六塵

の法は衆生の心を誑す。虚空は復誑すと雖も、則ち爾らず。是を以ての故に、虚空を以て
 喻と爲し、蠱現の事を以て微細の事を破す。虚空の色に因るが故に、但假名のみ有りて定
 法有る無きが如く、衆生も亦是の如し。五衆の和合に因るが故に、但假名のみ有りて、亦
 定法無し。摩訶衍も亦是の如し。衆生は空なるを以て佛無く菩薩無し。衆生有るを以ての
 故に、佛有り菩薩有り。若し佛無く菩薩無ければ、即ち摩訶衍無けん。是を以ての故に、
 摩訶衍は能く無量無邊阿僧祇の衆生を受く。若し是れ有法ならば、無量の諸佛及び弟子を
 受くる能はざらん。問うて曰はく、「若し實に虚空無くんば、云何が能く無量無邊阿僧祇
 の衆生を受くる。」答へて曰はく、「是を以ての故に、佛説きたまはく、「摩訶衍無なるが故
 に、阿僧祇無なり。阿僧祇無なるが故に、無量も亦無なり、無量無なるが故に、無邊も亦
 無なり、無邊無なるが故に、一切法も亦無なり。是を以ての故に、能く受く」と。阿僧祇
 とは僧祇は秦に數と言ひ、阿は秦に無と言ふ。衆生と諸法とは、各各邊を得べからざるが
 故に無數と名く。虚空を數ふるに、十方遠近に、邊の得べからざるが故に、無數と名く。
 分別して六波羅蜜を數ふるに、種種の布施、種種の持戒等、數有る無し。幾の衆生を數ふ
 るに、已の上乗、當の上乗、今の上乗ありて數ふべからず。是を無數と名く。復た次に
 に有人言はく、「初の數を一と爲して但一のみ有り。一と一の故に二と言ふも、是の如き等
 は、皆一にして更に餘の數法無し。若し皆是れ一ならば則ち無數なり」と。有人言はく、
 「一切法は和合するが故に名字有り。輪、轉、輻、轂の如きありて、和合するが故に名け

て車と爲し、定實の法有ること無し。一法無きが故に多も亦無し。先に一にして後に多なるが故に。復次に繋の數事數事は、無なるを以ての故に、數も亦無なり。無量とは、斗を以て物を稱量するが如く、智慧を以て諸法を量るも、亦是の如し。諸法は空なるが故に無數なり、無數なるが故に無量無邊なり。實智有ること無くば、云何が能く諸法の定相を得ん。無量なるが故に無邊なり。量は總相に名け、邊は別相に名く。量は初始と爲し、邊は終竟と爲す。復次に我、乃至知者見者は、無なるが故に實際も亦無なり。實際は無なるが故に無數も亦無なり。無數は無なるが故に無量も亦無なり。無量は無なるが故に無邊も亦無なり。無邊は無なるが故に一切法も亦無なり。是を以ての故に一切法は無にして、畢竟清淨なり。是摩訶衍は能く一切衆生及び法を含受す。二事は相因る、若し衆生無ければ則ち法無し。若し法無ければ即ち衆生無し。先には總相をもて一切法の空を説き、後には一一別に諸法の空を説く。實際は是れ末後の妙法なり。此れ若し無くば、何に況んや餘法をや。不可思議性より乃至如涅槃の性の如きも、亦是の如し。

經 須菩提、汝が言ふ所の、是摩訶衍は來處を見ず、去處を見ず、住處を見ざる、是の如く是の如し、須菩提、是摩訶衍は、來處を見ず、去處を見ず、住處を見ず。何を以ての故に、須菩提、一切諸法は不動の相なるが故に。是法は、來處無く、去處無く、住處無し。何を以ての故に、須菩提、色は從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所無し。受、想、行、識は從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所無ければなり。

【四】第廿二品に見
須菩提が來處を佛
の印可して更に廣
く諸法に來去の相
なしといふを釋す。

く、亦去る所無く、亦住する所無し。尸羅波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜、般若波羅蜜法、般若波羅蜜如、般若波羅蜜性、般若波羅蜜相は從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所無し。須菩提、四念處、四念處法、四念處如、四念處性、四念處相は從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所無し。乃至十八不共法も、亦是の如し。須菩提、菩薩、菩薩法、菩薩如、菩薩性、菩薩相は從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所無し。佛、佛法、佛如、佛性、佛相は從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所無し。阿耨多羅三藐三菩提の法と如と性と相とは從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所無し。須菩提、有爲法、有爲法如、有爲法性、有爲法相は從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所無し。須菩提、無爲法、無爲法如、無爲法性、無爲法相は從來する所無く、亦去る所無く、亦住する所無し。是因縁を以ての故に、須菩提、是摩訶衍は來處を見ず、去處を見ず、住處を見ざるなり。

論者言はく、「佛謂はく、須菩提、汝は何を以てか、但摩訶衍のみの來る無く、去る無く、住する無きを讚する。一切法も、亦是の如く、來る無く、去る無く、住する無し。一切法の實相は不動なるが故なり」と。問うて曰はく、「諸法は現に來去有り、見るべきなり。云何が不動の相にして來る無く、去る無しと言ふ。」答へて曰はく、「來去の相は、先には已に破せり。今當に更に説くべし。一切の佛法の中には我無く、衆生無く、乃至知者、見者無きが故に、來者、去者無し。來者、去者無きが故に、來去の相も亦應に無かるべし。復

次に三世の中に去相を求むるに不可得なり。所以は何ん、已に去れる中には、去る無く、未だ去らざる中にも、亦去る無く、已に去り、未だ去らざるを離れて、去る時にも亦去る無し。問うて曰はく、「身の動く處有る、是を名けて去ると爲す。已に去り、未だ去らざる中には、身の動く無し。是を以ての故に去る有るべし。」答へて曰はく、「然らず、去相を離れて、去時は不可得なり。去時を離れて去相は不可得なり。云何が去時に去ると言はん。復次に、若し去時に去相有らば、應に去相を離れて去時有るべし。何を以ての故に、汝は去時に去る有り」と説くが故なり。復次に若し去時に去らば、應に二の去る有るべし。一には去る時を知り、二には去る時に去るを知る。問うて曰はく、「若し爾らば何の答か有る。」答へて曰はく、「若し爾らば二の去者有り。何を以ての故に、去者を離れて去相無し。若し去者を離れて去相無くんば、去相を離れて去者無けん。是故に、去者は去らず、不去者も亦去らず。去不去を離れても亦去る有る無し。來者、住者も亦是の如し。是を以ての故に、佛説きたまはく、「凡夫の人の法は、虚誑無實にして、復肉眼の見る所なりと離も、畜生と異なる無し」と。是は信すべからず。是故に、諸法の來る無く、去る無く、住する處無く、亦動する無しと説くなり。何者か是なる。謂ゆる、色、色法、色如、色性、色相なり。色は眼の見る事に名け、未だ好醜、實不實、自相他相を分別せず。色法は無常、生滅、不淨等に名く。色如は色の和合して有るに名く。水沫の牢固ならずして、離散すれば則ち無く、虚偽無實にして但人の眼を誑はすが如し。色の現在は是の如し。過去、未來も亦爾なり。

現在の火の熱するより、過去來來も亦是の如くなるを比知するが如し。復次に諸佛は、「色相は畢竟清淨空なり」と觀じたまふが如く、菩薩も亦應に是の如く觀すべし。色眼法、色如は何の因縁もてか如ならざる。凡夫の人の見る所の性、自ら爾るが故なり。此性は深妙なり、云何が知るべき、色相の力を以ての故に知るべし。火は烟を以て相となすを以て、烟を見て則ち火有るを知るが如く、今眼色の無常にして破壊し、苦惱羶濕の相なるを見て其性の爾るを知る。此五法の去らず、來らず、住せざるは、先に説くが如し。乃至無爲、無爲法、如、性、相の來らず、去らず、住せざるも、亦是の如し。

須菩提、汝が言ふ所の是摩訶衍は前際も不可得なり、後際も不可得なり、中際も不可得なり。是衍は三世等しと名く。是を以ての故に、説いて摩訶衍と名くる、是の如く是の如し。須菩提、是摩訶衍は、前際も不可得なり、後際も不可得なり、中際も不可得なり。是衍は三世等しと名く。是を以ての故に説いて摩訶衍と名く。何を以ての故に、須菩提、過去世は過去世空なり。未來世は未來世空なり。現在世は現在世空なり。三世等は三世等空なり。摩訶衍は摩訶衍空なり。菩薩は菩薩空なればなり。何を以ての故に、須菩提、是空は一に非ず、二に非ず、三に非ず、四に非ず、五に非ず、異に非ず、是を以ての故に説いて三世等しと名く。是れ菩薩摩訶薩の摩訶衍なり。是衍の中には等不等の相は、不可得なるが故に、染不染不可得なり、瞋不瞋不可得なり、癡不癡不可得なり、慢不慢不可得なり、乃至一切善法不善法も不可得なり。是衍の中には常は不可得なり、無常は不可得なり、

樂は不可得なり、苦は不可得なり、實は不可得なり、空は不可得なり、我は不可得なり、無我は不可得なり、欲界は不可得なり、無色界は不可得なり、欲界を度るは不可得なり、色界を度るは不可得なり、無色界を度るは不可得なり。何を以ての故に、是摩訶衍は自法不可得なるが故なり。須菩提、過去の色は過去の色空なり。未來現在の色は未來現在の色空なり。過去の受想行識は過去の受想行識空なり。未來現在の受想行識は未來現在の受想行識空なり。空中の過去の色は不可得なり。何を以ての故に、空中の空も亦不可得なり。何に況んや空中の過去の色を得べけんや。空中の未來現在の色は不可得なり。何を以ての故に、空中の空も亦不可得なればなり。何に況んや空中の未來現在の色を得べけんや。空中の過去の受想行識は不可得なり。何を以ての故に、空中の空も亦不可得なればなり。何に況んや空中の未來現在の受想行識は不可得なり。何を以ての故に、空中の空も亦不可得なればなり。何に況んや空中の未來現在の受想行識を得べけんや。須菩提、過去の檀波羅蜜も不可得なり、未來の檀波羅蜜も不可得なり、現在の檀波羅蜜も不可得なり、三世等中の檀波羅蜜も亦不可得なり。何を以ての故に、等中の過去の世は不可得、未來世も不可得、現在世も不可得にして、等中の等も亦不可得なればなり。何に況んや等中の過去世、未來世、現在世を得べけんや。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜も亦是の如し。復次に須菩提、過去世の中の四念處は不可得なり、乃至過去世の中の十八不共法も不可得なり。未來世、現在世も亦是の如し。

復次に須菩提、三世等の中の四念處は不可得なり、乃至、三世等の中の十八不共法も亦不可得なり。何を以ての故に、等の中の過去世の四念處は、不可得、等の中の未來世の四念處は、不可得、等の中の現在世の四念處は、不可得にして等中の等も亦不可得なればなり。何に況んや等の過去の四念處、未來現在世の四念處を得べけんや。等の等も亦不可得なり。何に況んや等の過去の、乃至十八不共法を得べけんや。未來、現在世も亦是の如し。復次に須菩提、過去世の中の凡夫人は不可得なり。未來世、現在世中の凡夫人も不可得なり。三世等の中の凡夫人も亦不可得なり。何を以ての故に。衆生は不可得、乃至知者見者も、不可得なるが故に。過去世の中の聲聞、辟支佛、菩薩、佛は不可得なり。未來現在世の中の聲聞、辟支佛、菩薩、佛は不可得なり。三世等の中の聲聞、辟支佛、菩薩、佛は不可得なり。何を以ての故に、衆生は不可得、乃至知者見者も不可得なるが故なり。是の如く、須菩提、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜の中に住し、三世の等の相を學して、當に一切種智を具足すべし。是を菩薩摩訶薩の摩訶衍と名く。謂ゆる、三世の等の相の菩薩摩訶薩、是衍の中に住し、一切世間及び諸天、人、阿修羅に勝出して、薩婆若を成就す。爾時、須菩提、佛に白して言さく、「世尊、善哉、善哉、是れ菩薩摩訶薩の摩訶衍なり。何を以ての故に。過去の諸の菩薩、是衍の中に學して一切種智を得たり。未來世の諸の菩薩摩訶薩も亦是衍の中に學して、當に一切種智を得べし。世尊、今十方の無量阿僧祇の世界の中の、諸の菩薩摩訶薩も亦是衍の中に學して一切種智を得。是を以ての故に、

【五】第廿二品に須菩提のいへる前中後の三際不可得を佛が印可して廣説せるを釋す。

世尊、是行は實に是れ菩薩摩訶薩の摩訶衍なり。」と。佛、須菩提に告げたまはく、「是の如く是の如し、過去未來現在の諸佛は、是摩訶衍の中に學して、已に一切種智を得、當に得べく、今得。」

論者言はく、「須菩提は略して讚じて、是摩訶衍の前際、後際、中際は、俱に不可得にして、三世等しきが故に摩訶衍と名くと説けり。今佛、廣く須菩提の讚ずる所を演べたまふ。是三世は云何が不可得なる。謂ゆる過去世は過去世空なり、未來世は未來世空なり、現在世は現在世空なるが故に不可得なり。三世等しとは等は空なり。摩訶衍は摩訶衍自ら空なり。菩薩は菩薩自ら空なり。是三世の中の三世の相の空なる義は先に説くが如し。此中に、佛自ら空の因縁を説きたまへり。謂ゆる空と空相は一に非ず、二に非ず、三に非ず、四に非ず、五に非ず、等うして異ならず、合せず、散ぜず、分別する有る無し。是故に三世は等うして、空相は所有無きが故に、是等も亦空なり。菩薩は能く是の如く諸法の三世の等を解し、無始世より來を以て、疲厭するを爲さず。未來世の無邊なるを以ての故に難を爲さず、是を菩薩の三世等と爲し摩訶衍と名く。是摩訶衍の中の等相は不可得にして不等相も亦不可得なり。是三世等の三昧を得て是不等相を破す。不等相は相待の故に有り。不等等は畢竟無なるが故に、等も亦無なり。欲、不欲、乃至三界、三界を度ることのは相待法も亦是の如し。此中に佛、自ら説きたまはく、「是諸法は皆因縁の和合に従ふが故に自性無く、自性無きが故に空なり」と。復次に過去の色は過去の色相空なり。未來、現在も

亦是の如し。色の如く餘の四衆も亦是の如し。所以は何ん。空中の空相は不可得なり。何に況んや空中に三世五衆の相有らんや。菩薩は五衆の空を觀じ、貪欲を斷じて道行、謂ゆる檀波羅蜜等に入る。亦五衆の如きは三世の中に不可得なり。三世は等なるが故なり。等は即ち是れ空なり。是等中の檀波羅蜜は不可得なり。問うて曰はく、何を以ての故に、三世及び三世の等の中の檀波羅蜜は不可得なる。答へて曰はく、「諸法の等の中に三世の等無く、等の中の等の相も亦不可得なり。何に況んや三世の六波羅蜜、乃至十八不共法も亦是の如くなるをや。復次に三世の中の凡夫の相は不可得なり。聲聞、乃至佛も亦不可得なり。衆生は空なるを以ての故なり。菩薩は般若波羅蜜に住して、能く是の如く三世の等の空を學し、諸善の功德を集め、便ち一切種智を具足す。佛、説きたまはく、「菩薩は能く是の如く、三世の等の中に住して、則ち能く一切世間、及び諸天、人、阿修羅に勝出す」と。是時、須菩提、讀じて言はく、「世尊、善哉、善哉。是摩訶衍は諸の菩薩を利益す。所以は何ん。過去の諸の菩薩は、是摩訶衍を學して一切種智を得、未だ得ず、今得るも亦是の如し」と。有人の言はく、「清淨を得て因縁無ければ、染垢穢も亦因縁無く、大小、好醜、縛解も、皆主を與へらるる無し」と。有人言はく、「好醜、縛解は時節に至りて自ら得」と。有人言はく、「福徳を成就するが故に佛道を得」と。有人言はく、「但清淨の實智慧を得て佛道を得」と。是の如き等の説は皆是れ非因縁なり。少因縁なり、須菩提の讚歎せざる所なり。今佛は非因縁を捨て、不具足の因縁を捨てず。具足の因縁、謂ゆる六

波羅蜜を説きたまふ。三世の菩薩は是乘を學し、具足して佛道を成ずるを得。佛も亦須善提の歎する所を可して、是の如く是の如しと言へり。』

大智度論釋會宗品第二十四

卷第五十二

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

爾時、慧命富樓那彌多羅尼子、佛に白して言さく、「世尊、佛は須菩提をして、諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜を説かしむ、今乃ち摩訶衍を説くを爲すや。」と。須菩提、佛に白して言さく、「世尊、我は摩訶衍を説いて將に般若波羅蜜を離る無からんとす。」と。佛言はく、「不なり。須菩提、汝は摩訶衍を説き、般若波羅蜜に隨つて、般若波羅蜜を離れず。何を以ての故に、一切の所有る善法、助道法、若は聲聞法、若は辟支佛法、若は菩薩法、若は佛法、是一切の法は皆般若波羅蜜の中に攝入すればなり。須菩提、佛に白して言さく、「世尊、何等か諸の善法、助道法、聲聞法、辟支佛法、菩薩法、佛法にして皆般若波羅蜜の中に攝入する。」と。佛、須菩提に告げたまはく、「謂ゆる檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、空、無相、無作解脫門、佛の十力、四無所畏、四無礙智、大慈大悲、十八不共法は錯謬の相無くして常に捨行す。須菩提、是諸餘の善法、助道法、若は聲聞法、若は辟支佛法、若は菩薩法、若は佛法は、皆般若波羅蜜の中に攝入す。須菩提、若は摩訶

行、若は般若波羅蜜、禪波羅蜜、毘耶梨波羅蜜、毘提破羅蜜、尸羅波羅蜜、檀波羅蜜、若は色、受、想、行、識、眼色、眼識、眼觸、眼觸因緣生の諸の受、乃至八聖道分、空、無相、無作解脫觸、意觸因緣生の諸の受、地種乃至識種、四念處、乃至八聖道分、空、無相、無作解脫門、及び諸の善法、若は有漏、若は無漏、若は有爲、若は無爲、若は苦諦、集諦、滅諦、道諦、若は欲界、若は色界、若は無色界、若は內空乃至無法有法空、諸の三昧門、諸の陀羅尼門、佛の十力、乃至十八不共法、若は佛、佛法、法性、如、實際、不可思議性、涅槃、は一切の諸法は皆合せず、散せず、無色、無形、無對、一相、謂ゆる無相なり。

須菩提、是因縁を以ての故に、汝が説く所の摩訶衍は、般若波羅蜜に隨順す。何を以ての故に、須菩提、摩訶衍は般若波羅蜜に異らず、般若波羅蜜は、摩訶衍に異らず。般若波羅蜜と摩訶衍とは無二無別なり。檀波羅蜜は摩訶衍に異らず。摩訶衍は檀波羅蜜に異らず。檀波羅蜜と摩訶衍とは無二無別なり。乃至禪波羅蜜も亦是の如し。須菩提、四念處は摩訶衍に異らず、摩訶衍は四念處に異らず。四念處と摩訶衍とは無二無別なり。乃至十八不共法も摩訶衍と異らず、摩訶衍は十八不共法に異らず。十八不共法と摩訶衍とは無二無別なり。是因縁を以ての故に、須菩提、汝が摩訶衍を説くは、則ち是れ般若波羅蜜を説くなり。」

論者言はく、「當樓那は自ら疑無しと雖も、新學鈍根の者の、義一にして而も名字異なるを解せざるが爲の故に問を發し、須菩提は即ち其事を以て他に白さく、「佛法は甚深なり。我説く所の者は將に失有る無しや」と。偈答へたまはく、「汝は摩訶衍を説き般若に隨順し

【一】本品は第十八品以下廣く大乗を説くも、般若波羅蜜とは名異に義同じきを示すにあ

り、即ち今富樓那
自ら疑はざるも、新
學の爲の故に問
て、須菩提の對し
の失なく、般若に
隨順せるを以て
きたまふを明す。

て違錯有ること無し」と。此義は初に已に之を論ぜり。今佛は爲に隨順の因縁を説きたまふ。謂ゆる、三乘に攝する所の一切の善法は皆合聚して、般若波羅蜜の中に在り。所以は何ん。一切の三乘の善法は皆涅槃の爲にするが故なり。涅槃の門に三種有り。一切法は皆空門、無相門、無作門に入る。持戒の如きは能く禪定を生じ、禪定は能く實智慧を生ず。世間に著せざるが故なり。何等か三乘の助道法にして般若の中に攝在する。謂ゆる、六波羅蜜、三十七品、三解脱門、佛の十力、四無所畏、四無礙智、大慈大悲、十八不共法は錯謬の相無く、常に捨行す。此中、三十七品、三解脱門は、是れ三乘の共法なり。六波羅蜜は、是れ菩薩の法なり。十力、乃至常捨行は是れ佛法なり。有人言はく、「六波羅蜜に具足有り、不具足有り、不具足とは二乘に共する法なり。具足とは獨り菩薩のみの法なり」と。復次に摩訶衍は空なり、般若波羅蜜も亦空なり、空の義は一なるが故に、須菩提は隨順して錯る無し。般若波羅蜜の空なるが如く、五波羅蜜、乃至如、法性、實際、不可思議性、涅槃も亦是の如し。復次に般若波羅蜜乃至涅槃は、皆是れ合せず、散ぜず、無色、無形、無對、一相、謂ゆる、無相なり。是同相の故に摩訶衍は則ち是れ般若波羅蜜なりと説く。摩訶衍と般若波羅蜜は無二無別なるが故なり。』

大智度論釋十無品第二十五

經 慧命須菩提、佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩の前際は不可得なり。後際も不可得なり。中際も不可得なり。色は無邊なるが故に當に知るべし、菩薩摩訶薩も亦無邊なり」と。受想行識は無邊なるが故に當に知るべし、菩薩摩訶薩も亦無邊なり。是の如く、摩訶薩、是れ亦不可得なり。受想行識は是れ菩薩摩訶薩、是れ亦不可得なり。是の如く、世尊、一切種、一切處に於て菩薩を求むるに不可得なり。世尊、我當に何等の菩薩摩訶薩に般若波羅蜜を教ふべき。世尊、菩薩摩訶薩は但名字有るのみ。我の名字を説くに我は畢竟不生なるが如し。我の如く、諸法も亦是の如く自性無し。何等の色か畢竟不生なる。何等の受想行識か畢竟不生なる。世尊、是れ畢竟不生なれば名けて色と爲さず。是れ畢竟不生なれば名けて受想行識と爲さず。世尊、若し畢竟不生の法は當に誰か是れ般若波羅蜜なりと教ふべき。畢竟不生を離れて亦菩薩は、阿耨多羅三藐三菩提を行する無し。若し菩薩、是説を作すを聞いて、心に没せず、悔いず、驚かず、怖かず、畏れずんば當に知るべし、是菩薩摩訶薩は、能く般若波羅蜜を行するなり。「舍利弗、須菩提に問はく、「何の因縁の故に菩薩摩訶薩の前際も不可得なり、後際も不可得なり、中際も不可得なり」と言ふ。須菩提、何の因縁の故に、色は無邊の故に、當に知るべし。菩薩も亦無邊なり。受想行識は無邊なるが故に當に知るべし、菩薩も亦無邊なり」と言ふ。須菩提、何の因縁の故に色は是れ菩薩、是も亦不可得なり、受想行識は是れ菩薩、是も亦不可得なり」と言ふ。須菩提、何の因縁の故に、一切種、一切處に於て菩薩は不可得なり。當に何等をか菩薩の般若波羅蜜なりと教

ふべしと言ふ。須菩提、何の因縁の故に、菩薩摩訶薩は但名字のみ有りと言ふ。須菩提、
 何の因縁の故に、我の名字を説くに、我は畢竟不生なるが如く、我の如く諸法も亦是の如
 く自性無し。何等の色か畢竟不生なる、何等の受想行識か畢竟不生なると言ふ。須菩提、
 何の因縁の故に畢竟不生を名けて色と爲さず、畢竟不生を名けて受想行識と爲さずと言ふ。
 須菩提、何の因縁の故に、若し畢竟不生の法は當に誰か是れ般若波羅蜜なりと教ふべしと
 言ふ。須菩提、何の因縁の故に、畢竟不生を離れては亦菩薩の阿耨多羅三藐三菩提をも行
 ずること無しと言ふ。須菩提、何の因縁の故に若し菩薩は是説を作すを聞いて心没せず、
 悔いず、驚かず、怖かず、畏れず、若し能く是の如く行ぜば、是を菩薩摩訶薩は、般若波
 羅蜜を行すと名くと言ふ。爾時、須菩提、舍利弗に報じて言はく、衆生は所有無きが故に
 菩薩の前際は不可得なり。衆生は空なるが故に菩薩の前際は不可得なり。衆生は離なるが
 故に菩薩の前際は不可得なり。舍利弗、色有る無きが故に菩薩の前際は不可得なり。受想
 行識有る無きが故に菩薩の前際は不可得なり。色は空なるが故に菩薩の前際は不可得なり。
 受想行識は空なるが故に菩薩の前際は不可得なり。色は離なるが故に菩薩の前際は不可得
 なり。受想行識は離なるが故に菩薩の前際は不可得なり。舍利弗、色は性無きが故に菩薩
 は前際不可得なり。受想行識は性無きが故に菩薩は前際不可得なり。舍利弗、檀波羅蜜は
 有ること無きが故に菩薩は前際不可得なり。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪
 波羅蜜、般若波羅蜜は有る無きが故に菩薩は前際不可得なり。何を以ての故に、舍利弗、

空中には前際不可得なり。後際不可得なり。中際も不可得なり。空は菩薩に異らず、菩薩は前際に異らず。舍利弗、空と菩薩と前際との是諸法は無二無別なり。是因縁を以ての故に舍利弗、菩薩の前際は不可得なり。舍利弗、檀波羅蜜は空なるが故に、檀波羅蜜は離なるが故に、檀波羅蜜の性は無なるが故に菩薩の前際は不可得なり。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜は空なるが故に、般若波羅蜜は、離なるが故に、般若波羅蜜の性は無なるが故に菩薩の前際は不可得なり。何を以ての故に。舍利弗、空中には前際も不可得なり、後際も不可得なり、中際も不可得なり、空は菩薩に異らず、菩薩も亦前際に異らず。舍利弗、空と菩薩と前際との是諸法は無二無別なり。是因縁を以ての故に舍利弗、菩薩の前際は不可得なり。復次に舍利弗、内空は所有無きが故に菩薩の前際は不可得なり。乃至、無法有法空も所有無きが故に菩薩の前際は不可得なり。内空は空なるが故に、内空は離なるが故に、内空の性は無なるが故に、乃至無法有法空は空なるが故に、離なるが故に、性は無なるが故に、菩薩の前際は不可得なり。餘は上に説くが如し。復次に舍利弗、四念處は所有無きが故に、菩薩の前際は不可得なり。四念處は空なるが故に、離なるが故に、性無きが故に菩薩の前際は不可得なり。乃至、十八不共法も所有無きが故に菩薩の前際は不可得なり。十八不共法は空なるが故に、離なるが故に、性は無なるが故に、菩薩の前際は不可得なり。是因縁を以ての故に舍利弗、菩薩の前際は不可得なり。復次に舍利弗、一切の三昧門、一切の陀羅尼門は有る無きが故に菩薩

【二】本品は上にも菩薩名字も不可得とするも今十種に分別して菩薩不可得を以て今其所以を釋し、更に十種分別中第一に三種不可得を説けるを釋す。

の前際は不可得なり。三昧門、陀羅尼門は空なるが故に、離なるが故に、性無きが故に、菩薩の前際は不可得なり、餘は上に説くが如し。復次に舍利弗、法性は有る無きが故に菩薩の前際は不可得なり。法性は空なるが故に、離なるが故に、性は無なるが故に、菩薩の前際は不可得なり。餘は上に説くが如し。復次に舍利弗、如は有る無きが故に、空なるが故に、離なるが故に、性無きが故に、性無きが故に、性無きが故に、實際は有る無きが故に、空なるが故に、離なるが故に、性無きが故に、不可思議性は有る無きが故に、空なるが故に、離なるが故に、性無きが故に、故に菩薩の前際は不可得なり。餘は上に説くが如し。復次に舍利弗、聲聞は有る無きが故に、菩薩の前際は不可得なり。聲聞は空なるが故に、離なるが故に、性は無なるが故に、性無なるが故に菩薩の前際は不可得なり。佛は有る無きが故に、空なるが故に、離なるが故に、性は無なるが故に菩薩の前際は不可得なり。阿耨多羅三藐三菩提は有る無きが故に、乃至性無きが故に菩薩の前際は不可得なり。復次に一切種智は有る無きが故に、乃至性無きが故に菩薩の前際は不可得なり。何を以ての故に。舍利弗、空は前際不可得、後際不可得、中際不可得なれば菩薩は不可得なり。舍利弗、空は菩薩に異らず、亦前際に異らず、空と菩薩と前際との是諸法は無二無別なり。是因縁を以ての故に舍利弗、菩薩は不可得なり。後際、中際も亦是の如し。

問うて曰はく、上に已に説けり、菩薩、菩薩の字は不可得なり。誰の爲にか般若波羅

蜜を説かんと。今何を以てか更に説く。「答へて曰はく、「一應に是問を作すべからず。須菩提は、空行第一にして常に樂んで空を説き、若し所説行は常に空門を以て衆生を利益せり。復次に上には略して説き、是中には十種に廣く、菩薩の不可得なるを分別す。行者若し諸法の空を觀じ、無相無作に隨順し、無作心を以ての故に、所作有るを欲せずんば、尙自ら利益を作す能はず、何に況んや人を利益せんをや。若し人、我心の中に住せは能く諸法の善、不善の相を分別し、諸の善法を集めて不善法を捨てん。今佛説きたまはく、「般若波羅蜜の中には我心を計すべからず、諸法を分別すべからず」と。但衆善を行する、是事すら難しと爲す。行者は是念を作さく、「若し我無くんば誰の爲にか善を修せん。先我有り、般若波羅蜜を以ての故に心に憂感を生ずる無し」と。是故に須菩提は更に重ねて説けり、「我よ本より已來無なり。先に有にして今無なるに非ず」と。行者は是の如し。本來自ら無なれば、今、失する所無きが故に、憂ふる所無し。譬へば、深根の大樹は、一研を以て能く辦すべからず、多くの斧の力を用て、乃ち斷つが如く、菩薩の空も亦是の如し。一たび説いて便ち得べからず。是を以ての故に廣く分別す。須菩提は、佛の問ひたまふ時は念を作せり、「若し定んで菩薩の法有らば、應に三世に通じて有るべし。今、前世の中には菩薩有る無し。何を以ての故に。前世には何無きが故なり。未來世も亦是の如し。未だ因縁有らざるが故なり。前後相待するが故に中間有り。若し前後無ければ則ち中間無し。若し五衆は是れ菩薩なりと謂はば、五衆は無邊なる、先に種種の因縁を説けるが如し。五衆

は畢竟空なるが故に無量無邊なり。無量無邊なるが故に無爲法に同じ。若し菩薩は無邊な
 りとは是事は然らず。此因縁を以ての故に菩薩は不可得なり。當に誰の爲にか常に一切處、
 一切種、一切時に菩薩を求むるに不可得なりと説くべき。當に誰の爲にか我は畢竟不生
 空にして所有無きが如く、五衆も亦是の如し。畢竟不生にして所有無し。既に衆生及び五
 衆法無し、云何が菩薩有らんと説くべき。問うて曰はく、「衆生及び五衆法の畢竟不生な
 る、是法を解する者は即ち是れ菩薩ならん。」答へて曰はく、「畢竟不生なれば名けて色と
 爲さず、名けて受想行識と爲さず。何を以ての故に。五衆は是れ生相にして、畢竟不生の
 中には是分別無ければなり。五衆は畢竟不生なれば以て教化すべからず。畢竟不生を離れ
 ては亦菩薩の行道も無し。當に誰にか教ふべき、菩薩は是を聞いて怖かず、畏れざる、是
 を能く菩薩道を行すと爲す。」問うて曰はく、「我と菩薩とは是れ一物なり。云何が我を以て
 菩薩に喩ふる。」答へて曰はく、「是般若波羅蜜の中には、一切法は空なり。初學は得ざれ
 ば便ち爲に空を説く、先當に罪福を分別、罪を捨てて福徳を修すべし。福徳の果報は無
 常なり。無常なるが故に苦を生ず。是故に顛を捨て世間を厭は道求めて涅槃に入る。爾時、
 應に是念を作すべし、「我に因るが故に諸の煩惱を生ず。是我は、六識の中に求むるに不
 可得なり。但顛倒を以ての故に我に著す」と。是故に無我を解する易く、化を受くべき易
 し。若し色は空なりと言はば、則ち解し難し。耳に空を説くを聞くと雖も眼に常に實を見
 る。是故に先惡罪の中の我を破し、後に一切諸法を破す。一切の佛弟子の道を得る者は自

ら無我を知り、自ら證す。未だ道を得ざる者は、餘法の空を信する、無我を信するが如くなる能はず。是故に無我を以て喩と爲す。此中に須菩提は説けり、「一切法の空より推すに菩薩無し」と。無我を用て喩と爲す。小を以て大に喩ふる石蜜を甘露に喩ふるが如し。問うて曰はく、『舍利弗は空、無我の義を知れり、何を以ての故に、事事に問を致す。』答へて曰はく、『須菩提は聲聞の人にして、徳、菩薩に如かず。而も佛前に於て深般若を説く。新學の菩薩は心に或は疑を生ずらく、「上に佛は、汝は摩訶衍を説きて、般若に隨順すと云ふと雖も、佛は須菩提に將に順せんとすと謂ふ」と。舍利弗は此疑を斷せんと欲するが故に問を發するなり。復次に佛、須菩提と共に般若、乃至終竟を説かんと欲したまふ。是故に舍利弗は事事に質問し、須菩提をして善く深義を分別せしめ、衆人をして敬信せしむ。是を以ての故に、過去世の中の菩薩の不可得なるより乃至恐れず怖かざるを問ひ、須菩提は義を答ふらく、「我と衆生と人とは即ち是れ一物なり。未だ得ざる時を凡夫の人と名け、初めて道に入るより乃ち阿羅漢に至るまでを聲聞の人と名け、因縁法を觀じ、空を悟る少しく深く、少しく衆生を憐むを辟支佛の人と名け、深く空法に入り六波羅蜜、大慈大悲を行す、是を菩薩の人と名く。功德別異なるが故に名字も亦異なり。我と衆生と人との如きは一事にして、眼に事を見るを以ての故に、見者と名け、意を得るが故に知者と名け、苦樂を受くるが故に受者と名く。是我、衆生、人等は、先に已に種種の因縁を以て、無なるを説けるが故に菩薩も亦應に無なるべし。是故に、須菩提、舍利弗に語るらく、「衆生は無

なるが故に三世の中に菩薩無し」と。問うて曰はく、「五衆和合して菩薩有らば菩薩は應に無なるべく、五衆は應に有なるべし。」答へて曰はく、「是事を破せんが爲の故に、衆生無く、我無しと言ふ。我無きが故に則ち五衆は屬する所無し。屬する所無きが故に空なり。空なるが故に菩薩無きなり。問うて曰はく、「若し五衆空ならば空は即ち是れ菩薩ならん。」答へて曰はく、「五衆は空にして亦菩薩にも非ず。空にして所有無く、分別無きが故なり。五衆は五衆を離れて性無く、亦菩薩も無し。若し菩薩無しと説かば則ち三世は皆無なり。是五衆等の世間法、六波羅蜜等の道法を觀する是を菩薩と名く。是法は空なるが故に菩薩も亦空なり。此中に佛自ら因縁を説きたまはく、「諸法の空は菩薩に異らず、菩薩は空に異らず、菩薩空なれば三世は空にして二無く別無し」と。六波羅蜜より、乃ち一切種智に至るまで此諸法を行するが故に名けて菩薩と爲す。是諸法は空なるが故に菩薩も亦空なり。此中の法は空なり。聲聞、辟支佛は、是空を得るが故に聲聞、辟支佛と名く。聲聞、辟支佛人は空なるが故なり。菩薩も亦是の如し。」

○舍利弗の言ふ所の如く色は無邊なるが故に當に知るべし、菩薩も亦無邊なりと。受想行識は無邊なるが故に當に知るべし、菩薩も亦無邊なりと。舍利弗、色は虚空の如く、受想行識も虚空の如し。何を以ての故に。舍利弗、虚空の邊は不可得なり、中も不可得なり、邊無く中無きが故に但説きて虚空と名くるが如し。是の如く舍利弗、色の邊は不可得なり、中も不可得なり、是色に空なるが故に空の中に亦邊無く、亦中も無し。受想行識の邊は不

可得なり、中も不可得なり、識は空なるが故に空の中に亦邊無く、亦中も無し。是因縁を以ての故に、舍利弗、色は邊無きが故に當に知るべし、菩薩も亦無邊なりと。受想行識無きが故に當に知るべし、菩薩も亦無邊なりと。乃至十八不共法も亦是の如し。舍利弗の言へるが如く色は是れ菩薩、是れ亦不可得なり。受想行識は是れ菩薩是れ亦不可得なり。舍利弗、色、色相は空なり。受想行識、識相は空なり。檀波羅蜜、檀波羅蜜の相は空なり。乃至般若波羅蜜も亦是の如し。内空、内空の相は空なり、乃至無法有法空、無法有法空の相も空なり。四念處、四念處の相は空なり、乃至十八不共法、十八不共法の相も空なり。如、法性、實際、不可思議性、不可思議性の相は空なり。三昧門、三昧門の相は空なり。陀羅尼門、陀羅尼門の相は空なり。一切智、一切智の相は空なり。道種智、道種智の相は空なり。一切種智、一切種智の相は空なり。聲聞乘、聲聞乘の相は空なり。辟支佛乘、辟支佛乘の相は空なり。佛乘、佛乘の相は空なり。聲聞人、聲聞人の相は空なり。辟支佛、辟支佛の相は空なり。佛、佛の相は空なり。空の中の色は不可得なり。受想行識も不可得なり、是因縁を以ての故に舍利弗、色は是れ菩薩、是れ亦不可得なり。受想行識は是れ菩薩、是も亦不可得なり。舍利弗の言ふが如く何の因縁の故に、一切種、一切處に於て菩薩は不可得なる。當に何等の菩薩にか般若波羅蜜を教ふべきとは、舍利弗、色は色の中に不可得なり、色は愛の中に不可得なり。受は愛の中に不可得なり、受は色の中に不可得なり、受は想の中に不可得なり。想は想の中に不可得なり、想は色受の中に不可得なり、想は行

の中に不可得なり。行は行の中に不可得なり、行は色受想の中に不可得なり、行は識の中に不可得なり。識は識の中に不可得なり、識は色受想行の中に不可得なり。舍利弗、眼は眼の中に不可得なり、眼は耳の中に不可得なり、耳は耳の中に不可得なり、耳は眼の中に不可得なり、鼻は鼻の中に不可得なり。鼻は鼻の中に不可得なり、舌は舌の中に不可得なり、舌は身の中に不可得なり、身は身の中に不可得なり、身は眼耳鼻舌の中に不可得なり、身は意の中に不可得なり。意は意の中に不可得なり、意の眼耳鼻舌身の中に不可得なり。六入、六識、六觸、六觸因縁生の受も、亦是の如し。檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜、内空、乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法、一切三昧門、一切陀羅尼門、性法乃至辟支佛法、初地乃至十地、一切智、道種智、一切種智も亦是の如し。須陀洹乃至阿羅漢、辟支佛、菩薩、佛も亦是の如し。菩薩は菩薩の中に不可得なり。菩薩は般若波羅蜜の中に不可得なり。般若波羅蜜は般若波羅蜜の中に不可得なり。般若波羅蜜は般若波羅蜜の中に不可得なり。教化の中の教化は所有無くして不可得なり。舍利弗、是の如く、一切の法は所有無くして不可得なり。是因縁を以ての故に、一切種、一切處に菩薩は不可得なり。當に何等の菩薩にか般若波羅蜜を教ふべき。舍利弗の言ふ所の如く何の因縁の故に、菩薩摩訶薩但假名のみ有りと説くとは、舍利弗、色は是れ假名なり、受想行識は是れ假名なり。

色の名は色に非ず、受想行識の名は識に非ず。何を以ての故に。名と名相は空なればなり。若し空なれば則ち菩薩に非ず。是因縁を以ての故に舍利弗、菩薩は但假名のみ有り。復次に舍利弗、檀波羅蜜は但名字のみ有り。名字の中に檀波羅蜜有るに非ず。檀波羅蜜の中に名字有るに非ず。是因縁を以ての故に菩薩は但假名のみ有り。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜は但名字のみ有り、名字の中には般若波羅蜜有る無く、般若波羅蜜の中には名字有る無し。是因縁を以ての故に菩薩は但假名のみ有り。舍利弗、内空は但名字のみ有り。乃至無法有法空も但名字のみ有り。名字の中には内空無く、内空の中には名字無し。何を以ての故に。名字と内空とは俱に不可得なればなり。乃至、無法有法空も、亦是の如し。是因縁を以ての故に舍利弗、菩薩は但假名のみ有り。舍利弗、四念處は但名字のみ有り。乃至十八不共法も但假字のみ有り。一初の三昧門、一切の陀羅尼門乃至一切種智も亦是の如し。是因縁を以ての故に舍利弗、我は「菩薩は但假名のみ有り」と説くなり。舍利弗の言ふ所の如く何の因縁の故に、我の名字を説くも我は畢竟不生なりとは、舍利弗、我は畢竟不可得なり。云何が當に生ずる有るべき。乃至知者、見者は畢竟不可得なり。云何が當に生ずる有るべき。舍利弗、色は畢竟不可得なり。云何が當に生ずる有るべき。受想行識は畢竟不可得なり。云何が當に生ずる有るべき。眼は畢竟不可得なり。乃至、意觸因縁生の受も畢竟不可得なり。云何が當に生ずる有るべき。檀波羅蜜は畢竟不可得なり。乃至般若波羅蜜は畢竟不可得なり。云何が當に生ずる有るべき。内空

【三】次に十無の諸法に色等の諸法無邊にして菩薩も亦然なれば、邊不可得なるを第三に五蘊等の當體即菩薩にして、而も諸法の體相不可得なれば、菩薩も亦然なると第四に、菩薩不可得の故に般若の所化とすべしなきと第五に、菩薩を教ふといふも假名施設に過ぎざるを、第六に、名字の空なる如く、人法畢竟不生なるを明すを釋す。

は畢竟不可得なり、乃至、無法有法空は畢竟不可得なり。云何が當に生ずる有るべき。四念處は畢竟不可得なり。乃至、十八不共法は畢竟不可得なり。云何が當に生ずる有るべき。諸の三昧門、諸の陀羅尼門は畢竟不可得なり。云何が當に生ずる有るべき。聲聞、乃至佛は畢竟不可得なり。云何が當に生ずる有るべき。是因縁を以ての故に舍利弗、我は、我の名字の如くに我も亦畢竟不生なりと説くなり。

問うて曰はく、「心心數法は無形なり、見るべからざるが故に、無邊なるべけんも、色は是れ有形にして見るべし、云何が無邊ならん。」答へて曰はく、「處として色有らざる無く、遠近輕重を籌量するを得べからず。佛の説きたまへるが如くんば、四大は處として有らざる無し、故に名けて大と爲す。五情を以て、其限を得べからず。斗を以て其多少輕重を稱量すべからず」と。是故に、色は無邊なりと言ふ。復次に是色は過去時の初始より不可得なり。未來時の中にも恆河沙劫數の限有り。色は當に盡くる有るべき無し。是故に後邊無し。初邊と後邊とは無きが故に中も亦無きなり。復次に邊は色相に名く。是色を分別散するに邊は不可得にして本相有る無し。復次に無爲法は不生不滅なるが故に、無數量無邊なり。法空を以て色を觀するに皆空にして、虚空及び無爲と同相なり。無量無數無邊の法中より、乃ち微塵に至るまで不可得なり、何に況んや菩薩をや。是故に五衆は無邊なりと説く。菩薩も亦無邊なり。色の無邊なるが如く、乃至十八不共法も亦是の如し。相に隨つて分別するは先に説くが如し。是五衆は無量無數無邊なるが故に、色は是れ菩薩

なりと言ふを得ず。四衆も亦是の如し。復次に色若し心心數法を離るれば草木瓦石の如し。云何が菩薩と名けん。若し心心數法は色を離るれば則ち依止する處無く、亦能く爲す所無し。云何が菩薩と名けん。復次に六波羅蜜、十八空、三十七品、十力、乃至十八不共法、如、法性、實際、不可思議性、三解脱門、陀羅尼門、諸の三昧門、薩婆若、道智、三乘、三乘の人、是法を若は修し、若は觀する、是を菩薩と名く。是法は皆自相空なるを以ての故に空なり。謂ゆる、檀波羅蜜、檀波羅蜜の相は空なり。乃至、佛、佛の相も空なり。一切處とは五衆、十二入、十八界、乃至一切種智なり。一切種智とは十八空、三解脱門、般若波羅蜜は、若は常、若は無常等と觀じ、一門、二門、乃至無量の門等に入る。是を一切種智と名く。菩薩を求索するに不可得なり。又自法の中には自法無きを以て亦他法も無し。此中に説くが如く、色は色の中に不可得なり、色は受の中に不可得なり、受は受の中に不可得なり、受は色の中に不可得なり、乃至般若波羅蜜は般若波羅蜜の中に不可得なり。乃至、教化の中に教化は不可得なり。但名字のみ有りとは五衆は破壞散滅し、虚空の如くにして異なる無し。是菩薩は但名字のみ有りて教化の人の如く、假の名字の中に更に名を立するを爲す。須菩提、舍利弗に語るらく、「但菩薩のみ假名字ならず、五衆も皆亦假名字なり」と。假の名字の中に、假の名字の相は不可得にして皆第一義の中に入る。若し是の如くんば空は則ち菩薩に非ず。復次に六波羅蜜より、乃至一切種智に至るまで、是法を行ずるが故に名けて菩薩と爲す。是法も亦假の名字、菩薩も亦假の名字なれば空にして所有無

し。是諸法は等なり、強ひて爲に名を作す。因縁和合の故に有にして亦其實無し。我の名
字は畢竟不生なりとは此品の初に已に説くが如し。此中に須菩提も亦衆生空、法空の如く
我を破す。謂ゆる、我は畢竟不可得なり。乃至知者、見者も不可得なり。云何が當に生ず
る有るべけん。五衆は畢竟不可得なり、云何が五衆の生ずる有らん。乃至、意觸因縁生の
受も畢竟不可得なり、云何が當に生ずる有るべけんや。六波羅蜜は畢竟不可得なり、乃至、
諸の陀羅尼門、三昧門、聲聞、辟支佛、佛は、畢竟不可得なり。云何が當に生ずる有る
べけん。若し法は先に有ならば然る後に生を問ふべし。法體先に無なり、云何が生ずる有
らん。

○舍利弗の言ふ所の如く、我の如くに諸法も亦是の如く自性無しとは、舍利弗、諸法は
和合生の故に自性無し。舍利弗、何等か和合生にして自性無き。舍利弗、色は和合生にし
て自性無く、受想行識は和合生にして自性無く、眼は和合生にして自性無く、乃至意も如
合生にして自性無く、色乃至法、眼界乃至法界、地種乃至識種、眼觸乃至意觸、眼觸因縁
生の受、乃至、意觸因縁生の受も、和合生にして自性無し。檀波羅蜜、乃至、般若波羅蜜
も和合生にして自性無し。四念處、乃至、十八不共法も和合生にして自性無し。復次に舍
利弗、一切法は無常にして亦失せず。舍利弗、須菩提に問はく、何等の法が無常にして、
亦失せざる。須菩提の言はく、『色は無常にして亦失せず。受想行識は無常にして亦失せ
ず。何を以ての故に、若し法無常ならば即ち是れ動相、即ち是れ空相なり。是因縁を以て

の故に、舍利弗、一切の有爲法は無常にして亦失せず。復次に、舍利弗、若是有漏法、若は無漏法、若是有記法、若は無記法は無常にして亦失せず。何を以ての故に、若し法無常ならば即ち是れ動相、即ち是れ空相なり。是因縁を以ての故に舍利弗、一切の作法は無常にして、亦失せざるなり。次に舍利弗、一切法は常に非ず、滅に非ず。舍利弗言はく、『何等の法か常に非ず、滅に非ざる。』と。須菩提言はく、『色は常に非ず、滅に非ず。何を以ての故に、性自ら爾なればなり。乃至意觸因縁生の受も、常に非ず、滅に非ず。何を以ての故に、性自ら爾なればなり。乃至意觸因縁生の受も、常に非ず、滅に非ず。何を以ての故に、性自ら爾なればなり。』

舍利弗の言ふ所の如く、何の因縁の故に色は畢竟不生なる、受想行識は畢竟不生なる、受想行識は、畢竟不生とは、須菩提言はく、『色は作法に非ず、受想行識は作法に非ず、何を以ての故に、作者は不可得なるが故なり。乃至意も亦是の如し、眼界乃至意觸因縁生の受も亦是の如し。復次に舍利弗、一切の諸法は皆起に非ず。作に非ず、何を以ての故に、作者は不可得なるが故に。是因縁を以ての故に、舍利弗、色は畢竟不生なり、受想行識も、畢竟不生なり。』

舍利弗の言ふ所の如く何の因縁の故に畢竟不生ならば、是を名けて色と爲さず、畢竟不生ならば是を名けて受想行識と爲さずとは、須菩提言はく、『色の性は空なり。是空は無生、無滅、無性なり。受想行識の性は空にして、是空は無生、無滅、無住異なり。眼乃至一切

の有爲法の性は空にして、是空は無生、無滅、無住異なり。是因縁を以ての故に、舍利弗、畢竟不生は是を色と名けず、畢竟不生は是を受想行識と名けざるなり。

舍利弗の言ふ所の如く、『何の因縁の故に、畢竟不生の法ならば、當に是般若波羅蜜を教ふべき。』とは、須菩提言はく、『畢竟不生は即ち是れ般若波羅蜜なり。般若波羅蜜は即ち是れ畢竟不生なり、般若波羅蜜と畢竟不生とは無二無別なり。是因縁を以ての故に、舍利弗、我は畢竟不生は當に是般若波羅蜜を教ふべきと説く。』

舍利弗、言ふ所の如く、『何の因縁の故に、畢竟不生を離れて菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を行する無き。』とは、須菩提言はく、『菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行する時、畢竟不生の般若波羅蜜に異なるを見ず、亦畢竟不生の菩薩に異なるを見ず。畢竟不生、及び菩薩は無二無別なり。畢竟不生の色に異なるを見ず、何を以ての故に、是畢竟不生と及び色とは無二無別なればなり。畢竟不生の受想行識に異なるを見ず。何を以ての故に、畢竟不生と受想行識とは、無二無別なればなり。乃至一切種智も亦是の如し。是因縁を以ての故に、舍利弗、畢竟不生を離れて、菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を行する無し。』舍利弗、言ふ所の如く、『何

の因縁の故に、菩薩の是説を作すを聞いて心没せず、悔いず、驚かず、怖かず、畏れざる是を、菩薩は般若波羅蜜を行すと名くる。』とは、須菩提の言はく、『菩薩摩訶薩は諸法に覺知の想有るを見ず。一切諸法を夢の如く、幻の如く、餽の如く、影の如く、化の如しと見る。舍利弗、是因縁を以ての故に、菩薩、是説を作すを聞いて心没せず、悔いず、驚

ず、怖かず、畏れざる是を、菩薩は般若波羅蜜を行すと名くる。』とは、須菩提の言はく、『菩薩摩訶薩は諸法に覺知の想有るを見ず。一切諸法を夢の如く、幻の如く、餽の如く、影の如く、化の如しと見る。舍利弗、是因縁を以ての故に、菩薩、是説を作すを聞いて心没せず、悔いず、驚

【四】次に十無第六の中更に諸法無自性、五蘊の諸法は畢竟不生なるを第七に、畢竟不生の故に名けて五蘊等とすべきなきを第八に、般若を教ふるものなきを第九に、畢竟不生を離れて菩提を行ずるなきを第十に、菩薩なく菩提行なきも驚怖せざるを明すを釋す。

かず、怖かず、畏れざるなり。」

論者言はく、「諸法は自性有る無しとは、性空なるを以て諸法の各々の性を破す。此中に須菩提は自ら説けり、「諸法は和合生にして自性有る無し」と。五衆等の法、及び六波羅蜜等の善法を和合し、是より菩薩の名字を出すが如し。是菩薩は、作法、衆縁の和合に従うて生ずるが故に、一法の成ずる所に非ず。是を以ての故に假名と言ふ。是衆法も亦和合の邊より生ず。譬へば、眼有り、色有り、明有り、空有り、見んと欲する心等の諸の因縁有り、和合して眼識を生ずるが如し。是中に眼は是れ見者、若し識は是れ見者、若し色は是れ見者、若し明は是れ見者なりと言ふを得ず。若し是眼、色、識等の各各に見る所有を得ざれば、和合の中にも亦見る有るべからず。是を以ての故に法は畢竟空にして、幻の如く、夢の如し。一切諸法も亦是の如しと見る。復次に一切法は無常にして亦失破せず。

無常は常倒を破して斷滅の倒を失せず。は無常は法を失せず。即ち是れ實相門に入る。是故に須菩提、舍利弗に語らく、「無常は即ち是れ動相、即ち是れ空相なり。一切法も亦是の如し」と。復次に一切法は常に非ず失に非ずとは、十八空の後に義を説くが如し。色は畢竟不生なりとは、五衆、作者、生者、起者は不可得なるが故なり。復次に生相は不可得なりとは、先に生を破する中に説くが如く、一切法も亦是の如し。何を以ての故に、若し色は生せずと説かば色に非ずと爲せばなり。受想行識に非ずとは此中に須菩提自ら説けり、色は因縁より生じて自性有る無く、常に空相なり。若し法は常に空相ならば、是法は生相

かず、怖かず、畏れざるなり。」

無く、滅相無く、住異の相無し。受想行識も亦是の如し。是故に不生相の法は、即ち是れ
 無爲にして有爲の相に非ず。餘法も亦是の如し。畢竟不生ならば當に誰にか般若を教ふべ
 きとは、畢竟不生は即ち是れ諸法實相なり。諸法實相は即ち是れ般若波羅蜜なり。云何が
 般若波羅蜜を以て、般若波羅蜜に教へん。若し是畢竟不生を離れて菩薩有らば、應當に般
 若波羅蜜を教ふべし。是菩薩と般若波羅蜜は畢竟不生にして無二無別なり。云何が當に教
 ふべき。畢竟不生を離れて道を行すとは、上に説く中に、已に合して解せり。菩薩是を聞
 いて没せず、悔いずとは、菩薩は一切法の中に於て、我、衆生、乃至知者、見者を見ず。
 亦説者無く、亦聽者も無く、邪説も無く、正説も無く、亦無説者も無し。一切法は因縁和
 合の故に生じ、諸縁を離るるが故に、滅し、起る者有る無く、滅する者有る無きを知るが
 故に畏れず、怖かず、没せず、悔いざるなり。菩薩は一切法の虚誑にして實無く、定無き
 を知り、若し是の急なる時、若し阿鼻泥犁に墮するも、心猶動せず、況んや虚聲を聞いて、
 而も怖畏すること有らんや。人の夢中に怖畏の事を見、覺め已りて則ち恐心無く、夢の法
 は能く心を誑はして實事有る無しと知るが如し。菩薩も亦是の如し、世間の心の夢中に入
 りて、恐畏有るを見れども諸法實相を得て覺する時は、則ち畏るる所無く、諸法は但是れ
 虚誑にして眞實有る無きを知るなり。復次に、譬へば幻事を智者は見ると雖も、心に惑ふ
 所無く、是れ誑法たるを知るが如く、菩薩も亦是の如し。一切法は幻の如くにして、能
 く人心を誑はし、是中に實無きを知る。是を以ての故に怖畏せざるなり。炎の如く影の如

く、化の如きも、亦是の如し。

須菩提、佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ、是の如く諸法を觀ず。是時菩薩摩訶薩は色を受けず、色を視さず、色に住せず、色に著せず、是れ色を言はず。受想行識も亦受けず、視さず、住せず、著せず、是れ受想行識なりと言はず。眼を受けず。視さず、住せず、著せず、亦是れ眼なりと言はず。耳鼻舌身意も亦受けず、視さず、住せず、著せず、亦是れ意なりと言はず。檀波羅蜜を受けず、視さず、住せず、著せず、亦是れ檀波羅蜜なりと言はず。尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜を受けず、示さず、住せず、著せず、亦是れ般若波羅蜜なりと言はず。乃至無法有法空も亦是の如し。復次に世尊、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行する時、四念處を受けず、示さず、住せず、著せず、亦是れ四念處なりと言はず。乃至十八不共法をも受けず、示さず、住せず、著せず、亦是れ十八不共法なりと言はず。一切の三昧門、一切の陀羅尼門乃至一切種智をも受けず、示さず、住せず、著せず、亦是れ一切種智なりと言はず。復次に世尊、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行する時、色を見ず乃至一切種智を見ず。何を以ての故に、色は不生にして是れ色に非ず、受想行識は不生にして是れ識に非ず、眼は不生にして是れ眼に非ず、耳鼻舌身意は不生にして是れ意に非ず、檀波羅蜜は不生にして是れ檀波羅蜜に非ず、乃至般若波羅蜜は不生にして是れ般若波羅蜜に非ざればなり。何を以ての故に、色と不生とは不二不

別なり、乃至般若波羅蜜と不生とは不二不別なればなり。内空は不生にして是れ内空に非ず、乃至無法有法空も不生にして、是れ無法有法空に非ず。何を以ての故に、内空乃至無法有法空と不生とは不二不別なればなり。世尊、四念處は不生にして四念處に非ず。何を以ての故に、四念處と不生とは不二不別なればなり。何を以ての故に、世尊、是不生法は一に非ず、二に非ず、三に非ず、異に非ず。是を以ての故に、四念處と不生とは不二不別なり。乃至十八不共法も不生にして十八不共法に非ず。何を以ての故に、十八不共法と不生とは不二不別なればなり。何を以ての故に、世尊、是不生法は一に非ず、二に非ず、三に非ず、異に非ざればなり。是を以ての故に、十八不共法は不生にして十八不共法に非ず。世尊、如は不生にして是れ如に非ず、乃至不可思議性も不生にして、是れ不可思議性に非ず。世尊、是阿耨多羅三藐三菩提は不生なり。一切智、一切種智は不生にして是れ一切種智に非ず。何を以ての故に、是阿耨多羅三藐三菩提、乃至一切種智と不生とは不二不別なればなり。何を以ての故に、世尊、是不生法は一に非ず、二に非ず、三に非ず、異に非ず、是を以ての故に、乃至一切種智は不生にして一切種智に非ず。世尊、色は不滅の相にして是れ色に非ず。何を以ての故に、色及び不滅の相は不二不別なればなり。何を以ての故に、世尊、是不滅の法は一に非ず、二に非ず、三に非ず、異に非ず。是を以ての故に、色は不滅の相にして是れ色に非ず、受相行識は不滅の相にして是れ識に非ず。何を以ての故に、識と不滅の相とは不二不別なればなり。何を以ての故に、世尊、是不滅の法は一に非ず、二に非ず、

【五】次に五種の正觀行を明すを釋す。

三に非ず、異に非ず。是を以ての故に識は不滅にして識に非ず。檀波羅蜜乃至般若波羅蜜内容乃至無法有法空、四念處乃至十八不共法も亦是の如し。世尊、是を以ての故に、色は無二の法數に入り、受想行識は無二の法數に入り、乃至一切種智も無二法數に入る。

論者言はく、「須菩提、佛に白して言さく、「菩薩は能く是の如く諸法を觀す」と。五衆の中に於て五種の正しき觀行有り。謂ゆる受けずとは五衆の中に無常の火有り、能く心を燒くを以ての故なり。視さずとは相を取らず、但無常等の過を觀するのみに非ず、是五衆の空を觀じて相を取らざるが故なり。住せずとは五衆に依止せず、諸の煩惱の賊の來るを畏るるが故に、敢て久しく住せざるなり。譬へば空なる聚落の賊の所止の處に、智者は久しく住すべからざるが如し。著せずとは、五衆に若し一罪有るすら、猶著すべからず。何に況んや、身には飢渴、寒熱、老病死等有り、心には憂愁、恐怖、妬嫉、瞋恚等有りて、後世には三惡道に墮し、一切の無常、苦、空、無我に自在なるを得ず。是の如き等の無量無邊の過罪有り、云何が著すべけん。是れ色と言はずとは、邪見を以て色の若は常、若は無常なり等と説かず。五衆は是の如き常相なり。乃至一切種智も亦是の如しと言はず。何を以ての故に、色の中には五種の正行を行すればなり。是五衆は皆生相無く、相は皆一相なり、一相は則ち無相なり。若し無相なければ則ち衆に有るに非ず。乃至一切種智も亦是の如し。若し一切法に生相無ければ般若波羅蜜と不二不別なり。は無生の心を得れば即ち是れ般若波羅蜜なり。般若波羅蜜を得れば即ち諸法の不生不滅なるを知る。是を以ての

大智度論卷第五十二

故に般若波羅蜜は即ち是れ不生と不二不別なり。復次に、須菩提、自ら因縁を説く。謂ゆる、は無生の法は一相ならず、二相ならず、三ならず、異ならず。何を以ての故に、諸法は無生一相なればなり。乃至一切種智も亦是の如し、如の無生無滅なるも亦是の如し。

問うて曰はく、「末後に何を以てか、色乃至一切種智は無二法數に入ると説く。」答へて曰はく、「菩薩は若し未だ色を破せざれば、則ち愛等の結使を生じ是色等に著す。色を破されば則ち邪見を生じ、是色空等に著す。今色等は空の智慧を用ふるが故に皆空にして不二の相なり。是諸法は虚誑不實にして、内外入れて攝する所なるが故に名けて二と爲す。色等、乃至一切種智も是二を離るれば不二と名く。今、須菩提は衆生を憐愍し、諸の菩薩を利益するが故に、是諸法の不二を説いて無二の法數の中に入るなり。」

大智度論釋無生品第二十六

卷第五十三

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

爾時、慧命舍利弗、須菩提に語らく、「菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じ諸法を觀す。何等か是れ菩薩、何等か是れ般若波羅蜜、何等か是れ觀なる。」須菩提、舍利弗に語らく、「汝の問ふ所の如き、何等か是れ菩薩なるとは、阿耨多羅三藐三菩提の爲に、是人は大心を發す。是を以ての故に名けて菩薩と爲す。亦一切法、一切種相を知り、是中にも亦著せず。色相を知りて著せず、乃ち十八不共法を知るに至るも、亦著せず。舍利弗、須菩提に問はく、「何等をか一切法相と爲す。」と。須菩提言はく、「若し名字の因縁和合等を以て、諸法の是は色、是は聲香味觸法、是は内、是は外、是は有爲法、是は無爲法なりと知り、是名字の相と語言とを以て諸法を知る、是を諸法の相を知ると名く。」舍利弗の問ふ所の如く、「何等か是れ般若波羅蜜なる。」とは、「遠離の故に般若波羅蜜と名く。」何等の法をか遠離する。」とは、「象界入を遠離し、檀波羅蜜乃至禪波羅蜜を遠離し、內空乃至無法有法空を遠離す。是を以ての故に遠離を般若波羅蜜と名く。」復次に四念處を遠離し、乃至十八不共法を遠離し、一切智を遠離す。是因縁を以ての故に、遠離を般若波羅蜜と名く。舍利弗、問ふ所の

【一】本品は、菩薩般若の義、實に無量なるを以て重ねて不二無生に就いて説く、今先づ菩薩般若の觀一切を遠離するにあつて、更に菩薩の義を説く。

如く、「何等か是れ觀なる」とは、舍利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、色は常に非ず、無常に非ず、樂に非ず、苦に非ず、我に非ず、無我に非ず、空に非ず、不空に非ず、相に非ず、無相に非ず、作に非ず、無作に非ず、寂滅に非ず、寂滅ならざるに非ず、離に非ず、不離に非ず。受想行識も亦是の如しと觀じ、檀波羅蜜より乃ち般若波羅蜜に至るまで、内空より乃ち無法有法空に至るまで、四念處より乃ち十八不共法に至るまで、一切三昧門、一切陀羅尼門より乃ち一切種智に至るまで常に非ず、無常に非ず、樂に非ず、苦に非ず、我に非ず、無我に非ず、空に非ず、不空に非ず、相に非ず、無相に非ず、作に非ず、無作に非ず、寂滅に非ず、寂滅ならざるに非ず。離に非ず、不離に非ずと觀ず。舍利弗、是を菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行ずる時、諸法を觀すと名く。

論 問うて曰はく、「謂ゆる菩薩の義、般若波羅蜜の義、諸の觀の義は上に已に問へり、今何を以てか更に問ふ。」答へて曰はく、「先に已に大樹の喩もて、一研して斷すべきに非ざるを答へたるも、是事は難きが故に更に問ふなり。復次に是般若波羅蜜には無量の義有り。曇無竭品の中に説くが如し。般若波羅蜜は、大海の水の無量なるが如く、須彌山の種に嚴飾せるが如し」と。是故に問ふ。又此問は同じと雖も、答の義は種種に異れり。復次に諸佛は法愛を斷じ、經書を立てず、亦言語を莊嚴せず、但衆生を拯濟せんが爲に、度すべき者に隨つて説きたまへり。大清涼の美池には無量の衆生、前後より來りて飲み、各飽いて而も去るが如し。聽く者も亦是の如し、佛は先づ菩薩、般若、及び觀を説きた

各飽いて而も去るが如し。聽く者も亦是の如し、佛は先づ菩薩、般若、及び觀を説きた

まふに、前に來る者は解悟を得る有りて而して去り、後に來る者は未だ聞かず。是故に重ねて問ふなり。菩薩とは菩提に三種有り。阿羅漢の菩提有り。辟支佛の菩提有り。佛の菩提有り。無學は智慧清淨にして無垢なり、故に名けて菩提と爲す。菩薩は大智慧有りといふも、諸の煩惱の習未だ盡きざるが故に菩提と名けず。此中には但一種を説く。謂ゆる佛の菩提なり。薩埵は秦に衆生と言ふ。是衆生は無上道の爲の故に發心し修行するなり。復次に薩埵を大心と名く。是人は大心を發し、無上菩提を求めて、而も未だ得ず。是を以ての故に名けて菩提薩埵と爲す。佛は已に是菩提を得たまへば名けて菩提薩埵と爲さず。大心を満足したまふが故なり。菩薩の餘の義は、先に廣く説くが如し。復次に佛は此中に自ら因縁を説きたまはく、是人は佛道の爲の故に修行し、一切諸法の相を知るも亦嘗せず」と。諸法の相とは以て諸法の門は是れ色、是れ聲なり等と知るべし。略して菩薩の義を説き、先づ諸法の各々の相、地の堅相の如きを知り、然る後に畢竟空相を知る。是二種の智慧の中に於ても亦嘗せず、但衆生を度せんといふが故に、菩薩は是の如き智慧を得。一切の別相の法中に皆遠離するを得。色の中に色を離るるが如し。色を離るれば即ち是れ自相空なり。遠離とは是れ空の別名なり。菩薩は般若波羅蜜を得、一切の法に於て心皆遠離す。所以は何ん、一切諸法の過罪を見るが故に。阿羅蜜は秦に遠離と言ひ、波羅蜜は秦に到彼岸と言ふ。此二は音相近く、義相會するが故に、阿羅蜜を以て波羅蜜を釋す。何等の法をか遠離する。謂ゆる、衆、界、入、乃至一切智、是諸法を遠離するを以ての故に般若

【阿羅蜜】ハルミ
Armita

波羅蜜と名く。禪波羅蜜の如きは能く人心を調伏し、般若波羅蜜は能く人をして諸法を遠離せしむ。觀とは諸法の常、無常等を觀ぜざる、先に説くが如し。

○舍利弗、須菩提に問はく、「何の因縁の故に色は不生にして是れ色に非ざる。受想行識は不生にして是れ識に非ざる。乃至一切種智は不生にして是れ一切種智に非ざる。」須菩提言はく、「色の色相は空なれば、色空の中には色無く無生なり。是因縁を以ての故に色は不生にして是れ色に非ず。受想行識の識相は空なれば、識空の中には識無く無生なり。是因縁を以ての故に、受想行識は不生にして是れ受想行識に非ず。舍利弗、檀波羅蜜の檀波羅蜜相は空にして、檀波羅蜜空の中には檀波羅蜜無く無生なり。尸羅波羅蜜、屬提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜の般若波羅蜜相は空にして、般若波羅蜜空の中には般若波羅蜜無く無生なり。」是因縁を以ての故に、舍利弗、般若波羅蜜は不生にして是れ般若波羅蜜に非ず。内容乃至無法有法空四念處乃至十八不共法、一切種智も亦是の如し、是因縁を以ての故に、内容は不生にして是れ内容に非ず。乃至一切種智も、不生にして是れ一切種智に非ざるなり。舍利弗、須菩提に問はく、「汝何の因縁の故に、色は不生にして是れ色に非ず、受想行識は不生にして是れ識に非ず、乃至一切種智は、不生にして是れ一切種智に非ずと言ふ。須菩提答へて曰はく、「所有る色は所有る不二なり。所有る受想行識は所有る不二なり。是れ一切法は皆合せず、散ぜず、無色、無形、無對、一相、謂ゆる無相なり。眼、乃至一切種智も亦是の如し。是因縁を以ての故に、舍利弗、色は不生にして是

れ色に非ず、受想行識は不二にして是れ識に非ず。乃至一切種智も、不二にして是れ一切種智に非ざるなり。舍利弗、須菩提に問はく、「何の因縁の故に是色は無二の法數に入り、受想行識は無二の法數に入り、乃至、一切種智も無二の法數に入ると言ふ。」須菩提答へて曰はく、「色は無生に異らず、無生は色に異らず、色は即ち是れ無生、無生は即ち是れ色なり。受想行識は無生に異らず、無生は識に異らず。識は即ち是れ無生、無生は即ち是れ識なり。是因縁を以ての故に、舍利弗、色は無二の法數に入り、受想行識は無二の法數に入り、乃至一切種智も亦是の如し。」

【二】次に商品に色不生これ色に非ず等の文に就いて問答説明するを釋するに、先づ不二を重説するを明す

【三】問うて曰はく、「上品の竟に便ち應に不生を問ふべし、何を以てか此中に方に問へる。」答へて曰はく、「三種の大法は解し易く、多くの衆生を利益するが故に、先づ何の因縁の故に、色は不生にして色に非ずと爲し、乃至一切種智は、不生にして一切種智に非ずと爲すと問ふに、須菩提答ふらく、「色は是れ空にして、色の中に色相無し」と。行者はは無生の智慧を以て色をして無生ならしむ。若し能くは無生の心を得れば是念を作さく、「今、即ち色の實相を得たり」と。是故に、「色は無生にして色に非ずと爲す」と説く。色性は常に自ら無生なり。今智慧力の故に無生ならしむるに非ず。人有り、色を破して空ならしむるも、猶木の色想を存す。譬へば、廁を除きて舍を作るに今廁無しと雖も、猶不淨の想有るが如し。若し能く廁は木より無にして、幻化の所作なりと知れば則ち廁想無きが如し。行者も是の如し、若し能く色は木より已來、初め自ら無生なりと知らば、則ち復色想を存せず。

是故に色は無生にして色に非ずと爲す、乃至一切種智も亦是の如しと言ふ。問うて曰はく、
「汝は先に自ら「無生は即ち是れ無二なり」と説けり。今何を以てか更に問ふ。」答へて曰
はく、「義は一なりと雖も所入の觀門を異にす。上には因中に先に果有り、若し果無し、是
の生法は一異等なり。是生は若は初に生じ、若は後に生ずといふを破し、是の如き等の生を
破するを無生と名くと言ひ、今は眼色の有無等の諸の二を破するが故に是を不二と名く。
行者は先に無生の觀門に入り後に不二に入る。或は先に不二に入り、後に無生に入る。觀
の義は一なりと雖も行者は分別して、色を破する二なるが故に不二と言ふ。色の生を破す
るが故に無生と言ふ。上に無生の因縁を説いて自相空なりと謂へり。今は不二の因縁を説
く。謂ゆる合せず、散ぜず、一相にして謂ゆる無相なり等と。義は同じく一の空なりと雖
も、上は自相空、此は是れ散空なり。色は無二法數に入るとは、行者は色の不生不滅の相
を觀じ、是時、色を分別し今變じて無生と爲す。是故に色は無生にして即ち是れ不二なり
と説く。何を以ての故に、色を破散すれば即ち是れ無生なればなり。先に諸法を分別する
時、色を離れて更に生有るを得ざるが如く、今色を破散すれば、即ち是れ無生にして更に
無生有るを得ず。是を以ての故に、色は即ち是れ無二法數に入る。是二阿羅漢は、佛前に
於て共に論じ竟れり。須菩提は更に是義を説く。佛をして證知せしめたまつらんと欲す
るが故なり。」

爾時、須菩提、佛に白して言さく、「世尊、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行じて是の

如く諸法を觀ず。是時、色を見るに無生なり、畢竟淨なるが故なり。受想行識を見るに無生なり、畢竟淨なるが故なり。我を見るに無生なり、乃至、知者見者も無生なり、畢竟淨なるが故なり。檀波羅蜜を見るに無生なり、乃至般若波羅蜜も無生なり。畢竟淨なるが故なり。内容を見るに無生なり。乃至無法有法空も無生なり。畢竟淨なるが故なり。四念處を見るに無生なり、乃至十八不共法も無生なり。畢竟淨なるが故なり。一切の三昧、一切の陀羅尼を見るに無生なり、畢竟淨なるが故なり。乃至一切種智を見るに無生なり、畢竟淨なるが故なり。凡夫、凡夫の法を見るに無生なり、畢竟淨なるが故なり。須陀洹、須陀洹法、斯陀含、斯陀含法、阿那含法、阿那含法、阿羅漢、阿羅漢法、辟支佛、辟支佛法、菩薩、菩薩法、佛、佛法を見るに無生なり、畢竟淨なるが故なり。舍利弗、須菩提に語るらく、「我須菩提所説の義を聞くが如くんば、色は是れ不生なり、受想行識は是れ不生なり、乃至佛、佛法も是れ不生なり」と。若し爾らば、須陀洹、須陀洹果、斯陀含、斯陀含果、阿那含、阿那含果、阿羅漢、阿羅漢果、辟支佛、辟支佛道を得べからず、菩薩摩訶薩の一切種智を得べからず、亦六道の別異も無く、亦菩薩摩訶薩の五種の菩提を得ず。須菩提、若し一切法は不生相ならば、何を以ての故に、須陀洹は三結を斷ぜんが爲の故に道を修し、斯陀含は婬、恚、癡を薄くせんが爲の故に道を修し、阿那含は五下分を斷ぜんが爲の故に道を修し、阿羅漢は五上分を斷ぜんが爲の故に道を修し、辟支佛は辟支佛法の爲の故に道を修する。何を以ての故に、菩薩摩訶薩は難行を爲し、衆生の

爲に種種の苦を受くる。何を以ての故に、佛は阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ。何を以ての故に、佛は法輪を轉じたまふ。一と。須菩提、舍利弗に語るらく、「我は無生法をして、所得有らしめんと欲せず、我は亦無生法の中に、須陀洹、須陀洹果を得しめんと欲せず、乃至無生法中に、阿羅漢、阿羅漢果、辟支佛、辟支佛道を得しめんと欲せず。我は亦無生法中に菩薩をして難行を作し、衆生の爲に種種の苦を受けしめんと欲せず。菩薩も亦難行の心を以て道を行ぜず。何を以ての故に、舍利弗、難心、苦心を生ずれば無量阿僧祇の衆生を利益する能はさればなり。舍利弗、今菩薩は衆生を憐愍し、衆生に於て父母兄弟の想の如く、兒子及び己身の想の如し。是の如くなれば能く無量阿僧祇の衆生を利益す、是れ無所得を用ての故に。所以は何ん、菩薩摩訶薩は應に是の如き心を生ずべし。一我は一切處、一切種に不可得なるが如く、内外法も亦是の如し」と。若し是の如き想を生ずれば則ち難心、苦心無し。何を以ての故に、是菩薩は一切種、一切處、一切法に於て受けざるが故なり。舍利弗、我は亦無生法の中に、佛をして阿耨多羅三藐三菩提を得しめたてまつらんを欲せず。亦無生の中に法輪を轉せしめたてまつらんを欲せず。亦無生法を以て道を得しめんと欲せず。」

【三】次に須菩提が佛に證知を求め、舍利弗、更に諸法不生なるに得道ありやと問へるを辨ずるを釋す。

論者言はく、「無生觀に二種有り、一には柔順忍觀、二には無生忍觀なり。前に無生は是れ柔順忍觀にして畢竟淨ならず、漸く柔順觀を習ひ、無生忍を得れば則ち畢竟淨なりと説けり。二問うて曰はく、「菩薩は未だ結を盡さず、未だ佛道を得ず、智慧未だ淳

【畢竟清淨なり等
畢竟清淨を釋す。

淨ならず、云何が畢竟清淨なりと言ふ。』答へて曰はく、『是菩薩は無生忍を得る時、諸の煩惱を滅し、菩薩の道を得、菩薩の位に入り、煩惱の氣有り」と雖も、道場に坐する時は、乃ち盡きて妨ぐる所無きが故に畢竟清淨なり。』復次に畢竟清淨なりとは、柔順道に於て畢竟清淨なり。佛道の爲に非ず、衆生空、法空を以ての故なり。色を見るに無生にして畢竟清淨なり。乃至佛及び佛法は無生にして畢竟清淨なり。須菩提は種種の因縁も諸法の相の決定して無生なるを説く。此事に因りて、舍利弗は難を作さく、『賢聖の中に最小なる者は、須陀洹、須陀洹法にして最大なる者は佛佛法なり。若し爾らば聖人は大なる無く、小なる無し。聖法も亦優劣無く、亦六道の別異無けん』と。此は略して難す。後に三結を斷じて道を修する者を問ふは廣く難を爲すなり。問うて曰はく、『云何が是れ五種の菩提なる。』答へて曰はく、『一には柔順忍、二には無生忍、及び三種の菩提なり。三菩提の中に於ては、二を過ぎて而して第三の菩提に住す。復五菩提有り、一には發心菩提と名け、無量の生死の中に於て發心し、阿耨多羅三藐三菩提の爲にするが故に名けて菩提と爲す。此れ因中に果を説くなり。二には伏心菩提と名け、諸の煩惱を折し、其心を降伏し、諸の波羅蜜を行す。三には明菩提と名け、三世の諸法の本末、總相、別相を觀し、分別籌量して諸法實相、畢竟清淨、謂ゆる般若波羅蜜の相を得、四には出到菩提と名け、般若波羅蜜の中に於て方便力を得るが故に、亦般若波羅蜜に著せず。一切の煩惱を滅し、一切十方の諸佛を見たてまつり、無生法忍を得、三界を出でて薩婆若に到る。五には

【云何が是れ等
下五種菩提の義釋

無上菩提と名け、道場に坐し、煩惱の習を斷じて阿耨多羅三藐三菩提を得。是の如き等は
 五菩提の義なり。餘の諸の賢聖の結を斷ずる義は先に説くが如し。』問うて曰はく、『聲
 聞道には廣く結を斷ずる義を説く。何を以てか辟支佛に行有り、菩薩に種種の行有るを説
 かざる。』答へて曰はく、『辟支佛は聲聞に於て復異道無く、但福徳利根にして、小しく深
 く諸法實相に入るを異りと爲す。菩薩道には種種の衆行有りと雖も、但難行、苦行は希有
 の事と爲し、衆生は見已りて歡喜して言はく、『菩薩は我等の爲に此行を爲す』と。餘行は
 深妙なりと雖も、人の知らざる所にして、物を感じる能はざるが故に説かず。』復次に舍利
 弗の難意の如く、若し諸法は都是れ無生にして空寂ならば、一切衆生は皆樂に著せん。
 菩薩のみ何を以ての故に獨り苦行を受けん。復次に、諸佛は常に遠離、寂滅を樂ひ、法愛
 を斷じ、決定して諸法を知り、轉ぜず、還らず。何を以ての故に、衆生の與に法輪を轉じ
 たまふ。須菩提、佛前に於て無生法を説き、佛は呵折したまはず、快心にして樂説するを
 得。無難の力の故なり。答ふらく、『舍利弗、我は亦都て無生法の中に、六種の聖人有らし
 むるを欲せず』と。菩薩を除くが故に六と言ふ、及び六道は別異なり。何を以ての故に、
 無生法の證を得るを以ての故に、謂ひて聖法と爲せばなり。聖人には差別有るも、無生法
 の中には都て所有無し。復次に無生法の中には二種の失有り。麁なる失とは、殺盜等の罪
 の故に三惡道有り。細なる失とは、心に布施、持戒等の福に著するを用ふるが故に三善道
 有り。若し菩薩は難心、苦心を生ずれば、則ち一切衆生を度する能はず。世間の小事の心

に難かり、以て苦と爲すが如きすら猶尙成ぜず、何に況んや、佛道を成ずるをや。成ずるの因縁は、謂ゆる大慈大悲心なり。衆生に於て、父母、兒子、己身の想の如し。何を以ての故に、父母、兒子、己身は自然に愛を生じ、推して愛を生ずるに非ざればなり。菩薩は善く大悲心を修するが故に、一切衆生、乃至怨讎に於て同意に愛念し、是大悲の果報、利益の具、都て惜み持する所無く、内外に有する所、盡く衆生に與ふ。此中には不惜の因縁を説く。謂ゆる一切處、一切種、一切法は不可得なるが故に、若し行者は初めて佛法に入り、衆生空を用て諸法の無我なるを知り、今法空を用て諸法も亦空なるを知り、此大悲心及び諸法空の二因縁を以ての故に、能く内外の所有を惜まずして衆生を利益し、難行の想、苦行の想を起さずして一心に精進し歡喜す。人の自身の爲、及び父母妻子の爲に、勤身に修行するは以て苦と爲さず、若し他の爲に作せば、則ち歡心無きが如し。苦行、難行は、後品の本生の因縁もて變化し、現に畜生の形を受くといふ中に説くが如し。一切諸法は畢竟空、不可思議相の故に、一切法は還つて而も轉ぜざるが故に、名けて轉ずと爲さず。但虚妄顛倒を破するが爲の故に、名けて法輪を轉ずと爲す。

【圖】舍利弗、須菩提に語るらく、「今生法を以て道を得しめんと欲するや。無生法を以て道を得しめんとするや。」と。須菩提、舍利弗に語るらく、「我は生法を以て、道を得しめんと欲せず。」と。舍利弗言はく、「今須菩提、無生法を以て、道を得しめんと欲するや。」舍利弗、言はく、「須菩提の所説の如くんば知無く、得無し。」と。須菩提、言はく、「知有り、

得有り。二法を以てせず、世間の名字を以ての故に、知有り、得有り。世間の名字の故に、須陀洹、乃至阿羅漢、辟支佛、諸佛有り。第一實義の中には、知無く、得無く、須陀洹無く、乃至諸佛無し。」と「須菩提、若し世間の名字の故に知有り、得有らば、六道別異は、亦世間の名字の故に有り、第一實義を以てには非ざるなり。」と「須菩提、言はく、「是の如く是の如し。舍利弗、世間の名字の故に、知有り、得有るが如く、六道別異も、亦世間の名字の故に有り、第一實義を以てに非ざるなり。何を以ての故に、舍利弗、第一實義の中には業無く報無く、生無く滅無く、淨無く垢無ければなり。」と「舍利弗、須菩提に語るらく、「不生法を生ずるや、生法を生ずるや。」須菩提、言はく、「我は不生法をして生ぜしむるを欲せず。亦生法をして生ぜしむるを欲せず。」と「舍利弗、言はく、「何等か不生法をして生ぜしむるを欲せざる。」と「須菩提、言はく、「色は是れ不生法にして自性空なれば生ぜしむるを欲せず。受想行識は不生法にして、自性空なれば生ぜしむるを欲せず。乃至阿耨多羅三藐三菩提は不生法にして自性空なれば生ぜしむるを欲せざるなり。」と「舍利弗、須菩提に語るらく、「生より生ずるや、不生より生ずるや。」須菩提、言はく、「生より生ずるに非ず、亦不生より生ずるにも非ず。何を以ての故に、舍利弗、生、不生、是二法は合せず、散ぜず、無色、無形、無對、一相謂ゆる無相なればなり。舍利弗、是因縁を以ての故に、生より生ずるに非ず、亦不生より生ずるにも非ず。」と「爾時、舍利弗、須菩提に語るらく、「須菩提、樂んで無生法及び無生相を説く。」と「須菩提、舍利弗に語るらく、「我は樂んで無

生法を説き、亦樂んで無生相を説く。何を以ての故に、諸の無生法及び無生相の樂説及び語言、是一切法は皆合せず、散ぜず、無色、無形、無對、一相、謂ゆる無相なればなり。』
 舍利弗、須菩提に語るらく、「汝は樂んで無生法を説き、亦樂んで無生相を説く。是樂説語言も、亦不生なり。」と。須菩提、言はく、「是の如く是の如し、舍利弗、何を以ての故に、舍利弗、色は不生なり、受想行識は不生なり、眼は不生なり、乃至意も不生なり、地種も不生なり、乃至識種も不生なり。意行も不生なり、口行も不生なり、意行も不生なり、檀波羅蜜も不生なり、乃至一切種智も不生なり。是因縁を以ての故に舍利弗、我は樂んで不生法を説き、亦樂んで不生相を説く。是樂説の語言も亦不生なり。」

【四】次に、諸法の相を證するは、無生法なりやといふことを釋す。

論者言はく、「爾時、舍利弗、須菩提の樂説に難無きを知り、而も問うて言はく、「若し一切の法無相ならば、此無生の相を云何が證せん。是れ生法を用て證を得るや。不生法を用て證を得ると爲すや。若し生法を用て證を得ば生法は虚誑なり。汝は已に種種の因縁も破せり。又生法を以て生法を脱するを得べからず。若し無生の法を以て證するを得ば、無生は未だ法相有らず、以て證すべからず、云何が證を得ん」と。須菩提は二法皆受けず、俱に過有るが故なり。先に説くが如し。舍利弗、是念を作さく、「佛の經に、二法は一切法の若は有爲、若は無爲を攝す。生ずる者は有爲、生無き者は無爲なりと説く。今須菩提は此二法を離る、云何が當に得道の事を説くべけん」と。是念を作し已りて須菩提に問ふ、「得道の事有る無しや」と。須菩提は是れ大阿羅漢にして、無諍三昧を行する第一なり。但

菩薩の爲の故には無生を説く。汝は云何が當に邪見を作して、得道の者無しと説くべけん。
 是故に、知有り、得有りと云ふ。知と得とは、即ち是れ得道の果の別名なり。須菩提は恐
 らくは前語に違ふが故に、二法を以てせずと言ふが故に、但世俗の爲の故に須陀洹乃至佛
 有りと説けり。何を以ての故に、一切の諸法は實に我相無し。今我を用て須陀洹乃至佛を
 分別するは是れ世俗の法なり。復次に未だ法空を得ざるが故に、是れ善、是れ不善、是れ
 有爲、是れ無爲等と言ふ。第一義の中には衆生無きが故に須陀洹乃至佛無く、法空なるが
 故に須陀洹果、乃至佛道無し。聖人、聖法すら猶尙虚誑にして定實無し。何に況んや、凡
 人、六道の業、及び果報をや。問うて曰はく、「須菩提は已に種種の因縁をもて、定んで不
 生法を説けり。今舍利弗は何を以てが、更に不生法の生、生法の生を問へる。」答へて曰は
 く、「須菩提は上に得道の因縁を説くが故に、舍利弗は須菩提の意を得、不生の法を説いて
 一切法を破すと雖も、因縁の爲の故に説いて前も心無生の法に著せず。是故に更に問へり。
 又此法は甚深なるを以て、聽者をして了解を得しめんと欲するが故に、更に問へり。
 上には得道の行法を問ひ、今は總じて一切法は、云何が生ずるやを問ふ。慧眼を用て一切
 法は皆不生なりと知れども、今、現見の諸法生ず。是故に、云何が生ずるやと問ふ。須菩
 提答ふらく、二事は皆非なり。若し生の生ならば生法は已に生じ、應に更に生ずべからず。
 若し不生の生ならば、生法は未だ有らざるが故に生ずべからず。若し生ずる時、半ば生じ、
 半ば不生なりと謂はば、是も亦不生なり。若し生の分は則ち已に生じ竟り、若し未生の分

は則ち生ずる無きが故なり。是須菩提は是肉眼を用ひて見ず、通達せざるを以ての故に二法皆受けず。但是生は幻の如く、夢の如く、虚誑法より生ず。應に離すべく、應に相を取らざるべしと説く。舍利弗問ふ、「何等の法か二にして俱に受けざるや」と。須菩提は世諦を以ての故に説けり、「色乃至一切種智は、畢竟不生にして自然に空相なり」と。實の中に生有らしむるを欲せず。若し世諦は虚誑にして生有るべくんば、生は幻化の如し。此中に不生の因縁を説く。謂ゆる不合、不散なり。有人の言はく、「生と法とは異なり。謂はく、生は是れ常にして生すべき所の法は無常なり」と。是故に更に問はば、答ふる者は、生法の不異を以てす。若し生法を説けば已に生相を説くなり。生、不生は、上に説くが如し。舍利弗は須菩提の所説を聞き、須菩提の心に無生の法を愛樂するを知るが故に、須菩提に語るらく、「汝は實に愛樂して、無生法を説くや」と。須菩提即ち其問を受けて、心に亦愧づる無し。何を以ての故に、是論議は破すべからず、過罪有る無ければなり。何を以てか之を知る。須菩提は自ら説かく、「法として合すべき無く、法として散すべき無く、無色、無形、空、一相、謂ゆる無相なり」と。空相すら尙受けず、何に況んや餘相をや。舍利弗重ねて讚すらく、「汝が樂んで説く無生の法及び語言は、皆無生にして是れ實に清淨なり。若し當に樂説及び語言は無生に非ず、但外物の無生を説かば則ち清淨に非ず」と。須菩提は即ち復其讚を受け、舍利弗に答ふるらく、「但樂説、語言のみ是れ無生なるに非ず。色乃至一切種智も皆亦生ずる所無し」と。」

爾時、舍利弗、須菩提に語るらく、「須菩提、説法人の中に於て、應に最も上に在るべし。何を以ての故に須菩提は問ふ所に隨うて皆能く答ふる。」と。須菩提言はく、「諸法は所依無きが故なり。」と。舍利弗、須菩提に語るらく、「云何が諸法は所依無き。」と。須菩提言はく、「色の性は常に空にして内に依らず、外に依らず、兩の中間に依らず、受想行識の性は常に空にして内に依らず、外に依らず、兩の中間に依らず。眼耳鼻舌身意の性は常に空にして、内に依らず、外に依らず、兩の中間に依らず。色の性は常に空、乃至法性は常に空なり、内に依らず、外に依らず、兩の中間に依らず。檀波羅蜜の性は常に空、乃至般若波羅蜜の性は常に空なり、内に依らず、外に依らず、兩の中間に依らず。内空の性は常に空、乃至無法有法空の性は常に空なり、内に依らず、外に依らず、兩の中間に依らず。舍利弗、四念處の性は常に空、乃至、一切種智の性は常に空なり、内に依らず、外に依らず、兩の中間に依らず。是因縁を以ての故に、舍利弗、一切諸法は所依無し。性常に空なるが故なり。是の如く、舍利弗、菩薩摩訶薩、六波羅蜜を行する時、應に色受想行識を淨むべし、乃至應に一切種智を淨むべし。」舍利弗、須菩提に問はく、「菩薩摩訶薩は、云何が六波羅蜜を行する時、菩薩道を淨むる。」と。須菩提言はく、「世間の檀波羅蜜有り、出世間の檀波羅蜜有り、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜にも世間有り、出世間有り。」と。舍利弗、須菩提に問ふ、「云何が世間の檀波羅蜜なる、云何が出世間の檀波羅蜜なる。」と。須菩提言はく、「若し菩薩摩訶薩、施主と作りて能く沙門、婆羅門、

貧窮乞人に施し、食を須つには食を與へ、飲を須つには飲を與へ、衣を須つには衣を與へ、臥具、牀榻、房舍、華香、瓔珞、醫藥、種種の須つ所の資生の物、若は妻子、國士、頭目手足、支節、内外の物を、盡く以て給施す。施す時には念を作さく、「我は與へ、彼は取る、我は慳貪ならず、我は施主と爲る、我は一切を捨つ、我は佛教に隨ひて施す、我は檀波羅蜜を行す」と。是施を作し己り、用て法を得し、一切衆生と之を共にし、阿耨多羅三藐三菩提に廻向して念じて言はく、「是布施の因縁は、衆生をして今世の樂を得しめ、後に當に涅槃に入るを得しむべし」と。是人の布施に、三礙有り。何等か三なる。我相と他相と施相となり。是三相に著する布施は是を世間の檀波羅蜜と名く。何の因縁の故に世間と名くる。世間の中に於て動かす、出でず、是を世間の檀波羅蜜と名く。云何が出世間の檀波羅蜜と名くる。謂ゆる三分清淨なり。何等か三なる。菩薩摩訶薩の布施の時、我は不可得なり、受者を見ず、施物は不可得にして亦報をも望まず。是を菩薩摩訶薩の三分清淨の檀波羅蜜と名く。

復次に舍利弗、菩薩摩訶薩、布施の時、一切衆生に施與するに衆生も亦不可得なり。此布施を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、乃至微細の法相をも見ず。舍利弗、是を出世間の檀波羅蜜と名く。何を以ての故に名けて出世間と爲す。世間の中に於て能く動き能く出づ、是故に出世間の檀波羅蜜と名く。尸羅波羅蜜の所依有る。是を世間の尸羅波羅蜜と爲し、所依無き、是を出世間の尸羅波羅蜜と爲し、餘は檀波羅蜜に説くが如し。屬提波羅蜜、

【五】次に無所依
請淨を明し、六度
淨を明すを釋す中
先づ舍利弗が須菩
提を說法第一と讃
する所以を明す。

毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜の所依有る、是を世間と名け、所依無き是を出世間
と名く。塗も亦檀の中に説くが如し。是の如く、舍利弗、菩薩摩訶薩は六波羅蜜を行する
時、菩薩道を淨む。』と。舍利弗、須菩提に問ふ、『云何が菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提
の道と爲す。』須菩提言はく、『四念處は、是を菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の道と爲
す。乃至八聖道分、空解脱門、無相解脱門、無作解脱門、內空乃至無法有法空、一切の三
昧門、一切の陀羅尼門、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲、舍利弗、
是を名けて菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の道と爲す。』

問うて曰はく、『五百の阿羅漢有り、佛は名其第一を説きたまへり、舍利弗は智慧第
一、目犍連は神足第一、摩訶迦葉は頭陀を行する中の第一、須菩提は無諍三昧を得る第一、
摩訶迦旃延は修多羅を分別する第一、富樓那は人に說法する中の第一なるが如し。今舍利
弗は何を以ての故に、須菩提は説法人の中に於て應に最第一なるべしと讃する。』答へて曰
はく、『佛は佛眼を以て、一切衆生の利根と鈍根とを觀じ、一切法の總相と別相とを籌量し、
其所得の法に隨うて各第一を記したまふに、錯無し。富樓那は四衆の中に於て、十二部
經、種種の法門、種種の因縁、譬喩を用ひ、法を説いて能く衆生を利益する第一なり。須
菩提は常に無諍三昧を行じ、菩薩と事を同うし、巧に便ち一種の空相法門を樂説する富樓
那に勝れたり。譬へば巧師の、多く能くする所有るも、能くする所多きが故に、普く精悉
ならざるが如く、人有りて、偏に一事を能くすれば、則ち必ず其美を盡すが如く、富樓那

は多能なりと雖も、須菩提の常に樂んで空を行するが故に、能く巧に空を説くに如かず。是故に舍利弗は、須菩提の巧に空義を説くを聞き、便ち讚じて言はく、「汝は説法人の中に於て、應に第一と作すべし」と。舍利弗は須菩提の、問はるるに隨うて皆能く答ふるを見るに、風の空中に行くが如く、罣礙する所無し。爾時、須菩提は謙せず、受けず。何を以ての故に、平實に安立して人相を好くするが故なり。人相を好くすとは自ら讚せず、自ら毀らす。他に於ても亦讚せず毀らざるなり。若し自ら毀るは是れ妖輪の人なり、若し他を毀るは是れ讒賊の人なり、若し他を讚するは是れ諂媚の人なり。須菩提は無生の法を説くが故に、舍利弗は讚すと雖も而も詔に非ず。須菩提は舍利弗の實に讚するを以ての故に謙ならず。又法愛を斷するを以ての故に心に高ぶらず、亦愛著せず。但無礙無障の因縁、謂ゆる一切法は依止する所無く、依止する所無きが故に、障無く礙無きを答ふ。依止する所無き義は先に説くが如し。此中に、須菩提自ら説かく、「内法は空なるが故に色は内に依止せず、外法は空なるが故に色は外に依止せず、中間は所有無きが故に色は中間に依止せず。色の如く、乃至一切種智も亦是の如し」と。若し菩薩は一切の三界の無常、空を知るが故に中に依止せず。爾時、煩惱を折して能く菩薩道を淨うす。是故に須菩提は説かく、「菩薩は六波羅蜜を行じて、應に色乃至一切種智を淨うすべし」と。』

【六】次に菩薩道を淨むといふを釋す。

問うて曰はく、「色を淨うし、乃至一切種智を淨うするは即ち是れ菩薩道を淨うするなり。」

何を以ての故に更に更に問ふ。』答へて曰はく、『菩薩の能く色をして畢竟空ならしむる、是を清淨と名く。是事は深妙にして頗に得べからず。是故に舍利弗問はく、『新學の菩薩は、云何が是初の方便道を修する』と。須菩提答ふ、『若し菩薩は、能く二種の波羅蜜を行す。六波羅蜜は、是れ初めて菩薩道を聞き、能く無所得空を用て三十七品を行するは是れ佛道を聞くなり』と。淨うすとは名けて聞くと爲す。道中の荆棘を去るを名けて道を聞くと爲すが如し。何等か是れ二種の波羅蜜なる。一には世間、二には出世間なり。世間とは須菩提自ら義を説く、謂ゆる、食を須てるには、食を與ふる等なり。是義は初品の中に説くが如し。若し施す時は依止する所有り。譬へば老病の人の他の力を恃むに依りて、能く行き、能く立つが如く、施者は實智慧を離れし心力薄少なるが故に依止す。依止とは已身と財物と受者となり。是法の中に相を取り、心著して憍慢等の諸の煩惱を生ずる、是を世間の不動不出と名く。動とは柔順忍なり、出とは無生法忍なり。聲聞法の中の動とは學人にして出とは無學なり。餘の五波羅蜜も、亦是の如し。是を初めて菩薩道を聞くと名く。

問うて曰はく、『菩薩道は即ち是れ阿耨多羅三藐三菩提なり、何を以てか更に問ふ。』答へて曰はく、『菩薩の時は道有るも、佛は已に到りて道を須ひたまはず。是道は、阿耨多羅三藐三菩提を得るが爲の故に菩提道と名く。菩薩は是道を行するが故に菩薩道と名く。此中に佛は、遠道、謂ゆる六波羅蜜の菩薩道、近道、謂ゆる三十七品の菩提道を説きたまへり。六波羅蜜の中には布施、持戒等を雜ふるが故に遠く、三十七品は但禪定と智慧のみ有るが

故に近し。六波羅蜜には世間と出世間とを雜ふるが故に遠く、三十七品、三解脱門等、乃至大慈大悲は畢竟清淨なるが故に近し。復次に阿耨多羅三藐三菩提の道は、初發意より乃ち金剛三昧に至るまでにして、其中に菩薩の爲に行するも、皆是れ菩提道なり。

爾時、舍利弗、須菩提を讚じて言はく、「善哉、善哉、何等か波羅蜜の力なる。」須菩提言はく、「是れ般若波羅蜜の力なり。所以は何ん、般若波羅蜜は能く一切諸の善法の、若し聲聞法、辟支佛法、菩薩法、佛法を生ずればなり。舍利弗、般若波羅蜜は能く一切諸の善法の聲聞法、辟支佛法、菩薩法、佛法を受く。舍利弗、過去の諸佛は般若波羅蜜を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得たまひ、未來の諸佛も亦般若波羅蜜を行じて當に阿耨多羅三藐三菩提を得たまふべし。舍利弗、今現在十方諸國界の中の諸佛も、亦是般若波羅蜜を行じて、阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ。舍利弗、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を説くを聞く時、疑はず難せずんば當に知るべし、是菩薩摩訶薩は、菩薩道を行するなり。菩薩道とは一切衆生を救ふが故に心に一切衆生を捨てず。所得無きを以ての故に是菩薩は常に是念、謂ゆる大悲の念を離れざるべし。」舍利弗復問はく、「菩薩摩訶薩をして常に是念、謂ゆる大悲の念を離れざらしめんを欲す。若し菩薩摩訶薩、常に大悲の念を離れずんば、一切衆生をして皆當に菩薩と作らしむべし。何を以ての故に、須菩提、一切衆生も亦諸の念を離れざるが故なり。」と。須菩提の言はく、「善哉、善哉、舍利弗、汝は我を雜ぜんと欲して、而も我義を成ぜり。何を以ての故に、衆生は無なるが故に念も亦無なり。衆

生の性無なるが故に念も亦性は無なり。衆生の法無なるが故に念も亦法は無なり。衆生離
 なるが故に念も亦離なり。衆生空なるが故に念も亦空なり。衆生不可知なるが故に念も亦
 不可知なり。舍利弗、色は無なるが故に念も亦無なり。色の性は無なるが故に念も亦性は
 無なり。色の法は無なるが故に念も亦法は無なり。色は離なるが故に念も亦離なり。色は
 空なるが故に念も亦空なり。色は不可知なるが故に念も亦不可知なり。受想行識も亦是の
 如し。眼乃至意、色乃至法、地種乃至識種、檀波羅蜜乃至般若波羅蜜、内空乃至無法有法
 空、四念處乃至十八不共法、一切の三昧門、一切の陀羅尼門、一切智、一切種智乃至阿耨
 多羅三藐三菩提無なるが故に念も亦無なり。乃至阿耨多羅三藐三菩提不可知なるが故に念
 も亦不可知なり。舍利弗、菩薩摩訶薩、是道を行じ、我は是念、謂ゆる大悲の念を離れざ
 らしめんを欲すと。爾時、佛、須菩提を讚じて言はく、「善い哉、善い哉、是れ菩薩摩訶
 薩の般若波羅蜜なり。其説く者有るも亦當に是の如く説くべし。汝が説く所の如く、般若
 波羅蜜は、皆是れ佛意を承くるが故に、菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を學して、應に汝が説く
 所の如く學すべし」と。須菩提、是般若波羅蜜品を説く時、三千大千世界は八種に震動し、
 東湧西没し、西湧東没し、南湧北没し、北湧南没し、中湧邊没し、邊湧中没せり。爾時、
 佛微笑したまふ。須菩提、佛に白して言さく、「何の因、何の縁の故に微笑したまふ。」と。
 佛、須菩提に告げたまはく、「我れ此世界に於て般若波羅蜜を説くが如く、東方の無量阿僧
 祇世界の諸佛も、亦諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜を説きたまひ、南、西、北方、四

【七】次に須菩提を謂じ更に般若の妙力を説けるを釋し、又大地六種に震動するも般若を説くが故なるを明す。

維、上下も亦是般若波羅蜜を説く。是般若波羅蜜品を説く時、十二那由他の諸の天人無生法忍を得、十方の諸佛、是般若波羅蜜を説きたまふ時、無量阿僧祇の衆生も亦阿耨多羅三藐三菩提心を發す。

論者言はく、「舍利弗は是念を作さく、「須菩提の説く所は、六波羅蜜の世間と出世間と、及び菩提道とを分別して大いに衆生を利益す」と。故に歡喜し、讚じて言はく、「善哉、善哉」と。再び之を言ふは「喜の至れるなり。問ふ、「是れ何の波羅蜜の力なる」と。須菩提、是思惟を作さく、「一切の心數法の中に、智慧を除けば能く是の如く分別し、疑を斷じて聞道する無し。諸の波羅蜜の中に、般若波羅蜜を離れては自體を成就する能はず。何に況んや能く分別し聞道せんや」と。是の如く思惟し已りて、舍利弗に答ふ、「是れ般若波羅蜜の力なり」と。先に説くが如く、諸法の中には、我無く、知者無く、見者無し。今此を以て證知するに、是れ般若波羅蜜の力にして佛の力に非ず、須菩提の力に非ず。何を以ての故に、謂ゆる般若波羅蜜は斷常、有無の二邊等をば離るるが故に、能く一切の善法、謂ゆる三乗の法の定相堅牢不壞の相を生じ、又般若波羅蜜は、無量無邊なるが故に、能く一切の善法を受くる、大海の能く衆川萬流を受くるが如し。三乗の善法とは、謂ゆる六波羅蜜、乃至十八不共法なり。十方三世の諸佛は般若波羅蜜を行するが故に皆阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。餘の波羅蜜を行すと雖も、般若波羅蜜は最も尊大にして分別通達力有り。譬へば下藥を和合するに、巴豆は最も力有るが如し。般若波羅蜜も亦是の如く、餘

の波羅蜜と合して而も諸の煩惱、邪見を抜き、毀論を捨てると雖も般若波羅蜜の力は最勝
 なり。是を以ての故に皆是れ般若波羅蜜の力なりと説く。問うて曰はく、「一種に此般若波
 羅蜜の、微妙甚深なるを讀するも誰か能く隨順して應に般若波羅蜜を行すべき。」答へて
 曰はく、「有菩薩は、無量世に諸の福徳を集め、利根にして諸の煩惱を折薄し、未だ阿
 鞞跋致地に到らずと雖も、般若波羅蜜を聞いて即時に信受し、深く入りて通達す。是の如
 き相は、則ち能く般若波羅蜜の道を行す。謂ゆる一切衆生を救度して世間の憂惱を離れ
 しめ、大悲心の故に一切衆生を離れず。菩薩は常に大悲及び畢竟空を離るべからず。畢竟
 空を念じて世間の諸の煩惱を破し、涅槃を示し、而して大悲もて之を引いて還つて善法
 の中に入らしめ、以て衆生を利益す。爾時、舍利弗、須菩提を離すらく、「若し菩薩、是大
 悲の念、及び畢竟空の念を離れずんば、一切衆生は皆當に菩薩と作すべし、何を以ての故
 に。是畢竟空は無相にして分別する所無く、菩薩は有にして衆生に無なるべからず。若し
 有ならば一切衆生は應に共に有なるべく、若し無ならば菩薩も亦應に無なるべし」と。須
 菩提は答ふらく、「汝は我を離せんと欲して、而も我が義を助成せり。何を以ての故に、諸
 法の相は、畢竟空なるが故に衆生も亦空なり、衆生は空なるが故に畢竟空の念も亦空なり。
 若し諸法は畢竟空ならば何ぞ衆生有らん、實に空なり。而も我を離して言はく、「衆生は是
 念を離れず、皆當に菩薩と爲すべし」と。是故に、衆生は所有無きが故に畢竟空の念も亦
 所有無し。衆生は無性、衆生は離、衆生は空、衆生は不可知なれば畢竟空の念も亦畢竟空

なり。色乃至阿耨多羅三藐三菩提も亦是の如しと説く」と。

問うて曰はく、「此中の念は、是れ大悲の念を離れず、何を以てか畢竟空の念を離れずと説く。」答へて曰はく、「菩薩は是念心を離れず、衆生を捨てず、無所得を用ての故なり。無所得空と畢竟空とは名を異にするも而も義は一なり。不可得空は初に在つて、畢竟空は後に在り。畢竟空は大なるを以ての故に悲を生ずるも亦大なり。大悲とは『阿若末經』中に説くが如く三種の悲有り。衆生縁と法縁と無縁となり。無縁の悲は畢竟空より生ず。是を以て舍利弗の難する所を解く。佛は其説を證するが故に讚じて言はく、「善い哉、若し般若波羅蜜を説くを解せんと欲せば、當に汝の所説の如くなるべし」と。爾時、衆中の天人、菩薩は是念を作さく、「般若波羅蜜は甚深なり、三世の諸佛は皆中より生じたまふ。須菩提は小乗の人なり。云何が佛は、般若波羅蜜を説かんと欲せば、當に汝が所説の如くなるべしと讚じたまふ」と。是故に、次に言はく、須菩提の所説は、皆佛意を承く。正しくは、彌勒等の諸の菩薩、梵天王等をして佛意を承けざらしむるすら尚問ふを得る能はず。何に況んや、須菩提は佛前に在りて自ら恣に樂説せんや。諸の菩薩、般若波羅蜜を學せんと欲するも、亦當に汝が所説の如く學すべしと。是品を説く時、三千大千世界の地は六種に震動すとは、是時に會中に多くの菩薩有りて、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、皆當に作佛すべし、佛は是れ大地の大主なり、地神は歡喜して、「我が主、今生ず」といふ。故に地をして大いに動ぜしむ。復次に人、心に深般若波羅蜜を信する者は得難く、希有なるが故

に是人は福徳の因縁を以て大風を感じ、以て水を動かし、水動するが故に地動す。復次に地下の大龍王は來りて、般若波羅蜜を聽かんと欲し、水より出づるが故に水動じ、水動するが故に地動す。復次に佛の神力の故に地をして動ぜしむ。般若波羅蜜は見難く知り難く、衆人を引導して、益信樂せしめんと欲するが故なり。餘の地動の因縁は先に説くが如し。此中に佛は自ら因縁を説きたまへり。謂ゆる我は、般若波羅蜜を説き、十方の諸佛も亦是般若波羅蜜を説きたまひ、十二那由他の天人、阿耨跋致地を得て法位に入る。是故に地動す。又十方世界の衆生等、亦無上道の意を發す。是故に地動す。爾時、諸天、亦種種の蓮華を散じ、及び種種の雜香、天衣、天蓋、千萬種の天の妓樂する有り。諸の龍王等、四海水中より涌出し、及び諸の夜叉羅刹等、皆慈心を生じて手を合せて佛を讚す。又佛の笑みたまふ時、無量の光明遍く十方如恆河沙等の世界を覆ひ、爾所の等しく希有なる事有り。要を取りて之を言へば、地の動するは皆諸法の實相を説くに由る。謂ゆる般若波羅蜜なり。

大智度論卷第五十三

昭和六年三月一日印刷
昭和六年三月十日發行

昭和國譯大藏經論部
第五卷

不許複製

編纂者

昭和國譯大藏經編輯部
代表者 三井晶史

發行者

東京市神田區一ツ橋通町二番地
株式會社 東方書院
代表者 三井晶史

印刷者

東京市神田區表神保町十番地
同 興舍
代表者 井波康三郎

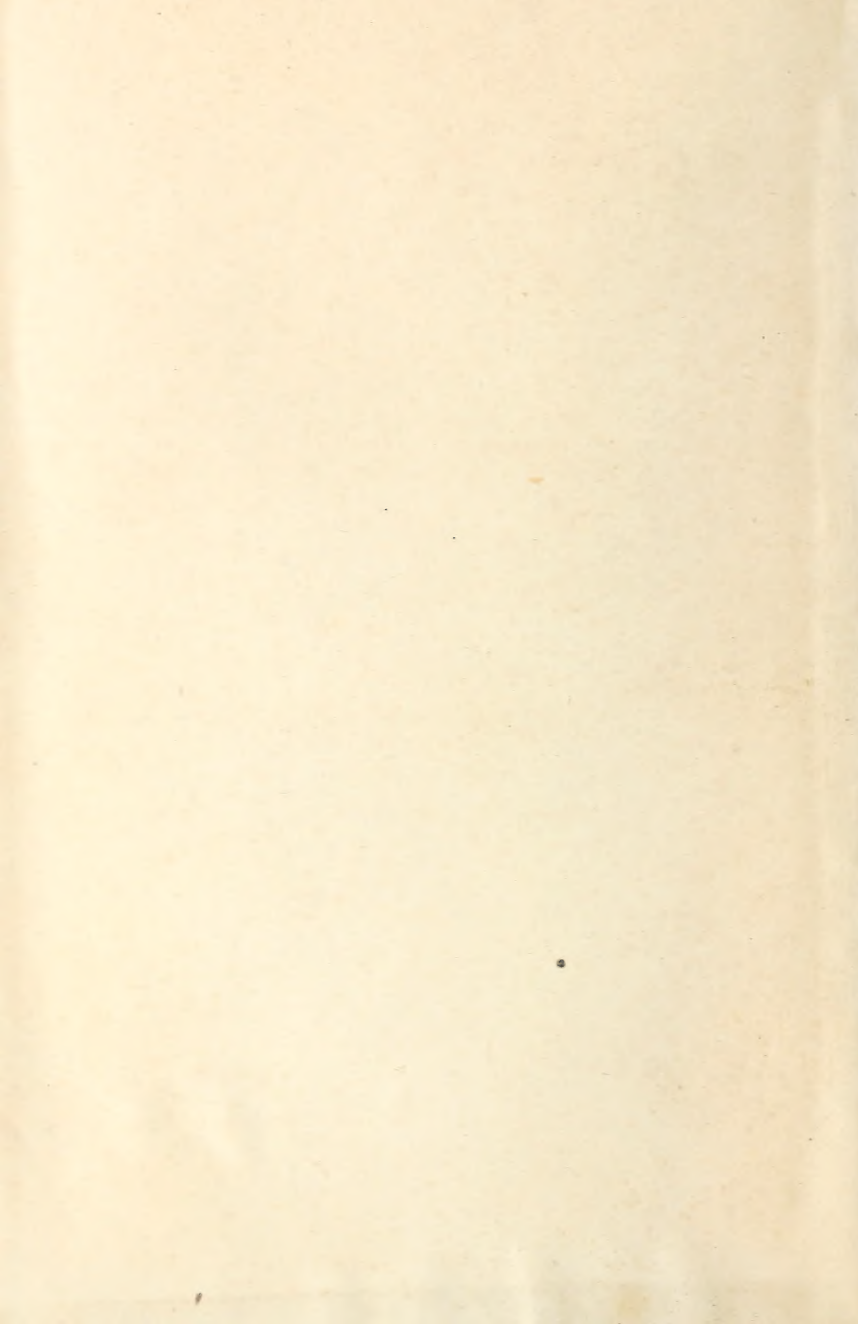
發行所

東京市神田區
一ツ橋通町二

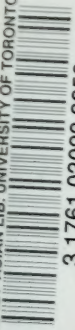
株式會社

東方書院

電話九段三八四二
振替東京六六一一



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3852